南紀德川史

第二冊

南紀德川史第二册總目錄

南紀德川史卷之十一

大慧公御譜 自天和二年七月廿五日 至寶曆七年七月二日

目次

附言

一公ノ御事歴ヲ筆スル御行狀草案ト題スル者二卷アリ蓋シ時ノ侍臣左右ニ在テ記スル所カ本記引用書ヲ掲ケザル者ハ多ク該書ニ據リシ也

一御行狀草案ニハ御歸國ノ年毎又大宮御鷹場御滯在中將軍ヨリ上使之事必ズ記載アリト雖モ是恒例タルニヨリ畧シテ記サズ

南紀德川史卷之十二

菩提心公

目次

明和二年

南紀徳川史巻之十二

観自在公御譜

自延享三年二月廿八日
至文政十二年六月二日

目次

南紀德川史卷之十四

香嚴公第一

目　次　自享保十三年 至寛政元年

南紀德川史卷之十五

香嚴公第二

目次

南紀德川史卷之十六

舜恭公第一　自明和八年六月十八日 至文化二年

目錄

南紀徳川史巻之十七

舜恭公第二　自文化三年至嘉永六年正月

目次

南紀德川史卷之十八

顯龍公御譜

目次

築地邸御拜領　八丁堀邸之事アリ　五九三
年々金貳万兩ツヽ御取替　天保四年尚又五ヶ年御取替金相濟 天保九年同斷同十四年ニモアリ　同　十三年　五九三
八町堀邸殘地三方御相對替　五九四
御挟箱御簑箱塗色　公儀同様ニ成ル　五九四
南龍公和歌御靈屋造營　天保二年　五九五
異船東蝦夷ヲ侵ス　五九六
御召獵虎皮御鞍覆御拜領　同　三年　五九六
清溪公御贈位　五九六
湊御殿造營　天保四年上棟式 同五年　御引移　五九六
駿州小川村海藏寺本尊大奥ニテ開扉　同　四年　五九七
清溪公御靈屋修繕　五九七
西濱御殿大奥造營　五九八
木村長藏南紀忠孝畧傳ヲ著ス　五九九
權田原久野鍵之丞抱屋敷御讓受　同　五年　五九九
米價高直江戸市中餓莩多シ　五九九
濱町邸類焼　五九九
築地邸類焼　六〇一
三季御獻上物之外御獻上物猶又六ヶ年御省畧　天保十一年尚又年延アリ　同　六年　六〇二
赤阪御本殿焼失　六〇二
金貳万兩御拜借アリ　六〇二

南紀德川史卷之十九

憲章公

目次

南紀徳川史巻之十一

大慧公

諱宗直　初諱頼致（ヨシ）　御幼名甚太郎又義大夫　後玄蕃頭又左京大夫

源性院様 頼純公 御四男

御實母　太田氏家女　青山御屋敷住居

享保二十卯年七月二日卒去　於江戸

親樹院殿了月日照大禪尼　初圓常院御廟　身延久遠寺　享保三年三月改御牌前池上本門寺　目黒正覺寺ニテ御火葬御遺骨身延久遠寺ヘ納　同　紀州養珠寺

御室無之

一天和二壬戌年七月廿五日江戸青山西條藩邸ニ於テ御誕生御名世良田義大夫

世良田之御稱號被稱候ハ源性公御四十二歳之御子故ニ可有之カトアリ

一貞享元甲子年御髪直　月日不知

一同三丙寅年御袴召初　月日不知

一元祿五壬申年七月三日御本家ゟ松平之稱號被進

此時初テ御上屋敷御中屋敷ヘ被爲入　清溪公高林公ヘ表立御對顔

一同六癸酉年九月十五日御具足御召初

一同十丁丑年十月三日御部屋ヘ御移徙

一同十一戊寅年二月廿八日御名頼致ト號セラル御判モ極ル
一同年三月廿八日御袖留
一同十二己卯年閏九月廿二日御前髮執　御行狀草案ニハ九月廿六日トアリ
一同十三庚辰年九月朔日御登城初テ　將軍家江御目見　今日ゟ本家御相續迄始終御鳥ニテ御登城ナリ
一同年同月廿五日　將軍家水戸家江被爲成ニ付水戸家江御越御目見　將軍家御講釋御仕舞被遊候
ヲ御拜聞御拜見
一同十四年辛巳年正月三日年頭初而御登　城
一同年五月五日節句初而御登　城
一寶永元甲申年八月十八日相州塔澤豆州熱海へ御入湯九月晦日御歸府
一同二乙酉年十二月十九日從五位下ニ叙玄蕃頭ニ任セラル
一同三丙戌年十月十一日御嫡子ニ被爲立
一同年十一月朔日月次初而御登　城
一同年十二月十九日從四位下侍從御任叙玄蕃頭ト御改
一寶永四丁亥年六月十六日嘉祥御祝初而御登　城
一同年十月九日玄猪御祝初而御登　城
一同五戊子年三月五日豆州熱海御入湯四月十三日御歸府
一同六己丑年正月廿日頃ゟ疹御煩二月ニ入御平復

西條御相續

一正徳元辛卯年十一月廿二日頼純公御遺領御相續
一同年十二月朔日 一ニ十一月廿九日 左京大夫ト御改
一同二壬辰年十二月十五日左近衛權少將御任官
一同四甲午年四月十五日西條ゟ初而御暇 以上寶鑑及西條御家譜御行狀草案
一同年四月廿一日江戸御發駕五月四日大坂御着五日御出船九日豫州御着
一同五乙未年四月朔日江戸御着府 三月九日豫州御發駕

正徳六年丙申 六月廿二日享保ト改元　　公三十五歳

御本家御相續

一五月朔日御本家御相續徳川左京大夫ト奉稱 寶鑑
同夜御年寄對馬守ゟ諸向へ達し
左京大夫樣當朔日御登　城被遊候處於　御座之間　中納言樣被　仰候者紀州御家御相續可被遊候此段　文照院樣御遺言之趣に候則今日ゟ御稱號徳川と御改被成候樣にとの御事旁恭被思召候此旨何もへ申聞候樣にとの御事候 享保南志

將軍家繼公薨去

一昨夜將軍家繼公薨去 有章院殿
五月朔日御年寄達　公方樣御機嫌御養生不被爲叶先月晦日之夜　薨御被爲成候旨御老中被申上御愁傷之御事候此旨可申聞旨　左京大夫樣御意候 享保南志
一五月二日糀町御上屋敷ゟ御引越
一五月三日御相續ニ付若山御年寄ゟ御意傳達之御使田代楠大夫寄合出立ス 十二日和歌山着十三日於御城御意申聞之

萬吉殿西條御相續

一五月七日　上様有徳公ゟ御内々御太刀御装束御拜領　寶鑑

一五月十六日萬吉殿依　召御登城之處御懇之　上意ニ而左京大夫様御跡豫州西條御領地被成候様ニトノ御事被　仰出

萬吉様ハ　源性院様頼純公御六男　大慧公御弟頼渡君ナリ

諸役申渡

一六月八日御城ゟ有馬四郎右衛門罷越御上屋敷御客之間ニ於テ左之通申渡

御川役御供番頭	小栗源大夫		朝岡八郎右衛門
御手筒頭	丹澤茂右衛門	十人組頭	伊達幾右衛門
	中島彌次右衛門	御小納戸頭	山本茂兵衛
御徒頭	大岡記内	御徒頭	山田傳兵衛
同	寺村相右衛門	御目付	小野權大夫
御目付	小野田八右衛門	御膳番	大井武右衛門
御膳番	村河紋九郎	同格	宮地善次郎
同格	田中七郎兵衛	御召御具足奉行	間宮楠右衛門
奥之番	花房庄兵衛	御近習番	狹川作左衛門
御近習番	吉田元八	同	小栗彌左衛門
同	村田傳右衛門	同	竹本藤右衛門
同	岡村兵右衛門	同	高木兵左衛門

同　鳥居源之丞　同　柴山林左衛門

御膳奉行　木村治兵右衛門

何も被　召寄候段被　聞召此上夫々御役儀も被　仰出可有之と被　思召候被　仰聞候に不及候得共　左京大夫樣へ前々之通相勤可申事候若勤不精之儀も相聞候はゝ別而　思召に不相叶に而可有之候　御城へ被　召出候同前に何も相心得精出し勤可申との　御內意候　以上享保南志

右者　長福樣御人少に付被爲　召候旨御城より御內意に而五月十日於若山御役々四十七人之者江戶出立被命いつれも十二十三兩日に發足同時に御家老三浦遠江守をも被　召十六日發足夫々江戶着之處遠江守は御辞退申上四十七人之內二十人之者は被　召出殘りの分は本記の如く　御內意被　仰出たり此外四月晦日　御城へ御供之內又は御屋敷に居殘り候者も即夜或は追而被　召寄御役拜命之分不少其姓名　有德公御譜に附記之如し此際　公邊御當家惣御人替りに而御家附き又は左京大夫樣方附等職々の更迭中々多し事繁雜に涉り且は强而御事蹟に必要ならさるを以て畧す

南陽語叢ニ大慧院樣享保中御本家御相續被　仰出ニ付金森孫右衛門三井孫十郎坂西又六木下次郎四郎等數人被　召連トアリ

一是月日缺上使久世大和守殿を以　有章院樣御遺物左之通御拜領

御脇差來國次　代金貳百枚　岳飛眞蹟一幅　享保南志

一七月朔日御登　城御相續之御禮被　仰上

一同月五日正四位下左近衛權中將御任叙同日從三位被叙　宗の字御頂戴紀伊中將宗直と被稱御腰物御拜領豐後國行平　代三千貫　以上實鑑及御行狀草案

西丸に御引移

十五代史ニ曰ク　七月廿六日三家ノ輩ハ自余ノ輩ハ比スベカラストテ今度誓詞ヲ上ルニ及ハズト命ス

一八月四日　長福丸様（有徳公世子 將軍家重公）西丸江御引移　殿様六半時比御中屋敷へ被爲入御玄關迄御送り被成同日御城ゟ御迎之面々

大久保佐渡守　小笠原肥前守　有馬兵庫頭　御書院番頭　一人
御書院番組頭　一人　同組　十六人　御小姓組番頭　一人　御小姓組與頭　一人
同組　廿三人　御目付　二人　小十人組頭　二人　小十人組　三十八人
御歩行頭　四人　御歩行組　五十八人　御厩別頭　一人　御馬役　御同朋　二人
御歩行目付　御歩行押　御中間頭　坊主　四人　御小人
御手廻り組（御駕之者計ハ此御方之者加り申候）　黒鍬之者　御馬　三疋
御鐵炮　三挺　御駕（此御方ニテ出来）　御道具（元御家ノ御道具ニテ）　御長刀（花色羅紗）　御傘　臺傘　衣笠

右之外に御先手衆も被參候辻堅衆不殘被參候

女中瀬川御駕之跡ゟ御行列に乗被申候

一只今迄　長福様相勤候分は不殘御供也惣御人數六百人程之由

一御門之内に而者只今迄之通御門外は　若君様と相心得可申との御事之由に而御中屋敷之外は御上屋敷にも窓蓋仕候

一諸士之分は不殘罷出

長福様江　御目見被　仰付何も御殘多奉存御いたけ成御様躰を奉拜

一八月六日　小次郎様有徳公御二男後田安青山江被爲移候青山御屋敷御門番人等只今迄之通御屋敷者也大御門之幕
公儀より參る無紋之下黒也

一八月八日　長福様御供仕參候面々於　御城左之通被　仰付

後飛騨守ト改	千石	御傅	高井五左衛門
同信濃守ト改 土岐ニ改姓後淡路守ト稱ス	千二百石	大御番頭 御用役	豊島半之丞
同伊賀守ト改	千石	長福様 御傅	市川甚五左衛門

御書院番頭格只今迄之通リ相詰奥向諸事御用相勤可申候先知之通リ被下之御役料者無之

後備前守ト改	三百石	御用達	中島次郎右衛門
同主計頭ト改	三百石	御廣敷御用人	藪三郎左衛門
同淡路守ト改	千石	御用達次席	鷲津伊左衛門
同安藝守ト改	三百五十石	御徒頭格御近習勤	大屋吉右衛門
	二百石 三百石高	長福様頭役	上野七郎右衛門
	三百石	五十人物頭	吉川次郎右衛門

右御小納戸役先知之通リ被下之
御役料三百俵ツヽ千石以上ハ御役料無之

三十石	御近習番 彌次郎長男	竹本澤右衛門
廿五石	同	島崎一郎右衛門

後備後守ト改　四十石　同　上原與三郎
廿五石　長福様御近習番　村島清三郎
廿五石　同　富松喜右衛門
廿五石　同　市川重次郎
右御小納戸役三百俵ツヽ被下之御役料同斷
廿五石　御抱守　石場吉兵衛
後大炊頭ト改　三十石　同　彦坂丹右衛門
三十石　同　爲井吉大夫
同志摩守ト改　廿五石　同　伊藤彌平太
百石　同　小林理右衛門
廿五石　同　中村元右衛門
廿五石　同　熱　善之丞
廿五石　同　弓削多彌右衛門
廿五石　同　太田權之右衛門
廿五石　同　萱谷五一右衛門
右御近習番貳百俵ツヽ被下之御役料貳百俵ツヽ
後丹後守ト改　廿五石　御抱守　次郎左衛門幸廣養子　熊倉斧右衛門

御近習番知行三百石被下之御役料貳百俵

廿五石　御抱守　伊右衛門長男　小笠原彌太郎

百五十石　同　岡山左五八

御小姓無足　後伊賀守ト改　大久保熊之丞

御小姓三百俵被下之御役料三百俵ツヽ

御小姓無足　後市正ト改　奥村三平

同　同因幡守ト改　上原源四郎

六十石御小姓　同周防守ト改　奥村秀之助

御小姓三百俵ツヽ被下之心次第罷出可申候依之御役料無之

右三十二人長福丸様衆ナリ

左之五人ハ　上様御内意ニ而六月八日　長福丸様方勤被　仰付御供仕ル

六十石　御膳番　飯塚源右衛門

同　同　落合郷八

三十石　御召御具足奉行　後對馬守ト改　鈴木文右衛門

六十石　奥之番　田屋仙右衛門

廿五石　御近習番　後伊賀守ト改　松下專助

一御醫師吉田梅庵　三百石　長福丸様附とあれとも被　仰付文なし　以上享保南志

朝姫様生
小次郎様
御移城

別本御供人名ノ内左ノ面々加記アリ

御醫師　二百石　吉田梅菴
御藥所人　十二石　松尾竹右衛門
同　仝　横田茂大夫
坊主　正齋
同　專悦
同　作益
同　長賀

一八月九日御上屋敷ゟ御中屋敷江御移徙　寶鑑

一八月十五日　圓成院樣御實母也觀樹院殿ト御改　百人町ゟ御中屋敷へ御移被遊　百人町ハ西條邸也　享保南志

一十月七日　朝姫樣御誕生　寶鑑

一同月十八日　小次郎樣青山御殿ゟ御城江御移被遊　後田安中納言公　御迎之衆

加納近江守
小十人組　一組　小十人頭　一人
御徒　一組　御徒頭　一人
御小納戸衆　九人

御附ニ而御供仕候者
後本知之通被下小次郎樣へ只今迄之通リ勤御役料三百俵被下筑後守ト改　三百石　御藥込頭　野村作右衛門

後野村通リニ伊賀守ト改ム
三百石　御目付　平塚一郎右衛門

後御抱守二百俵御役料百俵被下
廿五石　御抱付　内藤新七

仝
廿五石　同　大塚彌惣

後
御抱守二百俵御役料百俵被下
同　常見文左衛門　元遊阿彌

守山太兵衛

早川善左衛門

桑島治大夫

後御座敷御用人御役料三百俵被下相模守ト改
貳百石　御足百石　御納戸頭　小出半大夫

同
河内守ト改
三百石　御藥込頭　能勢惣八

後　小次郎様御匙被　仰付
三百石　小川文庵

別本御供人名の内左の面々加記

四十石　桑嶋新七

御鷹匠十二石　伊藤十右衛門

同十五石十両　水上八左衛門

八左衛門倅見習　岡　藤右衛門

同二十石　原田甚六

御鷹匠勤　銀十枚　宮井三九郎

同　無足　伊藤源八
同　同心　山田五六郎
同　菅野半平
同　原田三之右衛門
同　古屋茂大夫
同無足勤　山田太兵衛
御鷹御大率　三人

宰相任官
一十二月十八日宰相御任官　寶鑑　十二月廿八日御禮

忠僕孝子
一是歳勢州松坂町醫師靑木玄伯か僕玄庵の忠勤を賞し夫婦の者へ白銀若干を賜ひ同小阿坂村農道智の娘久にの孝道を賞し父子一生米若干を賜ふ
是より以下　公御一世の内紀勢御領分之孝子義僕等へ金米賞賜の事尠からすいつれも孝子傳に詳なり

享保二年丁酉　公　三十六歳
一三月朔日增上寺　有章公御靈前へ銅御燈籠二基御献納

公儀法令
一三月十一日　公儀御法令被　仰出悉ク天和ノ舊ニ復シ正徳ノ文ヲ用ラレズ　十五代史

孝子
一三月上那賀郡粉河村の孝子三郎兵衛へ年々米拾俵を賜ふ

外舶追討
十五代史ニ云ク　四月廿一日松平肥前守ニ命シ國ニ就キ外舶追討セシム此頃西海ニ唐舶寄リ來ル者アル由注進アルニ由テ也
又五月廿一日小笠原右近將監カ家人ヲ老中久世重之ノ邸ニメシテ筑前長門ノ人數ト共ニ之ヲ追

討スベシト命ス
十二月朔日松平肥前守小笠原右近將監毛利右京其領地海邊ニテ蠻船討取リシヲ賞ス
御目付渡邊外記ヲ撿使トシテ長崎ヘ遣サレタリ
十二月廿八日今度西海ニ唐船來リシヨシ注進ニヨリ小笠原忠雄ニ命シ擊退セシム
享保三年四月漂着ノ唐船ヲ追逐シテ其船ヲ燒其人ヲ殺ス旨小笠原忠雄ヨリ注進ス
享保三年ニモ外國ノ姦商等九州中國海邊ニ漂泊シ拔荷ヲナス者ヲ逐斥大炮ヲ以テ燒打ニシ又ハ之ヲ捕獲ス黑田小笠原毛利等皆兵船ヲ出シ悉ク打チ拂タリ是レ正德ニ長崎ノ事改正アリテ海禁ヲ嚴ニセラレシヨリ唐船ノ姦商等ト私通スル者絕エズ世之ヲ八幡（ハバン）ト云フト云

鷹場拜領

一五月十五日御鷹場御拜領
先年御差上之武州大宮御鷹場先規之通御拜領　寶鑑及御行狀草案
十五代史ニ曰ク　此日三家ノ方々ニ舊ノ如ク放鷹ノ地チ賜フ蓋シ生類憐ノ禁既ニ廢セラレタルニヨル
一二月日缺　左之通　御城江被　召出御小納戸被　仰付　享保南志
御近習番廿五石　飛驒守惣領　高木兵左衛門
同　廿五石　二郎左衛門惣領　中島長之丞
御小姓　半大夫惣領　小出半三郎
一六月廿五日青山御殿御普請出來に付御實母御移徙　御行狀草案

利根姫

一八月朔日　利根姫樣御誕生

權中納言
一十二月朔日權中納言御任官　寶鑑

孝子
一是歲藩士西尾善大夫下婢そめの忠節を賞し毎月錢若干を賜ふ

享保三年戊戌　　　　公　三　十　七　歲

一正月廿八日初而大宮御鷹場江御暇　寶鑑
二月朔日御發駕十一日　上使阿部遠江守を以御干菓子御拜領
此後御鷹場へ被爲成候節々同斷以下略ス　同十八日御歸府

御初入
一三月廿一日初而紀州江御暇　寶鑑
四月三日江戸御發駕同七日駿州久能　御宮へ御參詣同十一日熱田より大口浦へ御渡海松坂御着城十二日同所町方御廻り松崎浦へも被爲成十三日鶴御鷹野同日御發駕川俣通り十六日若山　御着城　宮崎家舊記

淨圓院樣御下向
一四月十五日　淨圓院樣有德公御實母和歌山御發輿上海道筋江戸江御下向
清溪院樣御逝去以後は若山御城に被爲入候處江戸ゟ御迎して石川近江守栃木周防守幷御留守居番御目付両人小十人頭組共御徒頭組共御小納戸衆被參今朝五ツ時御發輿然るに大雨雷鳴之處山口御通過之頃ゟ晴天に相成江戸御着輿以後　御城二之丸に被爲入　神野嘉功筆記
一德川十五代史ニ　享保三年五月朔日淨圓院尼著府アリ十三日從ヒ來リシ巨勢十左衛門由利ニ五千石ヲ賜リ側衆ノ首座トス是尼ノ弟也ト云々
一享保南志補に　淨圓院樣御附
丹波守ト改　大番頭格千石　巨勢十左衛門
肥後守ト　奉行四百石　桑島喜左衛門

御使番頭格七百石　富松喜兵衛　伊豆守ト　三百石　巨勢六左衛門

市正ト改　御廣敷番 廿石三十石高　新家與五右衛門　大膳亮ト改　大番 四百石　竹本九八郎

御徒格 十石三人扶持　御鐵炮役　佐々木勘三郎　別本ニハ享保十己年被召トアリ　坊主衆　津田春哲 服部傳員

坊主衆　糸川玄悦 同役六人　富瀬友達 御下男四人　小使四人　持人廿六人　人廻し一人

十一月二日伊賀ニ　川村彌五右衛門　藪田定八

三十五俵三人扶持　宮地六右衛門　吉川安左衛門

別本御供人名ノ内左ノ面々加記アリ享保八九年被召出且佐々木勘三郎ノ如キハ淨司尼公御供ト云ニハナク外御用ニテ召サレタルナルベシ

御醫師三百石　林良意　御膳手筋御用勤三十石　野澤惠右衛門　御賄頭廿石　五嶋丹五郎

拾石　銀五枚　水谷甫閑　金拾両　岡本善悦　御台所人十二石　崎山五郎四郎

同助　十二石　外山安之右衛門　御廣敷書役八石　川名幸八　御藥込　梶野太左衛門

御藥込　和多田孫市　同　中村万五郎　同　村垣吉平

同　倉地文左衛門　同　馬場瀧右衛門　同　林惣七郎

同　古坂與吉　同　高橋與右衛門　同　野尻七郎兵衛

享保八卯年被召出　傳甫　御藏奉行　六十石　井澤彌三兵衛

同九辰年被召出

郷役方杖突　岡本文五郎　在方書役　驪路善右衛門

御普請方手代　保田久兵衛　御役方下役人　秋月理右衛門

御勘定同心書役　佐久間平兵衛　其外下役四人

是等は井澤に屬して地方の功者なればなり

左門樣卒去

一十五代史延享二年ノ條ニ曰ク　紀州ヨリ佐々木勘三郎ト申大筒并火藥ノ上手被召出候テ狼烟花火等被　仰付諸組與力ノ内ヨリ大筒打候者御吟味有之候テ鎌倉へ被遣奥向之面々見分ニテ町打被　仰付候

一近江中村元麻呂筆記に曰く　おゆり享保三年東行の途次四月廿日近江愛知川驛に宿泊し廿一日高宮鳥居本摺針等に休憩し番場驛に晝餐す並に彦根藩領の藩吏出役して篤く之を饗應し領内一般戒嚴城下の如きは士民晝夜自身に街衢を巡回して非常を警戒す是時其產土神なる彦根千代神社に參拜せんといへるを隨行の若年寄石川近江守綱茂の止むるにより代拜せしめ其時神納の眞太刀今に神社にありと云ふ（每日新聞廿六年八月二日に載する處有德公譜夫人御里方の事を記する條に詳也　（綱茂一本總茂ニ作ル）

一五月廿九日　左門樣田邊下秋津村に於て御卒去左門樣は　源性院樣御嫡山城守樣御事に而寶永三戌年八月廿八日御義絶正德三巳八月七日江戶御發駕紀州ゟ被爲入同四午年四月五日左門と御改名後田邊下秋津村に御住居本日御卒去被遊若山表御用部屋六月朔日之日記に記する處左の如し

左門樣御遠行　右は去々頃御病氣に付中井玄宅被遣其以後町醫師沼田蘄瑞被遣追而先月廿八日御用達小野權大夫被進候處段々御差重り昨日廿九日御死去之旨下秋津村ゟ今日晩方申來る

一御忌中に付諸士御機嫌伺之事

頭役は御忌中兩度　御城ゟ罷出平士は頭支配之宅ゟ一度罷出候筈　以下畧

御尊骸は六月四日夜田邊本正寺にて御火葬八日夜若山感應寺へ御埋葬御法號本地院殿と謚し奉る

御義絶之事其他詳細は　南龍公子御同公の御譜に記載す　又安永五年香嚴公御墓參寛政五年三月　舜恭公より御名代初り文化三年五月邦安社に御祭り被遊等之事ありいつれも各年月之條に詳なり

御義絶に付御家老奥村三郎五郎渥美甚五郎極諫し奉りし事兩人の傳之を詳にす

一七月廿一日那賀郡岩出へ被爲成廿九日　御歸城

一九月朔日御笛鹿之節御用被成樣にと御火繩一箱於江戸大奥ゟ御拜領

一九月廿六日岩出に被爲成十月四日　御歸城

一十月十七日海士郡梶に被爲成同廿四日　御歸城

勢州領御巡見

一十一月三日勢州御領分御巡見として御發駕川俣通御旅行九日松坂　御着城十一日ゟ三領他領共御鷹野鶴鴈等多く御手に入廿三日松坂に御歸殿廿五日田丸に被爲成廿六日松坂に御歸殿廿八日御發駕川俣通り十二月三日若山　御着城（宮崎家舊記ニモ摘載）

琉球使

一十一月廿一日琉球中山王ゟ正使越來王子副使西平親方來聘

大官香　十把　芭蕉布　二十端　縞芭蕉布　廿端
紗綾　十卷　沈金籠飯　一對　泡盛酒　二壺

右進上

官香　十把　太平布　十疋　芭蕉布　十端

右越來王子ゟ獻上

越來王子是月五日に登城大廣間に於て御代替之賀申上る

炮術之御工夫

一是年炮術之儀種々御工夫佐々木浦右衛門に被　仰付

火業書の相圖流星に紙を入れ打上る事御工夫之上佐々木浦右衛門に被　仰付處遠見思召まゝ宜出來に付自今浦右衛門弟子共稽古仕樣にとの御事にて此後同人家に相續候也此時迄浦右衛門家

之書の相圖と申は大筒に絹切れを込み玉と而打上る也當時被　仰付御好之紙の形ち大小長短色ごり等數々あり且又右流星並夜の相圖流星共篦竹長くては取扱の辨し不宜に付試に繼篦に被　仰付上り等常の篦に替る事無によつて繼篦のいたし方浦右衛門に被　仰付

一同年百目玉に而五本之火矢一度に打出す町打御道具右同人へ被　仰付出來貳拾貫目玉木筒貳挺是又同人に被　仰付出來

是は松木にて拵へ竹輪一面に入し筒也からくり玉にて町打先に而燒る事を第一とし何方にても早速心安く御用立之儀を調法に致す事玉數打ても損し不申打方あり

一紀州に御往來之砌御馬川前沓打樣之儀御馬役に御傳授被遊候事あり

是ハ御時分不相知候ニ付此所へ記ス

孝子の賞

一是年孝行人に被下之米等自今親子一生に可被下置旨被　仰出前には父一生母一生之内親へ附被下有之處以後本文之通に被　仰付

享保四年己亥　公　三　十　八　歲

勢州捕鯨

一正月廿九日勢州にて所獵之鯨二桶二色御獻上

勢州に於て御手前船にて留たる所之鯨女使を以御内証方御獻上

一二月朔日高郡園浦に被爲成

御坊村御堂に御滯留五日同所御發駕椒へ被爲入七日　御歸城

一二月廿八日若山御發駕晦日山州八幡へ御參詣三月二日北伊勢御通行十一日江戸　御着府 宮崎家舊記ニモ據ル

朝鮮使

一九月七日朝鮮三使よりの使者上々官金僉知上判事韓僉正李判官來邸左之通呈す

常姫様生
南龍公五十回忌
義民新右衛門
直松様生

人　參　一　觔　　虎　皮　　二張　　白照布　伍匹　　黄毛筆　廿柄
眞　墨　　廿笏　　芙蓉香　三十枚　　鷹　子　一連

右三使は正使洪致中副使黄璿從事官李彦明也十月朔日登營引見あり

一十一月四日從　公方様上使森川下總守を以朝鮮鷹二居御拜領

一十一月五日大宮御鷹場へ御發駕十六日　上使被來廿三日　御歸府

寳鑑ニ十一日御鷹場之内引替トアリ

享保五年庚子　　　　公　三　十　九　歳

一正月五日常姫様御誕生　寳　鑑

一同月十日　南龍院様五十回御忌御法會

將軍家ゟ御代拜として巨勢伊豆守紀州へ參向於和歌雲蓋院御代拜相勤

一同月十二日紀州伊都郡高野寺領百姓總代清水組島野村新右衛門七十五ケ村の爲に一身を擲ち於江戸寺社奉行稻葉侯に駕籠訴をなす

新右衛門姓は戸谷と稱す高野山興山寺の領民也地頭の暴戻に七十五ケ村の良民塗炭の苦に堪へすしば〱哀願愁訴するも更に用られず却而役儀を放たれ身退けらるゝ依て爰に及ひたり後幕府ゟ官吏派出願意貫徹に至るも新右衛門は痛く惡僧の爲に憎まれ遂に生なから石籠詰の虐刑に罹て死せり事甚佐倉宗吾に類す其詳なるは俊傑傳に載す

一二月晦日直松様御誕生　菩提心公御事

一四月十三日御歸國に付江戸御發駕御參宮　寳　鑑

四月廿日熱田ゟ勢州大口浦へ御渡海廿一日松坂御城へ御着廿二日稚御鷹野廿四日田丸城へ被爲入廿五日御參宮同日田丸川俣通廿八日若山御着城　宮崎家舊記にも據る

後奈良天皇後陽成天皇宸翰

喜姫樣生

清溪公十七回忌

將軍家の太刀進納

一五月二十日和歌玉津島明神等へ　宸翰の神號を賜る
後奈良院宸翰玉津島御神號同所天神社に　後陽成院宸翰天滿宮御神號御奉納これなく　御納めあり

一七月廿二日岩出に被爲成廿九日　御歸城

一九月二日同所に被爲成五日　御歸城

一十一月十六日喜姫樣御誕生　寶鑑　後細川越中守へ嫁せらる最賢明の御聞えあり略譜に詳也

一十二月十一日根來に被爲成十七日　御歸殿

一是歳川口見越常燈沖ゟ見へ惡敷に付所替被　仰付　以上御行狀案

享保六年辛丑　　　　　　公　四　十　歲

一正月十五日四十之賀御祝　將軍家ヨリ御拜領物アリ

一二月廿八日御參府に付若山御發駕
川俣通三月朔日松坂　御着城二日鵜御鷹野三日大口浦ゟ熱田へ御渡海十一日江戸御着府　宮崎家舊記ニモ據ル

一五月廿三日御內證御座之間御普請出來御移　以上寶鑑

一八月八日清溪公十七回御忌に付　將軍家ゟ御名代戶田山城守紀州に被遣
淨圓院殿爲御代拜巨勢大和守紀州に被來雲蓋院濱中長保寺に於て御代拜相勤

一十月十七日從　將軍家紀州　東照宮本宮新宮那智山日前國懸宮伊太祈曾神社須佐明神刺田比古神社有本八幡宮へ眞御太刀馬代御進納に付淺野壹岐守紀州に被來　按ニ是皆御舊領ノ故ヲ以テ特旨ニ出タルナルベシ有本八幡ハ即チ栗林八幡ニテ信嘗テ拜スルニ眞御太刀ハ備前國秀光御拵ヘハ晴色糸柄赤銅金具武田菱色繪七子鞘金梨子地也熊山三山ノ御太刀モ年々御代官等撿閲ノ恒例ニ依リ信同所在職中拜閲ス作銘失忘御拵ハ右ニ同シ

熊野三山の社修營

紀州領御巡見

幕府へ献米

一十一月十六日　大宮御鷹場へ被爲成十二月五日御歸府

享保七年壬寅　　公四十一歳

一三月廿七日御歸國に付江戸御發駕

四月六日熱田ゟ御渡海同日松坂御着城七日鵜御鷹野八日御發駕川俣通若山御着城　宮崎家舊記ニモ據ル

一四月幕府熊野三山ノ社修營勸化ノ事ヲ令ス　十五代史

按ニ金千両御寄付モ蓋シ此比ノ事ナランカ後世熊野三山御寄付金貸附方創設モ是等ニ基キシナラン

一七月十八日岩出江被爲成廿五日　御歸殿

一八月廿五日右同所へ被爲成九月三日　御歸殿

一九月廿六日根江被爲成晦日　御歸殿

一十月十五日紀州御領分爲御巡見若山御發駕

十八日田邊御滞留廿一日本宮權現江御社參廿二日新宮城へ被爲入廿三日新宮權現へ御社參廿四日那智權現へ御社參廿五日同所御滞留夫ヨリ所々御巡見十一月十一日若山　御着城

一十一月十六日　幕府へ米貳千石御献納大坂御藏へ納ム

右ハ近年諸國風水之損毛打續キ御藏入不足其上堤川除等之破損所多ク數ケ所之御普請被　仰付加之御料所之百姓共及飢渇候者へ御救米被下等臨時御物入多御旗本初へ給米金渡方モ差支ノ旨ニテ本年五月廿八日御老中ゟ嚴敷儉約ノ事ヲ令シ七月三日ニハ御老中水野忠之ヲ以テ万石以上ヘ左之通ヲ令セラル

御旗本に被召出候御家人御代々段々に相增御藏人高も先規よりは多く候へ共御切米御扶持方共外表立候御用筋渡方に引合候ては畢竟年々不足之事に候然とも只今迄は所々御城米を廻され或は御城金を以て急を辨られ彼是漸く御取續き事に候得共今年に至り御切米等も難相渡御仕置筋之御用も御手支し事に候夫に付御代々御沙汰無之事に候得共万石以上之面々ゟ米差上候樣に可被仰付と思召候左候はねは御家人之內數百人御扶持可被召放より外は無之候故御耻辱を不被顧被仰出候高一万石に付米百石之積り可差上候且亦此間和泉守に被仰付候隨分遂僉議納り方之品或新田等取立候儀申付候樣にと之御事に候得共近年之內には難相調可有之候條其內年々上ヶ米被　仰付に而可有之候依之在江戶半年充御免被成候間緩々致休足候樣に被仰出候　何も在府之儀に付ては江戶人多にも候間此以後在府之間も少き儀に候條可成程は人數可相減候

覺

一參勤御暇之儀只今迄外樣四月御譜代六月交替被　仰付候得共向後ハ一同三月中九月中交替可被　仰付候事

一嫡子御暇被下候者共又在所到着以後六十日過候て可致參府事

一在所又ハ居所有之面々ニテモ幼少若年之者ハ御暇被下間敷候併一年半ハ御暇之格ニ準シ御門番火之番等被　仰付間敷尤半年充在府之格ニテ右御用等可被　仰付候事

一上ヶ米之儀大坂御城に成共當地御藏へ成共面々勝手次第上ヶ米高半分充春秋兩度ニ可被相納候事

一當年ハ上ヶ米高半分之積り秋中可被相納候事　以上

依テ御三家方ヨリモ御獻納被　仰立シニ七月二十日御家老呼出ノ上尾紀ハ二千石水戶ハ千石上

納ノ指令アリシト云フ

本記上ケ米來年ゟ御用捨參勤交替モ來年ゟ前々之通リタルベシト享保十五年四月十五日ニ命アリ

經書寄附

一是年經書數部講堂へ御寄附　此後も段々御寄附被成　思召也

此書物は志ある輩拜見致し度と願出れは貴賤によらす御貸可被成事也

家中儉約令

一是歲御家中儉約之儀被　仰出

御家中儉約之儀先年ゟ追々被　仰出たる事に候右者御用捨を以て御救同斷之譯に候得者面々不勝手に付而は別て可相守儀に候處內證之儀不及申表立候儀も無益之費有之樣子に相聞候然共此段者一統之風俗に候得者一人立難守可有之事に付猶又今度儉約之儀割紙之通極り候條六七年之內主人者勿論召仕之者に至迄無油斷申付堅可被相守候依之役人被　仰付候間若相背候輩有之候はゝ急度相改申に而可有之候

一諸士衣服御國に而は重役たり共紬もめんの外着被致間敷候其外者もめんを着用可被致事

但上下をも着候節は重役に羽二重絹不苦候其外は絹紬ゟ上のもの着被致間敷候勿論御紋付に候共右之外は不罷成候

一羽織は絹紬もめん着可被致候重役は羽二重に而も不苦候右羽織之裏は茶丸類無用絹類無用絹類（本ノマヽ）を可被用候勿論御紋付に候共右之外は不罷成候事

一袴さんとめ此外毛綿織之類着可被致候裏之品羽織之裏同斷

一帶襟袖口頭巾幷雨羽織紙子之裝束等卷物之類無用に可被致事

但火事羽織は唯今迄之通

一帷子は半さらし島類越後ちゝみに而も麁相成を着可被致候上下なとも着候節はさらし紋付不苦候事

一夏袴は高宮島ゟ上之物無用に可被致事

一諸士の妻娘姉妹等之衣類居宅に而は毛綿着致他出之節は羽二重紬迄着爲致可申候重役之妻娘等は御紋付に候はゝ綸子迄は不苦候其外は御紋付に候はゝさあやちりめん迄は不苦候縫はく有之巻物類は無用に可致候此節持合候はゝ下着には不苦候帷子も隨分麁相成を着可被致事

一唯今迄御扶持人之妻子等猥に御紋付之衣類着用候樣に相見候此段不心得之義に候自今者御紋付衣類着し候格之者之妻娘姉妹之外は一切可爲無用事

一振舞之儀婚禮其外押立候祝義之節は一汁二菜外に香之物酒三盃吸もの壹肴一色たるへし木具盃之臺無用に可致事

附他客たりとも分限ゟ輕く致し勿論大酒長座に及へからす

鶴　白鳥　雁　青鷺　雲雀　鯉　生鮭　生鱈　到來たりといふ共可爲無用

一年頭生身靈やぶ入之祝儀に親子寄合候はゝ一汁一菜吸物肴一色つゝ酒三盃に不可過候尤料理物隨分麁相に可被致事

但右親子寄合之節兄弟祖父母孫之外出合不罷成候

一押立候祝儀幷年頭生身靈やぶ入等振舞之節惣而後段且又菓子類濃茶一切出し被申間敷事

一常々親類縁者其外用事に而參會長座及候はゝ湯漬香物出し可被申候尤酒肴等堅無用に可被致候用事之外寄合給物等出し候義可爲無用事

一年頭祝儀之餅は親子之外饋り被申間敷候歳暮にも父母へ樽肴一種可被相饋候右之外は五節句等にも祝儀物之取替無用に可被致候其外他人は勿論親類共に祝儀物幷音信贈答土産餞別等堅可爲無用事

附婚禮祝儀物之定め幷諸藝習候師匠へ音物等遣候儀は唯今迄之通に可被相心得候

一出入之輕き者幷町人百姓等心得違少之土産持參候共返し可被申事

一年禮に妻を親類之方へ遣候はゝ父母には輕樽肴一種被相饋其外之親類へ饋物一切無用に可被致候且又先方之家來へ輕き物にても持せ參取らせ候儀可爲無用候常々親類之方へ妻を見廻に遣候節は彌以金少之物たりとも土產無用に可被致事

一召仕之者に正月鏡餅取せ候儀幷五節句之祝ひ物給させ候儀可爲無用事

但元日は雜羹酒具足之祝儀に餅計給させ候儀は勝手次第たるへく候

一年頭に組中盃事之節雜羹吸もの取肴酒三盃右之外一切可爲無用事

一組足輕正月に具足之祝儀餅給させ候節吸物取肴酒二盃右之外一切可爲無用事

一此度諸士儉約被　仰出候に付在中之儀も右に准し諸事費ヶ間敷品無之樣にと百姓共へ申聞候夫に付年頭歲暮五節句等之祝儀物幷燒米なと地頭へ持參之儀自今相止め申筈に候右之通に候條百姓年頭之禮に參候節幷藏附けに參候時分は一汁一菜之支度致せ酒二盃出し可被申候但年頭には

雑煮給させ可被申候鏡餅遣候儀無用可被致候且又年頭幷藏附之外に遠在之百姓用事に付而罷越候節は輕く支度は致させ可被申事

一冑破魔弓羽子板雛なとの取替し他人は勿論近き親類たり共一切可爲無用事

一端午のほり二本幷飾相成冑二頭鎗壹本長刀一振之外立させ被申間敷候尤右のほり冑八歳以上は無用に可被致候且又雛之儀も有合候を立させ可被申候新規に調候儀無用たるへく候女子出生之節調候共飾相成ひいな數貳對に不可過候小道具も右に准し隨分數を減し可被申事

但男子多候共一家にのほり冑等本紙之數計立申筈且又親類一屋敷に二住居致し罷在候節而方に男子有之候はゝ一方に一通りつゝ立申筈家來之子共は主人之屋敷に而のほり等立候儀不罷成候

一葬禮佛事輕く可被致候付り香奠之儀兄弟祖父母孫伯父母甥姪聟舅までは心次第輕く可遣右續之外菓子又者輕物に而も遣候儀堅く無用之事

一屋作之儀無據品に而新規に家建候はゝ其趣書付を以御用達又は頭支配方へ被相達右斷を受候而々方奉行御目付へ相屆置可被申事

一女乘物にめつきの鋲打候儀幷簾のへりに金入之織物且又ふさ付候儀可爲無用事

但鋲幷へり之儀は當時有合候は其通りに致置包直し候節方相止可被申候ふさは此節方無用可被致候

一嫁娶道具等之儀唯今迄之定め之内此度省候儀も有之改り候條御目付方に而可被聞合事

一婚禮幷養子等仕候節近年は金銀之土産專取遣り致し候様に相聞候此段不宜風俗に候條自今堅く無用に可被致事

一此度極り候箇條之書付に出不申品々は跡方被　仰出之通に可被相心得事

一此度儉約に付面々家内に而之儀は別而輕く被致萬端減少可有之事

一此度極り候衣服之品は來卯四月朔日より役人改申筈衣服之外は此節ゟ改申筈に候事

一不勝手に付御扶持方之者は勿論格減之面々も此度極り之趣に付而は彌以心得も可有之事

一在江戸之面々衣服之品は只今之通に可被相心得候妻娘等御紋付衣類着用之譯嫁娶道具之定且又祝儀音物之贈答土産餞別參會之品此外之條數も右山に准し候儀は堅く可被相守事

但勢州上方役人と在江戸之面々同斷

○御國に而諸士召仕之者衣服等之定

一中小姓ゟ上之者年頭五節句幷押立候祝儀之使婚禮之輿添之節は絹紬さらし帷子迄は不苦其外常々はもめんはつかうの類着爲致可被申候羽織袴等ももめん類たるへし尤右裏幷帶襟頭巾袖口絹ゟ上不罷成候事

一若黨之衣服もめん高宮羽織袴毛綿類可着帶襟頭巾袖口にも絹ゟ上不罷成候事

一小者衣類萬々毛綿地布を可用事

一小者頭巾もめんの外一切不罷成候且又雪踏幷ふくろ足袋はき申間敷事

一惣而男奉公人衣類定之外はたとひ主人ゟ貰合有之候衣類にても着用不罷成候事

一惣而奉行人之儀主人之宅は勿論其外にても大酒等致し不相應之行跡不仕樣に急度可被申付事

一しんめう方下之女絹紬方上之衣類着を被申間敷候形ちらしは勿論紋所たりとも縫はく并鹿の子は一切不罷成候事

一帶絹紬方上之物無用尤無地を可用形ちらしは不罷成候

一襟并帽子ふくめん袖へり等も右同斷

一帷子ゆかた染に候はゝさらしにても不苦茶屋そめは不罷成候但地べに地桔梗黒べに縫はく明石ちゞみ絹ちゞみ等不罷成候

一増し帶之儀紬丸くけに候はゝ絹紬不苦候丸くけに不致候はゝ毛綿麻之外不罷成候

右増帶いつれに致し候而もべに紫にそめ申間敷候

一中居女下女衣類毛綿地布はつかうを可用帶襟等も毛綿の外不罷成候帽子ふくめん絹紬不罷成候

増帶もめん布之外無用尤べに紫に染申間敷事

一惣而召仕女帶之たけ八尺方上不罷成候事

一惣而召仕女べつかうのさし櫛笄并蒔繪のさし櫛笄堅く不罷成候事

一惣而女衣類等主人方遣候とても右定め之外之物は着用不罷成候事

一中居女下女近年は絹紬類を下着に仕樣子に候自今堅不罷成候事

一御徒並以下之者妻娘も此度之改はしんめう女衣服同斷

一御中間躰之者妻娘衣服此度改り候中居女同斷

右之通

○　　　御役者支配へ

此度諸士儉約之品々被　仰出候夫に付御役者共の儀も万事儉約致可相勤候衣服は絹紬もめんを專着用可仕候御慰之御能勤候も麁服にて不苦候且又妻娘姉妹之衣類絹紬より上着申間敷候形ちらしは勿論紋所たりとも縫はく幷鹿子無用帷子も湯かた染候はゝさらし迄は不苦茶屋染其外結搆成帷子一切着用仕間敷候帯襟帽子ふくめん等も絹より上無用鼈甲のさし櫛笄不罷成筈增帯絹紬より上無用本べに紫に染申間敷事

附召仕之女万事もめん地布を着爲致可申候べつかう幷蒔繪之さし櫛笄不罷成候

右之外御年寄儉約方在町節儉之儀迄詳細被　仰出御家中へ被仰出に准し大同小異なり畧す

一又左之被　仰出あり年月日不詳により爰に附記す

奉　　行

前々ゟ被　仰出有之候趣尙近年追々被　仰出候儀共彌以細雜に諸事心を付規矩相紀取計可申候前々ゟ被　仰出候儀夫々役所留扣申送り等可有之に付其役々存可罷在儀には候得共古き事共取失之儀も可有之候寛文之比被　仰出候御書付被御覽出候に付此度御代官郡奉行へ右御書付之趣申聞能爲覺悟候樣にとの思召に付申聞候事に候右御書付之趣は奉行添奉行等別而能心附可罷在儀に候在中之事に不限諸事に相用候事に候此節御〆り方專一之御時節に候得は万端能く致勘辨無油斷取計候樣に可申聞との御意候

寛文ノ被　仰出ハ　南龍公ノ寛文七年三月ニ記ス

公　四　十　二　歳

寛保八年癸卯

一二月廿日岩手へ被爲成廿二日　御歸殿

一三月九日御参府に付若山御發駕

三月十三日北伊勢御通行被遊　宮崎家舊記

駿州大井川滿水に而御供中後るゝに付同國江尻に一日御滯留廿三日江戸　御着府

十五代史に曰　七月十八日紀州ノ家臣井澤彌惣兵衛ヲ召シテ勘定トナス（二百俵ヲ給フ）新田開發及ヒ水利ノ事ニ通スルヲ以テ也

一十一月十五日大宮御鷹場江被爲成十二月五日　御歸府

一是年異國火藥御書物佐々木浦右衛門へ御預け被遊

右之内業品々被　仰付度々御覽あり其後右之御書物同人へ下さる

一是年諸舊祠を御崇敬碑石等御建立殺生禁斷を被命

名草郡有馬村堅眞音神社地江石之寶殿御建立田畠之障りに不相成樣に境内牓示御極め後殺生禁斷の被　仰出あり鳴神神主へ御預也

同郡津秦村䴥爲姫神社祠之前江平石に社號を記し御建立是はちはやの森と申少の畔の内にあり外は田畠に付森限りに境内牓示御極の後殺生禁斷之被　仰出あり日前國造へ御預也

同郡和田村天霧山に靜火明神と申傳へ小き社あり又同村に靜火と申田地あり其畔の傍に件之社跡有り所之者も何社の舊地と申事も爾々不存樣成行有之により右舊跡絶え不申樣にとの御事に

火藥書物

崇敬舊祠建碑

て多く田地の妨に不成樣に石碑御建立ー靜火社舊地と銘す天霧山へは右社御再建爲神躰八角之御鏡御寄付なされ其外境内造作あり後境内牓示御極め殺生禁斷の制札御建させ被遊龍山神主へ御預也

享保九年甲辰　　公四十三歲

一四月二日御歸國に付江戸御發駕

四月十日熱田御渡海同日松坂御着城廿日鷄御鷹野十二日御發駕川俣通十五日若山　御着城宮崎家舊記參錄

長保寺へ納經

一五月濱中長保寺へ御直筆に而紺紙金泥之法華經壽量品一卷御奉納長保寺記錄卷末に左之通御自記

于時享保九年歲次甲辰五月吉旦

權中納言從三位　源朝臣宗直謹書

按ニ長保寺筆記ニハ　南龍院樣御年回之節ト有之然レ圧享保九年ハ寛文十一年ゟ五十四年ニ付謚シ享保五年五十回御法會御追善之御思召立本年ニ至リ御奉納被遊タルナルヘシ

一九月廿二日鴨御鷹野御物數御手に入

一同月廿五日椒に被爲成廿九日　御歸殿

一是年稻留流御鉄炮長筒　思召にて繰卷臺佐々木浦右衛門へ被　仰付出來

六匁玉ゟ五拾目玉迄也此御筒は狹間筒とて至而尺長く有之に付繰出し繰込等の利用宜敷ため右臺を被　仰付也

賞孝子

一是歲松坂白粉町彫物職源七紀州海士郡加茂組小原村里正久大夫夫婦の孝行を被賞米又は白銀を賜ふ

享保十年乙巳

一三月九日御參府に付若山御發駕
　川俣通十二日松坂御城へ被爲入十三日鵜御鷹野御鉄炮等被遊十四日大口浦ゟ熱田に御渡海廿二
　日江戸御着府　宮崎家傳記參錄

賞孝子

一四月孝子紀州那賀郡宮村農夫勘四郎を賞し母子終身年々米四石を賜ふ儒官祇園餘一に命して其傳を作らしむ

將軍の寄付

一八月七日從　公儀長保寺　南龍公御靈前へ唐銅御香爐和歌　清溪公御靈前へ唐銅御燈籠二基御寄附
　御行狀草案ニハ六月六日トアレ𪜈今御奉納書ニヨル
　且長保寺ニ藏スル御奉納書左之如シ御香爐ハ江戸方廻リ御燈籠ハ大坂ニ而御出來之由トアリ

御奉納書

南龍院殿御靈前へ御香爐御香臺御寄進事候委曲丹羽式部少輔可相達候可存其趣候不備

七月廿三日

松伊賀守　忠周判
松左近將監　乘邑判
水和泉守　忠之判

湯照院

式部殿覺書

覺

一南龍院殿へ御寄進被遊候御香爐御香臺

御靈殿に差置平生用可被申候寶藏抔へ納置候儀に無之若心得違も可有之候に付右之段申渡候
様にと御老中被仰聞候
八月七日
御香爐は唐銅角形摘之足共獅子金御紋御香臺朱塗也于今長保寺御靈牌堂に安置す
一八月八日　清溪公廿一回御忌に付從　將軍家御名代丹羽式部少輔紀州へ來着御代拜相勤　淨圓院
様ゟも御香奠御備へあり
一十一月十五日大宮御鷹場へ御發駕十二月三日御歸府

享保十一年丙午　　公四十五歲

領民に父母狀を下す

一二月父母狀を紀勢御領民江下し賜ふ
南龍公萬治三年民間江下し賜ふ所の御敎諭年久敷儀にて絕えたる所も可有之との思召なり
一四月三日御歸國に付江戶御發駕　三月御暇被仰出
四月十一日熱田ゟ白子へ御着殿十二日松坂御城へ被爲入鷸御鷹野十三日曲り村雛鶴御打留夫ゟ
鷸御鷹野同日御發駕川俣通十六日若山　御着城　宮崎家舊記參錄
一五月十五日鷸御鷹野御物數多く御手に入
十月廿七日にも鷸御鷹野有之御物數多く御手に入

久姬様生

一八月四日久姬様御誕生

賞孝子

一九月十八日岩出へ被爲成御逗留之内那賀郡宮村孝行人勘四郎を　御目通に被召出御意有之銀錢十

文を賜ふ

享保十二年丁未　　公四十六歳

一二月廿一日椒へ被爲成廿三日　御歸殿

一同月廿八日小次郎樣御中屋敷御庭爲御覽瀧、丸山、森川、御茶屋へ被爲入青山御殿方御歸り

一三月九日御參府に付若山御發駕

川俣通り十二日松坂御城へ被爲入同日御鷹野十三日雨天に而右御止め被遊十四日御發駕陸通り白子御休み四日市驛御泊り廿二日江戸御着府　宮崎家傳記參錄

沖の島の牧馬

一六月十二日紀州沖の島立の馬一頭　將軍家へ初而御獻上

去年十二月松平左近將監方より御領分牧之馬被獻樣にとの事有之によつて也此以後も度々獻し玉ふ

一是年御中屋敷御庭へ西御茶屋御取建

賞孝子

一是歳松坂領曲村農清五郎之孝行を被賞親子一生米を賜ひ清五郎の急を救ひし同村一庵に白銀を賞賜せらる

享保十三年戊申　　公四十七歳

春千代樣誕生

一二月十六日春千代樣 香巖公御事 御誕生　寶鑑

南陽語叢に　享保十三申春江戸御屋敷前出火御家中働の次第水野大炊頭下知の躰江戸沙汰よろしく落音あり

御威光に火もおくれ行紀の屋形水野大炊て氣遣ひはなし

日光社參供奉

山ノ井鼎（崑崙）

後藤大石刄傷

一四月十一日　將軍家日光御社參に付爲供奉江戸御發駕
十七日御祭禮御拜見　御宮供奉畢て　御參詣　大猷公御堂幷奥院へも　御參詣廿二日　御歸府

一六月朔日御歸國に付江戸御發駕　木曾路通り十五日若山　御着城
按ニ宮崎家舊記ニハ四月北伊勢御通行トアリ誤リナルベシ

一十月十六日根へ被爲成十九日　御歸殿

一是年五拾目玉御鐵炮早込鑄筒一挺小道具共一箱に入組樣に南條小右衛門へ被　仰付出來

一是歳山井鼎著ス所ノ七經孟子考文ヲ献ス

享保十四年己酉　　　公　四　十　八　歳

一正月十九日大番士後藤角兵衛大石彦大夫口論刄傷に及ふ
角兵衛名は實濟權田惣右衛門二男にて後藤角兵衛實明遊身の養子となる此時大御番にて三百石を領せり

大屋彌一右衛門嫁に片山玄端か娘を呼迎へたりしに媒酌人は河村與右衛門に而則彌一右衛門相士なりしかは心易相番の面々をも同道して大屋へ悦ひに行たり比は享保十四年酉正月十九日の夜なり然るにその席上にて後藤角兵衛と大石彦大夫と口論を仕出し皆々扱ひかねて見えけれは酒宴半より座もしらけて一人二人つゝ密に抜て退去せし人も有けり與右衛門は唯一人いかにもしてなためんと色々說得すれとも双方聞入れす打つれ立て退出せしか町奉行町の南の片原町に出て刄傷に及はんとす與右衛門いつこ迄も扱んと從ひ來しか双方抜合せたるを見て刀を鞘なから抜出し下緒を持添て両人か中へ飛入たり此時角兵衛彦大夫等いはく我等兼ての遺恨もあれは難默止て今宵刄傷に及ふ事武運の盡る所なり貴樣には此所に御出有ては後日御難儀にも成へけ

れは早々御除去候樣といふ川村云く先刻ゟ我理を盡し諫言申入れ候とも御承諾無之終に此場に相成候事是非も無之事也是を見捨て立去は武士の道にあらす依て何處まても御邪魔をいたすと云兩人云左あらは是非に及はす貴殿の命を申請へしと云勿論覺悟の事といはせも果す一刀に切倒す與右衛門倒れ樣に大音にて家來の名を呼ひ御兩人へ明りを御目にかけよと云て息絕えたり兩人は思ふ樣に切合て角兵衛はその場にて死す彥大夫は數ヶ所深手を負なから拔身を杖に突怪我したりと云々彌一右衛門宅へ歸り來臺所にて倒れ死す家來の分は兩人刀を拔とひとしく皆々逃散たりしか與右衛門か家來はいまた小野郞也さか少しも不騷主人の遺言の通り提灯を指出し兩人か切結ふ足元を照し居たりしか事果て直樣川村か宅へかけ歸り始終の樣子を物語り與右衛門か子五郞八いまた十歲にて有けるを肩馬に乘せて其場へ馳來り敵は何處へ逃しそといひ〳〵走り廻けるとそ下人には珍ら敷者也ける扨後藤大石は斷絕し川村は五郞八へ名跡被　仰付たり

按するに角兵衛家は駿河ゟ御附人にて筋目有之を以て元文元辰年六月に至り家名御立五十石大御番役被　仰付

伴雄云此双傷の一條牧笛類叢藏觸漏起錄に記す處互に精粗あり

予兼て此物語祖母咄しけるを幼兒の頃聞覺えたりしを撮合してこゝに記しぬ亦一評に此面々は大御番一番組に而小栗源大夫の支配也その年は小栗江戸詰也しかは芦川甚五兵衛預にてその折の立合見分等芦川取扱也右の喧嘩の初大屋の席上より密に避去し面々は後〻御吟味にて御暇被下或は逼塞等被　仰付けり右の家來は能く召仕候樣にと川村五郞八へ被　仰付けれと五郞八も親跡目小錄となりて此者を養ふ事も不叶しか後に坊主衆になりしとそ其比川村か屋敷は町奉行町にて今の雜賀小彌三か家なりしとそ　　龍之御稜威

南陽語叢に云く　十九日夜四時前廣瀨町奉行町小笠原助八郞屋敷前にて云々又大石も川村も大番與頭にて同役之よし且眞鍋松月五郞右衛門も此夜約諾にて高石垣邊迄參候處一圓足進す腹中筋引步行なやみ無據途中より家來を挨拶に遣し罷歸

るには足輕く腹中も能く心神に徹して獨り不思議の思ひをなせしか翌朝に至て喧嘩の流布を聞猶々不思議に兵災をのかれ
しを怪めりと自身老後に咄せし也と云々

一二月十九日名草郡朝日出島にて御放鷹
御國初て御拳に而玄鶴被爲捉　將軍家へ献せらる

一三月九日御參府に付若山御發駕
川俣通り十三日松坂御着城同日松坂領中之庄村に而鶴一羽御打留夫ゟ鶴御鷹野十四日陸通り白
子へ被爲成廿三日江戸御着府　宮崎家舊記參錄

一五月廿五日　日光法親王を御上屋敷へ御招請
去年　將軍家日光　御社參被爲濟によつて也

舶來之象

一六月廿三日外國ゟ舶來之象於御中屋敷　御覽　將軍家ゟ　御覽有之樣にと　御諚によつて也
御家中末々まて見物被　仰付
德川十五代史に　享保十四年五月廿七日廣南ゟ出タル象ヲ大廣間ニ召テ之ヲ見ル之ヨリ先キ京都ニ召テ　天覽アリト

一八月八日　淸溪公二十五回御忌に付從　將軍家御名代して内藤丹波守紀州へ被遣於雲蓋院長保
寺　御名代相勤

仁科の仇討願

一八月廿一日江戸常詰御徒目付仁科平左衛門儀兄仁科伴五郎去る十八日　左京大夫樣御家中上田理
右衛門と討果手疵負相果理右衛門は立退候に付兄之敵討留度旨願出御暇被下
仁科久五郎長男專助も叔父之敵討留度旨書置致し立退く

長義の小

一閏九月十五日從　大納言樣（家重公惇信公御事）長義御脇差御拜領

刀拜領

長光御刀長義御脇差　南龍公御指習之節　神君より被進　御家に御代々有之處　長福様家重公御袴着之節　有德公より被進御所持之處右御道具は別而御由緒有之に付此内　直松様へ御讓可然との　將軍家思召にて本文之如く御拜領駿河以來之御道具共先年　御城炎燒之節燒失に付長光御刀は　將軍家に被留置よし

刺田彥社領朱印

一十月朔日刺田彥社領御朱印被下置　神野嘉功筆記

刺田彥神主岡本民部少輔　公儀より被爲　召候に付參府之處本日於　御城御老中列座水野和泉守ゟ左之御朱印頂戴　此代地ハ勢州渡會郡之内ニテ被進

刺田比古社領紀伊國名草郡田尻村之內貳百石事今度寄附之訖全收納永不可有相違者可抽國家安泰之悃祈之狀如件

享保十四年九月廿八日　御朱印

神主

右に付御禮之儀伺之上手助三掛ッ、　兩御所様へ献上御白書院にて御目見被　仰付年頭爲御禮五年に一度三月中參府御禮可申上献上物之儀は手助三掛ッ、兩御丸へ可差出旨被　仰渡以來五年目每參府　御目見時服貳ッ拜領繼續す

一十月十七日大宮御鷹場へ被爲成十一月十八日御歸府

一十月廿三日北の垣內山にて渡り七尺五寸之大猪二疋御打留十一月十八日　御歸府

孝三郎様誕生

一十二月廿七日　孝三郎様御誕生　寶鑑

一同月廿九日　御鷹場改る　同上

賞孝子

一是歳紀州那賀郡尾崎村農長左衛門娘幾久滿津の孝行を賞せられ父子一生米若干を賜ふ

享保十五年庚戌　　公四十九歳

青山御殿燒失

一正月六日青山御殿燒失

丑下刻比御臺所ゟ出火御座之間新局等は殘り其外燒失　常陸介樣御殿も不殘燒失

一南陽語叢に曰く 享保年間にや江戸御中屋敷御守殿御燒失之節殿樣には御庭に御牀几に懸らせられ奥表の御下知ありいかゝ紛れけむ表役大奥に入て殊之外なる働有御大切品々不殘取出しぬ後日御廣敷より何某かゝる働にて御大切之品々無故障由を申上る依之何某に被　仰聞には先達而之御燒失非常之儀とは乍申御格法は平日御定之通可相守儀勿論に候處其節參間敷場所へ入込候段不屆に被思召依之逼塞被　仰付之旨被仰渡之其後御免有之無程御役替有之候御役替之被仰渡通例之通に候得共先罰後賞の御取扱人擧て稱しあへり

一四月三日御歸國に付江戸御發駕

四月十一日熱田ゟ桑名へ御渡海同日白子御殿に被爲入十二日松坂　御着城鷂御鷹野可被遊御樣子に而前以御場用意之處　水戸樣御逝去に付御止めに相成十三日　御發駕川俣通り十六日若山

御着城　宮崎家舊記參錄

一七月廿四日岩出に被爲成廿八日　御歸殿

一八月廿七日園部岩山御笛山御放鷹御物數御手に入る

武內宿禰誕生の井

一是年武內宿禰誕生之井舊跡に御建碑

名草郡安原之庄柏原村之內に武內宿禰誕之舊跡あり其傍井あるにより石碑御建立武內宿禰誕生之井と銘す　詳には社寺之部に記す

誕生井建碑之記

紀伊國、阿備柏原者、往昔武内大臣誕生之地也、事載在日本書記景行帝卷焉、大臣者、人皇第八世孝元天皇之後也、父曰屋主男武雄心命、母山下影媛、是紀伊國造第六世紀直祖免道彦之女也、今時、當國名草郡安原莊、有柏原村、（當時屬松原村）此地有古井之存焉、土俗相傳、此處即武内之舊宅、而大臣降誕之時、浴此井水、世人不知其故、享保十五年庚戌、　國君源公、歎遺址之絕、乃命有司、浚井砥石、設石韓以避汚穢禁闌入、因茲人僉汲之、以爲浴兒之水、盖慕武内之壽考也、嗚呼繼絕興廢、國君之志、實可敬已、　圓融院、天元年中、國造第三十八世奉世無男子、故子養行義讓國造職、行義則武内二十一世之後、而予家三十三世之祖也、是故予亦聞之以喜焉、因記事之始終、以與八幡宮祠官芝崎氏云、

享保十六年辛亥二月

紀伊國造右京大夫從五位下　紀朝臣俊範識

有レ人來曰、紀伊國名草郡安原者　武内大臣之遺址、即日本紀所レ載阿備柏原是也、今竹林中存二舊井一者傳曰　大臣降誕日所レ浴之井也、距レ之數百步而有二　八幡神祠一其社司某、兼二護此井一不レ闕二祀奠一乃并祭也、　國主賢公、志在レ興レ廢、茲歲治レ井砥レ石、以甃焉、以韓焉、禁二穢物一攘二不祥一出二敬レ神之餘一又收而慕之、澤廣及二民庶一、皆得下洗レ兒祈中遐福上者　神之聽レ之萬壽所レ酬必無レ疆也、或請下以三祐濤在二大臣之裔一記二此事一附中彼社司上、於呼日新之功、豈レ待二湯之盤一乎、今在二井渫不レ碍レ

汗、故喜ニ此擧ヿ、欽題ニ一語ヿ、以添ニ贊祝ニ云

享保辛亥冬十月　　石清水祠官大僧都　　祐　清　識

紀之名艸郡、安原地有　武內大臣誕浴水井之跡ヿ、頃就修ㇾ葺治ㇾ韓、略加ニ莊飾ヿ、以ニ井祭之誠ヿ、且渫ニ衆物之穢ヿ、可ㇾ謂ㇾ愨矣、尋有下由ニ予之處ニ於其裔ㇾ遠來告、而請中一言以記上ㇾ興ㇾ廢之嘉ヿ者上、遂應ニ其需ニ云、

紀姓大臣生ニ紀伊ヿ、地餘ニ浴井ニ壽ニ嬰兒ヿ、昭々德澤愧ニ遐裔ヿ、聊薦ニ蕪辭ニ充ニ永思ニ

享保辛亥仲冬之望　　石清水別當權僧正　　久　清　拜　書

一是歳紀州那賀郡山崎組中島村農太左衛門夫婦の孝行を被賞白銀を賜ふ

享保十六年辛亥　　公　五　十　歳

一正月十五日五十之賀御祝

紙銭通用

一二月朔日御城下金銀遣、停止、諸色紙銭に而通用、被　仰出

此儀先達而　公儀へ御達之上被　仰出

一二月廿八日御參府に付若山御發駕

三月朔日御鷹野なから松坂御入城二日鷂御鷹野御鐵炮等被遊同日大口浦ゟ熱田江御渡海十一日

伊藤才藏
豐松様生
九十間馬場取建
賞孝子
田方虫害
幕府より拜借金

江戸御着府　宮崎家舊記參錄

一是春伊藤才藏儒官に被　召出　傳別ニアリ

一九月十日　豐松様御誕生　於紀州　寶鑑

一九月廿八日小倉金谷山御猪狩別而多御物數アリ　猪鹿合百五十三疋

按ニ小倉金谷ハ紀州那賀郡ニアリ本年御在府ナレハ蓋シ他年之誤ナランカ暫ク原本ノマヽ此ニ揭ク

一十月十日大宮御鷹場へ被爲入廿八日　御歸府

廿三日上小村田山ニ而渡リ七尺六寸ノ大猪一疋御打留アリ

一是年赤坂御中屋敷御庭へ九十間之馬場御取建

一是歲若山住吉町半兵衛女佐や名艸郡栗栖村醫田中南仙娘奈つの孝行を賞せられ金若干を賜ふ

享保十七年壬子　　公五十一歲

一四月二日御歸國に付江戸御發駕

十日熱田ゟ大口浦へ御渡海松坂城へ被爲入十一日鶉御鷹野御鐵炮等被遊十二日御發駕川俣通十五日若山　御着城　宮崎家舊記參錄

一七月廿五日岩出に被爲成廿七日　御歸城

一十月十二日田方虫害　公儀に御達

紀勢御領分之內田高三拾壹万五千五百拾石程損亡ニ付御達有之十二月二日從　公儀御金御拜借

德川十五代史享保十七年九月ノ條ニ

廿八日令

一西國四國中國筋作毛蝗蟲付損毛ノ段追々相聞候常躰ノ事迄ハ不及御沙汰儀候火災又ハ損毛等之樣子次第品ニヨリ參勤等モ御用捨モ可有之候得共一同之事故左樣之儀モ難被仰出儀候然ㇾ共此度格別之事付テ當所務半物成以上不足之分ヘハ拜借金可被仰付候御料所モ同前之事ニテ夫食等御入用モ多ク候間被思召之樣ニハ有之間敷候得共拜借金可被仰付候物成之儀付テハ杉岡佐渡守細田丹波守樣子承屆候上拜借金相渡ニテ可有之候

一金子渡方

一万石ゟ一万九千石迄　金貳千両
二万石ゟ三万九千石迄　金參千両　四万石ゟ四万九千石迄　金四千両
五万石ゟ六万九千石迄　金五千両　七万石ゟ九万九千石迄　金七千両
十万石ゟ十四万九千石迄　金壹万両　十五万石ゟ十九万九千石迄　金壹万貳千両
廿万石ゟ廿九万九千石迄　金壹万五千両　三十万石以上　金貳万両

右之通拜借金可被仰付候金子之儀ハ於大坂可相渡候上納之儀ハ來丑年ハ被成御用捨候間來ル寅年ゟ五年賦可爲上納候以上

此前後ニ廻米救恤ノ方法等數通ノ令アリテ實ニ未曾有ノ凶荒ト察セラル十八年正月ノ條ニ此年西南國々ニテ餓死スル者九十六万九千九百ト云トアリ

追記

享保十七壬子の歳西海道の疫癘と飢饉に豊前小倉の内男女七万人の疫餓死あり肥前佐賀の内男女十二万余口の疫餓死あり又筑前國内凡三十六万七千八百余口の中男女疫餓の死人九万六千七百二十余口と記せるとかや

同十八年癸丑の夏六月比より秋の半に至り日本國中一統に疫病流行し大阪三鄕の市内にしてさへ風をわづらふ者凡三十三万七千四百十五人と點撿せしとかや其時分の米價一俵百十四匁の騰踴なりしと云へり　右一話一言二十五卷

一十二月十九日朝日出島ゟ被爲成御放鷹御拳に而玄鶴一羽被爲捉

領分損亡

紙錢停止

富千代様

窮民救恤

賞孝子

一是年　春千代様孝三郎様御手馴之爲佐々木浦右衞門ゑ被　仰付長一尺余之御鐵炮木に而出來
金具はかねにていたし其外こまゝゝ致したる所は金泥金箔にてあしらい筒は錆色に塗臺は朴の
木をしこ梯に似たる様に色を付る是は筒名所等御幼年ゟ御覽なさる爲の思召也
一同年御手廻に而御隱密之御鐵炮二十挺右同人へ被　仰付出來玉目三匁五分是は利用能筒に而素人
之手にも合ふ様之御好也

享保十八年癸丑　公五十二歳

一二月十二日御領分損亡に付當年ゟ三ヶ年之間献上物御減少之品　分儀ゟ被　仰出
一二月廿七日　御參府に付若山御發駕三月十一日江戸御着府
三月二日北伊勢御通行被遊　宮崎家舊記
一六月八日先達而被　仰出たる紙錢通用之儀停止被　仰付
一十二月四日　富千代様御誕生　寶鑑
一是歳紀勢御領分困窮之民ゑ米穀三千七百四拾石余を賜ふ
一是歳紀州有田郡上津木村の農太郎大夫の女こなの孝行を被賞金若干を賜ふ

享保十九年甲寅　公五十三歳

一三月廿七日御歸國に付江戸御發駕四月十一日若山　御着城
宮崎家舊記には　此時美濃路御越被遊との旨記載あり

按に朝比奈惣左衞門寛泰（四代目）御迎に罷出三井孫十郎を御年寄に御取立普請料四千金被下候は何事に候哉爰許去年之様

子在々には餓死之者共多く是には御心を不被爲寄孫十郎一分之御撫育は如何に御座候哉拙者へ御暇可被下と極諫申上候と
は蓋し此時なるべし委しくは惣右衛門傳にしるす同人此年六月隱居せり

一十二月十六日西ノ庄村山へ御猪狩山ノ下と申所に而渡り六尺八寸八人持之大猪一疋御打留あり
此大猪毎に北山筋廻り申處足留不申に付右猪見込次第早速榮谷村山之内篝松北島堤湊牛町三所
に而吹貝に而相圖致へしと兼而被仰付有に付今日右相圖に而即時に被爲成御打留有る也

一是年川口常燈家地形高く築上燈籠堂も大く被　仰付
享保五子年所替被　仰付けれ共沖方之見え又惡敷成に付御吟味有之右之通り也

享保二十年乙卯　　公五十四歳

一正月十八日朝日出島へ御放鷹御拳に而玄鶴一羽被爲捉

一二月廿三日名草郡南出島へ御放鷹御拳に而玄鶴一羽被爲捉

一同月廿七日御參府に付若山御發駕三月十一日江戸御着府　宮崎家舊記ニハ此節川俣通御越トノ事

一三月廿一日　櫻町天皇御受禪御年十六諱ハ昭仁ト申奉ル　中御門天皇ノ第一子ナリ
十五代史ニ云ク和學論ト云書ニ　櫻町天皇ノ勅諭ニ東照宮ノ下ヲ鎭メ上ヲ敬スルノ勳功永ク天下ニ忘ルベカラストアリ又
關東下向ノ親王方大樹ヘノ應對イカント御伺ヒアリシニ　朕ヲ親ルガ如クシテ可也ト勅諚アリトイヘリト云々

一四月廿三日　上使酒井讃岐守を以て　利根姫樣を　將軍家御養女被　仰出今日御城に御引移被遊
爲御迎内藤越前守打越左大夫其外御供之面々被來右に付　兩御丸に　御登城

一五月七日天下御一統之干支に被爲當打續太平之御祝有之右に付十一日御能御見物として　御登城

朝鮮人參甲州甘草移植

一同日於若山は　和歌御宮へ御代拜安藤帯刀相勤御太刀一腰黄金一枚御進献被遊
此御代參之儀ハ當年若山御發駕前同人へ御直ニ被　仰付有之也
一九月二日從　公儀朝鮮人參苗甲州甘艸御拜領紀州へ植させらる
一是年西名草郡内原村領に石碑御建立

銘

是より南に濱の宮
天照大神伊勢へ御鎮座の前
三年御座ありし所

右之通此石は田の浦磯に有し所の板石也被爲命て碑の銘鳥居源之丞撰文字は本間儀右衛門書す

元文元年丙辰　四月廿八日改元　　公五十五歳

一三月廿七日御歸國に付江戸御發駕
甲州路四月二日身延山久遠寺翌三日同所七面山四日大野本遠寺へ御參詣夫ゟ東海道十一日松坂御城へ被爲入十二日御發駕川俣通り十六日若山御着城
一宮崎家舊記ニ　四月十日熱田御渡海同日松坂御着城十二日同所繼松寺三井則右衛門畑屋敷へ被爲入御鷹野無之翌十三日御發駕ト云々

鑄錢

一八月朔日若山に而鑄錢被　仰付
熊野山ゟ出る所之銅を以鑄錢仕度段願之者有之に付　公儀ゟ御達之上被　仰付候也
一九月廿一日　日前宮華表御再建

忠姫樣生
鐵炮出來
大崎沖鯨
藥　草

一十二月十四日　忠姫樣御誕生　於江戸

一是年鐵炮指南家へ被　仰付御鐵炮數種出來

拾匁玉之筒に而打出す鯨矢といふを佐々木浦右衛門へ被　仰付出來又同人へ御預の拾匁玉之御筒二挺火蓋直開き火狹に火繩留之金具被　仰付　直開きは火蓋を切に不及引金にて開くからくり也

一三貫五百目からくり玉本長玉ともいふ町打御筒一挺且百目玉壹尺二寸御筒三挺是は有德公東城に御取寄被遊し節之御筒たり是又同人に被　仰付出來

一先年南條小右衛門に被　仰付所之五拾目玉御鐵炮同樣之御筒一挺小道具箱とも被　仰付出來

元文二年丁巳　　　　公　五　十　六　歲

一正月十九日朝日出島ゟ御放鷹御拳に而玄鶴一羽被爲捉

一同月廿七日於海士郡大崎沖兒鯨四尋御留させ御家中へも分ち賜る十人組迄被下と云

一二月廿日左之藥草五種紀州へ遣す樣にと從　將軍家被　仰出藥草到來に付所々へ植させらる

駿府御藥園に有之內　草菓　草豆　[illegible]使君子　鳥藥　和木香

酒井秀齋忠雄家譜に　元文二巳年月日不知　公儀小笠原石見守殿方可罷出旨申來候に付参伺候上罷越候處此度朝鮮人參於紀州作候樣にとの御事之旨被　仰渡人參種御渡被成候に付持歸入御覽申候於御國所々之御藥園被　仰付候其後唐船持渡之御藥草段々從　公儀御差越被遊植付申候生立候樣子申上之旨石見守殿方被申越候に付追々樣子申上候處右書付入　上覽候旨御同人方申來候云々

按するに酒井秀齋は此時二拾石三人扶持御針醫格御庭方勤にて植物御用掛りあり熊野蜂蜜飼育開始を被命たるも此先祖なり

一二月廿八日御參府に付若山御發駕三月十一日江戸御着府　三月二日北伊勢御通行　宮崎家舊記

祇園餘一

一四月三日和歌　御宮木の華表を石の華表に御再建　二月ゟ御普請始め銘は祇園餘一書く

一七月朔日　竹千代様　後明公御事へ初而　御目見翌日御禮　御登城　寶鑑

清溪公三十三回忌

一八月八日　清溪公三十三回御忌に付從　將軍家　御牌前に花瓶二瓶御奉納　御名代して松平伊賀守紀州に被來

一閏十一月十五日大宮御鷹場へ御發駕廿八日　御歸府

一刀流劍術

一十二月十九日此度一刀流御劍術御究被遊たるに付井藤平三郎入來
御饗應之上即日黄金三枚縮緬五卷鰹節一箱坂西又六を御使として被遣之

一乞言私記に曰く　大慧院様御代一刀流行はれ貫木差無反の刀白茶柄紀州茶是也と云々

元文三年戊午　　公五十七歳

一四月五日御歸國に付江戸御發駕十八日若山　御着城　宮崎家舊記に熱田ゟ美濃路御越被遊と云々

一此節駿州富士川滿水に而船薄く馬越出來難由申上るに付早速御差圖あり船へ疊敷かせ可申旨被
仰出其通にいたす處船も無難に而御馬も無故障相渡る

圭姫様生

一五月廿一日　圭姫様御誕生

賞孝子

一七月十四日孝行人を御目通へ召出し銀錢を賜る
若山新堀孝行人十右衛門といふを御寺方へ御參詣之節　御目通へ出す様にとの御事にて母子共罷出銀錢十文ツヽ賜ふ　十右衛門は新堀與次郎町の小商也其孝行を賞せられ本年母子生涯米若干を賜りし也

一八月廿五日山州伏見御香宮華表大破に付白銀貳拾枚御寄付

一條關白へ山藍進呈

鐵炮出來

尾張宗春卿蟄居

和歌浦沖の鯨

和佐才右衛門

一同月廿九日熊野產之山藍二籠を一條關白殿へ被進
於　禁裏大甞會行はる其宮人衣服に山藍といふ草を摺用らる此草熊野に有之段一條關白殿被及聞所望之由申來に付被進其草小忌に被摺御用に相立候由右餘分諸司小忌一領幷心葉日蔭臺一通
關白殿ゟ來る　以上御行狀案

一德川十五代史元文三年ノ條ニ　十一月十九日京ニテ大甞會再興アリコハ貞享四年ニ一タヒ行ハレシモ其後又五十一年中絕セシヲ關東ヨリ言上再興アリシ也因テ其經費ヲ上ルトアリ

一是年去々辰年南條小右衛門へ被　仰付處之五拾目玉御鐵炮同樣之御筒弐挺小道具箱とも被　仰付出來
此御筒は　公之思召にて享保十三申年ゟ今年まで都合四挺にて四箱出來箱に負繩を付け一夫一箱を負ふ馬に付る時は五箱を以て一駄に可致との御事也

元文四年己未　　公五十八歲

一正月十二日尾張中納言宗春卿ヲ麴町邸ニ蟄居セシム庶流松平但馬守義淳ヲシテ宗家ヲ繼カシム
年比ノ行宜シカラズ政事正シカラズ領民禁苦スルヲ以テ也後尾張國ニ歸リテ愼ミ居リ明和元年十月八日六十九歲ニテ薨ス　十五代史

一二月十二日於和歌浦沖兒鯨六尋御留させ御家中へも分ち賜る

一二月廿六日和佐大八惣領才右衛門射藝有之者に付被召出七人扶持被下置
才右衛門始豐之丞と稱し寶永六丑年三月父大八御咎被　仰付田邊へ御預之節一類へ御預け在鄕へ被遣有之處本日件之如く被　召出たり

一同月廿七日御參府に付若山御發駕
川俣通り三月朔日松坂　御着城二日御發駕十二日江戸御着府
一宮崎家舊記ニ　大口浦ゟ御渡海之處日和不宜四日陸通り白子ゟ被爲成ト云々
一五月　竹千代樣へ御對顔御兜御拜見　寳鑑

悦姫樣生

一六月九日　悦姫樣御誕生　後丹羽若狹守高庸室　達姫ト御改
一十一月廿五日　御登城　利根姫君樣へ御對顔
利根姫樣　將軍家御養女被　仰出松平陸奥守へ御入輿以後御對面無之間　御城御逗留之内御對面被成候やうにと昨日從　將軍家被　仰進に依て也
一是年御中屋敷御庭森川御茶屋續々御數寄屋御取建　杜若御流上御腰掛も御取建なり

賞孝子

一是歲紀州名草郡紀三井寺村安右衛門娘きく同郡中島村の婦仙勢州松坂の鍛冶職傳兵衛の孝行を賞せられ米或は金員を賜ふ

元文五年庚申　公五十九歲

一四月十五日御歸國に付江戸御發駕
廿三日松坂御入城廿五日御發駕廿八日若山　御着城
一宮崎家舊記ニ　廿三日熱田ヨリ御渡海同日松坂御着城廿四日御逗留三井則右衛門畑屋敷樣へ被爲入鶴御鷹野之御場用意仕候得共不被遊廿五日御發駕川俣通御歸城ト云々

吹上八景

一是年冷泉大納言爲久卿ゟ紀州吹上八景の和歌指上らる
御賴により詠歌八首指上らる御近侍其外詩歌心得たる者共ゟ仰付られ和歌都合貳百七十四首

詩四拾八首成就す右八景は
雑賀晴嵐　妹島夕照　吹上濱秋月　飽浦歸帆
名草山晩鐘　紀湊落雁　形見浦夜雨　藤白暮雪
一是歳御上屋御守殿初て御普請　實鑑
一是年御藥種畑筋違之御腰掛御取建あり
翌年御同所江之御通ひ板橋出來す
寛保元年辛酉　　公六十歳
一正月十二日朝日出島へ御放鷹御拳にて玄鶴一羽被爲捉
一同月十五日六十之賀御祝儀
一二月廿七日御參府に付若山御發駕三月十一日江戸御着府　宮崎家舊記ニ上海道美濃路通御通行トアリ

荘右衛門の直訴

御發駕の日御馬上にて田井の瀨河原を通御の際勢州飯高郡大足村里正潤田莊右衛門直訴して願書を奉る　公左右をして其書を奉らしむ
右は大足村と同郡西野村と山論の事あり西野村は大夫三浦長門守の采邑なれは其郡宰主の威權を弄して頗る横逆を逞し以て村民を苦しむ依て莊右衛門此擧に及へり莊右衛門は是年六月の比ゟ六ヶ年の間數回和歌山へ召喚せられ遂に西野村の者及ひ役人等と對決糺問を受け延享三年十二月六日に至り裁決大足村の勝訴に歸し村民永々御仁徳に浴せりといふ事は俊傑傳同人の傳に詳也　宮崎家舊記に此御參府は上海道美濃路通御と有
一六月朔日御參府後初て御對顔
一是年拾匁玉百匁玉御鐵炮數玉佐々木浦右衛門へ被　仰付出來
百目玉數玉之鑄形はいつれの御筒にも合可申樣之鑄形也

一御薬種畠へ之御通ひ板橋出來

寛保二年壬戌　公六十一歳

一三月廿八日御歸國に付江戸御發駕四月十二日若山　御着城

宮崎家舊記ニ上海道美濃路通リ御通行トアリ

一是年九百目余之玉目御鐵炮一挺佐々木浦右衛門へ被　仰付出來

右御筒之車臺且數玉も出來

一御召小早御延氣御屋形御好に而出來御直鎗も二本御飾被　仰付

寛保三年癸亥　公六十二歳

一二月廿七日御參府に付若山御發駕三月十一日江戸御着府

宮崎家舊記ニ上海道美濃路通行御通行トアリ

載姫様生

一三月十一日　載姫様御誕生　後京極二品公仁親王御息所

一五月朔日御對顔　寶鑑

紀州砂糖

一七月十三日紀州出來之白砂糖初而　將軍家へ御献上

右砂糖初而献せられし處和國に而砂糖出來之儀外に類なきのよしにて　將軍家御賞翫之上翌子年献上せらるゝ砂糖　日光　御宮に御進献あらせられしとの御事也此以後献上年々恒例となる

高瀬希朴

一是歳高瀬希朴著ス所ノ大明律詳解成テ之ヲ献ス

賞孝子

一是年紀州那賀郡別所村の農甚太郎夫婦の孝行を被賞金若干を賜ふ

悦姫様生

熊野人參

將軍代替

延享元年甲子　　公六十三歳

一二月四日　悦姫様御誕生　後松平讃岐守様御室

一三月廿六日御歸國に付江戸御發駕伊勢　御參宮　寶鑑

四月六日松坂御入城八日田丸城へ被爲入九日伊勢　御參宮朝熊へ御立寄同日田丸城へ被爲入十日御發駕川俣通り十三日若山　御着城　宮崎家舊記ニ六日熱田ゟ大口浦ヘ御渡海同日松坂御着七日ゟ御齋戒ニ而九日御參宮トアリ

一七月廿七日岩出へ被爲成翌廿八日　御歸殿

一是年御藥種畑へ御通之板橋　寛保元酉年被仰付處　御かけ直しあり

右橋渡り初尾池甚太郎へ被　仰付八月朔日渡り初あり

一湊川口へ見越木片側へ三本ツヽ兩側へ六本御取建させなさる

一十月廿日玄猪御祝頭役迄御手自平士は御臺に而餅直に取頂戴之

右寶鑑ニ據ル　按ニ嘉定玄猪ハ年々恒例ナルヘシ寶鑑此年ノミ特書セシハ何ソ異例之處アリシニヤ暫ク其儘ヲ記ス

延享二年乙丑　　公六十四歳

一二月十五日御參府に付若山御發駕三月朔日江戸御着府

宮崎家舊記ニ延享年中以來御代々様御參暇勢州川俣通リ御往來御鷹野等被遊候舊記見エ不申トアリ

一八月廿八日熊野人參一箱初て　將軍家へ御獻上

一九月朔日　公儀御代替被　仰出

公方様 有徳公 御隱居　右大將様 家重公 惇信廟 御相續

権大納言
従二位
利根姫逝
田安一橋両卿采邑
雅之進様
誕生

翌二日為御祝儀両御丸にて御登　城

十一月二日将軍　宣下

一十月十五日権大納言に被任　寶鑑

一同月十九日　御退隠之御祝儀トシテ　前将軍家ゟ　上使松平能登守ヲ以御刀 来國俊代千五百貫 御拝領

一同月廿三日於西湖之間従二位御位階被　仰出　寶鑑

一閏十二月十六日利根姫君様御逝去　松平陸奥守室雲松院殿

延享三年丙寅　公六十五歳

一三月廿七日御帰國に付江戸御發駕四月十一日若山　御着城

一九月十五日田安一橋両卿に初て領地各十万石を賜ふ　十五代史

一十一月十五日　雅之進様御誕生　御六男　後内藤因幡守貞幹

一十二月九日南出島にて御放鷹御拳に而玄鶴一羽被為捉

一同月十二日鷹御物数御手に入此前後度々御出有之品々御手に入

一同月廿三日名草郡吉禮にて御放鷹御拳にて玄鶴一羽被為捉

一同月廿五日若山御下屋敷御舞臺に於て初て九十賀御能被　仰付

此文句は御好に而太田道知作之章并仕舞附は高村三郎右衛門にて被　仰付

按に九十賀誤りならんか暫く原書のまゝにす

一同月廿六日椒ゟ日高郡入山村へ被為成廿七日椒へ被為入廿八日　御帰殿

紀州織

桃園天皇御受禪

宗直卿御不例

賞孝子

一是年白木御召鯨船御延氣御屋形御障子入幷御疊共御好に而出來

延享四年丁卯　　公　六　十　六　歳

一正月十二日南出島朝日出島へ御放鷹両所にて玄鶴一羽ツヽ御拳に而被爲捉

一二月廿七日御參府に付若山御發駕廿九日山州八幡へ御參詣三月十一日江戶御着府

一五月二日紀州に而織出す所之龜綾縞　公方様　大御所様へ御献上以來折々御献上有り

一同日　桃園天皇御受禪　天皇諱遐仁　櫻町帝ノ第一皇子御歳七歳　十五代史

一秋ゟ御不例

九月五日ゟ　公儀御醫師武田叔安數原通玄村田長庵下妻玄忠田安御醫師吉田玄卓へ段々御藥轉せらる

九月廿三日從　將軍家御重一組生干肴從　大御所様モ同斷御拜領

十月朔日從　將軍家御附人大岡土佐守被　仰付　翌年正月十五日ゟ御引かせなさる

十一月三日御内々村田長庵御使ニテ上黨人參御拜領

同月廿九日御所勞爲御尋從　公方様　上使阿部志摩守を以て檜御重一組　大御所様より　上使巨勢伊豆守を以て味噌漬鯛從　大納言様　上使水野丹波守を以生干肴御拜領　此已前にも上使を以右同斷之御儀に付御拜領ものあり

一是年紀州奥熊野神上村の農甚右衛門弟甚七の孝行を被賞甚右衛門母子へ米若干甚七へは銀子を賜ふ

寛延元年戊辰　公六十七歳

一正月十九日御所労御快御床揚之御祝儀被為整　公方様ゟ　上使松平駿河守　大御所様ゟ　上使巨勢伊豆守従　大納言様　上使水野丹波守を以て為御祝儀生鯛一折ツヽ御拝領

一四月十五日御病後長途之御旅行に付紀州へ之御暇被　仰出間敷候條緩々御養生被成候様　御参詣之節御豫参に不及月次御禮之節も押て御登　城不為成様御病後御歩行御不自由可有之被　思召間御登城之節　御玄関前迄御乗輿被成様にと従　将軍家被　仰出之

一五月十一日大岡土佐守（御所労中御附人ニ被成）に黄金三枚紗綾五巻生肴一折御使を以被遣之

朝鮮使

一六月四日朝鮮三使ゟ之使者上々官朴僉知玄僉知上判事玄主簿参上左之通進呈

人参　一觔　虎皮　二張　白照布　五匹　黄毛筆　廿柄

眞墨　二十笏　芙蓉香　三十枚　鷹子　一連

一同月七日従　公方様　上使久世長門守を以朝鮮鷹二居御拝領

按ルニ朝鮮國正使ハ洪啓禧、副使南泰耆、従事官曹命采ト云是月朔日登營引見アリ

一閏十月十八日大岡土佐守を御招請為相伴兼康榮庵参上

御全快為御祝儀御招請是日御茶御手前にて可被遣處御所労後に付為御名代玄蕃頭様御茶御立なさる

琉球使

一十二月廿二日琉球中山王ゟ之正使具志川王子副使與那原親方参上左之通進呈ス

大官香　十把　芭蕉布　廿端　嶋芭蕉布　廿端

紗綾　十卷　沉金籠飯　一對　泡盛酒　二壺

具志川王子ゟ

官香　十把　太平布　十疋　芭蕉布　十端

按スルニ是月十五日琉球使登營引見アリ

賞孝子

一是歲若山岡領町喜兵衛の孝行を被賞母子一生の間米若干を賜ふ

寛延二年己巳　公　六十八歲

一三月四日　公家衆御能御登　城之儀御用捨被　仰出　寶鑑

一三月十一日御小座敷へ御移　寶鑑

一同月廿九日　公方様御參詣之節御豫參之儀は向後御用捨被成旨從　將軍家被　仰出

一是年御中屋敷御庭内へ稲荷社御建立

賞孝子

一是歲紀州那賀郡粉川村のなつ女之孝行を被賞金若干を賜ふ

寛延三年庚午　公　六十九歲

一三月廿八日御歸國に付江戸御發駕木曾路通四月廿二日若山　御着城

一是年御中屋敷御庭御池之端へ御腰掛御取建走井御腰掛も出來

寶暦元年辛未　公　七十歲

七十之賀

一正月十八日七十之賀御祝儀被爲整

將軍家より御内々に而色純子十卷粕漬鯛一桶　大御所様より色孺珍五端鰑一箱御拜領

儉約嚴命

一二月十六日御參府に付若山御發駕三月十一日江戸御着府

一三月廿五日此節甚御勝手御差支に付此度嚴敷御儉約被　仰出
　役々御締方掛被　仰付

紅葉之賀

一四月廿七日御中屋敷御舞臺に於て初而紅葉之賀吹上八景之御能被　仰付
　此文句は御好に而太田道知作之章幷仕舞付は高村三郎右衛門に被　仰付也

一按スルニ太田道知は寛延三午年五月當分御庭方勤銀十枚三人扶持被下後本道御醫師格御加增三拾石に被命此年三月廿二日
紅葉賀吹上八景之謡著作被　仰付差上たる處趣向宜敷出來に付　御當家御謡に可被遊旨　御意に而被爲　召たる紙子御羽
織御手自拜領以後御日通殿中紙子羽織着用勝手に可仕旨　御意を蒙りしと云　詳には方伎傳に記す

吉宗公薨去

一六月廿日　大御所樣薨去　有德公
　五月十五日御不例に付爲御伺西丸へ御登　城其後も度々御登　城御伺あり本日御所勞御指重に
　付即刻御登　城

一七月十日　上使松平右近將監を以
　有德院樣御遺物として御小脇差一腰御拜領

寶曆二年壬申　　　　公七十一歲

中屋敷燒失

一正月五日御中屋敷燒失　御上屋敷に御移
　已刻比御臺所ヨリ出火奥表御內證共殿中不殘燒失

公儀より借金

一同月六日　公儀より金貳万両御拜領

一二月九日青山御殿に御引移　寶鑑

伏見貞建親王御招請

一三月九日　伏見貞建親王を　御上屋敷へ御招請

先達而　將軍家御代替ニ付江戸へ御下向ニヨッテ也

一同月廿九日御歸國に付江戸御發駕四月十三日若山　御着城

一同月廿一日東叡山　有德公御靈前へ銅御燈籠二基御獻備

養珠院百回忌

一八月廿一日　養珠院樣百回御忌に付御參詣養珠寺淸水御手自被爲汲御茶御備被遊　甲州大野本遠寺記錄に右御法會に付御署名之諷誦文一章を御捧奠

一十一月三日御中屋敷御殿上棟　御手斧初は四月十五日也

寶曆三年癸酉　公七十二歲

一正月廿七日朝日出島名草郡北出嶋にて御放鷹兩所に而玄鶴一羽づゝ御拳に而被爲捉

一二月廿七日御參府に付若山御發駕三月十一日江戸御着府直に御中屋敷へ御移徙　寶鑑

一九月四日御家御相續後初而　元御家へ被爲入此後も御出有り

一同月十八日近年御病後御高年にも被爲及長途之御旅行御障にも可成儀に付先つ來年は御滯府之儀御願之通なさる樣にと從　公儀被　仰出

一十一月十二日貞享改曆後差誤アルニヨリ更ニ寶曆甲戌曆ヲ頒布ノ旨京ニテ　宣下アリ來年ヨリ之ヲ可用旨　公儀ヨリ被　仰出　十五代史

寶曆四年甲戌　公七十三歲

一閏二月十日より御所勞に付公邊御醫師武田長春院數原通玄村田長庵被召呼長春院藥差上

久保田源太

一四月廿一日久保田源太於深川三十三間堂半堂矢數惣一したるを賞せられ新規被　召出御切米八拾石を賜ひ新御番命せらる

源太本月十九日半堂通矢をなし惣矢數一万四千三百二十本之内通矢一万千六百三十八本にて半堂惣一となる時に十二歳也事は同人の傳に詳なり

吹上八景御能

一五月廿八日御中屋敷御舞臺に於て初て吹上八景御能被　仰付

此文句は御好に而太田道知作之章は高村三郎右衛門仕舞付は同苗卿大夫え被　仰付

一六月朔日御病後之儀に付五節句月次等御登城御不快之節は御見合被成可然との御事從　將軍家被　仰出

賞孝子

一是歲紀州牟婁郡小山浦の農勘七老母へ孝行により甞て母子一生米拾俵を賜りしか母既に死せしを以て賜ふ處の米を官に納めんと請願す彌其誠直を賞せられ舊に依て之を下し賜り坂井周道をして其事を記せしむ

寶曆五年乙亥　　公七十四歲

一四月五日　日光法親王御中屋敷へ御招請

御庭之景色　御覽被遊度との御事によつて也

一七月十一日御願に而來子年御滯府被　仰出

千首御詠歌

一十一月千首御詠歌成就

春夏秋冬戀雜組題御替へ歌共二千首を遊され冷泉爲村卿の添削を御請ひ一千首に御撰定也事は遠

紹夫人　大慧公御女忠姫君松平播摩守樣へ嫁し玉ふ　の御添書によつて詳なり

曰く

此一帖は

權大納言みなもとの宗直卿の御ひとりの御千首なり此君のおほひ徳おのこゝたりともこと〳〵くはいかてまなひてんやまなひておろかふるあさ〳〵しきこゝろ言葉にかけ奉るはいとおほなく筆の海のもしほ草かきもつくされぬことになむ實や文武ふたつのみちの御賢君と世こそつてあふきたてまつりぬいさゝかくにの御政の御いとまあらせ給ふの日は太田道知を御かたはらにめされ和歌を詠し給ひ冷泉爲むらの卿へ御相談ありしなり百首もあまたたひになりけれはくみ題千首をよみたまはむの御あらましうち〳〵みやこへも御さたありしに千首は夏の部よりよみはしむるものゝよしにて夏の部よりよみ初め給ひ御かへうたともに二千首三とせのうちにことゆゑなく御再点御清書もすむこの千首御詠出あらむのはしめ爲村卿の地うた紋うたの事たつねさせ給ひけれはのこるところもなく御つたへなりこの地うた紋うたの事は頓阿法師のころたにさたかにはわきかたかりしことのよしをこたひ御影によりてうけ給りたてまつることひとへに道のめうかにかなひしことゝ道知ありかたかりぬいにしへより武將のうたひと多しといへとも組題千首をよみ給ふといふことをきかすまた武家のうたを堂上の淸書したゝむおく書まてそへられし事これまた稀なるためしとそひそかにもつたへきく人みな感涙をなかしぬ先の年冷泉爲村の卿より惣御門弟中へ花郭公月雪述懷のいつゝの題にて詠歎御すゝめありしとき述懷の御詠に　宗直卿

　わするなようときしたしきゐゐてなし國やすかれとまもる心を

右の御詠に御書添　爲村卿

　やすかれと疎き親きめくむよりまもり久しき國そ賑はふ

御詠のことく國家泰平にめてたき御代にて上を學ふ下萬民忠孝のふたつをおこたらさりし
此太田道和和歌の道にこゝろさしふかきものゝよし達　御聞あらたに召いたされぬ文武の道のミならす何の道といへとも其のわさにまされる輩はめしいたされ絶たるをつきすたれたる道をおこし給ひし事かそほるにいとまあらす實や隱士も山をいてしといひし古のひしりの御代のことまておもひよせられてありかたけれ此書をひそかにももれきん人もし此君の御一世の御行徳をしらまほしくはそのミち〳〵の人にとひあきらめ給へかし

故君（宗直卿御事）組題千首詠しさせ給ふ折から道知にもよみ候へとの仰にしたかひ日かす六十日程のうちに代歌ともに二千首をよみて爲村卿へ御点乞奉るこのとき冷泉家よりも御ほめの御かき添あり道知千首外にうつし置年月移りて　故君七めくりの御わさせさせ給ふとてや川子の御方（永澄院殿御事）より姫君かたへ百首の題をすゝめ給ひ七百首にして備へさせ給ひしとき道知へも同し題を給りてよみぬ此題の内川といふ題のうたに御添削にてつとめ御傳受也道にこゝろさしある人々はきゝつたへてうらやミぬ

右之如く遊れたり道知は太田村の人俗稱源兵衛といひ隱居人道し道知といへる名も　公より

　よる浪の声聞さそらて行末を道知へせよ和歌の浦人

といへる御詠を給りてよりの名のよし和歌の御師となり姫君かた若君かた皆和歌の添削を御請遊されしといふ

一右千首御詠御親筆十卷御草稿爲村卿朱にて添削木及ひ同卿自筆淸書之分とも長保寺へ御奉納于今同寺に安置す又御逝去の時爲村卿自筆にて般若心經十卷を書寫し御追善して長保寺へ奉納御一回忌より十七回忌迄之分之由每卷の末に記載左の如し

一十一月千首御詠歌成就

右千首之御詠于今寶庫ニ存ス又長保寺は御奉納之分左ノ如シ

公御眞筆千首御詠草十卷 春夏秋冬戀雜 御草稿冷泉爲村卿朱に而御添削本及ひ爲村卿自筆に而淸書之分共長保寺へ御奉納被遊于今同寺に安置す 御奉納年月不知

爲村卿は格別之御聞にや　公御逝去之節爲村卿自筆に而般若心經十七卷を御追善して長保寺へ奉納于今保存せり御一周忌より十七回御忌迄之分之由每卷之末に如左記しあり

爲大慧院前亞相十七回忌菩提書寫

安永二年四月二日　當忌來二月三日　沙彌澄覺

一又　公御直筆左之經卷をも長保寺へ御寄付あり

法華經　八卷

無量義經　一卷　合拾卷　紺紙金泥塔ニ入

觀普賢經　一卷

右寶暦十辰年六月十六日御寄附トアリ　塔ハ菩提心公ヨリ御寄附也

一按するに 住吉社へ御歌御奉納之事古文古事にあり大納言さ被遊たれは
延享二年後の事なるへく恐らく御余暇御通行之節にもあらんか

春日侍　住吉社寶前詠十五首和歌

権大納言　源　宗直上

春三首　初春霞

朝もよひ昨日れそらもはるにあけて霞そなるゝすみよしのまつ

岸若草

もえ出るみとりもぬかくすみよしれ岸にいろそふそるれ卫かくさ

花爲友

幾そるもおなし木のけれ友とみん花には老のうさもわすれて

夏二首　里郭公

ほとゝきす聲もさやのにそるゝ夜の月のつられさとになくなり

納涼風

立よれはあつさわすれてぬく風にたもとすゝしきまつの下蔭

秋三首　七夕契

初秋のけふまちえたるあまの川ふかき契のほしあひのそら

海上月

すみよしの岸による波をつゝにてうなゐら遠くすめる月影

菊花久盛

幾秋もともにこそゝめ庭のおもにゝむらすにほふ菊のいろ〳〵

冬二首　寒松緑

霜の後としれさむさもあらはれて松はみとりの色をそふらし

濱邊雪

打よするみきは波もふるゆきもひとつ色なるゆまのまさこち

戀三首　寄月戀

夜な〳〵のそてのなみたに宿りけりおもゝけさそふ月はとひ來て

寄木戀

おもひ川よしをつむともうもれきのはひのあふ瀬をなをやたのまん

寄鳥戀

あくるよのゆふつけとりよこゝろしてあゝぬわゝれをいそゝすもゝな

雜二首　朝眺望

朝なきに浦なみとほくゆく舟のほのかにみゆるあわちしま山

社頭祝

神ゝきのまつの言のは幾千世のさゝえをまもれときはかきはに

又明頁遺跡に御鹿狩の時のよしにて

狩人の麓のさゝにやさるゝもしらてや鹿の妻をおふらん

寶暦六年丙子　公七十五歳

一正月十一日ゟ御所労に付　公邊御醫師武田長春院數原通玄被　召呼長春院藥差上

同月十六日御所労爲御尋從　公方様　上使菅沼織部正を以て生干鱈御拜領此後も御拜領物有り

一同月晦日御所労に付上薫人參御拜領之儀　宗將卿御內意被　仰達之處御內々武田長春院御使に而上薫人參御拜領

一三月十一日　伏見邦忠親王御中屋敷へ被爲入（寶鑑には二月廿九日御上屋敷へ御招請三月十一日御中屋敷へ被爲入トアリ）先達而　親王家御代替ニ付江戸へ御下向ニヨッテ也

若山大水

一九月十六日若山暴風大雨に而紀の川出水　御城下浸水す紀の川筋出水就中甚敷十七日名草郡栗林に而一丈四尺六寸の高水と云同郡八軒家其外所々の堤切れ御城下ゟ浸水所々橋々流失屋宅潰溺死も有之（御下屋敷ハ御別條無之）

勢州領損亡

一勢州御領分も風雨に而損亡に付　公儀ゟ御達有之

水難救助

一是年御家中水難に逢たる者末々迄金貳千貳百五兩餘銀貳拾八貫九百目余賜り町在之民へも米五百石余賜る

寶暦七年丁丑　公七十六歳

織部正様卒去

一六月十七日織部正様御卒去（孝三郎様御事　孝順院様）

宗直公逝去

長保寺に葬る

一七月二日夜亥中刻御逝去　於御中屋敷

本月朔日御所勞に付　公儀御醫師武田長春院井上交泰院數原通玄栗本瑞見森宗乙内田玄壽被召呼

一七月三日從　公方樣爲御尋　上使松平右近將監從　大納言樣　上使秋元但馬守從　御簾中樣爲御悔御使加藤甚兵衛被遣

一同月四日從　公方樣　上使酒井左衛門尉を以御香奠白銀百枚從　大納言樣　上使秋元但馬守を以同五十枚從　御簾中樣御使加藤甚兵衛を以同拾枚被進

一同月九日御尊骸谷中感應寺へ御出棺御火葬

一七月十六日御尊骨感應寺ゟ御發棺八月二日紀州濱中長保寺へ御埋葬　東海道美濃路御越

御法號　大慧院殿二品前亞相普觀徹性台靈

大慧公

公子譜畧 都而寳鑑ニ據ル

朝姫君 眞性院
御實母 下條氏 享保五子年十月四日死去 妙相院
享保元申年十月七日御誕生
享保二酉年四月十九日御髮置
享保七寅年正月八日御卒去
御遺骨正月廿二日池上御發棺四日市ゟ川俣通り和歌山へ御越二月八日養珠寺へ御納り
御法號 眞性院妙惠日善 御牌前 池上本門寺
利根姫君 松平陸奥守宗村室 雲松院
御實母 齋藤氏
享保廿卯年十一月新御部屋樣ト唱候樣被 仰出
安永四未年六月十三日御死去 智境院樣
文政七申年十月廿二日樣文字ニ極ル
享保二酉年八月朔日御誕生
同 三戌年正月十五日御髮置
同 六丑年二月御疱瘡

大黒公公子譜略

大[illegible]子[illegible] [illegible]

直松君 [illegible] 普捉心院

- 粂之丞君 [illegible]
  - 岩千代君 [illegible]
  - 㤗姫 早世 [illegible]院
  - 雅之助 早世 [illegible]院
  - 方姫 水戸少將治紀朝臣室
  - 備姫 松平加賀守[illegible]
  - 乙之助 早世 如幻院
  - 丁之助 早世 如幻院
  - 如雷院 [illegible]
  - 御男 同 春[illegible]院
  - 同
  - 同 幻[illegible]院
- 定姫 松平[illegible]五郎ヘ許嫁 [illegible]院
- 門之進 早世 [illegible]院
- 致姫 松平[illegible]守室 光安院
  - 於義丸 [illegible]
    - 於廣 [illegible]
    - 仁之助 [illegible]
- 御女 早世 [illegible]
- 鎮之丞 內藤山城守政義 [illegible]院
  - 大吉 早世 [illegible]院
  - 維之助 早世 [illegible]院
  - 保姫 [illegible]
  - 於晴 早世 [illegible]院
  - 榮三郎 早世 [illegible]
- 千之丞 松平[illegible]大夫[illegible] [illegible]光院
  - 女 早世 [illegible]
  - 園姫 早世 [illegible]院
  - 房丸 [illegible]
- 逸姫 早世 [illegible]院
  - 義郎 [illegible]
    - 峯姫 早世 幻[illegible]院
  - 賴[illegible] [illegible]
  - 於[illegible] [illegible]
  - 於[illegible] [illegible]
  - 於[illegible] [illegible]
- 金十郎 左京大夫[illegible] [illegible]院
  - 於錫 [illegible]
    - 銀一郎
  - 友三郎 [illegible]
    - 西丸 [illegible]
  - 輔之丞 早世 [illegible]院
    - 鹿姫 早世 [illegible]院
- 職之丞 又久松下[illegible]守忠功 又大外記 大[illegible]院
  - 五郎太
- 従姫 尾張宰相治行朝臣室 [illegible]院
- 粂之丞 三浦[illegible]門守[illegible] 嚴淨[illegible]院
  - 丈之助 長門守[illegible]
    - 女子
- 唯之進 [illegible]松平下[illegible]守忠和 遊[illegible]院
  - 源之助 早世 [illegible]院
- 盆之助 [illegible] 觀妙院 安[illegible]順[illegible]
  - 於[illegible] 三浦丈之助妻
  - 末女 早世
  - 梢吉 早世 心光院
  - 西次郎 早世 [illegible]院
  - 於久 早世 [illegible]院
  - 於美 早世
  - 於澤 早世
  - 津丸 [illegible]丸 [illegible]院
- 粂之丞 [illegible] [illegible]院
- 峯雲院 早世
- 即到淨源 同
- 覺眞春夢 同
- 邊光貫流 同
- 陽雲院 同

- 善姫 [illegible]
- 入姫 [illegible]
- 春千代君 [illegible]
  - 勝五郎 松平[illegible]
    - 秀三郎 [illegible] 大[illegible]院
- [illegible]郎 [illegible]
- 豐[illegible] [illegible]
  - 豐[illegible] [illegible]
    - 貞之丞信敬 [illegible]
  - 長五郎 [illegible]院
  - 豐九郎 [illegible]院
  - 於照 [illegible]院
- 富千代 早世 [illegible]院
- 忠姫 [illegible]
- 主姫 [illegible]
- 悦姫 [illegible]
- 親姫 [illegible]
- 悦姫 松平[illegible]守[illegible] [illegible]院
  - 於美代 早世
  - 政吉 早世 [illegible]院
  - 銀一郎 [illegible]
  - 雅之進 [illegible]院
  - 新[illegible]郎 [illegible]院
    - 銀[illegible]郎
  - 於こと
- 雅之進 [illegible]院

同　八卯年四月十八日御紐解
同　九辰年八月朔日御髪除
同　十二未年十一月十九日御鐵漿初
同　十五戌年十二月御痲疹
同　廿卯年四月廿三日　公方様吉宗公御養女　御城へ被爲入利根姫君様ト
同　年五月廿七日松平陸奥守宗村へ御縁組
同　年十一月廿八日御婚禮
同　廿一辰年三月廿一日御袖留
元文二巳年閏十一月十五日御實名遥子ト被進
同　四未年九月二日御安產女子出生　名源姫
延享二丑年十二月三日御安產女子出生　早世
同　年閏十二月十六日御逝去
同　三寅年正月十二日御遺躰仙臺へ御着棺
御法號　雲松院殿梅月淨馨大姉　御廟　仙臺大年寺
報恩寺へ御位牌御安置之處寶暦八寅年十月大智寺へ御遷座

利根姫君御子　大慧公御孫
源姫殿　松平丹後守嫡上総介室　雲松院

元文四未九月二日誕生
寛保元酉年十一月髪置
同　二戌年九月廿五日宮參
延享二丑年十一月十五日紐直
寛延三午年七月廿三日松平丹後守嫡上總介 後信濃守 縁組
同　四未年四月十九日歯黒初
寶暦二申年十一月十七日ゟ疱瘡
同　八寅年九月十一日婚禮
同　九卯年正月十五日年頭登城願濟
同　十辰年十二月十五日櫻田屋敷へ移ル
同　十一巳年十月五日男子出生七月死去
靈松院殿寂顔眞馨大姉 後芙蓉院
麻布一本松賢崇寺ニ葬ル於目黒最上寺火葬

常姫君 芳林院
御實母　下條氏　妙相院
享保五子年正月五日御誕生
同　年二月廿八日御宮參

直松君
喜姫君

同　年三月廿七日御髪置
同　十巳年十二月十九日御紐解
同　十五戌年二月十九日御鉄漿初
同　年十一月御痲疹
享保廿卯年十月十二日御卒去　松平安藝守吉長嫡伊勢守宗恒へ御縁組御内約ト云
　御法號　芳林院殿妙設日英大姉
　　身延久遠寺へ御葬送　御牌前　上野眞如院
直松君　菩提心公　御本譜ニ揭ク
喜（ヨシ）姫君　細川越中守宗孝室 靜澄院
　御實母　齋藤氏　智境院
享保五子年十一月十六日御誕生
同　六丑年三月廿三日御宮參
同　年御髪置　一ニ同七寅三月十九日トアリ
同　年五月十九日友姫ト御改同日御箸揃
同　七寅年三月十九日御髪置
同　十五戌年三月廿一日御鐵漿初
同　年十二月御痲疹

板倉修理乱心双傷

元文元辰年三月十五日細川越中守宗孝へ御緣組
同　五申年三月御疱瘡
寬保元酉年十一月十八日御結納
同　年十一月廿二日御婚禮
同　二戌年二月十九日御袖留
延享四卯年八月十五日靜澄院ト改
越中守宗孝本月十五日於　御城板倉修理亂心之爲負傷十六日卒去
德川十五代史ニ　八月十五日細川越中守宗孝營中ニ於テ板倉修理勝該ノ爲ニ殺サル勝該ハ水野大監物忠辰ニ預ケラル勝該兼テ狂疾アリテ奉仕スヘキニ非レバトテ宗家若年寄板倉佐渡守勝淸ガ計ラヒニテ勝該ヲ隱居サセ勝淸カ庶子ヲソノ家繼カセントス勝該之ヲ聞テ怒リニ堪ヘス心狂ハシクナリシカハ勝淸其家人ニ命シテ家ニ押込置シニイカニ誑シテカ今日登營シテ勝淸ヲ殺サント思ヒ細川氏ノ家紋ノ板倉氏ノ紋ニ似通ヒタルヲ以テ宗孝ヲ殺害セシトゾ勝該ハ廿三日ニ切腹ヲ命セラル
信口碑ニ傳フ處ヲ聞クニ此變事ニ付テハ細川氏ノ爲メ御家ニテ深ク盡サレシ事アッテ無難ナリシヨリ細川氏深ク德トシ後世迄家中タリ共御家ノ方ニ足ヲ向ケ臥セズト申傳フルヨシナリ
安永九子年十月六日御卒去　御日取四日ニ替ル
御牌前　和歌雲蓋院　御廟所　品川東海寺内妙解院

御婦德

按するに　夫人夙に賢明之聞えあり今野史貞烈傳及び懋遺草附錄に載する所を揭く
肥後守護、細川宗孝、靜證孺人、松平氏、權大納言宗直之女也、有婦德、常好讀經書、雖左右婢、自深愼密、況臣下莫知之者、謹恭肅整、宗孝卒而後、毎忌辰、必絕蔬菜、或遣人代詣神社佛

剳一、禁二茶烟草一、以待二其歸報一、初人未レ識、歴レ年而後粗察レ之、或問二其故一、對曰、自爲二婦女一、故每レ詣多煩レ衆、是以遣レ人代詣、獨愼レ己而已、自二先世一、孺人見二老臣一、手自賜二熨斗一、以爲レ例、孺人謂、嘗聞男女不二自授一、必遷レ器、以予レ之、數誡二世嗣重賢一補二闕事一、安永九年秋有レ疾、重賢馳レ人請二省病于幕府一、命二從者一預二行裝一、以竢レ命十月遂卒、先レ是明和戊子、災變屢起、國用竭乏、重賢主臣戮レ心欲レ與二倶難苦一、雖二親戚一更限以二五年一、嚴省二畧諸事一、孺人聞レ之、亦請與レ衆偕減二省費用一、迨二安永癸巳冬一、重賢使三堀勝名謂二孺人一、請下復二費資一如中舊制上、孺人遣レ人辭曰、余聞頻年有二未レ復、且嫡孫當二首服一、且居第再造、諸費多端、惟欲レ竢二豐稔一耳、不レ聽、重賢再請、强而後可、會重賢有レ病、氣悶焦、數叱二左右一、孺人誡曰、人有レ疾則皆然、可レ憐年少狠狽、竭力勤勞、請緩焉、重賢乃從焉、　右野史貞烈傳

愁遺草附錄に

細川越中守殿重賢の御母靜證院太夫人は紀州宗直卿の御女にて隆德院殿に嫁し給ひ越中守殿の御養母にわたらせ給ふ太夫人婦德まし〳〵て常に經書を好み給ひかたへの女房達にはひそかにときても聞せ給ひけれとも女の御身にて眞名よみ給ふ事を深くつゝみ給ひて御うちの者にもしらせ玉はさりし事ことに愼みふかくまし〳〵て隆德院殿うせ給ひし日に當りては八月每に蔬菜をもまいらせす又諸寺諸社に代參とて御うちの者を遣はされては其者のかへり來るまては茶多葉粉の類までをもたち給ふ初の程はそれと知る者もなかりけれとも度かさなりていちしるしかりけれは女房達いかなる御心にやと奉りけるに女の身にて度々物もふでせんも便なけれは代を

參らせたりされは心ばかりもみつからおかみ奉る思ひをなすよしといらへ玉ひけるとそむかしより家老用人なとに君にまみえ奉れは手つから熨斗を賜へる式也けるを男女は自らさつけすとこそ聞つれとて必す物に入れて給りぬかく物毎正しくまし〳〵て君いさゝかも御過ちあれは必すいさめ玉ふ君も内の政事は常に此氣しきうかゝひて、はからひたまひけり

細川越中守殿重賢の御母靜澄院太夫人明和五年の比非常の事共さま〳〵打つゝき國用ほとんと乏しからんとす此事等閑に打過へからすいてや艱苦を共にせよとてことしより五年を限りさらに儉約して越中守殿の御はらからを初め親しき方々の分料家中の賜まておしわたして其數を減せらる唯太夫人の御方のみ親にてわたらせたまへは其沙汰なかりけるに太夫人聞し召てかゝる際にはわれとてももれぬへき並〻に減し給へとひたすらのたまへは越中守殿もいなみかたくて其御旨にまかせ玉ふ斯て安永二年の冬にもなりしか越中守殿の御使として堀平太左衛門を太夫人の御許にまゐらせてありつる事もはや五年の期過て候此年の暮よりは昔にかへし奉るへきのよしを仰せ進せられけれは太夫人より媵臣草野兵大夫を御使にて仰忝う承り侍りたゝし此五年の間も雨風なとさはる事なく御領のみつきも豐かなる事なしと聞え又さりし頃燒失たりし龍の口の舘再ひ作り出されきのふけふまてに事はてぬるに白銀の御曹子を公方の御所の見參に入奉るへき御もよふし御元服の御くわたてさへありてめてたき御事打つゝきたりけれは其用意いくばくそやかゝる折しも分料むかしに歸し玉はん事はゆめ〳〵侍るましき事になん只この程のまゝにてこそ侍らめと申させ給ふ越中守殿謹て聞し召かさねて平太左衛門を參らせられ仰らるゝ

の旨畏り誠に有かたき御情に候此上とかくを申さん事は其おそれ淺からす思召候へとも此度はことかたの分料みな返し遣し候に御母公の御許までもとのまゝにて候ひなん事は孝養の道にもたかひ冥罰もおそろしく候へはまけて御ゆるしかうふりて本意のまゝに仕度候へはと宣ひ遣れしかは太夫人も辭譲の御詞なくやおほしけんその御旨に任せられたりされとも御身の分料とてあなかしこ外にすへからすと平太左衛門に仰付させ玉ふまた一とせ越中守殿中風の御心地とて御足なとなやませ玉ひける比物事御心みしかく近習のものともに宣ふ事も例にかはりてあわたゝしかりければ太夫人其よし聞し召て身にやまひつきては誰もさるならひにてはえへれともめしつかはるゝものともいたはしきに今少し御心をさせ給ひさふらへかしといさめたまひければ越中守殿恐れつゝしみ玉ひ引かへてのとやかにむかしのまゝにならせ給ふ其頃は御齢も早六十に近くわたらせたまへとも兒の親を恐れたらんやうなりしかゝる事見もし聞もし奉る此子此母といへる本文思ひ合て感涙をぬくひけり　銀臺遺事

按するに草野兵大夫は今の政信の祖父にて御家より御附御用人にてまかりし也又越中守重賢侯は世に名高き明君にわたらせられ我か　香嚴大君とともに紀州の麒麟肥後の鳳凰とたゝへられ給へる君にて事は銀臺遺事に詳なり
野史貞烈傳孺人松平とは徳川氏の誤り也

久姫君　松平相模守宗泰室 桂香院

御實母　山本氏女　享保十一年十一月二日死去　孝晴院

享保十一午年八月四日御誕生

同　十二年四月廿二日御宮参同五月十一日御箸揃
同　十三申年正月廿八日御髪置
同　十五戌年十一月御痲疹
同　十六亥年正月御疱瘡
同　十七子年二月十九日御紐解
同　廿一辰年三月十五日御鉄漿初
元文四未年五月十五日松平相模守宗泰殿へ御縁組
寛保二戌年二月十五日御結納
同　三亥年十一月十一日御婚禮
延享元子年四月廿五日御袖留
同　三寅年七月十一日御安産男子出生勝五郎ト稱
同　四卯年八月廿六日相模守宗泰殿死去圓泰院ト被稱
寳暦七丑年十月廿日桂香院ト御改
寛政十二申年正月廿七日御卒去　追而廿三日ニ御日取替
御法號　桂香院　　御廟　千駄ヶ谷千壽院　二月八日御葬送

信按するに　女公子亦英俊におはせし由傳聞すと雖も他に筆記のものを不見親戚皆川家の先代利大夫と云は御附差添にて常に奉仕せしか同人の語りしを傳ふる處を記さんに夫人男子に劣り給はぬ御氣象ありて常々馬に騎し給ひしと御園遊の時なと　公子御母樣之御出さて拜伏せらるゝに御ふり袖地に引を侍女の翬袖をかゝけおくるを見給ひ大名之子として何條

袖の汚るゝなと厭ふ事のあるへきやと叱り給ひし又御縁家方より御重組なと参りし時御氣に叶はさる節はさよいなと被仰て之を其重組の中へ强ひて押入させ給ひ御返禮さて其儘戻し給ひしと也勝五郎君幼年にて家督なれは家政向き專ら聞せ給ひしに必賞必罰藩中恐怖なせしとそ　御父大慧公常々示し給ふに雷鳴之時男子は外之方に向ひ詠め申へし女子は内に向ふへし抔仰ありし御庭訓により給ひしか夫人中々心剛にいらせ給ひしと云利大夫或時賜はりし御句あり

ど川のりと願ひ打手の槌れ音

外に大字に被遊たる幅なも賜りしか御手跡殊に見事にして句之と御落欵ありしよし

久姫君御子
大慧公御孫
勝五郎殿　相模守宗泰嫡　相模守重寛

延享三寅年七月十一日誕生
同　年十一月三日箸揃色直シ
同　四卯年十月十二日家督
寬延元辰年二月十五日髪置
同　三午年三月廿七日袴着同五月疱瘡六月三日酒湯
寶暦三酉年八月十三日宮參
同　八寅年二月十三日琴姫樣御緣組
同　九卯年四月朔日初而　御目見
同　年五月五日節句初而登　城同六月元服

同　年酉七月八日松平下總守娘縁組
　琴姫様御逝去に付再縁
同　年十月廿一日元服従四位下侍従相模守御字頂戴重穆　後重寛
同　年十一月十五日月次初而登　城
寶暦十辰年十一月十一日袖留
同　年八月十一日他國者仕置之儀ニ付　御目通指扣　同廿六日　御免
同　年十二月廿八日傘頭着座被　仰出
同　十一巳年九月六日前髪執
同　十二午年四月十六日初而國元へ御暇
同　十三未年四月六日初而參府
明和二酉年重寛ト改
同　年十一月三日松平下總守息女へ結納
同　三戌年正月廿九日婚禮　同五月六日内室死去
同　年五月廿三日右衛門督様之御姫様仲姫様　御縁組
同　十二月廿三日結納
同　五子年二月七日婚禮
天明三卯年十月十八日卒　岱嶽院ト稱

同　年十二月三日嫡秀三郎家督

久姫様御孫

大慧公御曾孫

秀三郎殿　相模守重寛二男　相模守治道

天明二寅年正月廿九日嫡子ニ成　嫡鶴二郎病死ニ付

同　三卯年十月十三日金杉ヨリ八代洲河岸へ引移

同　年十二月三日故相模守遺領相續十五日御禮

同　四辰年正月三日年頭初而登　城

同　年正月廿一日從四位下侍從相模守治道ト

同　年二月十三日前髪執

同　五巳年六月十六日嘉定初而着座

同　年十二月廿五日松平陸奥守娘緣組　お生殿

寛政二戌年三月廿六日　桂香院樣へ御引取即日結納婚禮

同　六午年正月元日年頭初而着座

去年十二月廿八日被　仰出

寛政三亥年九月廿六日　内室お生殿袖留着帯

十二月廿八日女子出生名お彌殿

同　四子年六月十二日內室お生殿死
輪香院　追テ日取七日牛島弘福寺へ葬
同　五丑年五月十八日　亟姫様御縁組　双方再縁
觀自在公御女轉心院様御年譜別ニ記ス
同　年十一月十五日桂香院様へ御引取御婚禮ハ卯五月十五日
同　六寅年四月廿七日亟姫様御袖留御內々
同　七卯年九月廿六日妾腹男銀之進殿亟姫様御養ヒ被成嫡子ニ被成度段　公儀へ被相届
同　九巳年十一月十六日銀之進殿國許ニ被在之處來三月中出府之儀申來
午三月六日銀之進殿着
同　十午年五月十五日相模守治道卒大機院ト　遺骸國許へ　日取六日ニ成

春千代公　香嚴公　御本譜ニ記ス

孝三郎君　松平織部正頼央 孝順院
御實母　長谷川氏女　一ニ神谷氏又岸田氏　明和六丑年十月廿四日死去
涼心院全性達修大姉
御內室　監物様御妹於嘉與　寶暦六丑年五月廿八日御死去
深入院
享保十四酉年十二月廿七日御誕生

同　十五戊年二月廿三日御宮參　　同年五月十一日御箸揃
同　年十一月御痳疹
同　十六亥年四月十一日御髮置
同　十七子年三月十五日御月代初
同　十八丑年十一月廿七日御袴着
同　二十卯年九月御疱瘡
寛保元酉年五月六日御具足召初　同十五日賴英ト御改
同　年九月朔日初而　御目見同九日ゟ五節句初而御登　城
同　年十二月十九日從四位下少將　同廿一日松平織部正ト御改
寛保二戌年正月年頭初而御登　城　同十五日月並初而御登　城　同十二月廿三日ゟ表御住居
同　三亥年三月廿六日御袖留
同　年十二月十三日御前髮執
寶曆二申年正月五日御中屋敷燒失ニ付御上屋敷ゟ御移
同　年二月九日瀧御茶屋へ御移
同　三酉年八月廿八日青山御殿へ御引移
同　四戌年四月十一日監物樣御妹於嘉代樣御緣組
同　年九月廿一日御結納御婚禮

豐松君

同　六子年二月廿八日於嘉代様御着帯
同　年五月廿八日於嘉代様御卒去
同　七丑年六月十七日御卒去
御法號　孝順院殿性覺本明大居士　御廟谷中護國院　御牌前和歌雲蓋院

豐松君　松平左兵衛督信有　初勘解由　又民部大輔　左兵衛佐　隱居後兵部　松岳院
御實母　町醫入江玄昆娘　明和七寅年五月廿三日死去　得生院　市ヶ谷自證院へ葬ル
内室　松平光丸姉於此　明和五子年離縁
享保十六亥年九月十日於若山御誕生
同　十七子年正月十五日御宮參
同　年十月十九日御箸揃　一ニ九月
同　十八年丑正月廿六日御髮置
同　十九寅年九月廿六日御月代初
同　二十卯年正月十三日御袴着
寛保三亥年二月十一日御具足召初
延享元子年四月松平越後守假養子
同　年五月五日御袖留　頼香ト被稱
同　三寅年五月十一日御前髮執

同　年七月廿六日勘解由ト御改
寶曆三酉年三月御疱瘡
同　年假養子返納
同　四戌年二月廿八日江戸御下向閏二月十八日御着
同　七丑年十二月十九日青山御殿へ御移
同　十辰年三月九日松平式部大輔信友急養子同日御引移
同　年四月廿四日式部大輔遺領御相續　上州矢田一万石
同　年七月十八日從四位侍從民部大輔信有ト改
同　十二午年十二月五日左兵衛佐ト改
同　十三未年四月廿二日養方弟友之進信明を養子に
同　年十一月十一日松平光丸殿姉を緣組
明和元申年四月引取
同　年五月廿七日婚禮
同　五子年內室離緣
同　七寅年九月廿日左兵衛督ト改
同　八卯年十二月四日隱居養子信明殿へ相續
同　年十二月十六日兵部ト改

安永二巳年閏三月五日左兵衛督殿ゟ分米五百石被贈
寛政五丑年六月十九日卒去
法　號　松岳院殿泰得惠秀大居士　市ヶ谷　自證院

豊松信有殿妾腹
大慧公御孫
松平左兵衛督信成　豊松式部大輔信明養子
安永二巳年九月廿五日弘
同　四未年九月十八日信明急養子
同　年十一月五日家督
天明三卯年四月朔日初而　御目見
同　十二月十六日從四位侍從左兵衛督ト改
同　八申年五月晦日松平相模守治道妹縁組
寛政八辰年十一月松平相模守治道朝臣妹女引取
同　十午年十一月五日結納婚禮
同　十二申年二月十三日隱居中務大輔ト改
同　年四月十九日卒去　市ヶ谷自證院へ葬ル　徳恩院ト号

豊松信有殿妾腹

辰五郎　豐九郎　於照

大慧公御孫
辰五郎
安永二巳年八月廿七日弘
寛政三亥年十月二日死去智德院

同
同
豐九郎　（一ニ豊五郎）　明和七庚寅年出生妾腹
磐治と改　（一ニ鏧治）
安永二巳年八月廿七日弘　恭德院

同
同
於照　妾腹
內々弘無之娘安永五申年八月廿五日死　光照院

左兵衛督信有孫
大慧公曾孫
直之亟信敬　左兵衛督信成男
寛政十午年九月四日生

寛政十二申年十二月七日左兵衛督信充之養子
享和三亥年四月十九日家督
文化十一戌十二月十六日従四位下侍従弾正大弼ト
天保十二申年五月十九日卒　久遠院

一豊松信有君御養子後養實交互順養子ニ而相續系統甚錯亂也今御血統ノ畧ヲ左ニ掲ク　二線ハ御養方　一線ハ御血統也

- 信友　式部大輔
  - 信明　信友實子　友之進
  - 信有　信友養子　大慧公男
    - 信明　友之進
    - 信成　豊松
    - 辰五郎
    - 豊九郎
    - お照
  - 信成　信有養子
    - 信充　信明實子
  - 信充　信成養子
    - 信敬　信成實子
  - 信敬　信充養方

富千代君

御實母　外山氏　善修院殿
享保十八丑年十二月四日御誕生
同　十九寅年正月五日御卒去
法幻院殿浄起日周大童子　御廟　池上本門寺

忠姫君　賢姫　松平播摩守頼濟様御室

御實母　外山氏　善修院殿

元文元辰年十二月十四日御誕生

同　二巳年正月十五日御色直

元文二年九月十八日御宮參

同　三午年正月廿二日御髪置

同　五申年四月御疱瘡

寛保二戌年二月十三日御紐解

延享三寅年二月廿三日御鐵漿初

寶暦二申年二月十日賢姫ト御改

同　三酉年七月四日松平加賀守重靖殿ヘ御縁組

同　年十月加賀守殿死去ニ付御入輿無之御離縁

同　四戌年三月四日松平播磨守頼濟様ヘ御縁組

同　五亥年正月廿六日御結納同二月廿一日御婚禮

同　七丑年二月廿三日御袖留

天明元丑年六月朔日御卒去　追而閏五月廿八日ニ御日取替ル

御法號　遠紹院殿妙道日養大姉　御廟　池上本門寺　御牌前　報恩寺

圭（ケイ）姫君　佳玄院　御實母森山氏
元文三午年五月廿一日御誕生
同　五申年三月十四日御卒去
御法號　佳玄院妙嚴日牀大童子　池上　本門寺へ葬
悦姫君　後達姫　雁岳院　丹羽若狹守高庸室
御實母　久能氏　寛政二亥年十二月十九日死去
心靜院　後　心敬院ト改
元文四未年六月九日於紀州御誕生
同　五申年六月朔日達姫ト御改　有德院樣ゟ御名被進ニ付御弘有リ
同　年九月十五日御宮參　此節ゟ表立
同　六酉年正月十五日御髮置
寛保三亥年二月廿五日紀州御發輿木曾路通リ三月十六日江戸御着
延享二丑年正月廿二日御紐直
同　四卯年三月二日ゟ御疱瘡
寛延二巳年正月廿六日御鐵漿初
同　四未年八月十八日丹羽若狹守高庸へ御緣組
寶曆三酉年九月七日ゟ御痲疹

同　六子年六月廿一日御結納同月廿五日御婚禮
同　八寅年十一月九日御袖留
同　九卯年五月廿三日御卒去
御法號　麗岳院殿靈雲惠鏡大姉　御廟 御牌前　芝泉岳寺 雲蓋院

載(トシ)姫君　後相姫 靈光院　京極二品公仁親王御息所
御實母　落合氏　明和四亥年七月廿八日死去　慈應院
寛保三亥年三月十一日於紀州御誕生
延享三寅年四月廿九日御宮參　伊達社
同　年七月廿一日伏見若宮上野宮樣御へ縁組
同　年十一月十九日京都ゟ御結納和歌山へ被進
寛延二巳年正月廿八日御紐直
寶暦三酉年正月廿三日御鬢剃
同　年三月御疱瘡
同　四戌年二月廿八日江戸へ御下向閏二月十八日江戸御着
同九卯年五月十一日江戸御發輿同月廿八日御上京之處　伏見樣御違例御大切ニ被爲及候ニ付御道中ニ被成御座候得共御離縁被遊候トノ儀堀田右馬之助ヲ以被　仰進候付御道中へモ立寄右之趣申達此表へ罷越候ニ付御聞屆被遊　公儀へ御達被遊

伏見様六月二日薨去

寶暦九卯年六月六日御下屋敷へ被爲入

同　年十月十九日　相姫ト御改

同　年十一月十二日京極上總宮へ御縁組　二品公仁親王

同　年十二月九日若山御發輿同十二日御着京

同　年十二月十五日御結納御婚禮

同　年十二月十七日京極式部卿宮ゟ君號被進相君ト御改

同　十二年年正月廿九日御袖留

明和七寅年六月廿二日京極上總宮薨去ニ付　上総宮ハ清淨觀院ト

靈光院ト御改　御諱　壽子

同　年閏六月京極御家御令嗣無之ニ付　禁裏二之宮御降誕有之候迄之内靈光院様御家主ト被

仰出

寛政元酉年十一月四日御逝去

京都相國寺中　慈照院へ御納　御牌前　雲蓋院

悦姫君 後薫姫 永昌院　松平讃岐守頼眞室

御實母　久能氏女　心靜院　寛政二戌年十二月十九日死 信敬院ト改

延享元年二月四日御誕生

同　三寅年二月九日御髪置
同　四卯年三月御疱瘡
同　五辰年二月十一日御宮參
寬延三午年三月十八日御紐直
同　年九月十一日ゟ御痲疹
寶曆四戌年正月十五日御鐵漿初
同　十一巳年十月廿七日松平讃岐守賴眞樣　此時兵部大輔　へ御緣組
同　十三未年十二月朔日御結納九日御婚禮
同　十四申年四月九日御袖留
明和二酉年二月御流產不表立
同　四亥年五月廿八日御着帶八月廿一日御安產女子御出生
御名お美代同五子年二月廿一日御卒去
同　六丑年五月廿八日御名薰姬樣と殿樣ゟ御改被進
安永九子年三月十日讃岐守賴眞樣御卒去ニ付御摘髪永昌院ト御改
御子無之御舍弟帶刀樣御養子御相續也
天明五巳年十月廿七日御卒去
寬政七卯年六月六日讃岐守樣御同意有之御日取廿五日ニ替ル

御法號　永昌院殿妙壽日量大禪尼　池上本門寺へ御葬送　御牌前　報恩寺
御實母　村井氏女　明和九辰年十二月廿三日死去
即證院　鎌倉光明寺ニ葬

雅(マサ)之進君 内藤因幡守貞幹 德本院　初主殿頭伊賀守

延享三寅年十一月十五日於紀州御誕生
同　四卯年正月廿四日御弘メ同二月十三日御宮參
同　年五月五日御箸揃
同　五辰年四月十八日御髪置
寛延二巳年九月三日御月代初
寛延三午年九月十三日御袴召初
寶暦三酉年二月御疱瘡
同　四戌年二月江戸御下向閏二月廿八日江戸御着
同　七丑年十二月九日青山御殿へ御移
同　八寅年二月十一日御具足召初
同　九卯年七月廿九日紀州へ御越御達濟
同　十辰年三月廿五日御袖留御名乗賴章ト被進
同　年十月十九日御前髪執

同　年十二月三日内藤播磨守政業養子被　仰出
同　十一巳年四月廿一日播磨守古川下屋敷へ引移
同　年五月播磨守隱居家督
同　年十二月十八日諸大夫主殿頭貞幹ヨシト改
同　十三未年七月廿一日土方清太郎雄年殿姉お眞知殿縁組
同　年妾腹ニ男子出生政吉ト稱ス
　明和七寅年三月十九日病死
明和元申年九月廿七日御婚禮
同　三戌年十月御内室ニ男子出生名銀一郎
　安永七戌年六月退身
同　六丑年八月廿日伊賀守ト改
同　年五月廿三日因幡守ト改
同　七寅年二月廿七日御内室ニ男子出生雅之進ト稱
　安永七戌年六月嫡子ニ立後因幡守家督相續
安永七戌年五月廿八日ゟ水疱
同　年六月廿三日卒去廿九日　鎌倉光明寺へ出棺七月朔日着棺送葬
法　號　　德本院殿即譽有隣懸山大居士

政吉殿

銀市郎殿

雅之進殿

雅之進貞幹殿妾腹男子

大慧公御孫

政吉殿　玉樹院　早世

寶暦十三未年於在所妾腹ニ出生

明和元申年閏十二月廿五日弘同年宮參

同　三戌年四月廿三日出府之處七月十八日本腹ニ男子出生ニ付達之上次男ニ立十三日御達濟

同　五子年十一月十九日袴着

同　七寅年三月十九日病死　玉樹院ト号ス

同嫡子

同

銀市郎殿　病氣退身　正親（アキミ）

明和三戌年七月六日誕生同十八日銀市郎ト名被進直ニ嫡子ニ達

安永七戌年六月両足不叶行歩着座難致ニ付退身願之通雅之進殿嫡子ニ被　仰出

天保二卯年七月廿三日死去

同三男

同

雅之進殿嫡子ニ立　顯明院　政賡

明和七寅年二月廿七日誕生

安永七戌年六月十一日銀市郎殿病身退身ニ付嫡子ニ致度旨因幡守殿願之通被　仰出
同年閏七月十九日因幡守殿家督
天明七未年九月十三日卒去號顯明院殿
同　年十一月五日弟新三郎殿へ家督相續

同四男

同

新三郎殿初岩三郎神鑑院　主殿頭政偏ユキ
安永二巳年七月十六日誕生岩三郎ト稱ス
同　五申年新三郎ト改
同　六酉年十一月十五日袴着
天明七未年十一月五日雅之進殿家督相續
寛政二戌年十二月朔日諸大夫主殿頭
同　四子年三月左京大夫樣御女於錫樣緣組
同　十一未年十月七日卒去號神鑑院殿　鎌倉光明寺

同女子妾腹

同

於こと殿
安永七戌年十一月十六日內々弘メ　六歲之由

南紀德川史卷之十二

菩提心公

諱宗將ノフ　御幼名直松　大慧公　宗直公　御嫡

御生母　服部氏女　母ハみれ井の方信解院ト諡ス寶曆元未年十二月七日死去

元祿十五午年十月廿日生

享保十六亥年十一月廿三日眞如院樣 深覺公御實母 觀樹院樣 大慧公御實母 ヨリ被　仰進御部屋樣ト唱

寶曆元未年正月廿一日五十之御賀

同　七丑年七月八日大慧公御逝去ニ付現成院ト御改

同　年八月十三日永隆院ト御改

同　年十二月十三日御中屋敷御內證御座所ヘ御移徙

同　八寅年十一月御所勞翌九卯年三月十一日御床揚

同　十一巳年正月廿五日六十之御賀

同　年三月十一日新御殿ヘ御移徙

明和元申年十二月廿一日御座所長局ヨリ出火翌日御上屋敷ヘ御移徙御止宿閏十二月十一日御歸殿

同　三戌年三月五日御火災ニ付御上屋敷ヘ御移同年六月廿八日新御殿ヘ御移

同八卯年四月廿一日七十之御賀
天明元丑年七月九日八十之御賀
同　年八月廿一日御卒去上野護國院へ御送葬
永隆院殿茲光圓壽大姉　御位牌　上野眞如院

御簾中
初　順ノブ宮　後寛宮　淨眼院様　伏見貞建親王姫宮
後　愛君　明脱院様　一條前關白左大臣道香公御妹

各御譜別ニ記ス

一享保五庚子年二月晦日於江戸青山御殿御誕生
一同　年三月廿一日青山ヨリ御内證へ御移リ同日御色直
一同　年四月十一日御宮參
一同　年十二月十八日御箸揃
一同六辛丑年四月十三日御髪置
一同　年五月十九日御部屋御殿へ御移徙
公方様ヨリ上使水野和泉守ヲ以三種二荷御拜領
一同八癸卯年九月十一日御月代初
一同九甲辰年正月十三日御袴着

同十一日將軍家大奧ヨリ御上下御拜領是長光主御例ヲ以テ將軍家之御上下御拜領被成度トノ御願ニヨツテナリ

一同十二丁未年五月廿六日御馬召初

十三日　公方樣ヨリ上使安藤對馬守ヲ以二種一荷御拜領

一同年九月十五日　中納言樣ヨリ油鳥毛御鎗御讓

一同月二十二日御手習初

一同十三戊申年五月廿六日左京大夫樣御屋敷澁谷ヘ初テ被爲入

一同十四巳酉年九月朔日　公方樣ヘ初テ御目見于時御十歲

一同年閏九月六日御居合御稽古初

一同月二十八日御元服　公方樣ヨリ宗之御字御頂戴德川常陸介ト御改宗將ト被稱

一同年十一月廿六日青山御殿ヘ御移徙

一同十五庚戌年正月三日年頭御登　城御風氣ニテ御使者御差上同月廿八日御登　城

一同年正月六日青山御殿御火災御部屋御殿ヘ當分御住居

一同年七月五日雲雀初テ御拜領

一同年十月御痳疹

一同年十一月御鷹之鳫初テ御拜領

一同十六辛亥年三月廿六日御槍御稽古初

一同年五月五日ヨリ五節句初テ御登　城
一同年六月十八日初テ御巣鷂御拜領
一同年十一月十五日從四位下左近衛權中將ニ御叙任
一同日從三位ニ御叙左近衛權中將如元
一同十七壬子年正月十三日御具足召初
一同十八癸丑年四月廿一日御鐵炮御稽古初
一同年十一月廿六日ヨリ表御住居
一同年十二月十二日御鷹ノ鶴初テ御拜領
一同十九甲寅年正月御謡初御登　城　中納言樣御登城無之付テナリ
一同年二月廿七日御袖留
一此年　大慧公御在國中月次御登　城
一同二十乙卯年六月廿六日柔術御稽古初　關口万藏御指南申上ル
一同廿一丙辰年正月十五日御前髮執
一同月二十一日月次御登　城被　仰出
一同年二月十二日初テ池上御參詣
一同年四月十七日紅葉山御宮初テ御豫參
一同月廿四日增上寺初テ御豫參

一元文元丙辰年五月十日紅葉山御靈屋初テ御豫參

一同年九月廿六日　中納言樣ヨリ三間柄御鎗被進

一同年十月十五日天目﨟大身鎗其外被進

一同月十九日　公方樣御拳之鶉初テ御拜領

一同年十一月十五日大宮御鷹場ヘ初テ御暇

一同三戊午年正月十五日大宮御鷹場ヘ御暇

一同四巳未年正月廿三日　公方樣御拳之鴈御拜領

一同年六月廿三日伏見貞建親王姬宮順宮御緣組

一同五庚申年二月廿七日御上屋敷ヘ御移徙

一同年三月御疱瘡

一同年十二月朔日參議御任官權中將如元

一寬保元辛酉年四月廿二日御結納翌廿三日御婚禮

一同年五月朔日　中納言樣ヨリ御旗御馬印被進

一延享二乙丑年左之佛像芝增上寺ヘ御寄付被遊

碼碯石釋迦如來文殊普賢二大士幷拾六羅漢　厨子入

右ハ今增上寺黑本尊堂ノ左側ニ安置ス同寺記錄ニ延享二丑年ヨリ寬延二巳年迄ノ間（月日不詳）增上寺第四十三世走譽連察代ニ紀伊中納言宗將卿御寄付ト有之

一寛延元戊辰年八月十三日豆州熱海ヘ御入湯

一本寶鑑ニハ御歸國之節御湯治同年八月十三日江戸御發途九月三日御歸城トアリ此文ニヨレハ御歸國之御途中御立寄御入湯被遊タル如シ然レトモ寶暦六丙子年二月當年御初入云々トアレハ其已前御入國可有筈ナキ如シ何レカ是ナルヤ

一寛延三庚午年七月御染筆ノ佛畫四幅ヲ江戸鮫ケ橋林光寺ヘ御寄附被遊

御直筆御奉納目錄左之通

奉納書付　壹通

奉納　浄土眞宗 林光寺

浄土眞宗開祖

一親鸞大聖人尊像　壹幅

一聖徳太子尊像　同

一七高僧尊像　同

一蓮如上人尊像　同

以上

右箱入

寛延三庚午年七月吉日

施主　紀伊宰相

宗將㊞

御黒印龍ノ字カ

願以此功德　平等施一切　同發菩提心　往生安樂國　本書半切ニ御書

林光寺由緒書ニ

奉敬尊像ハ高祖大師之御眞筆靈告感得之阿彌陀如來ノ尊像ナリ其由來ヲ伺ヘ奉ンニ當山開基法善御房俗姓ハ葛原親王ノ後胤葛西三郎清永之男清重ナリ則御教導ニテ聞法隨喜之余リ御弟子トナリ法名法善ト給リ則舊領ニ草庵ヲ結ヒ聞法隨喜シ懇念フカクシテ道俗念佛シケレハ里俗草庵ノ地ヲ法喜塚ト唱ヒケリ爾ルニ法喜御房草庵ノ本尊ヲ願ヒケレハ聖人御自畫下サレタル尊像ナリ則草庵ノ本尊ト敬ヒケル然ルニ法善御房寶治二年念佛往生ス爾ルニ其后云云 中畧 寛延三年庚午七月此御本尊紀州大守宗將卿度々ノ靈告感得ニ依テ殿舍ニ超招厚拜有夫ヨリ佛法大道理御聽キ相成リ隨喜不斜當來出離解脱ハ偏ニ此本尊ノ如被カナランコトヲ謝セントテ四幅ノ御影ヲ圖畫在セラレ正シク本尊之靈告現然タリ豈ニ何ノ疑處有ンヤ云云

右ハ明治二十年三月廿日倩。林光寺ニ到リ書寫スル處御寄附之御畫ヲ拜スルニ聖德太子ハ立像ニシテ柄香爐ヲ持上ニ御賛アリ御直筆ノ如シ但シ右向キ眞鸞上人像ハ黒衣座像白襟袈左之方ニ親鸞ト遊サル蓮如上人像ハ赤緊衣座像右向キ右之方ニ蓮如ト遊サル七高僧ハ一幅ニ位地 0 00 00 00 如此ニ被遊傍ラニ其僧名ヲ題シ玉フ

右イツレモ絹地ニ金泥極彩色緻密精妙之御畫也表裝織物ハ御陣羽織ノキレト傳フルヨシ

寺僧口碑ニ傳フルヨシニシテ語テ曰ク此御寄付アリシ由來ハ宗將卿御眼疾ニテ御醫藥彌々御シルシモ不被爲在處或夜阿彌陀如來御枕邊ニ出現我ヲ信シ給ハヽ御平癒アルヘシト告ケ給フト御夢見被遊ショリ御近邊四谷赤坂青山等之寺々隈ナク捜索ヲ命シ給フニ御夢ニ叶フ處之尊像發見セス風ト鮫ケ橋林光寺ナル草庵ノ本尊ヲ御覽ニ供ヘシニ正シク御夢見被遊シニ寸分モ違ハス不思議之告ナリト御隨喜不斜深ク御信仰アラセラレシニ果シテ御平癒被遊ケレハ何カナ御報ヲモ可賜之趣可申上由御沙汰ヲ蒙リシニ同ヨリ草庵ノ事宗規親鸞蓮如兩上人七高僧ノ幅モナク一寺ノ躰ヲナサシ難キ次第ナレハ願クハ是等

御寄付ノ程ヲト願ヒ上奉リシニ不斗恐多クモ御直書ニテ賜リシ然ルニ蓮如上人ヲ赤衣ニ被遊シ故當宗ニ於テハ親鸞上人ヲ初黒衣ニ限リ候ヘ嚴ナ御寄付之如クナラハ本山ヘ稟請允許ヲ不經レハ草庵ニ揭クル事叶ハス仰キ願クハ黒衣ニト希ヒ奉リシニ不苦其趣本山ヘ御使者ヲ以テ可被仰入トノ御沙汰ニヨリ有躰本山ヘ具申セシニ重キ御由緒之御寄附特別之儀ナリトト御幅毎ヘ本願寺法如上人裏書捺印シテ下付セラル以來林光寺赤衣之眞影トテ眞宗寺中之名物トナリ天下數万之門徒誰壹人知ラサルモノナキニ及ヒタリトイヘリ

一寶曆五乙亥年七月十一日來年御國元ヘノ御暇可被仰出トノ御沙汰之由西尾隱岐守ヨリ書付ヲ以テ被仰出

一同六丙子年二月二十九日當年御初入之儀
大納言樣御所勞未御全快ニモ不被爲在候ニ付當年ハ御暇被　仰出間敷トノ御沙汰ノ旨堀田相模守ヨリ書付ヲ以被　仰出

一同七丁丑年五月廿四日　富宮樣御逝去

一同年七月二日　大納言樣御逝去

寶曆七年丁丑　公三十八歳

八月公襲職嗣立

御相續

一八月七日　上使松平右近將監西尾隱岐守ヲ以
大慧院樣御遺領御相續被　仰出翌八日御登　城同廿三日御家督之御禮被　仰上

日蓮宗禁止

十月八日諸公子方向後日蓮宗御禁止同宗寺院御安置ノ靈牌悉ク上野眞如院ヘ御遷座
右之趣本日上野覺王院御使を以上野日光御門跡ヘ被　仰上御口上書御自筆にて被遊

按するに寛延四年の春御簾中の君御不例の時身延久遠寺へ御平癒御祈禱被仰入たるに若し御平癒無之時は當山へ御納り可相成樣にと同寺内願したる由其無禮深く御激怒に觸れ挫日論の一篇を御自著被遊たり此回御世に成らせ給ふを以て如本條日蓮宗御排斥被遊たる由に聞ゆ事は社寺制の部に評記す

中納言任官

一十二月朔日權中納言御任官　同六日御登城御任官之御禮被　仰上

寶曆八年戊寅　　公　三　十　九　歳

一三月十五日初テ御國元ヘノ御暇被　仰出

寺内佐吉半堂矢數

三月廿一日左津右衛門惣領寺内佐吉深川三十三間堂ニ於テ半堂矢數ヲ演シ射越惣一トナル

通矢一万千六百八十三本惣矢壹万四千六百三本　廿一日朝六時ヨリ廿二日明六ツ迄

半堂射越惣一　　紀州　寺内佐吉十一歳　三浦半歳弟子

佐吉廿三日御前へ被　召出拜謁常陸介樣永隆院樣方々樣にも拜謁殿より丹後縞一反常陸介樣より白銀七枚永隆院樣より紗綾一卷方々樣より金千疋拜領廿五日に左之通拜命す

此度半堂矢數惣一仕候に付部屋住にて被召出御切米八拾石被下置中之間格被　仰付之

廿六日佐吉左京大夫樣へ御禮參上之處拜謁を被命御秘藏の御弓二張　御前樣より郡内縞一反善修院樣より御帶地一筋御細工物品を頂戴す

御初入

六月始就藩

一五月廿七日江戸御發駕東海道大井川滿水ニテ六月二日ヨリ十四日迄御逗留同廿三日若山御着城

四月廿九日御發駕可被遊旨一旦被　仰出タル處同月廿六日擧姫樣(御二女)御逝去ニ付御延引本記之如シ

一八月廿七日御家督御任官御祝儀之御能有之

祇園南海歿す

江戸大火

一十一月十一日岡田大藏深川三十三間堂ニ於テ半堂千射ヲナス

通矢四百五十本　半堂

惣矢千射　和佐一平指南　紀州　岡田大藏 六歳

寳暦九年己卯　公四十歳

正月東觀

一正月十三日若山御發駕同廿五日江戸御着府

永隆院様 御實母 御所勞ニ付爲御看病早ク御參府被遊度旨舊臘公邊ヘ御達之處同十日ヲ以テ早ク御參府被成候樣ニト被　仰出ニ付本文之通リナリ

一三月十一日御登　城初テ御參府之節御禮被　仰上

七月再聘大閤一條兼香公女是爲明脱夫人

一六月十八日一條大閤兼香卿姫君愛君樣ヲ御再縁被　仰出

七月十六日京都御發輿閏七月四日江戸御着輿

一閏七月四日御結納御婚禮被爲整

歳儒臣祇園南海歿年七十五

寳暦十年庚辰　公四十一歳

一二月五日夜江戸大火

十五代史ニ曰五月夜神田邊ヨリ出火町數千町燒失深川ニ至ル大橋永代橋落ツ　有徳公之時瓦葺ノ制ヲ定メラレシヨリ四五十年來大火ナカリシカ此度ノ火災ニ市人多ク財ヲ其失ヒ生路ニ困ルモノ多シ

一三月朔日　公方樣御多病ニ付御退隱之儀京都ヘ御願被遊候旨被　仰出

一同月十日當年　將軍宣下ニ付御內存之趣被　仰上候處此節ハ御暇被　仰出間敷候追テ可被
仰出旨御書付ニテ被　仰出

一五月十三日　公方樣惇信公御隱居二之丸ヘ御移リ
右大將樣浚明公御本丸ヘ御移リ　上樣ト奉稱
十五日御登城　上樣ヘ御目見二十一日御代替ノ御禮被　仰上

幕府代替

九月、幕府世子家治公、任征夷大將軍、

一九月二日　將軍　宣下、三日ヨリ　公方樣ト奉稱

一十一月廿五日　公儀御慶事モ相濟候付御國元ヘノ御暇可被進處最早來春御參府迄御間モ無之ニ
付當年ハ御滯府被　仰出

是歲在江戶、以有將軍宣下大禮也、

寶曆十一年辛巳　公四十二歲

一二月四日將軍　宣下相濟候ニ付爲御祝儀御上屋敷ニ於テ御老中御招請御能被　仰付
同十一日ニモ有之御家中幷諸手代又モノ幷御出入町人ヘモ見物被　仰付

赤阪邸內類燒

一七月廿九日江戶赤坂御屋敷巽御門內御長屋類燒

寶曆十二年壬午　公四十三歲

御不例

是歲有病、在江戶、

一三月ヨリ御不例ニ付　中將樣 観自在公 ヨリ御願之通御滯府被　仰出

桃園天皇御崩御

一七月二十一日

桃園天皇崩御　寶算二十二　桃園院ト號シ奉ル　十五代史

同二十七日

後櫻町天皇御踐祚

後櫻町天皇 櫻町天皇第二皇女 踐祚、諱ハ智子御年二十三　同上

一八月六日御不例御全快御祝儀被爲整同十五日御禮御登　城

寶暦十三年癸未　公四十四歳

中屋敷へ御移徙

一七月四日江戸御中屋敷御普請出來ニ付御移徙

御簾中樣、榮三郎樣、金十郎樣、益之助樣致姫君樣ニモ御同所へ御引移

九月朔日始謁幕府世子家基公

一九月朔日　若君樣孝恭院樣へ初テ御對顔

明和元年甲申 六月十九日改元　公四十五歳

是歳、有病、在江戸、

朝鮮使

一二月廿七日朝鮮來聘使趙嚴、副使李仁培、從事官金相翊、登城拜謁、舊式之如シ三使御饗應、　中將樣水戸樣ト共ニ御接伴被遊　御當主樣御接伴御止之由

御滯府

一三月十五日御病後今以御爾々不被遊候ニ付當年御國許へ之御暇被　仰出間敷緩々御養生被遊候樣被　仰出

琉球使
新殿出火
薨去

一四月朔日朝鮮國ヨリ献上之鷹　上使ヲ以御拜領
一十一月廿一日琉球人讀谷山王子來朝登城引見アリ　十五代史
一十二月廿一日新御殿內、長局ヨリ出火　新御殿ハ永隆院樣御住居御殿也

明和二年乙酉　　公四十六歲

一二月十三日ヨリ御所勞
二月廿五日病薨於江戶赤坂邸之正寢、三月二日柩入於谷中感應寺火葬、十一日柩發江戶歸葬於濱中長保寺、諡曰菩提心公
一同月廿六日々御逝去　實ハ廿五日追テ御日取二十五日ニ替ル
三月二日谷中感應寺ニ於テ御火葬翌日御遺骨上野護國院ニ暫御安置同月十一日紀州ヘ御發棺東海道美濃路通御越、紀州長保寺ヘ御埋葬

御法號　菩提心院殿三品前黃門和願愍生

按ニ　公ニハ深ク佛道御歸依アラセラレシカ增上寺林光寺ニ等限ラス　高野山諸寺院ヘ御寄付ノ如キ尤多シ即チ續風土記ニ揭クルモノ左ノ如シ又御諡號ヲ以テ青巖寺ノ院號トナサシメラル、トアレハ御在世中既ニ御諡號御撰定アラセラレタルモノナルベシ

西院谷　櫻池院ヘ佛像　善集院ヘ佛像
　　　　如意院寺ヘ御佛畫　正覺院ヘ數品
谷上院谷　無量壽院ヘ御佛畫　蓮金院ヘ數品
南谷　寶性院ヘ品々
本中院谷　親王院ヘ御佛畫
一心院谷　金光院ヘ數品　蓮華谷　隨心院ヘ佛像　清淨心院ヘ佛像其他
一小田原谷青巖寺ハ寶曆年間御諡號ニヨリ院號ヲ菩提心院トナサシメラルト云々

菩提心公御簾中譜畧

初 順宮（ノブ） 後富宮 淨眼院樣 徳子

御養父 伏見貞建（タケ）親王 親王寶暦四戌年七月二十一日薨ス 乾德院殿ト諡ス

實今出川大納言公詮 御末女

御實母 伏見邦永親王姫宮基宮 公詮卿御簾中 寶暦九卯年八月廿四日薨 寶樹院殿ト諡ス

一元文四未年六月廿三日御緣組

一同五申年正月 伏見宮へ御引取

一同年八月富宮樣ト御改

一寛保元酉年三月五日爲御首途北野御參詣

一同年三月十六日京都御發駕 木曾路通

一同年四月五日江戸御着座

一同月廿二日御結納同廿三日御婚禮

一同年九月廿三日初テ御中屋敷へ被爲入

一寛保二戌年五月五日 宮樣ト奉稱

一同三亥年三月十八日御着帶

一同年四月十九日御袖留

一同年六月十三日御座所へ御移

一同年八月朔日御安產直松樣御誕生

一延享元子年九月二十五日御着帶

一同二丑年三月十五日御安產　勝姬様御誕生

一同三寅年五月廿八日御着帶

一同年八月廿八日御安產定姬様御誕生

一同五辰年六月十九日御着帶　御内々ニテ御祝アリ、實ハ五月

一同年閏十月三日御安產門之進様御誕生

一寛延三午年五月御着帶　御内々

一同年八月十七日御姬様御誕生　御早世

一寶曆二申年六月御着帶

一同年十一月十七日御安產千之丞様御誕生

一同四戌年十一月十四日御安產　逸姬様御誕生

一同六子年五月二十一日御安產職之丞様御誕生

一同七丑年五月廿四日御流產後御逝去御法號淨眼院様ト　日門様ヨリ被進

六月三日於谷中感應寺御火葬　六月九日紀州長保寺ヘ御發棺

同月廿五日御着棺　御靈屋和歌雲蓋院

淨眼院殿圓乘妙融大姉

御再緣

愛君（チカ）　高子　明脱院様

御父　一條大閤兼香公　寶暦元未年八月二日薨　圓成院ト諡ス

御實母　一條殿家女　寛政二戌年六月三日死去　榮秀院

一元文五申年四月十二日御誕生

一寶暦九卯年六月十八日御縁組

一同年七月十六日京都御發輿閏七月四日江戸御着座

一同日御結納御婚禮

一同年八月十八日初テ御中屋敷へ被爲入

一同十一巳年四月四日澁谷御屋敷へ初テ被爲入

一同十三未年七月四日御中屋敷御守殿へ御移徙

一明和二酉年二月　菩提心院様御逝去ニ付同三月五日明脱院様ト御改從　日光御門跡御附ケ被進

一同三戌年三月五日御守殿燒失ニ付御上屋敷へ御移リ

一同年六月朔日當分青山御殿ニ御移リ

一同五子年二月二十八日　重倫公ト御續之品從　公儀御尋有之御繼母ト御答

一同年十月廿三日　從姫様唯之進様益之助様久米之丞様ヲ御養ヒニ被　仰出

一同七寅年三月六日御中屋敷御守殿御普請出來青山御殿ヨリ御移徙被遊

一安永八亥四月四十御賀　御内々ナリ

一同年七月十九日御逝去　但表向ハ廿一日
一同八月十三日於谷中感應寺御火葬
一同廿日御發棺木曾路通九月十一日長保寺へ御納
御靈屋　和歌雲蓋院
御法號　明脫院

菩提心公公子譜畧

菩提心公御子孫一覽表

今ヲ御血統ノミヲ掲ケ御養女子御實ヒ等省ク

御子 — 御孫 — 御曾孫 — 御玄孫

一二三頁、一二四頁ノ間ニ入ル

- 直松 寳池院
- 勝姫 松平加賀守室 齋光院
- 粂之丞君 重倫卿 觀自在公
  - 總姫 一條左大臣輝良卿息所 後大政所ト稱ス 芳樹院
    - [illegible]君 早世 壽巻院
  - 錯姫 早世 妙榮院
  - 等姫 後改稱 松平相模守治道室 靜心院
  - 鐵姫 早世 智幻院
  - 彌之助 早世 一生院
  - 岩千代君 治寶卿 舜恭公
    - [illegible]君 松平陸奥守齊宗室 信解院
    - 齊姫 早世 雲嶺院
    - 御嬪 早世 觀達院
    - 倍姫 早世 法緣院
    - 豐姫 齊順公御簾中 鶴樹院
      - 菊姫 早世 瓊澤院
    - 空生院 流
    - 銈姫 早世 普現院
    - 乘之院 流產
    - 富姫 早 清樂院
    - 鋒姫 早世 示幻院
    - 柏姫 早世 容顏院
    - 浚姫 早世 幻雲院
  - 鉾姫 早世 春窓院
  - 雅之助 早世 空如院
  - 方姫 水戸少將治紀卿御簾中 恭岳院
  - 備姫 松平加賀守嫡教千代齊敬室 心蓮院
  - 乙之助 早世 妙智院
  - 丁之助 早世 如幻院
  - 如電院 早世
  - 御男 流產 幻露院
  - 御男 流產 緣覺院
  - 御男 流產 齊樹院
- 定姫 松平勝五郎へ許嫁 早世 觀妙院
- 門之進 早世 泰眞院
- 致姫 松平越前守室 光安院
  - 於義丸 松平越前守治好
    - 於廣 松平大和守嫡大隅守へ縁組
    - 於義丸 早世 光現院
    - 仁之助 松平越前守齊承 天梁院
      - 寬姫 早世 眞照院
      - 於義丸 早世 超倫院
- 御女 早世 慈緣明智
- 鎮之丞 內藤山城守政養 勇信院
  - 大吉 早世 寶嚴院
  - 旄之助 早世 澄月院
- 千之丞 左近將監賴興又修理大夫 從光院
  - 保姫 左京大夫賴啓室 覺明院
  - 於晴 早世 本行院
  - 榮三郎 早世 圓心院
  - 女 早世 唯心妙性
  - 國姫 早世 容光院
  - 房丸 阿部飛驒守正篤幾丸養子トナル 大嚴院
- 逸姫 早世 慈泉院
- 金十郎 左京大夫賴謙 壽德院
  - 義郎 左京大夫賴啓 廣德院
    - 峯姫 早世 幼見院
  - 賴充 本多中務大輔忠顯 含德院
  - 於鑑 水月尼 即恭院
  - 於英 早世 微妙院
  - 於律 相良志摩守賴德室 貞俊院
    - 於蓮
    - 於壽
  - 於錫 初加藤主殿頭政偏室 後阿部主計頭正精室 桂林院
    - 銀一郎
  - 友三郎 賴啓急養子 左京大夫 秀德院
    - 哲丸 左京大夫賴學 智德院 靜光院
      - 靖姫 御養子大成大輔賴永室 成等院
      - 久松丸 早世 深遠院
      - 㐮丸 早世 成選院
      - 充千代 早世 顯誠院
      - 粒姫 早世 貞樹院
      - 於悌 早世 容顏院
      - 德之丞 早世 淨幻院
      - 勇之進 賴英公 元左京大夫
      - 孝吉 賴久 當御代 御本家御相續 即茂承公
    - 龐姫 早世
  - 輔之丞 早世 叢林院
- 職之丞 賴久 松平下總守忠功又大外記 弟唯之進ヲ養子トス 大乘院
  - 五郎太
- 從姫 尾張宰相治行卿簾中 聖聰院
- 粂之丞 三浦長門守爲脩 嚴淨土院
  - 丈之助 長門守爲積
    - 女子
- 唯之進 初賴德 實兄忠功養子 松平下總守忠和 遊心院
  - 謙之助 早世 磐顏院
- 益之助 初賴徳 安藤賴輔 直矢 觀妙院
  - 於爲 三浦丈之助妻
  - 末女 早世
  - 捐吉 早世 心光院
- 粂之丞 初賴朴 阿部播磨守正由 厚德院
  - 西次郎 早世 眞正院
  - 於久 早世 琉池院
  - 於美 早世
  - 於澤 早世
  - 銕丸 阿部鐵丸從弟仍丸ヲ養子トス 光覺院
- 男 峯雲院 早世
- 男 即到淨源 早世
- 男 覺眞春夢 早世
- 男 過光眞流
- 女 陽雲院 早世

菩提心公

公子譜略

直松君
|
勝姫君

直松君　早世　寶池院

御母　富宮　淨眼院樣

一寛保三亥年八月朔日御誕生
一同月十一日　大慧公ヨリ御名直松ト被進
一同年九月十五日御宮參
一同四子年二月五日御箸揃
一延享二丑年正月廿二日御髮置
一同三寅年十一月一條殿姫君御緣組御内約
一同四卯年六月十四日御卒去
一同年七月十二日御尊骨紀州長保寺へ御着棺於和歌大相院ニテ御法事　御廟長保寺　御牌前雲蓋院

御法号　寶池院

勝姫君　後登姫又千間姫　松平加賀守重教室　壽光院

御母　富宮　淨眼院樣

一延享二丑年三月十五日御誕生同年八月廿五日山王へ御宮參

同九月廿七日御箸揃

一同三寅年八月十五日御髪置

一寛延三午年正月御疱瘡

一同四未年正月廿九日御紐直

一寶暦三酉年十月六日ヨリ御痲疹

一同四戌年四月廿七日松平加賀守重敎へ御縁組

一同五亥十一月十八日御歯黒初

一同十一巳年十一月十五日御結納同廿七日御婚禮

一同十三未年三月四日御袖留

一明和二酉年二月十五日御着帯

一同年四月二十九日御流産

一同年七月廿二日套（タウ）姫ト御改

一同五子年七月朔日千間姫ト御改

一同八卯年四月廿三日加賀守隱居肥前守ト改

一天明六午年六月十二日肥前守於加州卒去泰雲院ト号ス

一同月廿二日御摘髪壽光院ト御改

一享和二戌年十月二十九日御卒去　追テ御日取廿七日ニ替ル

江戸下谷廣德寺へ御納リ　御手前ニ御廟御牌前共無之

粂之丞重倫公　觀自在公

御本譜ニ掲ク

定姫君　後琴姫 圓妙院

御　母　富宮　淨眼院様

延享三寅年八月廿八日御誕生

一同年九月十三日御七夜御祝儀同十八日御色直

一同四卯年五月廿三日御宮參同十二月廿八日御箸揃

一寛延元辰年九月廿八日御髪置

一同三午年正月廿二日ヨリ御疱瘡二月十三日酒湯

一寶暦二申年十一月廿五日御紐直

一同六子年二月廿五日御齒黒初

一同七丑年十月廿三日琴姫ト御改

一同八寅年二月三日松平勝五郎 重寶後相模守 大慧公御外孫也 へ御縁組

一同年四月廿六日御卒去

一同月廿九日上野護國院へ御送葬

圓妙院殿證心法忍大姉　御牌前　雲蓋院

門之進君　早世　泰眞院

御　母　富宮　淨眼院様

一寛延元辰年閏十月三日御誕生

一同月十三日御七夜同廿三日御色直

一同二巳年七月廿八日御箸揃

一同三午年正月廿六日御卒去　池上本門寺へ葬

御法号　泰眞院殿觀達日長大童子　御牌前　雲蓋院　上野直如院

致姫君（ムネ）　松平越前守重富室　光安院

御實母　吉田氏　清信院　寛政十二年申年二月三日死去

一寛延三午年三月廿一日御誕生同九月廿三日御箸揃

一同四未年六月ヨリ御表立同九月十三日御宮參

一同九月六日御髪置

一寶暦三酉年九月七日御痲疹

一同六子年二月廿七日御紐直同四月朔日ヨリ御疱瘡七月四日酒湯

一同九卯年十二月四日松平越前守へ御縁組

一同十辰年二月十二日御歯黒初

一同十三未年七月四日御中屋敷へ御移

一同年十一月三日御結納同二十二日御婚禮
一明和四亥年十一月朔日御袖留
一同年十一月十九日御着帶
一同五子年三月二十五日御安產御男子御出生於義丸ト被稱
一同四月十八日御枕直シ
一寬政六寅年十二月八日表向十二月御卒去西久保天德寺へ御送葬
御法号　光安院殿眞譽性海智榮大姉　御牌前　雲蓋院
光安院君御子　菩提心公御孫
於義丸　松平越前守治好
內室田安右衛門督樣御女　定姬
明和五子年三月廿五日誕生同四月三日七夜　同八月十三日色直箸揃
同六丑年九月十九日宮參
明和八卯年十二月十九日右衛門督樣之御娘定姬樣御緣組
天明三卯九月廿五日從四位上侍從伊勢守治好ト叙爵
同月廿八日前髮執
同七未年六月廿三日婚禮
寬政十一未年九月家督同年十二月少將

享和二戌年二月廿九日越前守ト改
文政九戌年正月隱居
越前守治好子　致姫君御孫 菩提心公御曾孫

於廣　妾腹
天明八申年六月　生
享和三亥年十二月廿七日松平大和守嫡大隅守へ縁組

於義丸　母定姫
寛政二戌年十二月十八日生
同六寅年正月廿三日ヨリ疱瘡同廿四日早世　日取二十三日ニナル
光現院

仁之助　伊豫守齊承　後越前守
文化九申年四月弘、定姫君御養ヒ
文化十四丑年九月廿七日淺姫君樣御縁組
文政二卯年十一月廿九日婚禮
同七申年三月廿八日元服、從四位上、侍從伊豫守齊承ト改ム
同九戌年正月廿三日家督
同年八月十二日女子生寛(ヒロ)姫ト稱ス

天保二卯年十一月十一日早世　眞照院
同年十二月十六日少將ニ任ス廿二日越前守ト改
同十二丑年七月廿三日男子出生於義丸ト稱ス　日取四月三日ニ改ル
天保六未年四月四日早世　超倫院
天保六未年閏七月十二日卒去
法号　天梁院　越前運正寺ニ葬
「外男女子無之　將軍家齊公四十六男千三郎齊善ヲ養子家督相續」

姫君　早世　慈縁明智
御母　富宮　浄眼院様
一寛延三午年八月十七日御誕生即日御卒去
慈縁明智大童女　御廟　谷中護國院

鐵之丞政養君　内藤山城守政養後學文（サトフミ）又丹羽守　右近將監　勇信院
御實母　吉田氏　清信院
内室　始内藤紀伊守信凭叔母　離別　再縁　森伊豫守伯母　離縁
一寛延四未年九月十六日御出生
一同年十二月十八日大慧公ヨリ松平之御稱号御勝手次第御付被成候樣被　仰進
一寶暦二申年四月廿三日御箸揃

一同三酉年正月十八日御三男ニ　同年九月廿三日御宮參同十月御痲疹
一同五亥年十一月十三日御月代初同十二月五日御袴着
一同六子年三月御疱瘡十八日御酒湯
一同九卯年七月四日御中屋敷へ御移
一同十辰年二月五日御馬召初御手習御讀初
一同年四月十八日初テ御鷹御遣初
一同年五月廿一日山王氷川熊野御參詣
一同月廿七日天神八幡其外ヘモ御參詣
一同十一巳年三月十三日御弓御稽古初
一同年五月十二日初テ澁谷御屋敷へ御出
一同月十三日御居合御稽古初
一同十二午年正月ヨリ年頭初テ　殿様中將様へ御太刀目錄御持參御禮御盃事
一同年五月十九日御鎗御稽古初
一同十四申年正月廿九日御具足召初
一明和元申年九月廿八日内藤丹波守政苗（參州擧母城主）養子被　仰出
一同年十二月十八日袖留廿一日御引移
一同二酉年六月朔日初テ公方様ニ御目見

一同三戊年七月朔日月次初テ登　城同七日節句初テ登　城

一同年十一月廿七日丹波守隱居鐵之丞殿へ家督被　仰出

一同年十二月十九日　叙爵山城守政養ト改

一同四亥年正月年頭初テ登　城

一同月三日御謡初ニ付初テ登　城同十一日御具足御祝ニ付同斷

一同年四月十八日馬場先御門番被　仰付

一同年六月嘉定初テ登　城

一同四亥年十月二日玄猪初テ登　城

一同年十月十九日御鷹ノ鳫初テ拜領

一同年十二月十日前髪執

一同五子年三月十八日內藤紀伊守信凭（ヨリ）叔母於秀縁組

一同年六月十三日初テ在所へ御暇　八月廿九日發途九月七日在着

一同六丑年十二月十六日　結納同十九日婚禮

一安永四未年二月廿三日丹波守ト改

一同年十二月三日內室離縁

一同五申年大坂加番

一同六酉年四月廿七日大坂加番交代濟紀州若山へ立寄願相濟

大吉
雄之助
千之丞君

八月五日大坂發途六日若山へ着翌七日紀州出立廿一日歸府旅宿ハ若山本陣本町六丁目太郎右衛門宅

一同九子年八月廿二日妾腹ニ男子出生大吉ト稱ス

一同年十二月廿日森伊豫守 一作山城守妹 伯母ヲ再縁

一同十丑年二月廿九日婚禮

一天明元丑年九月十九日右近將監ト改

一同五巳年二月十八日内室離縁

一寛政六寅年五月十八日卒去 四十四才

嗣子無之同年八月三日内藤能登守養方叔父幾千藏ヲ養子遺領相續金一郎ト改後山城守政峻ト改ム

法号 勇信院 芝三田 光臺院

勇信院子 菩提心公御孫

大吉 早世 妾腹

安永九子年八月廿一日出生 天明元丑年五月十四日死寶嚴院ト号ス

雄之助 早生 同

寛政五丑年五月七日死是迄弘ナシ 澄月院ト号ス

千之丞頼興君 後榮三郎 葆光院 左近將監頼興 又修理大夫

御　母　富宮　浄眼院様

一寶暦二申年十一月十七日御誕生
一同月廿二日御髪垂
一同三酉年四月廿三日榮三郎ト御改名
一同年十月九日ヨリ御痳疹
一同四戌年二月五日御箸揃
一同五亥年二月廿九日御宮參
一同六子年二月二十五日御月代初同三月四日御袴召初
一同年四月二日ヨリ御疱瘡七月四日御酒湯御祝儀
一同年十二月廿五日油鳥毛御鎗　常陸介様重倫公ヨリ御譲
一同八寅年九月廿一日初テ澁谷御屋敷ヘ御越
一同九卯年四月十八日御馬召初御手習御讀初
一同五月十一日御鷹御遣初
一同十辰年五月十五日初テ山王氷川熊野ヘ御參詣
一同月十九日天神八幡稲荷天王ヘ御參詣
一同八月九日御堂ヘ御參詣
一同十一巳年三月十三日御弓御稽古初

一同年五月十一日御居合御稽古初
一同十二午年九月十九日御鎗初
一同十三未年七月四日御中屋敷へ御移
一同十四申年正月廿五日御具足召初
一明和二酉年八月廿八日御名乘賴興ト被進
一同年九月朔日初テ　御目見
一同月九日節句初テ御登　城
一同年十一月十五日月次初テ御登　城
一同日　若君樣 孝恭院樣 へ初　御目見
一同年十二月十八日從四位下左近衞少將ニ　御任叙同廿一日左近將監ト御改
一同三戌年正月元日年頭初テ御登　城
一同年三月御中屋敷御殿燒失ニ付靑山御殿へ御移
一同年四月十七日紅葉山初テ御豫參
一同年六月十六日嘉定初テ御登　城之儀御伺相濟候處御所勞ニテ御登　城無之
一同年八月二日雲雀初テ御拜領
一同年十月三日玄猪初テ御登　城
一同月二十七日御鷹ノ鴈初テ御拜領

一同四亥年五月三日御袖留

一同年六月嘉定初テ御登　城

一同五子年四月五日御前髪執

一文化六巳年七月廿日修理大夫ト御改

一同八酉年正月廿三日御卒去二月二日谷中龍王院ヘ御送葬

御法號　葆光院殿徹照藏具大居士

葆光院君御子　菩提心公御孫

保　姫 初於保 覺明院　左京大夫賴看公室　御妾腹

安永四未年七月九日御誕生

同年十二月廿七日御箸揃

同十丑年正月九日氷川ヘ御宮參

天明元丑年十二月五日　重倫卿 觀自在公 御養女ニ被遊

同二寅年正月廿二日御上屋敷ヘ御引移

同三卯年正月御疱瘡

同五巳年十二月廿三日御鐵漿初

寛政二戌年九月四日雅樂頭樣 左京大夫賴看公 ヘ御縁組

同三亥年七月朔日御結納同廿八日御引移御婚禮

同四子年八月御着帯之由同九月十三日御袖留
同五丑年正月朔日御安産峯御誕生
同九巳年正月晦日左京大夫様御卒去 廣徳院様ト稱ス
御離縁相成同年十二月廿二日青山御殿へ御引取
享和元酉年三月十七日御卒去四月四日谷中護國院へ御送葬
御法號 覺明院殿觀性元眞大姉

於晴殿

於晴殿 本行院 御妾服 公儀御徒秋山兵藏女クニ
安永九子年八月八日御誕生
寛政五丑年十一月廿二日御早世 十四才
御法號 本行院妙道日因大姉 御廟 千駄ヶ谷 仙壽院

榮三郎殿

榮三郎殿 圓心院 御妾腹
天明五巳年十一月廿五日御誕生
同六午年四月廿二日御早世
御法號 圓心院性善即生大童子 御廟 谷中龍王院 御牌前上野眞如院

御女

御女 唯心妙性大童女
天明八申年六月七日御早世 御廟 谷中護國院

國姫

國姫 容光院 御妾腹

寛政十一未年十二月十九日御誕生
同十三酉年正月十七日御早世
御法號　容光院妙照日現　　御廟　千駄ヶ谷　仙壽院

房丸殿 初頼矩（タダ）阿部飛驒守正篤 大嚴院　御妾服　豊高氏
内室　松平豊後守齊奥妹　初萬（ミツ）後聰　聰德院

享和元酉年九月三日御誕生
文化二丑年十月十五日御名御弘
同十三子年正月十三日御具足被進
同月廿二日御表御住居
同年五月十五日御額直御元服御袖留御前髪執御實名被進　頼矩ト
文政五午年八月九日　公邊へ御弘
同十月廿六日御弘被　仰出候ニ付向後樣文字ニ成
文政六未年八月十四日阿部鐵丸殿 粂之丞頼朴君ノ子父方従弟ナリ　養子被　仰付
同月廿七日養家へ引移正篤ト改
同年九月十五日初テ　御目見
同十月朔日月次初テ登　城
同月六日養父鐵丸殿死去

同年十一月廿三日遺領無相違被下鳫ノ間詰被　仰付

同十二月十二日松平豐後守齊興妹緣組引取置追テ婚姻願之通濟同廿七日引取（一ニ松平豐後守ノ父隱居溪山ノ女トアリ）

同月十六日諸大夫飛騨守ト改

同七申年四月十八日婚姻

同年六月十三日初テ在所ヘ御暇

天保二卯年十月二日願之通松平伊豆守（信順）弟益之助ヲ養子被　仰出同月七日引移

同年十一月廿日病氣ニ付願之通隱居家督無相違養子益之助ヘ被下置鳫ノ間詰被　仰出

同十四卯年三月十七日卒

大巖院　淺草西福寺

速（ハヤ）姫君　慈泉院　早世

御母　富宮　淨眼院樣

一寶暦四戌年十一月十四日御誕生

一同五亥年三月十一日御髮置同十五日御箸揃

一同七丑年二月廿八日御卒去谷中護國院ヘ御葬送

御法號　慈泉院了空妙眞大童女　御牌前　靈蓋院

金十郎頼謙（カタ）君　後玄蕃　壽德院　又式部大輔　玄蕃頭　左京大夫　御隱居後宮內大輔

御實母　前田氏　公儀御書院番 前田万左衛門　妹於安　寶暦九亥年十一月十九日死 普明院雪操妙山大姉

御內室　菊亭實種卿妹綱君　御婚禮無之御離縁

一寶曆五亥年三月七日御誕生

一同年十二月廿七日御ハマ弓御拜領ヨリ御弘

一同六子年三月四日御箸揃同七月四日御髮置

一同九卯年四月十八日御宮參同九月十八日御月代初

一同十一月十一日御袴召初

一同十辰年二月五日御馬召初御手習御讀初

一同十三未年三月朔日ヨリ御疱瘡十一日御酒湯

一同年七月四日御中屋敷ヘ御移徙

一明和元申年二月廿六日御居合初同三月朔日御鎗初同二日御弓初

一同年九月十二日初テ上野御參詣

一同三戌年三月五日火災ニ付御上屋敷ヘ

一同年八月先月廿七日ヨリ御所勞御快御床揚

一同四亥年八月八日ヨリ御鷹打揚戸ニ成ル

一同年九月十五日御具足御召初

一同六丑年六月廿八日御袖留賴謙（カタ）ト御名乘被遊

一同七寅年四月三日御前髮執同日ヨリ御表御住居

一同八卯年十一月朔日御鐵砲初
一同九辰年九月廿六日左京大夫賴淳樣 香巖院公 御養子
一安永二巳年八月十三日左京大夫樣御屋敷ヘ御引移リ同廿一日玄蕃ト御改
一同年九月十五日初テ　御目見
一同年十月朔日月次初テ御登　城同月二日玄猪初テ御登　城
一同年十二月十六日從四位下侍從ニ被任式部大輔ト御改
一同三午年正月朔日年頭初テ御登　城
一同年二月十八日玄蕃頭ト御改
一同年三月三日節句初テ同六月嘉祥初テ同八月八朔初テ御登　城
一同年九月六日爲御湯治熱海ヘ御發駕 同十月三日御歸着
一安永四未年二月三日　重倫卿 觀自在公 御願之通御隱居賴淳樣御本家御相續被遊候ニ付左京大夫樣
之御家御相續
一同年二月廿三日左京大夫ト御改
一同年四月十四日義郎樣 御妾腹 賴香公 ヲ御願之通御嫡子被　仰出
一同年六月廿五日菊亭中納言殿御妹綱君御方ヲ御願之通御緣組被　仰出
一同年八月十三日日光ヘ御發駕同月廿三日御歸府
一同五申年十二月十六日少將御任官

一同九子年十二月七日禎瑞新田汐止

一天明六午年六月廿七日綱君御方御縁絶　御婚禮無之

一寛政三亥年五月御本家ヨリノ御合力米壹万俵御減少

一同年十二月右御返進

一同七卯年八月七日就御病氣御願之通御隱居宮内大輔ト御改十一日御隱居之御禮御名代松平左兵衛督ヲ以被[illegible]仰上

一寛政十二申年二月廿八日御息女樣方自今姫號唱

一文化三寅年九月六日御卒去　追テ御忌日二月ニ御改

御法號　壽德院殿慈元盈林日忠大居士　御廟池上本門寺
御手前御牌前無之

頼謙公御言行上田章記スル所左之如シ

壽德公

公、諱頼謙、菩提心公第六子、公性孝謹、群臣有老父母者、特賞假之使致孝思、有一士人、毎見孝子輒泣曰、爲人子者、豈不當如是哉、公聞之、及賞孝子、并賞泣者曰、見孝子喜之、是亦孝子也、公嘗一日一朝、偶甚雨、公思從者之勞、使人先歸設酒、及歸故經樽所、毎樽少嘗、顧衆曰、飮、衆皆感泣、公嘗曰、聖經賢傳、盡吾躬身上事、舍而不顧可乎、從香巖公之舊、厚禮、延紀平洲、使講經子、端坐敬聽、毎有會意、喜見眉宇、有所不通、茫然如喪、公喪夫人尋喪母氏、費用夥多、封內之民、相共謀獻貳千金、有司以白、公命還之曰、寡人恐重傷民、雖頗覺多費乎、內外節儉、未圖公私之用、汝衆勿以爲意、因命有司曰、民情至此、宜益撫恤之、公知 愛久澤 高道質直、而有才幹、擢爲司農、固辭、公强之、乃稱病不出拾餘日、草憲政畧一卷呈之、大意在損上而益下、厚賞而培力、禁貸而抑奢、視窮而時施、公覽而大悅、命專任之、乃起奉命、請先巡撫封內、便宜行事、首問孝友睦順者、得十數人、立發倉廩大賞之、既而婚嫁喪祭定制省費、及令出、莫敢犯者、未十年、國用大贍、高道家園、有櫻二株、及節儉令大行、乃請曰、群臣奉法者有年矣、臣園有二櫻樹、賜暇二日、偏引衆觀賞、使以展眉、乃掃園置酒、引衆縱覩 題門曰、人不拜出不辭、釋刀解帶、逐便坐花、不挾老貴、不侮幼卑、縱飮放歌 琴棋書畫唯其所適、以永一日、若不如此爲背君惠、因自與僮僕、洗觴行酒者二日、其明年、則徧會婦女、如去年、及期悉遣僮僕、獨與妻妾周旋其間、後毎歳以爲常、高道年六拾九、以歳除日歿、時大雪、舊制大臣之喪、假徒於公、高道之喪、衆徒爭先就役、嗚呼不能制、乃命使操撚子有得短者、乃弔曰、汝不幸不能從愛久澤君柩、其得長者徹夜踏雪不知寒、其得人心如是、高道自號

塊蚯子、嘗謂紀德民曰、予嘗竊謂、人無貴賤、無賢愚、有取敗之道一焉、德民曰、何、曰視利而已、德民稱爲至言、高道之死、公命有司曰、宜永守其成規焉

公ハ西條家第六世之君ニシテ　香巖公御跡ヲ繼カセラル實ハ　香巖公ノ御甥ニアタラセラレシガ　香巖公御子ナキヲ以テ御四十五歳ノ時　公之御謙遜厚ク御文學アリテ御倫德ニ渉フセ給フヲ御日利ニテ御養子ニ遊サレシト云フ御相續後ノ御治蹟多キ由中ニモ豫州禎瑞新田ノ如キハ殊ニ御力ヲ盡サセラレ永遠之利ヲ後世ニ遺サセ給フモノニテ安永以來百十有余年間如何ナル暴風海嘯ニモ損害ノ亊ナカリシカハ偏ニ君ノ御遺德ニ依ル處ナリト昨明治廿六年八月同新田堤防破壊ノ際信親シク承レリ君之世子賴看君モ亦明君タリシ亊ハ末ニ詳ナリ

壽德院君御子　菩提心公御孫

義郎　諱賴看　雅樂頭　後左京大夫　西條家御七世
廣德院

御實母　永石氏　於右代　寶暦四戌年十二月晦日生　文政十三寅年十一月廿四日死
精材院　目黒　正覺寺

御内室　修理大夫賴興君女　保姫　安永四未年七月九日誕生　寛政九巳年　離別

安永二巳年十二月十一日御誕生義郎ト被稱

同四未年四月十四日御弘メ御嫡子御願濟

同年六月朔日御髪置

同五申年　二月十一日金王社ヘ御宮參　同四月八日御痲疹

同七戌年二月九日御袴着　同八亥年正月二日ヨリ御疱瘡十二日御酒湯

天明五巳年九月十三日御實名賴看ト被進

同六午年二月十三日具足召初

同七未年九月十五日初テ　御目見

同八申年十一月朔日月次初テ御登　城同月九日御袖留

同年十二月十六日従四位下侍従雅樂頭ト御改

寛政元酉年正月元日年頭初御登　城同七日節句初テ御登　城

同二戌年二月九日御前髪執 於御中屋敷 宰相様 舜恭公 御挟ミ被進

同年九月四日保姫様御縁組

同三亥年七月朔日御結納　同七月廿八日御引取御内々御婚禮

同五丑年正月朔日峯姫御誕生

峯姫御弘無之同年四月五日早世　仙壽院へ葬ル

幼見院妙事日識孩子

同七卯年八月七日左京大夫様御隠居御家督被　仰出　翌八日左京大夫ト御改

同九巳年正月晦日御卒去　追テ御忌日廿日ニ御改

同年二月十一日御出棺池上本門寺御葬送

御法號　廣徳院殿一道壽林日盈大居士

外ニ御男子無之御舎弟友三郎賴啓君ヲ急御養子御遺領御相續也

信按スルニ當君最モ賢明ニ渉ラセラレ其御言行ヲ記スルモノ棡嚴秘錄ト題スル二卷アリ上卷ハ愛久澤直成下卷ハ江川忠隆記スル處何レモ當時奉仕ノ侍臣ナリ該書ヲ卷末ニ附ス

賴充

本多中務大輔忠顯　後鎮翁　御妾腹　於古代ノ方
令徳院

安永五申年四月十六日御誕生
寛政二戌年八月十五日本多中務大輔忠興急養子同廿二日袖留
同年十月十八日遺領相續平八郎ト改同年十一月廿七日諸大夫中務大輔ト改
文政四巳年二月九日病氣願隱居鶴翁ト改
天保九戌年三月四日卒去　淺草誓願寺ニ葬　令德院ト號ス

於鑑（テル）　後鐈姫（エフ）　又水月尼　圓恭院　御妾腹　同前

安永六酉年五月五日御誕生　同十五日　中納言様ヨリ御名於鑑ト被進
同九子年八月廿八日小出信濃守英筠ヘ御縁組
寛政四子年十一月廿八日　治寶卿ヨリ姫號被進鑑姫ト改
寛政五丑年四月五日結納同月廿七日引移五月廿二日婚禮
同十午年正月十二日流產
享和二戌年正月廿六日離緣
文化三寅年九月朔日　中納言様ヨリ御名鐈姫ト被進
同年十一月十八日松平佐渡守直寬ヘ再緣同廿七日引移
同四卯年正月十三日婚禮
同十二亥年五月十八日離緣
天保三辰年閏十一月廿八日祝髮水月尼ト改

嘉永四亥年二月四日卒　仙壽院ニ葬
　圓恭院水月日澄大禪定尼

於英　早世　徽妙院　御妾腹　同前
安永七戌年十月七日御誕生
同九子年四月廿七日卒　仙壽院ニ葬
　徽妙院境智日報大童子

於銈　相良志摩守頼徳室　貞俊院　御妾腹　同前
安永九子年六月廿八日御誕生
天明六午年十二月廿五日松平河内守嫡吉十郎　壹岐守定剛へ縁組
寛政六寅年四月三日離縁（婚禮無之）
同七卯年三月十三日相良壹岐守嫡志摩守頼徳へ再縁
同年四月朔日結納同十三日婚禮
同八辰年七月九日女子於蓮出生
同九巳年閏七月八日女子於壽出生
同十二申年二月廿七日　中納言様ヨリ姫號被進
文政十二丑年正月廿二日卒　澁谷大安寺へ葬
　貞俊院春山慧光大姉

於錫（カネ） 後於鍠（クワウ） 阿部主計頭正精室 桂林院　御妾腹　同前

天明元丑年十二月十一日御誕生御弘無之
寛政四子年三月十日内藤主殿頭政偏（コト）ヘ縁組
同七卯年二月十五日引移同月廿七日婚禮
同八辰年七月十日男子銀一郎出生
同十午年九月廿二日離縁
同十一未年四月廿七日於鍠ト改
同年十一月十日阿部伊勢守嫡主計頭正精ヘ再縁同十二月三日結納同十八日婚禮
同十二申年二月廿八日　中納言様ヨリ姫號被進
文政九戌年七月六日桂林院ト改
天保五午年七月二十五日祝髪
同十四卯年二月六日卒　淺草西福寺ニ葬
桂林院清譽皎月徳明大姉

友三郎　頼啓（ユキ） 左京大夫 御隠居式部大輔 西條家御八世 秀徳院　御妾腹　同前

御内室大久保安藝守忠眞妹美壽姫　天明八申年六月十三日生 嘉永元申年七月四日卒　泰壽院
天明四辰年十二月廿三日御誕生同廿九日友三郎ト
寛政九巳年三月十七日左京大夫様 頼看公 御願置ノ通御遺領御相續

同年九月廿二日大久保安藝守忠眞妹女ヲ御緣組

同十一未年十二月十八日從四位下侍從ニ御任叙左京大夫ト御改

享和元酉年十二月十六日被任少將

同二戌年二月五日御緣女ヘ御結納同九日　宮内大輔樣ヘ御引取即日御内々御婚禮　同四月九日表向御弘メ

文化五辰年十二月三日哲丸樣 賴學公 御誕生

同六巳年四月十一日御女子麗姫御誕生

同十二亥年正月六日早世　仙壽院ヘ葬

　勝光院妙善日法大童子

天保三辰年閏十一月廿五日就御病氣御願之通御隱居式部大輔ト御改

嘉永元申年七月十七日御卒去　追テ御忌日九月ニ改

同二十五日池上本門寺ヘ御葬送

　御法號　秀德院殿慈善法潤日實大居士

「賴啓公御嫡子ハ左京大夫賴學公ニシテ即チ當　茂承公ノ御父君ニ被爲渉、サレバ當公ハ　菩提心公御玄孫也西條御家ハ　源性公以來御本枝交互御繼嗣御血統世々連綿タルハ無論ニ付今賴啓公ニ止メ賴學公以下ヲ畧ス」

輔之丞　早世　叢林院　妾腹　於古代ノ方

天明六午年十月十八日御誕生

同七未年六月廿一日御卒去　　　　仙壽院ニ葬ル
　叢林院殿華香曰勝大童子

職之丞（モト）頼久君　松平下總守忠功（カツ）大乘院　　隱居後大外記
　御　母　　富宮　　淨眼院様
　内　室　　松平下總守忠啓女　　於久仁　寛政三亥三月十六日卒 桃仙院

一寶暦六子年五月廿一日御誕生
一同七丑年十一月四日御箸揃同廿七日御髪置
一同年十二月廿六日御中屋敷御内證へ御移
一同九卯年四月十八日御宮參
一同十辰年二月五日御月代初同十一日御袴召初
一同十四申年閏十二月十三日青山御殿へ御移徙
一明和二酉年十一月十一日御手習初御馬召初
一同三戌年六月十九日御請初
一同四亥年閏九月三日御居合初同六日御鐵御弓初
一同六丑年十二月十九日御具足召初
一同七寅年四月三日御袖留御額直頼久ト御名乘被進　同日ヨリ御表御住居
一同九辰年五月三日御前髪執

一天明三卯年正月十六日松平下總守忠啓(ヒラ)聟養子ノ儀月番御老中ヘ御達被遊候處御勝手次第ニ被遊候樣ニト差圖有之
一同年五月二日松平下總守願之通聟養子被　仰出同廿八日引移
一同七未年正月廿一日下總守遺領相續被　仰出
一同年二月十五日右御禮三月十八日　諸大夫下總守忠功(カツ)ト改
一同月廿八日月次初テ登　城
一同年三月三日節句初テ登　城
一同八申年十一月七日婚禮御整
一寛政二戌年十一月廿七日四品ニ叙
一同三亥年三月十六日内室卒去
一同丑五年十一月病身ニ付實方弟唯之進殿ヲ養子同廿八日隱居家督唯之進ヘ相續
一同年十二月十六日大外記ト改
一文政十三寅年七月廿九日卒去　歲七十五
　法號　大乘院殿前四品融明慈諡大居士　谷中天眼寺

從姫君

從姫君　尾張宰相治行卿御簾中　聖聰院
　御實母　村上氏女　天明元丑年八月御由緒之御方同樣ノ御取扱被仰出　文化九申年五月廿三日卒　法成院
一寶暦七丑年十月十三日御誕生

一同年十二月廿六日御中屋敷御内証へ御移
一同八寅年四月五日御箸揃
一同九卯年五月三日山王御宮參
一同年九月十八日御髮置
一同十三未年十二月廿九日御紐直
一明和三戌年三月五日火災ニ付御上屋敷へ御移
一同年六月朔日青山御内証へ御移
一同四亥年二月十八日ヨリ御疱瘡廿九日御酒湯四月三日御祝
一同年十一月廿七日御齒黑初
一同五子年十月廿三日　明脫院樣御養之段被　仰出
一同七寅年三月六日御守殿御普請出來　明脫院樣ト御一所ニ御移徙
一同年十月四日初テ上野へ御參詣
一安永四未年三月十三日攝津守樣義柄へ御緣組
一同六酉年正月廿五日攝津守樣御義　尾張宗睦卿御養子被　仰出　尾張中將治行卿ト御改
一同年十一月六日　中將樣ヨリ御結納御請被遊
一同七戌年九月二十九日緋傘幷御同朋御召連之儀達濟
一同九子年四月十一日御入輿同日御婚禮

一天明元丑年六月廿九日御袖留
一同年七月四日御着帶
一同年十月十五日御安産御男子御出産御名五郎太ト從ニ尾州樣ニ被進　御早世也
一寛政五丑年九月五日　尾張宰相樣（治行卿）御逝去ニ付同十九日聖聰院ト御改
一享和二戌年八月尾州ヘ御湯治ニ御越御逗留
一文化元子年七月廿七日於尾州御逝去
　御法號　聖聰院殿大譽妙響瓊林大姉

粂之丞爲脩君　三浦將監　嚴淨土院　又丈之助　後長門守
　御實母　法成院
　內　室　植村出羽守家道女
一寶暦九卯年四月十一日紀州ニテ御誕生
一同年五月十一日粂之丞ト　中將樣重倫公ヨリ御名被進
一同年十月十八日御弘メ
一同十辰年二月十一日御宮參御箸揃
一同年五月六日三浦遠江守御家老ヘ養子將監ト改
一同年六月廿七日遠江守屋敷ヘ引移
一同十一巳年十二月四日髮置

一同十三未年正月十八日袴着
一明和三戌年三月十一日丈之助ト改
一同八卯年五月十六日具足着初
一安永元辰年十二月四日袖留
一同三午年五月晦日前髪執 重倫卿直ニ御挾被下 同十二月疱瘡
一同四未年七月十七日養父長門守死去
一同年九月家督
一同五申年十二月十五日諸大夫長門守ト改
一同七戌年八月五日植村出羽守家久妹ヲ緣組
一同八亥年六月五日婚禮
一天明元丑年九月十四日男子丈之助出生
一寛政元酉年九月四日死去 三十一歳 崇堅寺へ葬
法 號 嚴淨士院義嶽慧了居士
嚴淨士院子 菩提心公御孫

丈之助君

丈之助 長門守爲積 母植村出羽守家久妹
妻 安藤勘解由直矢女 從弟之續ナリ
天明元丑年九月十四日生

同年十月十三日　大殿樣ヨリ名丈之助ト被下
寛政元酉年十月父長門守家督
同九巳年十月十八日諸大夫長門守ト改
同十午年三月廿四日安藤帶刀養子勘解由娘ヲ緣組
同十一未年十一月廿三日妻ニ女子出生

唯之進賴德君　松平下總守忠和（トモ）遊心院　號鳳翔
御實母　今出川家々臣梅田左衛門尉女　さよ　寶暦九卯年九月十九日死 保福院

一寶暦九卯年八月廿七日御誕生
一同十辰年四月二十一日御弘メ
一同十一巳年五月四日御箸揃御髮置同廿七日山王御宮參
一同十三未年十二月廿九日御袴着御月代初
一明和三戌年三月五日御中屋敷火災ニ付御上屋敷へ御移
一同年十月二十三日　明脱院樣御養之段表立
一同六丑年六月五日御手習御讀初御弓御鎗御居合初
一同七寅年正月三日御馬召初同年三月廿四日二本道具爲御持同十一月御疱瘡
一同八卯年十一月三日御鐵炮初
一安永二巳年閏三月五日御具足召初

一同月十一日御袖留頼徳（ヤス）ト御名乘被進

一同八月十六日御表御住居

一同九月十五日御前髮執

一天明元丑年十二月十一日（一ニ十一月二十七日トアリ）青山御殿ヘ御引移

一寛政五丑年九月二日松平下總守忠功（實御兄）養子同十五日忠和（トモ）ト改十八日御引移

一同年十一月朔日初テ　御目見

一同月廿八日家督

一同年十二月十六日敍爵下總守ト改

一同六寅年十一月十日井伊兵部少輔直朗次男織部正忠翼（スケ）ヲ養子

一同年十二月二十四日四品ニ敍

一同七卯年二月十日妾腹之男子弘メ名謙之助

實ハ養子以前元御家ニテ出生養家ヘ引移之節殘シ置去寅年引取其節在歳之由

同九巳年八月十六日謙之助死去　法號　霽顏院

一同九巳年六月三日織部正ヲ引取

一享和元酉年十一月七日惣髮

一同二戌年四月十日卒去　追テ日取廿二日ニ替ル

法號　進心院殿無礙了空　谷中天眼寺ニ葬ル

一退閑雜志ニ曰　按ニ下總守忠相ハ御實兄下總守忠功ノ跡ヲ襲キ勢州桑名拾万石ヲ領セラル頗ル文學ニ長シ賢明ノ聞エ高カリシ也白川樂翁ガ退閑雜記ニ左ノ記アリ

紀藩庶子唯之進願德主ハタヾコトニハオハセス學問モ廣クシ給ヒ武藝モヨクシ給ヒ今ハ下總守ノ養子ト成リ給ヒケル其潜龍ノ時之詩トテ聞タリ

緣耳追風駅在眞　韋彭鷄樸雅何人　治時能臣乱時姦　英傑由來不両身

道源無二流成萬　戸戸家論如乱絲　秦帝一焚眞快事　千年之下復誰誇

ナト聞ク蠻學師ナクシテ終ニカノ乱絲ノ如キ文字ヨミ覺エ給ヒ天文暦學ハ殊ニ勝レテソ聞エシ是モ師ナク只西洋暦又ハ考成ナト見テ悟リ給ヒケルカ過シ比暦ノ事ニヨリテ吉田靱負ノタクヒモ今海内ニ此御人壹人ニテ有ルヘシト賞シケリ桑名ヲシリ給ヒケルカ其コソト・ナシハカラルレ云々ト

樂翁侯ハ即チ有名ナル松平定信朝臣也百二三年前ノ昔安永天明ノ頃ニシテ既ニ泰西ノ學ニ志シ而カモ師ナクシテ暦學ニ在テハ天下一人ノ名ヲ博セラレシトハ非凡ノ程驚クベシ宜也樂翁侯ノ賞歎如斯ニ至ルヲ御言行等逸事ノ記類傳ハラサルコソ遺憾ナレ嘗テ菊池衡岳ニ默玄亭ノ題額ヲ書シテ賜ヒシニ衡岳詩ヲ賦シテ厚ク謝セシトノ事ハ南紀風雅集ニ載セタリ

鎰之助頼灑(アラ)君　安藤勘解由直矢(ノブ)　隱居後一得軒　後順輔　觀妙院

御實母　法成院

内室　飛鳥井中納言妹

一寶暦十一巳年正月廿日御誕生御名鎰(ヤス)之助

一同年五月廿七日御箸揃同八月十七日鎰之助様ト唱

一同十三未年四月廿三日御弘　公儀へ御達 五歳ト

一同年七月四日御中屋敷へ御移徙

一同年十一月廿九日御髮置

一明和二酉年十一月九日御袴着十一日御月代初

一同九辰年五月三日御馬召初
一安永二巳年閏三月三日御手習初御讀初同十五日御弓初
一同七月六日御鎗初
一同三午年五月十六日御鐵炮初
一同四未年三月八日ヨリ御疱瘡同七月十九日御居合初
一同九月三日御具足召初　一ニ十五日
一同年十一月五日　一ニ廿八日　御袖留頼融ト御名乘被爲附
一同月廿八日御上屋敷へ御引移御表御住居
一同六酉年六月廿七日御前髪執
一天明元丑年十二月十一日青山御殿へ御引移
一寛政二戌年五月朔日勘解由ト御改
一同四子年十月廿七日安藤帯刀養子被　仰付同日同人小石川屋敷へ引移同十一月紀州へ出立
一同五丑年四月見習被　仰出貳千俵被下之
一同六寅年三月十四日妾腹之息女於爲ヲ三浦支之助へ緣組
一同七卯年七月廿九日（一ニ、十九日）飛鳥井中納言殿妹女緣組被　仰付同十一月廿六日婚禮
一同八辰年十月八日妻出産嫡子捐吉出生
一同十午年九月八日名順輔ト改

一享和元酉年五月廿三日帶刀隠居家督被　仰付

一文化五辰年五月十五日依願隠居一得軒ト改

一文政七申年十一月十三日卒去

法号　観妙院

観妙院子　菩提心公御孫

於爲　妾腹　三浦友之助妻

某女　妾腹　寛政六寅年五月廿八日死七歳未満

捐吉　嫡子本腹　寛政八辰年十月八日出生　同九巳年八月十八日死　心光院ト號ス

名言私記ニ曰　益之助様一寸弓ニテ千射ヲナサル済ケル時　香嚴院様ヨリ御賞トシテ新木之一寸弓ヲ賜フ其席ニテ百射ヲナサル御手ノ皮ムケテ血流レタリトイフ

粂之丞頼朴（ナホ）君　阿部播磨守正由　厚徳院

御實母　法成院

内　室　養父豐後守養女　實妹　天保十四卯年閏九月十日死　泰壽院

一明和元申年十一月廿二日御誕生

一同三戌年十一月廿二日御髪置

一同五子年三月七日御月代初御袴召初

一同年四月五日御弘メ　公儀へ御達シ

一安永二巳年三月三日御手習初御讀初

一同五月廿七日御馬召初
一同八月十一日御弓御鎗初
一同四未年四月御疱瘡
一同五申正月十九日御具足召初　一ニ廿七日
一同九子年九月十三日御袖留頼朴ト御名被進
一天明元丑年八月三日御前髪執
一同二寅年正月廿二日青山御殿へ御引移
一寛政五丑年正月廿五日阿部豊後守聟養子被　仰付同年四月廿二日養家へ引移
一同六月十八日初テ　御目見
一同年十二月十六日叙爵播摩守ト改
一同月廿一日婚禮
一同七卯年五月十二日養父豊後守妾腹之女ヲ養女ニ被致
一同年六月十一日内室出産男子出生酉次郎ト稱ス
一同八辰年二月廿一日家督
一同九巳年四月廿七日内室出産女子出生　於久
一同十午年六月十九日御奏者番被　仰付
一享和元酉年七月十七日寺社奉行加役被　仰付

西次郎

於久

一文化元子年正月廿三日大阪御城代被　仰付四品ニ叙

一同三寅年十月十二日京都諸司代被　仰付侍從ニ任ス

一同五辰年十一月廿二日於京都卒去　追而十月十一日日取ニ替ル

法號　厚德院仁譽俊山巍然大居士　淺草西福寺ニ葬ル

香嚴公續言行錄ニ曰ク　糸之丞樣（太眞樣御弟後阿部播磨守殿）ニハ殊之外御強弓ヲ被篤射御奬被　仰進候事頻ナレハ御出精ニテ一寸之弓ニテ千射ヲ被成御射上ケノ節　太眞樣ヨリ被進タル雁金打ノ一寸三厘ノ御弓ニヲ被成候由御內々御感狀被進候由太田松之助ハ太田七三郎ト申儒者ノ養介ニテ京都ノ半堂ヲ通シ候ニヨツテ　太眞樣御代中ノ間番格被召出候人ナレハ初肩入被　仰付候御弓ヲ松之助ヘ被下置候ヨシ此御弓ヲハ御座所ニ御出シ置被遊候ヲ御小姓衆之中毎々拜領奉願候ヘ共不被下置候ヨシ

厚德院子　菩提心公御孫

西次郎　早世　蓂正院　母內室　泰壽院

寛政七卯年六月十一日出生

同九巳年正月十日ヨリ疱瘡同十二日死

蓂正院ト号ス

於久　早世　瑤池院　母同前

寛政九巳年四月廿七日出生

同十午年八月十日死

瑤池院ト号ス

於美
於澤
錛丸
峯雲院君

於美　早世
亨和二戌年五月十七日死　七歳未滿
於澤　早世
文化元子年六月十八日死　七歳未滿
錛丸正權ノリ　阿部錛丸　光覺院　妾腹
文化三寅年正月九日出生
同五辰年十二月十八日家督
同八未年七月十八日阿部備中守息女ヲ緣組
同十二亥年正月上旬ヨリ疱瘡
文政四巳年四月七日右緣女離緣
同六未年三月廿四日奧州白川ヘ所替被　仰付
同年八月十四日房丸殿　葆光院君御子菩提心公御孫正權父實方從弟ナリ　ヲ養子
同年十月六日死去十八歳　追テ日取十一日ニ替ル
光覺院ト号
房丸殿ノ事ハ葆光院君御子之部ニ記ス
御妾腹御弘メ無之御誕生年月日不知分
峯雲院水月如現大童子

即到淨源君

覺眞春夢君

遇光眞流君

陽雲院君

御實母　吉田氏　淸信院

一延享二丑年四月十四日御死去　目黑祐天寺ニ葬

即到淨源大童子

御實母　前田氏　普明院

一寬延四未年三月十四日御死去　御葬地同前

覺眞春夢大童子

御實母　淸信院

一寶曆三酉年正月十五日御死去　右同斷

遇光眞流大童子

御實母　梅田氏　保福院

一寶曆五亥年七月十九日御死去　右同斷

陽雲院本還春光大童女

御實母　村上氏　法成院

一寶曆十辰年正月十七日御死去　右同斷

彫龍秘録上

西條御七世左京大夫頼看公御言行

誠恐誠惶謹テ按スルニ　大君頼看公ハ　香嚴尊君之御賢明ヲ受繼セラレ御生得御仁恕深ク且御聰明ニシテ賢ニ任シ能ヲ御遣ヒ被遊故ニ各恩澤ニ浴シテ勤勞ヲ忘レ偏ニ時ノ移ルヲ知ラス元ヨリ右文左武ノ御世話厚ク賞罰悉ク眞照ニ曝サセ給ヒ未タ御弱冠ニテ淫聲遊佚ニ御心ヲ動サレズ透ト御一已ヲ御離レ丶ヒタスラ諫諍之道ヲ開キ給ヒ夙夜御政務ニ御心ヲ委セラル仍之擧世早ク當世之　賢君ト稱シ奉ル愚臣幸ニ御内慮ヲ得テ實ニ感歎スルニ餘リアルモノハ不顧重罪密々書ニ筆シテ秘庫中ニ收メ猶　大君ノ德澤日東ニ輝サン事ヲ欲スト言

寛政丙辰首夏　　愛久澤直成謹撰

一寛政乙卯秋

頼謙公御脚痛ニ付御隱居被遊　頼看公御家督御相續被遊候其砌　頼謙公御染筆　頼看公ヘ御示教被遊被進候由ニテ拜見被　仰付候ニ付右御明戒謹テ奉拜ス

人君ノ御行ハ威ニ服シ德ニナツクノ御ケ條

御勘忍ノ御ケ條

御節儉ノ御ケ條

右三ケ條御趣意誠ニ以凡慮ニ堪タル御文章也其節頼看公御意ニ我等此度年若ニテ御家相續之事甚不安心也御二代目御賢明ノ御名被爲輝候御跡ニ候ヘハ容易之心得ニテハ難相濟候條只政事ニ心ヲ用ヒ候外無之近比伊達遠江政事向宜段相達御馬ヲ拜領致候承ハ本懷至極ノ事ニ候我等モ遠江ニ劣ラサル樣心掛ル計也トノ御事也誠ニ思召込レ候御事ト難有感涙仕候

東照神君上意ニ人ハ目サスト言事大事ナリ手本ニ可成人ヲ常トシテ薬ニオトルマシト心懸レバ自然其通リニナルモノ也我壯年ヨリ甲斐之信玄カ武備ニ劣ルマシト目サシテ既ニ天下ヲ一統セリト　上意有リシト也

一同年冬御用之御序ニ此度登城其外他向へ着スル衣服上下等地合等モ得ト吟味爲致宜敷筋ヲ申付候樣掛リ之者一申付候是全ク我等年若故美服ヲ好候ニアラス節儉之儀ハ元ヨリ心得居テ平日ハ如何躰之衣類綿服ニテモ聊モ搆ハス着スルナリ表通之儀ハ相應之服ハ可着也其上追テ夫々遣候テモアマリ麁末ナルハ着用モ出來ス不遣ニハ劣リ候必シモ奢侈之思召ハ絶テ不被爲在旨御意被遊候

孔子禹王ヲ稱シテ間然スル事ナシ衣服ヲ惡ウシテ美ヲ黻冕ニ致ストアリ

一寛政八丙辰之夏高何某カ樣子奉伺候處　御意ニハ鈍ニハ無之大躰之人物ト思ハルヽ也併甚樣躰ヲカサル心アルカ御供先ニテ衣服上下迄着替候ヲ見及ヒタリ泥途ナトニテ衣服ヨコレナト致候ハヾ格別ナリサシタル事ニモ無之故其通ニ差置タルニ惡事ハ移リ安ク何某又右等ノ事有之故頭取共へ申聞誰トナク呵ラセ候ト御意被遊候

東照宮濱松御在城之砌リ御小姓何某茶宇縞之袴ヲ着候ヲ已ハ天下ノ奢ヲ引出スヘキ者ナリト御呵リ被遊候由

一調方ニ罷在候藤田熊次郎一封ヲ献シ度旨ニテ極密々指出候ニ付御序ニ指上候處夫ハ藤田圓藏ト申モノヽ兄弟ニ候哉ト御尋ニ付左樣ニ御座候段申上候ヘハ甚タ御機嫌ニテ今朝徒目付共ヨリ上

書致候處右圓藏事我等へ要門修行之儀ヲ進メニテ候事扱々奇特ナル事候定テ兄弟申談候モノト被　思召候左樣ニ志有之者アルハ我等ガ仕合ナリ何卒表立稱美モ致遣度モノナリ左アレハ又々存寄申上候者モ多可相成間取扱方モ可有之哉トノ御意ニ付難有奉畏候得共又々御時節モ可被爲在候先ツ極御内々御輕ク御持被遊御扇子之類當座ニ被下置候方可然趣申上候處左候ハヽ取計ヒ遣可申旨被　仰出則両人へ御意之趣申聞御扇子頂戴爲致候へハ誠ニ千金ニモ難替拜領物仕候迚殊之外難有カリ申候

唐堯ノ諫鼓近クハ

有德靈廟之訴狀箱抔皆諫諍之道ヲ開キ給ハン事ヲ顯シ給フナリ

一御相續之砌リ奉行江川又作被　仰付候御役人之人物幷御役人ニモ可相成人物其方一己之存念相認指上候樣ニトノ御事ニ付謹テ奉畏候私一存申上候儀ハ恐入奉存候然ハトテ外ニ眞存申上候者モ先ツ心當リ無御座候間愛久澤六郎御役外ニ被　仰付候半哉左候ハヽ互ニ申談不仕銘々相認可奉指上候間御突合　御覽可被遊哉ト奉伺候處甚尊慮ニ應シ左候ハヽ早々差上候樣トノ御事ニ付存念書差上候處又作上書ト符合ニテ尊慮又不被爲違候哉追テ御意ニ其方共上書一々盡ニ候我等了簡ト符合ナリ右書付ハ両人へ御預置候間御用之節ハ指上候樣可致御意ニテ殊之外御機嫌之御樣子奉伺候其後御目付方へモ被　仰出候テ不時之了簡書得ト申談指上候樣被　仰付候處則上書有之是又大底思召ニ相叶能申上候由御噂被遊候

唐太宗群臣ヲ宴シテ諸臣之言行ヲ王珪ニ問レシ事アリ

一御側詰頭役江上又八郎ト申者劔術禮容故實之儀ナト心懸ケ居見懸ハ手堅キ人物ニ相見エ候へ共生得愚騃ナル質ニテ道理不相分者ニ候然ルニ時々御異見ケ間敷儀申上候由誠ニ譯モ無キ理窟ダテノミニテ御用ニモ不相立候ヘ共御機嫌能御聞受被遊置候彼儀モ志ヲ盡シ候事故御押不被遊御聞流シニ被遊候由御意有之乍恐奉感心候

一寛政八辰四月比藤田何某眼病之趣御聞被遊候得ト樣子相尋申上候樣トノ御事ニ付難有奉畏候當人相尋御密趣之趣モ畧被申聞候處殊之外難有カリ申候モ早眼氣モ全快同前ニ罷在候由ニ付其趣奉申上候處右之者先比心付ヲモ致クレ候者ニ付一入御心掛リニ被　思召候樣躰ニヨリヨキ醫師ヘモカケ遣度御内意ニ候處快候ヘハ重疊ノ事ノ旨御意被遊候

香嚴尊君此御方ニ被爲入候砌御家中奥表尊卑ノ隔ナク病氣之樣子御聞ニ候ヘハ其身賴之者ヘ御尋被遊候又ハ御醫師抔ヘ御尋被遊候由

一同五月比御政事向ノ儀ニ付老職之面々ハキハキト不仕御不快被　思召候へ共先被遊方モ無之御儀ト甚御歎息被遊候其御跡ニテ御意ニ隨分ト萬事御勘辨被遊被　仰出候得共兎角御意ヲ返シ申上候モノモ無之候何事モ被　仰出シ通リ御意之通御最ト計ニテハ御安心不被遊候何卒御意ヲ返シ申上仕候者ノ多キ樣被遊度トノ御意有之誠ニ難有奉存候

香嚴尊君御咄シニ主人ノ詞ヲ返スハカタキ事ナリ或諸侯白晝ニ星一ツ見ユルハ其方共ニ見ユルヤト頻リニ申サレシ故側之者大方ミユルト申タリ然ルニ一人私ハ眼氣薄ク候哉見エ不申ト申切タリ後々其者目ヲ懸ケ遣サレシト言事尤成事ナリト御意被遊候由

一同比大殿様ト御間柄御睦敷御儀ニ付難有御義有之候得共恐多キ儀故不記

一御中間ニ顔黒ト申者手跡學文等心懸候由奇特ニ被　思召此以後押役抔明候ハヽ入遣候様御家老共ヘモ被　仰付置候トノ御意ニ付私儀モ承及罷在奇特ナルモノニ奉存候併押役抔ハ不向ニモ可有御座哉得ト承リ合候テ可申上旨御受申上内々手寄承リ合候處　尊慮ニ不違人柄モ宜敷相應ニ働キモ有之趣ニ付其段申上押役ヘ入候様被　仰出候

一都テ人才ヲ選ヒ候儀聖賢モカタシトスル處ニテ其人如何様ニ多藝多能ニテモ其器ニアラサレハ役儀ニ備ルヿ不能儀之　東照神君上意ニ重角人ハ才ヲ遣フト能ヲ遣フトノ差別甚大切ナルヿニ仰セラレ候由爰ヲ以テ要門ニ耳之目利トイマシム常時之様子少々學問アリテ利口ニ見ユレハ學力有之者役職ヲ申付テモ卒忽ハ有マシト思ヒ藝術賤レタルモノハ心モ健ナル様ニアヤマル最モ夫レ等モ其程ニ随ヒ御稱美ハ可有事ナレ共夫ヲ以テ役職ニハ任シ難キ事ナリ既ニ　東照神君三河ニテ三器ヲ被　召仕候節々蹄言弁要門四妄之俗語申上候得ハ其詞ヲ盡サスシテ御會得被遊甚御感心被遊有ハ相認候テ差上候様トノ御事ニ付左候ハヽ要門之語ハ又作ニ為相認可申段申上候得ハ其通リ致候様ニト御意被遊候

三河之流言ニ

佛高力鬼作左、ドチコチナシノ天野三郎兵衛

越後之流言ニ

重鎧、アカリ馬、唐人出立ニケハヒ鐸、ケヤキ柱ニ、木具ノ盃、耳ノ目利ニ俗ノ經

一御家中ニ
東照神君之御朱印持傳候者壹両人有之趣被爲聞候由ニテ　御意ニ左樣ノ者有之趣ハ誰モ不申聞是迄御存知不被遊候右等之家ハ御家之御美目ニモ相成候事ニ候得ハ万端ニ付御存知不被爲在候テハ不叶事ニ候其外三河越駿河越之面々其余ニモ其家ニ持傳候感狀武器珍器類御聞置被成可然ト思召候旨被　仰出候ニ付至極難有御事ニ奉存候私儀相調候テ江戸紀豫州御家中ヨリ爲認出候テ一冊ニ仕差上可申旨申上夫々申通取集候内御不例御薨被遊不備高賢殘心之事ニ候
香巖尊君江戸紀州御藩中之名家ニ持傳へ候感狀書札類御寫サセ武器ハ繪圖ニテ委ク御寫サセ御座右ニ被差置候

一御同席松平大學頭樣ニハ御年輩ナカラ其以前ヨリ御放蕩御大酒ニテ御身持モ不宜候處誰申上候哉委シク御承知ニテ　御意ニ大學事ハ不宜人物ニテ出會候テ益ナク損者之筋ニ候去ナカラ同席之ヿ也扱取樣ニテ害ニモ成マシクト思フハアノ如クナルハセマシキト我身ヲ戒候ヘハ益トナル也三人行ハ必我師アリトアレハト　御意被遊候

一御匕醫保科元東ハ一躰質朴之仁ニテ正道ニ相勤居候處次座ニテ赤城良閑事ハ生質不宜我意強者ニ候處御内證向ハ媚ヲ求メ候テ取入醫術ハ左程ニモ無之候ヘ共　大殿樣思召ニ相叶候ヨリ自然ト相募リ元東ヲ差置傍若無人ニ振廻候其段得ト　御推察被遊候テ御内々元東ヘ何トナク御胴服御菓子抔被下置候由良閑事ハ右之通ニテ殊之外失敬之所業抔モ有之候ヘ共　大殿樣思召宜敷御方々樣ヘ御藥等差上候者故御色ニモ御出不被遊却テ御稱美被遣候由

一何某御目付被　仰付候砌着スマシキ場所ニテ菅笠着用致候ニ付不調法申出候ニ付御内意相伺候ヘハ其段ハ御見及被遊候御外聞ニ拘リ候場所ニテモ無之タトヒ御目付タリ共昨今ハ昨今之事ニテ内々ニテ阿リ置候様可取扱何レニ不限昨今ノ者ハ其心得ニテ取扱度モノト　御意被遊候

一他向御返禮筋御勤被遊候砌リ御先箱之者御先ヲ心得違候テ御勤不被爲在御屋敷之御門ヘ御挾箱打候ニ付御徒モ御供開ラキ下座致掛先様ニテモ大門開ラキ取次モ下リ懸候處御目付共心付御勤無之御通リ過被遊御挨拶之御使御供内ヨリ被遣候テ相濟候其節本多中務大輔様ヘ被爲入候御對話之節右之御噂被遊候テ時候之見舞申込候ヘハ都合モ宜敷不調法モ無之候跡ニテ心附扨々殘念成ル事ヲ致候トノ御噂被遊候本多様御用人共外御側之モノモ罷在何共噂モ不致殊之外奉感心候様子ニ見受私共モ難有思召ト奉存候旨御附川合條左衛門申聞候

右等之御本意ハ

有徳顯廟　香巖尊君御行狀ニ品々被爲在候哉ト奉伺候

一惣テ致事向ハ五倫ヲ亂サザルヲ以テ肝要ト致候事ナレバ我等モ御先祖様思召ニテケ様　大殿様思召御意トアレハ一句ヲ不仕奉畏候心得ニ候其段ハ能心得居候様　御意被遊候

江川忠隆謹誌

彫龍秘錄下

一寛政七卯年八月御家督被爲繼候砌第一ニ御家中人器之儀委シク御尋被遊不及ナカラ愚眼之及所奉申上候得ハ大方思召ニテ符合仕猶　御意被遊候ハ御側近キ者又御役義等相勤候モノハオノツカラ其人々ノ様子モ御存被遊候ヘ共外様ノ面々又ハ末々ノ者マテハ御眼モ屆不申元ヨリ委ク申

上候者モ無之候間以來右等之儀ハ別テ心附ケ無遠慮可申上候又存寄等有之儀ハ何ニテモ可申上トノ御意有之候人器御糺被遊候事御政務之根元ニテ誠ニ難有思召ト奉伺候

一同時節之御意ニ御在所御政務之儀其外委敷御尋被遊候御在所表之儀ハ委細ニハ不奉存ナガラ御役前之所々ニテ申上候其節猶又御意被遊候ハ百姓共末々迄モ公税之都合此度御家督被爲繼候ニ付テハ何トカ御免シ被遊取扱ハ出來申間敷哉トノ御事ニ候誠ニ難有　思召ト乍恐奉感心候得共當時打續キ御物入之御中江戸表不時之御手當モ無覺束御時節無據中々此節　思召ニ被爲任間敷趣申上候然共猶御時節モ被爲在候ハヾ都合一兩年モ二三部御免被遊候ハヾ御在所ハ申ニ不及御近領御近國マデモ御德風可奉賞御事ト奉存候段　奉申上候

一同時節猶又人器之儀御判斷被遊候砌乍恐申上候ハ人器ヲ御覽被遊候御儀ハ兎角君主之御得手不得手モ被爲在御好嫌モアラセラレ候物故御大事ニ候必ス其人ノ陰氣陽氣强弱才不才ニハ御拘リ不被遊智仁勇之三德ヲ御目利之御手本ニ被遊御見極被遊候儀第一ノ儀ト奉存候最モ三德揃候者ハ千人ニ一人モ有之間敷候ヘ共其人々ノ口ヲ以テ御召遣被遊候得バ御人モ捨テズ御用ニ相立御目ガネ違ヒ申間敷ト申上候處甚　思召ニ相叶候御樣子ニテ以來モ毎々三德之御噂被遊候猶其節之　御意カト覺ヘ申候ハ十目ノ見ル所十指ノ指サス所トアル聖人ノ教誡ニ至極之事ト思召候是ヲ以考ヘ候ヘハ一己ノ好嫌ハ無之事ニテ兎角衆議ヲ聞クニシクハナキコト　思召候段　御意被遊候

一同時節豫州表御役人共此度御家督ニ付テハ猶以心得ノ儀萬端是マテ　大殿樣被遊候通リ相心得

民百姓末々マテ御憐恵行届候御趣意ヲ以取扱候様能々申聞可然旨御家老中ヘ被　仰出何レモ難有奉畏候其趣申遣候由ニ承申候

一同時節前段ノ通リ御操合當時ハ實ニ御六ツヶ敷御事ユヱ自ラ御苦勞ニ不被遊シテハ不叶御儀之旨申上候節　御意ニ其儀ハ隨分御心得被遊被爲入惣テ儉約ハ其御身御一分之事ヲ御愼ミ被遊候ヲ第一ト　思召候ヘハ如何躰ノ儀ニテモ不苦候間御側廻リ御平日之儀ハ御儉約被遊候テイサヽカ御不自由トハ不思召候間無遠慮申上候様可致候悪敷心得候時ハ表向公用向之儀迄モ儉約儉約ト申ニ相成本意ヲ失ヒ候事モ有之候別テ御家中渡物等減候様之儀ハ以之外ノ事　思召候夫等之儀ハ心得有之事ノ旨　御意被遊候

一寛政八辰年之春御慰事儀ニ付品々難有御趣意有之候得共餘リ恐入候事故洩置候

一惣テ人々不調法不念等ニ付御咎之儀ハ何分御用捨御憐愍之　思召被爲在候御事ト奉察候大納戸方ニテ御好ミ之御肩衣御注文致違候テ御用ニ相成不申趣申上有之候處右之御品ハ時節之御間ニサヘ合候ヘハ宜敷事ニ候間染直サセ御間ニ合セ可申候取扱人不念ニハ候ヘ共御差支ニ不相成事ニ候ヘハ役人共別ニ了簡モ無之候ヘハ不念等爲申候ニ不及トノ御事ノ由奥頭取佐々木久兵衛ヲ以御内々被　仰出候ニ付誠ニ難有　思召ニ御座候得ト　思召ノ趣キ申聞右躰御用捨之厚キ思召ニ奉伺候得ハ不念ハ爲申間敷候ト御受仕リ其段申聞候處大納戸役下村與市落涙仕難有カリ申候ケ様之品々余程御座候得共失念致シ洩申候

一辰之春宮益町出火有之候其節御内證ニハ御客様被爲在何角ト御取込ニテ御臺所モ殊之外混雜ニ

有之候處右出火ニ付御本家樣御初御緣家樣方ヨリ御人數被進候ニ付支度被下候儀御用部屋ヨリ申通奉所ヨリモ世話致候大勢ノ儀ユヱ埒明申間敷所御儉約統取共初骨折手廻シ宜ク被下相濟候其段御膳番方ヨリ達　御聽候テ御賄頭御儉約統取共マテ御內々御賞美之御詞被下候由ヶ樣ノ微細ノ儀マテ御心付被遊候ハ難有御儀ト末々マテ難有カリ候由ニテ淺井三左衞門擡出紋左衞門抔奉行所へ御禮ニ罷出候

一御儉約方詰小野卿藏病死仕候處男子無之妹ヲ養女ニ仕聟養子仕度トノ願差出御聞屆相濟有之候處右ノ女御廚團助ト密通致其外高久某モ品有之トノ風聞豫州表ヨリ相達團助儀ハ永御暇被下高久某モ退役被　仰付女儀ハ養女ニハ不相成趣親類共へ被　仰渡候然ル處御家老部屋留役共之內ニ私意有之哉ニテ色々ト文言取扱へ卿藏父之勤功抔申立卿藏跡目　思召ニテ御立可被下トノ調有之候御家老中ニモ了簡無之趣ニテ不得其意トハ存ナガラ人之家ヲ立候事ハ重キ義故存念差扣罷在候處御家老中ヨリ伺候節右文言ニ御不審被　仰出御家老中申取相立難ク相止申候右等ノ處迄御行屆被遊御明察之御儀ト甚恐入奉存候

一御家中ニハ三河駿河以來之筋目之者モ有之源姓院樣以來被　召出候面々モ有之又末々ノ者御取立モ多ク混雜致候へ共只今被遊方モ無之候然ル處御本家樣ニテ御家中由緒御調被　仰出候ニ付此御方ニテモ右ニ准シ先祖之由緒御糺可被遊トノ　思召被　仰出候處彼是御評議有之調方手張出來兼可申トノ御家老中了簡ニテ其段被申上先相止申候其後御用ニテ罷出候砌　御意ニ由緒調之儀ハ手張アレハ强テモ難被　仰付候併當時御用人以上之面々由緒之儀ハ御承知遊置度　思召

候トノ御事ニ付其分ハ私手元ニテ相調可奉入御覽旨申上候テ則添奉行平田林藏へ申通爲相調差上申候前件之　思召ニ付難有御儀何レ始終ハ　思召之通被遊可然御事ト私式ハ奉存候

一御目付方ヨリ得暮了簡書ト号ケ御家中諸士之善惡勤ノ精疎相認申上候事候豫州表ヨリモ同斷申上候然處右ハ　御前ニ御止被遊被置候事候得共御家老共へ爲御見被遊被置候ハヽ闕役之砌御人撰之一助ニモ可相成トノ　思召ニテ其段被　仰出候由片野長左衛門ニハ是迄左樣被遊來ラサル故如何ニ可有之哉ト談有之候奉行席申談候處是ハ厚　思召候へハ遊シ來ラサルトモイサヽカ不苦御事奉存候私共マテ拜見ハ指支モ可有御座哉御家老中御心得之御沮ニハ可相成事ト奉存候旨申達御受モ相濟候由追テ菅沼新右衛門被申候ハ右ハ御受之節　御意ニハケ樣之筋ハ帳面ニ仕立役所ニテ書留置速ニ見合改候ハヽ可然事ト　思召トノ御事ニテ奉畏候然ル處全躰　御意之通リ之帳面いろは分ケニ致シ古來ヨリ役所ニ有之候へ共中古ヨリ廢絶致シ此通リ相成御座候ニ付取建可申ト存候誠ニ恐入候御事之旨被申右帳面爲見候テ新右衛門殊之外感心被致候

一大殿樣御保養之爲メ何レカ相應之御場所有之候ハヽ御別居可被遊哉トノ御催ニ被爲在畧之儀達御聞候處如何被　仰出候御儀哉其段ハ不存御事ナカラ　御前樣御共々ニ御止メ被遊候御事之由ニテ　大殿樣御心ニ不被任由御噂被遊候其御樣子御內慮ニハ殊之外御歎被遊候樣乍恐奉察候ケ樣ニ　御親子樣御間厚ク被爲在候御儀誠ニ御孝心之御事ニ候末々ニテハ却テ父子之愛情モ厚キ物ニ候へ共重キ御方ニハ却テ左樣ニハ無之モノヽ樣世上共ニ相（落字カ）候事

一惣テ上立候者ハ御眼モ屆候事候御家中末々迄ハ御屆不被遊候間輕キ面々マデモ御用ニ相立候器

量之モノウツモレ不申樣相心得取扱候樣御家老中へ被　仰出奉行方へモ爲心得候樣被　仰出候
事之由御家老中被申聞候

一豫州ニテ重キ御役義相勤候仁私意相立候品幷婦人之事ニ付風聞之品有之御目付方ヨリ言上有之候併右婦人事杯ハ別テ浮々ノ事故　イツレ證立候儀共不被存候ヘ共重役ニハ不似合品ニテ御家中御治方ニモ不宜トノ　思召ニテ退役可被　仰付哉又ハ先此度ハ輕ク御咎メ被遊可然哉之儀江戶表御評議ニモ御決被遊カタク豫州表御役人共了簡爲申候樣トノ御事ニテ奉行所ヨリ承リ被遣候其返事ニ　思召之處重々恐入御最至極之御儀奉存候併當人殊之外先非ヲ悔候樣子御座候間以來ハ格別ニ愼可申ト奉存候間御役義御取揚被遊候ニハ及申間敷ト申來リ候其內又々御目付方ヨリ言上有之此度ハ金銀之譯合扱賄賂之筋且其人物之事マテ申上有之候右ニ付內々申合候ハ右ノ仁不埒ハ最早可申上樣無之候ヘ共右ノ內ニテモ又々浮々ノ申上モ有之且ハ甚那量ニハ候ヘハ當時豫州之御目付之內ニハ氣質有之候者モ相見エ候ニ付余リ再應之言上ニテ却テ疑惑ヲ生シ候併ムサト了簡モ難申上先此度ハ右之仁不運ト被存候旨內々申合候然ル處被爲召右之品御尋被遊候ニ付右不埒之儀何共申上候樣モ無之御役ヲモ相勤罷在候者別テ恐入候併御代初之御儀重キ御役人損候モ如何ニ付格外之　思召モ被爲在候ハヾ御宥恕被遊御取扱被遊候テモ可然哉ト申込候處御考被遊候テ　御意ニハ得ト　御思量被遊候ニ此儀ハ大事之儀ニ思召候當時御目付共之內我意強者モ有之候付若クハ私意ヲ以テ針程之儀ヲ棒程ニ申モ難斗事ニ候ヘハ取扱輕キ方ニ付候事上策ニ可有之哉　思召トノ　御意ニテ身ヲ側メ恐入誠ニ御明察之御儀兎角可申上樣無御座候左程

迄御屆キ可被遊トハ乍恐不奉存私共閉口差扣候段赤面仕候彼者儀家柄者之儀ニモ御座候ヘハ旁々　思召之通可然奉存上候旨申上其後御評議有之御內々重キ御呵リ被　仰出

一岡甚藏儀御廣間詰被　仰付先達テ被下候然ル處右之兄病氣ニ付御奉公難相勤ニ付當甚藏被　召出候事故隨分孝悌之道ヲ相盡シ可申處不所存ニテ兄ヘ當リ惡敷有之兄儀モ腹立致當時ハ品有之上京致候由右之儀ニ付豫州御用人三浦六郞左衞門ヨリ內々異見ヲ加ヘ候處不相用躰ニテ其段內々江戶御用人中ヘ申越右內聞ノ乍儀不所存者ニ候間御役躰ニ寄リ被　召遣候御心得モ可有之トノ儀申越其段達　御耳候併中小姓聞キ候ヘハ跡役可被　仰付筋之運ヒ故豫州奉行共了簡爲申候樣トノ御評議ニ相成豫州ヘ申遣候其內中小姓聞キ跡申立有之先順ヲ越候テ壇擠政助被　仰付候扨豫州ヨリ返事來リ候處右之者當時在江戶之儀故彼地ニテハ樣子難相分候江戶御用人方ヘ爲御聞當時之躰宜敷候ハヽ品モ有之間敷哉トノ趣ニ候併江戶ニテハ勤振之善惡ハ糺モ相成候ヘ共孝悌之道家事治方等ハ難相分事故猶是御評議有之詰ル處拙早順モ後レ候事故此次開口有之候ハヽ中小姓ニ被　仰付休息罷在候間相糺其後之處兎モ角モ御取扱ヒ可然トノ儀ニ相成御家老中ヨリ伺有之候處其取扱ニテモ可然哉ニ候ヘ共左候テハ始終當人事ハ心クラキ者ニ候ハヽ何故ヶ樣トノ心付ハ有之間敷候然者敎ヘスシテ刑スルノ類ニ當リ候哉ト　思召候間タトヒ此後中小姓ニ申付候共右不悌ノ趣相違候トノ譯ニテ內々ノ御呵リニテモ申通可然六郞左衞門申越候斗ニテハ難決品モ可有之候ヘ共奉行共返事ノ趣モ跡方モナキ儀トハ不申越候ヘハ全ク當人不悌之致方有之者ト　思召候右之通リ人倫之道ヲ不存者ヲ中小姓タリ共番人爲致候テハ不宜事候得ト申聞候

上恐入相改候カ心底直リ候趣ニ候ハヽ夫ニテ當人モ其故ヲ存候得ハ以後之示ニモ可相成間其上ニテ番入申付可然トノ　御意之由片野長左衞門甚恐入　御意之趣申聞候其後御評議有之御内々御伺リ被　仰付候

一都テ主人ノ心得違ハ勿論惡敷評判等ハ遠慮モ有之且ハ恐モ有之事故誰不申聞候事ニ　思召候其所ヲ無遠慮申聞候者何分御望ニ　思召候由　御意ニ付誠ニ恐入候　御意ニ御座候決テ申上候モノ無之者ニ御座候タトヒ傍輩中ニテ其人之受ルト受サルノ譯ニテムサト異見等申候者無之候然ルヲ右之通リ御意ハ誠ニ克己復禮之御趣意奉存候旨申上候處右之通實以　思召候間遠慮不致イサヽカノ儀ニテモ心得ト相成候儀ハ可申上候其段ハ愛久澤六郎ヘモ被　仰聞置候旨　御意被遊候

一鐘姫樣御附野口幸藏儀生得ノ氣質モ有之和順之取扱出兼候付自分病身ニテモ相成候哉御附　御免被下候樣内存之趣申出候處　大殿樣思召ニ先外ニ　思召付之跡役モ無之ニ付其儀御附置可被遊候併右躰内存ニ候ハヽ　思召ノ趣得ト不申聞候テハ相勤申間敷トノ御事ニテ　殿樣ニモ奉伺候處　思召モ無之則申聞振書付入　御覽候其内生得融通之儀不得手ニ有之ト文言當人内存トハ申ナガラ其人之失ニハ相成間敷哉トノ　御意ニ付細々御心付被遊候乍恐御最之御儀ト奉存候左候ハヽ生質堅情ニテト相直可申哉ト奉伺其通相濟申通候

一六月初旬ヨリ　御不例ニ被入候處追々御順快被遊御慰ニ大奥ニテ御側向之　面々ヘ御囃子被仰出候節地謡方差支中小姓吉見門兵衞儀常々御能之御相手モ仕リ候ニ付被爲　召可然哉ト頭取

ヨリ内談有之御家老中ヘモ申談候處苦シカル間敷トノ儀ニテ其段奥頭取ヘ申聞候處追テ頭取申
出候ハ右門兵衛被為召候儀ハ　思召有之不被為　召相濟候段申出候兼テ門兵衛儀御相手モ仕リ
御意ニ相叶候者ニ候得共大奥ヘ不被為　召御慰ニ御スサミ不被遊御規定御立被遊候　思召ト奉
恐察候

一御所勞中御徒然之節御側向之面々被為　召御話氣御晴カセ御保養被遊候由十月中奉申上候ハ右
之御無益至極宜敷御事ト奉存候　香巖院様ニハ御話遊ニ被為在候故右共若年ノ御附御側在候者前
御政務日々御聞被遊候後ハ只御側向之者共ト御話氣ニ御遊ヒ被遊候様ニテ自然ト御保養被遊候
哉ト奉存候此上御出精被遊候テモ御政事ノ儀ハ九ツ時ヲ限リニ被遊御講後ハ如何ナリ共　思召
之儀御話氣ニ御側之若者トモ被仰付御氣被遊候御工夫專一之御儀ト奉存候旨申上候處至極最之
事ニ候　香巖院様ニモ其通リ被遊候事ニ候ヘハ一シホノ事ニ候畢竟ハ御政事向モ胸ノ痛キ事ニ
テハ出來サル事ニ　思召候以來ハ其通リ可被遊間違ニ御家老御用人ヘモ為心得置候様被　仰出
候

一御所勞久々ノ御儀御持疾ハ御快被為入候ヘ共御手之御痛ミ殊ニ御一體御痛所之儀御難ニテ次第
ニ御勝レ不被遊冬分ニ至リ彌御不出來ニ被為成候御様子ニ付　上々様方ハ申上ニ不及御役儀重
キ面々ハ勿論御家中末々坊主諸士御中間人足駕ノ者躰ニ至ルマテ一統ニ　御本復ヲ奉願面々志
候諸神諸佛ヘ立願祈誓重キ修法等致シ候モノモ有之或ハ断食等致其内ニハ一命ヲ差上　御
壽命ヲ祈候者モ余程有リ候臣タル常トハ申シナガラ實ニ　仁君之御德風偃シ如此大奥ハ申ニ不

及御家中一統志ヲ盡シ候ト申モ不思議ナル御事ト存候尤何レモ相互ニ密々ニ仕候ヘ共自然ト相響候夫ノミナラズ御家中老婦女子ノ類ニ至リ銘々志ヲ盡シ候樣子ニ有之後々ニハ御出入之町人共又御用聞ニテモ無之御緣モ無之町家ノモノドモマテ一同　御本復ヲ祈候テ御札守等差上候モノ多ク有之候ケ樣ニ御德風行渡ルト申ハ前代未聞之事ニ奉存候

一御代知ラセラレ卯年八月ヨリ巳正月ニ至リ僅ニ十八ケ月ニ候ヘ共其内御政事御世話被遊候ハ四ケ月程ナラテハ無之候卯之年冬ヨリ辰ノ年春ヘカケテ御不例又々六月ヨリ以來御不例ニテ候其内モ御政事ニ御心ヲ嘗セラレ候ヘ共御所勞御障ニモ可被爲成トノ御事ニテ　大殿樣厳敷御制止被遊候故御遠慮モ被爲在且ハ次第ニ御所勞御募被遊候テ自然ト御遠サカリ被遊候如此僅之内ニ有之如ク御德風行渡リ御家中一同世上マテモ御德風ヲ御シタヒ申上候事ハ如何ナル御事ニヤ凡慮之及ハサル所ト奉存候　御逝去被遊候テハ御家中上下勢力ヲ失ヒ候儀ハ申迄モ無之候　御出棺御供之儀押テ願出候モノ一般之樣ニテ如何躰格下リニテモ御供仕度趣願出候モノ多ク有之候カヽル仁君ニ御座候ナカラ　御齡不被爲在御事實ニ御天壽トハ申ナカラ神モ佛モナキ樣ニ覺エ聖人之詞ニ天道是カ非カト歎息シ給ヒシモムヘナラス存候此一卷ヲ集ムルニ付テモ恐レ多クモ慈涙限ニサヘキリテ筆ノ宛所モサタカナラズ奉覺候

一仁君御早世之御事ハ歎キテモ果サル御事ナカラ其御德義ハ御家ノ不朽ニ稱シ傳ヘナム事疑ナク其靈ハ御家之御守護ト可被成御事ナリサレハコソ　廣德院殿之尊骨萬世ニ奉唱候御事モ自然ニ天之命スルモノナランカシ

巳五月

忠隆百拜

信按スルニ　江川忠隆ハ江川又作忠菊之三男ニシテ初又十郎忠隆ト稱シ後又作忠幹ト改ム明和七寅年二月部屋住ニテ左京大夫樣御近習番ニ被　召出後　義郎樣御附トナリ兄幾右衛門進忠病死ニ付父又作忠菊ノ家督三百五十石ヲ相續寛政九巳年之比ハ　左京大夫樣中小姓頭勤ナリ

南紀徳川史卷之十二

御事歷

御實母畧傳

觀自在公

諱重倫　御幼名　粂之丞　後岩千代　常陸介　御隱居後太眞

菩提心公宗將卿　御嫡　實御二男

御實母　公儀寄合御醫師吉田意安女

一ニ長井常安女トモアリ然レ共御卒去ノ時御遺物數多意安ヘ御下附其他金地院ニテ御法會及御年回御法會等之事老母ヨリ意安ヘ之文通存在之旨ニ而後年吉田左内ヨリ證跡提出ス全ク意安ノ女ナルヘシ

享保三戊戌年八月十日生

明和二乙酉年五月朔日清信〔イ心〕院様ト御改ノ旨表立被　仰出重倫公御家督ニ付テ也

同五戊子年九月廿三日紀州ヘ御發途

江之島鎌倉伊勢御參宮其外所々ヘ御立寄十月廿三日若山御着御座所ハ若山御城御内證也

同七庚寅年十一月七日西丸ヘ御移

安永五丙申年四月五日新御屋形出來ニ付御移徙自今吹上御殿ト唱フ

天明二壬寅年三月廿七日御落髮

同七丁未年三月五日七十之御賀

寛政十二庚申年二月三日於紀州御卒去長保寺ヘ御葬送

清信院

御簾中　有栖川職仁親王姫宮　於佐宮

御母　辰宮

寛延三庚午年三月御誕生

寶暦二壬申年十月十三日御縁組

同三癸酉年三月御紐直

同八戊寅年二月四日御歯黒初

同年二月十二日ヨリ御疱瘡三月三日御酒湯

同十一辛巳年六月十六日御月見之御祝

御月見御祝トハ京家ニテアルコトニヤ寶暦十四年五月ニ京都ヘ問合セタルニ榊原彌源太ト申ヨリ左ノ如ク申越タリト堀内彦大夫ガ日記ニ見ヘタリ彦大夫此比表御右筆日記方勤タリ

御十六歳ノ六月十六日ニ大饅頭ヲ臺ニ盛月ニ御供置其饅頭ニ穴ヲ明ケ其穴ヨリ月ヲ御覧被成候事ニ御座候虫喰格式等ニ所見無之何比ヨリ始リ候ト申濫觴モ相知不申何故ト申コトモ相知不申候右之臺ニ盛ヤウ并穴ノ明様ハ様子有之コトニ御座候甚御祝之事ニテ御座候

明和六己丑年八月廿一日御縁絶　御婚姻無之

一延享三丙寅年二月廿八日於江戸御上屋敷御誕生　御氏神　山王

一同五戊辰年四月九日　大慧院様ヨリ岩千代ト御内々ニテ御名被進

一同年四月十八日御嫡子ニ被仰出

一同年六月廿二日　菩提心公ヨリ油鳥毛御鎗御讓被遊
一同月廿三日山王ヘ御宮參
一寛永二己巳年九月十一日御月代初
一同三庚午年正月御疱瘡十九日御酒湯
一同年九月十三日御袴召初
一寶暦二壬申年十月十三日　於佐宮御緣組
一同三癸酉年四月廿三日御手習初御馬召初
一同年閏二月廿八日御鐵炮初四月十三日御打初
一同四甲戌年五月廿二日御弓初
一同月廿五日御遊所出來御移
一同月廿六日澁谷ヘ初テ御越
一同年七月六日御的初
一同五乙亥年十一月朔日初テ御登城御目見　十歳
一同月廿八日御元服常陸介ト御改御一字御頂戴重倫ト奉稱
此節ヨリ油鳥毛御鎗御止
一同六丙子年正月三日年頭初テ御登　城
一同年八月三日初テ雲雀御拜領

一同年十月五日御居合初

一同年閏十一月五日初テ　上使ヲ以テ御鷹之鶴御拜領

一同年十二月廿五日五節句八朔御登　城之儀被　仰出　同月十九日本文之儀被　仰入

一同七丁丑年正月七日五節句初テ御登　城

一同年十月廿七日御鎗御稽古初　土屋仙太郎申上ル

一同年十一月朔日從四位下左近衛權中將ニ御敍任即日從三位ニ御轉敍左近衛權中將如故被　仰出　十二歳

一同月四日八代蜜柑初テ御拜領

一同月六日御禮　御官位ノ御禮ナリ

一同八戊寅年正月十三日御具足召初

一同年正月廿八日御用役御使ニテ　菩提心公ヨリ御馬印被進

一同年六月四日初テ巣鷂御拜領

一同九己卯年正月十七日初テ山王御社參

一同年二月四日御鷹御遣ヒ初

一同十一月廿一日ヨリ御表御住居

一同十庚辰年三月朔日御袖留　十五歳

一同年五月十七日　上樣俊明公　御代初テ紅葉山　御宮御參詣之節初テ　御豫參

一同年九月十七日　將軍宣下以後　公方樣俊明公　紅葉山御宮御參詣之節二度目御豫參此節　右衛門

督様 田安悠然公 へ初テ御對顔

一同十一辛巳年二月六日御擧之雁初テ御拜領

一同年三月十五日御前髮執 十六歳

一同月晦日月次 御登城被 仰出 廿八日何出ル

一同年四月朔日月次初テ 御登 城

一同十三癸未年三月十一日御中屋敷御普請出來次第 殿様菩提心公御初御移徙可被遊候 中將様觀自在公ハ先其儘御上屋敷ニ可被成御座旨被 仰出

一同年六月二十七日從 殿様菩提心公御具足被進 御直ナリ

一同年七月七日御上屋敷御座所ヘ御移リ後是迄 御同所様被成御座候御座所ヘ御移

一同年九月朔日 若君様孝恭公へ初テ御對顔

一同年九月六日 若君様御宮參之節紅葉山ヘ御豫參

一同十四甲申年正月三日御謡初ニ付初テ御登 城

一同四月朔日朝鮮國ヨリ献上ノ鷹 上使ヲ以テ御拜領

御勝手向

一同月三日御勝手御不如意ニ付御定銀御減被 仰出

一同月七日 殿様菩提心公ヨリ御狩衣被進

一同年五月五日御登 城之節 若君様ヘ御對顔御幟御拜見

菩提心公御逝去

一明和二乙酉年二月十六日 殿様菩提心公御逝去

明和二年乙酉　　　　公　二　十　歳

御相續

三月襲職嗣立

一三月廿九日　上使御老中松平右京大夫松平周防守ヲ以　菩提心院様御遺領　御相續被　仰出翌日
御禮御登　城
四月十九日御家督御禮
九月十八日右ニ付御老中御招請

東照公百五十回忌

一四月十五日ヨリ日光山　東照宮百五十回忌一萬部之　勅會有之
十七日　公方様御束帶ニテ紅葉山御宮へ　御參詣
五月朔日　勅會下向ノ公卿門跡登　營九日管絃之御會アリ

宰相御任官

十二月十五日任參議左近衛權中將如故

一十二月十五日宰相御任官廿一日御禮御登　城

明和三年丙戌　　　　公　二　十　一　歳

三月赤坂邸火

御中屋敷出火

一三月五日朝六ツ時過御中屋敷御守殿長局內ヨリ出火御守殿并御中屋敷御殿燒失　西御殿ハ少々殘ル
御方々様不殘御上屋敷へ御立退　左近將監様 葆光院君 青山御殿へ御移

四月始就藩

御初入

一三月十八日初テ御國許へノ御暇被　仰出

同日御登　城御饗應御鷹御馬御拜領

廿二日御老中御招請

一同月廿七日江戸御發駕四月十一日若山御着城

一八月十八日御家督御任官初テ御入國ニ付於西丸大御能被　仰付男女芝居有之

御能組

加茂 藤二郎　田村 長之助　羽衣 鄉大夫　龍虎 長之助

祝言

岩船 藤二郎　末廣かり　いくゐ

開口

夫百足や治まる國の證し哉松の緑は色そへて君子の操嚴しく仁は深し鯨魚取る海風までも靜にて野山の奥の民くさも華封の祝は聲々に目出度かりける時とかや

作　坂井忠次郎

謠　吉右衛門

明和四年丁亥　公二十二歳

三月東覲

一二月廿七日爲御參府若山御發駕三月十三日江戸御着座

美濃路通リ東海道十一日御參府之處馬入川出水ニテ右之通リ也

十三日　上使十五日御禮

十二月一日任權中納言

一十二月朔日中納言ニ御任官　九日御禮

一同月九日向後御道中御關札殿文字御認させ之儀御達被遊

明和五年戊子　公　二　十　三　歲

四月歸藩

一四月九日御暇十五日江戶御發駕廿八日若山御着城

一七月十七日熊野日置浦へ淸國福州府之商船漂着　二十一人乘組七月晦日公邊へ御達

一九月廿三日御實母淸信院樣紀州へ御越

明和六年己丑　公　二　十　四　歲

三月東覲

一三月十三日江戶御參府

二月廿八日若山御發駕三月十一日御着ノ筈之處御風氣ニテ丸子驛ニ一日御滯在本文ノ如シ

十五日　上使即日御禮

一四月十七日　公方樣 後明公 來辰四月日光山　御社參被　仰出右ニ付爲御歡翌日　御登城之處右之節御豫參被遊候樣　上意ニテ被　仰出

八月去有栖川夫人

權中納言

御道中關札

日置浦へ支那船漂着

御簾中御絶緣

一八月廿一日　御簾中於佐姫樣御緣絶（御引移御婚姻無之）

明和七年庚寅　　公二十五歲

一三月二日公家衆御馳走御能御見物御登　城之節於御城田安大藏卿樣 高尙院公 へ初テ御對顏

五月歸藩

一四月四日御暇被　仰出同日御禮　御登　城之處

大納言樣 後明公御嫡家基孝恭公 ニ御元服御官位後初テ御對顏

一五月廿三日江戸御發駕熱田御渡海上海道御越　但御内用ニテ是迄御延引也

一宮崎家舊記ニ 四月十三日江戸御發被可遊處段々御延引五月廿七日江戸御發駕六月六日熱田御渡海四日市驛御泊リ村御通行同所ニ詰合ノ御鳥見六七日ニ御目見云々トアリ

一八月朔日於　公儀天正年中　東照宮江戸御入城支干相當ノ御祝宴有之

後桃園天皇御受禪

一十一月二十四日

後桃園天皇御受禪　桃園天皇ノ皇子御諱英仁御年十三

二十五日　後櫻町天皇ヲ尊テ太上天皇ト稱シ奉ル

明和八年辛卯　　公二十六歲

三月東覲

一三月十八日江戸御參府

例二月下旬若山御發駕之處御風氣ニテ御延引三月五日御發駕

上海道美濃路通御越　十九日　上使廿一日御禮

一五月八日御所勞ニ付上野御豫參不被遊
爲差御所勞にては無之候得共御尋後　御登城御對顏も無之御靈屋にて　御對顏も如何との御
事にて右之如し

六月十八日公子生是爲治寶公

一八月御登城之砌西丸下馬所込合候ニ付自今諸大名謁之儀御三家樣御一同　御見合被仰合

一十月紀勢之內鷂御場廢止被　仰出

御鷹匠頭　松下左五之丞

是迄紀州勢州之內鷂御場と相成有之候場所之儀此度其郡々へ被下置候間其所々にて如何樣共勝
手次第に取計可申旨此度奉行へ被仰聞候此段可申聞との御事候

下ヶ紙ニ

本文之通り被仰出候事に候へ共自今鷂御鷹野相止み候と申品には無之候是迄鷺なと御合せ被
遊候通何方にても御道筋に鷂下り居候へは御合せ被遊候筈右之通に付自今御場拵等致置候儀
堅不仕筈

明和九年壬辰　此年安永ト改元　公二十七歲

在江戸有病辭朝請

一二月六日御登城等之御心遣無之御保養被成候樣御沙汰被　仰出
去年八月より御瘤氣にて御登　城無之此節御快候付去年　上使を以御鷹之鶴八代蜜柑御拜領之

御禮御登　城之儀御伺之處御勝手次第と御差圖有之然るに又々爾々不被遊候付御醫師御供之儀御達有之候處御快と申にも無之付先　御登城等之御心遣無之樣本文之如く御家老へ被　仰出たる也

一二月二十九日江戸大火

未ノ刻目黑行人坂ヨリ出火南風强ク起リテ火焔所々ニ吹散シ忽ニ大火トナリ白銀麻布西ノ久保ヲ燒拂ヒ郭内ニ入リテ和田倉馬場先日比谷御門評定所傳奏屋敷老中少老ノ諸邸數十ヶ所燒失外ハ本所本石町神田下谷淺草ニ及フ處ニ酉刻又本郷ノ菊坂町ヨリ火起リテ駒込千駄木谷中ニ移リ上野山内ニテ仁王門山王ノ社谷中ノ本村ニ至ル翌日ノ申ノ刻ニ稍ク鎭火ス此火災ニ罹リシ地幅凡一里ニ過キ長サハ五里ニ及フ燒死スルモノ四百餘人明暦丁酉已來ノ大火ト云參府ノ大名邸宅燒失スル輩途中ヨリ其國邑ヘ引取ルヘキ旨ノ被　仰出アリ

一左ノ一節差タルコトナシトイヘドモ火事ニ因アルヲ以テ附記ス

大殿樣御代辰年江戸大火事ノ節翌朝ニ至リ火鎭リ　御殿ニ相詰候御役人共段々退出候則阿部市左衛門仲間一所ニ中ノ口ヲ下リ候テ白洲ヘヨホドアユミ出候處小戻リ致シ送リ出候坊主ヘ火ノ元、氣ヲ附候樣ニト小聲ニテ申聞候ヲ見及ヒ候者咄シ候ハ市左衛門ト申方年パイト申何トナク重々敷尤ニ相見エ候由イカサマ年若成モノ左樣ノ事モ有之候ハヽ汐合ニ寄出カシタテノ樣ニ申者モ有之候得共眞實上ノ御儀ヲ存候ヘハ自然ト樣子ニモ相知レ申モノ、是等ハチヨイト致シタル事ニ候得共古老ノ者ハ有之度候儀ニ候右市左衛門儀或ル節何ニヤラ御祝儀事ニテ一統御殿ニテ御酒被下有之節私儀風ト御用部屋ヘ參リカ、リ候處御勝手役人ヲ呼出シ市左衛門申聞候ハ御川部屋ヘ差出候御酒甚不宜候此方共ヘサヘ此通リニ候ヘハ外ニハ別テノ儀ニ可有之候御祝儀ニ付被下候品如何相心得候哉ト叱リ候儀ヲ承リ候此方共ヘサヘト申一言重立候役人之心付ニハ尤ノ儀ト存シラレ候　　麓の土

太田松之助大矢數

改元

一三月廿三日御暇被　仰出
御所勞ニ付御禮御登　城無之御鷹御馬ハ　上使之節御拜領
一五月廿八日未御發駕無之候得共御暇被　仰出候事ニ候間都テ御拜領物之儀モ　御在國之御振合ニ可有之段御書付出ル
一七月廿三日御暇後以　上使御鷹之雲雀御拜領
一十二月廿七日御鷹ニ御捉之鶴御献上
一九月廿六日太田松之助於京都半堂大矢數ヲ通シ候付御切米八拾石被下中之番格ニ被　召出
九月廿六日暮六時ヨリ同廿七日八時迄射上ケ
京都半堂開基惣一
益田外記弟子長屋六右衛門取立
太田松之助　當辰十三歳
通矢壹万千七百本　惣矢壹万三千四拾六本　此歩八分九厘六毛也
長屋六右衛門ハ外記ト異論有之義絶ニ付何等之御譽無之ト云松之助ハ太田七三郎惟勤ノ厄介ニシテ實ハ町醫師里雄倅也後一郎右衛門則貫ト稱シ御弓役被　仰付弓術指南御先手物頭格九拾石高ニナリ文政十三寅年五月七十一歳ニテ病死子孫弓術師家ニテ相續ス
一十一月十六日安永ト改元

安永二年癸巳　公二十八歳

一二月六日去春御暇從御癪氣今以啶ト不被成御座御參府之時分ニモ相成候得共無御心遣是迄通緩々御保養被遊候樣御沙汰被　仰出
一四月十六日去春御暇被　仰出御拜領物モ有之候付　御名代ヲ以御參府御禮可被仰上哉トノ御伺

出同廿三日先此義ニ不及旨被　仰出
一五月十五日御在國之御心得ニテ可有之哉御在府之御心得ニテ可有之哉ト御内談候所御在國ノ通ト御差圖アリ
一七月廿一日跡々　此御方ト尾州樣同年ニ御在國之御例有之哉ト從公儀尋ニ付左之通及答
一寛文二寅年二月南龍院殿紀州へ御暇同月發途被致候
一同年三月尾張瑞龍院殿尾州へ御暇四月發途被致候
一同四辰年二月南龍院殿紀州へ御暇三月發途被致候
一同年三月尾張瑞龍院殿尾張へ御暇同月發途被致候
一八月二日當秋御國許へ御越之儀御願相濟
當年ハ御在府年ニ候得共御所勞爲御保養御越被遊度旨御内意御伺之處御勝手次第ト被　仰出候也
一九月十五日今度御歸國之上御國許へ　上使被遣之儀御所勞中故此度ハ御沙汰無之樣御内意之通　上使被進間敷旨被　仰出
十月歸藩
一九月十九日江戸御發駕十月廿三日若山御着城
東海道美濃路通荒井御渡海無之本坂越御越被遊

公儀御機嫌伺

治貞公御家督

一十月廿二日御歸國ニ付以宿次御樽肴御拜領
御禮使ハ例　上使之通御城代松平圖書被遣

安永三年甲午　　　　　公　二　十　九　歲

是歲養病於國

一四月廿八日　公儀御機嫌御伺之御使山本九左衛門（寄合）被　仰付
御在國中三四ヶ月ニ一度御機嫌爲御伺御使御差下之儀ハ御定メニテ有之候得共御機嫌御伺計
リ之御使ハ元祿年中以後例無之也

安永四年乙未　　　　　公　三　十　歲

二月以病致職納西條侯賴淳公、襲職、是爲治貞公、

一二月三日　上使、松平右京大夫、板倉佐渡守ヲ以、御病身ニ付御願之通御隱居被　仰出、左京
大夫樣治貞公御相續被　仰出之
右御隱居御相續之御願ハ前年十一月廿九日三浦長門守ヲ江戶ヘ御差下シ御內意被仰出、當正
月廿一日水野土佐守ヲ以テ御差出ナリ

一三月十一日御隱居之御禮　御名代　左近將監樣ヲ以被　仰上

一七月廿九日御隱居後宿次ヲ以御鷹之雲雀御拜領

安永五年丙申　　　　　公　三　十　一　歲

一正月二日御隱居後初テ年頭在府御年寄ヲ以御太刀馬代御獻上

治貞公中納言任官

内藤因幡守死去

明脱院様逝去

一同月十一日御隠居後宿次ヲ以御鷹之鶴御拜領

一二月十五日　治貞卿中納言御任官被遊御同官故、表立ニハ
前中納言様ト奉稱御家中ニテハ　大殿様ト申上ル

一四日日光御社參ニ付御名代トシテ安藤帯刀ヲ日光ヘ被遣江戸ヘ入込之上被遣候也

安永六年丁酉　　公　三　十　二　歳

一八月六日御實弟内藤丹波守ヘ御對顔
丹波守殿大坂加番濟歸府之節願之上紀州ヘ立寄ラレタル也

安永七年戊戌　　公　三　十　三　歳

一六月廿三日御實弟内藤因幡守死去ニ付
兩御丸ヨリ宿次ヲ以御悔被　仰出　廿九日御本丸ヨリ龍眼肉御拜領

一此已後安永九子年十月六日御父方叔母　靜證院様御卒去之節幷天明元丑年六月二日御同斷遠紹院様御卒去之節共宿次ヲ以御尋御拜領物有之又同年八月廿二日御父方祖母　永隆院様御卒去之節モ宿次ヲ以御尋紀州ヘ　上使御使番古郡孫大夫被遣御干菓子御拜領西丸ゟモ相兼勤ル

安永八年己亥　　公　三　十　四　歳

一七月廿一日御繼母　明脱院様御逝去ニ付翌廿三日御悔宿次奉書出猶爲　御尋紀州ヘ　上使御使番福左兵衛ヲ以御干菓子御拜領
上使八月九日相濟廿二日歸府

天明元年辛丑　公三十六歳
一閏五月廿八日　公儀御養君家齊公被　仰出ニ付紀州へ　上使御奏者番土井大炊頭被遣　廿日御暇廿一日發途
天明三年癸卯　公三十八歳
一十一月游熊野
天明六年丙午　公四十一歳
一十一月七日御剃髮御名太眞ト御改
同月十四日御改名ニ付御稱號ノ儀　淸溪院様御振合ヲ以御書ニハ御名斗御認之儀　公儀へ御達
一同月右御剃髮ニ付紀州へ　上使新御番頭飯田能登守ヲ以一種御拜領
一十二月九日寒中爲御詩宿次ヲ以氷砂糖御拜領
翌未年六月十九日暑中御尋右同斷
天明八年戊申　公四十三歳
正月游熊野
寛政四年壬子　公四十七歳
一五月廿九日御召馬止ム
御手輕ニ被遊候爲也御用ノ節ハ御表御馬御牽セ被遊候筈

熊野邊御巡行
徳本上人引見
清信院様御逝去

寛政五年癸丑　公四十八歳
九月游熊野
寛政七年乙卯　公五十歳
九月私設壽筵
九月十三日五十御賀ニ付御祝儀物御上ケ
寛政十一年己未　公五十四歳
是歳游熊野
一四月廿六日熊野邊御巡行トシテ若山御發途五月廿六日歸御
寛政十二年庚申　公五十五歳
是歳召僧徳本賜廬于有田郡須ケ谷之山頂
一二月三日御實母　清信院様御逝去
右ニ付紀州へ　上使御使番被遣御拜領物有之
公ニハ御心頗ル猛〳〵シク、ワタラセツレトモ御孝心深クマシマシテ時ノ名僧タル徳本行者ハ御領分ノモノトテ特ニ被爲召　清信母公ノ御追福ヲ修メサセタマヒ又御ミツカラモ厚ク御歸依アリシト今徳本行者傳ニ記スル所ヲ左ニ掲ク行者此時攝州灘吳田ノ喜平次方ニ留錫アリシナリ
紀州前黄門太眞公ヨリ仰事アリテ願クハ國内イヅレノ山ニテモ心ニ任セテ勤ラルヘキヨシ御使両度ニ及ヒシカバ師畏リテ攝州ヲ去リ再ヒ須ケ谷ノ庵リニゾ歸ラレケルコトシ公ノ御母君清信院殿カクレサセタマヒシカバ御菩提ノ爲ニトテコノ御

舘ヲ賜リテ須ケ谷ノ山ニ移シ改メテ之ヲ師ノ庵室トハナサセタマヘリ尊變モトヨリ師ニ厚ク御歸依アリシヲ公モシロシメシケルヨリ御カタミニモト、オボシメシタルナルベシ師明ノ年ノ冬ノ初メマテ此山ニ閑居シテ御追善ヲ別行セサセタマヒケリ師資ノ宿縁タヾナラサルヨリ、カク懇ニ、モノシ給フナラン當來ノ增進佛道モ思ヒヤラレテ、イト尊カリケリ　文化九年ノ春ノ比紀州公ヨリ再ヒ仰言アリテ國內ニテ化益アラマホシキヨシ只管ニ請ゼラレタリ先ニハ固辭シ申サレシカド此タビハ强テ、モダスベキニアラズトテ、其年ノ五月歸國シタマヒニケレバ頓テ那賀郡和佐山ニ庵室ヲゾタマハリケル此比師ハ疾痎ヲナヤマセ給ヒケレバ紀州公侍醫某ヲシテ日々御藥ヲ調ゼサセ給ヒ又立期（リウゴ）トイヘルモノヲ晝夜侍セシメラレテ按摩セサセタマフニ必ス單險（フクメン）ヲ用ベキヨシ命ジタマヒシトナン御尊崇ノイタリ比類ナカリキ招カセ給フ事屢ナレバ總持寺ノ別行終リテ同月ノ廿七日貴命ニ應シ給フ北嶋マデ御迎ノ船五艘ヲ出サレ師ノ本船ハ新ニ造リ出シテ六挺ノ櫓ヲカケラル武田某命ヲ蒙リ御近侍三人水主頭ヲモテ護衛シ午ノ刻計リニ御舘ニ着セラル（此御舘ハ先君ノ御別業ニテ畑御殿ト稱ス）師弟ノ御禮節ヲモテ御對面ノ御式イトオゴソカ也　別座ヲ賜リテ十念請サセ給フコノ序ヲモテ一枚起請文ヲ講セシメラル、ニ士女スベテ合掌スベキヨシ公自ラ　命セラル御舘ノ內ニテ十念請ラル、事七度也送迎ノ御禮儀ハモトヨリ御饗具トモニ至ルマテ都テ清潔ナルベシトテ皆新ニ造ラシメタマヘリトゾ事終リテ總持寺ヘカヘラセ給ヒキ

紀人某の談に阿波に化益中の德本を御招請の時御迎のだめ鯨船三艘を以稻垣次左衛門に仰せ上人同船して琉濱に着す上人上陸跣足のまゝ歩行其土足にて濱御殿御床の前に着座　公出御あつて御對面あり不思議なるは上人の足一點の土砂つかす洗ひたる如くありしと云々前記とは別事なるや詳ならず

伊勢御參宮

文化元年甲子　　公五十九歲

一四月九日伊勢御參宮トシテ若山御發駕所々御立寄橋本マテ御越ノ處　御風氣ニテ同廿日歸御

本年三月五日右御參宮大和路其外所々御立寄ノ儀　公邊へ御達相濟

法躰の參宮

文化二年乙丑　　公六十歲

一正月十日御參　宮ニ付御拜ノ儀御法躰ニテハ難相成趣ニ付御有髮ニテ　御越御官服ニテ御拜禮被遊度トノ御內談ノ處御勝手次第ニトノ差圖アリ

下屋敷燒失

召德本受戒

七十三賀

五月拜伊勢大廟遂遊大和山城

一五月七日再御發駕　御參宮被遊、同月廿一日御歸國被遊

宮崎家舊記ニ五月六日若山御發駕川俣通リ同十二日松坂御着十五日　御參宮二見朝熊磯部へ御參詣田丸ヨリ丹生村御泊リ多氣村通リ御越御鷹等ハ參リ不申トアリ

按ニ從來參宮者僧侶醫師等圓頂者ハ附髮シテ參拜ノ規定ニシテ山田町ニ附髮販賣ノ店多カリシトイフ

文化七年庚午　公六十五歲

一十月晦日御下屋敷御住居向燒失

濟御殿へ御立退當分御同所ニ御住居可被遊旨翌朔日被　仰出

一十一月　殿樣御歸國ニ付テノ　上使ヲ兼御端物御拜領

同月十一日御普請御用掛被　仰付候處翌八年二月江戶御中屋敷類燒ニヨリ　思召ヲ以御普請御延引被遊

文化十一年甲戌六月御下屋敷御普請御用掛等被　仰付同年十一月御普請出來ニ付同十八日關戶村谷屋勘右衛門宅へ爲御逗留被爲成同廿二日同所ヨリ直ニ御下屋敷へ御移徙

文化九年壬申　公六十七歲

五月廿七日再召僧德本受戒

文化十二年乙亥　公七十歲

正月私設壽筵

一正月廿八日七十之御賀

再下屋敷燒失

薨於荒濱

伊藤蘭嵎

文政八酉年十一月七日ニ八十ノ御賀御内々御祝儀御整アリタリ

一二月三日御下屋敷再燒失　濱御殿ヘ御披キ御同所御住居ニ被　仰出

三月　上使御使番被進御拜領物有之

公　八　十　四　歲

文政十二年己丑

六月二日、病薨於荒濱別宮、十一日、葬於濱中長保寺、謚曰觀自在公、公嘗登生石嶺、有一大剃髮人、當公前而立、叱曰、汝何者、敢入此山、公曰、抑汝何物、曰此山主也、公曰、予此國主也、此山予管內已、汝公歷何得曰此山主　何不懼國主、其人逃匿如消、公氣象勇豪、人望而畏之、而孝思出天性、事母夫人恂々怡々、定省不怠、殆如別人、公之幼也、伊藤蘭嵎爲侍讀、公一日自翻辞書、鈔出其尤險澁者、以問之、蘭嵎皆對不知、公曰、卿非儒士乎、何得不知字、蘭嵎曰、然、儒士、講治國平天下之道者也、徒以知字爲儒職、大謬矣、公今富春秋、宜讀書觀大略耳、公怫然怒入內、左右白、古稱、從諫則聖、公能從彼言、則自知其非也、國家之幸福、何以加之、公怒乃解

一五月廿九日夜ヨリ御所勞

一六月二日御逝去

六月十日濱御殿御茶屋御出棺翌十一日長保寺御着棺同夜御火葬御遺骨釋迦堂ニ御安置

御石棺出來無之故同廿九日御葬送御石棺ヘ納メ奉ル御火葬地ハ釋迦堂西ノ方平地トイフ其所ニ寶篋印塔御建立　清溪院樣御合廟

御法號　觀自在院殿三品前黃門太眞

尊牌　高林院様御合殿ノ處天保元年御模様替

御靈屋御修復之節

香嚴院様御合殿ニ成ル

高野山御登山

同山御參詣ノ事諸所記ナシト雖モ偶紀人某カ古書中ニ於テ左ノ記ヲ發見ス亦御事歴タルヲ以爰ニ追記ス年紀不了蓋御退隱後ノ事ナラン或ハ再三御登山アリシヤモ知ヘカラス

大殿様高野山ヘ當十三日朝五ツ時前御登山直ニ大徳院ヘ被爲入御装束御改御靈屋等御拜夫ヨリ　權現様御拜奥山寺ヘ御入直ニ青巖寺ヘ御入法印ヘ御對顔暫御咄有之同寺　權現様菩提心様等ノ御位牌御拜被遊表門ヨリ御出金堂　御社御影堂大塔ヘ御參詣行方安養院ニ鎮座ノ熊牛八幡宮ヘ御參拜清淨心院廿日大師ヘ御參詣奥院御廟御拜被遊　南龍院様其外御代々御石塔御拜諸大名石塔御覽夫ヨリ行方金光院ヘ御入（清信院様ヨリ近年御位牌御建立有之）南院ヘ御入不動尊弁御建立ノ御位牌ヘ御拜御膳被召上七ツ過御立被遊嶽山辨才天御參夫ヨリ御下山神谷大里屋ヘ夜五ツ時過御泊十四日又々御登山三山御參詣摩尼村御泊ニテ御座候

一檀上御影堂ヘ　銀十枚　金五百疋　銀貳両

一大　塔　銀五枚　金貳百疋　銀壹両

一金　堂　同上

一丹生高野兩明神　銀五枚宛

一奥院御廟へ　銀十枚　金五百疋　銀貳両
一廿日大師へ　銀五枚　金貳百疋　銀壹両
右之通御供物有之候由承り候
惣御案内　南院　慈眼院
立合御案内　行方　長福院
法印始諸人へ御挨拶至テ御丁寧之旨承及候以上

九月十九日

按ニ記中青巖院小田原谷ハ院號菩提心院ト稱ス寶暦年間　菩提心公ノ御謚號ヲ賜リタルナリ又金光院ヘハ　菩提心公　親自在公ヨリ數種ノ御寄附品アリタリ御母堂清信太夫人ノ御位牌御安置ノ御由

御畫像之事　御束帶　着色

明治廿六年四月信命ヲ奉シ和歌山ヘ祇役ノ時同所德義社々長栗原一郎右衛門紹介ヲ以テ同地黑田村黑田健藏和田正造ノ両人出願シテ曰ク同村願立寺ハ旦那寺ノ處　公及ヒ慈讓院夫人（公ノ御妾）ノ眞影ヲ安置シ奉ル是　公御在世ノ比ノ寺僧書ヲ能クスルヲ以テ特允ヲ蒙リ近ク伺候謹寫シタルニ能ク似タリトノ御意ヲ辱シ京都一條大政所君（公ノ御女芳壽院殿）ノ尊覽ニ供セシニ深ク尊意ニ適ヒ爲ニ本願寺　門主ノ讃題ヲ大政所君ヨリ乞ヒ需サセラレ表装ノ裂地等賜リ両幅ヲ製ス後公家ヨリ金壹百両御寄附依テ更ニ御靈屋修繕後遂ニ頽敗本堂ヘ移シ奉リシニ本堂亦壞敗雨露殆ト尊影ヲ穢スニ至ル此分ニテハ該寺廢滅モ遠カラスシテ尊影亦何人ノ手ニ歸センモ知ヘカラス實ニ尊影ヲ汚スノ恐惶懼ニ堪サレハ伏テ公家ニ納メ奉ランヲ願フ依テ信同寺ニ詣リ尊影ヲ拜スルニ其言誣ナラズ舊記ヲ撿スルニ事屢詳悉有司往復ノ書等若干最證スヘシ於是歸座上申ノ處翌廿七年四月高橋渡出縣ノ際上納ヲ命セラレ五拾金ヲ賜ハリタリ今御清之間ニ安置シ奉ル所即チ是也

觀自在公公子譜畧

觀自在公御子孫一覽表

御子　御孫　御曾孫

懿姬（コン）　一條右大臣輝良卿御息所　後大政所　芳樹院
　姬君　早世　普香院

錯姬（マヤ）　早世　妙泰院

等姬（トシ）　松平相模守治道室　轉心院

𨥆姬（モト）　早世　知幻院

彌之助　早世　一生院

岩千代君　治寶卿　舜恭公
　錯姬（クカ）　松平陸奥守室信恭院
　喬姬　早世　靈應院
　御嫡男（マサ）　早世　觀達院
　倍姬　早世　法緣院
　豐姬　顯龍公御簾中鶴樹院
　　菊姬　早世　瓊淳院
　空生院（ノリ）　早世
　銈姬　早世　普現院
　乘元院　流產
　富姬　早世　清泰院
　鋒姬　早世　示幻院

鋒（トキ）姫　早世　春窓院

雅（マサ）之助　早世　空如院

方（ミチ）姫　水戸少將治紀簾中　恭岳院

柏（カエ）姫　早世　容顏院

綏（シツ）姫　早世　幻雲院

備（ノブ）姫　松平佐渡守齋敬室　心蓮院

乙之助　早世　智妙院

丁之助　早世　如幻院

如電院　早世

御男　流產　緣覺院

御男　流產　青樹院

御男　流產　幻壽院

観自在公

公子譜略

懿(コシ)姫君 又懿君 芳壽院 後大政所

御實母 伊藤四郎左衛門女 於八百 御由緒ノ御方 花開院 四郎左衛門 天明三卯年九月十一日死

文化二丑年十一月十一日 御死去 慈譲院

天保八酉年八月二日 大納言様前大納言様思召之品ニ付向後様ト稱ス

一條右大臣輝良卿御息所 輝良公寛政七卯年十月十四日薨 御法號 後得成寺

一明和四亥年二月七日於若山御誕生

一同六丑年三月廿一日伊達社へ御宮參廿二日御髪置

一安永二巳年四月廿三日御紐直シ同十二月六日御弘メ 七歳

一同三午年十一月四日一條様へ御縁組ノ儀表立月番御老中へ被仰入同廿七日御願之通御縁組被仰出

一同五申年十一月十六日御結納

一同六酉年十月廿七日御鉄漿初

一天明五巳年八月三日紀州御發輿同七日御京着同日鷹司様ヨリ君號被進懿(アツ)君様ト奉稱

一同年八月十三日御婚禮

一同八申年正月廿九日京都大火御守殿類燒
一同年二月御疱瘡
一同年四月御懷胎五月御袖留御着帶
一同年六月八日姫君御誕生之處直ニ御早世九日東福寺中芬陀利華院ヘ御葬送
御法號　普香院如幻空夢神童女
一寛政三亥年十二月廿八日政所樣ト奉稱候樣被　仰出（八月一條樣關白御昇進也）此節白川橋御假住居（御附ノ面々ヲ自今政所樣御附ト唱箸）
一同五丑年四月（一二六月）御殿御滿作ニ付御移徙
一同六寅年三月廿八日從三位　宣下
一同七卯年十月十四日一條樣薨去同廿四日芳樹院ト御改
一同年十二月廿日　女院依御遺命又々政所ト奉稱候樣被　仰出
一文化十一戌年九月廿三日依爲關白御母儀以來大政所ト奉稱
一天保七申年御七十御年賀
一同十四卯年八月十九日御逝去　（御歳七十七）
右御所勞ニ付　大納言樣ヨリ御廣敷御用人　一位樣ヨリ中奥御番御部屋樣ヨリ御廣敷番御使
御差登被進物アリ
一御遺躰御出棺之節御表兼爲御見送大御番頭被遣
御法號　芳樹院殿獻光妙珠大姉

御廟　京都東福寺中當樂庵　天保十五辰年二月和歌山雲蓋院へ御位牌御安置

錯（アヤ）姫君　早世 妙泰院

御實母　寒川氏　於多可　寛政八辰年五月十八日死　信受院

一明和四亥年十二月十四日於江戸御誕生

一同五子年四月五日御内々御弘メ同九月十三日御箸揃

一同六丑年十一月廿二日御髮置

一同八卯年二月十二日御疱瘡ニテ御卒去十四日谷中護國院へ御葬送

御法號　妙泰院殿鏡月慧光大童女　御牌前 靈蓋院　上野 眞如院

等（トシ）姫君　後亟（カズ）姫 轉心院　松平相模守治道室

御實母　寒川氏　於多可

一明和七寅年四月七日於江戸御誕生

一同年十二月御箸揃

一安永元辰年十一月九日御髮置

一同四未年四月御疱瘡

一同五申年正月廿二日御弘メ同五月朔日御紐直シ

一同年三月十九日松平相模守重寛嫡鶴五郎へ御縁組

一同九子年十二月十一日御鉄漿初

一同十丑年正月九日氷川へ御宮参

一天明元丑年七月十二日鶴五郎死去　此節右衛門督治恕

一同二寅年正月二十二日御上屋敷へ御引移

一同八申年二月朔日丞（カズ）姫ト御改名

一寛政四子年閏二月廿六日御定銀米貳拾石五拾貫目被進

一同五丑年五月十八日松平相摸守治道へ御縁組

一同年十一月十五日御引移同日御結納

一同七卯年四月廿七日御袖留

一同年五月十五日御婚姻御弘

一同年九月廿八日相模守妾腹之子銀之進嫡子ニ成リ御養被成候

一寛政十午年五月十五日相模守卒去（號大機院）ニ付轉心院樣ト御改

同年七月五日相模守遺領嫡子銀之進へ被　仰出

一文政九戌年九月六日御卒去　同月十四日牛嶋弘福寺へ御葬送 御日取追テ二日ニ替ル

御法號　轉心院　實相如幽大姉

夫人の御詠と承り傳へたるに

龍之口を御通行の時

氷とけ水はしらせよ龍の口雨さへおのがこゝろ成せは

長月朔日いさこさゝしき中によめる

生禮々む初めはえらすつゆの身れ消行末と風のまに〱

鐵（モト）姫君 早世 知幻院

御實母　於屋代

一明和七寅年五月五日於江戸御誕生

一同八卯年正月廿六日御卒去谷中護國院へ御葬送

御法號　知幻院空華了薫大童女　御牌　雲蓋院

彌（ヒサ）之助君 早世 一生院

御實母　伊藤氏　於八百

一明和八卯年三月五日於若山御誕生

一同月十七日御七夜御名德川ノ御稱号被遊

一同月廿七日御色直

一同年五月御名順千間姫樣ノ上ト被　仰出

一同年六月十八日御卒去七月九日濱中長保寺へ御葬送

御法號　一生院夢幻心性大童子　御牌　雲蓋院

岩千代君 治寶卿 舜恭公　御本譜ニ詳也

鋒（トキ）姫君 早世 春窓院

御實母　寒川氏　於多可

一明和八卯年八月十三日於江戸御誕生
一同九辰年三月十七日御卒去谷中護國院へ御葬送
御法號　春窓院自空證信大童女

雅之助君

雅之助君（マサ）　早世 空如院
御實母　伊藤氏　於屋技
一明和九辰年八月晦日於江戸御誕生
一安永三午年二月廿三日御遠行谷中惡忍院へ御葬送
御法號　空如院法山淨林大童子　御牌前 雲蓋院

方姫君

方姫君（ミチ）　水戸少將治紀（トシ）卿簾中 恭岳院
御實母　伊藤氏　於八百
一安永三午年正月廿四日於若山御誕生
一同年十二月朔日御箸揃
一同五申年二月十九日御髪置御宮參
一同七戌年十一月御弘メ　公儀へ御達
一同九子年十一月十一日御紐解
一天明元丑年八月五日香巖院様御養女被　仰出
一同四辰年十一月十五日御鐵漿初

一寛政元酉年閏六月十八日　水戸少將治紀卿へ御縁組
一同二戌年二月廿七日江戸御發輿
一同三月十五日御結納御受被成
一同四月九日治保卿御母堂俊祥院樣へ御引取　追テ御婚禮ノ筈尚治保卿ハ治紀卿ノ御父也
一同三亥年九月廿八日御婚姻御内祝ノ御弘メ
一同四子年正月廿八日御袖留御着帶
一同年四月二日御安產御女子御出生　栢(カエ)姫
　栢姫　寛政六寅年三月十一日御卒去　容顔院
一同五丑年九月十二日御安產御女子御出生　綏姫
　綏姫　寛政六寅年七月八日御卒去　幻雲院
一同六寅年正月廿五日御疱瘡ニテ御逝去
一同二月五日御遺體水戸瑞龍山ニ御葬送　御日取追テ廿日ニナル
　御法號　恭丘院隨譽英心貞樹大姉　御牌前　若山大智寺
　御謚號　恭穆夫人

備(ノブ)姫君　松平佐渡守齊敬室　心蓮院
　御實母　伊藤氏　於八百
安永四未年十一月十六日於若山御誕生

一同五申年十一月十五日御箸揃
一同六酉年十一月十六日御髪置
一同七戌年十一月御弘メ　公儀へ御達
一同九子年三月十五日御宮參
一同年十一月御紐解
一天明五巳年十二月七日御鐵漿初
一寛政二戌年九月四日松平敎千代 加賀守治備嫡 實重敎男 へ御緣組
一同七卯年六月晦日佐渡守 敎千代事 卒去
一同八辰年十二月八日ゟ御疱瘡同十七日御卒去廿六日濱中長保寺へ御發棺翌年正月廿五日御葬送
御法號　心蓮院深密智到大姉 御牌前 雲蓋院

乙之助君 早世 妙智院

御實母

一天明元丑年十一月 日不知 吹上御殿ニテ御誕生
一同二寅年九月廿七日御卒去和歌大相院へ御葬送
御法號　妙智院鮮顔法爾大童子

丁之助君 早世 如幻院

御實母　鎌田氏女 水野美濃守家來

如電院殿
緣覺院殿
青樹院殿
幻壽院殿

一寛政八辰年二月日不知　御誕生
一同年四月廿二日御卒去和歌大相院へ御葬送
御法號　如幻院性眞覺明大童子
如電院殿　御實母　横井次大夫女於花　觀光院
御誕生年月日御名不知
明和四亥年正月五日御早世　紀州高松寺へ御葬送
緣覺院殿　御腹　瑞應院
寛政六寅年十一月廿三日御流産　紀州吹上寺へ御葬送
青樹院殿　御腹　春臺院
寛政十午年九月廿五日御流産　紀州高松寺へ御葬送
幻壽院殿　御腹　右同斷
寛政十一年未年十一月廿九日御流産　右同寺

觀自在公附錄

神野嘉功謹識　九十七歲

一草野五右衛門額へ黒點ヲ戴ク事
公御幼年ノ時御手跡御進メ申上ニ五右衛門罷出御認メ被遊ル、紙ノ端ヲ押ヘ御運筆ヲ御直シ申上ケレハ左ノ白玉ト可被遊玉ノ点ヲ同人額へ　思召ス儘ニ被遊候得ハ五右衛門一日眞黒ノ点ヲ戴キ翌朝迄洗ヒ不申其儘罷在候由

白王　あのてん五衛門がつらにあり

右明治十五年舊三月七日

南龍社御祭典ノ節今村康躬話

但御家ニハ御年五ツヨリ御手習被爲遊御八ツニ相成被遊候ハヽ、表向　御手跡御祝儀被爲在候御事之由其節御手本　神君樣御直筆いろは之由　表御川部屋坊主姓失念常徳ノ話

一御登城之節御名言之事
公　父君菩提心院樣御同道ニテ御登城被遊尾水樣御初御三家儀御同所之御詰所へ御先官ニ應シ御着座被遊然ル處　公御壯年ノ御事故御末席ニ御着座被遊冬分ハ結構ナル大臣火鉢ニ切炭ヲ積ミ御間ヲ温メ御席中へ上ケ有之ヲ　公御手前へ引寄御掌ヲ御温メ被遊尾水御両候御見兼　父君ニモ御遠慮被遊火鉢御手前へ御引寄不被成矢張其前ニ御据置被成候方宜キカト　菩提心院樣へ御申含有之ニ付其旨御側向ヨリ　公之御側向へ何トナク申上候へハ　公方樣御守護御警衛ニ罷出候儀ニ付

若万一事有時刀之柄之取ヨキ爲掌ヲ温メ候由此旨申上候樣トノ御事ニテ御頓着ナカリシトカヤ

一御慰ニ鳥ヲ捉ラセラレ候事

御滯府中永々御所勞ニ被爲在赤坂御殿御庭所々ヘ豆腐ヲ如山爲御積置候得ハ鳥夥敷寄集リ右豆腐之山ヘ黒ク相成ヲ御覘ヒ一發ニ三四羽程ツヽ一日ニ數百之鳥御手ニ入候由　右宇治田彌右衛門炮術肝煎池永善之丞之話

一説ニ鳥ヲ甚御嫌ヒ被遊常々侍臣ニ命シテ打シメ給ヒシト又蜘ノ巣ヲイタク御嫌ヒ御出廻リ之節ハ御側ノ者箒ヲサヽケ御先立ヲナスヲ常トセシヨシ

一丹頂鶴御買上等之事

丹頂之鶴何レヨリ持來ルヤ賣物三羽有之趣被聞召不殘御買上ニ相成右三羽之内一羽ハ　公儀ヘ御獻上一羽ハ御放チ一羽ハ御料理被　仰付候由

右御徒頭仲間深津彌次右衛門話

一御簾中樣御緣組之御事

御簾中樣有栖川職仁親王姫宮御緣組御調被遊千鶴萬龜愛度恐祝爲御因親御國產有田郡湯淺醬油被進相成候事四斗入樽共數千挺　右梅庵養父八郎兵衛ヨリ承ル

一花火被　仰付事

麴町御屋敷町向ニ松平出羽守屋敷有之出羽殿高樓ヲ設ケ暑中納涼ニ婦人抔爲登且常々此御屋敷中ヲ見越何トナク笑ヒ嘲弄成ス容子ニ相見エ如何之事ト兼々殊之外御勘氣ニ障リ有之折柄花火ヲ被仰付或夜納涼之爲メ御慰被遊偖出羽殿ニモ例之如ク婦人共多勢登ラセ幸ニ遠見ナス容子宜敷時分組物ヘ火ヲ指シ面白キ最中拾匁筒ニ強藥ヲ込出羽殿之高殿ヘドント被遊候由翌朝使ヲ以テ右玉ヲ

差出夜前御屋敷内ヨリ此玉砲發如何之事ト申越候付其段御聽ニ達シケレハ玉ニ紀州之印有之哉ト
ノ御返答ニテ其邊ニ相成候事
但其時之出羽殿ハ天頭(アタマ)剃(スリ)下ケ髮ヲカツ付ケ曲ヲ短ク被致候故家老共ヨリ諸侯方御同様ニ御髮ヲ御上ケ被成候様風諫致シ候得共若口論之節髻ヲ取ラレヌ爲ナリト被申候由此御方ヨリ一ト層六ケ敷様子然レ共所詮喧嘩ヲ仕掛テモ不叶其仇ニ左京大夫様ヲ手儘ニ被致候付何ントナク其返報又々此御方ヨリ返シ參リ候事ニテアリシトカヤ

一清信院様御殿御滿作ニ付御覽之事
御實母清信院様御殿出口沙山艮之方市中ニ續キ御普請被　仰出福田儀左衛門畏テ御普請御滿作ニ付　御覽ニ被爲成候處殊之外御麁相ニ相見エ是ハケ様之申付ニハ無之筈如何相心得候哉ト　御意也儀左衛門　御意之趣畏リ右ハ　思召ニ不被爲叶御儀ハ最奉畏居候　上々様ニハ　御住居ト相成候ハヽ又々是非御好ミ可被仰出候得ハ其節如何様共結構ニ可仕存意ニテ先ケ様ニ麁形ヲ仕候旨奉申上候ヘハ尤至極成事ト　御意被遊候由　右藤田萬之右衛門話

一大阪御城島津家ヨリ御守衛出願ニ付御英斷之事
大將軍家重公御代島津家ヨリ大阪御城御守衛被　仰付度トノ願書差出候付御老中御席御取扱甚以テ六ケ敷御大老御手前ヘ差出候處御大老衆ニオイテモ如何共御了簡ニ不能何レ御三家方之思召ヲト御登　城御待申上候處尾水御両家　御登城不取敢右願書入　御覽候處尾水御両公ニモ是ハト計リ被仰何レ紀伊殿　御登城之上ト被仰候得共例之御遲刻漸々　御登城御挨拶相濟ヤ否御老中右島

津家願書入　御覽候處　公被仰に御両君如何思召サル、ヤト御尋御両侯何之御返答モナク夫故御登城御待申タル事ヨト被仰ケレバ　公仰ニ薩摩守願意面白ク存ル間　上樣直ニ御聽屆被　遊候樣被申上候樣薩摩守大阪へ參リ候ハヽ薩州空城ニ相成候間拙者留守居ニ可罷越旨被申遣候樣ト被仰其旨御達相成候歟自然其氣脉ヲ早ク知候歟早々願下ニ相成候由

一神道御流儀劔術御覽之事

御城　於中ノ間竹森新右衛門弟子劔術御覽被遊候ニ付早朝ヨリ登　城仕罷居候處五ツ半時四ツ時九ツ八ツ七ツ時モ相過黄昏ニ至リ御燭臺數々中ノ間万燈初更過二更ト覺シキ比御錠口觸良アッテ出御被遊初メマセト御用人差圖ニ從ヒ七ツ太刀八ツケ十二箇七重ト表形向相濟清眼打仕合モ大半相濟伴頭御流儀家元有馬吉藏剛力之大兵相手ハ窪田三之丞是ハ關口流高弟両人立合暫ク睨合靜リ反ツテ見エシガ互ニ聲ヲ掛ケ御燭臺之光ニ遮リ明カニハ見切リ難ケレ共烈敷打合誰カ耳ニモ響ク也三之丞吉藏之小手ヲ打テ勝聲高ク場ヲ切ケレハ師匠替リマセト申ニ先タチ今一本ト御直ニ御好ミ爰ニテ立合ヘトノ　御意ニヨリ御上段近ク互ニ勝膝ニ打敷暫時息ヲ入互ニ眼中透間ナク左右へ立別レ靜ニ掛合セ誘ヒ掛ルヤ否電光之激スルヨリモ早ク吉藏三之丞之小手ヲ見込打タル太刀ヲ三之丞受流シ太刀ヲ振上ケ身ヲ反リ吉藏之天窓ヲ梨子割ニ首骨モ碎ケン計マイタト勝聲高ク太刀ヲ右ニカサシ場ヲ切身体ヲ固メタル容子愉快ニ見エシカサシモノ吉藏無念心外面目ナクヤ思ヒケン持タル太刀ヲ打捨會釋モ無クムツト組付兼而之力量爰ラニテコソト取テ投ケント共ニ組ナカラ御上段之御燭臺へ倒レ掛リ御燭臺くノ字ニユカミ又反リ返リ　公御轉座御立ナカラ其上トナリ下ト

成狂ヒ廻ルヲ　御氣色麗シク互ニ負ルナ負ルナト　御聲ヲ掛戴キ終ニ剛力ナル吉藏モ三之丞ニ組シカレ右之腕ヲ揚柳固メニ固メ付ラレピリ〳〵動キモ不相成　上ニハ前後左右ヘ御廻リ微細ニ御覽被遊吉藏性根盡シカト御側ヨリ燭ヲ上ケ照シ見レハ左之腕ヲ三之丞之後口ヘ廻シ髭之生ヘタル津蟹之爪之大成如キ籠手ナカラ三之丞之尻ヲキーチ〳〵ト捻リ居ルヲ　御覽被遊コレハ〳〵ト御側向初御役人方モ其様ヲカスカニ見テ上ニハ勿論御側向御役人出張之面々抱腹ニ堪ス繰出モ暫ク中絶ス即　入御被遊候但御中入後　出御被遊御手ヲ少シ御擧ケ被遊候得ハ奥掛御用人之外御流儀致シ無之御用人御目付其余御流儀致シ無之筋御人拂ニ相成候テ互角仕合相濟五ケノ形勝身奥ノ形相濟候テ弟子一統御場所ヘ罷出奥掛御用人　御覽成戴候御禮申上　御意戴御禮申上　入御

　但翌日竹森新右衛門初惣領清左衛門其余弟子四五人其中飯田甚助名ハ覺居候得共其余失念且無足之面々達者ニ出來候筋迄先無足之輩三四人稽古料被下置之飯田寄合ヨリ頭役新右衛門二百石高内五拾石御足ニ有之所御足御加増被成下其上五拾石被下置都合二百五拾石ニ相成御徒頭格中奥詰惣領清左衛門被　召出廿五石被下置大御番被　仰付劔術指南被　仰付當番御免御扶持方ヲモ被下置候不日御側向子弟劔術之儀ハ竹森田宮両流之内致シ候様御達相成候由

附言本文之通候得共定而有馬吉藏窪田三之丞モ御品付有之候事ト存候ヘ共其儀ハ不承是非両人拜命セシ事ナラン蛇足ニハ候ヘ共吉藏ハ非常ノ剛力ニテ新造之丁船之艫木ヲ左之手ニテ摑ミ右之手ヲ船之底ヘ入一トキバリニ水ヲ離セシト也又牛馬ヲ飼置シ時其馬ハメツポニテハメ替ニ指ヲ咬ミ切ラレ候故有合フ爪打槌ヲ以テ其馬之横面耳ヲ掛テ三ツ四ツ打ケレハ其儘馬落シトカヤ又三之丞事ハ鱗德記ニモ游泳シナカラ砲發致セシヲ　御覽被遊タル事相見エ何レモ藝者ニテ武術之志厚キニ人物ニテ種々筆ニ盡サス

一御鷹野先ニテ小牧御陣御講釋之事
公何レノ邊ヘ被爲　成之御時歟御獲物御都合能殊之外御機嫌御麗シク被爲　在候折柄俄ニカキ曇時雨強降不取敢御中宿ヘ被爲　成候ニ付御側向一統御供仕雨宿リ被　遊候內ニ小牧野御陣之御物語リ初リ信雄秀吉公取合セテ御物語リ御明細ニ御咄被　遊何レモ堅唾ヲ呑テ感ニ堪入　神君樣ニハ龍泉寺ヨリ小畑城ヘ被爲入本多平八郎龍泉寺川ニテ秀吉公之大軍ニ出合夫ヨリ　君之御跡ヲ慕ヒ小畑之途中　神君樣ヘ御出合申上平八申上　神君御返答誰モ感涙ヲ押拭ヒ猶其次ヲ奉願ケレハ先一服ト被　仰跡ハ明晩二枚札ト御笑談被　仰空モ程ヨク快晴直ニ　出御被遊候御事アリシトカヤ

一御鷹野ニ被爲　成御途中ヨリ歸御被遊候事
何レ之邊ヘカ御鷹野ニ可被爲成之處御途中ヨリ俄ニ　歸御濱御殿御座被　遊候比松原通リ歸御相成御殿ヘハ不被爲　入其邊御歩行爰彼所ニテ　御佇被遊甚手間取終ニ黃昏ニ至リ御高張御中揚其外御箱提灯迄御明リ不殘相揃候ヲ　御覽被遊直ニ　歸御相成候ニ付如何成思召被爲在候事歟御側向ヨリ奉伺候得ハ鷹野ヲモ不致早ク歸リ度候得共早ク歸リテハ輕キ供方之者共ハ何ニモ不相成夕景ニ相成候ヘハ一日之湯漬ヲモ可貰事ト思ヒ出シ日ヲ暮シタリト　御意アリシ事之由　右茂田一郎跡 同苗惟德直話

一箱根山湖水深淺御探索之事
御參府御歸國何レノ時歟湖水ヲ　御覽被遊此湖水之淺深ヲ誰ゾ探索可致者無キヤト御尋ニ誰モ御受可仕者無之處御徒之中一人私共ニテモ御用立可申儀ニ候ハヽ奉畏度ト申者有之則被爲　召御前

近ク蹲踞シケレハ其方此湖水ノ底ヲ探索致ストアレハ此所ヨリ行ケトノ　御意ヲ戴キ衣類脱捨赤裸ニ下帯ヲ締直シ上ヘ御禮平伏仕水際ヘ參リ候ヲ御呼返シ被遊之ヲ用意致セト御裏差ヲ　御手自戴キ即其戴キタル裏差ヲ口ニ嚙ヘ湖水ヘ臨ミ指ニ水ヲ付左右之耳穴ヲ濡ラシ左右之足之大指ヲ折曲一足ニ飛入游泳達者ニ湖水中央ト覺シキ所ニテ振リ返リ　君前ヲ相伺ヒ其儘眞倒サマニ不見二息計リ致シ同アタリヘ天窓ヲ出シ元之御場所ヘ泅キ返リヒリ〳〵振ニ　御前近ク蹲踞ミ平伏仕ケレハ深淺如何ナルヤト　御尋ニ隨ヒ四搔五搔左七間計底ト覺シキ所ヨリ眞之闇ヨリ暗ク氷之中ニ入ルカ如ク身体動搖成ス事不能叟ヅト拜領之　御裏差ニテ四方八方切リ開キ二口三口水ヲ呑ミ息ヲ繼キ漸々浮出候旨申上ケレハ海川ト違ヒ樣子之不知所能行タト御賞美戴キ是ヲ遣スト御金百兩御手自拜領被　仰付候直ニ　上ニモ被爲入淵底御探索　御上リ被遊再ヒ這入ヘキ處ニハ非ト　御意被遊候事之由

此一條弘化五申年二月五日嘉功　御徒頭被　仰付翌六日組頭安留兵藏來リ同人話猶又湖水探索致シ候御徒姓名相尋候得共殘念ナカラ其姓名ハ不傳由猶又其拜領御金同處於旅宿御徒仲間中ヘ配分致シ可遣旨申聞候得ハ自分功ヲ以テ戴タル御賞ノ御品吾々可戴筈聊モ無之トテ御受不申折柄箱根大火之難ニ罹リ居旅籠屋其外人家不殘燒失段々家作取立最中兼テ御徒中常宿ニ致シタル籠屋三右衛門ト云者未タ家作ノ都合不出來歟ニ付三右衛門ヘ相尋候得ハ兼テ不如意之儀ニ有之間何ノ都合モ出來不申家族共打寄其儀歎息仕リ日ヲ相送リ居候旨有体ヲ相語リ候ニ付右御金戴キ候仁涙ヲ押拭ヒ左アラハ此度ケ樣〳〵之御事ニテ拜領仕候御金仲ケ間ヘ配分可仕ト申セ共聊モ

受不申吾一人致方モ無之幸ヒ此金ヲ以テ早々普請ニ取掛レト三右衛門へ遣シ候得ハ打驚キ難有ガリ今ニ　紀州様御徒宿ト相唱へ　御上リ下リハ勿論私ニ通行之節モ格別之饗應又諸大名家中ト同宿相成候共良キ座敷ヲ御徒中之間ト致シ候由組頭ノ噺明細承リ候得共　拜命之翌朝諸事繁多年月過候テ　南龍公之比之御事ト而已心得居候處明治廿二三年比元小池水右衛門跡水稽古場白井房輔取立之水場へ參リ候節元御徒組頭本間大助悴穂龜當時本間大藏作頭ニテ居合前作之一條相尋候處委細承知罷在再相尋候得ハ本文同様之事ニテ君公ハ　觀自在樣ト大藏之覺振則跡ニテ御水泳被遊候由ニ候得ハ大藏噺ヲ以テ本文　公之御事ニ記ス

一所々高山へ被爲成之事

高野山へ　御參詣夫ヨリ大峯山上へ被爲成候節凡夫之者何レモ水垢離ト申テ海川へ行垢離之爲水ニ浴シ七日モ前ヨリ精進潔齋別火位之事ニテ先達ト申者有テ其儀ニ馴タル者之山上參之法モ有之事之由然ル處　高野山ヨリ遂ニ泥川ニ　御着陣然ルニ御膳部魚肉ハ勿論獸肉其外何ニテモ登山禁制之御料理御構無之　召上リ最御都合ニ寄リ夕七ツ比ヨリ　御登山御供一統早ク相揃　出御之時晴天至極之御都合　御登山三四合ヨリ俄ニ曇リ風村吹六七合被爲　入之比雷電震動山如碎御供之面々如何相成候歟御側向聊先達一兩人御提灯ハ早ヤ碎ケ松火ハ燈ラス眞之黒闇彼是手間取候内少シ雲モ絶エ空晴候歟ト存ル比行場へ被爲　入此所ニテ何レモ行ヲ致シ候趣先達申上候へハツカ／＼ト岩之鼻へ被爲　成御立被遊谷之下ヲ　御覧被遊候ニ付先達初ハツト手ニ汗ヲ握リ驚キ候得共何ノ御頓着モ無之テ直ニ御下山ニ相成候由

但其節長屋千之丞ト言出頭之御小姓行方不知尋爲遣セトノ　御意ニテ山中所々相尋候得共一向不見。三日モ後レ漸歸宅致シ候得共氣抜ケ致候樣相見エ如以前御用難勤相成候故ニ其比風聞有シト

御附岩根宇右衛門地方二百石御小姓頭取其節御供野山ヨリ山上へ　御越候內至テ嶮難之地有之雲霧起リ寸地モ難見分處へ右宇右衛門轉落候樣子御小人支配替リ中川玄朔聲ヲ掛候へハ受答有之則チ御挾箱之掛ケ緒ヲ幾筋モ結ビ合セ段々谷底へ繰下ケ其緒ニテ宇右衛門胴躰ヲ括リ其緒ヲ提引上貰ヒ候由其緒之丈ケヲ計レハ落タル谷ノ深サ十五六間モ有シトカヤ上ニハ御薙刀ヲトノ事故御側ヨリ差上候得ハ突ヲハツシ杖ニ御突被遊候事此御薙刀ハ志津之由中川玄朔ハ元御船手之者ヨリ御側御附被　仰付候人也此節ハ御書物同勤土岐孫次郎玄助ヨリ直話ヲ承リ候由聞也

一仁井田模一郎上書之内　觀自在院樣之御事

大殿樣御家督被遊御勝手向御議論被遊筑紫九左衛門松本甚五左衛門申上候趣御用被遊候由先納調達御用立等專取計リ右之比三四年先之收納差入御借用取計諸役人一統諂諛而已ニ相掛リ居候事之由ニ候得共必至ト差支相成右兩人申上候趣相違仕候故貳御成敗被爲在以後扁田儀左衛門申上候趣御用被遊以前之御借用金百七拾貳万兩余御斷延ニ相成其後全御收納計リヲ以テ御繰合相立候付凶年ニ差添ヒ御難澁ニハ被爲在候得共格別之御借金モ無之先納等ハ不被仰付候併シ夥敷御斷延ニ付

一統難澁不一方在中モ聚歛苛酷之取計ニテ大ニ傷ミ候事之由ニ御座候

附錄　菩提心院樣御代御方々樣御入用　御姫樣方御緣組御入用別テ御大造ニ被爲在其余御物入

差添ヒ別テ寶暦十辰年ヨリ六ヶ年之間　御滯府被遊候付格別御物入多在中先納調達等嚴敷被仰付種々聚斂之御取計ヒ有之江戸表之御入用ニ相立候付大ニ民之膏ヲ凋シ御國中疲弊甚敷キ儀ニ御座候筑紫松本之両人壹人ハ　御城壹人ハ　御下屋敷ニテ之御事ト申傳其時二上兵之右衛門御小姓相勤御先立相勤候御手ヲ下サレ血之垂レ候御刀ヲ携ヘ御背高ク御忿怒之御顔色實ニ身之毛モヨダチ今ニ拜上候ヘハ冷汗之出ル様ニ奉存旨嘉功姉聟向笠藤左衛門方ニテ右之物語致スヲ承リ候

一信按ニ両人御成敗ハ明和六丑年二月廿六日ノ事ナリ筑紫久左衛門廣道ハ寛保三亥年四月父武左衛門跡目御切米四拾石大御番被仰付後郡奉行添奉行ヲ勤寶暦五亥年ヨリ奉行役被仰付格祿累進遂ニ大御番頭之上御勝手筋御用頭取御用役勤知行千石ニ被仰付又松本甚五左衛門ハ松本澤右衛門惣領ニテ寛保三亥年二月御切米廿五石中之間番ニ被召出郡奉行ヨリ一旦御咎ヲ蒙後再郡奉行トナリ添奉行町奉行ヲ歴御勝手御用筋元ニ成勤格祿昇進遂ニ大御番頭格知行千石被下置御用後御用筋申談勤タリシ也両家共家斷絶子弟ハ物頭ヘ御預ケトナル後年御免久左衛門子武左衛門ハ五百石大組甚五左衛門孫左内ハ三百石小十人頭格イツレモ親自在公御附被　仰付タリ

一廣井奥右衛門惣領之事

奥右衛門御役向ヲ勤居候哉惣領廣井何某御小姓ニテ有之哉或時御奏樂可被遊ニ付樂之譜認出シタル紙ヲ御床脇之棚ニ有之箱何番目之引出ニ入有之ニ付譜計持參リ候様廣井畏リ暫有テ立歸左樣之

御品見エ不申旨言上仕ケレハ違棚ケ様之引出之上ヨリ何番目ニ入置タル間今一應篤ト尋テ持參レト再ヒ　御意ヲ畏リ暫有テ立歸リ矢張以前之御引出改見候得共頓ト見エ不申尚爲念上下共ニ見候得共左様之御品且以テ見エ不申御覺エ違ニ被爲在間敷哉ト申上候ヘハ先程　上ニ入置有之筈今一應參リ無ハ其箱其儘持參レト被　仰則御箱携ヘ參リ　御直ニ御覽被遊候様申上ケレハ不審成事ト被　仰御引出　御直ニ御覽被遊候得ハ如　仰直ニ御入置之處ニ其儘有之如何之事ニテ申付無之引出迄調候ト被　仰平伏致シタルヲ肩口ヨリ御刺通シ被遊候由　長屋喜彌太直話也

信按ニ喜彌太ノ先代ハ公ノ御附属ニテ左右ニ近侍ス故ニ聞傳ヘタル也

一舜恭院様御事蹟小田兵右衛門筆記之内之事

觀自在院様思召ニ被爲叶候御由緒様御歡ヒ又澄清院様ト申上佐々木氏右衛門ヨリ上リ候御方モ御歡同月之御事歟御由緒様御安産姫君御誕生澄清院様モ御同様至テ御安産若君御誕生直ニ御嫡子様ニ被遊恐悦之處自然御羨敷思召ル丶カ御女儀様之習ヒ何カニ付申上振之御事歟哀ニモ澄清院様ヲ御手ニ被爲掛其余リニ　若君様ヲモ可被遊ト被遊シヲ御側女中老女吉村トイフ方自分之膝下ニ奉敷色々申上御怒リヲ鎮メ奉リシト書記有之

信按ルニ御由緒様トハ御妾ニテ公子ヲ設ケタル様ニシテ即慈讓院様ヲ云フ　澄清院様モ御妾ニテ　舜恭院様ノ御實母也御死去ハ明和八卯年十二月十日トアリ御死去トアレハ恐ラク此時ノ事ナルヘシ而シテ慈讓院様殿御腹ニ彌之助様明和八年三月五日御誕生之處同年六月十八日御卒去　舜恭公ハ同年同月同日於江戸御誕生也本文御由緒様ニ姫君御誕生トハ誤リ也蓋シ彌之助様御繁昌ナラハ御嫡子タルヘキニ御夭死夫ニ引カヘ一方ニ澄清院様ニハ若君御誕生月ヲ同ウシテ吉凶大ニ異ル邊ヨリ自カラ女性ノ淺マシキ事ニ至ラセタルナラント私ニ聞エタル也此時　公血刀ヲ御提ケ芳村カ若君ヲ抱キ逃走ル跡ヲ御追ヒ給ヒシニ内延當直ノ小吏岡權右衛門タトヘ御前ト雖モカ丶ル御体ニテ御番所前ハ通シ奉ラズト拒ミタル隙ニ芳村逃延ヒ遂ニ御縮ノ

床下ニ潜ミカクレ若君ヲ介取リ衣ノ下ニ覆ヒ藏シテ二三日間程忍ヒ居タルニ天助ニヤ若君一聲ダニ御啼泣シ玉ハサリシト聞傳ヘタリ後　舜恭公御代トナリ寬政五丑年二月思召ヲ以芳村カ養子ニ片野長左衛門二男德三郎ヲ仰付ラレ片野ノ野ト芳村ノ村トヲ取リ苗字野村ト稱スベキ旨ニテ一家ヲ御立被下御小納戸御小姓等𪜈命セラレ享和元酉年二月芳村病死之際同人御幼年之節ヨリ精勤ノ勞ヲ以德三郎ヘ地方貳百五拾石下サレタリ後累進御用人被命三百石ニ御加增アリ德三郎卒テ三男貢三郎家ヲ襲ク　昭德公御幼年ヨリ御小姓頭取勤務之時御城ヘ御供シ遂ニ公儀ヘ御供シテ幕府ニ被召出丹後守ト稱ス岡權右衛門ノ事ハ名臣傳ニアリ

一御隱居之事

公邊ヨリ御隱居被　仰出候節　上使衆兩人山口御殿ニ止リ執政方ヲ以御奉書之趣申上候御事之由此時村上伊豫守御月番ニ付登　城之朝家内水盃之別レヲ被致再ヒ歸宅ハ不可有御手打之覺悟一心決定ニテ罷出段々被　仰出之奉書申上候得共一々御畏リニテ跡ヨリ夫々被　仰分之御返答之御請被遊候ヘ共有田郡山之保田維盛彌介ヘ毎々被爲入候御請計リ難被遊御事之由ニ有之シトカヤ

右　公邊ヨリ　上使ヲ以被　仰出候御儀實ニ難止御事ナカラ筆記仕ル者共モ落涙之至ニ奉存候御奉書之趣伊豫守申上被　仰出之旨　御畏被遊候跡ニテ能申上候趣御稱譽被成下二千石ニテ有之處千石御直ニ御加增被成下三千石ニ被　仰付 岡野家之申傳ヘニ伊賀守存生ナラハカウト成リハセマイト被　仰候由　御隱居は安永四未年にて御年三十

信按ニ本記　上使衆兩人山口御殿ニ止リ云々ノ文意ニヨレハ　幕府ヨリ特ニ紀州ヘ　上使ヲ御差下シ何等カ御罪狀等御糺問アリテ御隱居被　仰出タル如クニ判セラル然𪜈御本記安永四年二月三日ノ記ノ如ク兼テ御病身ニ付御隱居御相續御願之儀前年十一月三浦長門守ヲ江戸ヘ御差下ニテ御内意被　仰出而テ本年（安永四年）正月廿一日ニ水野土佐守ヲ以幕府ヘ　御出願ニヨリ二月三日ニ至リ　公ニハ御在國故　上使松平右京大夫板倉佐渡守ノ兩人ヲ以江戸御本邸ヘ御差向ケ御願之通御隱居被　仰出旨ノ　台命ヲ傳達左京大夫樣（香巖公御事）ニハ即日御登城被　仰出シ旨官府ノ明記ナリサレハ御退隱ノ事モ御跡御相續ノ事モ皆　公ヨリノ御願立ニヨリシ者ニテ固ヨリ　上使紀州ニ來リ糺問ケ間敷等記吏ニナシ本記ハ全ク誤謬

ナルハ明カ也併　公ニハ御癇癖被爲在往々手荒ノ御行爲アラセラレ頗世評ナキニシモ非レハ未御壯年ナカラ御家ノ爲竊ニ御退隱ヲ促シ奉リシヤノ説モ聞知スル處アレハ右御促シノ一ヲ村上伊豫守カ諫爭ノ任ニ當リシニハ非ルカ夫ヲ本記ノ如ク誤記ニ渉リシ者カト察セラル當時君邊ニ奉仕ノ者ハ何時激怒ニ觸ルモ計リカタシトテ出仕ニ先チ家族ト水盃ヲ汲ミ訣別セシハ往〻アリシ實事也ト聞エヌ

一御水之節御相手ニ罷出候事

小池水右衞門堤嘉一戸田九左衞門中野平藏此四人ハ何ツモ御水泳ノ御供仕リ候由日高郡キヒツカ淵へ被爲　成淵底見分仕候樣被　仰右四人何レモ水底へ入土砂摑ミ上リ候處戸田九左衞門壹人出不申　上ニハ御息ヲ御合セ被遊九左衞門ヲト被仰候付九左衞門上リマシタト申上候得ハ未タ上リ不申見ニ遣セト　御意ニ付淵底ヲ見候得ハ白ク相見エ暫ク致シ浮上リ息絶エ有之御供船へ引上ケ御藥被戴候得共手ニハ砂ヲ握リ居候由其夜其處ニテ御水被遊又有田郡タド之淵へ被爲成水底見分中野平藏へ被　仰付山ノ尾崎水當リ流ルヽ處ニテ深キ事量ナク尾崎水當ル處ニ人壹人這入程之穴アリ其段言上仕候へハ穴之限リ見屆來リ候樣　御意ニ付水右衞門壹人御附戴度奉願兩人罷越水右衞門穴之口ニ扣貫ヒ平藏穴之中二三間計リ奥へ入候處誠ニ闇キ事申ニ譬へ難ク行當リハ蔓竹切レ木ノ枝等流レ込自然朽腐候樣之物計御座候旨言上仕候へハ夫ハ聞及ブ鯉穴ト言フハ其處ニテ有ルト　御意被遊其夜其處ニテ　御水被遊候

一御相撲之事

公常ニ御水ト有レハ紀川近邊ニテハ其比北島ハネ崎近傍一二丁之處至テ深ク御水ニハ必此北嶋邊へ被爲　成然處北嶋ハネ崎ヨリ四五丁川下ニ中洲ト申テ其比廣狹色々長ケ二三丁川成ニ長ク壹丈

位之出水ニハ乗ラヌ位故吉野ヨリ下ス材木置場ト致シ材木問屋ヨリ運上等ニテ番人之小屋モ出來川ニ材木ヲ繫キ掛リ之者休息之場所也幸ヒ其小屋前ヲ築キ若者寄集リ相撲ヲ取リ居ヲ遙ニ　御見知リ御船ハ矢ヨリモ早ク北嶋ヘ被爲　成ニ付御制止之御先船制止ニ付何レモ平伏仕居候得ハ不搆相撲ヲ致セトノ御事ニテ又相撲ヲ初メ　御船ハ川中ニ止メ　御見物被遊中ニ至テ强キ者壹人有之大勢替ル々々致ス中ニ其者壹人ヘ立附者ナシ右段々　御見物御船ヲ岸ヘ附ヨトノ　御意ナリ則チ舳ヲ向ケテ岸ヘ押付候得ハ　御上陸被遊中ニテ强キ者御呼出シ被遊其方十分之力ヲ以テ立合ヘト上ニモ御召ヲ御脱キ被遊土俵ノ中ヘ被爲　入一統ハ何レモ平伏拜見　上ニハ矢張御立合ヤアツト御聲ヲ掛ラレナカラ右之脇ヘ御左ヲ差御組付被遊タルヲ大腰掛左之方ヘ二三寸埋ム程ニ打付奉ケレハ又　御立有テ何トモ　御意ナク又　御立合今度ハ彼カ左之脇ヘ御組付遊ハサントスル處ニ御手ヲ奉取其儘奉抱上壹間半計モ投奉リケレハ轉々（コロコロ）ト二ツ三ツ御轉ヒ　御立上リ御側ヨリ何レモ砂ヲ拭ヒ奉リケレハ愉快ナル奴トノ　御意ニテ名ハ何ト言者成哉ト御尋ニ付湊何町船乗忠次郎ト申候旨申上夫ヨリ直ニ北嶋邊　御水ニ被爲　成候

附錄忠次郎翌日御召初メハ何ニ出候歟松尾忠次郎トテ御附屬ニ高名ノ仁也段々結構知行四百石御供番頭格被　仰付候

但忠次郎六七十歳計リノ時毎々見受候ニ身長ケ六尺有余モ有之最肥滿見事之仁ニ有之候　公御逝去被遊直隱居願相濟候テ長保寺　公ノ御墓番仕度段奉願候ヘ共右ハ不相叶ヤニ嘉功承リ候

一　三刀屋四兵衛病氣御尋之事

御附屬三刀屋四兵衛不快ニ付久々引籠罷在ヲ御醫師大勢之中ニテ廣田弘悦ヲ以テ毎々御見舞且御膳等御下ケ其外御菓子類色々日々拜領物有之折柄松尾忠次郎モ不快ニテ引籠居候ニ付御側向ヨリ

四兵衛不快ヲ御尋被遣戴忠次郎儀モ此程ヨリ引籠居候儀ニ付御尋被遣戴度左候ハヽ定テ難有可奉存旨奉願候ヘハ四兵衛ハ御表ヨリ御附被下候者忠次郎ハ手前取立候輩故不苦ト御頓着モ不被遊御様子ニ有之候事　右御附屬御伽初嶋新助ト云仁橋爪稽古場ニテ同人ヨ

一土入川四ツ樋之邊へ　御船ニテ被爲　成候事

土入川へ被爲　成候處短刀ヲ差張編笠ヲ冠リ釣竿ニ小サキ籠ヲ肩ニシ橋ヲ打渡ル釣人アリ姓名ヲト　御座船ヨリ大聲ニ罵リタルヲ聞シヤ急ニ隱ルヘキ所モナク堤下ノ葦原へ駈込佇居候故伊賀両人參リ御姓ヲト尋ケレハ一德軒家來永田音右衛門ト申者ニテ御座リマスト申候得者直ニ　御船ニテ　御聽御笑ニテ　御通船被遊候

　但其後年月相立　御城西丸御門ヨリ五六丁西ニ安養寺ト云遊行寺之裏門筋　御通行其裏門二三間東ニ永田音右衛門標札有ヲ　御見留是ハ先年土入橋之葦原へ駈入候釣人之宅カト御側向へ御意有之ヲ聞近ク畏リ庭へ飛下リ平伏致シ候由

一釣人新川堤ヲ駈走事

公御下屋敷へ被爲入水門ヨリ　御乘船新川邊へ被爲　成三ツ俣角ヲ南へ　御船廻ル比釣竿ニビクヲ付振カタケ短刀張編笠ヲ被リ白ク洗ヒ脱ケタル單物ヲ着シ突然新川堤へ登ルヤ否　御出合申上大聲ニテ制止ヲ掛候ヤ否チヨコ〳〵走リニ走リ行候ニ付姓名ヲ聞ケト　御船ヨリ申ヲ承リ候ヤ南ヲ指テ走リ出ス伊賀両人上陸申々御姓名ヲト言ニ彌走リ出シ後ヨリ伊賀申々ト言程釣人命限リニ走リ辨慶岩一本松之邊迄追駈候得共雜賀崎山へ駈上リ行方不知相成不得止其段申上候由其後幾年

月ヲ經　上ニモ不被爲　入御成被遊候テ誰カ開出シ候哉逃果フセタル人ハ知行百石大御番石田平十郎ト申仁之由其時心配一所懸命ニ駈走リ其後大癪持ト相成生涯癪之爲ニ苦ミ終ニ其病之爲終リ候由

一御乘船ヨリ御砲發之事

嘉功　幼年之比實家ノ向ニ鳥居一作ト申シ御切米六七十石之大御番先祖ハ鳥居（一ニ本）春澤トテ荒川景元輩之家ニテ代々學者也或時川殺生ニ參リ湊川口青岸ト申大船掛リ差向ケ參リ候中ニ時刻移リ何レモ空腹ニ及ヒ一作ハ親父之好ミニヨリ寒クハ有雜炊ヲ焚ケト申ニ付其調度ニ及ヒ片手之薄鍋ニ仕掛ケ彼是船ハ青岸ヘ近ク相成風爐ニ掛タル雜炊グツ〳〵ト煮上リ掛候處ヘ何レヨリ被爲　成タルヤ御船如箭御供船二三艘相見エ候折節青岸石垣ニ釣ヲ垂レ居人煙草ヲ呑居ル所ヘ卒然被爲　入候事故一作親父垢之間ヘ飛出ントスルヲ　御船ヨリ動キマスナト制止ニ付其儘平伏焚掛タル雜炊泡吹上リグツ〳〵蓋之間ヨリホトハシル首筋ニ飛ヒ熱キヲモ忍ヒ船之小縁ヨリ窃ニ　御船ヲ相伺ヘハ調度釣人ノ釣先アタリニ鳧浮キ有ヲ　御覘ヒ釣人モ石垣向フ下リニ平伏致シ居リシカ御筒ハシト鳴ルト共ニ眞逆樣ニ青淵ヘ轉ヒ込濡レ鼠之如ク相成石垣ヘ這上ルヲ　御覽被爲遊　公ハ不及申一統大笑ニテ御慰ニ相成候事之由且雜炊之羹洵首筋ヘ飛ヒ熱キ事難堪カリシト毎々一作親子ノ話ヲ幼年之比承リ候

一於荒濱鯨突調練　御覽之事

年月不知濱　御殿西之海於荒濱沖熊野古座太地之両浦ヘ被　仰付鯨突之調練御見物被遊候ニ付鯨

之形ヲ大竹ヲ以骨ト致シ其上ヲ桐油ニテ包ミ二三十尋計リ之鯨之形ヲ造リ沖ヘ浮メ扨両浦ヨリ相廻リ候鯨船ニ幟ヲ立何百艘トモ其數不知相圖ニ依テ一ノモリ二ノモリ三ノモリ段々式之通　御見物中場ヨリ鯨船ニ被爲　召船之舳先ヘ　御立被遊八挺立ニテ十分ニ押切ラセ數百艘之中ヲ前後左右ヘ運轉爲ヲ平常ニ　御替リナク被遊爲　立候ヲ事馴タル者相窺ヒ鯨ヲ追時ナラハ兎モ角容易ニ八挺立ヲ押切ル船之舳先ニ立居事ハ古座太地ニモ指ヲ折ル程アレハ可宜ト何レモ恐入感心仕候事之由申居候

一米價高直ニ相成候時之事

寛政度之比米價高直ニ相成石貳百匁余ニ騰貴致シ町方甚シク困窮餓死夥敷諸所米屋向ヲ打砕キ騒動ケ間敷ニ付役人向夫々出張リ口々御固メ附置　御下屋敷ヨリハ御先手物頭二組爲御警衛相詰居ヲ　公被聞召米價高直ニテ下賤之者騒動ニ及ヒ候迚　御殿ヘ手差スル者ハ非ス早々固メヲ解候樣被　仰出候ト也

一壚道　御歩行御床机替之事

公何レトナク市中　御歩行壚道本久寺前ニテ床机ヲト　御好ミ被遊候處如何致候哉其日ニ限リ御用意無之不得止御側ヨリ御挾箱差上是ヘ暫クト申上候得ハ御紋カアルニト　御意被遊御腰ヲ御掛サセラレズトノ御事　公儀御尊敬ノ事何レモ感佩奉リ候由 田中勘左衛門話也同人父勘八其節御供ニテ有之

一中野藤之助養父咄之事

公何レヘ被爲　成之御時ニヤ御水之節御相手相勤候中野平藏段々結構被　仰付御供仕居候處野合

湯溝川有之水ハ涸タレ共一ト股越ニハ越難ク　御立止被遊掛候ヲ伺ヒ平藏其溝ヘ飛入ウヅクマリ私背ヲ御踏ミ越エ被遊マセト申上ケレハ　御手ヲ被出戴キ申スト　御意ニテ御踏越被遊候御事之由養父話ヲ承リシト藤之助ノ話也　中野藤之助ハ御徒頭格常御供相勤居嘉功御徒頭相勤候節湊御殿部屋之隣常御供部屋ニテノ話也

一御道中ニテ思召ニ寄リ御立戻リ被　遊ル丶事

御參府御歸國之節タリ共　御思召有之候ヘハ一日路又二日路御越立相成候道ヲ又候御立戻被　遊候由　御隱居後文化二丑年五月伊勢　御參宮被遊御道川俣通リ御越立大和國妹背山ヲ　御覽被遊夫ヨリ一日路御立越之所翌朝又妹背山之邊　御再覽ニ御立戻リ相成候由

養父八郎兵衛話也八郎兵衛御徒頭格常御供相勤罷在候節御傭（本ノマヽ）ニ相成御供被仰付候事　但妹背山之邊　御再覽被遊候ハ如何成御不審被爲在候哉難計候ヘ共愚考仕候ニハ嘉功昔其實地ヲ踐ミ其邊ニテ妹背山ヲ里人ニ問ヘハ川之南連山如波濤其中少シ小高キ嶺ヲ指シ之ヲ妹山ト指シ敎ユ背山ハ昔有リタルナレ共何ツノ比ニカ無ク成リシト云最南ハ熊野ヨリ大臺之山脉北ハ葛城山脉ノ山間ヲ流ル丶吉野川也因テ南ノ小高キ嶺ヲ妹山ト言北ノ葛城山脉ヲ背山ト言ニヤ又明治廿二年度ノ如キ山崩大洪水ニテ大和紀伊ノ大荒アリ又岐阜縣ノ震害等昔モ荒井今切富嶽ノ寶永山等樣々天變難計事ナレハ里人ノ言如ク有タレ共今ハ無之成シヤ爰ニ愚案スルニ其山間吉野川筋ニ東西四五十間計リモト見ル一小島アリ松柏繁茂シ往來ヨリ少シ見ヲロス程ニテ大ニ風致アリ此所ニテ川筋両流シ又下流ニ至テ一ツニ合テ流ル因テ此處ヲ妹背ト名附シ者カ尚博識家之評ヲ待ツ此　御不審ニテ御立戻リ被爲　在候歟

一久世三吾病氣之事

何御役相勤候歟御附屬久世三吾　御前伺候之節荒々敷眼中一ト通ナラス殊ニ大兵ニテ立騷候ニ付御前近ク不參樣一兩人押ヘニ相掛リ候ヘトモ小兒ヲ投ルカ如ク又三四人モ相掛リ候ヘハ前後左右ヘ取テ投中々力量ヲ以テ難相向上ニハ不荒立樣ニ詞ヲ以テ靜ニ取扱ヘト　御世話被遊同席ヨリカ當人宿ハ勿論慥成一類三百石御先手物頭柴山又右衞門同祿同役小栗源大夫儀ハ三吾娘聟ニ付兩人駕籠用意ニテ早々出殿候樣申來候ニ付三吾宿ハ勿論御手打ト心得愁傷無限一類兩家モ大心配ニテ早速　出殿仕候處案外之事ニテ三吾病氣能養生致シ全快次第出勤仕候樣トノミ被　仰聞承リ召連歸リ無程全快有之事

但三吾儀ハ關口流柔術鍛練シ宇治稽古場ハ勿論其外岡ノ宮南栗生源左衞門方又廣瀨吹上出口等之諸所稽古場取立三吾被相賴世話致候程之仁ニテ大兵剛力柔術之業ニ相勝レ候ニ付　君前ニテ病氣差起リ候節取押ヘ幾人相掛候共三吾ニ不及ハ勿論也

家齊公第十三子菊千代君養君被仰出

一御養君之御事

年月不知　將軍家齊公第十三御子菊千代君　大納言樣御養君被　仰出候趣　公邊ヘ申上候得ハ殊ノ外御歡被遊正統ニ成タト　御意被遊候由　大納言樣文政七申年六月六日御隱居被遊西濱　御殿ヘ被爲入候　宰相樣文政八酉年卯月九日　御初入被遊西濱御殿ヨリ濱御殿（御藥園畑トモ通稱ニ奉申上候歟）　宰相樣公ヘ初テ　御對顏御歡之御祝儀御口上相濟　公仰ニ宰相殿向フ之緣際ヘ行テ見ヤレト大聲ニ仰聞ラレ御畏リニテ御前御禮被遊御緣際迄被爲入御立被遊ケレハ後ロヲ見セマセト又右ノ方ヲ左ノ

方ヲト二三遍ツヽグル〳〵廻リニ御立姿ヲ　御覽相濟元之御席ヘ御着座被遊候ヘハ御太儀デアッタト　御意被遊候由

一御附人御藥種畑御機嫌窺之事

宰相樣ヘ　公儀ヨリ御附人齊藤右膳鷲巢井儀左衛門其外五人姓名失念都合七人　西濱御殿ヨリ御藥種畑ヘモ明日御機嫌爲御伺　出殿仕候旨御用人鈴木三之右衛門申上右ニ付七人之御附人ヘ被下候御銀何程被下ニ仕候而可宜哉奉伺旨申上候得ハ先申見候樣　仰ニ付於同席色々申談御銀五枚計ニテ如何ト申事ニ御座候旨申上候得ハウヽント　御顏ヲ御振リ被遊候ニ付左候ハヽ十枚計モ被遣候テハ如何ニ御座候哉ト申上候ヘハ矢張ウヽント計御振被遊候ニ付左候ハヽ三枚程相減シ可申歟ト申上候得ハ百枚ツヽ遣セト　御意ニ付唯恐入難有ガリ可申ニ而御座候旨彼等ハ此方抔ヘ來テ十枚ヤ二十枚位之聊之事ニテ天窓ヲ下ル者ニテハ無之ト　御意被遊候由

嘉功先年　顯龍院樣御小納戸御膳番助被　仰付候節同席本役頭取格御膳番肥田藤馬話也

一吉村八郎右衛門鳥籠之御用畏リ候事

吉村八郎右衛門御役相勤居候比歟　御前ヘ伺候之節鳥籠之御咄出候ニ付御取合申上候得ハ其方手許ニテ好ミ通之品出來ルモノナラハ明夕方迄ニ八疊敷之小鳥籠爲致候樣　御意ニ付奉畏候旨御請申上翌日八ツ時比ニ出來立差上候得ハ御感賞戴其後執政職御附御年寄被　仰付之肥田藤馬話也藤馬近親吉村八郎右衛門方ニテ申傳ヘノ話之由

一中秋ニ星月ヲ貫シ事

公濱御殿ニ御座被遊翌日御次之間ニテ御伽之面々夜前之月ハ珍シキ星ノ月ヲ貫クト言事前代未聞

抔ト口々ニ評議ヲ立善事歟悪事歟抔ト高聲ニ申ヲ　君聽ニ達シ何レモ不審ニ思フハ尤成事ニテ
上ニモ御聽及ヒ其時誰ガ口スサミニ歟

月にさす星れ一点入る時ゑ目出度文字の初なりなり

ト被　仰聞候由

一信正御短冊認被　仰付候事

津村長右衞門藤原信正知行ハ二百石歟二百五十石ニテ御小姓相勤居候處天性風流之志有之冷泉家へ敷島之道之御弟子ニ相成歌道熱心ニ有之ヲ被　聞召側役ヲ致居候テハ心之儘ニ出來間敷哉ト御厚キ　思召ニテ四百石ニ御加增被　仰付御持筒之頭被　仰付之御表ニテ相勤候樣被　仰付或時結構ナル御短冊其數百枚自詠之歌相認候樣若又書損シモ可有ニ付用意トシテ今二十枚御下ケ相成則自詠之歌百首一枚モ書損不仕用意二十枚ヘモ同樣認差上候ヘハ　御清覽被遊美事ニ能出來シト御稱美之上被　仰付之百枚ニ御銀百枚又書損用意御下戴候二十枚ニ御銀二十枚被下置候由

一松尾塊翁於途中御出合申上候事

公何レヘ歟被爲　成　歸御深更ニ及ヒ吹上中之橋南ヨリ北ヘ御通行折柄橋之東北袖際ニ塊翁平伏仕居候御提灯之影ニ　御見咎メ夫ニ居ルハ塊翁ニテハ無キカト　御意ニ付奉畏入候旨申上候ヘハ年寄夜分獨步行ハ無用ニセヨト　御意戴候由

右橋爪稽古場ニテ和嶋新助話也

附言塊翁御膳番相勤候時　御膳之節煎茶差上ルニ殊ノ外焙シ加減御六ケ敷同席仲間誰トテモ　思食ニ不叶　御叱リヲ蒙ランヿ計リ御𧪄リナ用意仕ル事ノ由亦塊翁當番ニテ御茶ヲ差上ルニイツモ御小言被仰タル事終ニナカリシト

一於岡嶋邊砲發致シ鶴ヲ取候事

岡嶋田畝ハ　御城ヨリ巽之方十丁内外之田畑廣瀬諸士屋敷南ニ當リ又鷹匠町東之方ヲ言右之所ヘ年々久敷雛ヲ連レ來ル眞鶴ヲ砲發シテ取リタル者アリ嚴敷　御調ヘ中　公之御聽ニ達シケレハ愉快ナル奴ヤト　御意被遊候御容子自然相漏候而之故歟御取調忽セニ相成候由

右砲發致シタル人ハ二百五十石ニ五十石ノ御足御先手物頭澁谷紋九郎惣領綱十郎ト申男ニテ傍若無人放蕩不違枚擧其比神事ノ日酒肴ヲ十分ニ用意シ熟醉ノ所七十有余ノ父紋九郎鎗ニテ突伏惡事ノ次第申聞　上ノ御苦勞ニ相成候テハ恐入先祖代々ヘ相對シ家ニ難替不便ナカラ父ノ手ニ掛跡ハ其方惣領熊十郎ヲ嫡孫承祖ニ可奉願旨申聞止メヲ刺タリトノ事ニテ其比名高キ事也日ヲ經テ紋九郎御譽有之御足五十石御加増三百石被　仰付綱十郎惣領九左衞門三百石無相違被下置

一村井八郎暑中御機嫌相伺直ニ生石山ヘ御供之事

小十人頭ニテ　嘉功　仲間仕候

村井八郎暑中御機嫌爲相伺早朝御下屋敷ヘ罷出候得ハ是ヘ呼ヘトノ　御意ニ付直ニ　御休息所ヘ罷出候ヘハ　上ニハ御縁近ク巽之方有田郡山々ヲ　御覽被遊候處ヘ御呼アリアノ生石ノ笠石ノ左ノ方ヨリ駈登ル大六足ヲ一發ニ打止タルヲ覺ヱ居ルカト御尋ナリ八郎申上ルニ其時矢附トモ見マセス　御立場ヘ向ヒ至極トハ乍存大キナ奴ト實ハ心配見留候ヲ御一發ニ御殪シ愉快千萬ニ今ニ其儀ヲ折々存出シ快ク奉存上候乍去笠石ノ左ト　御意被遊候ヘ共　上ニハ御覺違ヒニテ夫ハ笠石ノ右ニ赤サレノハゲタル谷ニテ私今ニ能覺ヱ居マスト申上ケレハ夫ハ其方心得違ヒ居ト被　仰八郎

又夫ハ　上ノ御覺エ違ヒト奉存ト左アラハ是ヨリ生石ヘ行テ其實地ヲ見ン　其方ニモ行ケト　御意俄ニ御供觸五ツ時比ヨリ生石ヶ峯ヘ被爲　成殊ニ暑中之炎天尤御歩行夕七ツ時過漸々笠石之赤サレヲ目當ニ其場所ヘ被爲　成笠石ヨリ此谷何此尾上ハ何左ハ何右ハ何ト　御指示シ猪ヲ打止タルハ此谷ヨリ上ルヲ　御覗ヒニ相成笠石ヨリ左ノ方歟八郎言ニハ笠石ノ何々ニ當ルヤト　御聲高ク被　仰聞候得ハ八郎天空ヘ手ヲ當テ遠方ト實地トハ大ニ容子方角之違フ者ニテ嗚呼　上ニ又負タ眞平御免被下マセト平伏仕候ヘハ御笑被遊一入御機嫌ニ被爲在候御事之由

　但八郎ハ二十五石大御番組御山方勤罷在候處段々結構御加增有之三百石高被下置御目付被　仰付八郎孫多右衛門直話承リ候

一大惠院樣之御咄被遊候事

村井八郎或時伺候之節　公被　仰ニ　大惠院樣ニハ鐵砲御名人ニ被爲在其上御山モ御功者ニ被爲在タル事ハ申迄モ無之於椒里　御殿御滯留中御休息御庭ヘ大六足駈出タルヲ　御側ニ有合フ十匁ヲ以テ一矢ニ御打止被遊タル由承リ居ルト御咄ノ由　村井多右衛門直話ナリ

　但御山之節八郎御供ニ候ヘハ必ス八郎肩チト被　仰肩チシムシヤニ被遊余之面々ハ兎角動キ八郎肩ハ能据ルト　御意アリシ由

一觀自在院樣之御事ヲ金澤彌右衛門咄之事

金澤彌右衛門方ヘ　嘉功若年之砌每夜咄ニ罷越四方八方ノ咄之中人ニハ喜怒哀樂愛惡欲之七情備ルモノヽ尚又恐敷ニモ色々心配ニモ色々アリ吉田兼好法師之徒然草ニモ一生之内恐敷覺エ候事一度逢シトヤラ我ニ於テハ二度有之　觀自在院御用ニ付　御藥種畑ヘ罷出候時之樣ナル恐敷事ハ覺エ不申今ニ其事得不忘ト彌右衛門申居候其比兼テ名高キ事ニテ衆人モ能存居候事ナカラ委敷ハ不存

夫ハ如何樣ノ御事ナラント相尋候得ハ年月失念　御藥種畑ヨリト御切紙到來明幾日御用有之五ツ半時　出殿仕候樣何之御用トモ不相知早朝　出殿御用部屋へ其旨相屆候處扣居候樣御用人中被申付候ニ付扣所ニ罷在候所四ツ時モ過キ九ツ時モ過八ツ時比ト存候比金澤彌右衛門被出マスト大音ニ觸廻リ暫時致候得ハ坊主呼ヒニ參リ扣所ヲ出候へハ其出口ヨリ新敷薄縁敷有之其上ヲ坊主先ヲ引長キ御廊下ヨリ　御休息御三之間迄敷詰有之其所ニ暫ク扣居候へハ御用ニテ御座ルト高聲ニ句リ候得ハ　御前御次ニ相詰候輩一統ニ相下リ御人拂トナリ御次之間ヨリ被出マセト申聞御二之間中ニ唯恐縮平伏仕居候得ハ是へ々々ト　御意被遊少シ　御前ヲ相伺ヒ候得ハ紫縮緬之御褥之上ニ御白髮亂レ御顏色尖ク御（原本脱字）脇息ニ御寄掛リ被遊其御脇息之足ニ有ル丸キ穴ヲ塞ク程ノ御鍔ニテ長御脇差ヲ相伺ヒ身躰竦縮惣身冷汗ヲナシテ平伏仕居候得ハ是へ々々トノ再應　御意ニ付　御前近クニジリ進ミ平伏仕候得ハ　御懇御意ヲ戴御用筋ハ別儀ニ非ス御勝手向御六ヶ敷有之候へハ此御方之御勝手御繰合筋可相成樣賴ムトノ御意也誠ニ難有存私不肖之者御用ニ可相立者ニハ無御座候得共御勝手向之儀ハ御手支不相成樣乍恐盡力可仕旨申上候得ハ甚御喜悅之御樣子ニ被爲在御用相濟候事之由

但彌右衛門退出後古屋十郎大夫へ被　仰ニ其方ハ彌右衛門從弟ノ續ナル由彌右衛門ハ兼テ聽シニ勝ル才智發明者ナリ其方彌右衛門ニハ不及ト被　仰生涯御小姓頭取ニテ相終リ候由

一大嶋伴六御足米願之事

大嶋伴六御附屬ニテ御小姓頭取永々相勤御首尾至テ宜キ仁ニテ親子共ニ相勤伴六ハ本知六拾石ニ三百石之御足戴キ子息モ金米戴キ段々伴六年寄何卒御足高之中御加增戴候ハヽ早ク隱居仕度ト同

席ヘ物語候ヘハ御尤成御事ト申奥左候ハヽ程能御頼ミ申ト仲間中ヘ頼ミ置外ニ結構被　仰付候筋モ有之ニ付御容子相窺　御機嫌宜時扨作六儀モ久々相勤年罷寄御足米之中何卒御加增被　仰付戴候ハヽ最早隱居ヲモ仕度申居候旨同席ヨリ奉願候ヘハサレハノ事ジヤ其儀ハ不言共心得居ルアレニ加增ヲ致シ遣セハ直ニ隱居スルトノ事故加增ハ出來ヌト　御意ノ由　右於橋爪稽古場列嶋新助ノ話

一關戸村谷ッ屋ヘ日々被爲　成候事

雜賀組關戸村谷井勘藏方ヘ日々被爲　成暑中午時過金龍寺町　御通行小屋敷塀崩レ壁之際ヨリ中ヲ見レハ赤裸ニテ午睡致シ居ヲ　御覽被遊鐵砲ヲト　御意ニ付御手筒差上候得ハ午睡致シ有ル天窓之上ヲドント被遊ケレハ仰天致シ越中褌ヘ大脇差ボッコミ飛出ケルニ不思寄　御通行ニ付其儘平伏仕ルヲ殊之外　御笑ニテ直ニ御供仕レトノ事ニテ赤裸越中褌ヘ大脇差ヲ帶關戸谷井ヘ御供仕候由

私ニ曰　此人方外不敵ノ人物ト相見エ谷井ヘ被爲　入御供一統下宿ヘ休息暫時致ス内同村ノ寺ヨリ早鐘撞出シ夫ヨリ近所ノ寺々不殘撞出出火成ト御供ハ不及申村中大騷動　上ニモ出火ハ何レナルヤト早ク見切レトノ儀ヲ畏リ夫々聞合ス内早鐘ヲ撞候ハ私ニ御座候ト彼裸先生申出何故左樣ノ振舞致セシヤト申聞候ヘハ先刻鐵炮ノ御返報ト申スニ付　御聽ニ達シケレハ御笑ニテ相濟候由　但此人後改易相成姓名不知

一犬ヲ澤山御飼被遊候事

公犬ヲ澤山御飼段々子ヲ生ムニ隨ヒ犬之飼料扶持方ノ附クヲ當ニ致シ有因日高近在近鄕ヨリ段々願出夫々ヘ御預ケ尤御手飼之分ハ　御殿御座敷御庭之差別ナク且又御廊下筋ニ打臥シ何十疋トナク有之ヲ長門守殿御用ニテ通行之節ハ御廊下ナレハ御庭ヘ蹴落シ御座敷ニテハ蹴飛シ被通候故其

掛ヨリ　上ヘ申上ケレハ長門守目通リヘハ犬ヲ出シ不申樣ト被　仰出候由
或時長門守殿ヘ只今　出殿被致候樣御切紙ニ付即出殿有之處直ニ歸宅故家老用人共御用ハ如何ニテ御座アリシヤ誠ニ心配何レモ退出モ不致罷在候ト一統申候得ハ態々呼ヒニ來ラデモ使ニテ爲持越ハ能事ヲト被申候ニ付夫ハ如何成御事カト申候ヘハ兼々勝手難澁之趣聞及フ間之ヲ遣スト之事ニテアレヲ貰テ來タト床ノ隅ニ紫縮緬之服紗ニ包ミ其嵩余程ニ相見候由　御金ナラン、信曰此長門守ハ

菩提心公ノ御子粂之丞君ニテ三浦長門守ノ養子ニ成リ玉ヒ安永四年家督相續長門守ト稱ス即チ　公ノ御舍弟也

一御直ニ被　仰出候ヲ不奉畏事

公御隱居ノ後歟御附屬御足共千石高ニテ御用御取次被　仰付候後藤幸次郎ヘ　思召御用被　仰聞候處幸次郎首ヲ傾ケ　御意之趣可奉畏筈ニハ候得共右ハ何年何月之比　御直ニ奉畏候御趣意ト大ニ齟齬仕候樣奉存候間以前被　仰出之儀ヲ被爲廢又此度新ニ御達替ニモ相成候樣奉畏旨申上候ヘハ何ニト被　仰幸次郎襟元ヲ左ノ手ニテ御摑ミ右之御手ニテ掛硯箱之小柄御持今一言ト被　仰ケレバ幸次郎両手ヲ突ナカラ落付カヘリ御セキ被遊マスナ御次ノ衆御刀ヲト大音ニ申ケレハ小柄御拋捨入御被遊其夕御足被　召上刑被　仰付候

附言　其時分小普請支配御達回狀別段後藤ヘ爲持ケレハ支配方當人御達ニ參リ候樣ト中々不動御用
御取次之格ヲ以テ支配方ウツヲ被廻候由　ウットハ若山方言ナリ困却スルノ意味也

信按ニ後藤姓ノ内ニ幸次郎ト稱スル者ナシ後藤孝十郎ナラン幸十郎家譜ヲ閲スルニ幸十郎實律（隱居後彈冠齋）ハ後藤彌右衛門實階養子ニテ寶暦十一年十一月養父ノ跡目知行百石大番組被命　香嚴公ノ時頻ニ累進知行三百石御小姓頭御用達兼勤トナリ　舜恭公ノ時猶昇進大番頭格御用人御小姓頭兼帶六百石御加増八百石ニ御足高被下（御書方頭ヲモ勤）文化五辰年九月十三日不心得ノ品有之御役御免知行ノ内四百石被下寄合格小普請被命殘ル二百石ハ被　召上タルナリ去ハ御表樣

勤ニテ　觀自在公御附屬ニ非ス又御川御取次ニモ非ス然レモ御川人御小姓頭兼帯ハ大夫ニ亞タル權職ナレハ御川御取次ト見做タルモ理ナキニ非ス又　公ノ御屬ニハ非レモ文化元年　公御參宮橋本ヨリ御引返シ之節モ御供ナシタル事アレハ常ニ御用ハ畏リシナルヘシ

一御入浴水之事

公之浴場被遊候水ハ常ニ羽二重越セ成セシト其他話色々有之候得共略ス

一熊野御參詣之節田邊與力御供被　仰付候事

公熊野御參詣田邊　御通行之節安藤家ゟ通達ニ而御出迎ニ罷出候樣トノ事ニ付早朝ヨリ田邊城下ヨリ半道程上街道筋ヘ瀨戸御番除之外三十五人罷出候處安藤小兵衛始家中之面々其間三十間計相隔上手之方ヘ一統相揃居候處段々御注進ト相見ヱ封物ヲ青竹ニ挾ミ幾人モ聲ヲ掛走リ行其下ヨリ淺黃小紋之羽織ヲ着タル役人ト相見ヱ両三人小兵衛ト何歟應接之樣子何事カト存居候ヘハ小兵衛初一統列ヲ亂シ候中ヘ右之役人與力衆組頭衆御早ク小兵衛列居之場所ヘ御越候樣小兵衛初早ク入替マセト早ク々々ト大音ニ暫時動搖混雜致シ漸々入鎮シ所制止之聲遙ニ相聞ヱ白キ菅笠朝日ニ映シ次第ニ近ク相成平伏仕居候所ニ早被爲　成與力共出テ居マスト申上候ヘバ出テ居ルカト　御意戴御通行之御跡ヘ續御本陣迄一統御供致セト觸來リ其儘御跡ヘ續キ御本陣ヘ御供仕難有奉存候次第申上候事也初メ小兵衛初安藤家中立場ヲ入替マセト申ヲ承リ落淚處ニテハナク聲ヲ揚ル計リ老人抔ハ急ニ得立上リ不申其上　御意ヲ戴キ尙其上御供ニ續キ御本陣迄御供被　仰付誰歟淚ヲ拭ヒ聲ヲ呑ミ難有カリ申サヽランヤ　公之御仁惠骨髓ニ徹シ何共言語ニ難述扨又於御本陣一統暫ク扣

居候樣承リ明朝ヨリ三山御供被　仰付トノ事ナリ御供中見受候得ハ紺色ウノ目返シノ小紋股引ヲ
孰レモ着シケレハ俄ニ木綿屋ヘ申付染ハ勿論仕立サセ候由付テハ至急之事故染屋大取込炭火ニテ
乾カセ漸夜半比迄ニ出來立追々御本陣ヘ馳付三山御供無故障相勤候事ノ由
右落合彌平次話也　同人ハ嘉功實家天方家ト先祖之續有之趣ニ因リ尋來ル追々懇切ニ致シ　御上リ下リ年頭御禮之節田邊與力何レモ參リ懇意ニ相成本文之話ニ及ヒ候ヘハ何レモ落涙且ニ始末得謹不申チ見受候事

一秋光魚ヲ　召上リ候事
公熊野ニ被爲　成候節古座鮎太地鮎ハ失念秋光魚ヲ差上候樣御途ニテ被　仰出手分シテ魚問屋ヲ
穿鑿スルニ藏之隅ニ四五疋有之内首尾相揃タルハ漸ク二疋ヲ火取皿ヘ盛差上候ヘハ御立ナカラ二
疋共　召上リ辛キトモ甘キ共不被　仰直ニ御越立ニ相成候由　右小滴惣内與熊野御代官之節承リ來ル話也

一御神忌御參詣之事
東照宮二百回御忌御相當和歌　御宮詰大御番衆一ト組ヨリ二人宛十二組都合廿四人隨身御門内歟
御假屋出來敷歟ニテ列居御番致シ居ヲ　公御參詣御拜モ相濟御往來右大番平伏仕候ヲ　御覽被遊
御歸館之上御假屋詰相勤候大御番二十四人不殘召狀御附屬與詰被　仰付候由
但御假屋詰姓名ハ前日差出候節古番之了簡ニテ新番ヲ遣ヒ能事ナラテハ古番ハ不勤因テ賢愚色々有之内ニ藤田六右衛門ト云
人　嘉功　遡緣ニテ或時咄ニ結構被　仰候當座廿四人ヘ一人ツヽ御尋六右衛門ヘ其方劍術ハ何レチ致セシヤト御尋ニ付御流儀
竹森傳次右衛門門弟之旨申上ル何迄致シタルヤト被　仰表之儀ハ不殘御秘事御五箇之免許チモ受候旨申上ル節ハ何レチ致シ
タルヤト御尋鎗術ハ外山五大夫門弟ニテ表裏中段御秘事狹衣チモ免許受居候旨申上ル馬術ハ誰ニ學ヒシヤト御尋馬術ハ井出
半之右衛門高弟ニテ乘馬之儀ハ差置大坪道禪鞍鐙之曲尺朝倉掛ケ由ヨリ天方山城守通清ニ傳ヘ同人ヨリ又朝倉ヘ讓戻シ朝倉
先代直弟別レ鞍打之家ニ御座候旨申上ル暫御勘考之御容子ニテ又御尋水藝ハ何レチ致シタルヤトノ事水ハ名井武助弟子ニテ
若キ時分隨分出精仕リマシタト申上ル水ハ何藝カ出來ルヤト御尋ニ付先水之儀ニオキマシテハ拔手二ツ搔搔分捨浮大躰人之

仕候程之事ハ可也ニ仕リタル事デ御座リマスト申上ケレハ底ハト又御尋底之儀ハ只今トハ違ヒ北島ハネ崎中々深キ時分ハネ崎ヨリ川上ヘ向キ凡壹丁計リハ致シマシタト申上ケレハ夫ハヱライ　上ニモ左樣ニハイケナンタト　御意ノ由

一御召馬之事

公御召馬之儀井出半之右衛門へ相尋候事有之足色ハ何ヲ御好ミ被遊候儀も無之御馬ハ御名人ニ被爲在就中駈之早キ長ク走テ息合不替健ナルヲ御選ニテ足色ニ不拘事之由又馬之儀ハ殊ノ外御世話被遊加太友ヶ嶋へ牧ヲ御苦勞被遊候

但　右牧之儀ハ井出半之右衛門承リ毎々友ヶ島へ罷越候得共名馬ハ難出來モノト相見エ朝倉三郎右衛門拜領仕候程之花艷ナル足色見不申候

一鈴村三之右衛門ヲ以テ神野八郎兵衛へ被　仰聞之事

神野八郎兵衛御附御用人被　仰付同席鈴村三之右衛門ヲ以八郎兵衛先代之内勢州田丸御目付相勤候節奇談アリ其事承知歟八郎兵衛へ相尋承知ナラハ申聞ルニ不及若不承知ナラハ申聞候樣ト之事ニ付八郎兵衛ハ養子ニ付何モ家之儀存不申旨申述候得ハ　御意ニハ八郎兵衛先代田丸ニ相詰候節秋ノ夕物寂敷折柄初更之比ト思ホシキ時分旅僧ト相見エ入來リ湯茶ヲ乞フ故幸ヒ徒然之折柄路次口ヨリ招キ入茶ヲ進メ候得ハ痛ク悦ヒ暫四方八方之話ニ及ヒ誠ニ面白ク貴僧ハ何レニ御止宿候哉ト相尋候得ハ三界無家之身何方ヲ宿トモ不致暫此邊ニ杖ヲ止ル事ヨト申ニ付身共ハ役義ニ依テ只壹人此處ニ詰居甚徒然也貴僧若御閑暇ナラハイツモ御出アラハ忝ク存ト申ケレハ甚悦ヒ夫ヨリ夜トナク晝トナク來リ咄ヲ聞ニ源平之比之話甚タ委敷所持之書ヲ見置義經卿初靜辨慶其他梶原等之事何ニテモ尋ニ隨ヒ其答現在如見實ニ不堪感歎夜々面白キ事無限一宵常陸坊海存之不審ヲ尋ルニ

及ヒ右ハ義經卿ニ從ヒ韃靼へ渡海ナセシト云又仙術ヲ得テ今ニ我國ニ存在ナス抔ト其説區々ナルハ如何ゾヤ右ハ御覺エ振リハト尋ケレハ何ノ答モ不致低首居ニ付若病氣ニテモ差起リ候哉用意之藥モ御座候得ハト申ケレハ涙ヲ押ノコヒ暫時小便ニトテ座ヲ立夫限リニ行方不知其以來再不參ト上御幼年之比八郎兵衛御抱守相勤候節右之話ヲ聞シト被　仰三之右衛門ヲ以被　仰聞候事

嘉功神野家養子被　仰付候砌養父話ヲ以テ家へ申傳へ候樣申聞候

一鯉御披露申上候時之事

神野八郎兵衛御附屬御用人相勤候節七月十五日爲御祝儀西濱樣ヨリ誠ニ美事成御獵之鯉壹本御獻上相成御臺へ乘セ今日爲御祝儀鯉一本　大納言樣ヨリ御獻上之旨御披露仕候得ハ　御意ニ　大納言殿ヨリ獻上鯉一本ト申上候得共四魚ト言テ海魚ハ鯛今一品失念川魚ナレハ鯉鱸此四品ハ假令一疋タリトモ一折ト御披露可仕モノト御教へ戴候事　是ハ養父八郎兵衛ヨリ承リ居候

一御壯健之比謡曲被遊候事

公何ヲ被遊候テモ不一方御勝レ被遊候御事ニテ亂舞ハ百五拾番何ニテモ被遊候得共道成寺計リハ不被遊事惣テ大夫タリトモ面白ク思フ所之舞一度ナラスナシ繰返ス事モ有ルモノカ　公石橋ヲ被遊シ時廿四度御繰返シ被遊四拍子之囃方ニハ笛野口喜兵衛小鼓小畠勘十郎大鼓藤宮七兵衛太鼓瀬本彌左衛門此四人ハ何ニテモ相勤前件石橋獅子狂中彌左衛門太鼓ノ皮ヲ打破リ其破リタル儘終リ迄打詰彌左衛門意表ニ出タル妙手又野口ハ名人ナレ共大酒呑ニテ家藏之名笛何ニテモ質藏ニ置ク故御能每ニ　上之御世話ニ相成元利之御出方相掛リ終ニ御預リト相成御能當朝ナラテハ御下不相

成依テ前々調ヘニハ口笛ニテ相調ヘ候由藤宮七兵衛ハ段々結構後々大御番被　仰付　公之被遊候御面其外衣裝之類別段結構ナル由　公御老年ニ至リ根來傳法院ヘ不殘御奉納相成候事

一湊川口ヘ阿州侯碇泊之事

松平阿波守參府之節大坂ヘ渡海之所風波ノ爲不得止俄ニ梶ヲ直シ和歌山湊川口ヘ碇泊致シ關船幷雜船ニ至ル迄青岸ヘ掛リ數艘之船ニ幕ヲ打印ヲ立顯シ有之事歟青岸ニハ出入之船番所有之湊久保町濱ニモ同樣番所嚴重ニ有之因テ難風不得已順風ヲ相待候間碇泊仕度旨両所之內何レヘ成共使者ヲ以斷出候ハ其儘ニハ不被成置是非爲御挨拶御使可被遣事ニ寄リ長ク相成候ヘハ寺院商戶之內旅宿ニモ可相成歟又ハ印ヲ收メ幕ヲモ不打只忍ヤカニ居レハ其通リ印ヲ立幕ヲ打碇泊之屆ケモ無之事歟其返答モ丁寧ナラハ大目ニモ見遁シ可申ヲ恭然ト松平阿波守參府之趣ト歟權柄之答ニテモ有テハ買船ト違ヒ殊ニ濱御殿御住居ナラハ至テ近傍ニモ有之其儘差置カタク隱密方段々尋ニ參リ候シヤ段々伊賀應接ニ參リ內々諭シタルカ國主只今此邊打廻リニ參リマスト申ケレハ一時ニ動搖碇ヲ揚ル間モナク綱ヲ切テ退帆致シケルトソ

一御剃髮之事

公御隱居被遊御剃髮何ツシカ御年被召初冬ノ比ヨリ初夏之比迄月代御延シ夏向御剃髮被遊尤御剃髮ヲ上ル坊主ノ中ニ一役有之片手ヲ膝ニ置片手ニ剃刀ヲ持奉剃　公ハ前後左右思召次第御振向若過テ不調法仕候ヘハ其輕重ニ依テ被追込誠ニ迷惑ナル事之由

但御剃刀ハ通例ヨリ少シ大形ニシテシノキモ鑪掛立派ニ見エ候品ヲ求メテ御不用之品ハ何挺ニテモ申受ラルヽ事之由

一小倉村鴻恩寺ヘ被爲成之事
和歌山御城下ヨリ四里半計リ東小倉村ニ鴻恩寺ト言高名之寺院アリ開山ハ乍恐　東照宮樣ヘ御緣モ有之　南龍公之御招キニ因テ御國ヘ參リシカ又自然ニ罷越ケルカ其儀ハ不知或時　公被爲成其時之和尚何代目歟罷出御尋ノ儀御答申上其外開山知識ノ高德ヲ申上候中ニ庭前ハ勿論境内之蛙聊モ鳴キ不申ト申上候ヘハ何故聲ヲ上ヌト御尋被遊候ニ付夫ハ學問ヲ仕リ候耳障リニ相成事故蛙之聲ヲ伏セ申タル由申上候得ハ成程尤ナル事ナカラ鳥獸蟲ケラニ至ル迄時ニ應シ鳴ヌ者ナシ全ク開山之高德ニ依テト筆墨紙ヲト被　仰早速床之料紙ヲ差上候得ハ

蛙までだまつてきくや法乃道

ト被遊又其儀ヲ尋ル者有ラハ斯アリ度者カト　御意被遊候御事

一御膳部之事
御膳部之儀ハ容易ニ難申上御膳番御膳奉行御臺所頭其外御臺所人之内ニモ役々有之御料理獻立之儀ハ一日三度之御膳御獻立書付ヲ以三日前御臺所頭ヨリ御膳番ヘ差出シ夫ヨリ御役々之目ヲ被通候得共天氣之模樣ニヨリ小鱗ハ扨置鹽物モ可差上品無之不得止奉伺候得ハ花鰹ニサキ梅スマシト御好ミ被遊則其通リ差上候得ハ殊ノ外思召ニ相叶右御吸物ニ御歌被遊其御歌之下之句七文字ヲ以テ梅カ香ノ御吸ト御料理一品之御目ト相成候事　初嶋新助話也

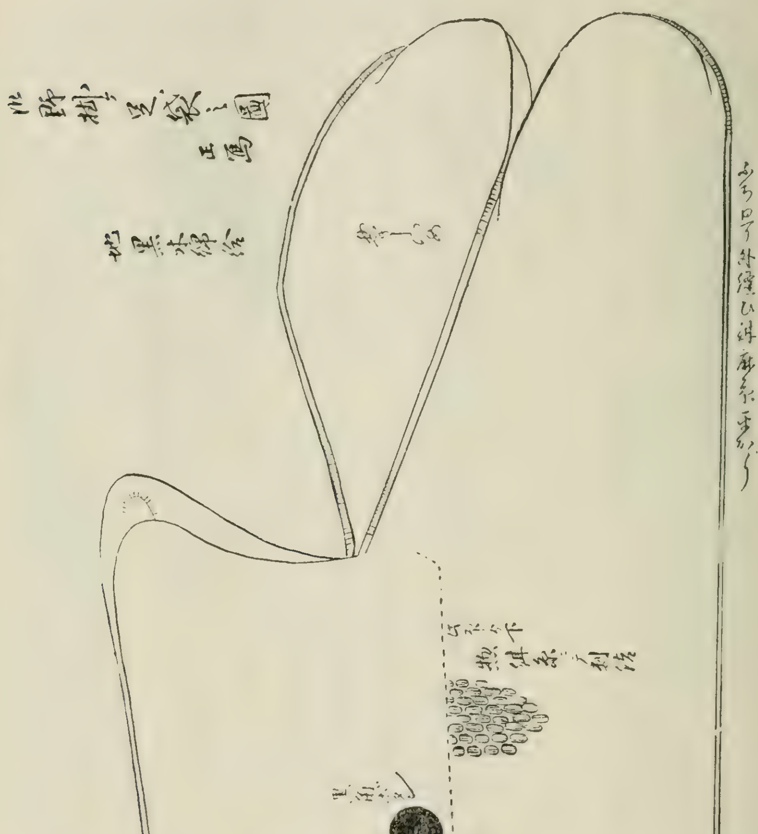
但右之御歌上四句ハ嘉功ニ失念仕今ニ殘懷之至リ也其余津村長右衞門ハ趣緣ニ付折々出會　公之面白キ御歌實父ヘ申聞ケルヲ側ニテ承リタレ共一首モ得覺エ不申吾ナカラ何ト申テ宜キ歟實ニ殘念至極也乍去今ニ忘レ不申記シ置度ハ長野彌三右衞門先

代七郎左衛門ハ長野安藝別家也二十五石大番組此上ナク困窮如何ナル　思召被爲在候歟千石之高ニ御足被下置執政被　仰付
拜領品數々アル中ニ御用紙ハ奉書歟橋上ニ鵜ヲ御畫キ實ニ意表ニ出タルト申ス可キ歟何共申上樣モ無之今一度拜見寫眞ニ仕
書加ヘ申度本家安藝子孫ヘ參リ彌三右衛門跡居所相尋候ヘハ浪花ヘ引越何方ニ居ルヤ相知不申旨乍殘懷其趣ヲ書ス但彌三右
衛門方ニテ拜見家ニテハ烏ト申居候ヘ共鵜ノ　思召ナラン六十五六年ノ昔彌三右衛門方ヘ咄ニ參リ拜見外ニ御刀身古備前兩
刀小乱二尺三四寸結構言語ニ難述



一公之御容體奉拜老話之事
公御健强ニ被爲　在御丈高ク御色白ク如鷄卵御鼻筋高ク通リ御眼凉ヤカニ尖ク御裝束被遊候得ハ
猶以　御位高ク奉拜候ノ御事
　但重瞳子ニ被爲在候由岡野平大夫家之申傳
一日々御用相成品之事
黑豆之羹汁御用有之日々如何程潰シ候歟御西御緣有之女中親類ニハ一粒選ミ黑豆八寸許リ之重ニ
二口分三口分喰余リ又黑豆カト申位不怪モノ也又葉付ニアラヌ生姜每日二三荷ツヽ御納屋ヨリ御
臺所ヘ納候由又地合昆布トモ可申羽二重之人參染切レハ望次第ノ品有之一反ニテモ一疋ニテモ望
次第手筋ヨリ御不用出候事
野掛之御足袋其大サ拾二三文位ヨリユツタリ色黑ク外ト縫最細密ニ苧刺シ緣ハ紺之苧平ニテ卷縫
何百足ニテモ一足之目方分量一厘モ不違左右モ同樣目方不違事
　右御足袋縫人ハ御道具支配小池惣五郎ト云人也尤御足袋片足出來候得ハ目方掛候事之由是モ手筋ヨリ何足ニテモ申受ラルヽ
事ニテ有シ
　信嘗テ聞處ニヨレハ該御足袋ハ若山通リ町淺井屋トイヘルヘ製裁セシメラレ大サ十二文半一日ノ御放鷹ニ廿五足ツヽ御
用アリシト公ニ奉仕ノ稻垣次左衛門ニ隨身シタル濱地庄助ナル者ヨリ遺物ノ一隻ヲ得タリ眞圖左ノ如シ　御躰格ノ勝レ
給フ想フヘシ現品ハ寶庫ニ納メタリ

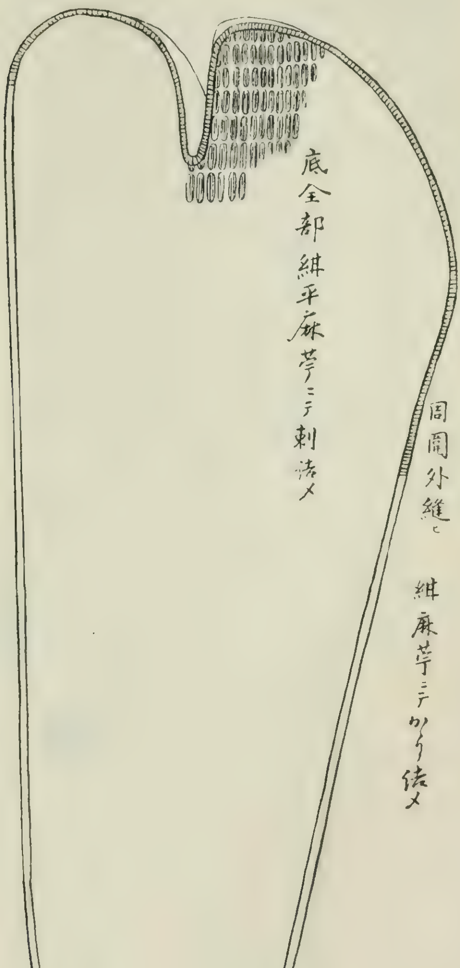
御野掛足袋　大サ圖ノ四倍



大サ實物ノ四分ノ一

圖之底

大キサ此ノ圖ハ實物ノ四分ノ一



一御肖像之事

高松三四丁南羅漢寺勝手清間ニ　御木像奉安置有之先年竊ニ奉拜候得ハ　御剃髮之御姿百シラ色之御道服ヲ被爲　召御召衣之色ハ失念御厨子之中ニ　御着座御丈ハ壹尺七八寸余可有歟衆人ニハ余リ拜ハ不爲致歟之由

一水上儀左衛門御供先之事

水上儀左衛門昌時御徒頭常御供相勤候節江戶詰之砌　將軍家紅葉山　御參詣ニ付此御方樣ニモ御與參被爲在候處小々御遲刻ニ相成最早　將軍家ニハ被爲　成御門打切御門番同心鐵砲ニ玉込火繩ニ火ヲ付頭モ出張誠ニ嚴重ナル處ヘ御行掛リ候得共御門打不通候付兎ヤ角ト仕候處常御供水上儀左衛門其樣子ヲ見切御門御開キ候ヘ　紀伊殿御與參ニテ候旨申候ヘハ紀伊殿ニテモ尾張殿ニテモ最早　公方樣ニハ御登山被遊候得ハ御門御警衛御通行不相成旨御門番申候付左候ハヽ通行不相成紀伊殿引取可被申候然共拙者供役相勤御與參不都合相成候テハ拙者不調法申譯不相立候故切腹仕役儀之申譯仕ルト腹押開キ刄ヲ突立ントスルヲ透見致シ暫ク御待候得ト儀左衛門ヲ押止其中御門開キ無事ニ御通行無御故障御與參相濟候由

信曰ク記者神野嘉功按ヲ付シテ曰ク　儀左衛門自殺不便ニ付開門可有儀更ニ有之間敷　將軍家御成先ニテ異變アリテハ不相濟儀ト一決致シタルカ然レ共御門番ノ頭即日切腹其日ノ當番一組不殘永ノ御暇ニ相成候事ノ由是嘉功幼年ノ比姉聟向笠藤右衛門ヨリ承ル倘後年勢州在勤ノ水上儀左衛門方ヘ聞合タルニ儀左衛門昌時ハ享保廿卯年家督寶暦七丑年病死事實不明トノ答アリシ云々ト記セリ信水上家々譜ヲ閱スルニ該答ノ如ク儀左衛門昌時ハ寶暦七年六月病死ス觀自在公此時僅ニ御十二歲ニテ御同公初テノ御與參ハ寶暦十辰年五月（御十五歲）ニシテ昌時死後四年目ニ當ルサレハ儀左

衛門昌時ニ非ルハ明也昌時ノ惣領ヲ儀左衛門昌常ト云寶曆七年八月昌時ノ跡ヲ襲キ明和八年三月十八日江戸御參府同五月八日御所勞ニテ御與參無之以後御不例ニテ御登城モナク安永二巳年九月御歸國切ニテ同四未年御退隱ナリ本記或ハ儀左衛門昌常ノ事トシ明和八年三月下旬ヨリ五月初旬迄ノ間ニ在シトスルモ昌常御使役中ニ當リ常御供ニ非ス併御使役ハ必御供ニ服シ御供先ノ事擔當スレハ强チ常御供ニモ限ラサルヘシ兎ニ角矛盾スル處アレハ本記ハ余人ノ事ヲ誤傳シタルニ非ル歟信夙ニ聞及フ所ノ一說アリ御豫參御遲刻御道筋既公儀御固メ付（御固メトハ警衛ヲ配シ一切通行ヲ禁スルナリ將軍御成ノ時ハ一二三番ノ注進アリテ一番觸ニテ何二番觸ニテ何トノ制規アル也）御通行ヲ拒メタレハ切テ通レトノ仰アリシト此時江戸長井四郎左衛門モ御供アリシト父祖ヨリ聞傳ヘアリト今ノ長井誠語レリ（誠ハ四郎左衛門ノ子孫）觀自在公ニハ頗御豪放幕府御勤務ニモ御隨意の御事モアラセラレシヤニテ明和八年御參府以後常ニ御引籠リ遂ニ御退隱ノ由ハ兼テ聞傳アレハ何等歟ノ事實アリシニハ相違ナカリシナラン

一濱御殿御火所より出火之事

公御住居被遊ノ濱御殿（月日失念）吳服之間御召服溫暖之御火鉢ヨリ聊火過キ山五丁目早鐘（信按ニ山トハ岡山五丁目ハ本町五丁目也兩所ニ時ノ鐘アリ）撞出シ比ハ午時下刻ト覺敷我等壯年健足周章取物モ不取敢火元ヲ聞付飛カ如ク駈行ントスレハ　濱御殿ト承リ　湊御殿ヲ廻リ新橋堤ノ上ニ同黨之若者群居シテ諸役人其外火ニ掛ル雜人周章駈集リ混雜騷動ヲ見居レハ彌山五丁目之鐘ハ頻ト撞ニ從ヒ雜人之足並鐘ニツレ遲速出來鐘ノ音頻ナレハ足並モ早ク見エシカ　湊御殿御庭方住居ノ垣間之道ヨリ黑羅紗之羽織ニ同シ毛之二重緘之兜上ニ緋羅紗之細キ短冊之如キ緣金之筋ヲ廻リニ付タル頭巾ヲ冠リ丈ナル青ノ駒ニ白泡吹シ乘リ來リ新橋ヘ最早一丁計ト見ユル比又新橋東垣間ヨリ黃羅紗之羽織ニ塗笠ヲ冠リ月毛ノ駒ニ打乘少シ駒ハカヽリシカト見ルヤ否口附ヲ振リモキ一二足駈出スト均ク青物畑ヘ眞逆ニトツト落ツ落タル人ハ畑之中ニ漸ク起上リ駒ハ其儘西ヲ指シ新橋之方ヘ駈來リ彼黑羅紗羽織之青駒目掛テカ

ヽリ新橋際ニテ蹴合蹴チ合終ニ前肢ヲ上ケ乘人ヲ抱キ込ントスルヲ眞ノ鞭ニテ月毛ノ面ヲ打誰モ月毛之口ヲ取分ル人モナク只アレ／＼ト傍觀スルノミ漸ク月毛之口取駈付口ヲ取止ルヲ見レハ嘉功實家同丁御先手物頭池内柳左衞門也誠ニ其場之有樣畫ニハ扨置言葉ニモ述難シ或時伊達千廣へ昔語リヲ致シケレハ其黑羅紗ニ青ノ駒ニ乘タルハ我等養父伊達九左衞門トテ御用役ト申テ御用御取次ヲ勤タル由

一魯細亞船渡來之事

文化度魯細亞船渡來アリシ時　幕府諸侯ニ令シテ武備ヲ嚴重ニセシム　公老臣中ヲ召サレテ御諮問アリ各老御答申上ケルハ熊野ヨリ加太浦ニ達スル海岸ニ砲臺ヲ築キ遠見番ヲ置等之事ニ過キス公仰ニ各自申樣ノ如キハ萬一和歌山近傍ニ事アル時各自之門ヲ鎖シ内ヨリ堅ク守リ虎城竹垣壘ヲ顧ミル計リニ異ナラン余常ニ思フ所アリ忠臣君ニ事フル本意ニアラスト仰ラル各畏縮答辨スル能ハス　御意ヲ伺ヒケルニ余常ニ思フハ外國船日本近海ニ來航スルアラハ速ニ虎伏山竹垣城ヲ出テ大阪城ニ入リ西國ノ諸侯ヲ大坂ニ集メ約ヲ定メ　帝都王室ヲ守護シ奉リ　幕府ヲシテ勤王ノ實ヲ失ハセサラシム可シ是余カ祖先ニ報シ　幕府ニ盡ス赤心ナリト　仰ラル各畏縮敬服スト

右一章元三浦家ノ臣佐野元恭ヨリ差越

蝦夷地騷動之節之事

文化四卯年魯西亞船蝦夷地上陸騷動之節

北海異談卷之二十ニ載ル處　敵味方勝負ヲ計ル事

本文之外

傳説曰　爰ニ紀州候ノ　御隱居ヲ大眞翁ト名付參ラスル也此方最武門賢キ御方也此度之一件ニ付東國ノ模樣度々早打ヲ以テ御國元ヘ江戸ヨリ仰越サレシ也然ルヲ　大眞翁江戸表ヘ仰遣ハサレシハ今度之早打無用タルヘシ又一國之君タル者常ニ武備ナカランヤ用心ハ常之事也是武門之職ニシテ若シ異人我國ニ來ラハ此大眞アラン限リハ忽チ取リヒシカン事安カルヘシ其譯ハ海岸ニテ防カントスルハ無用之儀也心ヲ費シ肝心之手詰之所ニテ兵勞レ國モ費シ我若之ヲ防クハ敵ヲ紀ノ路ノ難所ニ僞リ引付地ノ利委敷味方ヲ以テ間道ヨリ兵ヲ出シ一人モ不殘燒殺サン事何ノ苦モアランヤ敵ハ不案内味方ハ地利ニ委敷爰ヲ以テ勝事ヲ知ル餘リ海手之固メモイラヌ事併ナカラ油斷ハスル事ナカレト仰アリシトカヤ誠ニ武將之器自然ト備リ玉ヒシトヤ予是ヲ感シ參ラスル處ナリ然ハ實ハ　公儀ニモ是等ノ事勞ニテ御心モ付玉ヒシヤ最初ヨリ此心付給ハサリシニモ非ス此謀ノ通リニテ敵剛臆虚實モ知ラルヽトソ

右一卷ハ紀人神谷喜功ニ元九兵衛ト稱ス一自編付贈スル處也「信」少壯之比ヨリ　公ノ御事蹟ヲ古老ヨリ竊ニ耳ニスルモノ少ナカラス其當時忌諱ノ嫌ヒ等アルニヤ絶エテ筆記ノモノナク唯口碑ニ存スルノミ也シ公薨セラレシヨリ既ニ六十六年ヲ經古老多ク物故口碑モ亦傳ハラサラントス喜功今歳九十有七ノ老翁强健能ク往事ヲ語ス依テ切ニ其筆記ヲ乞ヒシニ欣然筆ヲ執テ此冊寄贈セラル且續シテ曰ク中々承リタル事モ數々左之條ノ如キ加ヘ度ナカラ近時眼ヲ患ヘ視力甚タ疎ク筆亦鈍リ最早力不及云々と申越ヌ

一御由緒樣　公御直ニ御火葬之事

一故御徒頭格由與請小川吉右衛門天文數學御相手ニ有之處久々打絶エ御用モ無之年月相過テ又々吉右衛門御呼出於天文臺天之高サ御積ラセ之事

一御書物方勤之仁御側御褌被　仰付高石垣之高サ御尋之事

是等今一度押シ質シ度ハアレトモ此上煩ハサンモ忍ヒカタク暫ク其儘ニ措ク他日詳細ヲ悉スノ便アラハ幸甚也

一公ハ御藥種畑之舘ニ在セラレシユヱ世御藥種畑樣ト稱シ奉リシ信元治元年紀州祇役之時御舘ヲ拜見セシニ御園ヨリ入テ直ニ御數寄屋アリ　青龍六君ノ御造立ノ儘存セルヨシ御質素イフ計リナシ御内傳ヒニ御茶屋ニ至ル之ヲ東ノ御茶屋トテ　清溪公ノ御造營　公常ニイラセラレツルヨシ御座所ハ疊ヲ敷木柱ハ多ク杉ノ手斧ハツリ天井ハ葭簀ニテ竹ノ格子アリ御次ハ十三疊半夜詰之扈從衆常ニヨリカヽリ居タル跡トテ圭角ヲ磨シ光澤ヲ殘シタリ裏ニ御勝手アリ御庭ヘ下リ垣ヲ入テ大奥アリ　公ノ

御好ミトテ木品ハ結構ト可申ガ聊御裝飾ナク唯十疊計リノ御二間アリテ四方ニ御入側ヲ廻シ障子四壁少シモナク異樣ノ御搆ヘ也少シ階ヲ下リテ西ノ御茶屋アリ亦　清溪公ノ御營立ノ儘トソ御素朴東御茶屋ニ同シ御建物外ハ荒濱ノ海面也凡テ御舘ノ外ハ聊ノ竹垣ノミニテ墻塀嘗テアラス當時ノ有司御搆ヒ圍之事申上シニ前ニ阿波守アレハ用心ニ不及策ガヨク守レリト御沙汰アリシトナン聞エヌ

又一說ニ墻塀ノ事御勘定奉行ヨリ言上セシニ假令塀垣シタリ迚越ラルヽモノナレハイツソ人々手ヲ引並ヒテ垣ノ代リニ立ヘシサスレバ誰有テ越スマシトノ仰ニ事止ミタリトモイヘルリトゾ　明治廿七年六月　堀内　信識

一水野男爵忠斡子（御附御家老水野土佐守維翰迄ノ炊頭ト稱ス）嘗テ父ヨリ聞得ル處也ト信ニ語テ曰　觀自在公ニハ文事ニハ御心ナキ如ク傳フル者アランガ甚誤リ也貞觀政要梭刻ノ如キモ公ノ內旨ニシテ御小姓ノ翟或時御次ノ間ニテ同書ノ讀合ヲナセシニ御座所ニテ聞及ハセラレ那邊ヲ今一回讀ミ試ミヨト命アリ命ニ應シ再讀下シタルニ果シテ誤謬アリシニゾイタク敬服シ奉リタリト

信按ニ貞觀政要ノ梭正ハ初メ山本惟恭ニ命セラレシガ文化三年十二月死ス後伊藤滄藏弘朝命ヲ受テ校ス緒業半ナラスシテ亦死ス文化十五年四月終ニ山本源五郎惟謙命ヲ繼キ文政五年ニ至テ業成リ剞劂亦竣ル皆　舜恭公御時ニ係ルト雖モ本記ニ據レハ　觀自在公御隱居ナカラ內旨ノアリシ處ナリシカ

一公ハ折ニフレ侍臣等へ難問ヲ仰アリテ興シ給フアル時御小姓ノ某ハ臆スル色ナク　公ノ御惡戲サテモ心憎シ今回ハ臣ヨリ一問ヲ奉ラント申上ルニソハ面白シ疾ク申セヨトノ仰ニイロハヲ（或ハ十二支ヲモ知ラスシカト記憶セス）末ヨリ速ニ御聞セ給フヘシト申上シカバ是ハ參リタリト御笑ヒ遊ハサレシトナリ（以上水野氏直話）

一渥美甚五郎政要（源性公へ御諫言申上御手打ニ相成シ甚五郎勝之カ家名ヲ御立相續被仰付タル者也）ガ　（西條源性公世子賴雄君（山城守本寺院殿）ヲ廢シ給フヲ極諫シ御手打ニ逢タル甚五郎勝之ガ家名相續人也當時家斷絕ノ處　舜恭公ノ時實名御立アリ）自記シタル本廟之記ト云ニ左之記アリ奇異ニ渉ルノ嫌ヒアリト雖モ直筆ノ舊記ナレバ爰ニ附記ス

政要幼少之時實家祖母勇光院折々被話候一條

此一ヶ條は可記筈無之候得共聞及有之候故寫シ置他見無用

大殿様觀自在院様也御事本地院様之御生レ替リニ被爲在トノ儀大恩寺源海和尚ヒソ〳〵話シ候ヨシ何故ト申セハ　大殿様御氣象御荒々敷御家中其外女中抔ヲ數多ク御手打被遊候御事是ハ全ク　本地院様御事此代ヘ御無念ヲ御ハラシニ御出被遊ト申モノ寄々有之トノ儀源海和尚被語候由我等幼少之節勇光院様毎々御咄シニ而有之タル也

安永之比ハ　大殿様猶更御氣荒ク被爲在候ヨシ其比ハ　本地院様大ニ　御捨リニ相成候由

一右御再生トノ事ハ大村彌兵衛我等ニ直ニ被話候事慥ニ覺居申候右ハ　大殿様御逝去之砌ニ而有之彌兵衛申候ハ去ル僧達モ御再生ニ而有之候トノ事承及有之ト被話候

本地院様御卒去五月廿九日

大殿様モ御同様ニ而被爲在候モ不思議ナル事ト彌兵衛被話候事

追　記

一寛政十二庚申年二月ノ條ニ文化九年五月徳本行者ヲ被爲召御迎之船五艘ヲ出サレ御近侍三人水主頭ヲモテ護衛云々トノ事アリ是ハ同事ノ誤傳ナルヤ將別事ナルヤ詳ナラサレハ尚聞得タル一說ヲ追記

阿波ニ修業中ナル徳本上人ヲ御招請ノ時御迎之爲鯨船三艘ヲ以テ稲垣次左衛門ヘ下命上人同舟ナシテ荒濱ニ着上人上陸跣足ニ而歩行其土足ノ儘ニ而濱御殿御床ノ前ニ着座　公出御御對面被

爲在不思議ナルハ上人ノ足一点ノ土砂ツカス洗ヒタル如也シトイフ此時暴風上人奇瑞ノ事等其詳ナルハ高僧傳ニ記ス

一御言行錄之内ニ犬ヲ澤山御飼育之事アリ紀人某之談ニ稻垣次左衛門幼年之比西ノ畑中ニテ愛犬ニ戯レ居シ折シモ　公通御アリテ風ト其犬御目ニ被爲留御所望被遊シニ此犬私ノモノニアラス親ノ愛スル所ユヱ一應申聞候ヘシ併　若上ノ御意無論難有奉畏候ハン御召連遊サレヨト直チニ呈シケレハ御喜悦斜ナラス後該兒ニ二人扶持ヲソ賜リシト犬ハ三毛ニテ頗ル美也シカハ色絹ト名付ケ給ヒシト也

按ニ稻垣次左衛門ハ初メ丈慶又丈啓ト稱ス天明三卯年三月　觀自在公表坊主ニ被召抱表御川部屋坊主トナリ同局認物勤御徒格ニ進ミ還俗追々昇進文化三寅年二月表御右筆日記方ト成リ文政四巳年八月奥御右筆ニ轉シ後御留守居物頭格中奥詰六十石高四十五石ニ御加增天保十四卯年二月隱居友我ト號ス此人畫ヲ能クシ畫名ヲ南洲又小字ト稱セシ也

一野掛之御足袋ノ事是又御言行之部ニ記セリ稻垣次左衛門ニ随身シタル濱地庄助ナル者ノ話ニ右御足袋ハ若山通リ町淺井屋トイヘルカ畏リタリ大サ十二文半一日ノ御放鷹ニ廿五足ツヽ御用アリシト則御遺物之現品一隻持傳ヘショシニ而贈リ越タリ依テソノ　ヲ左ニ摸シ現品ハ寶庫ニ納メヌ

一海部郡小屋村ニ當村開起ノ百姓中川九郎右衛門トイヘルモノヽ子孫ニ中村彌右衛門トイフアリテ宗休トイフ寬政六年百五歲ニテ死ス存生ニ玄孫迄ヲ數フレハ六十三人アリ觀自在公甞テ其家ニ至リ臨マセラレテ若干ノ賜モノアリシト也烏丸家冷泉家ヨリモ賀ノ歌ヲ贈ラルヽトイフ

南紀德川史卷之十四

香巖公第一

引用書目

御家譜

西條家譜畧

寶鑑

德川十五代史

續言行錄　西條愛久澤直成記　大君言行錄ニ續クノ意トス

瑞德錄　渡邊氏記　名珪通稱半平又彌平ト云嘗テ和文瑞德記ヲ編スルノ處舜恭公ノ內旨ニ依更ニ漢文ニ譯述文化十年八月成上云

先君寔錄　同上

麟德記　村岡六藏艮毅編　瑞德寔錄續言行錄寶鑑堀內筆記ノ五書ヲ編シ少シク取捨ヲ加ヘシモノ也

同附錄　述者不詳　但シ二樣アリ一ツハ安明遺事一ツハ續言行錄附錄ヲ麟德記附錄ト題セシ如シ卷中親シク奉仕ノ文アレバ或ハ時ノ近臣カ

堀內彥大夫庸德筆記

安明遺事　述者不詳　凡例文中ニ臣ハ司農府刀筆ノ吏トアリ

乞言私語　遠藤通隨筆

古學小傳　清宮秀堅著

凡例

一歴世世子乃至公子中ノ譜ハ低行畧記御年齡ヲモ掲ケサルノ例ト雖　公ハ一旦西條家御相續御事歴多ク上田章亦漢文記スル所アルヲ以テ旁之ニヨリ初メヨリ歴世御家督後ノ例ニ從フ

一寬諦院夫人ハ西條家御相續中ニ御卒去爾來御再緣ナク又御腹庶子モナシ故ニ簾中公子ノ譜ナシ

一歴世ニ於ケル孝子褒賞養老恩賜ノ如キハ皆譜中ニ編記ノ例ト雖モ　公ノ世此類最モ多シ依テ良政ノ蹟燦然視易カラン爲メ別ニ輯集第二卷ニ記載ス

一御一世ノ政令初メ施政ノ現況ニ關連スル分ハ譜中ニ編纂其餘年月分明ナラズ或ハ御著述ノ長文ナル又ハ御一己御德行等ニ係ルモノハ類集以テ第二卷トナス

一引書麟德記ハ續言行錄瑞德錄等ノ五書ヨリ蒐集ノモノト雖モ或ハ重復ニ渉ルアリ又事柄ニヨリテハ原書ニ據ラサレハ分明ナラサルアリ依テ今委ク原書ニ基キ抄出シ其書目ヲ掲ク唯麟德記者ノ考案アル分ハ特ニ麟德記ト題ス

南紀德川史卷之十四

香嚴公第一

諱治貞　初諱賴淳　御幼名春千代

大慧公第二公子

御所生　外山氏　一ニ尾關氏ノ女名不詳 又藤田氏

元祿十丑年十二月廿三日生
寶曆八寅年六十之賀明和三戌年三月廿九日七十之賀
安永二巳年十二月廿一日卒去身延山久遠寺ニ葬　西條家譜
法謚　善修院殿法常隨緣大姉

御內室　今出川三位中將公言卿御妹　千穠君定子

父　今出川大納言誠季卿

母　今出川公詮卿女　節君

元文三午年六月生

寶曆四戌年四月廿六日御緣組

同　五亥年九月十三日京都御發輿十月朔日江戶御着同日御結納御婚禮

寶曆七丑年十月十八日御袖留

安永二巳年四月廿六日御卒去身延久遠寺ニ御葬送

御法號　寶羅院殿妙到日理大姉　初寬明院　以上寶鑑　西條家譜

瑞德記に曰く夫人婦德ましく〳〵内政の御諚常に女子小人の交締を戒しめ給ひ賢淑の聞え
おはしませしと

享保十三年 戊申

二月十六日生於江戸赤坂邸

一享保十三申年五月十一日御宮參　御家譜

一同十四酉年十二月十一日御髪置　寳鑑

一同十五戌年十一月御痲疹　御家譜

一同十六亥年三月廿六日宗將卿油鳥尾御鎗御譲　寳鑑

一同年九月廿六日御月代初　寳鑑

一同十七子年二月十三日御袴着　同

一同廿卯年五月廿六日御鎗初　奥にて　同上　以下皆同し

一同年十一月御疱瘡　御家譜

一元文二巳年八月十六日御讀初

一同三午年頭より御太刀馬代を以御禮

元文五年 庚申　公十三歳

二月十一日始擐申

一同五申年二月十一日御具足召初

寛保元年辛酉　　公十四歳
五月十五日　頼淳と御改
一同年八月廿三日　御目見被　仰入廿六日松平相模守殿御同道御老中御廻り
一同年九月朔日初て謁　公方様へ御目見
一同月四日五節句八朔御登　城御伺済同九月節句初て御登　城
一同年十二月十九日従五位下に叙即日従四位下に轉叙左近衛權少將に被任
一同月廿一日　修理大夫と御改是月御官位之御禮歳暮月次御登　城
一同二戌年正月年頭初て御登　城
一同月十五日より月次御登　城　二月十八日表御住居
一同年四月十七日初て御豫參
一同年六月嘉定初て御登　城
一同年七月廿七日雲雀初て御拜領十月玄猪初て御登　城
寛保三年癸亥　　公十六歳
一同三亥年三月廿三日御袖留　實鑑　御家譜には廿二日とす
一同年十一月十二日雁初て御拜領
一同年十二月十三日御前髪執　實鑑
延享四年丁卯　　公二十歳

一延享四卯年九月十七日　玄蕃頭と御改

一寶暦二申年正月五日御中屋敷火災に付御上屋敷へ被爲入　二月九日丸山御茶屋へ御移

寶暦三年癸酉　　公二十六歲

西條家御相續

七月廿九日出嗣西條侯頼邑公之後

七月廿五日左京大夫頼邑樣永々御病氣ニ依御隱居御願被成玄蕃樣ゟ御相續被　仰出　續言行錄

御家譜及び寶鑑には廿九日とあれども西條御家譜には廿五日とあり

改名

一八月八日左京大夫と御改　御家譜寶鑑には八月四日とあれども西條家御家譜には八月八日とあり

同月十五日御相續之御禮

擧榎坂五郎左衛門節國用

御勝手整理

御勝手御不如意成りしかは榎坂五郎左衛門　今の祖父かを御用ひ被成御相算にて御儉約を格別に被成候に付數年ならずして御勝手御取直し被成御用意の御金も數万兩御出來被成候よし

宮内大輔樣御代　公の御養子頼謙公也　に新田御取立被成候も其御金也とそ凡四五萬両も御用ひ候と世には申せし由同じ御時に御家中御貸附金利なし年賦に被成候事も兩度有しと也今に御儉約方と申て御家中へ御貸附有り減祿せし人は其減祿丈けの御貸付は浮置に相成候よし祿增時は又其御貸附も其程〳〵に付て增す由よき御法也此御方御家中へ御貸被成候筋半知の節浮置に相成其後は弃捐に相成候樣に承及候是も一二萬両可有之と人は申せし也

寶暦三酉年十月より安永四未年二月迄凡二十三年にして丸年は廿二年と四ヶ月の中に十萬金に

細井平洲を聘す

御婚姻

餘りし所の御金の出來候事人力とは思はれさる也然るに御馬は二十疋程は常々御厩にありてその內には六十五両にて御買上ありし南部出の御馬もありしと申也監物様（賴邑公なり）は御下屋敷に御隱居被成此御入用も少かるまじその上に御能御好故御附人にて御能も出來候様に成り被進候よし是より御人少くては成かたく傳授事等の御入用も有り折々は御役者なとも召す事もあるへし御隱居方の御入用餘り少しとも思はれす又植村出羽守へ御入り有之御姫様もあり此御手當も余程の事なるへし千穗君様（并）善修院様の御方の御入用後には宮內大輔様（此ノ時ハ支藩頭様ト申上候）の御入用も有りて旁御省畧の事少し斗りにて大なる御益は有ましと思ふに前に記せし御經濟の御事感じ奉るにもあまりある御事なり　麟德記

信按に本藩にて毎年南部御用馬の定格は金三拾両也き此比に六十金の御馬は特別の駿馬と察せらる武備には御節しの事なかりしと想ふべし

聘紀平洲師事之

平洲俗稱細井甚三郎名は德民字は馨如來と号す尾藩の儒臣公本藩を知らせ玉ひし後もしは〳〵召されて侍講ありしとそ　安明遺事

寶曆四年甲戌　公廿七歲

二月朔日御緣組之御內約　今出川三位中將公言卿妹千穗君定子　寶鑑

寶曆五年乙亥　公二十八歲

十月朔日御結納即日御婚禮御整　十一月御婚禮之御禮　寶鑑

明和四年丁亥　　　公　四　十　歳

六月廿七日御四十御賀内々にて御祝ひ　西條家譜　寶鑑

明和五年戊子　　　公　四　十　一　歳

八月榎坂五郎左衛門歿年七十六公深悼惜之作墓碑文賜之

榎坂五郎左衛門八月十二日身まかりければ御悼惜一方ならせ給はずやがて御作の碑文を給ふ御家御相續の後迄も此人の毎月の忌日には其前の日に御膳番の人々に何となく明日は精進ぢやといつも〳〵替らず宣せ給ふとぞ　安明遺事

牌文當公第二卷漢文記事に載す

一寶暦十一巳年御用にて五郎左衛門豫州に在りし時遣されし御文に

一筆申入候道中何之障無之旅行之由承大慶存候隨分障りなきやうに用心取計保養專一に存候此程おゆり殿事朝夕存出しゆかしく存候何分両州用向濟次第早々歸着まち入候江戸にても勇敷勤候かしく

二月廿九日　　　左　京

榎坂五郎左衛門との

一寶暦十二年三月十三日此人の七十の賀を祝し給ふとて渠か居小屋に入らせ給ふて御詩作被下又壽の字書たる御盃三穂の富士を蒔畫にしたる小振の御臺に小紙にて作りたる帆かけ舟三ッ載せ給ひて御短冊を副て下し給ふ御發句に

ふたつなき齢ひや三穂乃松の華　以上安明遺事

紀伊國奇人傳に曰く榎坂五郎左衛門は伊都郡東家村堀江平右衛門弟也榎坂太郎兵衛養子に成り學文路村に住す平野左大夫さ共に大筒を學ひ柔術に達し御徒士に召出さる　左京大夫樣御愛太刀に被　仰付御十七歳の節學文を御進め申上段々忠勤を盡し御附に相成奉行職に被　仰付三百石頂戴仕るさ云々

信按に封建の世君上之尊嚴極りなく如何なる重臣たりさも君手書を賜ひ其家に臨み給ふなさ稀有之事也公の賢臣を優遇し給ふ察し奉るへし

公四十五歳

賴謙公御養子

安永元年壬辰

九月立賴謙公爲世子

明和九辰年九月二十六日御養子と御定

安永二巳年八月十三日御引移同月廿一日玄蕃と御改名　以上西條御家譜

一御世繼不被爲在に付賴謙樣を御養子に被遊候　菩提心院樣宗將公御六男初金十郎樣後左京大夫樣御隱居後宮内大輔樣　賴謙樣御謙遜厚く御學文ありて御儉德ありしかは御目利にて御養子に遊されしさ申也御願濟之上御祝ありて御同座にて御役者も出奥御書院にて御囃子あり殊之外御機嫌に而融の舞に趣候處にて吾等舞候間流し候へと御意なから御白衣にて紺の御半沓を被爲召御不斷の片黑の御扇子にて其儘御舞被遊候太鼓は宮本祐右衛門打候處くつろき相濟開きの所に至て太鼓段（本ノマヽ）を取掛候へは御ふり返り被遊また〳〵早いと御意被遊なからすら〳〵と御舞被遊候御形感に堪へたる御事也兼て御能は御達人と御沙汰畏り居しかさも　大惠院樣御逝去の後は終に御能なさ申事は不被遊候處に右之通御舞被

遊候事誠に御活氣の御事也と何れも感じ奉りし也　續言行錄

夫人逝く

安永二年癸巳　公四十六歲

四月廿六日夫人今出川氏薨

十二月廿一日所生外山氏逝謚善修夫人

安永三年甲午　公四十七歲

九月開講筵於外廷毎月六次親臨之使士卒徧聞之

從三位參議

安永四年乙未　公四十八歲

二月三日入承重倫公後廿二日賜名治貞叙正四位下轉任左近衛權中將即日轉叙從三位任參議左近衛權中將如故

御相續

一二月三日依御差圖御登城被遊候處於御座之間　樣御願之通御家御相續被　仰出德川御稱號之儀も被　仰出御城御退出より御本家御行列にて直に御上屋敷へ御移徙

同十一月御登　城御禮三月朔日御相續之御禮同廿二日御老中御招請

二月十五日月次初て御登　城

從三位宰相

一二月廿二日御登城　御一字御頂戴治貞と御改從三位宰相中將御兼官此日御相續後初て於西丸大納言樣孝恭院樣へ御對顏　以上寶鑑

節儉

一同月廿八日首命御勘定服部八郎右衛門制國用因徧下令崇節儉

奉行服部八郎右衛門へ左之通被　仰出

御勝手御難澁之趣兼て御聞及被遊候處此度御相續猶追々達御耳就夫其方儀は御勝手御用久々
勤馴當時頭取罷在候事候へは此度江戸表へ被召呼御尋可被遊思召候得共老年大儀にも可及御
用捨被遊候條此上御取續之儀致勘辨精入取扱存寄候儀者無遠慮書付を以て申上候樣云々安明遺事

一三月四日　上使御小姓組番頭酒井對馬守を以公家衆御饗應之御能被　仰付候間明日御登城御見
物被遊候樣被仰達　實鑑以下二件同

一三月十五日召有司諭曰予今雖新立國家制度欲一因先世宜奉之如故

制法先規に遵ふ

三月十五日被　仰出

御家御條目之儀御制法其外御代々被　仰出之趣其儘先規之通御用被遊候間堅く相守可申旨被
仰出　安明遺事

一同月十七日御相續後初て紅葉山御宮へ御豫參　實鑑

一四月朔日御登　城被遊候處來申四月　公方樣日光山へ御社參之節供奉被遊候樣被　仰出

一同月六日御家督御官位　大殿樣御隱居被　仰出候御祝儀物御取替

御屋敷門限の法復舊

一江戸御屋敷御門限の法復舊被　仰出

寶暦の比諸士江戸にて若輩の面々御門出入繁く末々迄も町出多く相聞え候に付寶暦元未年ゟ諸
士は御門にて姓名を記し小十人組以下の面々御徒體抔の筋へは御徒目付の役所ゟ木札を其の日
〳〵に借用して御門へ差置公用私用共往來いたし候御事に成たり夫故御門ゟ御門へぬけ通り候
事不相成出たる御門へ戻り札を取り候而又御徒目付部屋へ札戻しに行き候得は風雨暑寒の節は

誓詞を廢し謁見俯伏を停む

猶更一等に難儀成事に而殊更遠方居住之輕き小身の老人なとは買物抔に御門前の町へ行にも遥々と御殿迄出て札を借り事を達し又札を戻しに行候なと至て難儀なる事にて有たると也たま〳〵歩行に出たる者にても酒なと過ぎて時刻移れば札を返し遅き咎を受又は札に疵なと附候得者過料或は札を戻す事を忘却して翌朝戻せは忘れたる咎にて過料を出し至て難儀成事也勿論咎を受け過料を出し候者は皆己か麁末失敬より事起る事とは云なから小給の者は身の貧苦に迫り勤むるとはすれとも思ひ寄らずして忘却する類擧て數へかたし然るを御相續已後老人小身者の難儀を御救被遊度此新法を御除き古來の法に御返し被遊候古來の法は御門外に參度ヶ所を月頭に支配方へ御願御家老中聞屆之上參り候日に頭支配幷御目付中へ往來共其品相斷候事也御門にて姓名記し候儀無之末〻迚も夜五ッ時過歸り候得者其品屆候斗にて殊の外緩成御定にて諸人難有事に存候右に付銘々相愼み御慈悲に悖り不申樣に申合忰共へも親々より命じ親類共より異見を加へ偽り飾り御門忍び出る事を友吟味する樣に成りたり最初の如く札を以て出入する比にても偽を好み忍ひ出る者も有たるにや無札にて御門を出し候迚御門番の組の者大勢御扶持召放されに成候也此度御改めの御法にて諸人却て恐入奉り成るたけは御門外へ出ぬやうにして御仁恕を難有奉存候て此上又新法の出ぬやうに愼み候事也　堀内家筆記

四月十九日、諭曰舊制國君新立、群臣改上誓文、予雖新立有微意在、勿改上誓文、又曰、舊制、凡內外群臣、與國君相見、輙俯伏低頭、自今而後、一拜之後宜仰見

四月十九日被仰出

御代替に付諸役人末に迄改誓詞可仕儀に候へ共思召有之先御代之誓詞を御用ひ分けて誓詞に不及旨

一御家中之面々御使御獻上物之才領之輕者に至迄御城内其外御途中抔にて御通行之節平伏仕面體を上罷在候樣　以上安明遺事

一惣して御家中之者御目通りに罷出候節末々輕き者迄低頭仕候ては面體御見知不被遊候間公私に付御殿中又は途中に而も御目見仕候はゝ面體をあけ居候て御見留被遊候上御時宜仕候樣被仰出候也　堀内家筆記

簡易に從ふ

廿七日又曰、國用之缺乏、所從來久、而今春所費亦鉅多、窮迫盖莫甚於今日、欲復之、唯在節儉而已、獨太公、及明脫、永隆、淸信諸夫人、及諸公子、日用之奉、此不宜減省、且聞群臣月俸或不給、或給納薄物、此可甚憫也、宜加意焉、至於凡我左右之奉、則欲極從簡易、汝等宜體此意、以思制國用之本焉

四月二十七日被　仰出　添奉行へ

兼而御勝手元御不如意之處當春以來別而御物入多御操合難澁之趣此以後必至と御差支に相成　大殿樣初明脫院樣永隆院樣淸信院樣御川向等若御差支相成候ては甚以御心外に思召候又前〻御家中渡り物御扶持方など滯其上悪米等相渡候儀も有之たる趣此上右等之儀等無之樣被遊度候得共御勝手必至と御差支に相成候而者被遊方も無之候間御儉約之儀堅く相守可申旨　安明遺事

御救御貸方

一安永四未年の比江戸に而御救御貸方と申事始る是は近年小祿の人々貧窮になりて町人より借銀して每月の高利に追はれて勝手取續き難き事を御察し此御貸方に而町人より之借用を濟せ候樣にとの思召也然るに大身の方々迄も借用せしかは段々出銀多くなりて後には金銀融通せ

儉約令

す又は間々心得違の人は借過して自から難澁せしとなりされとも今に至りて人々此貸方にて蘇息する事にはなりし也　瑞德記

廿八日、又曰、文武之業、固在其所嘗講、而今爲緩弛、宜益講究、爲之師者、亦宜勉率之也

五月廿八日被　仰出

諸士子共其外共學問軍學之儀兼而心掛可罷在候得共猶無怠慢心掛させ候樣諸頭役へ申聞組支配へ申聞候樣儒者軍學指南之者共へも彌精出相勵せ候樣可仕旨

六月十五日被　仰出

御家中之面々儉約之儀彌堅く相守家作等可成輕く修補にて相濟せ衣服之儀隨分麁服相用ひ妻子召仕之者共も右に准候樣可申付諸士御役替等被　仰付候砌仲間寄合等致し候節致急度候料理をも出候輩有之趣如何之事候是又先年相通候通諸事輕く可致旨

七月四日御用役御用達へ被　仰聞

御勝手御締り方之儀長門守丹後守惣左衛門申合細かに行屆候樣可取計假令思召にて被　仰出之品に而も御物入筋之儀に付而は右三人存付候品は猶伺候上取計可仕不依何事夫々より細雜に右三人へ相達了簡承り候上取計其上了簡難決品は相伺候樣　以上安明遺事

一六月十三日御相續後初て巢鶴御拜領

一同月廿五日端午之御內書初て御頂戴

一七月廿九日御相續後初て御鷹之雲雀御拜領　以上寶鑑

一此秋御當家年頭に兎を御祝儀被遊候御由緒御取調させ被遊
右御尋被　仰出御年譜方御書物吟味之處不相見後風土記之内に出候處を書抜き七月朔日差上然るに同晦日宇佐美三郎兵衛申候は先達而御吟味被　仰聞候節歴代記と申書物有之其中に有之を入御覧右歴代記之方に相極り候事

歴代記ニ

世良田太郎政親ハ參州坂井ニ　ル是則安祥之德川松平ノ御先祖即家康公九代ノ御祖也御紋水頭草政親參州坂井へ御移リハ永享七年極月下旬ノ事也此月二日ニ御父政義御討死故精進ニテ居給爰ニ政親ノ御家人林藤四郎光隆ハ元ハ加賀ノ富樫ノ介ガ一門ナリ此冬上州御出ノ時ハ煩テ御供セズ上州ニ止リ跡ヨリ主人ヲ尋上リ參州へ赴キ天野民部遠朝カ秋葉山ニ有ヲ聞テ是へ立寄主政親ノ在所ヲ尋ル天野ハ詳ニ政親ノ居所ヲ藤四郎ニ教へ折節鹿狩シテ兎一疋ヲ得タル故是ヲ藤四郎ニトラス　是ヲモラヒ參州へ持行主君政親ニ御目見シテ件之兎ヲ奉進政親曰ク此月初ニ父政義討タレ給テ今精進也兎ハ入用ニナシト有リ林強テ是ヲ勸政親ノ精進ヲ落タマヘト意見スル是永享七年極月二十九日ノ事也明レハ永享八年正月元日林藤四郎則兎ノ羹ヲ調味シ麥飯ニ田作ノ汁ヲ致シ政親ノ御精進ヲ落ス是ヨリ御當家元日ノ佳例トス夫ヨリ松平ノ郷へ御移リ太郎左衛門信重ガ聟養子ニ成リオハシマス

按スルニ假名御系譜私記ニハ政義公ノ御子親季其御子有親公夫ヨリ親氏公トス坂井郷へ御移リ松平太郎左衛門信重ノ養子トナリ徳阿彌ト稱セラレシモ親氏公トス政親公或ハ親氏ト稱セラレシヤ新田族譜亦御系譜私記ニ同シ倘可考及ヒ家忠日記等亦同シ家忠日記ニ親氏永享元年上州世良田ヲ避テ西方三州ニ住シ松平太郎左衛門聟ト成テ松平郷ニ移ルトアリ而

梅澤圓五郎強弓

シテ共ニ政親ノ名見エス歷代記誤アランカ正月元日兎御吸物ノ祝典ハ御歷代ノ恒例トナリ年々林肥後守ヨリ（一万石上総國請西）献上シ來リ既ニ文久二戌年閏八月幕政改革諸侯献上物廢止ノ時林肥後守ヨリ献上ノ兎ハ從前通リト被　仰出タル也

一九月麴町御屋敷御玄關其外瓦葺に被　仰付　寶鑑

一十月十五日梅澤圓五郎細川越中守の招に應し其邸に於て射術を演す

御膳番格梅澤圓五郎恒行小田良助弟子に候良助生得の强弓にて强弓の射形も良助工夫有之圓五郎も彌强弓の手利に相成候常々一寸にて爾も强き樣に打立たる弓を射候於御城細川越中守殿へ御咄有之故越中守殿へ圓五郎罷越强弓射て御目掛申候　麟德記

一梅澤圓五郎後十助といふ今の十右衛門の父也安永四未十月十五日射藝越中守殿御覽被成度よしに付左近將監樣（今ノ修理大夫樣也）被爲入候節御召連被成候而龍之口屋敷へ參る小田良助同道致し玄關より上り候阪り之節も同じ右見物に被參候諸侯方松平彈正大弼樣松平大學頭樣津輕越中守殿木下左門佐殿九鬼長門守殿織田山城守殿青木甲斐守殿外に松平陸奥守殿松平左京大夫樣酒井雅樂頭殿は約束之處不被參候取持の御城坊主小坂長春石井永庵金子龍阪參り申候外に書家三井孫兵衛親和參申候此御方樣より御醫師片山元範淺井養德両人參る細川殿より世話馳走等致し候人小堀沿助星野嘉右衛門扨細川殿御逢被成彼方用人躰の人披露致し舞台にて八分三厘前竹ひこあふりの弓にて巻わら一寸三りの弓にて同じく相濟小的八分三りの弓にて壹手中り一本壹寸三厘の弓にて二手不中彼方ゟ出候一寸の弓にて一手當り一本同御弓糟屋左近村の六分半計りの弓にて一手一本迯れ一本ふち矢にても可有之相濟幕にて奉射的の形を作り間數二

十五間にて八歩三厘一手皆中壹寸三厘にて二手三本中り一本すへり右之通り相濟料理給り罷飯御用達喜多村孫之丞へ御禮申樣子大躰に咄夫より寺嶋六郎兵衛方へ得と樣子咄申候　青山御殿へ出御目見仕御菓子被下候同十六日昨日射藝仕候に付於　御前紗綾一卷被下置候圓五郎故　上まで御名御上げ被遊御滿足のよしの御懇の御意被成下候同十八日左近將監樣御前にて紗綾一卷被下置候同日草野兵大夫方より手紙にて越中守殿より御内々紗綾二卷被下候梅澤氏自記

梅澤氏其節者御近習番之所程こく御膳番被　仰付候よし槽谷左近村の弓は至て稀なるもののよし本文には越中守樣と書す此時は御緣家樣は皆如此也澄靜院樣は御姉君樣にて越中守殿は御甥の御續也片山は御附の御藥師草野氏も御用人にて御附也今の父也　麟德記

一梅澤圓五郎ある時菊地角藏と會讀す座中十六人團子を出すその數十五其餘かくのことし儉にして武備を好む今日かくの如き人少し

一同人御用人勤られし時射術の御覽ありけるに前髮の輩は振り袖を多く着す一人御役所へ出申けるは私忰は振袖は無御座候如何可仕哉といふ圓五郎申さるゝは明日は射術の御覽にて候振袖御覽にてはなしと答へられし由　以上玄言私語

十一月廿八日、設祝筵、以公子岩千代君初着袴也

岩千代樣いまた御嫡子に御願不被遊以前御袴着の御祝儀有之其節は是迄終に覺え不申御賑々敷御事にて御目通りにて御酒被下御囃子等相濟み其御肴等御用部屋へ御出し御用部屋へ上にも被爲成御小姓の御酌にて末々迄御酒被下御用掛りへは格別に姓名御呼出にて御酒被下候尤御目付中なとも御用部屋にて御酒被下候猶又中の間にて表向之面々被召出御酒被下候扨又其夜は御殿

中諸番諸役末々まて御小姓共ごふにあけ候迚追廻し不怪御賑々敷事にて有之候惣躰御儉約之御時節にて御質素に候得共若君樣の御事に付てはヶ樣に御祝被遊候勿論御徧子に被　仰出候節も右御同樣の御祝ひ被遊候　麟德記

一御嗣君の御上に付ての御祝ひなとの御費は露厭はせ給はす万御榮えへ敷候事にて御髮置或は御袴召初の御時なとは御弱つから御手ひかせ玉ひて出御なし給ひ御表之隈に誘はせ玉ひ人々の酒飲やうなと御覽しつゝ御親しさのみかは御喜色迄に天然の樣におはしまし候　安司遺事

信曰く此比表御用部屋は御用部屋と稱せし也君上か政府へ（奥御用部屋後御用部屋と稱）臨ませられしはたきにしも非らされとも表御用部屋へ臨ませらるゝは前後になき事也惣して御手輕に君臣の間懸隔せさるやうの尊旨なるへし又公は太眞公御退隱し御跡御相續岩千代君は正しく太眞公の御嫡ゆへ万事御後見の思召にて御謙遜深きのみならす御孝道の溢るゝ所世子君の御爲には更に御費用を厭はせられしと御自奉は極めて御儉素な旨と被遊し由に聞ゆ

一十二月朔日　上使御小姓組番頭戸田但馬守を以御拳之雁初て御拜領

一閏十二月朔日御鷹之鶴御拜領

一同月九日八代柑御拜領　以上寶鑑

安永五年丙申　公四十九歲

一正月朔日御相續後初て年頭御登　城

一同月三日御謡初て御登　城

二月十五日任權中納言

一同月廿二日御禮御登　城

舊臣の世系家記を徵す

一同　廿七日御祝儀物御取替　以上寶鑑

二月中納言に御昇進被遊しかとも御謙遜の義厚く昔を御守り遊されし御心にや御和歌に

登るとも跡なわすれそ位山おゝろむこのりハもとの麓ふ　麟德記

按ニ續言行錄に宰相の御任官の時「登るとも只愼よ位山もとの麓の道なわすれそ」と被遊しよしなり本記と大同小異或は誤り傳へしものか又は兩首な被遊しか詳ならす

一三月命上舊臣之世系家記　歷任　神祖及龍公者稱之舊家

一三月御家中駿河越家筋舊家之面々家譜認出候樣被　仰出

一先祖駿河以來相勤候分代々相續之筋目書出候樣己下役其外諸組足輕末々迄も駿河越筋目相續いたし有之分代ゝ之品書付出し候樣

一御入國以後　南龍院樣御代御家へ被召出候分是亦代ゝ相續之筋目書付出し候樣

五月又左之被　仰出あり

御家中之面々先祖ゟ致所持候武器或は指物御朱印感狀之類持傳候筋有之候はゝ書付出候樣以上安明遺事

一天明の年諸士家柄由緒之儀御尋家々ゟ記錄等差出候是は昇平年久けれは世の盛衰人の浮沈有之諸家の系圖轉傳し後日終に實記の不詳事もあらんとの思召にて一旦御糺し置遊されし由寬政十

一未年十一月十五日　公儀ゟ御沙汰有之御家へ御附屬の人々の家系　公儀へ御納之時兼々諸家由緒御調被爲置候故に此時に紛雜の憂なかりしと也　麟德記

一四月九日　上使松平周防守を以御馬御拜領　寶鑑

四月、從將軍拜日光山廟

四月十一日御發駕
十五日大桑村御着十六日日光御寢坊護光院へ御入込十七日御本坊へ御出仕御祭禮御拜見一旦護光院へ御歸之上　御宮へ供奉被遊候處奥院へも御參詣被遊候樣田沼主殿頭を以　上意有之右御參詣萬事首尾能被爲濟同夜大桑村へ御越被遊十九日大桑村御發駕同日鹿沼驛にて從　公方樣宿次奉書を以御拜領物被遊同廿二日御歸府尾州樣には十一日御立之處大桑村にて御痲疹にて御供奉無之廿六日御歸府水戶樣には九日御立之筈之處御不幸にて御越無之　寶鑑

廿二日歸御尾州樣水戶樣御豫參無之　寶鑑

一將軍家には十三日御發駕十六日御登山十七日御參詣十八日御下山廿一日御歸城　十五代史

一日光御供奉の節暑氣の比にて御供中水當り等致候而は如何に思召候との御事にて旅中用候て宜敷粉藥用意致候やうにとの御事にて御醫師共不殘へ被　仰付銘々に五百六百包充御拵させ被遊頭支配を以て御供中末々迄被下之扨又御發駕前宿に見分の節御內々御用にて奥方御小姓を以御出し被遊候品を御用部屋勝手下役受取候て宿々の井戶每に入候て其水を汲遣ひ申候

一日光御供奉之節　公方樣御參詣御濟被遊候上詰之御旗本衆の內其中にて老人の手を御取被遊ヶ樣の節ならては皆々　御宮へ拜禮致候儀不相成候間得と拜禮有之候樣に致候へと　御意被遊候に付列居之面々一等に難有と御請申上御通り相濟候と直に彼老人先へ立　御宮へ拜禮に上り候と各一統にはら〱と拜禮に上り　御宮殿の御莊嚴等拜見仕候よしいつれも右　御意無之候得

は拜見仕候儀不相成候處深き思召を以て　御意被遊候故御老中方御目付中も御宮御別當なとも咎め不申首尾能相濟御仁德を奉感候也

一右之節御祭禮爲御見物御棧敷へ入らせられ候處御小姓組（栃木信濃守 富田能登守）御次に相詰居候に付其許にも是へ參り候而御祭禮拜見致され候へと　御意被遊候處難有仕合奉存候と御請斗にて其儘扣居候に付不苦候間是へ被參候へと又　御意被遊候得共恐入低頭仕居候に付又　御意に最早御榊渡り候間被參候樣若又外より咎候筋も有之哉と御尋に付左樣に而御座候と御請申上候其後何之御いらへも無之暫くして　御意には是へ被參候へ用事をたのみ可申と　御意被遊候に付はつと答へて御側の邊迄參り候處何の用も不被　仰付候に付扣居候處其內に御祭禮相渡相濟申候其上にて其許へ何やら用を賴可申と存候て呼候へ共御祭禮を難有存候而拜見いたし候內に其用を忘れ候間又追而之事よと輕き　御意被遊候に付御次へ下り候其節の御樣子御目付中なとも被存居候に付御三家樣被成御座候御席へ被參居候段如何に候哉と被申候處右之次第被申斷候得は右衆中も扨々厚き思召に候迚奉感候と也　以上麟德記

一四月廿五日御登　城　御目見

一五月十三日　公儀御能に付御登　城

一同月廿八日御老中御招請御能あり

廿九日御能被　仰付御家中末々迄拜見被　仰付　以上寶鑑

六月始就藩

一五月十五日初て御國許へ之御暇被　仰出翌十六日御登　城御饗應御太刀御馬御拜領

一六月五日御發駕同十九日御着城　實鑑　御家譜ニハ六月二十六日御着城トアリ

一七月廿八日　上使用意被　仰付九月五日　上使濟　以上實鑑

一五月十五日初て御歸國之御暇被進翌十六日御登　城被遊候處竹の間に於て御饗應有之候節御給仕之中奥御小姓龜井出雲守誤て御膳を取落し右之狼狽故か御間鍋御三方共持出候に付御咎被仰付候ては如何と被思召候而御饗應畢而御老中松平右近將監殿へ御逢被遊候而今日出雲守不調法の事は御内々にての御取扱に被遊度思召候御相續初而の御暇に候へは壹人にても迷惑仕候もの有之候ては御心障りの由ひたすら御内々の御取扱御頼被遊ける故にや先差扣被　仰付候處猶も御詫訟有けれは同廿三日に被仰達候趣も有之旨に而差扣御免被　仰付候よし　續言行錄

按に堀内家筆記には出雲守御汁の御替りを持出候處御取被遊しと存候や早く手を引候に付御通ひ膳の縁にて御汁こほれ御袴よこれ候に付御鼻紙を以て御袴の御よこれを御拭ひ被遊何之御氣色もなく被遊御座然れとも出雲守方御役人へ申出候に付早速十七日方差控被　仰付よしとあり

一御着城御參府の日は太堰の瀬より御城迄と御城より太堰瀬迄は御馬に召さるゝ御例なりしが久しく絶えしを安永五申年御初入之時より再其御例に復させられたりその時は御道具幷御馬數も增して御葛籠馬をも率せらる其後御省畧にて止みしか今の御手鎗はその時より初りしか殘りしといふ也

按するに瑞德記に御道具御馬前より增たりとあり是は左にはあらず御省畧にて減せしか御初入故に御先格の如く被遊たるなるへし又花出を好ませ給ふといふもいかゝと思へはその文も省し也　麟德記

幕府より借金

一六月九日　公儀より金三萬両御拜借被　仰出
御領分打續御損亡其上無據御物入差添御勝手向御差支御手當難被遊候に付御願之上金三萬両御拜借被　仰出此節御旅中被成御座候也
右御金七月十三日於蓮池御金藏請取貮朱銀にて出る　實鑑

和歌御宮へ參拜

一是月初て和歌御宮へ御參拜
六月若山へ御入府あそはされ初て和歌御宮へ御參詣の時御神拜畢らせ給ひ御宮居を御巡覽遊はされ雲蓋院權僧正召出され御祈禱の事御懇に仰含られしと也御祈誓の御和歌とは世に傳へ奉りしは
おろかなる身に安からぬ國なれは神乃惠みを祈るはかりそ
一和歌御靈屋へ御參詣遊されし時（漢文瑞德記ニハ秋八月トアリ）妹背の養珠寺へ入らせられしに寺務職日喜舊き水柄杓を持參し御覽に入奉り是は昔年より庭前にある閼伽井の水を　大惠院様御在世に御參詣の度ごとに御手つから御香水を汲せられ御供へありし御手澤の御遺物のよし申上しかは頻に御感情の御様子にて一首の御和歌を遊されて日喜へ被下し也　以上瑞德記
たらちねを慕ふ心の手向水むかしを今に見るそなつかし
按するに此事紀伊續風土記にも記あり曰く寺地海に近きを以て井戸鹹くして遠く外に汲む事多年也一日　南龍公寺に遊び玉ひ殿下より清泉の湧出る所あるを視出させ給ひ疎してこれを導き天井を作らしめ汲て養珠太夫人の靈牌に薦め給ふ是より後御代々これを常となし給へり　香嚴公の御時儒臣竹内太冲に命して其水を思齋井と名つく第十三世天行（一ニ行基）其事を記し石に刻して其側に建つと云々
牌文風土記にも揭く今之を畧す文化十年正月の事とす紀伊國名所圖會に記する處亦同し

城中講筵

七月開講筵於外廷、毎月九次、公親臨之、使諸士徧聞之、一如在支藩時、公又謂、會計吏之務、雖在簿書其心術不可不正、宜使常聞斯道也、乃毎月三次、開講筵於會計局自此而後、世々奉以爲則、當時儒臣曰伊藤才藏、坂井忠次郎、祇園餘一、太田七三郎、木村原進及任輔、坂井謙之助

七月日不知被　仰出

來る九日ゟ毎月於御城中之間左之日割にて講釋を被仰付候間當番非番之面々聽聞可致末々迄も望の者罷出聽聞致候筈被仰出　安明遺事

講師

三日　伊藤才藏（蘭嵎）　九　日　坂井忠次郎　十三日　祇園餘一

十九日　太田七三郎　廿三日　木村任助　廿三日　阪井謙之助

一御相續以來儒者へ被　仰付候中之間にて四書の講釋御座候而御家士の面々聽聞被　仰付候　上にも御出被遊候に付儒生も一際文學相勵み申候而御家中にも博識の向も出來候よし　續言行

一毎月三ヶ日つゝ於會所講釋被　仰付末々迄罷出聽聞仕候筈九時より初候に付夫迄に御用片付候筈被　仰出　六月廿六日より講釋初候事儒者操廻し相勤　安明遺事

講義書目

一學問は凡治道有益者は刑名雜家之書といへとも悉く取らせられたり安永五申年御城中之間に於て講釋始る論語孟子荀子韓非子鹽鐵論等の書御一代の間に大旨卒業す又評定所に於て最初孔子家語を開講とす武夫の子弟學問精勤の者あれは御褒美被下置儒業家にあらされとも學文料を被下候事は予か輩書生たりしより始る　瑞德記

一和漢の御學文被遊佛學迄能く知し召候由諸士幷子弟共にも被　仰出候は武藝は家業の事に候得

は中迄も無之銘々精出申にて可有之候文學をも心懸候樣被　仰出江戸に而者中の間にて二七の日儒者共に四書孝經五經等の講釋被　仰付何役に不限閑暇の者は罷出講釋承り候樣御初め被遊候與にては如來先生（細井甚三郎と云ふ尾州如來山の産にて浪人なり）被爲呼講釋御聞被遊御會讀も有之由　堀内家筆記

一安永五年申の秋湊の講堂へ被爲成　有德院樣の御舊跡を被爲尋歲月久敷荒廢せしを御歎息有り既に此時學校御再興の思召被爲在儒者を召して昔年祇南海學頭にて講筵を開き文物盛なりし事を聞召し及せ給ひ御尋往々學校御造營被遊度旨御意也其節講釋場番人小三郎と云老人御門内に蹲踞仕りたるを御覽有之御尋させ其方年來此内に住居致定て耳に留たる事もあらは可申上との御事老人御答申上候は愚なる故何も得承及不申と申上る御笑被遊汝は勸學院の雀てなきかと御戲れ歸御被遊候　同上

按に漢文瑞德記には此時講堂樓門に上らせられ舘柳を御覽して此柳は御先代の栽させ給ふ處舊年の遺愛宜ろしく培養すべしと仰ありしと記せり

「祇南海が撰文」舘柳唱和集の序に享保年京師六角堂の柳を移し植させられし旨を記す該講堂は寄合橋の西北衝當りに在りて近世は學習舘と唱へ　舜恭公の御時聖堂をも御造營ありし信往年和歌山へ祇役の比猶數株の柳樹繁茂しありたり又若山江戸とも殿中講釋は以來御歷世共御遵奉維新に至る迄も絶えす御勘定所講釋も同斷也

一七月十九日宿次奉書を以て御鷹之雲雀御拜領　實鑑

擢人材、司政務

一人材御登用執政參政等被命

渡邊數馬親綱（後主水と改む）寳曆の比加判之列也江府在勤之時途中に於て越前家の松平志摩守殿と同勢

喧嘩に及ひしを以つて 敷馬小者鹿平といふもの石堂の刀にて相手を斬る依て喧嘩の両成敗の御法にて鹿平は解死人に出て事濟む 按に鹿平は草履取といふ水田國重の大脇差にて志摩守殿の駕籠を刺したりしに前よりさし込て侯には當らさりしとの事なり 事濟といへとも 公儀御用向御遠慮にて加判の列御免にて御國へ御歸へし也 其後久敷散職に居られしか御入府有て御擇み被遊て再加判被 仰付人となり正直にして下問を好む周勃か倫にて時に能人望を得たり

山高庄右衛門信興大番頭より御用役被 仰付此人文事を嗜み武備に厚し小心翼々終身瑕疵なし 後大納言樣御代にも勤仕致され加判之列に被 仰付致仕して程甫と號す今の石見守殿の養父也

菅沼半兵衛政職是も同しく御用役被 仰付天明年御加恩の命あれとも國の兇荒を憂へ固辭して不奉受直道の人也 後隱居鐵心齋と號す 此人には大卒御一代の選に出て皆政跡あり 作者曰此三大夫は乃父の厚交にして武術を授けし人なればその人となりを知る依て錄于此 瑞德記

一加納大隅守政明江戸へ詰候節毎度被爲召御雜談御座候或時御意には大隅守には居合を能く仕候由被爲聞召候御覽被遊度旨被仰候處大隅守御辭退申上候然共強て御所望被遊候處大隅守申上候は御意之趣奉畏候へ共居合之儀は御家中之内上手に仕候者いか程も御座候私藝御覽之儀者品違ひか之段申上候處尤之儀に思召候御氣色にて御機嫌也 堀内家筆記

一御家老水野美濃守年若にて東都へ相詰候處其身の愼家來の者共に至るまて御門外へ罷出候事を嚴敷申付致方宜敷と申事達御聽或時美濃守を被召其方未た若年に候得共愼みの道を相守候段御感に思召候其方なとは御家中の鏡手本に相成候事なれは右之心得至極の事也と御賞美被遊御内々金子拜領被 仰付たりしかは外の年長候御家老に身持不宜仁も此御意を畏り甚愧入自然と愼

高野山民蜂起

み候樣に相成けるとそ　續言行錄

是冬、高野山民、苦其收歛蜂起、藩遣鄕士鎭撫之、事直熄、　公召服部八郎右衛門諭曰、今回之事、天之所以保護國家也、有言曰、雖凶不可願、而人主由以自戒、實爲然、今也高野蜂起、　雖既平矣、未可恃以解也、汝其思之

十二月四日服部八郎右衛門御前へ罷出候節御書付にて御下け被遊候

此度之事我等存念にて誠に天の加護と思ふへき事也凶年は不存事なれ共國主の愼みにはよきと謂へる通りなり此度高野靜謐領分もしつまり候とて何れも能と計に而不相濟儀候何卒此上萬事の手當且は銘々の身を愼み安民の事のみ心を可勞儀と存候事　安明遺事

一高野山御朱印二萬千石に而三ッ免に收納有之處近年百姓共鍬先にてあせ畔を打かへし少〻ッ、余田を拵候處地士幷庄屋且又町人共之內慾心の者共高野役人へ申出開地打候はゝ收納相增可申旨申出候に付其通りに取計安永五申年開地打かけ候處百姓共元來鍬先に而拵候作場故開地打出され候ては難儀に成候故小百姓共十五歲以上徒黨致し右頭取候地士廿四軒其外庄屋肝煎町人にて世話致候者共の宅不殘打破り高野山へ强訴に出候に付高野山にても甚難儀いたし坊主共致方無之御家へ御加勢被下候樣相願候右使僧參上之品御聞被遊御役人衆了簡をも御聞被遊候處諸士の內誰かれと評議の上申上候處　上には百姓共のもめ合に士を被遣候には及間敷と思召候御領分地士共の內少々差遣鎭させ候樣にと被仰出地士十五人被遣候地士共高野領へ罷越　御意にて罷越候何れにも候り候樣申聞候得共大人數にて闖入不申候に付何事にもよらす願の品承屆可遣候間先引取候樣にと御

意に候段木綿幟に書付見せ候處紀州樣よりの被　仰付に候はゝ奉畏候旨百姓共漸々承知仕候て各引取候に付事故なく相濟先規の法の通りに相成高野は不及申御武德の程奉感候と也　堀内家筆記

按に右高野騷動は安永五申年十一月朔日の事にて寺領の百姓共凡二千人許り簑笠の出立にて貝を吹立鯨波の聲をあけ登山所々の大木を伐倒し篝を四十八九ヶ所に焚き寺院へ押入狼籍及ひたるにより本藩には三日を以て近傍の地士共を若山へ徵し至急登山鎭撫すべき旨を命せられたり依て十六人の地士共六日に登山鎭撫の上十九日若山へ復命したる也事は郡制歷世郡治大概の部に詳なり

西條廢世子の墓參

是歲、訪西條廢世子本地公（頼雄公）墓、後以爲制

本地院樣は西條の賴純樣の御世子にして（實ハ御二男也）大慧院樣の御兄君也山城守賴雄樣と稱し奉り故ありて紀州田邊へ御蟄居也御卒去の後和歌山車坂感應寺に御墓あり已に五十余年の星霜を經て御墓に花奉る者もなかりしに　上には深き思召被爲在候哉此御事多年御心に被爲懸しよしにて御入部の歲に御墓を御尋被遊感應寺へ御參詣御懇に香花を備へられて御拜ありしと也その後は御例となりて一歲に一度つゝ御參詣所と相定りしと也

用度節減

郡治武備奬勵

敷論有司、節用、且示治術安民之要

一御着城以來上下節儉及ひ郡治の事武備奬勵等頻に被　仰出

　六月廿六日諸頭役へ被　仰出

一御家中之面々次第に及困窮候趣儉約之儀追々被　仰出之趣堅く相守何分にも取續可相勤旨

七月七日奉行へ被　仰出

一御勝手御難澁に付今度公儀に而御金拜借御願之通り被仰出候得共若下役人共心得違御締り方取

扱ゆるみ候而は不相成末々迄篤と申聞嚴重に取扱可申旨

又

一御城御小座敷御疊損出來飛繕ひいたし候節ゟ表へり共位下候様

一御小座敷西之方御縁之御疊御繕之節より近江表木綿へり

一同御次御疊御繕之節より琉球表べりなし

一御座之間御次御三之間御疊御繕之節より右同斷

一御座之間是迄之通にて御表替仕候様

一上使御廊下筋長圍爐裏之間御疊惡敷候而　上使之節替候程之事候はゝ御入前表かへ仕候様

一御膳所内琉珠へりなし

一奥の部屋同斷

右之外御廊下筋　上使衆御通無之場所琉球へりなし

一御座之間御障子美濃紙尤繼手に不構御廊下筋同斷

一御小座敷幷に御次　上使衆御通り無之場所土佐半紙張

一御燭臺翦幷あんとう土佐半紙張　以上安明遺事

七月廿八日紀州へ上使用意被　仰付候旨寳鑑ニアリ

九月三日奉行御用達御藥込頭へ被　仰出

一諸役所に而御儉約筋先々より之致來にも不拘御省畧致可然儀は無遠慮申見思召を伺可申儀は伺

出候様下役人に至る迄存寄候儀無遠慮申出候様にと　安明遺事

此比御勘定奉行不殘御前へ被爲召在中之儀種々御尋被遊候上にて御意之趣近年は下の氣風惡敷趣達御聽右に付ては役人共取扱不宜儀も有之との儀外より入御耳候儀も有之候右者御尋之筋も有之候はゝ無據取扱候儀夫々申披有之儀にて其品分明に申上事にて可有之と被思召候兎角末々之儀者上へ立候役人の取扱心得にて下へ之移り差別有之事に候へは役人共無隔意諸事心を付取扱可申事肝要に候人々揃ひて宜敷者は無之筈に能致候處を遣ひ志之惡敷處は能成候様に心得させ遣候へは人は捨り不申是等之處肝要の儀と被思召候旨

此比郡奉行御代官へ御下け被遊候御書

上の爲のみを存せす下の不痛様取扱可申旨　以上安明遺事

又類奬勵武事

一御國の武備盛なる事は　南龍院様御代よりの事也御相續以來は澁谷に被爲入候節ゟ武事御厚御世話被遊との事畏り奉り居候事故一同相勵み候様に成行候御初入被遊候と日々諸藝の御覽等有之熟未熟の品により夫々御褒貶有之候故逐日盛なる事に相成候よし　續言行錄

十月被　仰出

一追廻し馬場にて騎射乘馬等御覽の節并堂形山に而小筒打掛場に而大筒等御覽場御用所其外莨簀圍蓙張等之儀手輕に取計候筈　同上

一近き内山へ被爲成候節急度御供となく左之通り被召連候筈被　仰出御供役に而無之而も兼而非

番出御供願相濟有之者共惣領二三男弟前髮無之筋

一御供役に而無之而も惣領番外御供に出候へは右二三男前髮無之筋

一御供役に而候へは惣領番外御供に出不申候而も右惣領二三男弟共前髮無之筋　同上

一安永五年十一月高石垣下扇の芝にて武射御執行日前宮岡の宮両社へ御奉納也共儀式三度弓の射手弓太郎を初め十二人年役掛りの面々皆素袍烏帽子着にて勤之　瑞德記

漢文瑞德記ニ曰　武射歩射也、五行七歩之足法、有故實存焉、量侯道廿五弓、作縣垜、謂之踏芝、矢枕弓滿在其間、黎明諸官僕子次、左右三耦、皆北上、上射稱弓太郎、下射稱二郎、搢者執筆、侍子側、皆着素絁烏帽子云々

一諸士は不及申悴共武藝精出候儀は元よりの儀に候得共猶又相勵候樣にとの御事にて御相續以後早速當時出精之者の姓名書付差上候樣師匠〳〵へ被仰付夫々申上候處追々御覽被仰出江戶若山共折々順々御覽被遊江戶に而も大嶋雲五郎弟子共鎗術御覽被遊勝之者へは御手自御扇子被下又或時は騎射武射打毬等御覽被遊打毬の節は鞠の代りに密柑なと御すくはせ被遊御慰に被遊何角不屆して藝道出精致候樣にとの思召にて入らせられ候每度相應に御褒美等被下候也夫故一兩年の內にめき〳〵と藝も募候事に相成候也　堀內家筆記

一又强弓御穿鑿被遊御道具の內に一寸の御弓有之候を御出させ是を肩入仕候者可有之哉との御儀に候處太田松之助小川爲之丞西川新左衛門杉原九郞右衛門岡見久左衛門なと快肩入仕候へは殊の外御機嫌能白銀貳枚つゝ御褒美被下置候其後新木一寸の弓被仰付右之面々その外神谷八十郞坂部八十郞片山幸之助抔强弓の聞え有之者へ被仰付卷藁射御用達見分之所何の苦なく射候へば御褒美に反物被下置候故若山に而は八分九分の弓は尋常の事に相成一寸といへども差して强弓

とは不致候樣に相成候由　續言行錄

一御政事のひま〳〵不意に劔鎗柔術組打諸家の人々を召て一流〳〵の鍛練を御覽まし〳〵ほとにつけて恩賜褒詞なと有之程にわきて其比よりそ諸流ともに嗚呼のものは多く出來し渡邊十右衛門か千射を御覽まします中に近侍の人に向はせ給ふて渠か父作右衛門は鎗術の達者に而有しかと御物語りせさせ給ふを十右衛門ほの伺ひつゝ其夜家に歸りて父の老いて候ひけるにけふ射手前御覽せらるゝ中にしか〳〵の御物語有之と語り聞せけれは作右衛門辱さの餘り聲を呑て泣しとそ其外勉て士の氣をとらせ給ふ事多かりしと古き人の語り侍りき　安明遺事

一雁金弓は御國の名産也一名神ノ川打ト云木村之家世々作候名草郡山口村に住す雁金の焼印は官府ゟ出て沒に印する事成かたし是は大塔の宮の鰾(ニベ)の法を傳へて作る處にして筏に組て紀の川を流し水に浸りても膠不離といふ又塗弓にては漆皸裂(シックワンニユウ)なきを家の秘傳とす天明五年御入府の上弓師の内精巧を御擇み吉介左内古ノ名工辰之進カ子孫等へ被仰付世平弓の類御代の世に數百張製作し差上候に付いよ〳〵製作上達せしと也　瑞德記

一騎馬役の人も手馬減少奉願御家中馬數次第に減せしに馬御好み被遊候と申事を以て自然と馬持候樣に相成五分程も相增貳百石以上の人も馬持候樣に相成追廻にて責馬致し候事不絶間もなく有之候御初入之節松江浦と申所にて駄弓被仰付御家中擧て罷出候故馬數も夥數事也とそ其外騎射笠掛の類有之常の事故人々興起せしと也　續言行錄

一小祿之士に而も馬持候事を屆ぬれは直に馬扶持を給りし程にわきて馬數も多かりしとそ

一馬術は關東にて一二の御名譽也御壯年の御時は早馬を好ませられ急事の節に御乘出し兼而御家士近侍の氣力剛弱を御ためし被遊候事安永五年紀州へ入らせられ御厩の御馬數を御增あり或は苦ヶ嶋牧立之駒を御世話被遊候追廻馬場にて諸士手飼馬寄御覽之事有之候北嶋渡場にて水馬御覽被遊候橋本又は日高泉州界邊迄遠乘被仰付候但し本府より橋本驛迄凡十一里余なり五十丁一里の道也世には十三里と申本文何に寄りしや朝未明に發して日中に歸る或は卯之刻に出て巳の刻に還るを第一の早乘とす又松江濱にて打毬馬を御慰に被仰付御小姓衆幷に部屋住の面々相混して御覽に入れ候　瑞德記

漢文瑞德記ニハ壬寅ノ夏水馬御覽同秋松江ニテ打毬御覽トアリ

一近侍の人々をして日高郡鐘卷のあたり或は伊都郡橋本なんとへ遠馬をさせ給ひ遲速を試み給ふ事ありし初の程は鷄鳴に發して三更四更の比或は曉に及びて歸るも有之に後には日に出て暮比には皆歸る事を得たり初而橋本への遠馬仰出されし時人々に命せられて息合其外用意の藥なとよろしく古老に糺して物せよと仰含られしに彥坂勇助後儀左衛門ト改ム計はいかてさる事の候へき强馬をよく養ひ置きて乘んには人々よりはよも後るゝ事の侍るへきとて初而之日家を出し時は中々馬強くて貳里余りは口附貳人して引て行かるゝ斗りなりしか果して人よりも先に皈りて御前に出しかどえか〳〵御意もおはしまさす却て御不興に渡らせ給ひき又の時は岩手のあなたまて皈り來て茲にて彼馬は乘倒しけるにそ初而我執を悔て後々は息合なとの事をも閑習ひて馬の疲れさる樣に乘り皈る事を得て漸くに初て深く遠く敎へさせ給ひし事を知りしさそ上隱れさせ給ひし後迄も此事を人〻には語り聞えきいつも〳〵遠馬を命じ給ふ日は人々の皈らん程を計り給ひて

駿河櫓に上らせ給ひて待せ給ひしとぞ或時由比楠左衛門御小姓御前に出けるにいと顏色の常に替りてあしかりければいかゝなしけるぞと御尋有之程に風の心地に候やらん熱強く候由申上けれは去れは馬責て駈なども乘てよと御料の馬を出させ給ひければ追廻しの馬場に出て己も馬も汗する程に強く乘て止ければ邪氣發表して常に復しけるとぞケ樣の事は近侍の人にはまゝありしとぞ　安明遺事

一水練御覽の時達者多き中に窪田善之丞は水練殊に勝れ其余藝術にも達せし人也種々の業仕候所立游にて鐵炮は打れ申間敷哉と御尋也善之丞畏り未試候事は無之候へ共仕見可申とて三匁五分の短筒にて心易く打申候に付殊の外御機嫌克被遊御座候て善之丞は衆人の中にて面目を施し候事難有次第感涙を流しけると也　續言行錄

一香嚴院樣御代田宮流專ら御用ひにて御供も皆落し指に可致と仰出さる竹森傳次右衛門戶田流劍術御師範家なれは其節申出するは私儀は落し差しは不得手にて御座候間御免可被下候と辭退す

乞言私語

信曰右錄する所之數條歲月を記さゝるもの原本亦然る也蓋し本年のみに係らす御治世中の事なるべしと雖も類を擧けて爰に蒐集するもの也

十二月停士之服卑官者

十二月廿日被　仰出

一御取立にて十人組並に被　仰付候者之惣領諸手代坊主其外輕き役儀相勤罷在候者其儘右役儀相勤させ有之輩も有之候右者諸士格にも被　仰付候者之儀者跡目も相應に被　仰付候に付右躰輕

父母帖を遷奉せしむ

き役儀相勤罷在候惣領は勤引かせ可然者し勝手不如意にて其儀相勤させ度者は其品夫々支配より可相達旨

安永六年丁酉　　公五十歳

正月卯五十之賀御祝ひ

三月東覲　此年正月和歌　清溪公御靈屋に銅製牡丹盆御奉納御自銘の文あり第二卷至孝之部に記す

二月二十七日御發駕三月十三日御着座御道中東海道美濃路通り　寶鑑

三月爲　御尋宿次奉書出る

同月十五日御參府御禮御登　城御退散より御老中方へ御越被進　以上寶鑑

四月徧諭管內、奉南龍公敎示、　父母帖

父母に孝行と書出し候御敎訓之御書毎年在中之者共へ示聞せ候事に付村役人共は右御書寫致所持可罷在儀に候夫に付新役之者共へは右御書寫讓候歟又者大庄屋共より其節に寫遣し可然候間兼而心得居候樣

右四月被　仰出　安明遺事

五月少病眼

一五月二日近年御眼惡敷御遠目御行屆兼被遊候段御達并諸向へ御斷りあり　寶鑑

有鶴、巢於大宮、產二雛　大宮在武藏爲獵地

五月十日大宮御鷹場原市村沼之內へ眞鶴巢造卵二ッ有之卵割候上雛二羽共生育公邊へ御達等有

五愼教書を世子君に賜ふ

り　雛二羽之内一ッ獺取ル　寶鑑

一五月四日大宮御鷹場内に鶴巣を造り雛二羽を産出之旨屆出る

一五月四日注進にて大宮宿御鷹場内原市村下平塚村と申邊沼之内へ眞鶴巣造卵二ッ産候て二ッ共かゑり内一羽は獺に取られ一羽は生立候旨御府内近邊之儀に付御獻上物被遊可然哉と御三家様より御伺被遊候處御家より計御獻上物被遊尾水様方は御獻上物に不及候との御事に候由　堀内家筆記

按に本件御當家御一体之吉事といふ点より御三家被仰合御獻上物御伺之事に及はれしなるへし

九月立治寶公爲世子、作五愼教書賜之、

五愼教書は紙數多により附錄に載す

一九月廿七日上使松平右近將監殿松平右京大夫殿を以岩千代様御養子に被　仰出　御家譜

一十月朔日御登　城御養子之御禮被　仰上候様御老中より書付出候に付御登　城可被遊之處少々御風氣にて御引同十九日両御丸へ御登　城御禮被　仰上

一十九日御祝儀として従　公方様上使板倉佐渡守従大納言様上使阿部豐後守を以て　大殿様殿様岩千代様明脫院様御拜領物被遊御部屋様よりの御使を以て　大殿様殿様岩千代様へ被進物有之

同廿二日御祝儀御取替　以上寶鑑

一亞相公未た幼くおはせし時常に近侍の人に宣せ給ひけるは後宮にて御隨意に育て奉らんはあしゝ一日の中多くは表にて士共の中にて傅き奉るやうにといつも〳〵御世話有りしさそ

一岩千代君様を御養子に被遊（今の亞相公様也此御時御七歳に成らせ給ふさ也）治貞卿様に者西條の御邸にて御隱居の思召の處

岩千代様御養子

思召かけす御本家御相續被遊候に付岩千代様御後見の思召にて万事を被遊候よし　有徳院様も御一生の御間御攝位の尊慮也との御事を御學び被遊候御事にやと恐察奉る御事也　瑞德記

一治寶卿様 重倫卿様御子 香巖院様御養子 御幼年の砌第一番の御讓り物と申は南龍院様御述作の孝敎の御掛物に御腰物を添被進候誠に深き思召かなと上下奉感候よし

是は御宮参りの節とも又は御具足召初共申よし　續言行錄

一翌安永七戊戌年正月十九日より御持道具之外に對し御道具雉子首毛三對御道具岩千代様へ御讓殿様に者白鳥毛三對御道具其形は御同様に而中結赤銅柄者上之方黑蠟色下之方青貝ふせに被遊候事　安明遺事　實鑑

是秋、封内、稻生園結如苞者、衆以爲瑞呈之、

一安永六丙年苗俵 當公第二卷ニ記ス と申もの出來豐年の祥瑞の由にて入御覽候處御意には右苗俵を以豐年奉祝賀上候に付右禮に御下ヶ被遊候由にて司農へ御書付御下ヶ被遊猶又御意に上には猶以御意不被遊思召に被成御座候間何れも彌相愼不申様可仕との御事にて御渡被遊候 御書附ハ漢文ナリ當公第二卷ニ載ス安明遺事ニ家譜五儀ノ内御書拔御下被遊トアリ苗俵ノ圖附錄卷末ニ揭　麟德記附錄　安明遺事

十二月四日御裝束之御直垂之露紐是迄紫色にて候處此以後薄色御用被遊

同月廿五日千駄ヶ谷御屋敷内少々出火　以上實鑑

安永七年戊戌　公五十一歲

正月十八日年頭幷岩千代様御養子被　仰出候爲御祝儀御老中御招請

同十九日對押之御道具白鳥毛中結赤銅に御替是迄之雉子首毛御道具は岩千代樣へ御讓　以上寶鑑

同月廿日、設陳甲之式、復舊制也

　正月廿日御具足御祝近年相止有之候處當年より初る　寶鑑

一御具足御祝ひの節者有服の者は不出候得共自今は罷出候儀差控に不及候旨被　仰出候　堀内家筆記

正月廿二日以　上使御拳之鷹御拜領　寶鑑

三月歸藩、取路於木曾

一三月十九日御國許へ之御暇被　仰出即日御登　城御饗應御太刀御鷹御馬御拜領

三月廿三日御發駕木曾路御旅行四月九日御着城同日宿次奉書出る　寶鑑

五月朔日　上使用意同十九日發足

六月三日　上使相濟十七日歸府　以上寶鑑

一五月四日被　仰出

都テ諸士出場所にて例御意有之筋は前廣に平伏不仕御意有之候迄面を上罷在候筈　安明遺事

一同月被　仰出

御歸國御參府之節御道筋盛砂致し並手桶等出し候事に候へ共自今前々之通り欠作りより御城へ之御道筋本町通斗是迄の通り致し其外の御道筋は無用に仕候樣

一御家中婚禮其外祝儀事は江戸往來者送之節等近邊屋敷〳〵ゟ親類に不拘幷手桶挑灯等出し候由近き親類幷隣家は格別其外は同町に而も其儀に及ひ申間敷相互に心得候樣　同上

伊藤蘭嵎歿す

佐野隱山墓を訪ふ

三月廿七日伊藤才藏歿年八十五

傳名臣傳ニアリ近世叢語云、蘭嵎著詩古言、書反正、易本旨、子孫繼業、爲學職云々

四月訪佐野隱山墓

安永七年戊四月十八日　香嚴院樣陰山の墓所北山ノ麓鳴瀧ノ東ノ山峒ニアリト云へ御越被遊水を手向花を立候樣に

被　仰付御歌被爲遊候

尋來てむこのしるしとへは岩かねのまつにあらしの音のみそする

夫より直川村作大夫とりあへす上の五文字を改め奉りて立よりてと申上しと也御喜悦遊されて出來かしたりと御意ありしと也作大夫へは物給りて飯御の節御意には汝歌道に心掛神妙也猶又作方第一出精致すへし家の本業は大事そと御示し遊はされしかは作大夫難有奉存感涙に及ひしと也作大夫は豪富の百姓にて風雅の聞えありしかは御道の序にその家へ御立寄遊はされしにや」

其後曰隱山草堂も殘りてありしかは御立寄被遊候よし又隱山帶せし刀二尺七八寸にて巾も廣き作りのよし脇差も是に相應せしものゝよし御取寄御覽被遊よし　麟德記附錄

隱山事蹟に　香嚴院樣御歌之儀直川村玉井作大夫御直し被仰付候事世上色々取沙汰有之候に付作大夫に直に相尋候處右御直被仰付猶御前書なも被仰付候に付奉恐入再應御辭退申上候得共每々被仰出候に付奉恐入候得共御前書相認御歌な御直し申上候由御前書は

そのへさいふさころにて隱山翁かふるきあさなみるにいはれのひさつ松あらしはかりやさなんかきおけるな見て

さ相認候由御歌は上の五文字尋來てさ御座候な此津かれさ御直し申上候由尋來てさ御座候ては和歌山より態々御尋御出被遊候樣にも相聞え可申哉猶又塚の御趣意も難聞樣にも可有御座哉に奉存候間御直し申上候由申候事

一右之比八月十五日夜の御盃を東都へ被進候右の御歌も御直し被仰付書法等をも相認申上候樣被
仰出右御歌は

秋の最中の月をなかめし折から波に滿月をゑかける盃を得てこれをなをさりにやとて

今宵あれ和歌の浦汐くみておくる千里に月の影も晴るらん

右を詠草書法の通相認差上候よし物語に有之候

隱山の事は別に傳あり

五月七日、獵於加太浦三山

御在國の節は所々へ御猪狩に被爲入候其節は人足計勢子に罷出候處重役幷諸頭役の忰共罷出候樣との御事にて若者共勇みをなし候樣に御取立被遊候故甚壯健に相成候安永七戊年（瑞德記ニ五月七日）三山と申所の御猪狩之節猪鹿夥敷御手に入申候鷲谷與五郎（御勘定奉行武大夫惣領）手負猪を鎗付候處山の手より坂を下りに來り候猪眞一文字に與五郎に向ひ候其場は後に谷川を受け一方は切岸高き所にて身を遁るへき事ならねは大脇差を拔き猪の咽下より肝先迄突通し候處猪も一參に突掛りたる事なれは其儘右の手甲より手首を喰い夫より内股陰嚢まで喰込候得共其儘肝をゑくり候故双方共相弱居所へ岡部又右衛門（小左衛門惣領）駈付猪を一鎗突（瑞德記には猪谷藤十郎一番に駈付て猪を斬るとあり）候に付其儘倒れ鎗すえ候其内與五郎者後の谷川へ倒落候此所へ朋友壹人參與五郎を介抱致し候右者惣勢子之居候所は猪網の外故間に合不申諸士罷在候所へ者間遠く山を隔右之通り大難を受候與五郎重手負之事故頗御之節父武大夫門前まで被爲成能養生仕遣候樣厚御意被成下其後日々御近習之衆を以御尋被遊候日

鈴木悌藏の弓術を賞す

童子訓を著す

軍實を閱す

數過與五郎相果候に付甚御不便に思召厚き思召にて與五郎惣領三才に成候者を能々守立候樣との御事なり　堀內家筆記

一同月廿四日鈴木十左衞門惣領悌藏（後十左衞門）之弓術を被賞新たに八十石を賜ひ大御番格小普請に命せらる

悌藏京都に於て半堂矢數惣一致したるを以て如斯被召出たり後御弓役弓術指南御徒頭格御先手物頭格等被命文政十三年四月二十一日六十五才に而病死なれは此時十三歲なるへし子悌藏（後十左衞門）家を繼ぎ同しく弓術指南明治二己年八月八十石御留守居物頭格にて隱居せり

一右悌藏父十左衞門は肩衣御免御廣敷番十三石也先祖は日高郡小松原村浪人寒川作次と云作次之子源太郎年四歲に而太皷を打しに依り慶安二年龍祖廣御殿に被爲召御覽之上品〻賜り苗字鈴木に可致旨被命後禁裏幕府へ被爲召し事等　龍祖慶安二年之條に詳なり

一六月十六日御勝手御差支に付當年より暫之間御方〻樣御定祿一步通り御減し　寳鑑

八月著童子訓　當公第二卷ニ載ス

冬、獵於太堰瀨、閱軍實、

安永七戌年の比太堰瀨にて追鳥狩御遊覽被遊諸士の嫡子末子に至迄浮勢子に被召連小豆嶋四方數十町の間中央に御立場を構へ御幟を建て其下に御床几あり御鷹を居させられ浮勢子の面々各精力に任せ分執手柄次第たるへし獲物は當人に賜はるとの御事也御相圖ありて一度に發す衆多の御人數南奔東走三周して止る獲物を御默撿相濟て山口御殿へ入らせられ御機嫌能御旗本させられし所の鳥は御料理被　仰付御酒御吸物御供惣勢へ被下置候　瑞德記

夜間の安全

御勝手難澁

公の疾と民の禱

是歳、設投匭於府城門外、使民言事　按有德公時設投匭、其後久絶公再起之

紀州に入らせられ京橋口大下馬に訴訟箱を御出させ箱の封印は奥の衆預りにて月末毎に御小姓頭受取之御前へ差上る是は大國を御治め御仁政の普く隅々迄も行届せられかたき事を御察し被遊ての義也驗へは御聰明睿知と申奉るとも下々之事の盡く上聞に達すへき樣もなければ下情の達する樣にと思召たるなるべし　按するに此事は有德院樣御代より初りし事也されはその御例を思召せしなるべし　瑞德記

一堂形松原の間人家遠離れの所夜陰狼藉者儘有之人を惱し時に惡黨の徒の籠り易きを思召中央に番所壹軒御建置往來の人の便りと被遊候夫よりして往來の人安く夜行せしと也又町内に辻々へ常燈明を置くも此御時より也是は深き思召の由日入て陰興明生て陰散するの義を思召附せられしにやといふ　同上

演流鏑馬、奉於栗林八幡宮

安永七年栗林馬場に於て　小姓衆へ騎射被仰付同所八幡宮へ御奉納也神前へ雄雌の雉二ツ御贄御備也是騎射奉納の故實といふ　瑞德記

漢文瑞德記曰　若往古右幕府、献幣於鎌倉鶴岡之禮、禮畢舍爵、策勳、納式書于神庫云

十二月十日御勝手御難澁に付御拜借被仰立候處不相濟格別之譯を以先達而之御拜借御返納當冬より七ケ年御差延被　仰出　寶鑑

安永八年己亥　公五十二歲

正月、公有疾、士民憂苦、禱請于山川神祇者、晝夜不絶、

正月十六日より御手足御痺御言舌も御分兼被遊候御様躰
二月十日例御參府年に者二月下旬和歌山御立之處正月中旬ゟ御類中之御症に付暫く御保養御快
氣次第御發途可被遊旨公儀ゟ御達
一其後未た御參府難被遊段追々御達有之
一二月十二日　公方様大納言様より宿次奉書を以御所勞御尋被仰進御部屋様よりも奉書を以御
見廻被仰進
一五月廿五日從　公方様宿次奉書を以御所勞御尋
一十月廿九日　公方様より宿次奉書を以味噌漬鯛被進外に御老中宅へ御家老御呼出人參十五両
被進之　以上寶鑑
一安永八亥年二月御類中風にて御參府も不被爲遊候事御家中は不及申町人百姓迄も殊之外驚愕し
奉り偏に御全快被遊候様にと祈の外他事なし百姓町人共は各申合耕作賣買も相止向寄〳〵の氏
神へ百度參或は千度參と申て參詣絶間もなく致せし處に少々御快方に被爲入候よし承り傳へ奉
りて何れも欣躍する事甚しと也　續言行錄
一其比凝六と申ものもらひあり　一生獨身にて老母を養ひ頗る孝行の聞えあり平日古籐上下を著し竹杖を大小とし椀をつらぬきて鍔となし終日市中を諷狂して乞食して世をわたる新内町に居る　或
日岡口御門より出御廣瀨通り御歩行被遊候これは御病後養生之御爲也しに彼凝六戸田金左衛門
長屋下の溝に拜し居たるに既に御前近く成申候時大聲を出し　殿様御快御座被遊候哉と申上し
かは御供頭役中大に驚きて叱たれ共其愚昧至誠に出て言面に顯はれしかは　上には御咎なし委

夷齊廟堂記

敷此者の事御側向の人へ御尋被遊御笑被遊候其後町會所より町役へ內意して此者町內にて隨分不便に致し非人小屋へ落し不申樣との事にて一生借家住居して身を終り候これを以て在町ともに甚憂苦し奉る事をも知るへき事也又御寬仁の御事をも察し奉るなり

按するに我三十年の昔南紀に祗役せし時にも古麻上下着し竹杖を大小とせし乞食躰の者常に出御の御跡より參りし事を見たりもしくは此者の跡を慕ひて愚癡の者にや何とか南紀の人申せし事ありしか今は遺忘せり此御仁心を感し奉りてその後は供奉の御後に從ひしや猶尋ぬへし　瑞德記

一安永八亥年春御養生の御時諸士の子弟十三才以下を（漢文瑞德記ニハ六月トアリ）御城へ被召寄草鹿掛鳥等の賭弓を御覽あり御小僧雲可的前の中りを撿見す子供の各勝負を爭ひ喧嘩するを御慰にて勝の方へは御手親御扇子を被下置其余は御用人を以て被下又一とせ八九分より壹寸迄の强弓を被　仰付射手へ厚的を御試み有り厚的の製松板厚さ一寸五六分これを鐵槌にて打堅め八九分の薄さに鍛ひ牛の頸皮にて之を裹み漆塗て的とす射手共何れも能く貫革して鏃徹する事各皆三四寸也此厚的は御庫へ納ると云　瑞德記

一十一月九日　後桃園天皇崩、此夜閑院帥宮御子祐宮御方へ劍璽渡御アリ二十五日　光格天皇踐祚アラセラル御年九歲　十五代史

天皇御諱ハ兼仁、閑院太宰帥典仁親王ノ御子祐宮ト稱シ奉ル

是歲作夷齊廟堂記、贈水戶公

水戶樣御庭內伯夷叔齊の廟は義公樣の御造被遊候而像を御安置被遊候處前年回祿に及ひ候故安永八亥年文公樣その祀の廢せしを以て思召有之夷齊廟御再造被遊候に付二賢の像を作る者御國

には無之候哉紀州の小笠原壹齊へ被　仰付二賢の像出來申候壹齊は彫琢精工のよし世にも聞えし故にや　香嚴院樣御自から記文を撰せられ和歌山より被進候　瑞德記

夷齊廟堂記

伯夷淑齊、仁不念舊惡、義不食周粟、其高風淸節、千載之下、聞者莫不興起、豈非百世之大賢乎、水戶黄門義公、尊仁義之道、欽夷齊之德、肖木造其像而廟祀之、蓋義公之好德也、後罹燬燼、祀事中輟、今宰相君、憫其禮之廢、乃屬余、使敝邑工人更造其像、將以昭先公之懿德也、孔子曰、夫孝者、善繼人之志、善述人之事者也、今也其繼述之誠、孝思之篤、亦又使人起敬欣慕焉、工人造成、因記其概畧、以寓賛嘆之意、附而贈之云　先君寔錄

安永九年庚子　　公五十三歲

御所勞にて本年御參府無之

栗生源五左衛門

正月十一日擧栗生源五左衛門爲槍奉行、

按スルニ源五左衛門ハ利壽ト名乘リ祖先ヨリ七代目ノ祖先ハ　神祖ヨリ御附人ニテ五百五拾石ヲ領ス利壽性剛直義氣アリ最モ武ヲ嗜ム去ル安永五年正月十一日特旨ヲ以テ御前ニ於テ御召御具足拜見ヲ被命今又本記ノ命アリ此時御槍ヲ受取ルニ自身悉ク打揮試ミ貓損ノ分折リ挫ク其他同人傳ニ詳也

節儉令

是春、令有司嚴節用省事、又定諸士節儉之制、

三月廿日被　仰出

兼々御勝手御難澁之上打續不時御物入差添御償之方便も無之件之通りに而は御政事にも相障り往々大殿樣御用向等も御差支に可相成と御不快に思召候に付此度思召之趣大殿樣へも被仰上五

六年之間万事御先格等に不拘御減方被仰出答諸役所勤之者は御勝手向之儀委敷不存儀も可有之候得共都而之儀前々よりは年々事繁く相成候に付能々致勘辨御用之件減候而も御締り肝要に心得取計候様下役人等へも入念申聞夫々存寄申出候様　安明遺事

四月被　仰出

御家中儉約之儀前々ゟ被仰出候得共事に寄ゆるみ候儀も有之趣上にも御先格に御拘不被遊御省畧に付御家中之儀は猶以儉約可致は勿論之儀惣而世上風俗花美に成り分限不相應に成行候間都而虚禮を省き實儀成風儀を第一に心掛儉約可致旨　同上

此節御家中音物贈答餞別土産品嫁娶緣組葬禮佛事作事請衣類飲食饗應參會雛破魔弓幟兜飾等迄節儉之制委細心得書を以被仰出あり其細雜を畧す

一先年御觸有之吉凶の贈答の品は何に不寄銀幣又手券(キツテ)にて取遣致候様との御事也和歌山の風俗苟且にも無益の贈答に奢を極め貧窮の者も全くケ様の所爲より興る事と思召たるにや併し國の習はせなれは急には禁止しかたきを御察双方費幣に不相成様の御勸辨を被爲加て此被仰出あり然共惡習は難變奢侈には移り易くして何となく此御制度を用ひすなりぬ今町方に流行する酒券醬券菓子青物切手等の類は其比より始る善政の遺法の今に存せる也

是歳前後に又左之如く被　仰出たり爰に附記す

安永八年十二月奉行へ

御家中在江戸之者諸渡物當時相滯り有之趣御勝手筋之儀追々年寄共へ相達候趣委達　御聽有之候得共右渡物之儀は夫々兼而取凌之當にも致し可有之儀に付御默止難被遊付右渡り不足之所は

浮置米之內正米にて相渡し候樣取計若山に而相勤候者共役料其外滯筋も右同樣に取斗可申云々

天明元丑年二月七日に

坊主諸手代組足輕其外末々迄角衣類等背之品着用いたし祝儀佛事之節重之內等致取遣且代番之節振舞附届等いたし候趣相聞候間自今堅く相止可申旨

一男女奉公人過分之切米を望候者有之趣相聞不屆に付以後右躰之者は召捕入牢申付可遂吟味件之趣受判宿之者奉公人へも申聞候樣可取計旨被仰出

天明元年 辛丑　　公五十四歲

三月公病愈

二月三日御不例御快先比以來所々へも被爲成暖氣にも成候はゝ御參府可被遊御樣子なり

同月十五日當春御參府被遊候はゝ御都合能候に付大坂表御止宿不苦哉と公邊へ御內談之處不相濟

三月九日次第御快方に付近々御參府可被遊旨御達

同廿八日御所勞次第に御參府被遊候に付　大殿樣淸信樣へ被爲入　以上寶鑑

四月東覲

四月四日御發駕同月廿二日御着座御道中日數延十九日振　寶鑑

一同月廿八日御參府御禮御所勞に付御名代加納大隅守を以被　仰上且御供之御家來跡ゝ之通御目見献上物も仕　同上

一御供之面々御供増渡り金暫之內相止候事候得共諸士勝手不如意之上近年米下直にて別て難澁之趣達御聞候此節御勝手御差支之砌には候得共御供增渡金之儀は前々之通り渡し方取斗候樣被仰出　安明遺事

一四月廿八日御參府後初て永隆院樣 大憲院樣之御養 に被爲入尤御逹之上也

一五月二日紀州に而御捕せ被遊候海獺皮御障泥被仰付此度爲御持御內々御獻上被遊

一同十六日（一ニ一トアリ）御所勞未た爾々不被遊御立居御步行御不自由候得共御氣然は宜候に付御機嫌伺何角之御禮旁御登　城之儀御達

一同廿五日御病後御立居御步行御不自由之段被爲聞召御全快迄御登　城之節御玄關前迄御乘輿且殿中御勝手次第御杖御用ひ被成候樣公儀より被　仰出

一同廿九日五ッ半時御供揃にて御登　城被遊候處御老中罷出御病後初て御登城に付御手自御のし鮑可被進候得共御立居御不自由之由に付其儀無之旨　上意之越申述御熨斗鮑両御番頭之內持出御頂戴相濟西湖之間へ御通被遊　公方樣御表へ出御之節御通掛御對顏　上意有之　大殿樣御儀御懇之御尋有之相濟御退出被遊

　爲御介抱左近將監樣左京大夫樣御登城其外御介抱人御醫師等被召連

一六月十一日遵玉齊御拜領　七月二日八月十七日にも御拜領

一八月十四日御所勞未た御立居御步行等御不自由には候得共此以後月次等御三家方御登城之節は御樣子次第押而御登城被成度旨御達之上十五日より御登城被遊

家齊公養君

幕府より借金

一八月廿五日　公方樣御養君被　仰出候御祝儀御能被仰付候處御長座之儀に付御見物被　仰進之
上使被進間敷旨被仰出

本年五月十八日一橋民部卿樣御嫡豐千代樣（家齊公也）御養君被　仰出同日より若君樣と稱し奉りし
也

天明二年壬寅　　公五十五歲

正月廿八日今度御願之通　公儀より金貳万両御拜借被　仰出（寶鑑）

二月二十三日借金二萬圓於幕府（寶鑑）

三月廿八日左之通被　仰出

一此度　公儀ゟ御拜借金をも被　仰出且御中屋敷御普請被　仰付候に付而は萬一下役人共心得違御繰合宜敷樣に存御締り方取扱ゆるみ候儀有之候而は如何之事右御拜借金は外に御用之品も有之御普請之儀は無御據儀に付心得違無之樣末々迄申聞御締方嚴重に取扱可申旨奉行御用達へ被
仰出（安明遺事）

天明三卯年にも左之通被　仰出

一追々御物入差添去年は度々之風雨出水等にて作方不熟に有之御收納夥敷相減當年御繰合差支之趣奉行より申上候故を以御普請當年は御延引被遊候に付諸役所向萬端手を詰御用之品々に而も可成丈け來年に差延候樣との旨（以上安明遺事）

一二月七日　上使松平周防守田沼主殿頭を以　種姫樣岩千代樣へ御緣組被　仰出右爲御禮即日両

御丸へ御登城

種姫君樣は將軍家治公御養女實田安中納言宗武卿御女也

當正月十九日御老中宅へ御家老呼出し　種姫樣御儀　岩千代樣へ御緣組來月上旬之內表立可被
仰出御結納之儀は　殿樣御內存之通當春御國元へ被仰出候はゝ重て御參府之上御差上之積御心
得被成候樣との越被申聞たり

一九月三日五日　常陸介樣御緣組且初て　御目見御元服被爲濟候爲御祝儀西丸に於て御能被
仰付

岩千代樣當三月七日御登城御元服被仰出御一字御頂戴常陸介治寶と御改なり

一同月十四日　種姫君へ　常陸介樣より御結納之儀來年四月御進覽被遊候御心得にて被成御座
候樣御日限之儀は追而御達可有之旨御老中宅に於て御家老へ被申聞

一天明三卯年三月四日御結納御進覽御日限四月十五日と被　仰出

一同年九月十三日去年　常陸介樣御緣組　御目見被爲濟候爲御祝儀御老中御招請御能被　仰付

以上寶鑑

一三月朔日西丸へ御登城若宮樣へ初て御對顏

一同月六日　上使を以御拳之雉子御拜領

四月　歸藩

一三月三日當年　御國許へ之御暇被　仰出候はゝ御歸國之上御樣子次第御所勞爲御養生熊野温泉

御入湯之儀月番御老中へ御城附を以御達
　右御湯治御沙汰相止候旨十一月廿四日江戶へ申來る
一同月廿三日御國許に之御暇被　仰出即日爲御禮御登城　御手自御熨斗御頂戴御鷹御馬御拜領御所勞中に付御饗應并御老中御招請無之
一同月　御國許にて惣体御遠慮深く被爲入候由御鷹野其外少も御遠慮不被遊樣にと御老中田沼主殿頭より申上
一四月朔日御發駕同十八日和歌山御着城
　同月四日爲御尋宿次奉書出る
一十月十八日當春御暇之節御拜領之鶴捉御鷹大緒　御參府之節も紫に被遊度段御達相濟
　按に並御鷹は赤緒なれとも鶴捉の時紫緒に替りし例なり

領分損亡

一同月廿八日紀州勢州御領分御損亡之儀月番御老中へ御達相成
一同月廿二日御中屋敷表御殿御普請釿初
　右御普請御延引に成る追て御普請之件爰に繰上け集記す
　天明六午年二月廿七日右御殿御普請掛再被　仰付同年三月十五日御殿地御地鎮同月廿八日釿初十一月廿三日表御殿御內證共御棟上同七未年八月十五日御玄關向御棟上
　同七未年九月廿七日　中將樣御移徙　以上寶鑑

漂流人引見

日高郡御坊村舟子、漂流清國者來皈、公召見慰勞之、且有所諭

日高郡沖船頭半十郎揖取柏村彌次兵衛水主吉原浦文助平助薗浦長兵衛南海士郡阿戸村半藏忠次郎十次郎日高郡由井浦甚藏薗浦濱の瀬松次郎吉原浦彌兵衛外に泉州尾崎浦之者肥後天草之者二人都合十三人乘之船安永八亥年遠州遠江灘にて難風に逢ひ十一月其の日淸の福建省福寧府霞浦縣之内淛英嶼と云處へ漂着し天明二寅年南京の賈船魏公燧顧舒長二艘の船に乘組て長崎港へ護送しけれは江戸へ遣され御吟味相濟候上御引渡しに相成半十郎初夫々漂流の樣子あの表之次第御尋させの上十一月廿四日十人の者御庭内（一ツニ麴町御屋敷トアリ）に召させられ御覽まし／＼御酒御菓子被下置故鄕へ返し候樣仰出され旅費をも賜り役人御差添願に依つて參宮をも相濟其十人の者共心得の品御書物に御綴らせ十册御用役へ御下遊し讀聞せ候上文段之趣得と合点致候樣可申聞旨仰出され候に付御勘定所に於て讀聞せ御書物一册つゝ賜り候事

心得之趣

其方共先達て福州へ漂流致し唐人共の憐により飢す寒えす無事に罷在候處一人は病死いたし彼地にて葬を營み其余者何れも無恙再び本國に歸る事を得たり久振にて父子兄弟對面致し候はゝ互の悦は限りも有間敷事也夫に付病死致し候者之親類共此度其方共の無事にて皈り候事を聞及び候はゝ嘸々亡者の事を存出し悲みは最初よりまさるへき事に候其方共右之樣子を思ひやらは定て哀を催すへきは勿論の事に候鳥類畜類とても其友を失へは翔りめくり啼號ふなれはまして人は萬物の靈とて天か下に生を受る者の内人間より貴き者はなし情と義理との心は誰にも受け得て生れ來る事なれは其友傍輩の死失たるを心なく打忘るへき道理はなき事に

候古き書物にも舟を同しくすれは胡越も兄弟と申て常は佐渡越後と隔りたる者も海河にて同船をすれは互に助け救ふ心信實より起りて兄弟の親の如く有りと也まして同國同村の者なれは猶又念比に可致筈の事に候其方共故郷に歸り候はゝ何れも申合せ先達て病死せし傍輩の爲に追善供養をも營み其者の妻子眷屬をは自分の親類の如く相心得隨分憐みを掛み川きをも致し遣はしいつ迄も打捨さる樣可致事に候人に情有り物の哀れを知るとて右等の事は人間たる者おのれと自然に發起すへき事にて勿論誰敎へ導にも及さる事に候然共世の中には又邪見にて一向義理の辨へもなく唯我一分の勝手をのみ心掛親類をも他人の如くにして友傍輩をも見捨る樣の族も折々は有之事に候是等の輩は人間の體はあれとも畢竟は鳥類畜類にも劣りたる者と知るへし耻敷口惜き事にはあらすや何れも能く〳〵相心得べき事に候扨又報恩謝德とて人に恩を受たれは其返しを致事は是又人間の義理にて候先達熊野浦へ漂着致し候唐人の內尤延玉と申者同所にて病死致し其墓印は周三見浦に有之候其方共唐人の情により一命を全し致病死候傍輩の墓も彼地に有之候得は定而唐人より法事等も致し可申事に候得はかた〳〵何れも右尤延玉の墓へも參り香花を取り弔をも致し遣すべし是報恩謝德とて人間の致さすして不叶事故序に申聞置也右等の趣何れも得と合点致しいつれも忘れ申間敷事也

天明二年春三月　安明遺事　十一月廿四日御庭へ爲召とあるに春三月とは如何や暫く原本のまゝにす

按に右本記に天明二年十一月廿四日十人の內御庭へ召さる云々とし又同年長崎へ護送せられ夫より江戸へ召下し幕府吟味濟迄は中〳〵數月を要するは必然也春三月とあるは何れにか誤謬あらんも暫く爰に編す

天明三年癸亥　公五十六歳

二月 東覲

一二月廿七日若山御發駕三月十五日御參府　十三日御着座之處大井川滿水にて御延引

二月十七日御參府三月十五日御着座

但十三日御着座之處大井川滿水故也

三月十八日御參府御禮御名代水野對馬守を以被　仰上

一四月朔日爲御伺御機嫌　兩御丸へ御登　城

一四月三日御所勞に付差延候御登城は被遊間敷候御歡事御禮事等之節は御様子次第可被遊旨式目之御登城不被遊節も分けて御達被成間敷旨御老中へ御達濟

一同廿八日　種姫君様　貞恭院様御事　御自筆御繪御內々被進　以上寶鑑

五月野呂正祥　助左衛門　演射於京師三十三間堂、爲江戸本堂惣一

一野呂助左衛門京都於て江戸本堂大矢惣一となる五月廿二日暮より廿三日暮迄

江戸深川本堂大矢數惣一を射越　廿二日暮方廿三日暮迄　寶鑑

一公嘗て和歌山堂形に於て野呂助左衛門の千射を御覽ありて御尋之趣ありしに兼て本堂惣一の志に候得共和佐大八佐和を射越候はんもいかゝ候哉責めては射並ひ候はん願に候と申上しに同し御內にて射並ひ候もいかゝ有べきや先年酒井家の士町田小助江戸深川堂惣一の後は敢て射越の者もなき上に彼堂も回祿に罹りて其事なし得かたからん彼堂前を京師に移して射越さば如何ん

との御出されし程にこは思ひ設けぬ事にて候其事叶候はんにはあはれ御ゆるしを蒙り奉らはやと御請申上しかは頓て其事に極り公義へも御達せられ給ひ京都堂矢見共へも御掛合相濟天明三年助左衛門多年の望みを達し深川本堂大矢數一万七十三本通り矢五千五百八拾三本にて江戸惣一となり昔貞享年間の和佐大八このかたの譽れを得たりと此年春江戸御參覲の御旅中いつれの驛にてか仙臺の士山内小藤太とかいへる是も惣一せんと京都に上りしを御覽ありて江戸にて御用人山田八右衛門へ御沙汰のやうは山内小藤太は容貌不群の士にて助左衛門なとの優弱の似るへきに非すいかにも心元なく　思召旨御沙汰有りしに日ならすして助左衛門首尾能く成就の事御聽に達しけれは御滿足不斜其用弓白虎と名付しを特に江戸へ徴させられ御書にて振滝弓と御下銘并下賜りしと左氏傳振滝の語を取らせ給ふのよし安明遺事に載す詳には武衛傳野呂助左衛門か傳に記す

一助左衛門か家譜を按するに天明三亥年七月廿四日助左衛門左の如く拜命す是迄は御切米八十石中之間番格なりし射藝出精此度於京都大矢數仕江戸深川矢數之上數十年來射越候者も無之候處射越候に付格別之　思召を以て御使役格被　仰付御切米を地方に御直し御加增被下置都合三百石被　仰付之射越候弓は重き御書付を以振滝と御銘拜領仕候とあり

助左衛門は商家の子也御射手役小川氏の弟子養介と成射藝に達す先年十三歲に而半堂を射矢數一万千九百六十五本通り矢一万千七百拾五本也又正保年中ゟ深川堂江戸一と稱する者歷代數十人酒井家の町田小介以後半堂の射手のみにて本堂射越之儀絶て無之云々　瑞德記

淺間山噴火

友ヶ島の牧馬獻上

一七月六日御所勞中五節句御登城之節に御半袴にて御登城被遊其節に分けて御達し被成間敷旨御達し濟　寶鑑

七月七日信州淺間山噴火地震鳴動砂礫降る事雪の如し

七日天色暗憺として風吹き砂降る事雪の如し黄昏ゟ地震す八日鳴動ます〱甚しく災害の及ふ所方四十里死亡の民凡二万余人と云ふ信濃上野兩國の田畑盡く荒壞せしかば農民等飢渇にせまり四五百人或千人黨を結ひ餓民と稱して富豪の家々に亂入九月の末より十月の中旬に至り諸所を劫畧して止ます信州上田の城兵等馳出てゝ之を生捕しかば稍鎭靜する事を得たり　十五代史

十二月十五日將軍　家治公　賜畫　親所畫也　寶鑑

天明四年　甲辰　　公五十七歳

一正月四日青山權田原出火にて御添屋敷少〻幷御中屋敷青山新長屋同所西表通り御長屋共二棟類燒

一正月六日紀州友ヶ嶋立之馬御獻上　以上寶鑑

友ヶ嶋の牧は有德廟の御後は其事絶てなかりしを此御代再び興させ給ひし或年三の戸といふ鮫の御馬有りしか毛色面白くふりはへて足並いと柏子よく二なき御馬にて殊に御秘藏まし〱けるか此御馬合かた仰出されしか人々彼嶋に往きて合せしに合口よろしからざりければ以山といふ御馬に合せてさて牽て歸り其事聞え上けしかは頓而仰せらるゝやうは彼馬は以山か子にて親子にてこそ有つれ何條かゝる辨へのなくてやは有ると特に御氣色あしかりけれは其事奉れる人々打驚かれつゝしばし罪蒙りて引籠り居しとそ　安明遺事

赤阪邸火

赤坂邸內火

正月四日青山表長屋類燒　寶鑑

一閏正月廿一日　大納言樣御元服御官位後初て　御對顏

二月歸藩

一閏正月廿二日御國許へ之御暇被　仰出即日爲御禮御登城　御手自御熨斗御頂戴格別御懇之御事にて有之　御登城之上御饗應無之御老中御招請も御斷

二月十一日江戶御發駕同二十八日御着城　以上寶鑑

田沼意知刺る

一二月廿三日幕府新御番佐野善左衞門政言殿中に於て若年寄田沼山城守意知を傷く

今日午刻終り老中退出に續きて若年寄も打連れ退出善左衞門新番所より馳出てゝ意知に切てかゝる是政言日比意知に怨あるのみならす意次父子が權勢を專にして世にあじきなき所爲多かりしを憤りてかゝる事に及ひしと云傳ふ意知廿九日免官四月二日死す三日政言に死を賜ふ世人之を悼む者多く其墓前に拜する者引もきらす

疫病流行

一五月七日疫病流行するを以て單方救療の藥方を諸國に頒示す

享保十八年嘗て世に行ふ所なり　以上十五代史

大饑饉

是歲天下大饑、公近撫管內、無一民饑者、公亦憐僻遠之地、醫藥難給、抄出救急方一書、班之、名草郡南永穗村民、九郎右衞門、請徧班其所著農民敎草、允而賞之

按ニ當五月七日疫病流行ニヨリ幕府單方救療ノ藥方ヲ諸國ニ頒示セラル享保十八年嘗テ世ニ行フ所也ト云

天明四辰年六月被　仰出

當時疫病流行致又輕き者共雜食の毒にあたり相煩致難儀之趣相聞候依之享保十八辛丑年飢饉之後時疫流行候處　公儀ゟ諸國村々へ被下置候御藥法書付之儀年久敷事故村方にて相失ひ候儀も可有之候に付今度爲御救寫被　仰付右之趣可相觸との御事

時疫流行候節此藥を用ひ其煩をのかるへし

一時疫には大粒なる黑大豆を能いりて壹合甘草一匁水一合煎し出し時々呑てよし　右醫濟に出

一時疫に付茗荷の根と葉をつきくだき呑てよし　右時後備急方に出

一時疫には牛房をつきくたき汁をしほり茶碗に半分つゝ二度飲て其上桑の葉を一握り程火にてよくあふり黃色に成りたる時茶碗に水四盃入二盃にせんして一度飲て汁をかぎてよし若桑の葉なくは枝にてもよし　右孫眞人食忌ニ出

一時疫には熱殊の外強く氣違の如くさわき苦むに芭蕉の根をつきくたき汁を飲てよし　右時後備急方に出

一切の食物の毒に當り又色々草木きのこ鳥獸なとの喰煩に用て其死をのかるへし

一一切の食物の毒に當り苦むにはいりたる鹽をなめ又者ぬるき湯にかき立飲てよし　右農政全書に出

一一切の食物の毒に當りて胸苦しく腹強く痛には苦參（クシン）を水にて能せんし飲て食を吐出してよし　右同書

一一切の食物に當り口鼻より血出てもたへ苦むにはふきを刻みて壹合水にて能せんじ冷し置て幾度も飲むへし血出やむまて用てよし　右衞生易簡に出

一一切の食物の毒に當り煩に大粒なる黑大豆を水にてせんじ幾度も用ひてよし魚に當りたるに彌よし

一一切の食物の毒に當り煩に赤小豆の黑焼を粉にしてはまくり貝に一ッ程ッヽ水にて用ゆへし獸の毒にあたりたるには彌よし　右千金方に出

一菌の喰あてられしには忍冬の莖葉とも生にてから汁を呑てよし　右夷堅志ニ出

右薬方は凶年之節邊土の者雜物の毒に中り又は凶年の後必す疫病流行之事有之其爲に可撰簡便の方旨被　仰付依て諸書之内ゟ吟味出者也　以上瑞德記

信按ニ是歳八月比備臣山本惟恭ニ命セラレ儉約守法緩急ノ二論ヲ選定シ上ラシム惟恭又文ヲ作テ執政加納大隅守且司農某ヘ贈ル皆國ノ大體節儉ノ要ヲ論究ス其至誠ニ出ルモ實ハ內旨ニ係ルトイヘリ文安川遺事ニ詳ナリ奉旨論文一卷アリ

一十五代史ニ曰　此年夏秋國々ノ民飢餓ニセマリテ死スル者多ク奥羽ノ地ハ尤モ甚シク慘狀言ニ忍ヒサル者アリ加之疫癘大ニ行ハレテ死亡スル者數十万人ニ及フ　十五代史

天明五年乙巳　公五十八歳

三月東覲

三月四日若山御發駕同月廿二日江戸御着座　寶鑑

四月朔日御參府之御禮　御名代水野對馬守を以被　仰上

一五月五日御所勞今以御同邊被成御座御小用御頻數被爲在候に付御參府後未た御登城　御目見之儀も不被仰達候乍併御參府後久々御登城不被遊候段御恐入被遊候右之通に付　御目見之儀は不被　仰達候得共御樣子次第爲御伺御機嫌御登城被遊度との御内意松平周防守へ被　仰達候處御

勝手次第被成候樣にと被仰出候に付御樣子次第御登城被遊候御積之旨
一八月廿七日四時過之御供揃にて　御參府後初て　兩御丸へ御登城被遊
一十月朔日　兩御丸へ御登城被遊候處　御參府後初て御黑書院溜にて　公方樣大納言樣に　御通掛け　御目見　公方樣より御懇之上意有之　大殿樣御儀御懇之上意有之御熨斗鮑御頂戴被遊
一同月廿七日紀州御領分之內にて當年十七万四千十九石余御損失有之候との儀を　公儀へ御達しあり　以上寶鑑

天明六年丙午　公五十九歲

一正月朔日并三日御謠初とも御登城無之
一同月廿三日　上使を以御拳之雁御拜領

二月幕府貸與金五萬圓

一二月廿二日來年　種姬君樣御引移に付金五萬兩御拜借被　仰出內貳万兩三月廿四日一万兩は十一月六日受取　眞恭院樣御入輿御手當也　寶鑑
一二月廿七日從　公方樣上使田沼主殿頭を以　種姬君樣御事來年冬中御引移可被遊旨被　仰出卽日爲御名代左近將監樣御登城

是歲在江戶

一四月二日當年御滯府御願之通被　仰出　御家老呼出ニ而
但三月二日御同邊之內寒氣にて別て御傷被遊候に付久々に而御登城不被遊就夫當月定例之通御

國許へ御暇被　仰出候ても只今之御様子に而は長途之御旅行難被遊御自由ヶ間敷思召に候得共暖氣にも相成候上御暇被　仰出候様被遊度との趣御城月番御老中へ御城附を以御達しありたる也　寶鑑

一六月廿九日　公儀より金銀融通新法被　仰出

近年金銀融通不宜諸家差支有之趣相聞候間此度金銀爲融通左之通出金被　仰出候

諸國寺社山伏

宮門跡尼御所は相除其余之分本寺本山より重立候社家にて取調其末々之趣に隨上の分一ヶ所にて金十五両と相定其以下は相應之出金高本寺本山并重立候社家に而相極末寺觸下支配等へ可申渡候

諸國御領私領　百姓

一　持高百石ニ付銀二十五匁宛
　但大阪表此度御用金差出候者相除候積り

町人

一　間口一間ニ付銀三匁ツヽ　右同斷
　但シ大阪表云々同斷

右者當午ゟ來る戌迄五ヶ年之間年々前書之通出金銀被　仰付從公儀も御金被差加一同大阪表會所に於て利足七朱之積を以諸家へ御貸付致し返濟引宛之儀は大阪表通用米切手并領分之内相應之村高証文に書入万一相滯候節は米切手は彼地定法之通取斗切手米爲相渡村高は最寄御代官へ預り其物成を以返濟之積勿論右出金銀之分御用相濟次第致出金銀候者共へ御戻被下利足は七朱之内會所諸入用之分引之其餘之利足右元金銀御戻被下候節是又致出金銀候者共へ可被下候間心得違無之前書之通出金銀可致候尤右出金銀納方之儀諸國共寺社山伏は銘々之出金

銀高本寺本山にて取極申渡候上日數廿日之内百姓町人は前書申渡候趣相違次第是又日數廿日之内致出金銀來未年よりは年々正月中之積相心得出金銀之分御料は其所之奉行御代官幷御預り所私領は領主地頭へ差出夫より江戸最寄りは江戸駿河町爲替御用達三井組幷同所上田組二ヶ所之内へ早々相納め大阪最寄は彼地にて三井組は高麗橋三丁目上田組は上中島町右二ヶ所之内可相納候

右之通万石以上以下共領分知行在方町方へ不洩樣可申渡旨可被相達候

此令の出しより大に天下の人心を動かし誹謗怨言至らさる所なし又去年大阪之富商に令して各其貯金を官に出さしめ官より之を諸大名に貸付け其得る處利息之十分一を官に上らしむ諸大名の之を加ふる者亦必償はさるを得ず官亦其利を得て民其背を失はず便益是よりよきはなしと大阪町奉行に令し强て之を行はしむ富豪等謂く金既に官府に上るもし諸大名より之を返す事なきも其利は上らさるを得す是徒らに貯金を失ふ者也と敢て其金を輸納せず事亦行はれず且此年之春雨ふらずして日毎に風烈しく火災しけく起りしが夏之程になりては連日雨降りつゞきて日を見る事少く殊に冷氣甚しく暑中にも單衣被る者なし然るに此十二日ゟ雨風烈しく同十六日十七日に至りては川々の水漲り溢れて兩國永代を初め大小之橋々悉く破壞し靑山牛込など高燥之地も諸所に山水湧出てゝ屋舍をやぶるに至る況んや本所下谷淺草關口小日向など卑濕之地に至りては水高さ一丈余り大厦は水にひたり小屋は押流されて溺死する者亦少からず凡そ開府以來如此の水害は未たあらさる所なりされは利根川荒川の水一つに混して草加越ヶ谷粕壁栗橋之宿々只海面之森々たるに異な

田沼意次貶せらる

らず官令して船を出し彼所此所に漕めぐらして僅かに免かれし人を五人十人づゝ救出し之を一つ所によせあつめて芝居小屋にて炊きし團飯を籠長持に入れ持運びて供給するも猶及ばずして死を致すもの多し二十三日に至り水害やゝ平ぎて兩國橋の邊は舟にて往來する事を得たり

八月二十四日前段諸國寺社山伏百性町人方出金の儀此度關東筋其外出水により向々難儀之趣相聞え候旨にて一統出金之儀御差止被　仰出

此時織田豐前守御預所和州吉野郡山に金銀鋼山公儀御手山之積を以開堀之儀及び下總國印幡沼新開之儀等停止之令あり

是等の事皆田沼意次水野忠友等か申し行ふ所にして其大に民心に背く事を上言する者あり　公始めて之を聞き乃ち大に憤恨す　以上十五代史

幕府貶執政田沼意次

二十七日田沼意次職ヲ解キ雁ノ間詰ニナル側衆稻葉正明モ同シク菊ノ間詰ニ貶ス去年加增ノ地三千石ヲ收ム 閏十月五日田沼意次二万石ノ地ヲ收メ大阪藏屋敷幷神田橋上屋敷ヲ收メラル翌七年十月再ヒ二万七千石被召上蟄居被命遠州相良城召上ラル

此月十五日　將軍疾アリテ表ニ臨マズ二十六日疾劇甚ナリ此時田沼意次入テ疾ニ侍セントス近臣等之ヲ拒ンテ入レス或ハ之ヲ刺ント謀ル者アリ意次之ヲ聞テ大ニ懼ル或ハ傳フ　將軍ノ薨ハ其實廿日ニ在リ秘シテ喪ヲ發セス故ニ田沼稻葉ヲ黜クルハ　公ノ意ニ非ス三家及ヒ諸老ノスル所也ト事或ハ然ラン今得テ詳ニスヘカラズ是ヨリ老中尾紀水三卿ト相議シテ政事ヲ行フ　以上十五代史

一相良侯執政の時か萬つ御奢侈之事共にて諸有司利を興すの沙汰より他の事はなかりしとそされは

國用の續にのさりしかは日本惣戸税の内議定りて上使して御三家の御方へ密旨仰下さるゝ事の有しに獨り我先公のみ此議を肯はせ給はず屢々渥滬の御兩公へも御閑談ましくて此令出なははや總劇の本になりて亂階もや發し侍らん譬ひ治貞身に替へても爭はてやは有さ仰せられ候が遂に是か爲に此議も止みしとそ是よりそ彼人も勢ひ失ひそめて幾ほともあらぬに子息城州の事ありて天下一變の機運は開きしとそ

一薩州侯天下の外戚となられしかは御三家の格に准せらるべき御議定ありて先御三家の御方へ密旨仰下さる事の有りしに我先君此儀をも肯はせ給はさりし程に此儀も止みしとそ　以上麟德記附錄

信按に松平薩摩守重豪（隱居後榮翁）息女茂姫安永五申年一橋家齊公に御緣組天明九酉年御婚禮御臺樣と稱す即ち廣大院殿御事也本記の事蓋し家齊公將軍にならせられし後の事ならんか又田沼主殿頭意次は　有德公の時御供にて幕府へ被召出たる田沼專左衛門意行の子也專左衛門は享保十九年二月死す意次幼きより　惇信公に仕へ父の後を承け六百石を領す　惇信公の御世となり次第に登用せられ寶曆元年側衆となり續いて万石ニ列せられ後城主となりて遠州相良の城を築き遂に老中に任し五万七千石を領す嫡子山城守意知亦若年寄となる父子兩老に任するは古來例の少なき所にして權勢世に並ぶ者なかりしが山城守意知は終に佐野善左衛門の爲殿中に刺され意次爰に至りて一時に貶黜蟄居を命せられて天明八年七月廿四日卒す年七十也といふ

一此比專ら都下の童謠に日本の後見使薩摩壓へにや紀伊妙じやと言ひうたひしこと其比諸國を藥賣て步行ものゝ日本あうけひし癪と痞にや奇妙しやと街々を形おかしく聲ふしとりて謠ひ賣步行しか是に擬して此童謠も出しとそ其事の有やなしやは差置きて物の辨へしらぬもの童部迄も御德義を慕ひ奉りしおして知るべきにや　安明遺事

九月將軍家治公薨諡浚明院

窮民の爲工事を起す

九月六日疾危篤ナルヲ以テ家門譜代ノ輩登城アリ八日喪ヲ發ス實ハ前日既ニ薨スル也

十月四日發引上野ニ葬ル此夜丑中刻埋葬

十五代史ニ曰ク 田沼意次吾弟ヲシテ一橋ノ老臣タラシメ其子豊千代ヲ迎ヘテ策立ノ功ヲ立テ以テ權勢ヲ保セントス其術亦巧ミ也然レ圧政事ノ人望ニ背クモノ終ニ其身家ヲ全クスル事ヲ得ス將軍ノ薨ニ臨ミ老臣近侍ト謀リ紀水二卿亦心ヲ協セヲ匡救輔佐ノ眞ヲ得諸政ヲ改革シ姦權ノ徒皆貶斥セラレ諸政脩明殆ント別天地ノ想ヒアリ

又曰ク　公ノ晩年權姦政ヲ專ニシ小人路ニ當ル諂諛風ヲナシテ廉恥日ニ亡フ有司ノ驕逸ヲ肆ニシテ下民ノ疾苦ヲ顧ミス言利ノ徒興リテ聚斂ノ徒横行セリ稗史ニ當時ノ諷諭ヲ載ス以テ風俗ノ頽廢ヲ知ルベシ

世ニ逢フハ道樂者ニ驕リ者轉ヒ藝者ニ山師運上
世ノ中ハ諸事御尤アリカタイ御前御機嫌扱ヲソレ入
世ニ無キハ御無事御堅固致候ツクバイ樣ニ拙者其元
世ニアハヌ武藝學問御番衆ノ只奉公ニ律義ナル人

足蔵浚城溝以賑窮民

天明六午年打續凶作にて末々の者共難儀の趣被聞召及中橋邊より西丸邊の外堀を御堀さらへ仰付られけれは裏屋住居の老幼共に滬出土を揚け候ものへは相應に夫錢を被下置ける故老若の人足共蟻の如くに集り何も御惠を難有奉存聊骨惜なく相働きけれ共御大惣之御普請暫時に相濟み右揚土は莫大の事なれ共御家中へ勝手次第に被下けれは各屋敷〳〵の門前へ引ならしその土を運ぶ者も又相應に渡世に相成末々之者大に潤ひけるとなり　續言行錄

天明七年丁未　　　公　六　十　歲

一正月十七日青山權田原出火にて御添屋敷御長屋不殘燒失

正月設壽莚

一同二十七日六十之御賀御祝儀被爲整　寶鑑

一二月十一日　種姫君樣當冬中御引移御當日御婚姻被遊筈に付御引移り無之直に御入輿御婚姻御整可被遊旨被仰出候段今日水野出羽守宅に於て水野對馬守へ被申聞　以上寶鑑

家齊將軍宣下
松平定信執政

四月家齊公任征夷大將軍六月擧松平定信爲執政

一四月十五日　勅使下向將軍　宣下ノ禮ヲ行フ正二位ニ叙シ内大臣ニ任ス今日ヨリ公方樣ト稱ス

一六月十九日松平越中守定信老中ニ任シ加判ノ列上座トス定信田安宗武卿ノ第三子也曩ニ松平定邦ノ養子トナリ白川十一万石ヲ領シ良政アリ此命アルニ及ンデ上下相賀ス

米騷動

是年五月十二日大阪町人共蜂起米屋幷物持ノ家ヲ打破ル近國之ニ附テ騷動月末ニ至ル同二十日江戸町人數百人米屋ニ乱入又富商ノ家々ヲ打破ルヿ數十軒ニ及フ官先手頭十隊幷大名ニ命シ人數ヲ出シテ追捕町奉行ニ引渡シ刑ニ處ス廿三日ニ至リ始メテ平ラク騷動凡五日ニ涉ル

六月八日關東郡代伊奈半左衛門ニ命シ之ヲ鎮定セシム小姓組番頭格ニ進ミ攝津守ニ任ス米穀ヲ府内ニ運送シテ飢民ヲ救フ此時米價一兩ニ米一斗八九升也官金二万兩米六万俵ヲ出シテ之ヲ頒付ス

江戸市中人別

江戸市中人別

江戸中町數二千七百七十二町　家主廿万八千五百余人

男五十八万七千八百余人　女六十九万七千五百余人

外ニ盲人三千八百四十余人　僧侶五万三千四百三十人

神主三千五百八十人　山伏七千二百三十人　吉原男女四千五百余人

合計百二十六万七千八百四十余人ナリト云フ

信按ニ幕府ノ世人別調ハ惣シテ男女八歳以上ノ制也而シテ武家一般ハ人別調ナシ若シ男女八歳以下及ヒ在府諸侯旗本上下ノ士其家族且諸藩士從卒在府家族男女若黨中間乃至穢多非人乞食ノ類ヲ加フレハ百五六十万人以上ニモ及ヒシモノト察セラル

七月朔日布衣以上ノ役人ヲ召テ政事悉ク　有德公享保ノ政ニ復スヘキ旨命アリ終リテ松平越中守ヨリ心得之覺書ヲ演達ス

同十七日本多彈正少弼忠籌若年寄ニ任ス松平定信自カラ進ンテ改革ノ事ニ當ル又加納久周ヲ以テ側衆取次トナス世之ヲ寛政ノ三忠臣ト云フ　忠籌人トナリ忠厚樸茂頗ル學識アリ嘗テ渾淆論ヲ著ハシテ文武ノ道ヲ論ス其初メ封ヲ繼ク尤貧困ニ窘シム先自カラ節約シテ以テ士民ヲ率勵シ是ヨリ士民皆風靡節儉ヲ尙ヒ遂ニ富裕ヲ致ス領地定信ノ邑ト相近シ故ニ定信初メニ之ヲ擧ゲテ以テ大政ニ參セシム　以上十五代史

一七月十三日　依差圖　御城へ水野對馬守罷出候處　種姫君樣當冬御入輿に付　殿樣にて御入用相增候處兼て御勝手向御不如意之上去午年不作に而多分御損亡旁に而御願之品有之候に付　種姫君樣へ　殿樣より御手當之儀御勝手向御操合相直り候迄格別之　思召を以今年より三ケ年之內金七千両つゝ御手當可被進旨被　仰出

一九月廿三日從
公方樣上使水野出羽守を以　種姫君樣御事當十一月中御入輿可被爲在旨被　仰出　以上寶鑑

九月減諸士俸祿之半亦以深自責

一九月十一日　御方々樣御定銀今一歩通り當年より來る子年迄六ケ年之間御減

一同月十九日御家中半知之儀左之通被　仰出　以上寶鑑

去る寅年天明二年凶作以後年々不熟に付收納取劣不時御物入も差添去年又々凶作夥敷御高相減百姓共困窮之上當麥作不熟旁に付夥敷弱人御救願出不得止事不時に過分之御出方有之必至と及御差支候故御家中諸渡物御扶持方等も相後れ江戸若山町人共御拂去辰年以來相滯上にも段々御儉約被遊候上之儀に付此上御取續之手段無之趣奉行共申上外に被遊方も無之故御家中知行御切米之內是迄の浮置米御用捨被遊當年より六ヶ年之間一同半知被　仰付候夫に付上ゝ樣にも萬端嚴敷御儉約只今之御出高半減程にて相濟候樣にと被　仰出候事

半知上ヶ米之割合左之通

一知行百五十石御切米六拾石以上一同半知之筈

一右以下小祿之面々は步合御用捨有之筈

一江戸常府常詰一ヶ年詰勢州上方詰共步合御用捨

一知行御切米に准し被下候金銀一同半減之筈

一女中一同步合輕差上米有之筈

一御藥込以下之者共右仝斷

一御家中上米之外諸上納幷若山御貸方澁谷借用寺社方無據借用祠堂金賄下人借諸町人差入借共都而年限之間浮置之筈

一江戸御貸方之儀者知行御切米差入借用之筋は若山御貸方同樣浮置諸渡物差入借用之筋は是迄之通り

御直書を以被　仰出

箇様に勝手成り下り候事我等不德故之儀と後悔不少候得共今に至て致方無之不及是非本行に申聞候通に候間是非當家之立行候様にと我等も猶又いか躰にも嚴敷艱難を凌萬端致省畧當家も立行夫〻身分も取續候様勘辨（一本ニハ艱難）可致候間何れも一等申合艱難を凌万端云々とあり）致し相勤可申候

老中の面々より傳達

半知被　仰出萬事儉約可致迚年若之者等心得違行儀を亂し或は末賤しく成り武士の風儀に違さかり候様之儀無之様近年世上花美に過候故着服等用候儀は往古之風に劣り候品には無之さの儀互に心付人物劣り不申様可致年限之間借金は浮置之筈に付面々借金多き筋は却て勝手繰合安く相成ゆるみに不相成やう且又差入借等浮置に相成候品を以町其外へ彼是無躰之儀等無之様相心得可申旨　以上安明遺事

一九月十一日御勝手御不如意に付御獻上物等御省畧の事公儀へ御達　寶鑑

一天明七未年秋九月十六日御家中半知被仰出候是は御守殿御入輿被爲在大奥向は万事　公儀の御式に准せられ莫大之御物入にて所詮御家の御所務にては被爲凌かたき事を御勘考有ての事也

但し御家の規矩を以て御儉約を被仰立何事も簡畧を御用ひあらんに御遠慮も有間敷事なれとも御守殿へ御對し御不敬にも思召れ且は此御時に當て十八九ヶ所の御方々の御臺所入用有之尋常の御物成にては右之御賄被爲續かたきに依て此両三年凶年饑饉にて御國用不足の義に託せられ

半知被仰出たるとかやその後は朝夕の御膳御湯漬を被召上御常服は木綿衣を御着用にて不斷御身の不德を被仰諸士の難澁百姓の困窮を歎かせ給ふとの說に聞し者慘然として誰も傷みの我身に逼る樣に覺え恐入て面々艱難を凌く志を立たり又在町にて奢かましき事は誰制せされとも自然と恥勵して怠り遠かりしかは被仰出を能守りぬ諸士八馬減少にて奴隷の類の浮者有之を追々御詮議有て悉く部屋人足に被召抱浪牢する者無之世上靜謐にて盜賊の憂なく常に鎭りたる事なし　瑞德記

一天明七未年九月半知被仰出し日一日は御自身にも御半知とて御袷召されて御寒く被遊終日御座被遊御平日とも寒をは御惡み被遊御厚召の所如此く格別之御賢慮と奉存候その後は常の如く御厚召に被爲復候よし鮎は殊の外御好み被遊候得共半知被仰出後はすきと被召上候事御やめ遊され候に付　大納言樣方被進候時は被召上候よし　堀內家記

一御質素にて候得は御勝手御不如意と申事は無之筈候得共　太眞樣大納言樣御初二十八方被爲入候その御方々樣御不自由不被爲在候樣との思召にて格別に御艱難被遊候よし御二十八方樣と申上候は

太眞樣　　中將樣

明脫院樣　菩提心院樣御簾中 愛(チカ)君樣一條道香公妹

永隆院樣　菩提心院樣御實母

靜證院樣　實御姉君友姬樣 細川越中守奥方

遠紹院樣　御妹賢姬君 松平播磨守樣御內室

壽香院樣　菩提心院樣御子睠姬樣 加賀中將重教卿室

清信院樣　太眞院樣御實母

桂香院様　實御姉久姫様　松平相模守室
永昌院様　實御妹藷姫様　松平讃岐守様室
従姫様　菩提心院様御子　尾張宰相様御簾中
亟姫様　大眞様御子　松平相模守室
保姫様　修理大夫様御女　大眞様御養女
智境院様　大惠院様舊御部屋
益之助様　菩提心院様御子　後安[illegible]
左近將監様　御同斷　後修理大夫様
松平民部大輔殿　大慧院様御子　勘解由様事
松平下總守殿　菩提心院様御子　職之丞様御事
懿姫様　大眞院様御子　一條右大臣輝良公御息所

靈光院様　實御妹相姫様　京極上總宮御息所
致姫様　菩提心院様御子　松平越前守室
方(ミチ)姫様　大眞様御子　水戸少將様御簾中
備(ノブ)姫様　大眞様御子
義郎様　左京大夫頼謙様御子
唯之進様　菩提心院様御子後　松平下總守忠知
粂之丞様　御同斷　後阿部播磨守正由
内藤主殿頭様　大慧院様御子　雅之進様御事
内藤山城守殿　菩提心院様御子　鍊之丞様御事
三浦長門守　菩提心院様御子　粂之丞様御事

堀内家筆記

信按るに以上方々様は既に御養子御緣組被遊御方も被爲在て御家に御揃ひ被遊候にはあらざれさもいづれも御里方なれば萬端之御附屬等夥敷御費用なりしならん

赤阪邸修繕成世子移焉

一九月廿七日御中屋敷へ御移徙御普請出來に付而也　實鑑

一種姫君樣（貞恭院樣御事）御入輿に付御守殿御普請の砌御疊七千疊余出來候處若山へ（疊床にて）被仰付江戸廻りに相成候故御國大に潤候由江戸にて不殘被仰付候へは少々御益も有之候得共思召にて如此被仰付候由　續言行錄

御守殿の事は清溪公貞享元年の記に詳なり

一天明六年御婚禮の御大禮行はせらるゝに付赤阪の御舘御造營御上棟有之しが先々の御代かゝる御祝の折には御酒被下候事の有つる例をもてこたひもしか〱執行はやと伺ひ奉りければ其廉ゝよりもよろしく被下はやと仰出されつゝ大夫を初諸有司末々の人々あるひは諸職人車力やうの賤きもの迄も御強飯御酒御肴なと數多たひ給ひて殊に其日は天氣いと清明にて惣計千八百計の人ゝ諷ひかなてつゝ終日御賑ひ中々言語には述かたしと其事しれる人々は今も語り出しき（安明遺事）

是月服部八郎右衛門歿年七十九、自祿百石屢增至千石

去年來天下荐饑、公深憂之、撫恤具至、

天明四辰年の頃ゟ凶作打續米の價踊貴し同六酉年は殊に甚しく關東大に饑饉し翌七未年は東都にては金壹兩に米貳斗を商ひし程也しかは凡壹石の價三百八九十匁にも當候事もありしかは諸國共に困窮し强惡暴戾の徒諸所に蜂起し屋を毀ち倉庫を破却し米錢をまきちらしなとする故商家大に騷しかりしかは和歌山にては富家毀事候者五六ヶ所のよし余國に比ては穩なりし方也此時は東都に御座被遊候所かゝる凶年に候へは東都諸士の月俸にも差支へきを兼て御庭内御藏に御貯へ置せ給ふ御金澁谷の御邸に御座被遊候て御隱居料の御手當に被遊候しを御持被遊候よし

或人申は壹万両也と其世に申せしとなり　伊賀　其比は御藥込と申なり　に被仰付品川沖にて數千石の米を御買揚にて御取寄　その世には三千五百俵と申　の時は困窮甚しき世の中なれば不慮の難も計りかたしとの御事にて米壹駄毎に同心一人つゝ差添させ給ひしと也馬車夥敷八町堀より赤坂邊迄續しかは當時の世上への御聞御家政の勝れさせ給ひし御事東都にも顯然と相知れ候よしそれ故に御家中一人も饑し人なかりしは上の御仁惠深き處の至りと上下感涙仕候事申も中〳〵愚也　皆車にて引しと覺えたり車一輛に同心は二人つゝ附しと覺えぬ途中を警固の同心は暇乞して參りしほどなり　瑞德記

一天明の比は八町堀御藏御廻船の米滯り諸士月俸に差支たる時一日御膳番朝御膳を差上たるに昨日月俸相渡し候哉と御尋被遊いまた差支渡らさる段申上るに其儘御膳御下被遊召上られす依之御勘定奉行大に驚き急に江戸にて米調達して早々諸士へ月俸半月分相渡す此事今に人々申傳ふる所なり　瑞德記

一天明七未年米穀不熟にして　凡一石の價貳百目の内外也世に是を天明の二百目年といふ　國民饑に及ふもの少からず中にも南熊野日高山中なとは府下數十里の外の邊鄙にして事も速には達しかたきを府庫をひらきて賑し給ひ是か爲に一人も餓に惱む者なく分而東都在番の人々の月俸をもしか〳〵渡りかたきを日毎に有司に命し給ふて下さまの者迄も飢をは免かれぬ其比は御惱もいと御苦しけにおはしましゝかと露忘らせ給はすよく下知せさせ給ふとそ或日近侍の人に御意せさせ給ふとの有しに御舌强り給ひ誰にも得聞取奉らて問返し〳〵奉りけれはむざと御手を出させ給ひ空中へ米といふ字を書せ給ふにそ扨は御國より廻米の事を御心に掛けさせ給ふを聽かせ給ふと察し奉りて追々着船仕候由承り候と申上しかは頓て御心身少し打くつろかせ給ふとそ　安明遺事

一先年熊野饑饉の節御救米至らず浦々餓死する者夥し御代官なと御咎を蒙りたると也長嶋の佛光寺といふ一向宗は飢人を救ひし事達御聞熊野觸頭被仰付その後長嶋尾鷲周三見の三ヶ所に御藏建て年々貳百石宛の御救米を被納置候　麟徳記

一足代弘訓翁家集に學問料趣意書云天明年中米穀高直にて銀札一匁に三合半の節紀州領は香嚴院樣名高き御明君にて御救行屆候由　云々

弘訓翁ハ伊勢山田ノ神官ニシテ有名ノ歌學者也紀州領トハ勢州三領ノ事ナルベシ

十一月、諭有司曰、近來幕府振起庶政、一洗舊弊、我藩治宜倣之、汝等善躰盛意、敢勿怠

十一月九日御直書を以て左之通被　仰出

近來公儀御政事向段々御世話有之老中を始諸役人風儀も改り下々一等難有奉存候趣相聞重疊之儀に存候就而は手前政事向之儀も大切の時節に候間猶更入念公邊の御風儀に相隨ひ質素を本とし國民撫育行屆候樣致度候間各申合諸役人共精實心に取計候樣急渡可申談事

但右之儀ハ此度尾州殿水戸殿一同ニ申合相達スル事ニ候條此段可相心得候

老臣も又申傳へたるに

別紙御書付之趣難有思召に候近來儉素簡易の道廢し上下共に華侈に移り多事に成來り夫故御國用も不足致し無據税斂重く相成候上風水凶作等打續き下民次第に困窮に及ひ候に付是迄迚も追々御儉約被仰出下民御救なとも被遊候事には候得共一通りの儀にては中々行屆申間敷候先達て公儀ゟ被仰出候品も有之猶又右御書付之通上にも彌質素御用ひ撫民の儀專一に取斗ひ候樣被遊度との思召に候間以來同席申合別て儉約相守多事を省き下民潤足之儀精誠に取計可申と存候間御役人一等に申合下民を馳〆候爲聊にても御費ヶ間敷儀は相省何分御仁惠の思召行屆候樣可被致候御代官郡奉行之儀は親民之役儀に候へは猶更廉直に而撫恤を本とし勸農の儀相勵苛刻の取扱無之樣專要に候下民潤足不致候ては御國の本も固からす教令も施さ

れ不申事に候間右之處能〻可相心得候凡御政事の無滯行れ候は上下和合により候事に候得は諸向頭支配組下は隨分致一和迯に非を諫善に進め無隔意申合實意に相勸め永く御爲に相成候儀を心掛存寄之品は無遠慮可相達候久々安逸にて華靡候人氣に候得は質素節儉の儀は人々耻候樣に相成有之事に付一際心を勵不申而は古風に立戻り候儀は相成申間敷候間一統能々勘辨致し何分御仁惠の思召行屆候樣に進め候樣可申合候

十一月九日　麟德記附錄

十一月廿七日、世子娶浚明公女種姫婚　實田安悠然公女

一十一月朔日依差圖水野對馬守　御城へ罷出候處種姫君樣來る廿七日　御入輿可被爲在旨被　仰出候段且來る九日　種姫君樣御道具被遣初日極る旨松平越中守被申聞

一同月廿七日辰刻　種姫君樣御出輿御入輿御婚禮被爲整

亞相公御緣組仰出されし時御手熨斗下さるゝ事の有しに御のし臺の御三方誤て前後違へ差上たる人の有しに御無造作に御振替遊しつゝ御のし下されて御規式は事なりぬ此人はやくも其司さ人へ訴へければ皆打驚かれつゝ其夜しもかの司さ人御前に出て言上せんとせしにとく其機を察し給ひ詞の未た發せさるにけふは首尾能く殘るかたなくて限りなく目出度思召すとの御意故御請申上又申上んとせしにまた同し御意なりしかば初て過ちを御覆ひ下さるゝ御事を心付て御前を退きて彼人に告知し倶に感涙に咽しとそ　安明遺事

一十二月十七日松平越中守宅へ御家老呼出しに付水野對馬守罷出候處　有德院樣御代御世話被爲在朝鮮種人參御植させ被遊候處追〻繁茂致し候に付右人參　御三家樣方へも無急度被遣候旨被

申聞

同十九日人參相渡候に付爲御禮翌廿日　御城へ御使者御差出　寶鑑

十二月幕府賜人參

十二月十七日人參御拜領　　但御三家共　寶鑑

松阪之醫本居宣長上秘本玉匣

一十二月秘本玉匣成ヤムゴトナキ命ナリトゾ既ニ著サレタル玉匣ヲ添テ上リヌ　古學小傳

按ニ宣長號ヲ鈴屋ト云フ伊勢國飯高郡松坂ノ人也醫ヲ業トス後加茂眞淵ノ門ニ入リ古學ニ達ス寛政四年十二月被　召出五人扶持ヲ賜フ後十人扶持御針醫格奥詰御廣敷廻リトナル傳別ニ詳ニス

天明八年戊申　　公六十一歲

京都大火

一正月廿九日京都大火　御所及二條城燒失公武邸宅六十五ヶ所寺社千百五十余ヶ所町數三千戶數十八万三千余土藏八千百余燒失

天皇下加茂ニ行幸

松平定信輔佐

一三月四日松平定信ニ萬端輔佐スヘキ旨面命アリ月番ヲ免ス時ニ年三十一　以上十五代史

是歲有病在江戶

一三月五日御所勞爾と不被成御座候に付　公方樣ゟ御内意有之當年御滞府被遊候筈被　仰出　寶鑑

四月五日公方樣御筆之御畫御拜領　寶鑑

熊野伊勢巡撫

是月、命佐野伊左衛門、堀内彥太夫、巡撫伊勢熊野

大澤文左衛門に命じ用度半減せしむ

一四月佐野伊左衛門堀内彦大夫に命し伊勢熊野を巡撫せしめらる堀内彦大夫は此比表御用部屋日記方勤也是ゟ先き屢御前へ被召御内命ありて天明六年長崎勢州白子田丸へ出張同七未年勢州熊野巡回圍籾出來荒救之備へ富國之儀農工商へ說諭御用被命八年十月更に勸農救民荒救交易富國賑撫之御用を被拜命依て百姓敎訓追加農業口號歌遊穀仙方試水論客舍福德記板行各一千部つゝ御領分中民間へ施行す　堀内家舊記

一又大澤文左衛門に内外諸局用度節減擔任を被命

月日不知被　仰出

追々御儉約被仰出公邊御勤向御省畧御家中半知被　仰付諸役所御用向ゟ省御入用半減にて相濟候樣去年被　仰出候得共今以規矩不相立當時之樣子に而は在中次第に及困窮候に付此節御手入之儀甚御急務之處右之御手當無之のみならす不得止事先納等申付候得共猶御入用等御不足に有之候に付去年被　仰出之通彌諸役所御入用半減に而相濟候程に御用向萬端御省可被遊右に付大澤文左衛門儀奥向幷諸役所御用向御省畧之元に成相勤規矩相立御勝手御取直有之樣取斗可仕旨被　仰付候間不限何事文左衛門へ委相談御入用減方取斗可仕との事　月日不明　安明遺事

按するに大澤文左衛門家は維新前五百石にて町奉行勤めし次郎右衛門といへり同人方に嘗　香嚴公より賜りたる御直書ありとて信に示せり

此度大澤文左衛門申聞之趣尤に存候此上猶又我等初末々も相和何分御家之御爲致万事取計可申談事

天明三年十二月十二日

と半切へ御無造作に被遊たる也本記と對照すれば兼々御任用厚く御經濟の事共御相談も被遊たるものなるべし

寛政元年 己酉　　公六十二歳

一三月五日御所勞爾と不被成御座候に付　公方様より御內意有之當年御滯府被遊候筈被　仰出

一四月五日御內々より　公方様御筆之御繪御拜領 以上寶鑑

朝鮮使

閏六月朝鮮信使來聘之儀生民困窮御厭之旨を以て延聘之積彼國へ懸合相濟候旨　公儀觸あり

一七月九日依差圖松平越中守宅へ水野對馬守罷出候處　殿様御勝手御不如意に付　種姫君様御入用向當年迄御手當之儀先達而被　仰出候處猶又別段之　思召を以來戌年より寅年迄五ヶ年之間金六千兩つゝ御守殿へ御入用御手當被進候旨被　仰出

一九月九日御所勞御同邊被成御座候內御痰氣に而少々御不出來之方に被成御座候に付御祈禱被仰付其後早速御全快被遊

一十月廿二日御中屋敷新御舞台出來中將様御慰之御能被　仰付

一同月廿三日御所勞御勝不被遊候に付　中將様御初御方々様御供急觸にて御上屋敷へ被爲入中將様には御上屋敷に御止宿廿六日御歸舘

同廿四日　公邊御達し廿五日御大切被爲及

御逝去

一同月廿六日御養生不被爲叶今曉丑下刻御逝去

十二月十八日に御日取廿三日に替る

一同月廿九日御法號

長保寺に葬る

香巖院殿三品前黄門心齊圓通

一御遺躰之儘紀州江御越尤十一月十一日御遺躰紀州へ御發棺東海道本坂越美濃通御越同廿八日濱中長保寺へ御着棺　以上寶鑑

寛政元酉年の冬に至りては御病ひ次第に重らせられ醫療驗もなく日にそふて頼み少くみえさせ給ふ　公儀之御使はさら也御一門の方々打集ひ給ひて御介抱他事なかりき日ことに御拜領之御品有之中に大人參を進せられけるか日あらずして用ひつくさせ給ひけれは同じ品なるを撰み求めて奉りけるに高價なる由聞し召れつゝ宣せ給ふやうは御家御相續の爲にこそ越させ給へ御國用不足の折からかゝる高價なる品は御服し給ふましとて更に用ひさせ給はさりけれは近く侍ふ人々とかく諫奉れとも敢て聞かせ給はさりけるに彦坂儀左衛門御側近く寄り奉りて召給はすは恐なから御口へ込み奉るへしと思ひ入て申上しに尤とや思召けん打默頭かせ給ひて御心よけに聞し召し給ひしとそ　安明遺事

一麹町の御舘にて御逝去被遊御遺命により儒家の殯禮を用ひさせらる　瑞德記

十月廿六日、病薨於江戸麹町邸之正寢、遺命曰、窀穸之事、宜務從節儉、十一月歸葬於濱中長保寺、謚香巖公、治十五年、公性至孝謹儉、三德兼備、夙夜勤勞政務、風化大行、公同時肥後侯細川重賢、以美政顯世、稱紀州麒麟肥後鳳凰

肥後侯重賢殿 公の御外甥也 にもいみしくましますと聞え有て紀州に麒麟肥後に鳳凰なと申囃らせし又狂詩狂歌なとにて先君の美德を稱譽せしも多かりし　麟德記附錄

今の世に過たるものが二ツあり紀州に麒麟肥後に鳳凰　（麟德記）

信曰く宦麥の事節儉に從ふへしと御遺命との事口碑に傳ふる所なるか親しく長保寺廟の御寶塔を拜し奉るに御先世に比して稍短少御質素なるにてさこそと察し奉られぬ

野史德川公族列傳、公ノ事ヲ記ス

治貞每朝餐限一菜、餐以爆鼓鹽韲而已、雖嚴寒不褥、日夜悉心於國家事（翁草）襲封之初、從屋形、未修典禮、謂老臣曰、國事必有逗滯矣、可得而聞、又曰、凡饗膳之禮、各有家則、自今而後、唯藜飡乃足、而饌器皆依舊莫改焉、一日召見儒某、某見治貞弄烟管、意以爲銀、惟問、對曰、鐵也、我持弄殆十有七年、日夕琢磨瑩出、所以守儉也（手錄雜話 泳監草）居常召士格以上子弟、講書聽之、以下命儒士四人、相代講讀、時召細井德民、聞講讀、初在西條、邑民請納定額租加二分、治貞曰、定額之外、必莫歛取、邑民之志、亦不可奪、乃准社倉法、以賑給民（翁草）治貞、慈仁愛衆、一自徙感恩澤、日夜織馬履于厩中、欲獻以酬德、以請之奉行、奉行以聞、治貞愛其志、領可之、試問履價、答曰分一爲十、自取八、其二與牙人、治貞曰、今盡收之渠必窮、宜須畀其半焉、居恒用棉被褉、或老諫之、治貞曰、我非吝、欲養性也（三省錄 引耳袋）或曰蓄人馬、設器仗、勸職業者、莫如守約、守約在節己身、和歌浦有鹽屋甚右衛門者、嗜和歌、召乞添削 甚右謹曰「阿麻比止乃登之返天安差留、加比那禮也、可可類多未母遠、加都幾彌年登波」固辭、治貞強請、猶辭、殊詠歌一首而去（翁草）治貞、書童子訓以致誡、略曰、人之道在忠孝、古聖賢敎訓千萬、皆本忠孝、起居動靜、莫遺君父之恩德、仕君者、莫求媚、正脩其身、勤其職、事親令安其意、以爲要、兄弟迭盡良悌之道、莫失信於明友、夫婦和合、一家之治本、叫莫去婦、以禮義與明友交、失禮義則無信、莫説人之嫌忌、莫説上、莫謗

友、莫侮愚、莫輕人、短慮傷身、莫問人秘事、莫求人愛物、苟莫違約、年弱少時、迷理非、從父兄之言、不陷不義、好詩文莫遺忠孝、謙受益、學文莫誇能、厭世莫躁忠孝、言多則過身、人得財寶感其恩、受諫不憶其恩、諫乃以爲寶、學武伎勿求超人、臨機死者以義故也、衆人會愼多言、不意而過、以不可爲耻、以讓人爲耻、莫欲遁勞、背義取辱、迭番交代、莫後於人、刀劍椎常用心、臨期莫取敗辱、居室衣服、以輕爲主、守節儉、畜兵馬、能耐不足、以爲儉約、主一家者、不可不知金穀數、莫以強弱判斷理非、不論善惡、而中理爲是、諸事莫耽娛、知害善防、事成而無悔、莫耽逸豫、避人嫌疑、莫強辨明事、能惠下民、期而代者、必有辭、有不意之幸、則有不意之禍、勤忠孝、如有閒則翫餘事、必莫驕奢、居常嗜旅裝、好問故老、求莫損愛敬、常見人善惡、以爲我鏡、歌曰、「與乃那可能、比登乃預之安之幾久堂毘耳、和歌美乃宇遍耳加返里彌與可志」（コノナカノヒトノヨシアシキクタビニワガミノウヘニカヘリミヨカシ）曰、童子讀以呂波者記之、成長而後、雖一事、能行者、愚老之至幸也 翁草引 童子訓

右は唯一班を記したるに止まるものと雖も　公の明德は既に世に喧傳せられ感歎止まさりし狀を示さんと爰に附記す

南紀德川史卷之十五

香巖公第二

附錄

上田章撰

以仁爲本

一香巖公之、出嗣西條智性公（頼邑公）後也、大慧公謂公曰、頼邑之在職、常臥病、庶政不擧、今汝承其後、蓋甚難矣、不知、將何以治之、公拜曰、惶恐、他未思及、唯欲仁以撫之、因陳施爲之畧、大慧公聞之曰、誠如汝言、後謂有司曰、曩予問玄蕃（公幼稱玄蕃頭）以西條國政之事、其所論井然有章、智識之高、非予所能及、渠非我子、贊嘆不已、既立、興廢繼絕、一以仁爲本、闔藩翕然悚息（上田章撰以下漢文皆同）

榎阪則清登用

節儉ヲ重ンズ

一公之嗣西條侯也、庶政解弛、國用缺乏、於是首擧榎坂則清（稱五郎左衛門）謀制國用、務崇節儉、在職二十余年、所儲十余萬金、而智性公之奉養、無少所儉、公厩所繫、常有廿餘匹　公之爲庶公子、榎坂則清爲傅、輔導具至、常患公偏武、勸以文事、於是、禮聘紀平洲、師事之、及出嗣西條侯、請則清自從、信任不疑、則清亦知而莫不言、公嘗燕居、則清侍、公從容語曰、凡爲國主者、以其國爲私有、故驕肆之念生、唯其驕肆所以虐百姓也　今以其國爲天朝幕府所托、則毫不得私之、欲不節儉安可得哉、而世或以徒實倉廩爲節儉、豈不過乎、則清曰、然、所以崇節儉者、欲足軍國之用也、夫不虐百姓、又欲足軍國之用、非崇節儉安可得乎、君臣講治大率此類

則清ヲ悼ム

一榎坂則清　開七帙壽筵、公臨其家祝之、飲酒而樂、賦詩曰、今春亭上宴、豈樂在杯中　遙指芙蓉峻、何若老子功、及則清歿、深悼惜之、每逢忌日、必齋以報其恩、爲表其墓曰、榎坂銅嶽子墓、且題其碑陰曰、温恭其

容、敬愼其儀、外於動勞、內於扶持、我民以勸、我邑以資、上下之利、知無不爲、十有五年、予與衆知、七十有六、奈命之期、雖子云亡、尙有其規、貞石勒銘、永斯思之、其任遇優顯如是、與則淸同用事者有佐藤專助、江川又作、岡甚左衛門等、皆一時之選云

西條ノ民公ヲ慕フ

一公初就封、駕抵山口驛（在和歌山城北二里）驛外有人、六七十爲群、其狀如乞丐、皆持念珠、望駕、啼泣拜伏、左右怪問、則西條之民也、曰仁君承宗國、鄙情不勝戀慕、故遠來拜送、左右以白、公憐其淳樸、慰勞遣之

公ノ恭謙口新沼愼終論

一安永五年、公任權中納言、恭謙益至、咏歌自戒曰、乃保留登茂、阿登奈和須禮曾、久良以居滿、古々路波加里波、茂登乃不茂登爾、肯命園中池曰、日新沼、作之銘曰、以余之不德、未臨國民、是以戰々兢々、如臨深淵、如履薄氷、夫成湯之聖、尙鑑沐浴槃以驚焉、況如余行往坐臥、不可不戒愼也、每臨階前淸池、思以洗滌汚心、因名曰日新沼、冀日鑒以警之、又嘗作愼終論一篇、以自警、其惕厲老而不衰（按池在麹町邸云）

瑞祥ト治道

一安永六年、封內豐熟、苗有團結如苞者（俗呼曰苗俵）衆以爲瑞、呈而視之、公曰豐熟如是、何福加焉、予將欲益勉勵、全其幸福、汝等宜體我意、因作書戒之曰、昔殷王帝辛時、有雀生大鳥於城隅、占之曰、凡以小生大、國則必王而名益昌、於是、帝辛介雀之德、不脩國政、凶暴無極、朝臣無救、外寇乃至、殷國以亡、此即以己逆天時、詭福反爲禍者也、又先世殷王大戊時、道缺法圯、以致夭孽、桑穀生于朝、七日大拱、占之曰桑穀野木、不合生朝、意者國亡乎、大戊恐駭、側身修行、思先王之道、明養民之方、三年之後、遠方慕義、重譯者十有六國、此即以己逆天時、得禍爲福者也、故天災地妖、所以儆人主也、寤夢徵怪、所以儆人臣也、災妖不勝善政、寤夢不勝善行、能知是者、至治之極也、是歲、又鶴巢於武藏游獵地生子、世以爲嘉政之效

服裝ヲ咎ム

一公初就封、旣入城、執政朝比奈惣左衛門進謁、公首謂曰、今日出迎者、衣服皆極美麗、不知平日如是乎、惣

左衛門曰、今日以公初就封、特脩飾、平素皆樸、乃如臣等、亦服棉矣、公喜曰、可哉、汝圖國具贍、卒先守儉、實爲急要、雖予在國、亦當服棉耳、於是衆相傳崇節儉

一伎アル者ヲ稱揚ス

一名一伎者、必詳其伎所至、及其爲人、每出謁、輙大聲、呼其名於稠人中、以稱揚其伎、嘗視試撿大島氏槍法、渡邊作左衛門上場、指揮諸子弟、公謂左右曰、彼作左衛門、自菩提心公時、以雲五郎高弟、敎授衆子弟、其練磨亦久哉、作左衛門喜其平素勤苦不徒、終身感佩之

文珠重國

一文珠四郎重國、以善冶聞、南龍公時、献其鍛刀於幕府、幕府賜内書賞之、以爲不愧干將鏌鎁、公賜其書於重國、使傳子孫、以爲文珠氏之榮、後有故家除、其書返納於官、及公襲職、思其名家、問其後、有平助者、乃再召而祿之、命倣重國鍛數刀、使上之

訪佐野陰山墓

一公嘗游北山、訪佐野陰山墓、思其高風、詠曰、太津爾幾天、無加志遠登閉波、以和賀爾乃、滿津波阿良志乃、遠登波加里志天、遂過直川村、入農作大夫家、公知其好歌咏出前所咏、正之、作大夫曰、以君訪臣、太津爾幾天詞、恐過謙、改作滿和里幾夫、如何、公曰善、既出、謂左右曰、訪賢者遺跡、豈挾人君哉、作大夫不知予意也、

洒落

一公嘗在江戸邸、一日彷徨後園、遂入馬埒、會馭人井出正矩（三右衛門）調馬、留步觀之、因曰、予亦欲試調焉、請借汝袴、正矩脱而上之、公着之、馳驅數回、曰年老體弱、不能復如少壯時、既入還袴、因賜平日所服外套、附歌一首曰、遠波加滿仁、曾閉氏津加和須、不留波遠里、志良美波乃志乃、加和里登曾見與、其洒落往々如是、

長馬術

一公最善馭馬、其名自顯四方、及就封、思有德公遺事、命牧馬於友島（在海部郡）常使諸士試强弱於遠郊、北抵

境驛、東抵橋本驛、南抵日高郡、十餘里外、故諸士爭勇奮勵、善馭者前後輩出

獵加太 一公每游獵、命率諸子弟、馳驅奔走、以習險阻艱難、任其所獲自取之、於是衆奔競爭進、嘗獵加太浦三山、鷲谷與五郎(勘定奉行武大夫子)與大猪遇、重傷遂死、公深憫之、後過鷲谷氏、召見武大夫、弔且慰之、家人感泣道其哀情、

高野山民騷動 一安永五年、高野山管下之民、苦其暴歛、所在蜂起、悉毀村吏家屋及寺院、僧侶患之、來請救於藩、公乃命鄉士十餘人鎭之、頑兒不能制、乃書檄揭之、示衆曰、紀公有命、達汝輩所請、宜退俟命、於是衆相謂曰、紀公之命、豈可違哉、恐悚而退

諭郡令 一高野山蜂起既平、公召服部八郎右衛門曰、以予觀之、今歲之凶、天之所以奉護國家也、天爲民父母、熟喜凶歲、然人主由以戒愼、不亦善乎、今也高野蜂起雖既平矣、未可恃以懈也、汝其思之、一日又偏諭郡令曰、汝等不可唯思所以不負上、宜以不負民爲念耳、

高野寺ノ鐘 一公嘗在吹上別館、聞鐘聲曰、此殺伐之聲、不知何寺鐘、左右答曰、高野寺、公命運而撿之、有銘乃楠正成軍中所用、因詰其所由、初在河內觀心寺、後轉在高野寺管下友淵村某寺、福田某取附之高野寺云、公曰、予聞掛軍鐘、五穀不熟、國家疲弊、何用斯不祥之物爲、乃收之官庫、更鑄鐘供寺、衆服其聽

乞丐痴六ノコト 一安永八年、公患痲痺、久而不愈、士民患之、農商廢業、請禱社寺者、晝夜不絕、既而稍愈、試步郊外、時有乞丐痴六者、獨與母居、以孝聞、常服弊禮服、以竹杖擬刀、貫椀爲鍔、以帶之、終日彷徨市中、偶與公相過、乃避拜路傍、大聲呼曰、仁君病愈乎、其喜見于言面、左右驚叱、公問其狀、憫之命市吏救助、以終母子身

事務簡捷 一公之執節儉、自謂省費、在省事、省事、在勵精、於是、每晨以卯臨廳、裁決庶務、以申罷、故事無凝滯、及其無事、使有司早退、無拱手俟定時者、如凡有罪者、可罰罰之、可宥宥之、速裁遣之、故囹圄無永留者、守者

自閑暇、爲省諸空費者許多云

歸國漂流民ヲ諭ス

一安永八年、日高郡、御坊村、舟子十余人、將漕橘於江戶、船抵遠江洋遇颶、漂至淸國、土人憐之、撫恤具至、偶其一人病死、土人爲厚營其葬、天明二年、土人護送抵長崎、幕府召至江戶、詰問其狀、以其爲我國民、召邸吏附之、時公在邸、召見、問其風土人情、慰勞遣歸、因作書諭之曰、汝等雖遇艱難、以彼國人之恩、得全其命歸鄕里、幸亦甚矣、顧今之歸、父母兄弟得相見、其喜如何哉、抑彼死者之父母兄弟見汝等相歡、思亡者不歸、其悲哀之情、當益切、夫鳥獸猶知戀友、況於人乎、今汝等歸、當先爲死者修冥福、視其父母兄弟、如己父母兄弟、厚撫恤之勿怠、且又告汝等、曩也淸國人尤廷玉者、漂至熊野遂病死、其墓在周參見浦、今汝等倚其國人恩、得全命而歸、且死者之墓、彼當爲供香火、汝等、亦宜爲尤廷玉訪其墓、厚供香火、以報其恩矣、訓戒懇篤、衆皆流涕而退、

國産愛用

一有田郡、山保田莊、寺原村、寬文中、南龍公所命開墾也、地之敎種、製楮爲產、稱爲保田紙、公嘗聞其物粗而質淨、命左右進之、以充常用、一日或白、保田紙甚粗、上國所輸入、有價廉而物美者、請進之、公顰蹙曰、否用國內所產、國主之本志、雖十倍其價可也、終用保田紙、後及貞恭夫人（田安宗武公女、幕府養以嫁於我世子）來嫁、大修後宮、新造茵席十千枚、公故命國工製之、以漕江戶邸、衆皆戴其恩意、

園八幡宮瓢踊

一日高郡、園浦、地瘠土饒、船舶輻輳、人烟繁衍、有豐富之象、土人崇祀八幡宮、每歲、以八月祀之、其式、村吏率群子弟、各手提一瓢蹈舞、謳歌四恩之義、名曰戲瓢踊、其所由傳遠、初南龍公南巡、觀此歌舞、謂有古之遺風、深稱美之、後百餘年、世變風移、人情趨華舊俗漸荒、公就封之初、訪舊俗於草野得之、亦謂其謠詞有關於名敎、宜獎訓之、乃譯四恩之義、手書以賜、於是每歲祭日、村長齋戒捧讀、使群子弟聽之、永

以爲例、俗稱其文、曰四恩帖 四恩、謂天地之恩、父母之恩、國王之恩、衆生之恩

出內帑購米

一天明中荐饑、群盜蜂起、所在騷然、公務鎮撫衆情、使無離散之憂、時公在江戸邸、思諸士俸米闕乏、會某國米漕入品海、公出內帑若干金、購三千五百苞、以運赤坂邸、車馬陸續、後先相接、世皆羨嘆之、

熊野殖產

一熊野之爲地、高山四出、絕少平田、歲少歉、民乃病饑、公憂之、置倉於長島尾鷲木本周參見諸邑、每歲貯米二百石、以備凶荒、民因以安、公又思木棉黃櫨得地宜、勸誘殖之、其產之益盛、實公之德澤云

田沼意次ノ政ヲ排ス

一當公之時、幕府執政田沼意次、專權極崇奢侈、府庫缺乏、掊克爲政、巧利之說競起、終令海內、徧收戸稅、名曰融通金、公深憂之、屢與尾水二公謀、欲論爭止之、曰縱令幕府允之、吾輩可默止哉、因進其議、幕府遂令廢之、自此意次漸失威權、寬政一新之源、兆於此云、

半俸ノ令

一天明七年、國用缺乏、命減諸士俸祿之半、公憂微祿者或挫志以傷士風、命父兄長者、深諭之曰、近來舉世驕侈、凡衣服飲食、以今較古、有過而無不及、然則今卑宮室、惡衣服、固無愧於古也、宜益尙其志以勵義、勿使陷鄙劣焉、

薩侯ヲ抑フ

一薩侯重豪 號榮翁 假戚姻之權、頗張威福、密結時相田沼意次、意次將推以抗三親藩、因有內旨、謀之三親藩、公固執不可、以故事終不諧、蓋薩侯之豪橫、獨公能抑制之、至於世作童謠以稱之、

崇節儉

一公自在西條時、與宇和島侯村候交善、一日侯問治家國之要、公曰、崇節儉禁奢侈爲要、而崇節儉禁奢侈之要、自夫婦相和始、侯敬服、

厚奉養

一公之在職、終身以攝位自居、上事觀自在公孝、下撫舜恭公慈、雖自執節儉、所以奉二公者、務優渥之、貞恭夫人之來嫁、其禮極盛美、有司皆怪不似公素論、當時諸公子及夫人所係累者、凡二十餘人、皆厚其奉

養、無所不至云、

有至性

一公深崇信有德公、凡行事、一以有德公爲模範、平生最尊 王室敬幕府、與群臣語、事及 王室幕府、必改容正坐、每逢父祖忌日、雖風雨必親展墓、其事善修夫人愉惋、出至性、夫人嘗病、公聽政之餘、左右侍養、晝夜不懈、公又深憫西條廢世子賴雄公、受寃而終、常訪其墓、香火之奠、極腆、

與民偕樂

一公之爲庶公子、自號輝樓、及入承統、刻印曰、與民偕樂、平生所服膺、不出斯四字、故平生自奉、極儉薄、視民如傷、天明中、歲頻饑、公綏撫具至、衆賴以安、

從才能用之

一公嘗曰、全人難得、各從其能而用之、無有弃材也、取其善而長之、惡自消也、故其用人、各從其才能、至如少年技藝、亦各從其性所近而使學之、賴央公 公庶弟稱織部正 嘗謂公曰、公於群臣、誰爲愛、某則愛某々也、公曰、某則謂皆可愛無一所選、賴央公慙服、

任賢良

一當公之時、數馬渡邊親綱、庄左衛門山高信興、半兵衛菅沼政職、大隅守加納政明等、皆一時之選也、公善信任之、初公首召服部八郎右衛門、專制國用、因命喜多村孫之丞、關口六郎、大澤文左衛門、協戮執事、八郎右衛門、自大慧公時、爲司農、純精奉公、在職三十餘年、以故信任特深云、

栗生源五左衛門剛直

一栗生源五左衛門、性剛直、厚於武備、公擧爲槍奉行、先是拜槍奉行者、新舊遷除、皆以簿書相授受、不點撿其器數及損壞、源五左衛門、既拜斯命、將親點檢受之、舊官以前例諭之、源五左衛門曰、此治世弊習、不可傚、校其數於簿書、每一條手演之、以檢損壞而後受之、以敎居治不忘亂、嘗在江戸、一日自外歸、將渡兩國橋、有人留之曰、橋上有醉人提白刄立、欲要行人擊之、宜枉道避之、源五左衛門自謂、今枉路避焉、人見將曰、彼怯夫爲醉人所追而亡、可愧、因思一策、使其僕大呼而先走、己爲追之者、怒眼撫刀叱咤追之

若林養元、公ニ對フ

山本惟恭輔導ス

公自ラ南海詩集ヲ校ス

水戸夷齊廟記ヲ作ル

曰、惡漢奴可使逸哉、其狀不可當、醉人反畏避橋側、又嘗與僚友有違言激甚、將鬪、衆和解之、僚友亦卑辭請和、源五左衛門固執不聽、公聞之、乃召侍談、命陳甲觀之、從容謂曰、我若有擐斯甲而出、將請汝命矣、源五左衛門、謹諾既而退、私鬪之念頓消、和以自成、衆服公機智、源五左衛門晚號霜巖、以其合髮而白也、寬政九年七月歿、年七十六、

一若林養元、以老醫侍、公以其出入諸士之門、常問曰、某々爲如何人、養元輒答曰、好人物、一日公謂曰、予常問諸士爲人、汝輒以爲善、百千群中、豈無一惡乎、養元曰、然、臣心有以爲善、亦有以爲惡、抑臣輩所養一二僕隷、猶有所愛憎、縱令臣自憎之若爲他人所指斥、豈快於心哉、闔藩諸士、無貴賤無善惡、一皆公臣、今以臣微賤指斥之、公必不喜也、臣不敢焉、若夫知善惡以白之、自有其職、非臣所知、公悅、

一當公之時、文學則有伊藤才藏、坂井好古、祇園尚濂、山本惟恭、鳴澤敎秀等、射則有太田松之助、小川爲之丞、西川新左衛門、杉原九郎右衛門、岡見久左衛門、神谷八十郎、坂部三十郎、片山幸之助等、砲則有勝野甚之進、新幾右衛門等、游泳則有窪田善之丞等、獨山本惟恭、以學識入政府、參豫樞機、尤被寵信、惟恭亦盡心輔導、有所助公德云、

一公雖尚武、亦愛文雅、桑山嗣粲以善畫聞、公一日觀菊於和歌浦雲蓋院、從祇園尚濂、山本惟恭、鳴澤敎秀、及嗣粲等、各從其能奏技以爲樂、祇園南海詩名高天下、其集未刻、公命刻之、其前編五卷、公手校正之

一公又好探名勝遺址、以表章之、命儒臣爲之記文、以傳不朽、水戸義公、嘗營伯夷叔齊祠、彫其像祭之、後遭回祿爲烏有、文公欲修之繼義公遺志、謀彫工於公、公賞其篤志、乃命小笠原一齋彫之、因自撰記文幷贈之、

五愼敎書童子訓ヲ作ル

一公之嗣西條侯也、選於諸公子、請賴謙公爲嗣、賴謙公賢明好學、一奉公遺法、勵精圖治、西條藩政益振起、稱爲二世香巖公、及入承統、立舜恭公爲世子、慈愛深厚、然敎之嚴正、常戒其傅以輔導之方、自作五愼敎書及童子訓、賜之、

按に右漢文記事中高野寺鐘の事績風土記伊都郡鳥淵村の條に記する所あり曰く
鳥淵村地藏寺に古き半鐘あり銘に河内國立間寺とあり里人傳へいふ楠氏淸川村の城にありし時の陣鐘なりとそ安永年間若山覺樹院より所望にて新らしき半鐘及ひ大般若經一部と交易す　公家の隱覺樹院と隣る　香巖公其鐘聲を聞かせ給ひ此鐘は國を利せすと仰玉ひて他國に販かしむ今轉して京都本願寺にありと云
又續言行錄には　此鐘元は高野領中友淵村の古寺に年久敷有之たる所福田儀左衛門内々にて求め高野寺へ納めしと也響長くして殊の外古鐘のよし御吟味の節色々致し磨きしかは漸く銘あらはれしと也南朝の楠正成和州金剛山に釣置たる北朝調伏の鐘のよし其鐘を埋させられし所は常形山の奥仙人ケ谷と申所にて鐘塚と銘し碑石被仰付しと也
如斯あれは漢文の記事は全く續言行錄によりしならん然れとも鐘の所在及ひ由來は續風土記の方正確なるか如し友淵は鳥淵の誤傳亦知るへし

愼終論

御自作

聖賢之所以爲聖賢者、豈唯以其資性之美而已哉、蓋其進修之功、自幼而弱、而壯、而艾、以至耋老之極、漸次張皇、日就月將、以能致洋々之盛、成蕩々之大云爾、孔子之爲大聖、亦以其自十有五以至七十、進修之功、日新不已也、非以其生知安行之故也、生知安行也者、人之所稱聖人耳、聖人豈以生知安行自居乎哉、夫人性之易移、譬諸素絲之可玄可黄、衢塗之可西可東、故其所好所習、不可不擇也、所好善、則善進善、不善無由而入焉、所好不善、則不善進不善、善亦無由而入焉、至其習于善之久、則雖堯舜不遠矣、至其習于不善之久、則雖桀紂亦不遠矣、夫堯舜之與桀紂、其相懸、何啻千萬里、然其分則善不善

之間而已矣、何謂堯舜之善、何謂桀紂之不善、舜稱堯曰、稽于衆、舍己從人、不虐無告、不廢困窮、孔子稱舜曰、好問而好察邇言、隱惡而揚善、取其兩端、用其中於民、是堯舜之善也、史策謂、紂智足以拒諫、辯足以飾非、負其才力、以爲天下諸侯皆出己下、是桀紂之不善也、有國家者、苟能效堯舜之善、去桀紂之不善、孜々然自強不息、則其所至、何可限量哉、夫爲善如登、爲惡如降、而人心之難得正、操則存、捨則亡、出入無時、莫知其鄉、日夜乾々惕厲、猶恐其或放失、而況自滿自安、而無戒愼之念、其駸駸然陷于非僻、不待頃矣、故古人貴日新而戒自滿、就勉強而止宴安、書曰德日新、萬邦惟懷、志自滿、九族乃離、左傳曰、宴安酖毒不可懷也、夫自滿自安者中廢之端、而損危之基也、不可不戒也、書曰愼終于始、詩曰、莫不有始、鮮克有終、是非有始之難、克有終之難也、遽伯玉、年五十而知四十九年之非、孔子七十而從心所欲不踰矩、伯玉君子也、然五十以前猶不免有非、孔子大聖也、然七十以前、從心所欲、猶有踰矩者、君子聖人猶然、況其下焉者乎、唯其知非而能改、制欲而不踰矩、是其所以爲君子聖人也、有終之難其如是夫、蓋少壯之時志銳氣盛、故勉強爲善欲及古人、至聲譽得、而年齒躋則自滿自安之心生、自滿自安之心生、然後怠傲逸豫、莫所不至、所以中廢而不終、職此之由、可不愼歟、馬援曰、老當益壯、老者血氣已衰、故不可不自勵如此也、故進而不已、則常人可以至聖域、怠而不勉、則雖聰明之人、猶或左乃陷於非僻、書曰、惟聖罔念作狂、惟狂克念作聖、夫狂之作聖、固可以爲美、而聖之作狂、不亦可惜可恐之甚乎、禹[本ノマヽ]戒舜曰、無若丹朱惟慢遊、是好傲虐、是爲舜之至聖、不爲丹朱之惡、彰々然明矣、而禹之戒之、以此者何也、以人心之難存、而居崇高之位者、最有此患也、昔我

神祖、嘗謂本多佐州曰、凡貴賤上下、莫能自知其過、然在下位者、有朋友儕輩相與告導、知過而改之、是下

位之益也、在上位者己無朋友儕輩、所與交接者、特其臣從左右耳、彼皆唯唯順諛、莫之敢違、政雖有過、而無由知之、不知則亦不改、是上位之損也、自古以來、富貴者、喪國亡家、皆以不聞其過以遂其非也、故、正言己惡者、最所宜親重也、至哉 聖主之言也、爲人主者之所當敬奉也、是故周公相成王、敎之以先王之道、而欲其克勤而有終、於是作無逸之篇曰、自時厥後、立王生則逸、不知稼穡之艱難、不聞小人之勞、惟耽樂之從、自時厥後、亦罔或克壽、文王徽柔懿恭、懷保小民、惠鮮鰥寡、自朝至于日中昃、不遑暇食、用咸和萬民、不敢盤于遊田、以庶邦惟正之供、厥享國五十年、嗚呼繼自今、嗣王則其無淫于觀于逸于遊于田、以万民惟正之供、無皇曰今日耽樂、乃非民攸訓、非天攸若、周公之戒成王豈不切乎、是爲人主者之所當佩服也、衛武公、年數九十有五矣、猶箴儆於國曰、自卿以下、至於師長士、苟在朝者、無謂我老耄而舍我、必恭格於朝以訓道我、在輿有旅賁之規、位宁有官師之典、倚几有誦訓之諫、居寢有暬御之箴、臨事有瞽史之道、宴居有師工之誦、史不失書、矇不失誦、以訓御之、於是乎作懿戒以自儆也、及其沒也、謂之叡聖武公、如武公者、可謂有始有終矣、是爲人主者之所當則傚也、唐魏徵謂太宗曰、陛下貞觀之初恐人不諫、常導之使言、中間悅而從之、今則勉强從之、而犹有難色、太宗曰非公不能及此、人苦不自知耳、以是觀之、雖太宗之賢、猶有不克終之漸、非魏徵之直言豈能保其大寳邪、如玄宗憲宗、厥初非不煥然美也、如其不克終何哉、其他王公善始而不善終者、和漢古今不遑枚擧、欲不愼得乎、後世人主誠能奉、

神祖之聖言、服周公之懿訓、則武公之 、以太 宗爲自省、以二宗爲鑒戒、遵禮法正言行崇節儉、止奢侈勤政務戒宴安、行恭謙謝盈滿、禁聲色御嗜欲、親忠直遠佞邪、恤民隱修國經、加之以敬愼、重之以勉强、

安而不忘危、存而不忘亡、襄然終始如一、則庶乎日就月將、而爲堯舜之主矣、耶中老尼妙修向見水戸侯、水戸侯稱我嗣子曰、夙慧如此、苟階是而進、莫以尚之、然吾憂其中廢也、妙修曰願殿下、當先自憂其中廢耳、妙修之意以爲、我嗣子尚幼、而　水戸侯已長　水戸侯進修成德、則我嗣子亦効而進修、是我嗣子之師也、最不可自中廢也、故其戒之如是、夫　水戸侯之憂我嗣子固切矣、而妙修之戒　水戸侯實忠直之至也、宗范純仁曰、人雖至愚、責人則明、雖有聰明、恕己則昏、但常以責人之心責己、恕己之心恕人、不患不到聖賢之地位也、妙修之言亦同一意、舜好問而察邇言、如妙修之言、尤不可不察也、因敷暢其意、以作此論、以自儆焉爾

五愼教解　御自著

一物に凝り泥むべからさる事

凡物にこりなつむ事はよろしからさる事なりそろこりなつむ處よりはいろ／＼無益なる好み事乃心にうかむ事なり世の中れ事は悉く自身のおもふ樣計りは恥らぬものといふ事を忘らす我儘氣隨になるものなり人の制する事なければ意念妄りに成也身て身の惡を改むへき事なり

一諫言をいふ者を嫌ふ可からさる事

今日氣に合者まづは自身の氣に合たる事をいふ故に悅はしく思はるゝなり誰とても自身の惡き事をいふはうるさき樣に思ふものなりたとへ氣に合はさる者の言にても自身の爲を思ふていれゝ用ゆへき事なり機嫌を取ものには親み諫をいふ者をはいやになる事人の君たるものは第一に愼むへき儀也

一美服を好むへからさる事
大名たる者はたとへ平日美服を身にまとひたれはとて分限なれは格別の奢といふにてもなく咎むるものもなけれとも人の君たるもの華美を好めは下たるもの是を見習過分の奢り好み終には制禁も立かたき様になるもの也美麗は國君たるものゝせましき儀也
一厚味を嗜む可からさる事
夫飲食は生を養ふものなれ共貴人たるものは精進乃外は朝夕魚肉厚味に飽く事なれは終には病をも生す人は厚味より疏食の身に宜き事古今長壽なるもの下賤に多くあるなり美食を嗜まさるが生を養ふ専愼なり
一藝能にほこるへからさる事
大名の藝術は臣下より學ひ受くる事なれは少々惡くても能様に稱美して朋友同志の互に責め咎むる様には憚ていはぬものなり此所をも心得へき事也

童子訓

御自著

人間一生の勤は忠孝の道なり聖賢千萬言の敎へも忠孝乃爲なるへし忠孝を勤んと思はゝ主君幷先祖父母の恩を常に忘るへからす恩を知らさるものは不慮の災難に逢もの也と古人宣ひし也恩を報せんと思ふ志深ければ忠孝の務油斷有るへからす人間の苦みは飢寒より甚きはなし百姓町人なとの晝夜を不分骨を折も飢寒をまぬかれん爲なり家職に油斷すれは飢寒に及ふもの多し士は生れながらに苦なく父母妻子兄弟を養ひ家頼を仕ひ安樂に暮すは主君幷先祖父母の恩德にあ

らすや此恩を常に思はゝ忠孝の勤め怠るべき樣なし古老の物語に毎日食に向ひ衣服を着るとき主君幷先祖の恩德を思ふへき事なりと宣へり誠に有難辭なり

一主君へ奉公を勤るは唯厚恩を報する爲なりと心得へし必立身の爲と思ふへからす立身の爲に奉公するものは吾心のことく儘ならさる時は主君を恨み傍輩を誹りいふましき事をも言ふ故に主君の心にも背き朋友にも見限られて惡名をとり身を亡すもの多き事也主君の恩を報せん爲に務るものはいつ迄も立身せぬとても少も不足の心なく人を恨むる事もなく自ら天道に叶ひて身を全く心も安かるへし誰も知りたる事なれとも年若き者なとは能覺悟すへき事也

一奉公を勤るものは誰も主君の氣に入度と思ふなれとも道理を不辨一概に氣に入度と思へはいふましき事を言ひなすましきをなし終には主君の心に背き朋友にも見限らるゝ事多し只我一分の役目を能つとめ身の行儀を正敷して物事に差出さる實の奉公なるへし

一親に孝を盡す其致へ品々ある事なれとも畢竟する所は親の心の安睹する樣に身を守る事肝要なるへし此心持は子を持て後知る事なり父母の子を思ふ心はたとへていふへき樣なし子の身として大かたに思ふへからす

一父母の安睹する樣にと思はゝ奉公のつとめ惡事をなさす惡き事には不変身の養生を能して食多くせす酒を多く飲す只諸事に愼み心を忘るへからす

一忠孝の心なけれは文道も武道も非道となるへし

一兄は弟を子の如く憐み弟は兄を親の如く敬ふへし

朋友の交は心に叶はぬ事あれは遠さかるも習なれとも兄弟の間は心に叶はぬ事あれはとて疎く成へき事にあらす不快の事ありとも互に堪忍して誠を盡すへし父母への孝行之に過へからす親類の交りも之に同しかるへし

一夫婦の間少しの事より起りて不和になる事は互に堪忍の心薄き故なり婦人は道德にくらきものなれは心長く教訓して夫婦の道破るへからす夫婦の不和なれは家治らす孝の道にも背く可し

一妻を離別する事人倫の大變なり妻の行跡惡く妻方の親類も見限り家を敗る程の事あらは離別しても苦しからす左もなくて吾心に叶はぬ計りにて離別するは非義の至り也

一朋友の交りは遠慮の心を忘れ無禮の仕方あれは親しき交りも疎遠になり不慮の難も有るものなり禮儀正しく詞慇懃に愼み深き人には先方よりも無禮せぬ故にいつまても交り替らす不慮の難もなかるへし喧嘩口論は無禮より起るもの也

一吾爲を思うて實に異見する人を大切に思うて親しむへし惡事を進る友あらは何となく遠さかるへし

一朋友の難を見て見捨へからす吾力に及ふへき程の事ならは隨分肝煎すへし

一朋友の心を能察して人の嫌ふ事を不可言一座の興に人の嫌ふ事なと言て口論に及ふ事昔よりあることなり愼むへし

一上の事を批判すへからす朋友の事誹るへからす愚なるものを侮るへからす賤きものを輕んすへからす人をあなとり輕んして不覺を取る事昔より有る事なり能々愼むへし

一短慮なれは事を仕損し身を敗る事多し短氣なる人に交るは別て心遣ひすへし吾生れ付短氣形りと知らは隨分堪忍の心を持て戒め愼むへし短氣は大かた己か吾儘より出るものなり

一人の隱密なる事を見聞へからす人の秘藏するものを所望すへからす

一假初にも約束せし事を變すへからす何事にても成間敷と思ふ事をは卒爾に約束すへからす

一年若き時は一旦之事に迷ひ理非の辨へもなく是非吾心の如くにせんと思ふ事あるものなり其時父母兄弟親類朋友の異見によりて吾非を知り正道に歸るもあり又情强く一向異見を用ひすして惡名を取もあり身を亡すもあり是一生の吉凶の境目にて尤大切なり誠に一旦の迷ひによりて主君父母の恩を忘れ一家の名を汚すは非義の至りなり能々覺悟すへし

一財寶を貰うて其志を感すれとも異見の恩を思ふもの少し一言の異見によりて一生の身の爲になる事あれは異見の恩を大方に思ふへからす

一武藝を習ふ事器用不器用ある事なれは必しも上手にならんとにはあらす武士の家業なれは務めすして叶はぬ事と思ふへし師匠幷相弟子の事を誹謗すへからす

一義より重きはなし死すへき時に臨んて一足も引す一命を捨るは義を思ふ故なり必勝負に拘るへからす只可死義に當て死するは武士の勤なり義に背きては勝ても勝にあらす義に當れは負ても負にあらす

一學問して人々の身の程を知りて謙るへき事なるに左は形くして高慢になるは程を不知ゆゑなり

一學問して心高慢に成世間の事をいとひ隱者の風儀を好むものありけたかき樣なれとも眞の道に

あらす世事をいとへは自ら忠孝のつとめ疎になる事也

一僞りをいはぬとは思へとも辯多けれは思はぬ相違もあるものなれは常々言葉少く可有事也大勢寄合し所抔にては猶以辭を愼むへし

一不慮の仕損しは能き人の上にも可有事なれは恥辱にあらす吾仕損しを人の仕損になすは大なる恥辱なり人の仕損を吾身に引受るは一段見事也

一難儀なる事も遁れんとすれは義理に背き不覺の名をとる事あり難儀を吾身に引受んと思はゝ義理に叶ひ心も稱美せらるへし

一役儀を勤むる事にても苦勞なる事をは人にさせて仕安き事をわかせんと思ふへからす

一出仕又は番代り等に出るも人により半時早く出て半時遲く歸らんと思ふへし此心遣ひ諸事に可有なり歌に

早けれは待つ事あれと身は安しおそくていそく道そくるしき

一刀脇差の刄を試みこみを拂ふ事油斷すへからす古老の言傳へに持槍の鞘〆りて急事の間に合かたき事あり常に油斷すへからす

一屋宅諸道具衣類等分限より少しかるきはよし分限よりすきたるは不宜

一分限相應に人馬を持武具を用意し役儀の勤めをかくましきと思はゝ美麗を不好無用の費をなさす常に儉約を守るへし儉約の仕方は只我身の不自由を堪忍して足る事を知るにあり事たれはたるに任せて事たらすたらて事たる身こそ安けれ

一家を治るものは金銀米穀の事知らて叶はぬ事なり一向に不知かよしといふはひが事なり勿論金銀米穀の事のみ心掛て世の誹謗人の苦を省みぬは大きなる非義なり

一諸事を思案するに我爲よからぬかあしからぬかと思案すへからす只義理に常る當らぬと思案すへし

一諸事をなすに此儀は如何あらんと心元なく思ふことは念を入吟味して人の了簡を問故に大かた仕損しなし始より十分よしと思ふ事は油斷ある故に仕損し多きものなりと古老の物語なり誠に思ひあたる事多し

一面白しと思ふ事は度重ねぬ様に覺悟すへし

一何事を成す共先其事を考へて害にならぬ様に取掛るへし能害を知りて防けは其事成就して後悔なし

一人の疑を得んと思ふ事はなさぬかよし人に問れて言譯せんと思ふ程の事は大このたなさぬかよきなり

一不慮の譽れあれは不慮の災ありと言事は輕き事にもあり格別下直なる物を買て後難儀する事何方にも多し是にても思ひ知るへしと語りし

一忠孝の道を勤めて暇ある時は何にても害にならぬ事を翫ひて心を慰むへし世の誹り人の苦みを不顧して吾心の儘に興をなすは惡名をとり家を敗る基也

一常に旅の用意すれは急事の時手をつかぬものなり

一旅宿へ着ては先其家の案内を能見置へし案内知らては急事の時難義するものなり

一諸役所を勤めたる功者なる人大事の役を勤たる人には常に近付てその話を聞置くへし

一昔數度戰場に出て武功の名高き老人あり若き人々武功の物語りを所望せしに老人答曰某差たる武功なし若き時より天性愛敬ありて人に能思はれし故に少しの働をも言はやされて人に知られたるなり人は只愛敬あるかよしと語りしと也誠に殊勝なる物語なり

一古老の曰義は重く命は輕しと思はゝ何事も轉動はあるへからす

一覺束なしと思ふ事は隨分人に問ふへし不知事を知りたる顏をすへからす

一家來を使ふ事律義を本とす能は次なり大方に事を堪忍して心永く言敎へて病氣をも憐み難義をも救ふ事下を惠むの道なり無理なる事を言て呵るへからす人使ひ惡き家は能きものは奉公に出ぬものなり兼々能覺悟すへき事なり

一新參の下人惡き事あらは其輕き內暇を出すへし少しの費をおもふへからす或曰下人を置候目利あり方々一季宛奉公して廻るものは曲者と知るへし

一吾氣に入らぬものゝ言事をは能事をも惡く聞なし吾氣に入たるものゝ言事は惡き事をも能聞なすものなり是は誰も知りたる事なれとも其時に至りては迷ふ事多し能々覺悟すへし

一世上の風說人より先に不可言落書の類取はやすへからす

一世上の善惡を見て吾身の鑑とすへし是第一の學問也或歌に

世の中のよしあしことを聞くたひに吾身のうへに立かへり見よ

鏡山人の志賀から崎見えてわか身の上にかへりみつうみ
伏おかむ神のやし路は月なれや心の水のすめはうつれる
曉のねさめにせめてこへり見よ日々に三度は省みすとも
人はたゝ心一つの悪けれはよろつの藝のあるこひもなし
安永七戊八月

御言行錄

夙英捷悟

一賴淳樣御幼年乃砌或時御庭へ御遊ひに被爲入候折節御庭掃除之者松の一枝を持居て悲歎する事甚しく春千代樣乃御入にも不構打歎き居たり御近習の人々口々に制せしを聞召なに言そ何とやらん子細あらん承れと御意ありしかはその故を尋候へは彼者の申けるは私今朝御園の御掃除仕候て誤りて孝三郞樣の御秘藏被遊候松の一枝を折りたり此事御聽に達しなは如何なる御咎めにもや逢候はんと其段悲しく候と泣々申上けれは不便に思召けるにやよし〳〵此春千代が助け遣すへしとの御意にてその一枝を御取被遊孝三郞樣の御部屋へ被爲入扨々春千代こそ不調法仕り候なり誤りて其許樣御秘藏有之よしの松か枝を如此折候何分御免し被遊候へと被仰候故御念入せられしとの趣にて事相濟候となりそのものは申に及はず承り傳へたる者は袂をぬらし奉感しとなり　續言行錄

一春千代様と申奉りし御時　大惠院様御庭御茶屋に御座被遊急に御使にて御方々様を御招き被遊しに方々様御急き御出故御附々の衆混雜して御はきものを忘れたる故に御庭口にて狼狽遲滯す春千代様には最初より御獨御はき物を御懷中被爲在しかは直に御庭へ御下り被遊候となり　瑞德記

一御緣家御女儀様御所勞の砌御見舞として純帳の代りに紗綾にて帳二張被仰付出來申候上箱に純子にあらねは純帳とも難調只紗綾帳と認申も聞えあしく色々認めかた評定致し候得共一決不仕思召伺候へは夫は紗綾の帳との字を書せ候へとの御意被遊候御頓智を何れも感じ奉り候　續言行錄 此一條は西條藩にての御事

一御參覲御道中中仙道或御連枝様方御領分某の地にて御馳走役人罷出し或人御披露に松平何の守殿御使者と誤りて申上しを御駕籠の内より御直に夫は様にては無きかと御意なり御披露人奉恐入候と申上候へは只御笑にて事濟けり　瑞德記

按に御連枝様方は御兩敬にて様と唱へ可申筋なれば也

至　孝

一御孝道到て厚く被成御座候御膳の節に珍敷品と思召候類は必善修院様へ御取分被進候御奥へ被爲入候初度はいつにても御袴被爲召候御白衣にて入らせられ候儀者邂逅の御事に御座候　續言行錄附錄

一御相續 西條御家也 の砌は乍恐　大惠院様の御計ひにて賴邑様へ未御若年なるに 御隱居二十二の御時也 御隱居御願はせ御二男の賴淳様へ御家御相續有りたる事と御家中上下賴邑様の御事を御痛ましく申けるに賴淳様賴邑様へ御仕へ方　大惠院様に御仕へ遊はされたるに少しも替らせられす御孝心を盡させらるゝ御事言語に述かたき程の御事故終には賴邑様能き御養子成されしとて上下賴淳様へ

感服し奉りしとなり　續言行錄

頼邑侯ヲ崇ブ

一栗原宋軒（愛久澤直成ノ實父也）は頼邑様御二歳之時より御藥差上甚御懇意乃もの或時頼淳様の召に依て出候へは其方日々御下屋敷（頼邑様御居屋敷）へ罷出大儀に候得共時々此方へも罷出監物様（頼邑様御事實曆三年八月御改名）御様子申上候様被遊度旨被　仰付宋軒畏り翌日罷出監物様と申出候と暫し相待候へとの御事に御袴召御袍を御はなれ御様子御伺被遊候夫より後はいつとても右之通りに遊はされしか宋軒段々申上後には御袴は召されす候へ共御袴を下させられ候事は御同様にて有之しとなり都て近習にて御親兄弟様方の御咄し申上候得は自然と御座を正させられ候故後には人々その心得致す事に相成候となり　續言行錄

好質素

一御相續以來御下屋敷様を第一に被爲重御勤厚く被成御座候御定銀被進候得共一躰御下屋敷御臺所向萬端御手當等御手前は次に被爲成候御事に御座候不用之器物いさゝかも御望み不被遊華麗なる儀曾て不被爲好質素を第一に被遊候御事

一御母堂乃御勤め少しも御怠慢不被遊候御配膳毎月御忌日御自身被爲盡御丁寧の御事に御座候一躰僧侶等の取扱は御心に不被爲叶不實なる儀と思召され候御様子に被成御座候由

二日御精進前日暮合より御當日夜明まて就中十七日の御精進は格別に重く被爲愼候餘准之

盡孝養

一寶曆九年卯初秋之比善修院様御不例に被成御座候尤輕き御痢疾に被爲入候由右之節公之御孝養誠に可申上様も無き御事に被成御座候御平生は御表勝に被爲在候處朝となく御目覺被遊候哉否奥へ被爲入御機嫌を御伺被成夫より御表へ出御御髮等相濟候と御袴被爲召奥へ被爲入夫より晝過迄之内に御老臣共と御用御政事を被爲談直に御病間へ御詰被爲成候就中御病躰御勝れ不被成節は四五

日之間は夜中も御詰被爲遊候親病見色容不盛との聖語自然の御容子可奉仰事に御座候平生は御戯も被爲遊候處右御介抱の内は自然御愼被成御座候實に下々乃鑑と可仕御事也　續言行錄附錄

一義郎樣（雅樂頭賴看樣御事賴寶樣御嫡子なり）御誕生（寶暦五年三月七日）遊はされしかは殊の外御寵愛にて誠の御孫と申とも難相成厚き御事乃よし初て御庭の三社へ御參詣の御時御内證より御庭通り御參詣也其節御家中拾五歳以下の子供を以て親の格式に隨ひ御供に御立被遊御自身御行列の御世話被遊殊の外御機嫌にて御樂しみ被遊候と也　續言行錄

一明和年中より要門傳の兵談御聞被遊候第二席目講釋申上候中祖を祭る事は天の郊祀に達すとある處を是は親先祖を祭るには存生の好嫌をはなれ正しく天を祭る如く祭るとの義なれは講釋畢て後御意遊され候は　菩提心院樣の御事は甚法華宗御嫌ひ被遊候故に御位牌御安置も不被遊候上野眞如院へ御頼み置かれしか唯今の一段道理適當と思召候間則不日に御位牌御堂へ安置可申との御事にて此時御堂へ御移し被遊候　續言行錄

一監物樣熱海へ御湯治（明和九辰年十月也天明元丑年御卒去五十一歳也或人申は御病氣は萬事潔からす思召候て自然と御勤向も御懈怠に成られしと也智性院殿と申すなり）御發駕の砌御見送りとして賴淳樣御下屋敷へ御入あり賴邑樣御用相勤候江川又作（忠菊後隨道と號す）を召久々御對顔不被遊候何卒御對顔被遊度思召候御病氣の御容子も御承知なされ候へは御目通り計りにて宜く候間其段能く取計らひ候へと御意故申上候へは賴邑樣御承知にて御發駕の節御對顔あり御世話に候と御挨拶あつて直に御發駕なり賴淳樣殊之外御喜悦の御容子にて又作を召今日は久々にて御對顔被進御大慶御本懷の事に思召候併けしからす御年よらせられ候とて御淚を浮めさせられ候御容子その節御供に

先代ノ儀例ヲ重ンズ

清溪公廟ニ牡丹ノ像ヲ置ク

罷越候人々いつれも見奉り御孝心の程感歎仕候　續言行錄　以上西條藩御治政中

一惣て御政事向は勿論萬事の伺事に御先代ヶ樣〱申儀を以て申上候へは何事もその通り〱とのみ被　仰出聊思召不被　仰出候故後には御家老初め御先代の儀は不申上伺候へは夫々に思召被仰出その御跡にては　御先代の儀は猶相伺候樣御意被遊候よし　太眞院樣重倫公樣乃御事は尚以御重んじ被遊聊の儀にても御伺の上御取扱被遊候由　續言行錄

一公儀御精進日は不及申御家父樣方御精進日御實母樣御精進日等には夫々に隨ひ御精進御潔齋被遊假初の御咄にも不仁不義の沙汰御愼み被遊候御堂の出家なとの儀も出世僧を御さし置被遊候ては當人さのみ難有とも存不申時により不行跡の振舞も有之哉抔の噂も御聞被遊候哉老人或は廢人なとにて御扶持切米を難有と奉存候僧を御差置可被遊との御事なり佛信心には心得違のあるもの也能々可心得事なりと常々御咄し被遊候よし　堀内家筆記

一安永六丁酉年の正月　和歌雲蓋院

清溪公の御靈屋へ牡丹花を作れる銅の角盆を御奉納被遊是は　清溪公には甚た牡丹を愛せられ斗南紅十分白といへる牡丹を御求め遊されむとして御手に入かねしを御遺憾に思召されしよし有德公大統御繼承の後右之種子御穿鑿御手に入しかは雲蓋院に御種させ開花ことには採て　御靈前へ薦させ給ひしが後遂に其根株も絶え果たりと聞召ての御事也と右銅盆の外面に御銘文を刻ましめ給ふ曰

昔者

淸溪公甚愛牡丹、聞有名斗南紅十分白者、求之不能得、深以爲憾、及　有德廟入承大位、得其種大喜、乃　命種之雲蓋院、每及開花、使採以薦　廟、後其種絕云、我常聞此事、益信　有德廟之孝于親也、其事死竭思、而悲其種絕、鑄銅象花、置之於　廟、以存其遺愛、備記其事、以尙使後嗣、無忘　有德廟孝敬之至于斯云爾

安永六年丁酉春正月　　源　治　貞　置

右紀伊國續風土記による

仁　愛

一公御性質寛仁大度に被爲入いさゝかも小事に御執滯不被遊儉約を專一に被爲守毫末も御奢侈乃御事不被遊御座萬端御言行御無造作にして隨分無我なる御樣子に被成御座候

一平日御側向相勤候者共を假初にも御呵被遊候と申儀毛頭無之不調法なる者を御導き被遊召つかはれ聊も人の迷惑かゝり候儀を甚御痛み被遊或は御供先御先番等にて參り候者不案內にて有之筋も甚勤め安く奉存候よし誠に御仁心厚く被爲入候

一被爲怒候儀毛頭無御座候御不興之御顏色曾無御座勿論御中屋敷へ被爲入候節より誰も一向不奉見上候よし是にて御胸中の寛洪なる事奉恐察候

一御相續の砌西條家ヲ御他出被遊方々御勤被遊候節御途中より雨おひたゝしく降り御供の面々も頭上より濡て甚難儀仕候程の儀に御座候御歸舘の上於御玄關皆の者共今日天氣惡く大儀にて有之しと

御意ありしに付諸士列外御手廻り迄各難有平伏仕候よし御駕之者壹人大きに聲を上候て御請申上候にも余り難有奉存御受申上候者と相聞え上にも甚笑はせられ被爲入候後御目付方にて吟味有之候處餘り難有奉存候に付不覺御受申上候段憚り不少事故先追込相慎ませ失禮之趣申上候へは被爲聞右之段致吟味申出候段は尤に思召候併下の儀何の辨も無之難有存候聲を出し候は心底の實意顯るゝ所なり咎には不及旨被仰出その後御内々にて律義なる奴との思召にて御金被下置候右之者如何なる御咎めにも難被計恐入罷在候處却御金頂戴仕候故命を拾ひ候やうに難有奉存候由承り候者落涙仕候程の儀に御座候御仁厚のしからしむる處君としては仁に止ると言へる主意に被爲叶候御事と奉恐稱候　以上言行錄附錄

保坂金右衛門ノ失念

一或日御夜食に蕎麥可被召上との御事にて保坂金右衛門へ被仰付けるに外之御用に取紛れ失念し私宅に歸りて存出しけるに最早暮過に及ければ大に驚き早速罷出老女松尾に逢ひて右之樣子物語り御召上り物を失念仕御間を欠き候段何共恐入候旨申候へは先伺ひ可申とて良有て松尾申けるは申上候へは夫は明晩の事也との御意にて只今御膳を被仰付候間明晩と御心得候へと申けるゆゑ偏に私の不調法御宥恕被遊候御事にて如此被仰出候にて可有之猶以恐入奉存候段申上給候へと申ければ右之通り厚き思召にて被仰出候へは左樣申上候は却而宜しかるまし只〻以來の處御心得候へと松尾申に付無是非罷歸休息所にて人々へも吹聽し落涙に及ひしかは皆々感に堪て共に落涙に反びしとなり　續言行錄

家中病人御尋ネ

一御近習向は勿論惣て御藩中にて重き病人有之趣聞召候へは御手前の者へ毎々御尋被遊候御例なと

夜番ノ柏子木ヲ打タル

にてくさめなと致し候音有之候と誰成そ風邪なるやなと御尋被遊候事極て有之候右之如く御家中を御勤り被遊候故自然と各勤労を忘れ相勤候故大方皆勤の御賞美不蒙者もなき様に成しと也寶暦九卯年の比惣て御家中重き病人八足躰に至る迄御醫師相附致療治候節五節句　御目見其外御禮事等に罷出候儀右病用に相掛候筋は罷出候に不及尤其節斷にも不及唯病人を大切に仕候様にと御意有て御醫師共の被仰出候となり　續言行錄

一御近習番野本要御櫛番勤めし節御庭へ被爲入候て梅林乃邊御歩行乃處鵯の巢に小き木の葉懸りしか御髮へ掛りければ何共不申上御髮へ掛りたる鵯の巢を取て差上ける御供にありける何某その致し方を廉忽とや思ひけん苦々敷顏にて白眼付しを御覽して野本に御向ひ何と御櫛番といふ者は難有者こな我等天窓へ案内なしに手をさしても点の打手も有まひなと御意有ければ何某只以後を心得候へと申して止しとなり

一或夜御座所を御ぬけ出御一人御屋敷内を御通り被成候節夜番の者拍子木を打參候に付矢張人足共の躰に御もてなし被遊候これ〳〵番衆拍子木を打て廻り可遣候間其元は休まれ候へと被仰候處番の者は御前とは夢にも志らす左候はゝ賴度候乍去大切の役儀に候間拍子木の數も打違ひ候ては惡く御門〳〵にて聲掛候儀も拔候ては惡く候間賴み候儀難相成と申候へは夫はケ様〳〵かと被仰候に付夫程心得居り候はゝ能く候間賴み候旨申候て拍子木を渡しければ夫より御自身拍子木を御打被成御屋敷中御廻被成翌日に至り御役人共を召被仰付候者拍子木打夜番廻りの者は殊の外大儀なる役にて風雨寒氣を凌き勤め候事に候間自今は被下物相增遣候樣にと被仰付候に付毎月貳百文宛

相増被下候也　堀内家筆記

一寶暦五亥年乃頃御目付稽古馬望候はゝ可被下候間寄合伺可申哉乍併被下難儀に存候而者如何に候と其段無遠慮申上候樣との御事之旨被仰出けれは御目付殊乃外難有事に奉存候て御禮申上候得者御機嫌に而相澤と申御馬被下候　續言行錄

一寶暦九卯秋芝高輪東海寺の邊へ御遠乘に被爲入候其節新町の橋普請有之候に付御下屋敷より岡部內膳殿下屋敷脇を御步行被遊候小道にて草深く除道も無之處也然る處壹丁程向へ佐藤專助御下屋敷へ番に出候樣子にて參り掛候を早速御覽被遊向へ見え候は專助と見ゆるそ眼惡き樣に覺ゆるそ誰そ來候て早く御出をしらせ候へ困り候との御意に付早速手明を遣し候處畠の中へ除き御時宜仕相濟候是等の儀聊なる事に候得共御仁心の厚きより御心も付人の過無之樣にとの御賢慮難有御事也　續言行錄附錄

一同十辰年足輕御中間人足の內御咎めにて豫州へ遣され候者追登せ候故大方は立退たまく豫州へ參るものは乞食同樣之有樣にて候事御聽に達し以來右躰之者有之節は路銀被下候樣にとの御事にて少々つゝ金子被下候事に相成候　續言行錄

一寶暦年中御登城御他出等にて御手間被爲入候時は勤番者なとの難儀を思召候てや諸士分迄も以來割籠可被下との御事にて何れも難有存罷在候然るに御臺所より仕出し候わりこ殊の外粗末にて何れも頂戴仕兼その儘打捨候事なとありけるにいかゝしてかその事御聽に達しけるにより御臺所御吟味之有御叱り被仰出候て割籠宜く相成候其後上野へ御參詣夫より湯嶋圓滿寺へ被爲入御湯漬被

割籠下サル

召上何れもへ割籠被下置候其節其方共へ被下の辨當は宜敷相成候哉と御尋の時何某餘程宜くは相成候得共未給かたく候旨申上候へは暫有て其方共の辨當御前へ持出し給可申との仰にて何も持出給候處に御羹〆なと被下置その割籠是へ爲見候へとの御事にて入御覽候處都て戰場にては赤米さへ給候事也若輩なるもの共には能稽古なり是程の米ならは上にも可被召上と御笑被遊けるゆゑ初申上候者は殊の外難儀仕候との事いつれも承り傳へ上下割籠の事一言も申者無之候　續言行錄

岡田小八郎小者ノコト

一或夏の比御老中へ御出の節（井伊侯の邸脇也とそ）急に夕立頻に降來り御供中夫々雨具に下り候節中小姓岡田小八郎御供明候事故下り候事も不相成延引せしをその小者雨具を持て主人の側へ來り指出す小八郎驚き推參者御供先也下り候へと頻に聲を掛漸く下り申候此事御目障りの程恐入御途中にて御目付へ達し罷歸り候故組頭より頭へ相達しけれは頭右之段申上伺候へは御機嫌能御意にてされはその事にて候小八郎事元より不調法聊も無之候小者は御供先を不辨出候處は輕きものゝ無是非所にて主人を大切に存し下り候を待兼候て持來り候と有れはいとやさしき志の者なり曾て目障りには無之候間其段可申聞候又小者へは巳來御供先へは不參事と呵り不申篤と合点致させ候樣にとの御事にて事故なく相濟候とそ　續言行錄

一御中小姓何某は手癖之惡き風說有りしか御役人よりも申上彼是御評議の上又江川又作へも糺し方被仰付彌世評の如くなりしかは御在所へ被遣しか豫州へ參りし上御在所を立退しなりその節の御意に何某事立退候段申來御安心被遊候不屆千万外之爲にも候間表立仕置可申付存候へ共一通りの越度と違ひ至て下輩なる品に候へは親兄弟親類までも面皮を穢し候事故其者共へ對し立退せ候方

と思召豫州へ被遣候由　續言行錄

御庭ノ狐

一御庭內へ學舘を御建あるへき思召にて地面之儀そこ爰と御見立被遊候處三社の裏手（いちこ谷と云）に可然地面有之と聞召御自身被爲入候得共草木生茂りて難相分有けれは御庭かたの者へ被仰付拾間四方計りも草刈らせ候樣被仰付置御座所へ被爲入候その日は甚三郎罷出候御定日にて甚三郎を被召出彼學舘乃建かた御尋被遊夫より詩經古傳（德氏の著述）乃講釋御聞被遊候ひしに御庭口の方より赤き小犬と覺敷物御沓脫の石乃上に來りて蹲踞り居て御顏を守り詰罷在講釋終り御庭のかたを御覽被遊候へは狐は皈りぬ甚三郎退し跡にて只今踏石の上に狐の有つるを誰そ見たるやと御尋乃時坂西利左衞門見候段申上不審に奉存候と申上候へは暫く御考被遊御意被遊けるは扨は今日草刈候へと申付つる所は狐の穴あるへけれ急ぎ見に遣し若左樣の事あらは草刈り候事は先見合せ候へ折角訴訟に出候にと被仰けれは御伽坊主雲花彼所へ行見けれは大なる穴三ッ四ッ有けるゆゑ草刈候事差留歸り右之段申上候へは左こそ有べきと御意被遊候　續言行錄　以上西條藩御政治中

御給仕ノ罪ヲ赦ス

一或日御膳の時御給仕之何某不斗不潔の事ありて折といひ痛く恐れつゝ頓て司人へ斯と告て再ひ御前に出る事の叶ひかたくこそ覺え候所詮腹仕相果候はん久しく御親しみを蒙り御座近く召遣れ候者乃責ての御慈悲には家名の事は如何にも御不便を加させ給ふやうに御詫を願ひ候と打しをれつゝ申ければ其司人先彼人をは指置御前に出てその事聞え上け奉りけれは笑はせ給ひ小さき事を申者哉呼び候へと仰らるゝ程に俱に御前に伺候しけれは先にはおかしい事のと被仰近く寄候へとてそこに有し御菓子とらせ給ひ御手自給りければ此人恐る〳〵退きてやゝ打泣て居しとぞ　安明遺事

一東叡山御豫參被遊御宿坊より御直垂被爲召候節御下〆の御紐御用に候處御挾箱に御入組無之色々尋さかし候得とも不相見その段申上候處御刀の御下緒を御取り被遊御下〆に御用ひ被遊候歸御の上榎阪五郎左衛門此段承り候に付以之外奥之番を呵り猶亦相伺候處御意には品により供奉御勤被遊候御事欠に相成候樣成事も難計思召候今日乃儀者御間に合候ゆゑ御咎不遊候得共自今念入候樣篤と申聞候樣にと御意被遊内々にて取扱候樣との御事にて奥の番へ此旨申聞御仁慈に候間猶以大切に存候樣五郎左衛門申聞候處恐入罷在右奥之番御前へ罷出候而御咄之節五郎左衛門申聞候趣恐入候段申上候へは御意には今日五郎左衛門かその方を目をむいてきめ付たが尤之事なり其方の不念にて大切の公邊の勤を欠くへき處なりしか今日は下ヶ緒が用を達してくれたる故漸勤は濟たれ共代りに勤てくれての無ひものを忘れた時は勤を引より外はなし五郎左衛門か申通り能々愼み候へと被仰候なり　堀内家筆記

一江戸に而出火之節早拍子木打候へは一統罷出夫々役所へ相詰守り候筈之處外宅之者は早拍子木打候事不存して不得罷出者も有之外宅は自分の勝手にて御長屋内に不居事故出不申者御咎有之候處思召には外宅之者共心底には早速駈付申度儀に可存候得共不存して遲り咎に逢候儀は仲間共乃申合不行屆故不調法人出來候仲間合熟と仕篤と申合候樣にと被仰出候その後に遲參之者無之御慈悲なる思召を難有奉存候となり　同上

一安明遺事曰御鷹野或は御延氣なとにて郊外へ御成乃折には大竹の丈余なるに御酒盈るはかりに入させ給ひて持せ給ひ上にも被召給ひ御供の末々迄も盡るを限りに飲せられしとそ

一ある日矢作りあたり御逍遙しけるか人の往來も常に替りて物賑しけれは如何なる事そと御尋有しに戯場の候てその打はやしの音又見に集ひ候ものに候と申上しかは御近習の人々に向はせ給ひて常々は物堅う打くつろく事も候はすいさけふは往て見て參り候へとて頭取の人々に打連させ給ひてそこより御暇給りしとそ東都御在府の御時は 上野 淺草 兩國のあたりへは延氣の爲にいつも〱遣されし

田沼家祖先ノ墓

一御老中田沼主殿頭意次朝臣はその祖 有徳院樣に扈従し奉りて御旗本となりし家也されはその家祖代々の墳墓は城西金龍寺に有り先祖代々の祭祀の爲に泉州乃領地の内にて永代祠堂金を寄附す家臣某と申者しば〱その寺に參て香花をそなへ法會を執行ふ當時主殿頭は御委任甚しくその心に遣ふものなし萬事乃成否は只その人に在か如くに世には申せし也しかれ共上には深き思召被爲在候哉一向に御構ひなし寺僧より奉行所へ達し出たる事何事も御取上なかりしその後田沼家は御役御免にて府内の諸士の緣有る者は義絶の御沙汰有たれとも菩提所の義は御沙汰なし今に墳墓の恙なきは御明智乃御徳蔭によるものならずや

方 正 謹 愼

一或日御園へ御出有しに急に御用出來て御座所へ御急きの所折節柵門の錠〆りありて御近習の内常々砲術稽古所を拜借願ひて右柵門往來の都合宜きゆゑ折々〆りの有し時は内々にて外より手を差延て錠をあけ出入せし事もありしかは右之癖や出たりけん御側の何某何心なく御〆りをあけ可申

四戰記聞ヲ讀マシム

候間是より被爲入候へとて外より柵門の御〆りを明け候へはいや〳〵と計りの御意にて御書院口へ御廻り御座所へ入せられ候爰にて何某心付以の外迷惑し恐入罷在候得共何の御咎めも出不申彌恐入しと也その外にも承りて曾て法外の事は相止候　續言行錄

一四戰記聞を江川忠薺所持の事御聞ありて御出させ御覧あり亦御本家の闕權平（田宮流の達人にて折々出る也）家に傳る四戰の繪圖を献せしを御取出し御扣へ被遊御袴召させられ見臺を御出させ江川忠隆に讀候へと被仰忠隆未弱年の比なれは此容躰に恐入何卒見臺御免の事願ひ候へは御笑被遊いや〳〵是は其方への時宜にはあらず書物が重きはとの御事にて御見臺にて二冊許り讀候内委く圖に御引合せ被遊中々讀手なりと御意有り長き事ゆゑ代り候へとの御事にて伊達代右衞門へ被仰付四冊の書物一時に御聞被遊御機嫌よかりしとなり　同上

一伊豫宇和島の城主伊達遠江守殿には甚武備厚き御方故に御懇意にて折々御出會被遊候御饗應には必武術を被仰付深更迄も御入有し也或日遠江守殿へ御招請にて御出あり其日の御饗應は近習の面々に井上流の砲術を申付られし也近習の人より御供の人へ申せしは砲術御鍛錬の御人あるへし御慰みに御打候樣にと遠江守殿被申候　香嚴院樣にも其思召に被成御座候旨申けれは御供中申合一向斷に及ひ御歸り之節御途中にて御目付を召され今日御出懸けにあの方にて鐵砲を打候樣に申とも不出方可然と可被仰出處御失念被遊候あの方にて鐵砲打てとは不申哉御尋故御目付爾〻の趣申上候へは夫者至極の事也出て打候て不出來にては殘念なり能く出來ては先を潰すといふ者也追而手前にて打せ見れはよきとの御意也とぞ　續言行錄

一今出川家の御娘御迎ひ被成（寶曆五年御婚姻 安永二年御卒去）その後御奥樣御卒去被成候に付御繼室の事御本家より被仰進候得共再三御辭退故或御方より京都公家衆より御娘を御撰み御呼下御卿に被進候得共不日に御暇被遣京都へ御返し有しと云　瑞德記

婦女ヲ近ケズ

一寬雞院樣御遠行以後御實子樣も不被爲在候に付御召仕女御抱可然由監物樣思召にて容儀能女貳人被進候處兼而より御辭退の上押て被進候事ゆゑ無據處御斷も難被成候に付右女貳人は別室を御建させ右之小座敷へ爲住置折々御慰みに被爲入候然共御用は無之その上御庭抔へ御出の節は御近習男交りの中へも御召連被成若男共弓馬力業御覽被成候節なとには彼女共に被仰候は昔巴山吹なといふ女は義仲の愛妾靜なといふ女は義經の愛妾にて女なからも功名をもしたるものなり汝等も定めて心志は彼におとるまし此石あけて見よあの弓射て見よ此馬乘て見よと被仰候て色々御こまらせ被成候に付追々御暇相願得不相勤候に付願之通御暇被遣その後は御召仕も無之候　堀内家筆記

按に安明遺事には夫人御逝去御繼嗣も不被爲在ゆゑ榎坂五郎左衛門御諫申上一二之婦女を御側近く侍らせけるに幸させ給ふさも見え給はす幾程もなく身まかりけるか畢竟は五郎左衛門か心やすめにこそ有つれ此者共は幸ひに顏も身苦しかられはよき配偶を求めさせよと被仰出物給うて御暇被下候よしな與く左れとも五郎左衛門は夫人御逝去より六年前に沒したれは恐らくは本記兩書の方正しからんか

一[illegible]穩君樣は至て御容儀者御よろしからず被爲入候由の處少しの御睦しからぬ事を聞えさせ給ふ御事はなきは　鉄文　以上西條藩御政治中

一御相續以來は勿論御召仕の女中無之惣女中も　公儀へ罷出候外は一統に御減被遊御人數甚少く相成候となり　堀内家筆記

一御天性宮園のかたには御遠かり被遊候て女嬬等御近付被遊候事は御嫌ひのよし大奥甚御人少にて老女両三人に不過年中表御座所にゐみ御座被遊候となり和歌山にても女中を社參見物なとにたまさか被遣候には衣服各木線横縞子染の紋付にて至つて質素なり仍て群集雜遝したる中と言へとも御城女中の風俗は格別に見えて無紛下々綺羅めく者の見せしめになり美服は誰も耻入たり此比迄は諸士の娘衣服制度なく振袖長くして地を曳たる處次第に短く成り古風に復り候事 瑞德記

一常々御咄しに人の命は第一淫事第二食事第三懈怠也此の三ッを程よく守り候へは無病延命なりとの御意なり夫ゆゑ歟御多淫ならす御食事も美味は御好まれ被成候儀無之御行跡は御懈怠これなく候是等を考へ見候へは何様人たる者の好み候事は皆々御嫌ひ被成大に御生質御賢明に被成御座候事察べし

夫に付能々存見候へば水戸様の御連枝播磨守頼済様の御内室賢姫様御事も御生得御賢徳被成御座候由御實母　善修院様も御生涯御賢德成る御事に御座候よしそれゆゑ御二方様とも右之通りに被成御座候かと申上候事 堀内家筆記

節　儉

一御膳御平日一汁三菜の外格別に高價なる滋味一切御用ひ不被遊朝夕三度召上り候外御好みの品沓不被仰出飲食の節を堅く御愼み被遊候御衣服薄く被仰付質素專一に被爲成時に應しさせられ候外華々しき御事御座不被成御晴召の御服も御先々よりは一段下り候筋を被爲召御平生御淸く被仰付

候のみにて被爲濟候御居所御好み曾而無御座有來之通儉を御用被遊候外奢かましく御住居不被遊只雨露を防ぐにて足り候儀に御安し被遊候御容子に奉伺候誠に宮室を卑して飲食を薄ふし身を溝洫に盡すといへる禹の間然する事なき聖慮にも同し御事也と奉仰候　續言行錄附錄

御遠乘ノコト

一寶曆九卯秋芝高輪東海寺の邊へ御遠乘に被爲入候いつにてもか樣の節は表向御下屋敷まで被爲入御下屋敷より御供返し被遊候て御側向拾人拾五人に而御馬數も九ッ十程ッヽ被召候御事也假初にも御後りの御氣味等御座なく一度の御遠乘の御入用金漸く三兩を過候事は御座なく候御先々にては末々まて支度被下節々醉ひ候程は御酒までも被下候右ゆゑ大方は御出を悅ひ候振り合にて御座候　同上

一或時之御物語りに世上不益成る器物に金銀を費し候もの大なる僻事也書物抔は夫にくらへ候ては甚寶なりと再三御意有之候難有思召と奉仰候　同上

庭御手入ノコト

一御庭向御費ヶ間敷御好み一向無御座候唯鬱陶敷を御嫌ひ被遊候晴々と致し候を御好み被遊候ゆゑ諸木之枝を御透させ或は御植替させ御慰みになされ候御容子に御座候右之儀被仰付候も格別に人夫を費し御遣ひ被遊候儀は曾て無御座候御出遠き御時節か御手廻りの者手透居り強而骨折も重り申さぬ節五六人ッヽ程御庭に召被仰付候働之節なとは御直に御聲も掛り大木なと堀穿骨折候節は私共へ被仰付酒給候樣にとの御事にて直に其場所にて御酒被下候御庭向御直させ被遊候も火急端的には不被仰付連々に被仰付いつとなく思召之通りに相成候右躰之儀奉恐察候に唯不益なる事に人夫を費し候事なき樣との御内意と相聞え候何にても御自由成儀ゆゑ如何樣被遊候とも不苦間敷

御事に御座候處聊も過當之御取扱御座不被成候段鎖細の事迄行渡り候御儀奉恐感候　同上

一御相續後といへとも御繻絆は花色の羽二重かその外の御召は皆木綿のよし御袖なし乃御羽織もみな木綿とそ三度の御膳も御平は八そい豆腐のみにていつも外の御品なし御汁と御香の物代りに燒味噌のみなりしと也御烟草盆は粗末なる春慶塗の御品のよし御机は粗造なる御唐机也歴史綱鑑なと常に御覽と見え御載ありし由御刀掛も楓の木にて下の板に紅葉のすかし有之後に鹿の角をもつて被仰付候か御出來候由右之如くに候へとも御馬は常々多く有之候と也　堀内家筆記

一一とせ東都にて御登城の時麴町そこの店にて御覽し候とて木綿縞もて縫たる煙草入を頓て人して調させ給ひ五日六日持せ給ひてさては其求め來りし者に取らせ給ひし此者御錠口番を勤めし時の事にて後老て候ひしか予に此事を語り聞せて今もて秘め置しとて取出し恭敷そ見せたりき

一又或時御藥鑵の損したりし事の有りしを聞せ給ひいつも御登城の御道すがら御覽し置れたるに某町にか樣の奇麗成か有しそ破れを補はんよりは新たに調させよと仰られし程に頓て求めさせけれは眞鍮にて有し御覽に入たりけれは是にてこそと仰られし從來の損したる物は銀にて造り有けるとそ御代を辭し給ふ迄も此御藥鑵にてありしとそ又御下ケ物の緒〆は赤きねり玉を常に下けさせ給ひし或御登城の時とやらん左右に向はせ給ひ此方か佩れは眞の珠にみえ侍らん歟と戲れさせ給ふとそ

一御褥の綿餘りに和らかにて御座の時埋らせ給ふ樣にて御氣分あしくかたき綿にせよと仰せられしかは眞綿にて木綿わた多く包みて入れしとそまた豆腐は布目のかたき處に味ひありと常に仰せら

れしとそ　以上安明遺事

一一年雲蕋院の菊御覽せらるゝことのありしに儒臣祇園與一を初め皆々召させられ詩を賦せしめ給ふ鄕士桑山茂兵衛玉洲と號す字嗣粲畫をかく事を聞召せ給ひ御前に召て御覽せらる蘭竹又者山水なと畫て奉りしに與一爲之進等に畫題を命せらる此時茂兵衛竊に上の御容子を伺ひ奉るに木綿の御羽織同く濃き萠黃の御召物にて小倉縞の御袴召給ひし晝を御覽し給ふ內御酒を聞食給ふか豆腐の御吸物御小皿に梅干二ッ三ッ有しとそ此比山本爲之進初而御供に候しけれは盛服して出しに御粗服のやうを伺ひ奉りて終日悶々として居たりしと常に門生へ語り聞せき　安明遺事

一或年小金駒左六疋御買上に相成御小姓衆幷近藤富右衛門へ御預乘立より初すそ迄も自身に致候樣被仰付その厩御庭口の外に出來候處へ被爲成候て御覽被遊候へは思召の外御厩能出來候ひしかはその後は再び不被爲成候由　堀内家筆記

一是も野外にての事なりし彦坂某銀の餝りしたる煙管入持しを御覽し付られ夫は調へたるかと尋させられしかは江戸の土產にもらひ候ひぬと申上しに立派になんあると仰せられしかその後町中御步行の折ふし本町一丁目にぶらくり町とあり小路にて下さまの持へき合羽やうの煙草入を御覽しけるか歸御の後人走らせて求めさせられ御野行之時は佩させ給ひしか其後彼彦坂に見せ給ひ根付には吸売あけをつけかゝる步行には重寶なるものそかしと御物語ありしにそこは己れに諷させ給ふになんと畏みつ此後者彼の銀裝ふたる物はふつと持さりし　安明遺事

一或年江戸にて銀煙管天鵞絨腰下けの煙管入流行せし比御小姓中一統調之各金物の飾りに好みを盡

せし時或日寺嶋某を被召御前にて煙草給候樣との御免有之上にもおなしく被召上候但御煙管は眞鍮御煙草入は伊勢合羽なり御意には烟管の輕きは齒を損せず紙烟草入は乾く事なし兩樣共に德用にて且は調へ易き物なり古くならば幾度も改め替ふへし新敷を善とすかた〳〵以て便利也汝か輩も之に倣ふへしとて被下置候との御事也此御意を一統畏り恐入て此奢侈は止みたりといふ　瑞德記

経書講筵

文學雅量

一寶曆十三年辰の秋の比に江川忠菊榎坂某に被仰付御家中末々迄文道に踈く候ては如何と思召候江戸柳原邊に住居致す尤御屋敷へも近來折節御出入仕候細井甚三郎と申儒者を被爲召每月六度經書講釋被仰付素讀は川嶋幸次郎へ被仰付日々罷出候依て被仰出候者甚三郎へ經書之講釋被仰付月々三八之日取に罷出候等に候間御家中之面々志次第頭役より末々之者迄も御用御番之外は勝手次第罷出承り可申候尤甚三郎へは上より御會釋有之事に候間銘々より心遣ひ仕候には不及候幸次郎へも素讀之儀被仰付候間是亦志之者子供迄も爲習候樣にとの御事之旨右兩人衆奉りて夫々取扱有之候よし右講釋之當日者御用達衆壹人出席御徒目付帳面を以出入の姓名を記し置直に御前へ上り候よしいつれも至極之御事と難有奉存候志之なき者迄も罷出拜承仕候去に依て若きもの共寄合候ては大方書物等之物語仕候由

大日本史其他書寫

一水戸樣御連枝大藏大輔樣より日本史を御借寄被遊書寫し被仰付無足之者かなりにも書寫致候者へは被仰付その餘は御側向にて御番乃間に寫候樣にとの御事にて何れも寫し川嶋丈助時々被召御讀

合せ校合等は多分御自身被爲候誠に古今の治否文事武事無殘結構の御書物にて有之由右之外近年被仰付書寫出來候御書物大槪如左

室町日記　足利家事蹟記之凡四五十卷も可有之候也

扶桑見聞識　古今武事幷評論を加へ全部凡八十九卷程も可有之候

右之御書物等御座所御床へ常々御指置御覽被遊候

一御髮被爲上候御隙には書寫被仰付候日本史御側向御相手に被遊校合大かた御自身被爲成候文字等の御吟味細雜御丁寧乃御事ともなりさるに依て文字も御達者に被成御座候上古今時變の事共畧御閱覽被遊候儀御尤成る御事共也予或とき御相手に出候節青砥藤綱滑河にて落錢を求候處を御讀被遊甚御感心被遊候御容子にて御意に藤綱か此事跡は世に言事也能おもひ候へは成程尤なる事そ譬は今錢を少し持たらんに不遣して置は不益なり乞食非人にても遣したらんは不捨して通用之道理なるそとの御物語りにて御座候付乍恐御尤の事と奉存候藤綱か事跡は小なる樣の儀に奉存候へ共大成と奉存候と申上候へは別て上にも御感被遊候御容子に御座被成候假初に御書物御覽被遊候ても如是御心被爲附候儀恐入たる御事なり

一予或日御番にて在りし節御炬燵に被遊御座候ての御意には頃日奥にて師道をするはと被仰候付御側之面々如何体之儀に御座候哉と申上候へは久藏娘とめに素讀を御敎へ被遊候皆しる通りの性質なれとも人は得手〳〵の有るものにて手習物讀事は中々覺る也との御意なり御側より上もなき御師匠樣にて御座候段申上候へは鬱陶敷御師匠也と御笑ひ被遊候論語なと御取寄被遊候て御忘れ字

を御しらへ被遊御側向へも御尋遊され候て御復しなされ候甚以御無我に被遊御座候御事也以上續言行錄附錄

以上西條藩御治政中

一御詩作御歌等數多被遊候得共御謙退深く被爲在しかは悉く御草稿をは燒捨られしか人々へ下され
しをまた御燒捨に洩しを拜見せしまゝに書留るなり

右劍藏匣異鄉人、豪士一覩不知貧、精光沉々青蛇色、文章參差錄龜鱗、宛轉金色殘月影、神鬼遙
震拂胡塵、何年萬里飛鐵驄、可試黃沙芙蓉雄、今日當場新豐市、席上劍舞一盃中

故人獨去滿秋哀、日々遙思玉笥臺、一片晴光湖水濶、千里樹色白雲廻、山樓朝暮深情足、
澗道月華幽賞催、散步風前船曲盡、峯頭神女罔君來、

王母蟠桃色、花枝映日新、仙臺開宴處、高閣擧杯巡、鶴影千年樹、鳳吹萬歲春、相逢皆獻壽、
抃舞興來頻

悲閣鬱芳蕘、經聲滿法園、池頭芳草徧、趺坐花雨繁、錦袖桃花映、繡裳春日飜、是依勝遊地、
幾處醉清樽

曉天雨過數峯晴、難駐歸心万里行、攀折林端楊柳色、春風一路別離情、

雨後東山遲月光、幾時霜降滿林塘、今宵膝上清意調、自識風前緩曲涼、

以上六首御題闕

別業東山下、人行隔綠川、雲光萬木起、日影一峯懸、殘雪梅花色、含烟垂柳邊、長歌歡有客、
把酒幾時傳

右春雪宴某山莊

雪晴夜色碧流長、山下綺窓孤月光、一樹寒梅花正發、香風吹落滿衣裳

右寒梅

樓上臨東海、芙蓉二國廻、樹中千鳥馴、山下百花催、黛色倚天聳、翠光含日開、三春留氷雪、
何節得仙來、

右望芙蓉春雪　以上言行錄

自問自答

吾官囿之地、以猛犬有告之者、吾聞之、命有司云、幸歸國之途徑其地、應爲鷹犬牽之、其圖之、對曰、諾、或曰鷹犬亦習武之一耳、雖然國城備之而已、何其求其珍乎、况耽之則非益君德者、而却爲流連荒亡之介者矣哉、謹請止之、吾對曰、聞足下之言、知不可爲耳、遂止

和佐山石碑記

予一日登府城之東北和佐山、眺望四遠、歸路將及麓、既半道、傍有一石碑、非凡士民之碣、使視之、歸報、題曰渡邊若狹守墓、若州在　南龍公之時、列于卿相、蒙恩遇赫奕一時、其子有故、幽蟄終身、若不然至今子孫將享厚祿高秩、嗣子之不遇、故末裔衰替、小官微俸、不絕如線、若州地下有知、宜爲感愴哉、予今過其塚墓、忽然心感、因記之云

記甲章事

余少時、皇考大惠公、制甲以賜、其章、內圓外方、小異于宗子、既嗣支封而甲章依舊、今茲安永乙未、奉
朝旨、承統宗國、乃命軍器監宇佐美正矩、改修甲章、正矩告曰、初　先君欲賜君甲、而比定此章、致思久之、余因正矩之言、始得知之、感焉感生、故命並存方圓二章、尙永無忘皇考罔極之意、遂手記其由、藏之匣中云、

哭太田氏

夙昔南州子、盛年客京華、負笈隨藝苑、常遊風騷家、逸興吟風月、彩筆灑雲霞、姓名振故國、公門一知名、柴扉迎車馬、幽襟披鳳城、日受金玉照、獻賦公侯前、花下同淸賞、展藻二十年、一朝長逝去、蘭芳千載傳、双淚爲君濕、秋色倍悽然

以上御家令所藏　此他、日新沼ノ銘、苗俵ノ御書戒アリ漢文記中載スル所ノ如シ

一御旅行乃時沼津の驛にて壚鑪を御覽ましく〳〵て

世の中は誰もかくこそあらまほし壚たく蜑も壚やかぬ身も　麟德記附錄

一安永八年三月十七日名草郡南出嶋村納定の藤御覽被遊御懷紙に記させ給ひ結ひ付させ給ひし御句に

惡筆もゆるせ能書乃藤の花　御幅さして寶庫に存す

此御筆は今も猶彼百姓の家に持傳へし　安明遺事

梅樹ヲ御好ミ

仙台侯へ御鍛刀依頼

一或時短慮功をなさすと云心を遊されし御句なりとて

朝日まつ蘆間の舟やあつ氷　續言行錄

一又一歳歳旦の御句

鱸も青くさひけり御代之春、

按に一本には
鱸や朝日にきつき國の春

又その後の事にや東都にて

乘掛の外に貫目や笠の雪　以上瑞德記

一京師の人中澤道二なる者心學座談して士俗を敎導すと聞しめして山本惟恭に如何なる敎へそと聞給ひしかは惟恭屢往て敎ゆる所を聞て愚俗を導くには甚捷徑のよし申上候とそ　瑞德附錄

一御庭内所々に大木の見事成る櫻數有之候花盛は甚見事なれとも櫻の花をは强て御好みなき御容子に相伺候梅をは御好み被遊候御容子に御座候御花苑乃脇四五拾間に拾五六間の間に所々の梅を集めさせ梅林ほとに被仰付他木は外へ御移させ梅許り四五拾本も可有之候御庭へ被爲成候節往來に御立寄被遊彼是と御世話被遊候或時御意に櫻は春のものにて見事なるものなれとも一体うはきなる花なり梅に越したるものなしするとなる木振よりおもひもよらぬ花香のやさしさいふへくもなくと御咄被成しを御側にて拜承仕候　續言行錄附錄　右は西條御邸にての事也

一松平陸奧守綱宗朝臣武州大崎の別業に退隱の後は專ら刀劍を鍛錬するを以樂と致されしかはその作勝れて世に仙臺正宗と稱するその事を聞し召及はせられて御所望の上御拵被仰付鮫は勝れたる品

を御掛させられ御目貫は金子如玄縁頭は福浦雀乃高彫岡井勇次郎へ被仰付鍔へ切竹の覆輪高木十兵衛作之みな御家乃人也茶屋宗味御使として御見せ被遊候へは伊達家にて一覽被致宗味を饗應ありて御咨被申上しは御縁頭御鍔乃御好み誠に當家乃美目奉感謝候との事なりしかはその趣申上しに御欣悅被遊候と也

按するに本書には（瑞徳記）陸奥守殿へ御城にて直に御所望被遊しと見えたり予か聞し所は伊達遠江守殿へ御望み被遊しと也遠州殿とは御壯年の御時より格別御懇意也しとの事は世にも申し又その家にも申所也亦予聞所はその御品預り奉りし人より聞しなれは大かたは違ふへからず予又常に其御刀をも見し所也故に本文にある陸奥殿とも遠江殿とも不記也本書にも伊達家と申事書せしかはその儀にしるす作者その事を詳にせす臆度の説もて陸奥殿とせしかまた聞所少し耳に殘りて伊達家とは記せしにや又岡井氏高木氏を細工人と書せしも誤り也皆是士列なれは本文には只御家乃人と記せり金子のみそ御細工人と見えし也　麟徳記

一海士郡加茂谷恨みの瀧本名は裏見の瀧といふ或日此處へ被爲成屋々久敷御遊覽被遊寺地の構へ石垣の仰山なるを御眺めありて御意には飛泉は甚奇觀なり此寺なからましかはと思召との御意のよし

一伊達遠江守殿とは御懇意に被遊候折々參上被致御座の間にて御逢被遊候初て紀州へ御入國の節あの方に而御留被遊候猪の股を糟漬に被仰付江戸へ相廻り遠江守殿へ被遣候御使者は大皷打葛野一郎兵衛遣し候樣にとの御事にて相勤候御使相勤候節直に取拔き調味被申付御使之前にて被給候由殊の外被笑候て一郎兵衛も頂戴いたし候樣被申候得共一郎兵衛は得給不申段恐入申達候處左候はゝ外の吸ものを出し候樣との事にて肴の吸物にて酒給罷歸り候由　堀内家筆記

信曰明治維新前迄ハ偶々肉食スル者アレハ人大ニ之ヲアヤシム風也シ況ヤ當時ニ在テ高位ノ君如此事ハ絶テアラサリシト

一或御登城之日殿上之間のあたりにて出仕の人々御行掛りに平伏し給ふ人の多く侍し中に殊に目に立て見ゆる人のおはせしかは御供に侍ふ御小姓衆あれは誰殿に候ぞと尋ね奉りしかはあれは松平豊後守よと御聲高くあなたにも聞ゆる程に宣ひし事の有りしとそ　安明遺事

一西丸或は北嶋御殿に御成の折には俄に町中の角力取を召集めさせ給ひ角力取らせ果ては御酒肴赤飯なと飽まて給はりし夏の夕つかたは奥の御庭へ御小納戸坊主御小姓坊主抔召給ひ角力を御覽遊はし是等もはてはうごんめん類やうの物多く給はりし事常の事にてありしとそ　安明遺事

一吾藩を繼かせ給ふても酒落たる御事にて物に拘はらせ玉はすわきて庖厨の御好み土木乃御好みなとおはしまささりしまた御在國の時町中御歩行ましませしに豆腐屋にて豆腐を致し居りしを御覽遊はし門口にて御床机にかからせられ御煙草被召上豆腐を製させて御覽遊せ候分て豆腐を御好み遊はさるゝ事との御事にて毎々召上られしとそ御深慮の被爲在候御事と恐察し奉りぬ　瑞德記附記

一或年吹上松原の土中より松根の陽精に彷彿たるものを堀出すその長は八尺餘にして造化自然の巧を備たるよし風聞の趣被聞召御取寄御覽被遊候處至極奇異なる物と思召久しく御座之間に御差置その銘を魔木と御名附遊はされ候御内々在方役人へ被仰出田邊熊野浦々御穿鑿あつて尤も大なる寳貝を御吟味あるといへとも惣而小さく有りしかは其内大ふりなるをえらび出し件の品二ツ共一所に御入組御戯にかの魔木を御撫御意には此貝至て小分なり併し猶室房に勝らんと御笑ひ其儘御箱に納り在部屋役所へ御下け有之よし　瑞德記

勇　武

一いまた西條殿にておはせし時に常に馭術の譽れ高く聞えさせ給ひしか非常の事なとありて單騎にて御登營ましく給ふ路次のあたり無賴の少年遮り奉りなとする事もありしに策もて拂ひ給ひあるひは鐙なとにて蹴退給ひて一度も不覺はとらせ玉はさりしとそ　安明遺事

一寶暦中八代洲河岸松平勝五郎殿屋敷燒候に付御出馬被遊候御乘馬之事は世擧りて稱し奉り候御名人にて一散に召切候に御馬飛か如し馬上の御供迄も大かた下り僅に榎阪主殿江川幾右衛門両人御供致し歩行御供には加藤彌之丞（後五郎藏關口流の達人其餘藝能多し）只壹人御供仕勝五郎殿屋敷へ御乘附彼是御世話有之内追々御人數も駈付參り一二ヶ所も御人數を以御消留候處御中屋敷に出火有之との注進に付直に御引返し被遊青山へ被爲入候此時も右三人御供に續き申候さて火先にて御下知有之內御人數も追々駈付來り候ゆへ御鞭にて夫々御下知被遊御人數を以三四ヶ所御消留なり火も鎮り可申樣子に相成候處に御舍弟松平織部正樣此節は御病中にて御息切被遊候由にて御側へ被爲入御床机に被爲在織部正樣御容躰御懇に御尋被進夫より彼是暫く御物語被遊甚御睦敷御容子に被爲在候元來御兄弟樣方多き御中にも就中織部正樣御睦しく被爲入候扨織部正樣外のかたへ被爲入候ひしか御使を以西手御長屋火先にて候間御人數を向可然との御口上也その趣申上けれは以の外御機嫌損し何の御挨拶もなく織部に阿房を言ふな其方指圖を受け火を消しには來ぬとの御意なりければ御取次の人御返答には只よろしくとのみ申候と也　續言行錄

一明和九辰年の比御登城に限らず都而御出先にて自然變事有之候歟或は出火等乃節上下混雜仕候事

有之時御道具の内御鑓鎗又御供鎗へも相印御附させ被遊候間右印を目當に致し御供の向一間まり相纏り罷在可申候同勢は何れ少しつゝ間を隔て候て罷在候はゝ御供鎗に附候印を目當に相纏り候樣致指圖可申旨被仰出御印御挾箱へ御入組に相成候　續言行錄

銀皮



供鎗印



草

一或時御意に要門御專行被遊候得共全体御本家大番組を御顧に成萬端御下知に御隨ひ不被遊しては不叶御事に思召候へは御本家御軍法の事御心得にも可相成儀は委細御聞被遊度思召候間橋爪流御聞被遊度との御事にて御懸合被遊候處御本家にて彼是六ヶ敷申上ければ御聞被遊甚御不興にて外乃事を聞とは違ひ自分持前の事を聞に左樣の六ヶ敷事やあるへきその儀ならば重て聞に不及惣て軍法といふものは進退危みなきを以自から勝利は備る也ましして釆幣を取る者か己の備萬端を會得せすして何そ軍に勝利を得る事あるへき然るを右之如く六ヶ敷申さるれは强て聞くには及はさる事也當年一分の事如何樣にも致し働は事濟儀なりと御意ありしと也　續言行錄

一御老中松平右近將監殿には御舊緣乃故を以御両敬の御親みに付或時澁谷御屋敷へ御入來ありてゆる〳〵御對話被遊御座所に而御料理等出候御座所の脇に御厩有之を見申されあれなるは御厩と相見え申候扨ゝ能御樂に御座候かやうに御手近に御馬をさし置れ御秘藏被成候と有るは甚御羨敷儀に御座候由頻に御賞美被成候御厩乃並に御鞠懸り候は唯見られ候迄にて何の挨拶無之候右近將監

殿御歸りの跡に頼淳樣御意には今日右近將監に廐を褒られ甚痛入たり流石天下の老中を勤るほとあると御歎美被成候事頻なりしか翌日御作事へ仰付られ鞠掛を御取捨被遊候　同上　以上西條藩御治政中

一御馬を能被爲召候御事を或人申ししは御年も被爲寄候時の事也或御召の御馬口むき六かしかりしを能召たりしを笠井老右衞門拜見しその子德次郎に能拜見して召候處を心懸御乘立致し候樣申ししとなりその比德次郎は乘しかと是の如し又御召被遊候に御手も御鐙も少しも動く事なくして御馬の足並のよき事は誰も及ふ事なしとなり劒術御學ひ被遊候事も　大惠院樣思召にて一刀齋の末葉に伊藤平三郎と申す御旗本ありしを召て御授け申上しと也平三郎歿したる後その子龜井内記（此家ノ法劍術上達せされは伊藤は名乘る事あたはすとなり）を御世話被遊藝術御取立被遊候と也是にても御劍術に御達し被遊候事察し奉るへし　堀内家筆記

一物毎の御儉素に渡らせ給ふには似けなく御馬はその數もいと多く候ひしされはにや御側近く侍ふ人々にも其道を强させ玉ひしかは自から達者の人も多く出來し又御厩に捧乘といふ事を初めさせ給うておこといふ捧を人ふたりして肩に置それに打跨りて縱橫周旋するに落さる程に鍛錬すれは必しも落馬はせさる物そとて木馬の如く人に物しけれは極めて其益多かりしとそ御庭上へは（本ノマヽ）たせ馬を繫かせ置給ひて是もまた御左右之人々をして遙こなたより走りかゝりてうしろさまに飛のらせ玉ふに初めのほと危む心起りて少しこなたにて走り留りて誰にも乘得ることかたかりしか後には競ひかゝりて飛乘るに十度にして九度はのり得し　安明遺事

勤政

一御領國の人民を被爲憐國の治否諸大名の賢愚を被爲試御自身を甚御儉素に被爲遊御膳御衣服甚以薄く被仰付候

一每日御寢遲きと申節大樣五ッ前多くは六ッ過或は六ッ半時頃被爲起御身仕舞被遊候て御家老の出仕を御待ね直に御政事無御解怠被爲辨候

一大臣の諫を能被爲受是非分明に御裁斷甚以て無我に被成御座候　以上續言行錄附錄

一御學問之儀は永井町に住居せし細井甚三郎紀德民といへる儒者（後尾州樣に被召出候拔るに後には御勘定奉行となり明倫堂を建られし也その子は早世しその女へ今の細井主税を聟養子として家繼せしなり）尾州の產にて如來山人と號せしを召させられ經書の講釋ありて近侍の面々へも被仰付門人と被遊出精仕候表向の面々も自然と學問相勵み候に付詩文抔を致候者も多く有之候御自身にも御詩作被遊或時御近習番磯傳藏へ御意遊され候は其方共詩作には直し多く羨敷事也我等詩作に丸之多く候はこまりたるもの也とて御笑ひ遊され候　續言行錄

一御家中の上下學問可仕爲とて乖裕館（御使者の間と唱候）にて一六の會相立如來出席讀書等も自由に相成候故川嶋貞藏なと云へるは學問甚進み甚三郎方へ引越て修業し後は京都へ遊學して楚辭の訓点抔出板す（後貞藏品ありて豫州金川へ配せらる）其餘學生多く出來也手跡の事も時々御世話ありて月々清書の御覽有りしか出精の品に依りて御褒美も被下候故自然と書學も盛に相成候　續言行錄

一弓馬の儀は勿論諸乃武術に至る迄一向に御世話あり御自身も被遊候御趣意を以每日晝過より御側向の人を御相手に罷出候射禮の事は小笠原縫殿助殿（御旗本衆）御招き有て步射草鹿丸物之類なと年々

奥表の面々へ被仰付騎射なとも時々被仰付候

一或時花用的といへる射禮被仰付候その砌は御自身御世話遊され大かた相調申候へば其式は射手東西に分り拾五枚れ場にて小的を射て甲乙を定むる也御覽の當日には剛膽の座相定り中りたる面々には奥書院にて御料理を被下無中の者にはその給仕を被仰付ヶ様なる御工夫時々有之ゆゑ人々武藝を嗜まされは面皮を失ひ候故に志ある者は彌武技を磨き柔弱なる者も自然と人並には相勵み候様成行申候　以上續言行錄

一同し御時に寒夜の節は御番衆へ不時にあたゝかなる酒肴を被下置又は夜詰の若き衆は相撲力競べ等致し高聲に聞え候ても御構ひなされすやゝもすれは御忍ひにて御出なされ竊に御透見あつて御笑ひ被成候といふその頃何某能具足を求めたりしか上作なれは至て價も高かりしと朋友の噂するを御聞被成件の具足持參可致との御事にて入御覽候處御褒なされ武器を好む心掛神妙之段被仰右具足の代金被下置候との御事なりとそ　瑞德記

一或夜劍は君子の武備身を守る所以也といふ儀を御近習へ御講し被成その序に新古刀劍の御話に及び竊に御番士の腰の物を御取寄御慰みに御目利あり遠侍衆平生心掛宜き輩は常に良刀を帶し相嗜みたる者は不斗今日の御覽御感に預るのみならず御喜悅之餘り姓名を御尋被遊御褒被成又粗相なる刀は御尋無けれとも人しれず面目を失ひぬ依之諸士一統に相勵みおのつから心かけよろしく成て皆武備に踈ならす腰物を嗜みたる故終には御家風と成りて澁谷御家士の刀劍は孰も良作を帶して粗刀は稀也となり　瑞德記

一御延氣先にても御酒等も少しならては不被召上たゝ御歩行御氣晴を第一に御保養被爲成候御容子に御座候高輪の茶屋にて御小休之砌子供四人を川崎六郷まで（彌太郎太藏 行程二里半程）早乘に遣され候參り候はゝ何そ印持參候樣にと被仰付候右四人之者難有かり早速打乘り一時程の間に往來五里計乃道を乘りつけ罷歸り候節はいまた茶屋に被成御座候六鄕之茶飯を少し宛御前へさし上候へは甚以御機嫌よく中々早かりしとの御意にて何れも平伏仕候兼々馬術御世話被遊候故子供等まてヶ樣に達者に乘り候程之儀奉恐感候御事也　續言行錄附錄

一寶暦九年十二月何日晝下谷筋出火烟近く相見え候に付御上屋敷迄御出馬の處又もや赤阪見附之邊迄御越の節麻布邊より燒出し煙り餘ほと相見え候下谷之火は遠方ゆゑ御上屋敷より御引返し被遊青山御殿へ被爲入候右之節急なる御出馬故續く歩行御供は少く有之內日頃達者なる表御供の面々壹兩人御馬を不離續き申候右の外御伽之小嶋又藏末子供同事に御座候處御往來一里餘りを少しも下り不申御馬に附駈申候達者なる儀と人々譽候儀に有之候御歸殿之上兩日中に各勤書入御覽候後大人之續けるは御譽被仰出候又藏儀は御前に相詰候節御手自黑丹後の御馬召袴被下置此比は能續きたるとの蒙御意右之品拜領仕候又藏誠に於御前如此仕合難有かりし段筆紙に盡しかたく候子供之儀格別に御沙汰無之迚も其通り之儀にも可有御座處右之御取扱外之子供勵みにも相成候段御尤の御事ヶ樣乃儀まて等閑に不被遊候儀奉恐入候御事也　同上

以上西條藩御治政中

一嚴敷御儉約被遊度思召候處是を以て御〆りに可相成と申儀は　大殿樣御用向に差支へ或は下之者

難儀に相成候事も有之候間御相續以後は朝六時より諸伺事御聞被遊夕は七ッ時迄いつにても勝手に伺ひ罷出候て御用向相滯候儀無之さら〳〵と相濟候に付惣体御用の手廻し能入組もつれ不申候に付物靜に相成大なる御儉約にも相成候なり勿論右の思召故一体に御好み事無之甚御質素に被爲在候に付御用も自然と御減有之候也　堀內家筆記

一御儉約中に候處溜り候科人共闕又は仕足部屋或は人足部屋預け番附など申類夥く有之候品御聞遊され早く相調候樣にと被仰出候處いづれも吟味は行屆有之候得共申上おくれ有之筋ゆゑ早速夫〻より書附を以て逐言上候に付右書付共御覽の上に御差置終日終夜御掛り御覽の上段々御不審等御糺し被遊候上夫〻御裁許相濟候也右科人御裁許相濟候に付番人不用に相成候者夥く其科人とも長く牢中にて苦み候處相片付候に付皆々難有かり申候　同上

一御平常一汁三菜の御膳ならでは不被召上候未御四十位より御齒落候故豆腐又玉子やうのものならでは不被召上御肴も輕き品一種ならでは不被召上御下戶に而候得共御近習外樣に不限折々御酒なと被下御用向出精の節なとは御ふきらひ被遊候也御相續以來或時御用部屋に而御用多にていつれも夜詰仕居候段御聞被遊每々御小姓を以御尋ね被遊候翌日に至り夜前夜詰仕候者共末々まで御聞被遊一統に御酒被下候ヶ樣なる御心附の品幾度と申儀無之夜詰等仕候へは何とやら勤自慢に見え思召も恐入候故銘々早々退出仕度心掛仕候に付日之內手廻しいたしいそかし風相止み物靜に相成候也　堀內家筆記

一安藤帶刀水野土佐守家は兩家と唱へ格別之御取扱にて病氣なとにて差重り候節なとは早速被爲成

御尋被遊候事也乍然是迄は平生に被爲入候事は無之候處御相續以來御序之節土佐守宅へ被爲入御懇之御意被成下候是等は深き御思惟も被爲在候御事の由　同上

一殿中通御之節御番人詰所に罷在候者へはかならず御聲掛り大儀と御意也此御一代諸士へ御懇なる事奥表の差別なく或は野邊御供先等に於ては御目見え以上なれは御直に御用等被仰付よろつ御馴々敷事　有德院樣御家に御座被遊し節乃御風なりと諸人申上奉り候　瑞德記

一御養生乃爲に日々御庭へ被爲成御歩行被遊候その節は前日奥詰の人など御庭にて御目見え仕候事ある時又は興かる事のある時など御戯言も被仰候て御心易く被遊候事　堀内家筆記

一有馬吉藏（漢文瑞德記ニハ吉藏名ハ滿精）或とき高石垣下を通りたる處折節石垣臺御歩行之時にて吉藏が名を御呼被遊吉藏その一兩日以前結構被仰付しか無邪氣者なれは蹲踞仕りなから今般結構被　仰付難有仕合奉存候と直に御禮申上候となり吉藏は其比の荒馬乘にて古風殘りたる士也　瑞德記

一常に府城乃あたり近き郊外へ渡御まし〳〵て歸御の折節には遽に御一騎かけに乘切らせ給ふに御供の人々吾劣らしと追付奉れとも多くは三十丁四十丁の程にて後れ城門に至らせ給ふ比はわつかに二人三人ならては續き奉らすとそ又或時加太浦（行程三里）乘切らせ給ふに扈從の人々多くは半途にて疲れ候ひしに勝野甚之進のみそ御往來ともに從ひ奉りけるとそその頃の健足の人にてありし或日追廻しの馬場にて大寄のありけるを聞し召れ御歩行の御先より不時に御成遊はしけるに甚之進見えさりければけふはやつこはいかにと問せ給ひしか疾よりまかり候へど腰のあたり腫物出候ひしか今に潰へ申さず乘得がたくあれに扣へ罷在候と申上しかは頓て召させられ馬に乘かたくは馬

に付て走り候へと御意ありし程に三篇か程走りければ眩暈して倒れけるか遂に之かために張りきりていたく膿汁出て不日に其疾愈しとぞ此人糸鬢にて有しかはいつもやつこ〳〵と召され候ヶ様の御延氣先より藝術の場へ不時に御成の時は御挟箱より小倉織の御馬乘袴御出させ股引の上に直に召させ給ひしとぞ　安明遺事

一勝野甚之進新何某その比の妙手にて殊に御覺えもめてたき人々なりき三百錢の抱打廿五丁三拾丁の丁抔は此時の新氏妙を極し人なりしとぞ或時松江の丁場へ御成まし〳〵諸流達者人々を召給ひしか三百余人に及びぬ此人々をして拾錢筒の並ひ打させ給ひはては御近習の人々にも命せられて打せ玉ひし又常に御成にて御表へ出御遊はしける比堂形山にて鐵炮の音しけるを暫し御考へ遊はしつゝ今打つは甚之進にてあらん見て參れと人走らせ給ふがいつも〳〵違ふ事なかりし餘りに不審し奉る人のありていかにして知らせ給ふらんと問奉りしに矢繼の呼吸を考ふるに一息の長短なしと答へさせ給ふ或時野呂彦助三寸角手打の時星詰の的御覽せらるへしとて貳枚差上くに一枚は御慰に御左右へ御置き遊はしつ一枚は家珍にせよとて下し置れしほとに今に彼家の規模にはなりぬ　安明遺事

按に本文並ひ打せさせ給ひし時果ては御身にも打せ玉ひ三十匁之筒もてたま〳〵打迯し給ひて仰せられけるは人々の見侍る晴の業を打損したるの口惜さよと戯れ玉ひしと　麟徳記附錄に記す

一小十人衆矢來筒と云早込は　南龍院様思召にて出來御鐵炮役勝野宇治田の家の秘事也御鷹野御供先にて鹿鳥を小十人中へ打留被仰付候處御前にての事故常の業よりは劣りて誰も打損ひ皆々恐入る事とぞ或時御鷹野の折北嶋御殿へ被爲入歸御之節道の邊なる畑井戸の竿に鵜のとまりたるを御

覽ありて御手筒を被召寄御手つから御發し被遊しに中らすして鵜は悠々と飛去たれは御笑ひ被遊御意には誰しも御覽にはあたらぬはと被仰候よしヶ樣御戲にも能人情を酌せ給ひ萬事御想察被爲在候事御供の人々難有奉存候ひしとなり　瑞德記

一或時御延氣の爲風と郊外へ出御まし〳〵けるか何にても聞し召物有らは持て參れと仰られしに元より俄の事なれは供御の物とては用意し侍らねば御厨まて人走らせよと騷ぎあひしか何某小十人衆こそ常に御供にさふらふ時燒飯を懷にせしかけふも御供に侍らひけるか此事を聞し召されはやくもてきこし召れんとて御床几にかゝらせなからたべさせ給ひやかて歸御なし給ふあけの日彼士を召して恩賜の御沙汰ありしとそ是よりそ御供の貴賤近郊へ成らせ給ふにも燒飯を腰にする事常の事とはなりぬ實は此士の事兼々知らせ給うて諸士を激させせん爲にそわざとせさせ給ふ事にそ有し　安明遺事

一近侍の人々に仰て常に騎射武射打毬なんとしば〳〵御好みありし程にはては皆鍛練しけるか麾下の士の御舘にしたしく祇候せる人々に見せ給ふとてこたびは草鹿を仰出されぬ先木綿もて草鹿を包み誠よとて日毎に打寄つゝ包みけれと不格好にて包み直しするほとに多く遣ひ捨けれは小賢しき人の餘りに木綿捨り候ひぬ試みなれは綴ひ候てまた包み候はんには費をも省き候ひぬと申したりしを風と聞し召てほとよく望み次第に木綿あたへて包み習はし候へ能包み覺えたらんには重てこそは過分に費すましきそと御意有し常にはいかにも物の費る事をは嫌はせ給ふかゝる事には聊も費をは厭はせ玉はさりし　同上

一一藝ある者は輕きものにても御覺えさせられ候その頃町博勞孫市と申馬乘ありしか借馬を業とするの傍には諸家の手馬の爪髮を業とせり一歳追廻し馬場にて諸士子弟乘馬御覽の節孫市馬場に罷出居候を兼て御聞及ひのものなれは御慰みに乘馬仰付られ其業を試み候樣との御事にて孫市荒馬乘して御笑覽に入奉る其後宇治御厩前福田儀右衛門闕所地 三十年前即南紀に祇役せし時に見しに此處に肉桂を植られて成木せり孫市死して又上り地になりし なりを孫市に被下置帯刀御免なり終身その所に住居せしと也 此孫市は常に長劔を帯し腰には大胴乱を下け市中を濶歩す異名を高坊主と呼はれし也本は鷺の森御坊の僧也生質至て剛强にして人と賭事して申募り御堂の棟より飛びし程の者也後に還俗して遊侠を以て名を聞えしといふ　瑞德記

一一年有田郡湯淺の庄の馬上の達者共を御召あつて砂の丸の馬場にて驅馬御覽有しかは大に難有かり彌出精せしかは拔群之者多く出來しと也是は馬乘りと云ふ事昔より有毎歳九月村々に執行之廣湯淺の二郷は最盛なり一村に一騎つゝ乘馬を飼立て皆駿足也祭月の前數十日之間養ひを彊くして各相競ふ事をなすその翔足の捷事宛も疾風雷火の如く目に遮る事なし騎者各華やかなる鎧を着し神輿に從ふ馬物具の壯麗人の目を驚すといふ 神輿に從ひし後に驅馬する事にや猶尋ぬべし馬物具の美麗天下無双と本文瑞德記には記せり天下無双抔申事は餘り傍若無人の詞也本書にケ樣の類の詞多く見えしかとも是を省く微意あればなり　瑞德記

一紀州の綛商は大阪に相場立問屋數千軒あり仕入元の捌方に依て和歌山の綛糸乃利に損益ありといふ御府内の賤者は過半是を以て生産とする事なれは御救の思召にて綛糸發興し下々の助力に相成候樣思召を廻らせられ伊賀を大阪へ被遣問屋共御掛合せ仕入の元にて紀州綛の廣く流行し諸方へ運漕便利宜敷趣段を被御含たりその比迄は和歌山の綛商人二派にて實綿替は內證分に互に其利を爭ひ不和なりしに依て起綿替をも御免有て手廣に商を融通して無滯故に綛仕事の利

自然と發興して在町共御惠澤を蒙りしと也琉球芋は享保の比より植付の御世話ありといへとも毒あるものに言習はして食料に用ひさる處御教諭ありて大に發行し今は民間の常食と成る又堤河原へは黄櫨(ハゼ)を御植させ木蠟を取近年大に御國益と成りしと也　瑞德記

一十寸の薄に曰く安永年間官命にて棄地河堤一郡皆櫨を植しめ其實を摘て蠟に製し大に國益と成今世諸物の價昔に比すれ悉くみな高値なれば唯製蠟の風のみ心やすく下直なるは處々に櫨を植たる利潤に因る也云々

一此國の女工者貴賤となく紡績の業をする事國初よりの事なりしか漸く盛になりしかは此御代の深くはからひ給ひしより今はた國產第一となれりその初有司に命せられ專木綿種植ることを諭されしかと民もしか〳〵肯はさりしに今は府城のあたりより有田日高の二郡迄も夏毛は木綿種を植ることになりぬその外空地閒田には土地の宜きをはかりて植る事を敎へさせ給ひ國中大小の河堤に植付させ給ひし黄櫨今は森々として此實をとりてその村ことの臨時の費を助くると少からすと聞ゆ又才か崎三ッ嶋は兀山にて有しに松を多く植付させ給ひしに是も今は黒みわたりて其木かけに魚のよる事多しとこそ　安明遺事

一湊傳甫御船藏前川筋砂石埋れ大なる中洲となり入ふねの難儀なる趣御覧ありて川堤井堰の仕かたに依て中洲の他へ移り候樣の工夫を考へ諸人目安書にて可申出と御觸有し比老人共乃說に昔淺野家御國引渡しの時川役人共申送りに紀の川筋水利之儀は唯天の自流に任せ可然と云事昔より申傳候由御聽に達し是は尤の儀に被思召川普請は不被仰付候事　瑞德記

一或年秋の比御內意にて御代官巡見後歸宅候はゝ毛見柿と云物を土產に差上候樣との御事也名草郡御代官某承之その品を奥之番土屋仙兵衛迄差出し是者御代官秋毛見之節村々にて百姓方より馳走に出す所の大和柿の事也大体御代官へ五ッ手代共へ三ッ四ッ下部へ一二ほとつゝ送る事也むかし有徳院樣八軒屋へ御微行の節或農家に大和柿を澤山に貯へたるを御覽被遊御戯れに一ッ御所望ありし時百姓申には此柿は御代官樣へ差上る品なれは中々難進と申たるを御聽被遊大に御悅郡方の治りよく行屆たるを御察御滿足に思召たるといふ事を兼て聞し召及はせられて此儀被仰出たりといふ此御代は諸事綿密なる儀は少し但し秋毛見は三役立合にて勤ることなりとそ三役とは郡奉行及御代官御勘定人也此三役各見積りを會して御年貢の免を定む古法也是は　神祖御創業の時三奉行本多高力天野の三人を被爲用たる御嘉例に依りて國初に御定め有し事と云ふ　瑞德記

一或歲御鷹野に田尻村邊へ御微行被遊卒然に百姓の家へ入せられ竈に豆腐燒を致し居たるを御覽被遊御好み有之其儘直に差上候へとの御事にて御試みに被召上候處味甚惡く尤酸且鹹く御覺被遊候惣躰百姓共の貧敷皆ヶ樣の物を食味致し候事と不便に思召御歸殿の後御咄被遊候は平日の御膳御儉約被仰付粗食者御厭ひ不被遊常にヶ樣の下品をも被召上御覺え置被遊度思召なれとも上に思召通りにも難被仰付終に御覺え無之今日計らす農家にて下樣の食を被召上是にて彌飮食の奢りを御悟遊され惣て養は習はせに嗜欲は無限ものに思召との御事なり此以後御膳向猶更廉物を差上候樣被仰出候よし　同上

一或とき北嶋御殿御庭口ゟ御微行にて野崎狐嶋邊御放鷹被遊竊に道端畑中の小屋へ御立寄被遊井水

を御求め遊され候處に上とは不奉存農民共不遜の体に接ひ奉り剰さへ放言なと有しかは兼而其近邊の風俗宜しからさる事を聞召及はせられ且人心の囂しきを憎み思召され歸御の後御閑話に竊に此事を評させられ奥詰儒者に被仰付議論を漢文に書て御覽あり坂井好古祇園尚濂山本惟恭等奉りたり或は漢の光武又唐の太宗の故事を引て各皆寛裕之御儀と奉頌祇園尚濂獨異論を持して徽行は人主の警むる所所謂白龍豫且に困めらるゝの喩を引て諫め奉りぬ即日尤之論也と御意被遊その後は輕々敷御振舞は不被遊候と云　瑞德記

一御庭へ菊花御植させ被遊御自身御作り被遊候に付おり〳〵鍬を御遣ひ被遊候て御艸し被遊候には百姓共の骨折とさそと思召候僅の菊畑さへ鍬遣ひには肩も腰も痛み候增してや四時の辛勞は夥敷骨折に可有之候間むさと百姓共を責たけ不申候樣可仕旨被仰出　堀内家筆記

一日高郡は上管の郡にして土地廣く民俗淳朴なり其内南浦と申は大湊にして尤富饒の地なり往古より秋は八月の祭禮一鄉の老人集りて各みな長瓢簞をかつきて踊る俗にケヒヨン踊りと云元和年南龍院樣御覽有て踊の文句に四恩と云事を御感心被遊しと云幾年月を經ぬれは古風は捨り今樣流行しいつとなく踊りの由來を傳ふるものなく既に此比中絶に及はんとする處をケ樣の舊き事の民間に傳はりたるはとくに御穿鑿有りて兼て御存置せられ百姓の樂みとも可成儀なれはと思召され下々曉り易き樣四恩の御譯文を被遊淳々として民を導き給ふ取分忠孝乃二ツを反覆し儒釋二教の間たゝ聖人の道を専らに崇せられたる御風教の微旨畏り奉るべし

四　恩　御譯文

夫人間に四恩あり四恩とは天地の恩父母の恩國王の恩衆生の恩なり凡人間たる者上は天を戴きて日月の光りを仰き下は地に載られて五穀菜菓を食ひて一生を過る者なれは勿論一日も天地の恩を忘へからす身体を父母に受てより寒暑晝夜の分ちなく種々の苦勞を以て育ひあけられ漸く成長する事なれは一日も父母の恩を忘るへからず夫々の職業にありつき父母を養ひ妻子をはこくみ飢す寒えすして代々安穩に暮すは皆君上の御陰なる故一日も國王の恩を忘るへからず人間一生の内には樣々の事ありて自力計りにては世を渡る事叶はす諸人の力をかりて不足を補ひ急難をも救ふ事なれは衆生の恩是亦忘るべからず然るに人間の道は忠孝の二ツより重き事はなき故四恩の内にも取分父母の恩國王の恩を忘るまじき事なり常に此二恩を忘れす父母に孝行を盡し國主の法令を能守れはおのつから天地の道にも叶ひ衆生の心にも悖らすして全き人間となる也　件之御書付御代官曾根田源介承りにて園の百姓共へ下し置かれ今に於て毎年祭禮神事の初長廡上下着して四恩の御書をさゝけ讀む地下人一統蹲踞稽首して之を拜聽すおはつて戯瓢踊り始るその儀式至て神妙なり

御代官よりの達し

右踊りの文句等道に叶候段先年

南龍院樣御譽被遊候處此度右文句四恩之儀に付御書付之趣諸人へ敎示可申との儀に候へは右踊り毎年無斷絕踊り傳へ尤四恩之儀人々感得致候へは上之御仁惠に叶ひ候事に候條右等之趣を以能々可申聞候依之別紙一通差越候以上

日高郡　御代官

十一月三日

薗浦

村役人へ

戯瓢簞踊歌

先達瓢單持　一人
二　傘かたけ　一人
三　繫鼓　一人
四　同　鉦たゝき一人
　　　小づゝみ

瓢詞

治郎も太郎も出られ候へいてられ候へ一同心得申て候謠同音夏と秋引太鼓ツツミ夏と秋御茶事もはやるなりや引茶筌めされ候へやオヽ茶筌召され候へや。よき光りぞと影たのむ世の光りぞとヒヤアヽ連謠踊始たのめたのむも佛のきよみ寺たつねてけひよん戯瓢ハアヒヨン〳〵大鼓鉦ムンツヽミ極樂のホン前にながるゝ涙川いかなる淵もハアヤホン瀬になるらんムヽン世に四恩有り、天地の恩、國王の恩、衆生の恩、此恩アヽ引四恩ハア二恩いつれかおろかは、あらね共、ムヽン父母の恩、アヽニロヽにひゝめおとりをおんとろよイヤア議イヤアギイヤギニキハアヽ去くはなしムン父母か此身をアハハ去やうせずば超世の悲願にあひがたや去やの釋尊みのりをとかくれても兼て無常を乃かるへきムン よしや君たゞ詞繫鼓一人アハヽ聖人の教へには觀んもいらぬ一同ソコジヤ繫鼓一人行もいらぬ一同ソコジヤマヅソコジヤマヅソコ〳〵〳〵ジヤ一同寝ても覺ても忘るなよ只一念は念佛

なりけりゆうづ念佛南無阿彌陀ヒヤア南無阿みだん佛〳〵ゆうづ念佛なん無あみだイヤ思へば浮世は夢の世や引イヤ夢の間の浮世に何とくすんたりとショ太鼓鉦ツヽミヒイヤ瓢箪から駒が出まい者か、只とに角にも月の夜すからいざお踊ろ榮華は是みな春の花名利の心をごうさめていそいて淨士を願ふべしヒヤな無うた波羅密多はつはいた　瑞德記

一孝子及ひ壽長き民は人瑞の類にして國に多きは御仁政の驗也別して孝悌忠信の旨を御示し如此者には御恩賞を被下置その類の者の多く出來ん事を思召ししによるなるべし御代しろしめしし内に在りし所左に記之蓋御先代より孝行の民には米を下されし例　有德院樣御代享保十年紀州那賀郡宮村の百姓勘四郎至孝の譽れ上聞に達し御內賞ありて黑祿を被下置時の儒者祇園南海に被命孝子傳を撰はせ給ひし事は享保世說といふ書に載たりその後御代にかゝる事は多しといへとも當御代の御德化によりて良民許多にして凡數百人に及へるそのうちいちしるしきをこゝにしるす

本町九丁目
武　八

安永四未年父母に孝行成趣町內より申達に依て御褒美銀被下置之

奥熊野木ノ本組神木村
喜　平　次

右喜平次弟
勘　平

安永五申年兄弟共両親へ孝行之段達御聽奇特成儀に付親子一生米被下置之

勘　平

女　房

勘平女房舅姑に仕へ至て孝行に付依て銀被下置之

勢州松阪日野町
龜屋善藏召仕

庄　藏

安永七戌年舊臘九日金子拾ひ脇儀町年寄迄早速申出候段奇特成儀に候依之爲御褒美白銀被下置之

東田中町安兵衛借家
善兵衛後家

ち　よ

天明二寅年姑に仕へ孝行依之一生米被下置之

湊下ノ町桶屋

長　七

天明三卯年老母を介抱至て孝行依之一生之間米拾俵つゝ被下置之

海士郡宇須村

瀨　兵　衛

天明四辰年両親へ孝行成儀村方より相達依之御金被下置之

名草郡南水穗村

九　郎　右　衛　門

天明四辰年百姓之身持を教へ候書物編有之候に付諸人へ弘め申度由存念之趣達御聽是迄右體之存念之者無之處奇特成儀に付依て白銀五枚被下置之

漢文瑞德記に九郎右衛門貝原の學を好み農家訓を著し梓行せんと請ふ云々

那賀郡丸栖村
彌九郎後家
は　る

天明六午年母に孝行成儀相聞え御金被下置之

同郡西山村
十兵衛娘
ふ　さ

天明七未年父に孝行依之父子一生米被下置之

西名草郡岡嶋皮田村
久六後家娘
小　き　く

同年母に孝行之段奇特成儀に付鳥目取らせ候樣被仰出

那賀郡古和田村
權四郎娘
い　乃

天明二寅年母に孝行母子一生米被下置之

海士郡關戸村
勘兵衛手代
平　右　衛　門

天明七未年兼々主人之爲を存格別宜相勤奇特成儀に付御銀被下置之

安永六酉年及百歳候段御聴に達し極老之者之儀に付其身一生御扶持被下置之

勢州松阪領下出口組
廣瀬村
茂兵衛母

同白子領中別保之内
影重村
九十郎母

同

同松阪領小阿坂村
七郎兵衛後家
ゑよふ

安永八亥年及百歳御扶持被下置之

奥熊野相賀組舟津村
左十郎伯母
くす

安永九子年及百歳右同断

海士郡雑賀組和歌浦出嶋
治兵衛母
はる

右同断

伊都郡境原村
善右衛門

安永十丑年右同断

有田郡釜中村
武左衛門母
ちよ

右同斷

裏町金澤九八郎借家
伊右衛門後家娘
さん

天明七未年母に孝行成趣相聞え依之米被下置之

那賀郡湯窪村
善吉

天明八申年父に孝行父子一生米被下置之

日高郡薗浦
助四郎

寛政元酉年春助四郎儀年久敷親之借銀を年來返濟之儀心掛實意之取計致候段郡奉行相達し右者奇特成儀に付爲御褒美御金被下置之

名草郡栗栖出嶋村
源吉
同人
女房

同年源吉夫婦共母存生之内至て孝行依之御金被下置之

新堀今福村領妙宣寺地
治左衛門養子
次　八
同人
女　房

同年次八女房儀舅に仕へ孝順成儀に付為御褒美御銀被下置之

海士郡毛見村
文　七　母

天明二寅年及百歳御扶持被下置之

勢州松阪領須賀村
甚　六　母

右同断

是ハ瑞德記ニ載スル所ニシテ其傳記イツレモ孝子傳ニ詳也而シテ尚遺漏之者アリ左ニ附記ス

名草郡福島村粟村
傳　吉

安永六年母に孝行に付為御褒美母子一生米被下置之

田丸領妙法寺村郷士
加　藤　愚　全

同年常々窮民を救ひ貧者を賑し善道に導き候板本を諸人に施し候に付為御賞生涯米被下置之

松阪領古井村
甚　助

安永八年父母に孝行に付為御賞御金被下置之

天明二年主家之零落を助け忠實に付爲御褒美白銀被下置之

天明八年姑に孝行に付爲御褒美両人へ米被下置之

寛政元年母に孝行に付爲御褒美白銀被下置之

同年同斷に付御金被下置之

同年故主の困窮を救ひ貞節に付爲御褒美白銀被下置之

同年父に孝行に付爲御褒美御金被下置之

和歌山寄合町
商太兵衛手代　善　　吉
　　　　　　　文　　吉

若山新中通り町
久七後家　　幾　　代

若山新通り町醫師
　　黒　岩　道　碩

若山寄合町
　　吉　右　衛　門

田丸領上野組神園村
農惣右衛門娘　い　　な

名草郡杭瀬村
小七娘　　　　仙

一御庭へ毎々駈馬出候處或時參り候儀元通し遲り候御上屋敷御殿地御庭口にて番人久七差止御庭へ人不申候に付寺嶋六郎兵衛（此時御使役頭格御側衆）御庭口へ參り御意にて候毎の通り出候御馬に候間早々通し候樣にと申聞候處御役人衆より元通し不相廻候間通し候儀不相成候夫共御用達衆なと直ちに被仰聞候へは相通し候元極に御座候へは其外の御方御斷被成候ては御意之由被仰聞候ても相通し不申候段申候に付その段申上候其内にやう〳〵と元斷り相廻り御馬を入候處右御意にても入候儀不相成候段申張差止候は輕き身分にはうい奴に思召候譽遣候例はなきかと六郎兵衛へ御尋に候へ共差當り左樣の例覺え不申候段申上候へは左候はゝ輕くも先譽遣し候樣にとの御事にて御在合の銀錢を右番人久七へ被下候也（此段御用達衆へも被仰聞御譽し儀留置候樣被仰付候由）　堀内家筆記

福田儀左衛門ノ事

一御勝手頭取兼御勘定吟味役福田儀左衛門不直之事ありて御咎被仰付在合の金貳參万兩御取上け家財闕所に成しと也

信按するに福田儀左衛門正勝は三浦長門守家來北山彌右衛門之四男にて福田之養子となり延享二丑年正月御切米十五石御勘定人となり永く江戸に詰め寶暦元未年江戸御金藏大御勘定改江戸御金奉行等より御勝手役元〆を經追々昇進安永四未年正月御勘定頭并御加增二百五十石被仰付同五申年五月尚又御加增都合三百石被仰付同九庚子年五月十三日御尋之儀有之物頭へ御預け被成天明二壬寅年十一月五日御咎被仰付家名斷絶す後　舜恭公の文化元子年九月　深覺院樣百回御忌御追善として惣領兵部正彌に名跡被仰付拾人扶持被下大御番格小普請となり以後代々相續せり儀左衛門御採用は其ら　菩提心公之御時にありて　香巖公御代には僅かに五ヶ年半の事也諸說御仕入方勤の事あれとも常に御勘定取〆たりしにて御仕入の事見えす然れ共廿六年間御經濟の大權を握り理財に熟し大坂の富豪輩と交際驕奢亦盛なりしには相違あるましく三拾六年間に拾五石の卑官より三百石の頭役に至りしは實に異數の事其權勢想ふへき也

一本文瑞德記には　奢侈に長し諸國靈山まても寄進の物なとも成しその物華美を盡せし也豪富の聞えあり他國へも聞えしとあり今按に(貨殖)かゝる者明君いかにその職に長くならしめ給ふへきその才は秀し人なるへし近比その子を召出されたり至つて

質朴の人なりさ顯職にありし人の物語也しからは一旦其罪を糺されしかさ大なる罪にはあらさるへし又其かみ職にありし時は文武に達せし人々懇意なりしを以て見るさきは奸邪なさいふ人さは見えすそのころ司農府に在りし老人の物語に御仕入方の頭取なりしかはその金にて富し樣には見えしさ也又罪蒙りしは倹甫御仕入かたにて夥しく御材木を取扱ひしかは折しも上其邊を御通行にて御不審ありて御糺になりしか私に用ゆる所の由聞えて罪身に及びしさ也その頃の司農は二人職を退け給へりさ也此事をも其老人申せしは高野山の金堂をさ一力にて再造せんさ申せしを一力の建立さ申事は成かたき由寺僧方々申止しかさ聞入すして終に再造の事に及ひしその材木を御仕入方にて取扱ひしさの事也凡五千両程の事のよし此人佛力を借り奉りて大業をなさんさしてその罪を蒙りしさ見えぬ此人能く大阪の豪家の心を得しかは一封書にて立所に數千金の御用金を出來しさなり此人御立用は御國益にあらすさてその職にある中は御立用はなしさも古き人は申しき御仕入方にて江邸へ御取立て諸品をあきなひ醬油の類も商しさの事也憶え事のよき事は商紀にありて調へ事あれは江邸司農の御用簞笥の幾つ目に其帳ありさ申に違ふ事なしさ也大坂なさ豪商さ常に往來せしかは他邦の人の來る事常故に暮しも盛に見えしさの事也

清信尼公若山御着の日鯛少くて御差支になりしか其夜は其子の婚姻にて客多くて鯛少なかりしさの事也是は予か祖父の物語りなり　　右麟德記

馬代紛失ノコト

一御馬御買上有之右御馬代金四拾両御厩の者小頭馬喰の方へ持參致候樣例之通り御馬役より申付御金相渡候處右御金途中にて落し候や致紛失候旨申出候に付吟味中先追込置候處馬場へならせられ候節右の御厩小頭不罷出候に付御尋被遊候處品御座候て追込御座候段申上候處右は何の品にて追込置候哉と御尋被遊候に付未吟味中に付難申上御座候段申上候處强て御尋被遊候に付無是非備ゝの儀に御座候段申上候へは今更尋候迚右金子の可出やうもなく候に付當人落し候段申出たる上は先々呼出し勤させ候樣との御事故其段申付先呼出し相勤させ候處何の御咎めも無之右金子も御納戶金にて御拂被下其儘相勤居候然る處右金子は跡々より御厩小頭に爲持出候儀は御馬役共不心得に思召候間右四拾両は惣御厩相勤候者共ゟ辨納仕候樣被仰付候に付御馬役初ゟ人足に至る迄右割

を以て年賦に上納仕候也夫ゆゑ御咎は無之候へとも御厩中にて彼御厩の小頭の不念を笑ひ猶又自今共金銀受取渡し粗末に致候ては誰も身の上に候間念入候樣にと互に申合殊之外惣体の締りに相成候由也　堀内家筆記

規　箴

一或時の御物語りに親の子を育て候事を御側衆の彼是と噺し居るを聞し召て何を噺し候哉と御尋被遊候に付親の子を育つるは大事の儀に御座候と何れも物語仕候段申上候處成程夫は尤なり乍併子供を仕付候は灸治に越候事は無之と御上屋敷の醫師何某も申つるはその子供親を擲くか無理をいふかの時その譯を叱り刑を當るに灸治をいたし候と灸に恐れ重てその悪を改め扨後々は子の爲となり候是ほとよき躾は無之候惣躰大名の子供乃賢愚はその子の守次第なり傅は大切の事也と御意に付成程下々にてさへ姥なとゝ申者吟味も仕候事にて扨その子の生立姥傅の眞似を仕候へは御意乃如く大切なる儀に御座候上々樣には別て理は理非は非と譯を立不申上候へは御我儘に可被爲成御事と御取合申上候へはされはとよ上御幼年の節御傅は山本理左衛門にて有りし彼は此方より彼方へ御供致し參るもの也性質善賢乃者成りし或時御庭へ被爲入松の木末に鳥の巣をかけ子の出來たるを取候へと伽之者へ申付候へは皆の者共は機嫌を取る事を悦ひ候迚垣根の竿抔に而右之巣を落し鳥の子をたゝき落し或は殺し抔致し上にも御望み被遊候事故御機嫌よかりしそ然る處山本理左衛門參り右之儀を見うけて伽之者を大に叱り候故伽之者御意ゆゑ右之通り致し候由

申候得者たとへ御意なれは迚物の命を取り御慰にいたし候事あるへき事に非すなせ御斷を申上其上御聞入無之候はゝ理左衛門へ知らせ不申哉甚以不宜事と苦々敷叱り候上にもこはく思召候故今に御忘れ不被遊候是等は尤之事にて物の命を取り慰み候事抔は不仕事成程理左衛門如斯叱り候者忠誠也右様に呵り候傅は少きものと御物語被遊候御側向恐入奉拜聽候時々乃御物語にも如是の御議論被遊候を御好み被遊候

一風と御咄に人は餘り多言なるは多くは不宜ものそ押默り居候者は油斷ならす器量なるもある也見掛には不依ものそとの御意にて外の御物語なと被遊候

一或時の御物語當時出家抔乃談義を説候に名高き會ひ（本ノマヽ）賞翫いたす類は皆役者の聲色をいたし佛の本意を失ひ今日の欲にふけり物取りにいたし候と見えたり然るに近比下村にて致説教候僧は中々能説候由被爲聞候下賤の者へ夫々の道筋を申聞百姓は百姓町人は町人の身過き乃仕方今日の職分の事扨　公儀御法度に不背様みな〳〵家業を能勤めさへすれは佛意にも叶ひ極樂の快樂を受け候と説候よし甚以感し思召候左様有度事也さるに依て人々信し候はゝ參詣も多かりしと聞召被及候其外の坊主共は唯形容にかゝり實儀無之候既に護國院に孝順院様御墓所有之候に付相應之手當申付有之候得共掃除或は香花等は油斷不致之處左はなく常々こけむし候様にいたし香花も疎に致し置候様子に聞え候然る處御自身御參詣抔申遣し候へは俄に掃除奇麗を盡し候は本意に違ひ候事なり參詣を見掛香花取り候者は亡魂へいたすにはあらて參詣人へ致すと見えたり護國院程の院主是程の儀可守事なるに是非もなき事也併夫も無理にてもなし今日御自身にも御職分を得御盡し不被遊

ものをと御默し被遊候

正直ヲ御悦ビ

一順常院と申僧は御堂守にて御庭口之御長屋を御かし被下住居致し御先考樣方之御忌日御逮夜等御追福の御讀經抔仕罷在候儀なり或とき御庭へ被爲成右順常院か御長屋へ御立寄被遊如何に御僧何を致居候哉經にても讀候やと御尋被遊候順常院御請申上候はいや御經は讀不申あまり淋く退屈仕候に付咄し本抔見候て罷在候段御答申上候以後御座敷へ被爲入扨々順常院は直なる奴なり我何をするやと尋ね候へ者有の儘に經は不讀淋しく退屈し咄本を見て居ると答へしは中々出家の情也なみ〳〵の者ならは予か尋候ときよし咄本を見てゐるとも經讀居候抔とつくらひ可申に扨々順常院は直成奴也と繰返し御意有之候右等の儀も御側向之心得に相成候儀御内意者締ひヶ間敷儀申候筋を御戒之御教誨とも奉存恐入候御事也　以上續言行錄附錄

白晝ノ星

一或時之御雜談にある主人（續言行錄附錄にハ故松平加賀守いつの比にか有けん風と居間の庭へ下りてとあり）白晝に星一つありその方共の眼に見當るやと被申候に付側向の者共立上りて見候得共日中の事なれはもとより見ゆへき樣もなし然れとも再三被申に付不見と申すも如何とそんしその内にて一人成ほとあれに見え候と申せは大方見ゆるに極りたり中に一人輕く考へ私事は眼力のあしき故にや星見え不申と申たり後々は其者を取立被召仕たりと云事あり然れは主人の側奉公はいやなるもの也と忽然と御咄し被遊候退て考候へは至極成る御教訓難有御事也と江川進忠物語り也（幾右衛門と云又作の子）　續言行錄

一伊達遠江守殿と御入魂に而毎々御出會被遊候或時遠江守殿火防の儀仰候處纏持之者自分の馬のおくれ候に付色々世話被致候て被召抱候得共早足之者有兼候よし御咄し被申候その節者何の御事も

なく一通りの御嗜しに候處夕方馬場へ被出諸士に馬乘せられ御見物有之節被仰候者遠江守殿纒を持て駈けまはり被見候事有之哉と被仰候處是迄左樣の事は致し見申さすと被申候左候はゝ只今は御互に修行の爲に候間纒を持見可申と被仰候に付早速纒を被取寄候處金の丸に竪三ッ引に銀乃細短冊を廻りへひしと附たる大纒を持出し候右纒を遠州に御かつかせ御自身は御馬に召候て被仰候はさあ是から火防に出る爲におくれぬ樣に先へ駈給へとて御乘出し被遊候處中々馬場にてさへ馬に附て被遊候事成兼候に付そこにて被仰候は下々は能こそ足達者にて候上野迄御出馬の節是より二里程の道を下代り共三人にて馬をはなれぬ樣に持行候とは扨々達者成者にて候その許の御丈夫にてさへ些僅の馬場内を持堪へられ不申候左候得者自今は馬も心して御乘候方可然候勿論御自分と纒と計り上野へ御出候とて御同勢續き不申候はゝ火のもゆるを見物するより外はなし左候へは格別の早乘は入らぬものに候と御笑ひ被成候遠州も能御出會にて德を被得候と見え殊のほか機嫌にて有之候由右遠州 村侯 は甚心掛の御人にて家中の治りも能く藝者も多く被持候由鐵砲の上手甚多く當時にては騎馬にて鐵砲打候儀平生騎射の如く稽古有之候 御内家筆記 以上西條藩御治政中

一香巖公御作 故の吉開氏の書れしものを田和氏の見せられしかは寫しおく

言葉はなさくものは心かならず實なく口に蜜を造るものはこゝろかならず針あり妄に譽るものは猥にそしるみだりに歡ぶものはみたりに悲しむ利欲に耽るものは永く人倫の道失ひ色欲に惑ふものは時に親戚にそむく文盲にして邪智あるものは人の害をなす事おほく書を讀て邪智有る者は國の大義を害す心に感して始る事はすゑ遂に成就し氣に感して爲す事はしばらくして消散す 韓德記附錄

一御作之物　澁谷氏所藏

仁、過ればよはくなる
義、過ればかたくなる
禮、過ればへつらひとなる
智、過ればうそとなる
信、過れば損をする

氣はなかく勤はかたく色薄く食細くして心廣かれ

人馬を持武具を用意して役儀をかくましと思はゝ美麗を好ます無益の費をなさす正に儉約を守るへしけんやくの仕方は唯我身の不自由を堪忍するにありたる事を知るへし

事たれはたるに任せて事たらすたらて事濟む身こそ易けれ

此世へ客に來たと思へは更に苦もなし心にかなふ食物にむかふ時は戴て喰ふへし又心に叶はぬ食に向ふときは客の身なれは誉て喰ねはならす夏の暑さ冬の寒さも啫ねはならす孫子兄弟にも宜く挨拶して御暇申かよし

父母に呼れてかりに客に來てこゝろ殘さす歸る故郷　瑞德記

安永六年米作に寄
生苗俵の畧圖



補　遺

左之二節は雅量の條に掲くへきを洩したれはこゝに記す
公の御近習に侍る輩は言もさらなり外樣末々のかろ〳〵しき者まて上にならふ下とて文武の道

夫々に心懸さるはなし或時

君御庭に出給ひし折節三左衛門とて庭作りなとする下部鍬かたけなとして出けるを召て歌讀めとありけるけふしも松平奥州よし有りて御招の事にてとり〳〵なりしに元より三左衛門もをかしけなる輕口なるまゝ

御白州てこぬか〳〵と松平けさの六ツから莽陸奥のかみ　堀内家筆記

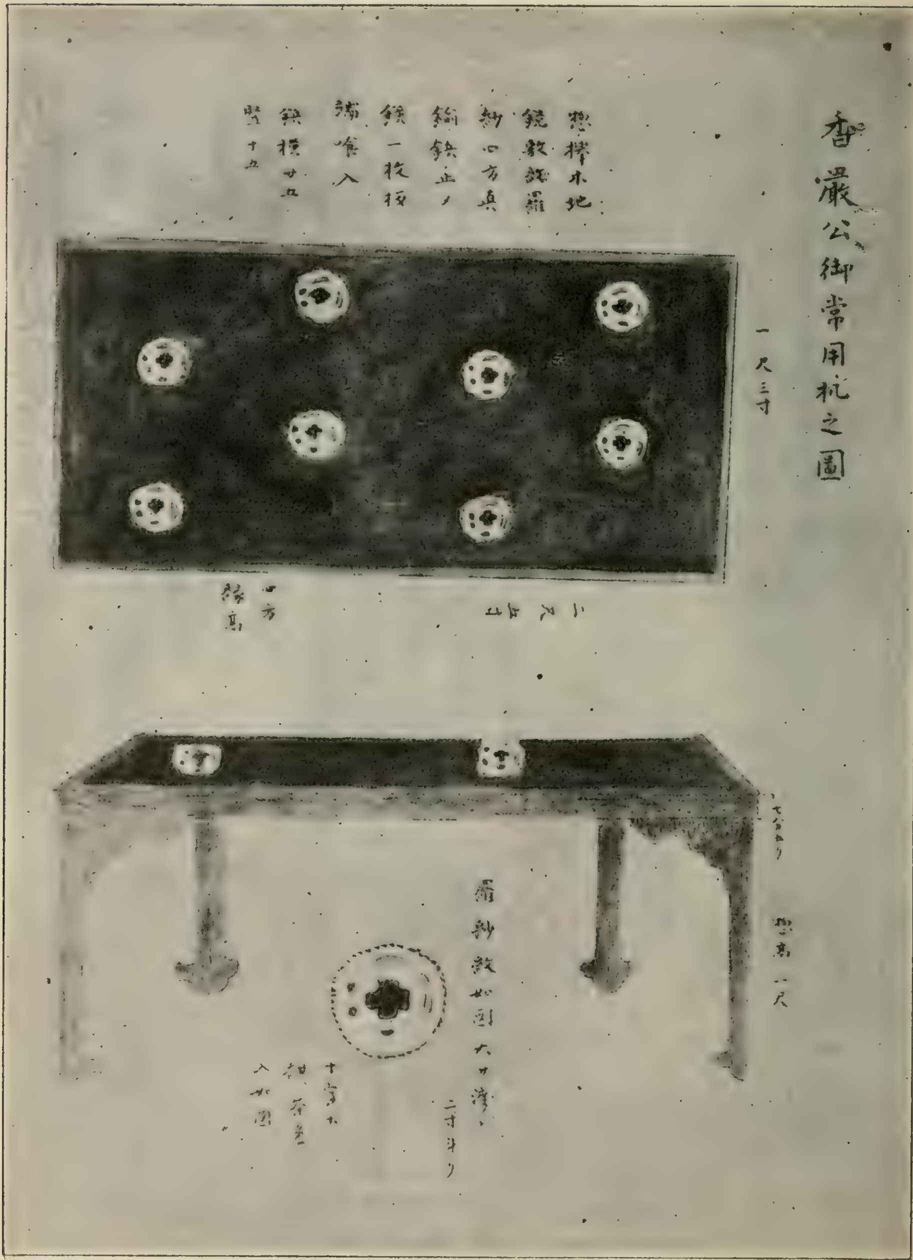
蓑笠袋の御自畫贊　此御幅局庫にあり

君に忠親に孝ある人しあらは蓑笠もやろ槌も袋も

表繪圖

裏　公の御遺品今寶庫に御珍藏のもの數種ありいつれも御質朴無裝殆こ常人の用品に彷彿し而かも御手澤の存し給ふ實に御儉德のほと唯恐悚感泣し奉るの外なし爰に模する御机も亦御所藏也しが維新之比御什器御取片付之際展傳某氏拜受する處となりて氏か許に貴珍す偶々拜覩を得たれば謹て寫し奉りぬ

香嚴公御常用机之圖



南紀徳川史卷之十六

舜恭公　第一

公　諱　治寶　御幼名岩千代　後常陸介

重倫公　觀自在公御二男

御實母　佐々木氏右衛門女　おふさ　澄清院

寛政二戌年三月廿四日　永隆院樣ノ通取扱候樣被　仰出

同年七月十二日御名順之儀　永隆院樣御次　善修院樣御名認出候節ハ　善修院樣次トアリ

明和八卯年十一月十日死去　長保寺ニ葬

澄清院　初光照院殿憲日妙智大姉　御牌前　雲蓋院

御簾中　種姫君　貞恭院殿　將軍家治公御養女　實田安中納言宗武卿御女

御譜別ニ記ス

御實母畧傳

御事歷

一明和八辛卯年六月十八日於江戸麹町御屋形御誕生

一同年七月十六日御名被進御内々ニテ御弘メ此節御七夜御祝儀御整被遊

一同九壬辰年五月御喰田屋敷御庭ヘ御建被遊

一同年十二月十九日於御内證御箸揃

一安永二癸巳年七月六日於御内證御髪置

一同三甲午年二月御名唱樣千之字溷リ候樣被　仰出
一同四乙未年五月御幟御上屋敷御殿地ヘ御建被遊
　同六酉年五月御建納ナリ
一同年八月十六日初テ御中屋敷西御茶屋ヘ被爲入
　同九月五日ニモ出御掛麴町平川天神ヘ御立寄御庭稻荷ヘ御參詣
一同年十一月廿八日御月代初御袴召初
一同年閏十二月廿八日油鳥毛御鎗被進
　但十三日左近將監樣修理大夫樣ヨリ御表ヘ御戾シニ相成候上被進御養子後ヨリ爲御持被遊
一同五丙申年五月十日ヨリ御痲疹十七日御酒湯廿七日御祝ヒ
一同年十二月朔日御弘之儀　公儀ヘ御達
一同六丁酉年八月十六日　上使ヲ以　殿樣（香嚴公）御養子被　仰出
　此節ヨリ御行列等直ル油鳥毛御鎗爲御持被遊
一同七戊戌年正月朔日當年頭ヨリ御太刀御馬代ヲ以テ　殿樣香嚴公ヘ御禮御八歲
一同月三日御謠初御規式初
一同月十八日御養子被仰出候爲御祝儀御老中御招請御能有之
一同年二月三日山王ヘ　御宮參
　森川御茶屋ヘ水野土佐守出張御同所ヘ御立寄

一殿樣是迄爲御持之雛子首毛押御道具御讓リ御宮參之節爲御持被遊
一即日爲御祝儀從　公方樣上使酒井石見守從　大納言樣上使鳥居丹波守ヲ以テ　殿樣岩千代樣御拜領物被遊　御部屋樣(俊明公御實母)ヨリモ御使ヲ以被進物有之　大殿樣(觀自在公)明脫院樣ヘモ同斷
一爲御禮即日　殿樣兩御丸ヘ御登　城
一同年三月四日御手習初御馬召初
一同年四月廿七日初テ澁谷御下屋敷ヘ被爲入　同年九月ニモ御馬ニテ被爲入
一同八己亥年十一月廿七日御下帶初
一同九庚子年三月廿八日初テ爲御延氣芝筋ヘ被爲入豐田庄三郞抱屋敷ヘ被爲入
一同年四月廿三日初テ八丁堀御屋敷ヘ被爲成
一同十辛丑年正月朔日初テ御年寄大寄合御傅太刀目錄ヲ以御禮ヲ被爲受
一天明元辛丑年五月九日御中屋敷ヘ被爲成初テ御鷹御遣被遊
一同年十月六日當年ヨリ御表ニテ玄猪御祝初ル御附ニ頂戴
一同年十一月十五日御讀物初同廿八日御弓御稽古初
一天明二壬寅年二月五日御居合初
一同月七日　上使松平周防守田沼主殿頭ヲ以テ
種姬君樣(將軍浚明公御養女)　御緣組被　仰出
一同月十八日　殿樣御同道御登　城初テ　公方樣ヘ(俊明公)御目見

御元服御改名

岩千代樣ニハ御退出ヨリ御老中方御廻勤

一同年三月七日　殿樣御同道御登　城御元服被　仰出御盃御頂戴御脇差御拜領御一字御頂戴常陸介治寶ト御改

常陸介樣ニハ御退出ヨリ兩御丸御老中若年寄ヘ御廻勤

殿樣ニハ御所勞中御廻勤無之

一右御元服可被　仰出旨去月廿七日久世大和守ヨリ御城付ヘ申聞有之

一三月十二日　御目見幷御元服濟ニ付　殿樣御同道上野　御宮幷御靈屋方ヘ御參詣　日門樣ヘモ御越被遊

一同月九日御目見モ相濟候ニ付油鳥毛御鎗最早爲御持無之右御鎗御藏ヘ納

一同月十一日御表御座所ヘ御移

以前　太眞樣被成御座候所ヲ御修復御座所ニ相成

一同月十五日　殿樣御同道西丸ヘ御登　城

若君樣 將軍家齊公御事 ヘ初テ御目見

翌日御禮トシテ四時御供揃ニテ　兩御丸ヘ御登　城

一同月廿四日殿樣御同道初テ芝增上寺御參詣御歸之節常陸介樣ニハ愛宕ヘ御參詣

一同廿六日御出入口極ル御延氣之節女中御先ヘ參候儀向後相止

一同日御拜領物自今御表ニテ御頂戴被遊候筈極ル

一同日自今　公方様大納言様御成之節御屋敷御近所御通リ之節ハ御上下被爲召候筈

一同年四月十五日大納言様（家齊公本月三日御元服從二位大納言ニ）御官位濟御禮被爲請惣出仕ニ付兩御丸ヘ御登城（惣出仕ニ付テハ初テ也）

一同月廿日自今左近將監様（葆光院君）左京大夫様（壽德院公）被爲入候節五節句八朔ハ御對顏之筈極ル

一同月廿八日初テ山王御參詣

一同年十二月廿二日ヨリ御熱氣被爲在廿五日ヨリ御疱瘡

同月廿七日從　公方様大納言様　上使（若年寄御例）被進

同廿九日御尋トシテ　公方様大納言様ヨリ　上使ヲ以テ御拜領物被遊　御部屋様ヨリモ御使ヲ以被進物アリ

天明三卯年正月六日御酒場　公方様大納言様ヨリ　上使アリ

同月七日御酒湯御祝儀トシテ　公方様大納言様ヨリ　上使ヲ以テ兩殿様常陸介様御拜領物被遊

御部屋様ヨリモ御使御用人ヲ以テ被進物アリ

同月九日貳番御酒湯被爲召同十二日三番御湯被爲召

同年二月五日御酒湯御祝儀御整被遊

同月廿二日御疱瘡後初テ御中屋敷西御茶屋ヘ被爲入

同年四月朔日去年以來御拜領物之爲御禮　殿様御同道兩御丸ヘ御登　城

一天明三癸卯年三月廿八日御具足召初

一同年四月十五日　種姫君様ヘ御結納御進覽　御登　城有之翌日惣出仕也

一同年五月五日節句初テ御登　城

一同月十七日大殿様觀自在公ヨリ御陣大小被進

一同年六月五日御中屋敷ヘ被爲入候節御用達御用人也御供止

一同年七月廿九日御鷹之雲雀初テ御拜領

一同年十一月七日御拳之鴨御内々　公方様ヘ御献上

一同年十二月朔日御登　城被遊候處從四位下左近衛權中將ニ御敍任即日從三位ニ御轉敍左近衛權中將如故被　仰出

　　西丸ヘモ御登　城御退出ヨリ両御老中幷水野出羽守若年寄ヘ御廻勤

　同月七日　殿様御同道　両御丸ヘ御登　城御官位ノ御禮被　仰上

一同月廿三日八代蜜柑初テ御拜領

一天明四甲辰年正月二日年頭初テ御登　城

一同月廿三日　殿様ヨリ(香嚴公)御旗被進

一同年閏正月朔日ヨリ御城御沙汰書差上ル

一同月三日御鷹之鶴初テ御拜領

一同月六日御鎗初大嶋雲五郎御指南

一同日御鐵炮初森藤良助御指南

一同月十五日月次初テ御登　城

去ル十一月　殿樣御在國中月次朔望廿八日御登　城之儀且御宮御靈屋方　御參詣之節御豫參御勤被成度旨月番御老中へ御達之處御伺之通リ被成候樣差圖アリタリ

御豫參ノ節御供御傅之外ニ御年寄被召連候筈御達濟

一翌年三月廿二日　殿樣御參府被遊候へ共是迄之通御豫參之筈ト同月十六日ニアリ

一同年二月四日御登　城公家御饗應之御能初テ御見物

去ル朔日ニ　上使ヲ以テ明二日右御能御見物御登　城被成候樣被　仰出

二日御登　城之處雪降御延引本日ニ相成ル

一同年三月廿七日御慰御能有之　九月廿二日ニモ有之

一同年四月十七日紅葉山へ初テ御豫參

一同年六月四日巣鷂初テ御拜領

一天明五乙巳年正月六日御拳之雁初テ御拜領

一同月十日御齒痛氣ニテ上野御豫參御引

同十五日御快氣御登　城アリ

一同年四月六日御袖留　女中上使アリ十一日ニ兩御丸へ御登　城

一同年五月廿二日ヨリ御表御住居

一天明六丙午年正月廿二日大宮御鷹場へ御越翌廿三日八時過御歸殿

乞言私記ニ曰ク

西濱公未タ世子ニテオハセシ時大宮ニテ御鷹狩アリシニ　香巖院様御意ニテ急キノ御使ヲ小池彦之進ニ被　仰付大宮ヘ參ル
七澤トイフ荒馬ヲ乘ルヘシトノ御事ニテ暫時之間ニ難ナク往來相勤罷歸ル人々驚キタルト云フ
拔スルニ彦之進此時無足ニテ被　召出　舜恭公御小姓ナリ後御小姓頭取ニテ奥御右筆組頭ヲ勤遂ニ御用人三百石ニ進ミ後
新御番頭格大御番頭部屋詰御客應答ニ被　仰付文化九申年祿不相應ニ乘馬ヲ持地向ヘ乘下等ニ遣候趣不束之行狀御役人ナ
モ相勤候身分不心得之旨ヲ以御役御免御足高之内百石被召上寄合被　仰付後永年御取次ヲ勤メ天保九戌年正月七十二歳ニ
テ病死江戸之人也

一同年三月十三日御前髪被爲執　二月十三日之處　院様少々御痰氣ニ付今日ニ御延引
公方様大納言様ヨリ　上使　種姫君様御部屋様ヨリ御使ヲ以　両殿様中將様ヘ御拜領物被進物
有之
一今日御登　城之處少々御所勞ニテ御目見不被遊西丸ヘモ御登　城無之御本丸ヨリ直ニ御歸殿
一同十五日御登　城不被遊
一同廿七日　公方様ヨリ御尋トシテ女中奉叔ヲ以御塗重壹組生魚壹折御拜領
一同年四月朔日同十五日御登　城無之十七日紅葉山廿日上野　大猷院様御靈前ヘノ御豫參モ無之
一同廿三日御所勞御全快ニ付御登　城御前髪執ニ付御禮被　仰上候處　御目見御懇之上意御手自
御ノシ鮑御頂戴
御腰物御拜領相濟夫ヨリ井伊掃部頭両御丸御老中ヘ御廻勤
一天明七丁未年三月十五日御定銀米被進
銀三百貫目　米百石

一同年八月八日御中屋敷御庭御堂　清溪院樣御靈前ヘ御參詣之節初テ御狩衣被爲召

一同年九月廿七日御中屋敷ヘ御移徙御出掛ニ山王ヘ御參詣　御普請出來ニ付テナリ
御移徙ニ付即日　上使松平越中守ヲ以卷物貳十御拜領右爲御禮御登　城

一同年十二月五日　中將樣ヘ計　上使有之節ハ御中屋敷ニテ御請被遊　殿樣中將樣ヘ御一所ニ
上使有之節ハ是迄之通御上屋敷ニテ御請被遊御客御使之者モ是迄之通御上屋敷ニテ御請被遊候
筈之旨アリ

一同年十月六日　尾州樣戸山御屋敷ヘ被爲入

一同年十一月廿七日　種姫君樣（貞恭院樣御事）御入輿（辰刻御出輿）御婚姻御整

一十一月九日御道具被遣初日極候旨御老中ヨリ達シ同廿八日中將樣ヘ從　公方樣上使御留守居番
橋本喜右衛門ヲ以皆子餅御樽肴御拜領且右御献上モ被遊

一同十二月朔日從　公方樣上使松平周防守ヲ以　大殿樣　殿樣中將樣致姫樣ヘ御祝儀物御拜領被
遊且御献上モ被遊右　上使ヲ以在府御年寄幷御傅ヘ拜領物アリ

一同日御入輿ニ付爲御禮御登城之處　御目見御懇之　上意御盃御頂戴御大小御拜領　殿樣御名代
左近將監樣御登城御目見　殿樣ヘ御脇差御拜領

一同二日右御禮幷御拜領物御禮トシテ御登　城御老中方ヘ御廻勤

一同朔日御三ツ目御祝儀三日御五ツ目御祝儀

一同六日御入輿相濟候爲御祝儀　公儀御能有之御登城御見物　但前ヨリ上使ヲ以被仰進

一同九日御入輿被爲濟候ニ付上野　御宮其外へ御參詣

一同年十二月廿三日初テ歳暮御祝儀御拜領

一同日水野對馬守安藤帶刀儀御附ヶ被遊　帶刀ハ於紀州

一天明八戊申年十月十七日初テ安國殿へ御參詣

一同年十二月十六日　上使御書院番頭藤堂肥後守ヲ以御拳之菱喰ヲ御拜領　家齊公御代初テナリ

香巖公御逝去

一寛政元己酉年十月廿六日

殿樣 香巖公 御逝去

一同年十一月十二日ヨリ　上使御客御使者等御中屋敷御居御殿ニテ被爲受諸御番御同所へ相勤ル

寛政元年己酉　　公　十　九　歳

御相續

十二月二日公襲職嗣立

一十二月二日　上使鳥居丹波守松平和泉守ヲ以テ　香巖院樣御遺領御相續被　仰出爲御禮翌日御

登　城

一同月十八日御家督御禮御登　城

一翌戌年三月廿七日廿九日御家中御禮被爲受

異國船渡來

一同月十八日熊野へ異國船渡來　公儀へ御達

同三亥年四月廿四日ニモ渡來ス此時御達無之

是月十九日任參議左近衛權中將如故

宰相御任官

一同月十九日御登　城宰相ニ被爲任　廿八日御禮御登　城

寛政二年庚戌　　公　二十歳

系譜差出

一三月十三日御系譜御差出之儀　公儀ヨリ被　仰出

同四子年正月廿五日ニ御差出相成

同八辰年十一月十六日御系譜補入之儀被　仰出翌九巳年六月十五日ニ御差出

一同月十六日當春御國許へ御暇之儀御内意被　仰達ノ品有之付當春御暇ノ御沙汰ニ不被爲及當秋御暇可被　仰出旨被　仰出

水戸様ト御縁組

一四月九日方姫様水戸様へ御引移　方姫君ハ觀自在公御女香嚴公御養女

去年閏六月水戸少將治紀卿へ御縁組本年二月江戸御下向本日御引移也此時之事ニヤ野史徳川公族列傳ニ左ノ一節ヲ載ス

一寛政中治寶女弟、適參議治紀、送嫁裝於水戸第、伍列連綿、分作三隊、以便行路、安藤信成子信馨、與之遇、俟前隊過、後隊有間、乃過去、伍列悍卒、恃威拒之、突信馨肩輿、信馨左右抽刀斬之、衆卒圍之、信馨遽避之同族次猷第、次猷乃遣其人制止、捕悍卒、以告治寶、治寶曰、信馨、苟爲列侯、途斬悍卒、於律亦不妨、我卒頼恃威暴横、甚愧他謂我家風不遜、宜達公廳以律論罪處刑、乃託之公廳、　翁草

五万石ツヽ御取替米

一七月廿八日御勝手御難澁ニ付依御願於大坂五万石ツヽ、五ヶ年ノ間御取替米ノ儀被　仰出

御禮之儀天明二寅年御拜借金之節之通御禮被　仰上

一八月十一日巣鴨并千駄ヶ谷ニテ上ヶ地御拜領

同十九日千駄ヶ谷石谷市左衛門上屋敷受取
同廿日巣鴨志野兵庫左衛門上屋敷受取

九月始就藩

一九月三日御家督後初テ御國許へ之御暇被　仰出
公方様ヨリ上使鳥居丹波守　御臺様蓮光院様ヨリ御使御用人ヲ以テ被進物アリ
一爲御禮即日御登　城御饗應御拜領物被遊
一同月十六日御發駕六ツ時御供揃東海道美濃路通十六日振ニテ御越被遊
同十八日宿次奉書出ル
伏見御乗船無之十月朔日御着城
十一月朔日御國許へ之上使被　仰付十二月三日相濟同月十一日來春御參府御時分御伺之御使御差出之處來三月中ト被　仰出
十二月廿一日宿次ヲ以御鷹之鶴御拜領
一十月御直書ヲ以御目付へ御沙汰
此度歸國ニ付テハ初政之事ニモ候得ハ別テ大切之事ニ付其方共勤向之儀モ猶入念相勤可申候
一於當地毎々延氣等ニモ出候事ニ候得共右ハ慰一通リノ儀ニテハ曾テ無之作方ノ豊凶農民之苦楽ヲモ知爲ノ事ニ候得ハ野外ニテハ尚又先ヲ拂候者抔別テ其心得無之候テハ甚不宜事ニ候中ニハ心得違ヒ農業ニ拘リ候者モ叱リノケ其外莚ニホシ有之米麥之類モ取ノケサセ其主人不居合節ハ

蓮ヲ引カヘシ五穀ヲモ地ヘコボシナド致事モ折ニハ有之哉ノ様ニ聞及ヒ候ヘハ尚以後延氣等ニ出候節モ在中ニテハ如何様ノ風聞イタシ候哉無遠慮風聞之趣申出候様可致候不宜風聞モ候ハヽ猶更早々可申出候

十月

一十一月四日　大殿様 観自在公 ヨリ御太刀御陣太刀御譲

琉球使來ル

十二月琉球聘使來

一十二月十一日琉球人御上屋敷ヘ參上

一ツノ寶鑑ニ寛政三年十二月十一日トスレ共徳川氏十五代史ニハ寛政二年十二月二日琉球國使者義灣王子登城引見舊例ノ如シトアリ今之ニ從フ

一十二月廿七日御守殿前ニテ屋敷地御相對替御願之通リ相濟

種姫君様御守殿ヘ參上之面々供廻リ下馬所無之付御守殿前小普請松島繁太郎御勘定山田仁右衛門小普請淺田平左郎屋敷ト巣鴨千駄ケ谷上ケ地御拜領之分ト御相對替也

賞孝子

一是年左之孝行人ヘ金米ヲ賞賜ス 事ハ孝子傳ニ詳ナリ

勢州白子領稲生西村　農　甚吉

親子一生米ヲ賜フ

同人　妻

白銀若干

若山與次郎丁　工　平助

金若干

同岡町　商彌左衛門倅　源三郎

金若干

寛政三年辛亥　公二十一歲

二月修傳法學舘、設聖廟、創春秋釋奠、公親臨祭之、定爲永制、

瑞德記曰 辛亥歲、輪奐落成、賜扁額曰、學習舘、春秋釋菜、 公親臨、大夫以下皆有獻納、講求典禮、一取則於東都聖堂、簠簋籩豆之事備焉、以鴈鵝代牲、云々

又曰今公賢、而好學、月以次命題、令學生賦詩文、又讀書課時、試諸生、爲恒例、按ニ辛亥ハ寛政三年也蓋シ誤アラン　（一本寛政七年乙卯ノ條下ニアリ）

三月東覲、路拜住吉神社、及伏見御香宮、

一三月十一日初テ御參府

二月廿七日若山御發駕上海道美濃路通御道中十四日振ナリ

三月六日宿次奉書被進

同十三日　上使被進

同十五日御登　城御參府之御禮

同日　御臺様ヨリ御使ヲ以テ被進物アリ

一四月四日口熊野古座組樫野浦沖ヘ異國船渡來ノ飛報到達即日有司ヲ派遣ノ處既ニ退帆行道不知旨ニ付十九日一同歸着ス

右ニ付左ノ面々五日朝出發

御目付　岸和田伊兵衛　　添奉行　伊藤又左衛門

添奉行　宇野善右衛門　　郡奉行　太田吟平

伊都同　小出才大夫　　御鐵炮役　勝野甚之進

海士郡地士　九人

右八日串本浦着ノ處異船全ク一時汐懸リニテ既ニ退散行衛不知爲念十二日迄滞留本記ノ如ク

歸着スト云フ

一外船左ノ一書ヲ遣シタル由

本船乃是紅毛船、地名花其載、貨物乃是銅鉄及火炮五十員在中華國赴皮草國而去無經貴地、偶遭風浪、漂流至此、在貴地、不過三五日之間、不好風而在此、好風即日去本船人一百口、貨物實銅鉄並無別物、船主名堅德力記、

此外蘭文モアリシトナリ

御儉約

一五月七日御勝手御繰合至テ御難澁ニ付嚴敷御縮リ方被　仰出

左京大夫様ヘ被進候御合力米貳万俵之内壹万俵御斷

一御家中儉約之儀モ被　仰出

中納言御任官

七月任權中納言

一七月朔日御登　城被爲任中納言

同五日御登　城御任官之御禮被　仰上

一八月二日方々様之儀自今様之文字ニ認候様被　仰出

一九月朔日　公儀ヨリ異船取計方之儀被　仰出

是寛永以後異船取計方ヲ令セラレン初也國交之沿革ニ關スルヲ以テ左ニ掲ク

先頃筑前長門石見ノ沖ニ異國船壹艘漂流ノ様子ニテ程遠ク乘離レ候儀モ有之又地先近ク寄來候儀モ候間彼是日數八日程ノ内右之趣ニ候處當時ハ帆影モ不相見趣ニ候惣テ異國船漂流候ハ、何

レニモ手當致シ先船共ハ取上置長崎表ヘ送遣シ候儀夫々可被相伺事ニ候以來異國船見懸候ハヽ早々手當人數等差配リマツ見エカヽリ事カマシク無之樣ニ致シ筆談役或ハ見分之者等出シ樣子相試可申候若拒候趣ニ候ハヽ船ヲモ人ヲモ打碎無貪着筋ニ候間彼船ヘ乘移迅速ニ相働打捨ニモ致シ候ハ召捕候儀モ尤可相成候勿論大筒火矢ナド用候モ勝手次第之事ニ候筆談等モ相調又ハ見分等ヲモ不拒趣キニ候ハヽ成丈ケ穩ニ取計右船ヲハ計策ヲ以成トモ繋置船具等ヲモ取上置人ヲハ上陸致サセ番人附置立歸不申樣致シ早々可相伺候若又異議候ハヽ捕置可被申候異國之者ハ宗門之處モ不相分儀ニ付番人之外ハ見物等ヲモ可被禁候右漂流一二艘之儀ニモ候ハヽ前文之通可被相心得候若數艘ニヲヨヒ候歟又ハ數少ク候共最初ヨリ嚴重ニモ不取計シテ難成樣子ニ候ハヽ其儀ハ時宜次第タルベキ事ニ候尤右體之節ハ都テ向寄領分ヘモ早々申通シ人數船等ヲモ取揃可被差出候

但出張之陣屋又ハ小領等ニテ其場ニ大筒之類有合不申ハ最寄之内所持之場所ヨリ申談次第早々差越取計候樣可被心得候

右之趣可被相心得候尤其時宜ニヨリ候取計一條イタシカタキ事ニ候ヘ共事ニ臨ミ伺ヲ經候テハ圖ヲ失ヒ可申儀ニ付先大概心得之趣相達候條其餘之作畧ハ時宜ニヨリ可被取計事ニ候兼テ議定イタシ置可然筋ハ可被相伺置候取計行屆候儀ニ至リ候ハヽ御沙汰之程モ可有之事ニ候間成丈可被心配候尤家來共格別出精之モノハ名前等ヲモ可被書出候事

前々海路乘船ノ面々モ近來多ク陸路通行有之趣ニ候尤船手等之儀モ無油斷筋ニハ可有之候得共

參勤御暇之節々乘船被致候モ畢竟船路之樣子熟練致シ且ハ其用意オノツカラ不等閑タメニモ候
間右等之儀モ心得可有之事ニ候

祇園尙濂歿

是歲、祇園尙濂歿、年七十九

一是歲左之孝行人へ米金ヲ賜フ　事ハ孝子傳ニ詳ナリ
金若干　紀州名草郡吉原村　農　龜右衛門　同斷　同伊都郡妙寺村　農　傳四郞
同斷　同牟婁郡大泊村　庄屋　庄七　同斷　同名草郡北嶋村　農　源八
同斷　同有田郡金谷村　農　伊八　終身米ヲ賜　若山北新町彥兵衛娘　ヤス

寛政四年壬子　公二十二歲

是歲、有内旨、留江戶
一正月廿四日　御豫參濟ヨリ增上寺黑本尊へ御參詣
二月、幕府、召公及尾水二公饗之、拜觀吹上内園、
一閏二月廿八日吹上御庭御拜見本日御三家方御招請
公方樣御相伴御饗應　御先例無之由
昨日　上使御小姓組番頭松平内匠頭ヲ以テ被　仰出タルナリ
一三月九日　公方樣思召被爲在當年ハ御暇被　仰出間敷旨被　仰出
一同月十三日御畫御拜領
一同十七日御供減少之儀御老中へ御内談有之

一同廿四日方々樣御定銀元高之內當年ハ半減被進
御勝手御難澁ニ付此度格外御取締　大殿樣清信院樣御定銀ヲモ夫々樣ヨリ御減被遊候付テナリ
左近將監樣ニハ今一步通リ當年御減シ
一四月朔日御屋敷ニテ鐵砲角打候儀自今　公邊ヨリ御達シ無之筈ニ相成ル
例年夏中御中屋敷御上屋敷幷澁谷御屋敷ニ於テ鐵砲ヲ打候儀　公邊ヘ御達有之處相替ル儀モ無之候ハヽ自今御達ニ不及トノ事ニテ本文之如シ
左京大夫樣幷御年寄屋敷モ同斷ナリ
一四月廿六日左之通唱替　公邊ヘ御差出之御書付等ニモ同樣認　御豫參ヲ　公儀ヘ相達候節供奉ト認候ヘ共向後豫參ト認候筈相成
御殿中ヲ殿中ト　西御丸ヲ西丸ト
大御目付衆ヲ大目付衆ト　御巢鷂ヲ巢鷂ト
御手前　御殿中モ自今殿中ト若山西御丸モ西丸ト唱筈五月四日ニ極ル
七月赤阪邸火延燒ナリ
一七月廿一日江戸御屋敷類燒
本日巳刻頃麻布笄橋ヨリ出火南風強大火ニ成左之通類燒
御中屋敷上之馬場山屋敷巽御門並內御長屋覆盆子谷（エチゴ）御長屋過半會所東御門右續東表御長屋三十間余

魯西亞船初テ來航

御上屋敷　西北表内御長屋乾御門共
本日御禮御登城被遊候處右火事ニ付御馬上御乘切ニテ歸御之處御途中水ヲ御好糀町町家ニテ水
差上被　召上水差上候町人へ御金被下被　召上候御器ハ取上ケ別段御金被下

一十月三日魯西亞船紀州之漂流人ヲ送リ來リ東蝦夷地ニ着江戸表ニ出へキ旨申立候趣松前志摩守ヨリ　公儀へ注進ス是魯西亞船來航之始ニシテ是ヨリ巳後外交始メテ多事布令頻煩海岸巡檢等アリ逐一ハ畧ス

右魯西亞船ノ事ニ依リ十一月十一日御目付石川將監村上大學蝦夷地へ被遣兩人松前領函館ニ至リ魯人ニ應接ス魯人長崎ニ至ルノ驗ヲ請フ以テ切支丹ノ像及ヒ器物書物等ノ持參ヲ禁シ彼地ニ至ラハ猶研究シテ上陸ヲユルスヘシトノ信牌ヲ與へ差出タル書翰ハ横文字ニテ我國之知ラサル所ニテ通シカタケレハ差戻旨申渡シ米貳百俵ヲ與ヘテ歸帆セシメ夫ヨリ兩人ハ蝦夷地ヲ巡案シテ寛政五年十二月朔日歸府セリ

一又紀州漂流人ハ幸大夫磯吉ノ兩人ニテ江戸へ召サレ寛政五年九月十八日吹上ニ於テ　上覽同六年五月廿九日外國へ漂流之處年月之艱難ヲ凌キ無恙歸國奇特ノ旨ニテ金三十兩ツヽ被下別儀ヲ以テ在所ヘハ不相返江戸ニ差置番町明地藥草植場之内住居爲仕月々爲御手當幸大夫へ金三兩ツヽ磯吉へ金貳兩ツヽ渡シ勝手次第妻ヲモ迎へ安堵イタシ住居植物手傳等申付ハ見合無役ニテ差置可申外國之樣子等猥リニ物語抔仕間敷ト御老中ヨリ御勘定奉行へ申渡サレタリ右兩人ハ露國ニ貳十貳ケ年滯在セシト云

蝦夷地手入

一蝦夷地御手入之儀ハ此比頻リニシテ去ル天明五年御普請役山口鐵五郎佐藤玄六郎皆川仲右衛門青嶋俊藏ヲ被遣蝦夷地之事情ヲ探索寬政十年三月十四日ニハ御目付渡邊久藏（脱アカ）胤御使番大河內善兵衛政壽御勘定吟味役三橋藤右衛門成方以下御勘定組頭御徒目付等十人蝦夷巡察トシテ出發石河左近將監忠房此事ヲ總括ス時ニ魯人既ニヱトロフ嶋ニ來リ住スル者アリト云フニヨル同年十二月廿七日御書院番頭松平信濃守忠明ニ蝦夷地警備之事ヲ管理被命又近藤重藏守重最上德內常矩等ニ北蝦夷地探撿被　仰付両人皆險難ヲ歷事ヲ畢テ復命セリトナリ

一十月六日　公邊御獻上物其外萬端御省略之儀尚又五ヶ年間年延御達

御勝手御不如意ニ付　公邊御勤向初去ル未年ヨリ六ヶ年間御省略年限之處猶又來年ヨリ來ル巳年迄五ヶ年間是迄之通御省略之筈依テ本文之如ク御達相成相濟候也

一同月九日御家中半知御免

香巖院樣御代天明七未年ヨリ當年迄六ヶ年間御家中半知之處年限之通リ來丑年ヨリ半知御免已前之通浮置米歩增之儀本日被　仰出

方々樣御定銀ハ來年ヨリ五ヶ年之間元高之內貳歩通御減可被進旨モ被　仰出

一同月廿日御拳之鴈御拜領

上使御書院番頭戶川播磨守ヲ以テ御拜領御家督後初テナリ

名稱變更
役名唱替

一十一月廿六日殿中名稱變更御役名唱替數多被　仰出

向後　御內證ヲ大奥ト　　錠前向ヲ御廣敷ト

御上屋敷青山并若山御内證錠前向モ同様唱替へ

右之通相極此外御役人御役名唱替へアリ

一十二月三日都テ寺社へ　御代參ヲ向後　御名代ト唱へ中口ヲ自今中之口ト唱此他　當御代ニ至リ御風替被　仰出御役名唱替等數多ナリ委細ハ職制之部ニ詳カナリ

本居宣長召出

一十二月三日本居中衛被　召出五人扶持被下其儘松阪住トス

中衛ハ即チ宣長也已後十人扶持御針醫格與詰御廣敷廻被　仰付享和元酉年十二月二日病死ス列傳ニ詳ナリ

是歳准醫學館於府下雑賀街 紀伊名所圖會ニ四月十八日官命アリテ創造セリ恒例正月十七日神農祭春秋ニ物産會アリト云々

蝦又玄惟義ノ家譜ヲ按ニ 寛政三年講堂修築ノ時別ニ醫學館ヲ創立同四子年四月ヨリ又玄日々出頭講義ノ旨ヲ記セリ蓋シ本年落成ニ至リシナラン又玄此時ヨリ常ニ館之學頭タリ醫學傳ニ詳也

賞孝子

一是歳左之孝行人へ白銀若干ヲ賞賜ス　事ハ孝子傳ニ詳也

紀州名草郡有本村　農　平藏

同　同　農　長藏

勢州松阪領曲村　農　兵助

寛政五年癸丑　公二十二歳

尊號事件

一二月十六日中山大納言愛親卿正親町大納言公明卿登城

両卿ハ本月十日下向到着十一日松平定信侯役宅ニ參會本日登　城引見アリ抑此件タルハ寛政政事中有名之大問題ニシテ世間筆記ノ者亦尠カラス時之執政樂翁侯一世之技倆ヲ顯シ斷然天下之名分ヲ嚴正シタル大事件ナレハ簡短ニ其概畧ヲ左ニ掲ク而シテ両卿ハ三月七日罪アリトテ老中戸田釆女正氏敎役宅ニ於テ申渡シ中山ハ閉門正親町卿ハ逼塞即日傳奏屋敷ヲ去リテ青松寺ニ屏

居十日両卿發途歸洛セラル後此事ニ座シテ公卿方之内罪ヲ得シ者アリト云

十五代史ニ曰ク　初メ

後桃園天皇嗣ナクシテ崩御

當天皇踐祚御即位ノ後　御實父　閑院宮ヘ太上皇之尊號ヲ奉ラレ度トノ　叡慮アリ承久文安之故事ニヨリテ諸公卿亦之ヲ贊スルモノ多シ獨鷹司左府政熙公異議ヲ獻ス中山愛親卿ハ此事

天皇ノ至孝ニ出ルヲ以テ宜シク尊號アルベキヲ言フ　天皇議ヲ關東ニ下ス松平定信等返曰ク位ニ即カズシテ　上皇之號ヲ奉ル先例アリトイヘドモ禮ノ正ニ非ス名分ヲ亂リ僭窃ヲ啓ク甚不可ナリト往復數回事行ハレズ

「時ニ　後櫻町上皇在シテ又　閑院宮ヲ以テ太上皇トスルトキハ両上皇並立ツ也是關東之議甚不可トスル所以ナリ」之カ爲東西協ハズシテ事端ヲ生セン事ヲ慮リ關東ヨリ中山殿下向之事ヲ請ハレシニ依テ遂ニ下向ニ及バレシトナリ

按スルニ此時之事詳カニ其實ヲ書スル者ヲ見ス今夢蕉一鈴木某之隨筆一之記ス處ヲ抄出ス曰ク初メ王人武人白河侯ト相對ス白河先其遠道ヲ跋渉セシヲ勞セラル正使言ヲ發シテ曰ク兼テ度々申下シヽ如ク上方ニテ評決アリ　當今至孝之御心ニ院號ヲ御所生王ニ奉ラレントノ御内慮也因テ此事ヲ關東ニ命セラレシ事至テ丁寧ナリ　將軍家既ニ鞅掌ノ重キニ任セラル御一言ニテ事決スベシ此事關東政府ニ達スベシトノ事ニテ小子輩罷下レリ夙ニ聞足下輔佐之職ニ在リ門閥才德ヲ以テ將軍家ヲ輔翼セラル不知此一事如何アランヤト徐謹ンテ命ノ厚キヲ拜セリ抑　當今　御孝心實ニ感歎敬服セリ兆氏ノ幸何事カ之ニ如ンヨクヨク厚キ　叡慮ニテコソ關東ニ仰下サル　聖德之篤キ延天下雖難及事也仰クトモ猶餘アリ雖然此等之事ハ關東ニモ側タル事アリ其事ハ名器至テ重キ事ニテ古ヘヨリ無二上トモ偽人後六々ト云フ事アリ事輕卒ニスヘカラズ容易ニ小臣等ガ承ルベキ事ニアラズ依テ此事ハ不肯ト答ヘラル爾時王人重ネテ曰ク臣等此度來リシハ厚キ　勅命アリテ臣等ガ詞ヲ傳ナバ關東ニテ遲疑猶豫ノ事アランモ計リガタシ其證ヲ傳ヘヨトテ辱クモ　御手勅ヲ賜ハリ帶テ是ニ在リ其輕易ナラザル推量シ給ヘト　勅書ヲ捧ント手ヲ懐ニ入ル時侯忙シク止メテ此事實ニ容易ナラザル一大案ナリ

勅書之事ハ陪臣等カ妄リニ目ニ觸ラルヽベキ者ニアラズ先ニモイヒシ如ク厚キ勅命ハ難默止ト雖モ尊號ノ如キハ敬愛ノ心ヽ分ニ于彼ト云フ事モアレハ決シテ行フベキ事ニアラズ副使ハイカヾ思ハルヽヤトアル時副使曰ク小子ハ正使之言ヲ傳フルヲ監察セン爲ニ來レリ事ノ成否ハ預ル所ニアラズト侯然ラバ御答ハ是迄也トテ内ニ入ラルヽ以上原文ニ從ッテ一字ヲ改メズ」トアリ其始末少シク明了ナラザル如クナレ共因テ以テ事情ヲ考フレハ大抵測リ知ルベキガ如シ

松平越中守辭職

一三月江戸赤阪邸中山屋敷ニ學舘ヲ新設明敎舘ト命名漢學敎授ノ校トナス
　御用人南部市之丞御藥込頭同樣勤菊地内記ヲシテ學ヲ督セシメ敎員ヲ置ク詳ニハ學制ノ部ニ記ス

一五月五日御登　城　若君樣 竹千代君ヘ 御對顔御扆御拜見
　竹千代樣昨年七月十三日御誕生本年六月晦日御逝去　孝順院樣ト稱シ奉ル

一七月廿三日松平越中守辭職
　越中守定信侯ハ去年八月御輔佐之職并御勝手掛等辭職之處御許容無之本日遂ニ願ニヨリ免セラレ左中將ニ任シ溜詰ニ列セラル侯ハ田安宗武卿ノ御子ニシテ正シク　有德公之御孫　南龍大君之御玄孫ナリ
　御幼君 文恭公 ヲ輔佐奉リテ寛政之改革ヲ行ハレシ偉勳功績及ヒ其言行等ハ關ノ秋風白河秘書乃至近世發刊之 退閒雜記 樂翁公遺書 ニ詳ナリト雖モ　文恭公之信任深ク君臣知遇之厚キ抔ハ　文恭公實記閑窓秉筆ノ如キニ依テ知ルベシ

十五代史ニ曰ク　定信天明七年六月職ニ任シテヨリ是ニ至テ七十四月幼主ヲ佐ケテ大任ニアタリ忠賢ヲ擧用シ姦小ヲ黜斥シ弊事ヲ改メ善政ヲ行フ風俗ヲ正シ紀綱ヲ振フ内外之事修擧セザルヿナシ去ルニ及ンテ人皆之ヲ惜ム事卒ニ起リ人其故ヲシルモノナシ此時定信ハ　將軍之親命ヲ受テ深ク感泣シ御用部屋ヲ出ルトテ右筆目付之人々ニ向ヒ職中輔翼之勞ヲ謝シテ退カレシヲ見テ諸吏涙ヲ揮ハサルハナシ此日政事向ノヿ大小ト無ク定信在職ノ時ノ如ク執行フヘキ旨諸役人ニ命ヲ傳フ殊ニ松平信明戸田氏敎本多忠籌加納久通ナド皆定信ガ擧用スル所ナレバ其成規ニ隨ツテ之ヲ隳スヿナシソモ〳〵天明ノ初メニ至リテハ士民ノ遊惰奢侈日ニ甚シク諸番士之宿直ヨリ退ク者鎗挾箱ナドヲハ從僕ニ荷ハセ其宅ニ返シ一同ニ袂ヲ連子テ遊里ニ赴クヲ常トス又其自宅ニ會合スルモノハ皆下方之擧ヒヲナシ歌舞伎狂言師又ハ藝者女ヲ友トシテ淫樂スルヿヲ耻トセズ武家之作法町人野郎ニヒトシク男女之間之猥リカハシキ樣實ニ言フベカラザル惡風俗ニテ文武廉節ハ地ヲ拂ヒタル世態ナリシヲ

定信ノ出ルニ及ンテ悉ク之チ改革シ老壯子弟チイハズ皆俄カニ學問武藝チ勵マシテ更生人ノ如クナリシ事ハ其世之記錄ニモ見エテ誠ニ見覺シキ事ナリ然共此ハ近ク尋常人之聞見ニ接セシ處ニシテ其遠大之謀永久之慮ニ至リテハ又庸人之窺及フ所ニ非スト云フヘシ

若君樣ト稱

一九月十五日御登　城於御座之間御對顏　繁次郎樣御事御弘メ　若君樣ト可奉稱旨被　仰出

繁次郎樣ハ本年五月十四日御誕生後將軍家慶公即チ愼德公ナリ

九月浚松阪城溝

一同月廿一日松阪御城堀土砂浚御達

一十月朔日御登　城初テ　若君樣へ御對顏　翌日爲御禮御登　城被遊

一万両被進

一十二月廿八日御貸附金壹万両御廻被進

一是月火消纏六曜之葵ニ改マル

一同月御中屋敷表御殿御書院滿作

右御普請去年十一月十五日繩張本年四月三日釿初八月十七日柱立九月十三日上棟同月廿九日圓滿寺參上御祈禱　翌六寅年三月朔日御披キアリ

一是歳左ノ孝行人へ白銀賞賜ス　事ハ孝子傳ニ詳ナリ

勢州松坂領　獵師村　平助妻　トヱ　同領　同村　善助娘　幾由

寛政六年甲寅　　　公二十四歳

種姫君御逝去

一正月八日　御簾中樣種姫君御疱瘡ニテ御逝去

一三月十五日以　上使御國許へ之御暇被　仰出

四月十五日江戸御發駕東海道美濃路通京都其外御立寄伏見御乘船無之御道中十六日振ニテ御越
被遊
五月朔日若山　御着城
七月朔日紀州へ　上使御書院番頭中坊遠江守被　仰付同日御暇
十一月、巡撫熊野
公有詩曰、封疆元在海山隈、巡覽兼採勝槩回、始識嶺南春色早、折來插駕一枝梅
三山記畧云、甲寅秋、我公畧地邏海、南到熊野、遂有事于三山、因命有司、檢其耆老及力田孝悌者、
賜以錢帛米相等、

三山御參詣

一十一月熊野三山　御參詣
是月十九日若山御發駕三山御參詣濟木本浦迄御越シ夫ヨリ御引返シ御往來十九日振ニテ壬十一
月七日御歸城
一是歳勢州一志郡川口村農利兵衛養子常之助カ孝行ヲ賞シ白銀ヲ賜フ　事ハ孝子傳ニ載ス

松阪鄉校ヲ建ツ

是歳、建松阪鄉校、

寛政七年乙卯　公二十五歲

一二月十五日　大殿樣 觀自在公 へ於御下屋敷御家督初テ御歸國幷兩度之御任官御兼御祝ヒ御膳差上
被遊
一三月五日　公方樣於小金ヶ原御鹿狩

前夜子半刻　出御本日亥刻還御親カラ長槍ヲ以鹿五ツヲ御仕留被遊萬端享保度ノ御例ニ被爲準

三月東覲、路拜男山八幡宮、遊覽宇治山水、上京師、拜加茂神祠、

一同月十六日　御參府御着座　（二月廿七日若山御發駕也）

一四月十三日、攝州多田院、神影寶物等、御取寄　御覽被遊

一六月　公儀ヨリ朝鮮之漁船等漂流之節心得方被　仰出

御勘定奉行へ

長門　石見　出雲　肥後　筑前　壹岐

一領分ノ浦方へ朝鮮之漁船ナド漂流之儀毎度之事ニ候然處浦方之獵師共ナド心得違右漂流之危難ヲ見懸候テモ敢テ差搆モ不致中ニハ却テ地方へ不近寄樣取計候儀等有之哉ニ候都テ漂船難儀之樣子見請候ハヽ懇切ニ救ヒ可申儀勿論ニ候處領主へ訴候儀ナト事六ヶ敷樣ニ存候テ不法無慈悲ナル取計等有之候テハ以テ之外成事ニ候殊ニ異國へ對シ候儀ニ候得ハ猶更如何敷次第ニ候條右体之趣無之樣可被申付候以來不束之筋相聞候ハヽ其領主ハ不念之事ニ付嚴重之御沙汰可有之候間精々厚ク可被入念候

一十月九日久野近江守　御家老勢州田丸ヲ領ス　壹万石高ニ被　仰付

寛政八年丙辰　公二十六歲

一二月六日麴町平川天神へ御參詣

一同月廿五日目黑不動祐天寺へ御參詣以後度々御參詣アリ

四月歸藩、取路於木曾、遊覽妙義山水、訪美濃養老寺

一三月十五日御國許へ之御暇被　仰出十八日江戸御發駕四月五日若山御着城

一六月九日　御宮御參詣御差支之節ハ芝　安國殿へ　御參詣被遊候樣ト被　仰出

十二月、琉球聘使來

一十二月十八日琉球人參上

中山王代替ニ付進物

壽帶香二臺但五箱　青貝料紙硯箱　練芭蕉布一臺　泡盛酒　二壺

正使大宜王子　御書院御下段へ通ス　御菓子御茶出之　給仕御書院番

副使　御二ノ間中程ヨリ下へ通ス　同　同

正使自分進物　龍涎香　十袋　大平布　十疋　錫板齋　十端

通詞一人　豐後守殿家老一人　用人一人　中官七人　留守居一人附添

御書院御緣頰へ請ス　中官ハ柳之間へ　御茶御菓子被下

一右使節十二月六日登　城拜禮アリシ也

一是歲左ノ孝行人へ金米ヲ賞賜ス　事ハ孝子傳ニアリ

金若干　紀州那賀郡冷水村　農　市大夫　トラ

金若干　同　同　段村　農　半太郎

米若干　勢州松阪領黑野村　農　新助妹　幾久

是歲川合衡、著周禮考工記圖解、成上之

寛政九年丁巳　　　公　二　十　七　歳

三月東覲

一二月二十七日御發府シテ若山御發駕三月十五日江戸御着座

一同月廿八日若山御城柳之間ヲ五友之間ト唱ヘ替

同五月八日江戸若山御年寄御側御用人詰所ヲ奥御用部屋ト御年寄方御側方坊主ヲモ奥御用部屋坊主ト唱ヘ替

一寛政十一未年正月廿一日若山御城蘇鐵之間ヲ麝香之間ト唱ヘ替アリ

一五月五日御登　城　大納言樣家慶公へ御對顔

家慶公去年十月十五日御元服本年三月朔日從二位大納言ニ御任叙右御元服　御官位後、初ニ付テナリ

一六月廿五日端午之御內書初テ御頂戴

一九月廿日左近將監樣藻光院君へ之　上使若御途中ニテ　殿樣御行逢之節御會釋御差別無之筈被仰出

一十月廿五日兎血丸調製以來相止

一十一月七日淺草觀音へ　御參詣同所傳法院へ御立寄

寛政暦施行

一同十八日寛政暦施行之旨　公儀ヨリ布達

寶暦甲戌暦差錯有之改正之爲メ大阪御定番同心高橋作左衛門ヲ天文方ニ被召出校訂被　仰付新

異國船取計方

曆出來ニ付御奏上之處此度京都ニ於テ改曆　宣下有之來午年ヨリ施行之旨被　仰出タリ名ケテ寬政曆ト云フ

一是月異國船漂着之節取計方卒示無之様　公儀ヨリ布達
寬政三亥年委細相達候趣勿論ニ候へ共此方ヨリ事ヲ好ミ手荒成働仕出間敷異國船ハ海上ニ向候テハ石火矢打候習ハシノ趣之事ナリ是此節對馬海上ニ異船數隻アリテ大砲ヲ發シ其行衛ヲ不知ト云ニ付テナルベシ
又此比魯西亞人エトロフ嶋ニ上陸シ十字架ヲ建ツ是ヨリ先キ魯人竊カニ蝦夷地ニ入リテ居住スルモノ往々アリト云フ

一十二月三日和歌玉津嶋社へ
禁裏ヨリ御奉納物有之

一同月十八日　公儀御獻上物來年ヨリ已前之通御獻上
去ル未年以來御獻上物御省略之處當巳年年限ニ付テナリ
右之通ト雖モ　御手前ニテハ猶又來年ヨリ十ケ年是迄之通御省略

一御獻上物之外御勤向之儀ハ御省略年限中ハ是迄之通被遊御老中方御へ御贈物之儀モ是迄ノ通御控被遊候樣差圖有之

一是歲左之孝行人ヘ金銀若干ヲ賞賜ス　事ハ孝子傳ニ詳ナリ
勢州松坂領權現前村　農長五郎後家　カン
同田丸領入合野後村　農　安兵衛
同領五柱村　農　嘉七

寛政十年戊午　　　公二十八歳

一正月十七日向後御參暇御發駕日限極ル

　三月廿一日　江戸御發駕　二月廿二日　若山御發駕

一二月晦日深川八幡ヘ　御參詣茶屋宗理宅ヘ　御立寄

一三月四日御庭爲御見物

　日光御門主樣御入來被遊

一三月五日一條樣御旅館愛宕下青松寺ヘ御越被遊

　一條樣此回御下向ニ付テ也同十三日十六日兩日ニ御同所樣ヲ御招請被遊

四月歸藩

一三月十五日御歸國御暇被　仰出

　廿七日江戸御發駕四月十二日若山御着城

五月獵於花山

一五月廿二日花山ニ於テ追鳥狩被遊

一七月廿九日百武丈右衛門中奥御番格初十一人ヘ禮儀類典新寫被　仰付

　以後數人ヘ寫物勤被　仰付寛政十二申年四月十四日落成惣合計五百十卷外ニ首卷壹卌目錄一綸

　圖三、砂之丸及二ノ丸御藏ヘ納ル

一享和二戌年二月右不殘江戸ヘ廻リ御小姓頭取ヘ御預ケ後文化六巳年四月廿八日御納戸頭ヘ御預

禮儀類典
新寫

ニ成ル

一十月廿七日曉江戶赤阪御屋敷內出火　御殿向無ニ別條ニ外ニ類燒無之

一十月川合襄平衡ニ命セラレ畫工ト共ニ友ヶ島之勝景ヲ探ラシメラル襄平友嶋記ヲ著シテ上ル

寬政十一年己未　　公二十九歲

一正月十六日於　公儀蝦夷地經營之儀ヲ被　仰出

今度異國界御取締被　仰付候ニ付東奥蝦夷地之內島々迄當分御用地ニ相成其方共御用被　仰付候是迄松前若狹守右之土地ヨリ年々收納之分ハ公儀ヨリ若狹守ヘ相渡リ候樣被成下候ニ付右場所ハ萬端其方共指圖ニ任セ候樣若狹守ヘ申渡候間被得其意尙土地之樣子モ追々申談之上見分有之蝦夷人敎育之儀ヲ初メ風俗ヲ替候儀幷交易ノ趣法迄モ存寄ニ任セ一躰開國之御趣意ヲ含ミ服從致候儀第一ニ可被心得候各御用之儀ハ深キ御趣意ニテ被　仰出候儀ニ有之御國界之事ニモ候得ハ其心得ヲ以テ銘々粉骨ヲ盡シ今度之御趣意ニ不違樣進退指引精勤可被致候尤不得止儀ハ伺ニ不及取計可被申候御入用向等之儀ハ不少儀ニモ可有之候間追々可被相伺候

右ハ御勘定奉行石川左近將監忠房御目付羽太庄左衛門正養御使番大河內善兵衛正壽吟味役三橋藤右衛門成方ニ被　仰付タルナリ

此時松前志摩守領分東蝦夷地之內ウラカハヨリシレトコニ限リ其餘之嶋々七ヶ年間御用地トナリ又二月十日ニ村上三郎右衛門常福遠山金四郎景晋長坂忠四郎高景等ヲシテ松平信濃守ト共ニ蝦夷地ニ赴カシメ三月十七日御勘定近藤重藏ヲシテ再ヒ蝦夷地ニ赴カシメ八月十二日松前若狹

徳川淵源ヲ上ル

守ニ命シ其官ニ收ムル所東蝦夷地之代リトシテ武州久喜村外十二ケ村五千石ノ地ヲ賜ハリタリ

三月東覲

一二月十九日御參府シテ若山御發駕三月三日江戸御着座

一三月二日大宮御鷹場ニ於テ　公儀御鹿狩有之

是歳春江馬稚川徳川淵源八十四卷ヲ編集シ上ル

稚川元與右衛門義知ト稱ス四百石高中之間番頭格ニテ清信大夫人（觀自在公御生母）ニ勤務中天明四辰年　大夫人ヨリ御當家　大祖御由來之事ヲ和字ニ編纂上ルヘキノ命ニヨリ　香巖公ヘ伺ノ上諸舊記傳記野史小記等參考御年譜全部八十四卷編集成テ上ル本年十一月賞賜アリテ尚惣目錄ヲ上ルベキ旨ニヨリ翌十二申年四月上ル時ニ　大夫人去年逝去遺命ニヨリ本城ヘ收二藏之一　大夫人御在世之時ニ之ヲ徳川淵源ト題シ給フトノ事江馬與右衛門傳ニ詳ナリ

一五月朔日　大納言樣（家慶公）御旗初テ御拜見御參府後初テ御對顏

一六月十五日　神祖ヨリ御附屬御家臣之系譜ヲ　公儀ヘ提出

右ハ　神祖ヨリ御三家方ヘ御附屬之万石以上以下面々ノ系譜可差出旨御老中松平伊豆守ヨリ差圖ニヨリ詳細調査ノ上本日御差出右調ニ付御家中ヘ達面左ノ如シ

一御三家樣ヘ從　公儀御附屬ノ面々万石以上以下トモ系譜御出サセ被遊候樣松平伊豆守殿被　仰聞候間右由緒有之面々系譜取調早々可差出候事

御附人之節ハ輕キ勤ニテモ當時御徒格以上ハ差出候事

御附人之節御徒格相勤當時輕キ勤致居候者ハ勿論差出御附人ノ節輕キ勤ニテ其以後御取立被成下又當時輕キ勤ニテ罷在候モノモ先認出候事

一認振別紙箇條書幷案紙之趣ニテ簡易可被認候事

一案紙之通リ古キ家筋ハ誰ヨリ何代ト認遠祖ハ委ク相認候ニ不及御當家御代々樣ヘ御奉公之儀ハ軍功等迄委ク相認候事

一御附屬以後代々之儀　公儀ヘ附候儀ハ不殘相認御手前ニテノ勤ハ書出ニ不及家督隱居病死ノ年月日相認病死之節ノ年齡相認候事當代マテ右之通可書出

一減知御役　御免御咎幷歸參等ノ儀ハ御手前ニテノ被　仰付ニテモ可書出事

一本家致斷絶別家ニテ相續致居候輩ハ其段認加ヘ差出候事

右之外其宅ヘ　御成等ノ儀又ハ格別ノ拜領物御譽等其家ノ美目ニ存候儀ハ事短ニ書載可申候除加齡ノ儀ハ先可書出事

碑銘幷著述或ハ格別ノ行狀等留控有之分ハ別冊ニ書出候事

權現樣ヨリ御附人並武功由緒有之家筋姓名

紀伊殿家來之内御附人家

水野飛驒守	安藤帶刀	三浦長門守	久野近江守
水野美濃守	戶田金左衛門	菅沼半兵衛	伊達源左衛門
朝比奈惣左衛門	村松鄉右衛門	大草四郎右衛門	鈴木源兵衛

海野兵左衛門
加納兵右衛門
曾根孫大夫
福岡太郎八
西村孫左衛門
大村彌兵衛
長野九左衛門
宮崎善左衛門
松平十郎右衛門
土屋元左衛門
市川門左衛門
神野八郎兵衛
竹田景安
三井孫左衛門
芝田八左衛門
若林彌兵衛
渡邊又右衛門

筧勘助
三上甚大夫
丹羽金十郎
柘植傳次郎
朝倉三之丞
間宮一八
澁谷文右衛門
落合左平次
天方幸之丞
野間林三郎
加藤彌右衛門
丹羽卯右衛門
飯村又新
毛利嘉一郎
內藤兵四郎
橋本辨左衛門
畔田半右衛門

澁谷角右衛門
下條作左衛門
丹羽久左衛門
天野孫惣
粟生源五左衛門
山田八右衛門
澁谷八右衛門
大高源右衛門
笠原助左衛門
小嶋武左衛門
內藤甚五左衛門
稻生嘉兵衛
村田九郎右衛門
小栗又右衛門
幸田金右衛門
橋本八郎右衛門
朝岡八十郎

加納平次右衛門
戸田藤左衛門
渥美源五郎
村井久右衛門
岡部小左衛門
伊藤又兵衛
岡部惣五郎
長坂小右衛門
波切彥四郎
水野喜兵衛
有賀喜兵衛
三宅惣右衛門
朝倉作左衛門
後藤角兵衛
有馬吉藏
山下茂兵衛
高岡一郎左衛門

飯田甚三郎　若尾平右衛門　四宮太郎左衛門　大屋小平次
布施左五之丞　鈴木平六　大藪左門　板坂卜齋
由比七兵衛　由比與五右衛門　野々山七左衛門　武津喜右衛門
吉田八之丞　上野三郎四郎

御附人之家ニテ紀伊殿ヨリ松平友三郎ヘ附屬

諏訪部衛守　望月次左衛門　野本庄三郎　近藤尋之助

御附人之家ニ候得共年經候事蹟難相分品モ有之筋

後藤幸十郎　井關又助　水上儀左衛門　竹村十右衛門
井田惠左衛門　東仁右衛門　井出七郎右衛門　安井熊之丞
古屋角之右衛門　小谷兼松　川合善之進　森川九郎左衛門
杉浦彦左衛門　池端豐楠　高橋爲吉　戸田幸助
榊原忠次郎　長田權十郎　遠藤傳左衛門　細井八右衛門
山本吉左衛門　大橋辨之進

御附人之節ハ　御目見以下ニ候得共當時之者幷歷代之内紀伊殿目見以上相勤候筋

杉山次左衛門　臼杵雲平　山崎彌右衛門　鈴木理兵衛
功刀勘右衛門　平尾久左衛門　石原七左衛門　川村角右衛門
内藤出來助　堀江藤吉　倉地權左衛門　瀧村瀬左衛門

鈴木平作　熊澤七兵衛　川村又右衛門　齋藤友右衛門
牧野恒右衛門　堀部三次郎　山田金兵衛　福田彦兵衛
小川辨左衛門　淸水吉兵衛　大村忠藏　稻垣長次郎
勝田七郎左衛門　三枝平右衛門　川口彌右衛門　嶋與一左衛門
神谷六右衛門　山本甚八　宇都宮彌一郎　金原與次右衛門
野口彦左衛門　藤村三右衛門　堀內六助　岡本楠之右衛門
茂野善兵衛　前田小十郎　沼田六兵衛　堀內定次郎
野口政之助

紀伊殿家來之內御附人但先祖武田家ニテ武功由緒等有之者

市川甚右衛門　薗田伊兵衛　山本十郎右衛門　三浦權七郎
横井次大夫　渡邊六郎左衛門　柴田利久右衛門　小笠原次右衛門
蔭山角藏　丹羽楠次郎　大石平右衛門　江馬與右衛門
尾寄平左衛門　尾崎所左衛門　川北長左衛門　犬塚甚七郎
小笠原久兵衛　小笠原與左衛門　小笠原庄太夫　小笠原磯四郎
小笠原兵右衛門　小笠原惣兵衛　小笠原孫次郎　小笠原林右衛門
小笠原一郎左衛門　畔柳淺之助　渥美龜吉　芦川權大夫
芦川甚五兵衛　上野三郎　長谷川鄉八　三倉兵吉

茂野善右衛門　近藤角五郎　忍穗彌五右衛門　由比甚太郎

　御附人之家ニテ水野飛驒守與力

平岩助右衛門　夏目彌右衛門　岩手九左衛門

宮川伍助

　同斷安藤帶刀與力

山本平兵衛　長坂造酒右衛門　淺山源之右衛門　黒柳九右衛門

三倉宇右衛門　落合彌市兵衛　今村喜左衛門　戸田市之進

佐津川彌大夫　成瀬林左衛門　門奈德右衛門　渥美八右衛門

辰田權左衛門　布目圓左衛門　青木隅右衛門　山川惣右衛門

豐田三郎兵衛　岡本彦右衛門　駒田五右衛門　加藤文平

　御附人家ニテ中古斷絶分家ニテ相續之分

佐野伊左衛門　小柳津喜八郎　海野五郎三郎　松下三五之丞

小栗彌左衛門　原田權之助　三田萩右衛門　久米武兵衛

石野善兵衛　石野忠左衛門　河嶋猶右衛門　本間五大夫

木梨玄庵

　御分人之節ハ　御目見以下ニテ本家ハ中古斷絶分家ニテ相續歷代之内　紀伊殿御目見以上相
勤候筋

前田八兵衛　三雲周平　美濃部常三郎

輕キ役儀ニ候得共御分人之節ハ　御目見以下之者

役者　松井市大夫

御附人ニハ無之候ヘ共　權現様上意ヲ以テ南龍院殿ヘ被呼出候家

垣屋十郎兵衛　菅沼九兵衛

御附人ニハ無之候ヘ共先祖ハ　權現様ヘ御奉公或ハ他家ニテ相勤武功由緒有之拜領物等致候者ニテ當時相續之者

駒木根隱岐　大崎三左衛門　九鬼四郎兵衛　宇佐美三郎兵衛
大嶋伴六　川合内膳　藪三左衛門　門奈與十郎
木村平左衛門　千宗左　飯田彌兵衛　寒川孫九郎
安藤十左衛門　牧野次郎兵衛　桑原幸左衛門　淺井丈左衛門
岩根宇右衛門　石黒楠之丞　堀尾十之右衛門　津田常吉
青木三之丞　野間久左衛門　吉川源五兵衛　大橋文次郎
下村友吉　松嶋七左衛門　片桐徳三郎

右系譜調ハ　御三家ニ限ラス寛永以後諸家之系譜ヲ補修訂正之事本年正月十五日ニ被　仰出若年寄堀田正敦御奏者番堀田豐前守正毅ニ惣裁被　命大目付池田筑後守御目付小長谷能登守松平田宮與御右筆組頭近藤吉左衛門表御祐筆屋代太郎等前後數十人從事ス又寛政三年万石以下　御目見以

上之先祖書可差出旨被　仰付候處今以不差出向モ有之早々取調當年中ニ可差出旨ニテ調方等之儀ヲ當四月ニ布達アリタリ

八月十三日、以テ當ニ南龍公就藩二回支干ニ設ニ祝筵一、

一八月十三日　南龍院様紀州御入國支干相當御祝儀有之　但三回目也　是迄御祝之品見エズ

一是歲若山新魚町岩橋文六娵小傳之孝行ヲ賞シ金子ヲ賜フ　事ハ孝子傳ニアリ

是歲、命修諸士家譜

寛政十二年庚申　公　三　十　歲

一正月十七日紅葉山御豫參天氣合ニ付御出迎場所御用捨被　仰出

一二月廿八日御登　城御黑書院ニ於テ　三卿樣方へ初テ　御對顏

御相見之御式ハ享保之御例ナリト此日　水戸樣ニモ御同席之由

一三月十六日池上本門寺へ御參詣

一四月朔日日蝕ニ付西丸御　登城御用捨被　仰出

四月、歸藩路入京、編採諸勝、

一同月廿八日御國許へ之御暇被　仰出

閏四月二日江戸御發駕同廿二日若山御着城

御暇御延引之儀ハ於日光　大猷院樣御法會之御内意當二月廿六日有之タルニ依テ也

一五月蝦夷地測量圖初テ成ル

伊能忠敬測量　下總人伊能三郎右衛門忠敬ニ被命蝦夷地方ヲ測量地圖ヲ製セシム是測量圖之始也ト云忠敬享和元　酉年二月ヨリ豆相常陸ヨリ陸奥海岸ヲ測量セリ

蝦夷地圖成ル　一此年頻リニ蝦夷ヘ派遣ノ命多シ則二月十一日ニ御勘定壹人支配勘定貳人御徒目付壹人二十三日ニ　御手許ヨリ御小納戸頭取戸川藤十郎御小納戸大河内善十郎支配勘定壹人ヲ被遣三月十日ニ千人頭原半左衛門同十六日ニ御勘定組頭村田鐵太郎九月十六日ニ御勘定奉行吟味役鈴木甚内等イツレモ蝦夷地ヘ被遣享和二年二月ニ至リ箱館奉行ヲ被置蝦夷地開拓及ヒ政畧ノ事委細布令アリタリ

一五月九日藤澤遊行上人若山ヘ巡行ニ付登　城拜謁大奥ヘ召サル

一九月　一橋大納言樣江戸御中屋敷御庭御見物シテ被爲入御饗應アリ

賞孝子　一是歲左之孝行人ヘ金米ヲ賞賜セラル　事ハ孝子傳ニ詳也

紀州名草郡永穗村　農藤藏妻　マン

同日高郡下富安村　傭夫　久藏

同那賀郡新田村　農元八倅　文助

是歲、下令、振起學政

寛政十三年辛酉　享和ト改元　　公　三　十　一　歲

三月東覲

一二月廿二日御參府シテ若山御發駕三月七日江戸御着座

十五日御登　城

改元　一同月廿七日享和ト改元被　仰出

本居宣長歿ス

間宮林藏北韃紀行ヲ著ス

一六月十八日　御三家方土用中縮帷子半袖縮伴被爲　召候品御老中へ御内談之處御勝手次第ト差圖有之

按ニ縮帷子着用無用トノ服制ハ無之モ奢侈之廉ニヤ又ハ畧式トイフニヤ殿中ニハ遠慮スベキモノト見エ維新前迄ハ大暑ニ際シ御老中方着用登城アリトノ事御城附ヨリノ報告ヲ待後着用之習ヒ也

一十月七日

公方樣思召ニテ御庭之菊花與御醫師ヲ以御拜領

御庭へ被爲　成菊花上覽之上件之通御拜領尚菊根御所望被成候樣トノ上意アリト云

十月與水戸公、同臨昌平學校、

一同月十一日　水戸樣御同道初テ昌平阪聖堂へ御參詣

寛政十年正月聖堂再建春秋釋奠ノ節以來万石以上太刀馬代獻備之儀幷學問所御取建被　仰出同年十月十日聖堂上棟式有之造營ハ水府公ヨリ上ラレ明人朱之瑜カ作レル木像ヲ摸シ落成同十二年二月入校之制被　仰出本年四月廿日　將軍御參拜アリ以來維新前ニ至ル迄　御家ヨリモ年々之釋奠ニ御名代ヲ以テ太刀馬代御獻備アリシ也

是歲本居宣長歿、年七十二

一是歲間宮倫宗獨歩蝦夷唐太ヨリ黒龍江ヲ渡リ山海關ニ抵ル北韃紀行ヲ著ス

本年正月廿八日　幕府御勘定奉行石川左近將監忠房御目付羽太庄左衛門正養ヲ蝦夷地へ出張セシメラル倫宗之ニ隨行遂ニ此擧アリシ也

東蝦夷地上地

熊野本宮御再建

望月鴻助自殺ス

享和二年壬戌　公　三　十　二　歳

一二月廿一日御直約ニテ松平讃岐守様ヘ被爲　入御饗應アリ

此後モ御在府年ニハ度々被爲　入アリ

四月歸藩

一三月十五日御歸國御暇被　仰出

四月六日江戸御發駕木曾路通リ同廿二日若山御着城

一當戌年御歸國之節ヨリ宿割御供番御小姓組罷越ニ不及御書院番御用部屋吟味役壹人罷越六日御先ヘ出立御關札吟味役引纒罷越候筈去十月廿九日被　仰出

文化七午年御歸國之節ハ宿割御小姓組一人御書院番一人御用部屋吟味役壹人罷越シタリ

一七月廿四日松前若狹守章廣カ所領東蝦夷地御用ニ依テ永代上地西蝦夷地ハ是迄之通支配可致旨被　仰出

一九月熊野本宮御再建阪西又六ヘ御用掛被　仰付

享和三年癸亥　公　三　十　三　歳

三月東覲

御參府ニ付二月十九日若山御發駕三月四日江戸御着府

一六月十四日御供通御行列改正　公儀ヘ伺ニ御申ニアリ

一七月廿九日御用人安藤札右衛門官舍ニ於テ江川太郎左衛門（豆州韮山御代官）家來望月鴻助自殺ス

鴻助名ハ直好初メ五郎治ト通稱ス江州甲賀郡某村之人寛政庚戌ヨリ韮山ノ代官江川太郎左衛門英政ニ仕フ壬子英政死シ子太郎左衛門英毅職ヲ襲テ代官トナリ直好ヲ信任シ擢テ元締加判トナス是ヨリ先江川氏累代公私積債ノ爲メニ殆ト家運モ立サルノ難ニ及べリ嘗テ英毅小兒タリシ時母ノ膝ニ在リ父英政ノ來ルニ及ヒ乳ヲ飲ミ止メテ歡笑ス英政其頭ヲ撫シテ嗚呼此兒成長スルモ永ク負債ノ爲メニ勞苦ヲ爲スヘシト歎ス直好之ヲ聞キ慘然慨歎シ爾來主家之負債償却ヲ己カ任トナシ百方心力ヲ盡スモ如何共策ナシ寛政十一己未年官勘定吟味方改役勘定方及ヒ普請役ヲ韮山ニ派出シ江川英毅ノ職務ヲ調査セシムルニ不正之事ナキヲ以テ庚申歲松平伊豆守勘定奉行ヲシテ英毅ニ達スル樣ハ舊家之裔ナルヲ以テ曩年手代不正之事措テ問ハサレ共速ニ負債償却ヲナスベシトナリ此時ニ方リ千金ヲ得ルニ非レハ此難ヲ免カル可カラズ然レ共何人カ此急ヲ救ノ者アラン獨リ紀州公　ハ古キ緣由アリ就テ哀願セハ庶幾クハ允許ヲ得ンカト因テ英毅ト謀リ享和三年三月直好江戶ニ來リ英毅之書ヲ御用人大御番頭格八百石御小姓頭兼務井田幸次郎ニ呈ス其文ニ曰ク

奉願候覺

亡父太郎左衛門儀寳暦八寅年如父時御代官被　仰付伊豆甲斐國ノ内ニテ高五万石支配ハ一ヶ年諸入用御定之通被下置御役相勤罷在候處明和五子年伊豆國付八丈島青ヶ嶋大島三宅島御藏島利島新島神津島支配被　仰付候右島方之儀爲日紬八丈黃紬三十八反宛年々諸入用ニ被下置候ニ付右紬相拂代金ニ仕候ヘハ凡金廿八兩二分程宛ニ相成申候嶋方掛リ手代給扶持筆墨紙蠟燭其外諸入用トモ一ヶ年金百十兩程ツヽ相掛前書口紬拂代金ト差引候ヘバ壹ヶ年凡八十兩餘宛不足ニ相成亡父幷私支配中寛政七卯年迄廿八ヶ年ニテ凡足金二千二百四十兩餘ニ相成無據其時々他借仕取償置候ヘ共年々利金相嵩元利共年分之借金ニ相成申候其上亡父幷私支配場所追々最寄替等御座候ヘ共東海道筋甲州道中宿場武藏相模之內御用多之場所多箱根御關所ヲ隔兩役所ニテ御用向取扱候故手代共人數多ニ無之候テハ差支申候右ニ准給扶持幷任所入用等多分ニ相掛リ手代居小

屋等モ拜領屋敷ニテ手狭故借地仕手代小屋モ建置候間年々地代金并修復入用失墜相立殊更甲州支配中ハ郡内領出張陣屋有之役所三ヶ所ニ相分レ諸失墜筋モ多且外御代官在陣屋之儀ハ役所并自分住居其外手代小屋等不殘支配所村々ヨリ入用爲差出修復仕候儀定例ニ候處私方之儀ハ豆州韮山屋敷往古ヨリ住居仕候譯ヲ以ニ一式自分入用ニテ修復等仕來支配所村々ヘ相掛不申旁舊來手張候入用多島々支配ノ外定式被下置候諸入用モ年々引足不申有之外江戸拜領屋敷度々之類燒等ニテ臨時入用多分相掛他借金四千六百兩餘ニ相成難儀至極仕候然處寛政十一未年私支配所并役所向取計爲糺方御勘定吟味方改役并御勘定方御普請役之者共被差遣豆州韮山役所ヘ被罷出支配所村々モ廻村仕私并手代共御用向取扱之樣子立合相改候上申聞候ハ支配所并役所向取締ハ勿論御年貢金銀納拂其外御勘定向ニ於テハ相違之儀無御座候ヘ共勝手向不如意ニテ多分之借用金有之由相違候間前書之趣書付相認差出候處歸府後寛政十二申年十二月松平伊豆守殿御沙汰ノ趣有之由ニテ御勘定奉行ヨリ申渡候ハ島々支配中日緬計ニテハ諸入用等引足不申多分之借財ニ相成其上先年手代之内不束之者モ有之由ニ候ヘ共追々元締モ立相違無之事ニ付舊家之儀ニモ候間以前之不束之次第ハ不被及御沙汰格別難有儀ト奉存此上他借一ヶ年モ早ク相片付候樣可取計旨申渡有之誠ニ以テ冥加至極難有仕合奉存候然ル上ハ如何樣ニモ仕可成丈一ヶ年モ早ク他借相濟候樣種々勘辨仕此上手代共人數モ相減諸入用之餘金出來仕候樣取計其外定式被下置候御切米并豆州韮山居屋敷圍內作德米等打込他借返納之趣法ハ相立候ヘ共手代共人數モ此上格別ニ相減候テハ御用向差支之程モ難計御切米即五十俵ハ先祖返納米之方ヘ振向有之圍內作德米ハ一ヶ年四百俵餘有之候ヘ共中々引足不申此上年數相立候テモ皆濟之期モ無之却テ年々元利金相嵩此節必至ト差迫家名相續モ難相成次第歎敷奉存候乍恐私家之儀ハ別紙由緒書ニモ申上候通リ數百年來豆州韮山ニ住居仕天正十八寅年　權現樣關東御入國之際御代官被　仰付御物成米十分之一拜領仕奉蒙重キ　上意御自筆皆濟御勘定之御書付其外御内書被下置　台德院樣御自筆之御書付等被下置當亥年迄二百十四年御役無滯相勤來　南龍院樣養珠院樣御代ヨリ格別之御由緒有之品々拜領物等仕其上韮山屋敷御止宿御逗留等被遊候儀誠以難有仕合奉存候然ル處前書申上候通之始末ニテ家之興亡安危ニ差迫リ數百年來相續仕來候家名相立不申樣ニ成行候テハ無此上歎奉存候依之何卒格別之御仁慮ヲ以テ此節之危難御救被下置候樣仕度奉願候誠ニ御時節柄ヲモ不奉顧有之通相願候儀奉恐入候儀ニ御座候ヘ共先祖ヨリ御由緒モ御座候譯ヲ以テ此段奉願候何分御勘辨ヲ以テ可然奉達御聽度偏ニ御取成奉願候以上

亥三月

江川太郎左衛門

由緒書ハ祖先ヨリ之成立　神祖ヘ忠勤之次第且ツ　養珠院樣御里方之由緒ヲ以テ　龍祖并養珠夫人韮山ヘ御止宿拜領物

致シ數代御家ヘ御出入東海道御通行ニハ御先驅勤務拜謁（御先驅ハ先年一旦中絶之處父太郎左衛門英政ニ至リ願之上前々之如ク被　仰付タリトアリ）ヲ賜リシ等之事ヲ詳記ス今之ヲ畧ス倘養珠夫人ノ傳ニ記スル處アリ參照スヘシ

右同時ニ直好ヨリモ嘆願書ヲ添ヘ主家累代之舊家滅亡ニ及テハ存命致シ難キ旨切願セリ然レ共御家ニハ御家之成規アリテ願意採用成リ難キ旨井田幸次郎ヨリ直好ヘ通シタルニ同人ヨリ再ヒ押シテ嘆願書ヲ呈シ拜借金被命ニ於テハ太郎左衛門宛行其外諸入用米金之他拜領地作徳米水旱無之場所ニテ年々四百俵余有之分ヲ以テ還納毫モ相違致間敷旨懇願シテ止マズ（此ノ願書ハ四月廿八日ノ日付也）幸次郎ハ直好之哀情大ニ察スル處アツテ容ルヽ處アラントセシ際病ニ罹リ終ニ六月十八日（系譜ニハ廿日トス）歿セリ於是同月廿一日直好太郎左衛門之書ヲ安藤札右衛門ニ呈ス其ノ文ニ曰ク

一筆啓上仕候殘暑之節彌御安全被成御座珍重御儀ニ奉存候然ハ御屋形樣ヘ奉願候儀ニ付當三月中願書相認メ御由緒之趣別紙相添井田幸次郎殿ヘ差上置其後右願之趣御同人ヘ相伺候處願之趣ハ其御筋ヘ御差出置被下候間否相分次第可仰下旨被仰聞候然ル處私儀當三月十三日御暇御目見并拜領物等先格之通相濟久々在府難仕候間私家來役所向之儀モ重立相勤候雨宮儀十郎望月鴻助柴雁助差出相伺候樣仕度段幸次郎殿ヘ申上置四月十七日江戸出立歸國仕候然ル處幸次郎殿御病氣ニテ此間御死去被成候旨承知仕候私儀危難差迫外ニ一向相續之手段無御座候間無是非御時節柄ヲモ不顧御屋形樣ヘ奉願候御儀ニ御座候間格別之御慈悲ヲ以テ御救置被下候樣御執成偏ニ奉願候委細之儀ハ重立候家來共罷出相伺候樣申付候何分宜敷奉願候恐惶謹言

六月廿一日　江川太郎左衛門

安藤札右衛門殿

此時直好ヨリモ添願書出ス畧ス

然ル處七月廿一日ニ至リ札右衛門ヨリ謝絶之答翰ヲ贈ル文ニ曰ク

貴札致拜見候殘暑之節御座候處彌御安全被成御座珍重奉存候然ハ御勝手向御差支先達テ井田幸次郎ヘ書付御差出御由緒書ヲモ御渡被成猶又御家來ヲモ御差越被成且御狀之趣委細致承知候先達テ御書面之趣幸次郎ヨリ其筋之役人共ヘ得ト申談段

々其筋ニテ及評議候處當時紀伊殿勝手向至テ六ケ敷既ニ家中之者一統手當モ相減都テ諸役所向入用モ悉皆相省キ至テ嚴重之時節ニ付被　仰聞候筋モ難及取扱候ニ付御斷申達候樣トノ儀御座候御由緒之品モ有之格別之御家筋ニ御座候處不如意ノ故ヲ以テ被　仰聞候儀無御據處ハ役人共モ御察シ申候事ニ御座候へ　前段之譯合ニ付心外ニ御斷申達候儀ニ御座候依テ右御書面致返進候　恐惶謹言

七月廿一日　　安藤札右衛門定堅

江川太郎左衛門殿

此書同廿四日韮山ニ達ス太郎左衛門ハ即刻書ヲ裁シテ此儘ニ打置ンモ心外之至リ御勘定所未ダ沙汰無之哉來月ニ入候ハヽ上旬ニモ納メ不申テハ不叶義願通リ金高拜借不相成共御都合出來得ル丈ケ少分ニテモ御救拜借之再願差出方可然取計ベシト江戸三人之家來共へ申遣シタルニ廿七日三人之者落手直好竊ニ思ヘラク主家之難此ニ迫レリ死ヲ以テ哀請スルニ非ザレハ能ハズトヤ決シケン廿九日朝札右衛門宅ニ來リ面セントこフ札右衛門既ニ出局不在ナリシカバ終ニ玄關ニ於テ屠腹シ死ス享年五十二歲ト云フ傍ニ一通之書アリ文ニ曰ク

江川太郎左衛門儀家名相續相成兼候儀御座候處御屋形樣ハ往古ヨリ御出入仕　養珠院樣ヨリ御由緒有之候太郎左衛門儀ニ付滅亡ニ及候程之儀不申上置候テハ却テ不奉敬儀ニモ奉存何卒家名相續仕度當三月中太郎左衛門ヨリ願書差上被入　御聽御慈悲之儀奉願候處當時御家中御一統御手當モ被減諸御役所向御入用モ悉御省至テ御嚴重之時節ニ付太郎左衛門不如意之故ヲ以テ相願候儀ハ難被及御取扱旨太郎左衛門へ被傳下候旨逸々奉伏屈候乍然　御屋形樣御慈悲ナ以テ相續可仕外假成ニモ凌方出來不仕實ニ可仕樣無之無是非奉願候儀御座候間小身之太郎左衛門此節之難儀御救偏奉願候御代官ノ儀ハ御勘定向ノ儀ヲ以テ及斷絕候儀是迄數度有之歎敷奉存候太郎左衛門儀貞實ニ相勤何樣之儀ニテモ可相勤者ニテ平日儉約專ニ仕候間私共儀モ出精仕借財相片付心強御奉公爲仕度万事儉約人減等迄及心候儀無油斷相勤候得共不相應之大借ニテ此上無滯御役相勤候儀出來仕間敷奉存候儀ニ付御時節柄ナモ不顧太郎左衛門願書差上被入　御聽御慈悲ナ以テ御救被下置候樣奉願候處被入　御聽被下度トノ願モ不相叶御時節柄ヲ以テ願之趣難被及御取扱ノ旨實ニ落力失途候仕合御座候然ル上ハ太郎左衛門

儀御勘定向之儀ニ付御糺明ヲ請不遠内滅亡可仕奉存候左候テハ　南龍院樣養珠院樣ヨリ被下置候御道具類モ何樣相成可申哉（本ノマヽ）御由緒之儀知ル太郎左衛門滅亡仕候儀恐入奉存候私生賤強テ奉願候御儀難叶奉存候ヘ共太郎左衛門首尾能偽相勤度心願通身不得止事今日自殺仕奉願候御明察被下莫大之御慈悲ヲ以テ太郎左衛門此節之危難御救被下置候樣偏奉願候以上

七月廿九日

江川太郎左衛門家來

望月鴻助印

紀伊樣

御役人中樣

私死體之儀ハ御内々同役共ヘ御引渡被下候共御取捨被下候共被成下候樣奉願候　公邊御届等被成下候テハ太郎左衛門身分難儀ニモ可相成奉存候ニ付此段奉願候以上

七月廿九日

望月鴻助

札右衛門之ヲ閲即刻家來ヲシテ左之書ヲ贈ラシム

以手紙致啓達候然ハ御家來望月鴻助殿今日札右衛門小屋ヘ被罷越候處大病被在之候然ル處札右衛門儀ハ屋形ヘ出勤致罷在候付其段申遣シ候處右ニ付御面談申度儀御座候間罷越御用意被成直サマ御家來衆之内只今御越被成候樣致度候右之段得御意候樣札右衛門申付候ニ付如此御座候以上

七月廿九日

安藤札右衛門内

森邊仁左衛門

江川太郎左衛門樣

御家來衆中樣

同家來雨宮義十郎ハ此書ヲ得テ同僚柴雁助ト共ニ札右衛門方ヘ來ル札右衛門面會告テ曰ク若シ官ヲシテ鴻助屠腹ノ事ヲ知ラシメハ江川氏ノ爲メ不可ナルベシ唯篤病ヲ以テセントテ屍ヲ竹輿ニ昇シ夜ニ至リ直チニ赤阪盛德寺ニ送リ翌晦日正午ニ埋葬セシムト云フ

金千両貸與サル

鴻助ノ誠忠

崑山院鐵關玄透ト諡セシヨシ

此事遂ニ御聽ニ達シケルニ太郎左衛門ハ代官中ニ命関アリ今果シテ死節ノ臣アリ若説豈虚妄ナランヤト御感被遊後義十郎直好ノ遺志ヲ繼キ屢々札右衛門ニ哀願ノ處終ニ九月ニ至リ願意貫徹金壹千両ヲ貸與セラル、ニ至ル其證書左ノ如シ

拜借仕金子之事

一合金千両也

右ハ兼々勝手不如意ニ罷在多分之借財有之甚難儀仕候ニ付無據拜借ノ儀奉願候處願之通被仰付拜借仕候處實正也返上納ノ儀ハ當亥ヨリ来ル卯迄五ケ年御浮置被成下翌辰年ヨリ亥年迄毎暮五十両ツヽ貳拾年賦ニ上納可仕候依テ如件

享和三亥年九月　　江川太郎左衛門

然ルニ後僅ニ六年ヲ經文化六己巳之年更ニ特典ヲ以テ千金返納ヲ被免該証書ヲ梅澤十助（御用人）ヨリ七月晦日ヲ以テ太郎左衛門ヘ還付スト云フ　右願面原文幕府及ヒ御家ニ係ル處缺字ヲ用ユ今畧

按スルニ此命関ハ永ク世ニ傳ヘシモノト見エ天保十五辰年五月水府御領分百姓惣代共源烈公御愼御免　公儀ヘ御願之儀ヲ御家ヘ歎願ノ書中ニ御先代樣曩日鴻助愁訴御聞屆御富讃天下一同傳承渇仰云々ト記セリ直好ハ江川氏累世之臣ニ非ス生レテ十四才父ヲ喪ヒ明和四年丁亥國ヲ去テ江戸ニ来リ館林侯及ヒ一橋公ニ仕ヘ寛政二年初テ江川氏ニ仕フ仕ヘテ僅ニ十四年幼主之難ニ當リ身ヲ捨テ節ニ死ス實ニ千載青史ニ傳フベキ者也而シテ今之ヲ知ル者ナキハ頗ル遺憾ニ不堪處トス依テ今直好之後裔在韮山ノ縣江川寛一郎ガ所藏之行狀録ヲ得ルヲ以テ決死ニ臨ミ其妻子等ニ與フル遺書初數件ヲ左ニ摘録ス骨肉ニ訣別スルニ訓誡叮嚀同僚ニ遺スニ誠義周到實ニ豪傑ノ士ト謂ツベシ之ヲ讀ム者百世之下誰レカ感泣セサルモノアランヤ

一直好廿七日主家之書ヲ得ルヤ同僚三人ト再願之儀ヲ謀リシモ已レ既ニ決スル所アリシニヤ翌廿八日ノ夜長女阿梅之夫加藤惣右衛門之宅ニ投ス蓋シ骨肉永訣之情胸ニ逼リシモ毫モ色ニ顯ハサス動止常ニ異ナルヿナカリシト也

一廿九日朝盥嗽シ畢テ主家ヨリ受クル所井桁中菊花章（江川氏之章）之紋衣ヲ上席ニ置キ之ニ向テ再拜畢テ安藤札右衛門ヘ到リシト云フ是竊ニ主人ニ訣別ヲ告シナランソ

一廿九日雨宮義十郎支廳ニ入ルニ机上ニ一包アリ廳丁ニ何レヨリト問フ廳丁曰ク當直君至レハ呈セヨト門丁ニ託セラレシト因テ門丁ヲ呼ヒ質スニ門丁曰ク望月君ノ親戚ニ赴ク余ニ謂テ曰ク明日此ノ一包ヲ支廳ヘ携ヘ行キ雨宮君ニ呈セヨト故ニ携ヘ來レリト即チ紙包ヲ開ケハ直好掌任スル所ノ公務ノ帳簿及同僚親戚ヘノ遺書也

同僚森部永円郎雨宮義十郎夏目小七郎ヘノ書

一筆申上置候然ハ私此度相果候上ハ別テ被仰合宜御取計被下度候私倅若輩ニ付厄介ノ儀淺無覺束奉存候幾衞ニモ御勘辨付不申候間親類共一同御評議ニテ如何樣ニモ宜敷御取計可被下候

一逸見正兵衛方ヘ郡兵衛養子ニ相成候儀宜敷御取持被下候樣奉願候

右之段奉願置候以上

七月廿九日　　望月鴻助

追テ逸見正兵衛儀今以小笠原仁左衛門樣御方御名前出有之候間正兵衛ヨリ結城五郎作ヘ相賴置同人承知致居候旨正兵衛ヨリ申聞候間此段爲御心得申上置候以上

正兵衛此節伊勢東與兵衛ト申者方ヘ罷越居候由御座候

此帳面拜借并外ニ一ケ不叶金銀勘定合相認置申候宜奉願候官兵衛ヘモ申殘置候間衣類諸道具御賣拂御勘定被成可被下奉願候以上

七月廿九日　　望月鴻助

雨宮義十郎ヘノ書

一筆申上置候此度紀州樣ヘ御願筋之儀ハ確ト不及御相談此方樣ヨリ御進申上此度及御斷候ヘハ此方樣ヘ被請御恥辱今更申譯無御座候乍然迚モ　紀州樣御助力被下候外ニハ御相談ノ儀仕方無之事ニ奉存只今之姿モ最初ヨリ相辨覺悟仕候事ニ付殺私身猶亦　紀州樣ヘ願書差出申候万一於致成就ハ滅後之大幸ニ奉存候此度之願書一件袋ニ入置申候御一覽可被下候且私死骸御引渡ニ可相成哉其節願書モ妄語ニ被成御引渡可被成哉其節擯命之程之願書必御引請被下間敷候死骸ハ麻布氷川盛德寺旦那寺ニ付御埋可被下候尤大和屋惣右衛門方小石川竇富町成瀬因幡守樣御屋敷望月貢一郎兩所ヘ爲御知可被下候若紀州樣御屋敷ニテ取捨ニ相成候ハヽ御世話被下候ニハ及不申候右宜奉賴候恐惶謹言

七月廿九日　　望月鴻助名乘書判

信按スルニ麻布氷川ハ赤阪氷川ノ誤ナリ元氷川社ノアリタル寺ヲ盛德寺ト稱ス曹洞宗ナリ

別紙中上置候樣臘嬰法御用一件両年分二袋ニ入差上置申候

一當地拜借金八両ト覺申候韮山表ニモ少々返納金有之候何レ道具衣類相拂候テ返納可仕旨官兵衛ヘ申殘永円郎殿ヘモ此段御頼ミ申置候宜御取計可被下候外ニ大成勘定合無御座委細帳面ヘ記置申候御一覧宜御取計可被下候

一私致自殺候テモ官兵衛出府致候儀ハ無之樣御取計可被下候騷立宜有之間敷迚モ御世話被下候後ニ相成候間何事モ密々相片付候樣御取計被下度候万端宜奉頼候以上

七月廿九日　　望月鴻助

妻ニ遺ス書ニ曰ク

一筆申遺候我等此度無據事ニ付自死致シ候乍然生テハ請恥死テハ少分之忠貞ト存候間悦玉ハリ度候ソモシ事長々病氣ニテ我等始終見屆モ可致之處却テ先立候事氣之毒ニ候ヘ共何事モ前世之約束ト思ヒ賜リ度候万事同役衆親類ヨリ世話有之事ニ候間差圖ニ御任セ可被下候猶官兵衛儀能御奉公人ニ相成候樣御心掛ケ明暮御世話可被下候可祝

七月廿九日　　鴻助

おまつどの

嗣子ニ贈ル書

一筆申殘候此度　紀州樣御願之事申立候處不相立旨被仰付候左候テハ　此方樣折角思召立候事無ニ相成却テ御恥辱ニモ相成候道理ニ相申リ候間我等モ恥ヲ請ク道理此儀兼テ覺悟ニ思立候儀ニ候ヘハ兼テノ心掛ヲ不違致自殺願立候万一神佛之御憐ニテ願事相叶候得ハ死後ノ面目不相叶候共最初ヨリ思入至テ今難變可死時不死ハ死ニ増有恥當節死事ハ武ノ道ニ候間斯仕合候今両三年御世話致候ハヽ人並御奉公モ可被致處獨トナシ候儀氣之毒ニ候ヘ共我等生テ請恥候ハヽ今之歎ニ可増候前世之約束ト思給度候死後ハ同役中親類中取扱モ可有之兎モ角モ可任差圖候母モ永キ命モ有之間敷候間隨(字体不明)分成丈之御孝行被致姉ヲ敬ヒ妹ヲ慈ミ自分ヨリ目上之人ヲ敬ヒ言葉不likely御奉公ヲ精出シ少シモ影日向ナク少シモ虚言不言間加ノコッノ有度候萬僉約ヲ專ラニシ不僉約ハ亡身ト御心得下之人ヲ不賤惠之人ヲ先シ金錢ヲ以テ人ニ被賤玉フベカラス朝起シ方稽古ヲハハゲミ樂ニ不染朝ト晩トニ火ノ元ヲ心附玉ヒ此度我等申殘ス事一事モ粗畧ニ御心得無之ハ死後之樂シミ無此上候謹言

七月廿九日　　望月鴻助

望月貫兵衛殿

副申殘候我等印形自筆ニテ封シ置候都テ御同役其外勘定合ハ帳面ヘ認置申候委細永門郎殿當表同役衆ヘモ頼置候諸道具迄モ出不申候ハ相濟申間敷候氣之毒ニ候ヘ共當年大ニ金子ヲ費致方ナク候儉約致シ御取續可有之候以上

長女ニ贈ル書

一筆申殘爲參候我等無據仔細ニテ致自死候非短氣候故イササカ忠心之難止事ニ付テノ事ニ候是迄兄弟之内ニソモシハ格別ニ我等ヘ孝心感入候右之心ヲ以テ御袋樣惣右衛門殿ヘ大切ニ孝貞有之樣存爲參候我等亡跡弔フノ丅ハ輕供物トモ少々宛テ輕ク法事有之樣イタシ度候厚キハ請不申候是等之事貫兵衛ヘ委敷御申屆ケ玉ハリ度候吳レ〲孝行貞節儉約第一ニ火ノ元大切ニ御心掛有ベク候可祝

於梅殿

鴻　　助

長女ノ夫ヘ贈ル

一筆申殘候然ハ此度無據事ニ付拙者儀致自死候乍然非ㇾ借財故ㇾ非ㇾ背ㇾ人倫ㇾ聊微忠之存寄ニ候

一依緣是迄格別之御親難忘(本ノマヽ)參存候未取始御見捨不被下樣賴入候

一都テ拙者親族共不失人有候ハヽ御親被下度候若於背人倫ハ被加思召於不用ハ御見放被下度候

一我等法事至テ儉約致候樣子供ヘ御申聞被下候樣厚弔之儀ハ拙者曾テ請不申候

一貴家ハ別テ拙者ヘ御親厚於梅モ心ヲ盡シ吳難忘悅入候事此度去世候儀殘リ多ク候ヘ共可死時不死ハ増死有耻氣短ト御笑不被下樣存候恐惶謹言

七月廿九日　　　　望　月　鴻　助

加藤惣右衛門樣

次女ニ贈ル書

一筆申殘候我等事譯有之此度致自殺候ソモジ御片付之後其御兩親樣五郎兵衛殿ヘモ不懸御目萬事御願モ不申入此段申譯モ無御座候御賑々敷掛御目度樂シミ居爲參候處殘多存シ爲參候ソモジ事御兩親次ニ五郎兵衛殿ヘ孝行貞節大切ニ御勤メ親類中トモ睦敷先嫁之娠大事ニ致シ實ノ子トシ少シモ無御粗畧下部ヲイツクシミ物事儉約致シモノ參リ物見物ノコトツツシミ火之用心大切ニ御心掛ケ朝起シ玉フベク候我等法事至テ手輕ク重キハ請不申段官兵衛ヘモ申殘爲參候能々御相談玉ハリ度於松事モ永キ事モ

候マツ御心添孝行ニイタシ玉ハリ度候可祝　　望月鴻助

七月廿九日

おいく殿

次女ノ夫ヘ贈ル

一筆申殘候拙者儀今度生テハ請恥死ニハ盡微忠之事ニ依テ致自殺候不思議之御縁ニテ聟男ト成一度不得拜顔御両親樣ニモ掛御目万事御頼モ可申處無其儀申譯モ無御座候宜被仰述幾事永ク御世話被下度候猶官兵衛モ若輩ニ候ヘハ御心添可被下候且那同役之存寄モ有之取計モ可有哉左モ右モ宜頼入候懸御目御頼モ申度樂シミ不相叶殘念ニ候ヘ共不得止事候万事宜頼入候

恐惶謹言

七月廿九日　　望月鴻助直好判

高田五郎兵衛樣

末女ニ贈ル

一筆申殘候我等去世事致方モ無之事ニ候シカシ恥カシキ事ニモ思ヒ参ラズ候母ヘ孝行姉兄ヲ敬ヒ何方ヘ嫁入致シ候共貞節孝行ハ少シモ無粗末目上之人ヲ敬ヒ下之人ヲ慈ミ日夜倹約無油斷火之元大切ニ御心懸可被成候我等弔ニ至テ輕キカタ宜ク重キハ請不申候呉々身ヲ大切御持ナサルベク候可祝

七月廿九日　　鴻助

おたつ殿

直好辭世之和歌アリ

此の世をば露と消ても行末は君が袂をやる川となる

一八月十五日砂糖製作御拜借金返納年限年延被　仰出

享和四年甲子　　公三十四歲

一正月十三日濱御庭へ被爲成　御鷹御遣ヒ被遊御饗應幷御拜領物有之

昨年十一月十六日濱御庭鳥代モ宜候間近々御越シ御鷹御遣被成候樣ニト御沙汰之旨御老中土井大炊頭宅ニ於テ御家老へ申聞有之ニ依テ也

按ニ此時御殿裝置ノ瓶花ヲ拜領其花枝數條ヲ一ト、圖樣ニ朱塗硯匣ノ蓋ニ散候梅柳椿ヲ金蒔繪シタルヲ製セシメ給ヒ蓋裏ニ金粉ニテ左ノ如ク御自記アラセラル幕府御崇敬ノ厚キ察シ奉ルヘシ御器今寶庫ニ傳フ

甲子春正月、辱　臺命、獵于海濱之苑、竟日遊樂、寵賜亦多、中有缾花、花則梅柳山茶結香山茱萸也、蕭蕪枯枝、猶不可弃、乃雜其小枝、裝造匣、納以筆硯、冀存餘芳於傳家之器、永示　恩光於席上之珍云、

文化改元二月　　黄門源治寶自記　[印]

二月游於水戸公小梅邸

一二月廿二日御直約ニテ　水戸樣小梅御屋敷へ被爲入

改元

一同月廿八日文化ト改元被　仰出

四月歸藩

一三月十五日御歸國御暇被　仰出

同月廿一日江戸御發駕四月六日若山御着城

レサノツト來リ交易ヲ請フ

一九月七日魯西亞使節「レサノツト」長崎へ入港我漂民四人ヲ送リ來リ交易ヲ請フ

去ル寛政四年九月三日魯人我漂民幸大夫磯吉等三人ヲ送リテ「ネモロ」ニ至リ通商ヲ乞フ同年十一月御目付石川將監忠房村上大學義禮ヲ遣レテ同地ニテハ取上ケカタシ若シ願ノ處アラハ長

外國處分ノ議ヲ上ラシム

通商ヲ請フノ初

崎ニ來ルベシト諭シ信牌ヲ與ヘテ還ラシム然ルニ今度「レサノツト」長崎ニ來リ方物ヲ獻シ又信牌ヲ出シ先年望ム處之許可ヲ得ントノ事也

一十一月十七日林大學頭衡柴野彥輔邦彥尾藤良助孝肇古賀彌介樸等（イツレモ漢儒之大家也）ニ外國處分之事宜ヲ議上セシム

一十二月朔日御目付遠山金四郎景晋ヲ長崎ニ遣サレ魯西亞使節ニ諭サシム其意通商通信ハ許シカタキヲ以テ歸帆セシムルニアリ翌年正月三日長崎奉行肥田豐後守遠山金四郎ハ「レサノツト」ヲ奉行之官舍ニ召シ懇諭セシニ領承シ其月十八日ニ退散ス是レ近世外國ヨリ通信通商ヲ請フノ初トス當時對外之方針ハ左之布達ニテ了知セラル

文化二丑年正月廿六日

大目付へ

先達テ「オロシヤ」船長崎へ渡來致シ通商等之儀相願候得共難取用筋ニ付其旨申諭シ先年與ヘ置候信牌モ取上之以來乘渡間敷旨申渡歸帆爲致候付再渡ハ致間敷候へ共此後万一漂流ニ事寄乘渡何レノ浦方ニ船ヲ繫申間敷者ニモ無之候間異國船ト見受候ハヽ早々手當致シ人數等差配先見分之者差出得ト樣子相糺彌オロシヤ船ニ無相違相聞候ハヽ能々申諭成丈穩ニ歸帆致候樣可取計候尤實ニ難風ニ逢ヒ漂流致候樣子ニテ食物薪水等乏敷直ニ歸帆難成次第ニ候ハヽ相應ニ其品相與へ可爲致歸帆候且何程相願候テモ決テ上陸ハ不爲致候歸帆迄ハ番船付置見物等ヲモ相禁其段早々可有注進尤再應申諭候テモ相拒ミ不致歸帆及異儀候ハヽ時宜ニ應シ不及伺

打拂其旨可申聞候右体之始末ニ至候節ハ諸事寛政三亥年異國船之儀ニ付相觸候趣ニ准シ取計可申候

右之趣万石以上之面々並其以下ニテモ海邊ニ領分知行有之面々へ不洩樣可被相觸候

文化二年乙丑　　公三十五歳

三月東覲

一二月廿七日御參府シテ若山御發駕三月十三日江戸御着府

是歳、菊地角藏歿、年五十九、角藏名貞、字叔成、號衡岳、子内記、名元習、字博甫、號西皐、皆以名儒賜

南紀德川史卷之十七

舜恭公第二

公三十六歲

文化三年丙寅

一二月舉堀江平藏名政長號鷄鳴專任國事、改革藩政、命儒臣榊原權之助、仁井田摸一郎、山本源五郎等、參樞密、賞粟生源五右衛門、世修武事、賜金若干、

堀江平藏御抜擢御政事改革之事項、連續見易カラン爲メ左ニ蒐錄ス

平藏ハ和州宇智郡大津村醫師表野元英次男ニテ叔父堀江甚左衛門之養子トナリ享和二戌年十二月養父甚左衛門爲跡目知行四百石無相違被下去年九月江戸ヘ罷越可相勤旨被　仰付

一二月朔日　御直ニ被　仰付

御用御取次被　仰付之　　堀江平藏

一同日御家老ヨリ達シ

御用御取次御役順左之通

御船奉行　御用御取次　御供番頭

一御用御取次之儀日々御小納戸部屋ヘ相詰我々共揃候比奥御用部屋ヘ罷出我々共退出後御小納戸部屋ヘ戻リ退出之事

刀ハ御小納戸部屋ヘ差置候事

堀江平藏任藩政改革

一奥ニテ認物等之御用之節ハ屛風圍之事

一御歡事御機嫌伺等御次ヘ罷出御小姓頭取ヘ謁其外都テ奥掛リニ準シ候事

一奥役之輩ハ御取次宅ヘ御禮廻勤可有之事

一御道中御供差定無之時々被　仰付候事

一同日同斷

堀江平藏儀此度被　仰付之趣ニ付別紙之通可申渡旨御書ヲ以被　仰出候條イツレモ恭承イタシ御深慮相辨萬端無怠慢可被取計候

御　書

堀江平藏儀此度用取次申付○印別紙之通申渡サセ候處同人ヨリ別紙之通内存申出候事ニ候付テハ願之通大目付トモ初ヘモ心得申渡心附之儀ハ無遠慮致督責同心同徳ニ相成諸事無怠慢取計可有之事

丙寅二月

不察國政之難、因循姑息ニ固滯スルハ古今之通患ナル故此度發憤、大夫共ヘ雖レ令ニ改正一古訓ニ下情ニ疎ク候テハ難行屆事ニ可有之候間經濟之儀ハ自分兼テ數寄成事故大夫共之羽翼輔弼ト相心得流ニ通國脉一整ニ理諸官一止レ吝行レ儉調ニ和人氣一以ニ五音之通一不レ致ニ雷同一所謂麴蘗鹽梅之意苟無ニ怠慢一可ニ相勵一者也

文化丙寅二月朔

平藏拔擢ト黜陟

內存書　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　堀江平藏

私儀此度不肖之身ヲ以奉蒙古今無類難有　尊命、冥加至極難有仕合奉存候書經ニモ皐陶曰、都在レ知レ人在レ安レ民、禹曰、吁咸若レ時、惟帝難之ト御座候通　御國政ハ古今之難事ニ御座候故、奉恐入候間、幾度モ御辭退可申上筈ニ御座候得共、不存寄、奉蒙　上之御知、箇樣之御時節ニ勉強不仕候テハ年來之素願モ無益ニ相成候儀ニ御座候故、乍不及孜々矻々ト精勤仕、斃而後止ミ候樣仕度奉存候大禹謨ニハ稽二于衆一舍レ己從レ人ト申周易ニハ人道惡レ盈而好レ謙謙レ尊而光、卑而不可踰、君子之終也、トモ申候得ハ何卒此意ト正心誠意ヲ以テ千載一遇之　尊慮ニ奉報度奉存候間大目付御勘定寺社御船三奉行御用人町奉行奥御廣敷幷御目付御勘定吟味役及諸官諸職ニ至ル迄聊モ私之紕繆ヲ見付候ハヽ無覆藏致督責同心同德之形ニ相成候樣被　仰付被下候樣仕度奉存候誠ニ政府ハ明顯之場ニ御座候故先達テ奉獻候上下明暗圖之通ニ御座候得ハ戰々兢々恐懼不少奉存候得共乍恐古今難有御値遇之　御深慮ヲ以諍友切々偲々之助ケモ加リ候ハヽ、莫大成鴻業モ成就可仕儀モ御座候哉ト奉存候付重々奉恐入候得共不顧多罪、內存申上候以上

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　水野飛驒守

一右御改革ニ付褒貶黜陟追々左之通被命タリ

御政事御改正ニ付舊冬已來存慮之趣大夫体ヲ得候事御滿足被　思召候仍之格別之御沙汰ヲ以特進之禮ヲ被加　殿中幷　御門々制振等御改正被　仰付候勿論其人ニ依被　仰出候事故家格ニハ相心得間敷旨被　仰付之

本文之通リ被　仰出候付テハ家中之者共心得違御家中ヘ對シ不禮等無之樣可申聞置ト之御事ニ候

二月十三日

榊原權之助

學文之儀當用之時務ニ委無之候テハ和漢差別有之候取捨モ難相成事故、御前并學校御用無之節ハ折々政府ヘ罷出當用之難事ヲ見習可申事

三月五日

五月朔日山本源五郎モ同樣被　仰付

小川榮得

醫術兼々致出精、儒學等モ日用之儀ヲ能相心得居候趣ニ相聞奇特之儀　思召候仍之御匙醫格被

仰付御切米六拾石高ニ御足高被下置之

三月廿四日

堀江平藏

橋爪流本書　御免可被遊ト之御事ニ付致相傳候樣橋爪万右衛門ヘ被　仰出候條本書不殘授受可申ト之御事

五月十一日

下條伊兵衛

去酉年分上被　仰付候節三ヶ年ニテ成功モ立候樣申立候處全ク見積之違ニテ御勝手御取直之規

矩不相立而已ナラス人望ヲ失ヒ御家中モ不埒之勝手向ニオヨヒ在町共大ニ人氣ヲ損シ候事誠ニ
目前三尺之經濟ニテ不埒之至被　思召候嚴御咎モ可被　仰出候得共一旦重キ御役儀被　仰付候
者之儀ニ付御用捨ヲ以大組格被　仰付之

右同文言

海野兵左衛門

但御供番頭格被　仰付候以來御役御免之者ヘハ御足米ハ不被下候ヘ共尙御宥恕ヲ以、御足米
之內貳百石其儘被下置殘貳百石ハ被　召上之

五月十八日

橋本盧心齊

其方儀萬事不心得之品有之趣相聞候付分知貳百石被　召上候同姓織部居屋敷ヘ罷歸彌愼可罷
在候

向後御年寄格ヨリ隱居之取扱ニハ不致重役ヨリ隱居之振ニ取扱候事

仁井田摸一郎

御前并學校御用無之節ハ折々御勝手方ヘ罷出當用之難事ヲ見習可申候

五月廿七日

堀江平藏

此度御改正之御趣意ハ　公邊ヘモ御內々被　仰立候處御尤成御趣意ニ相立候趣　御聞被遊御滿
足　思召候右ハ年來經濟之儀相心掛舊冬以來ハ其方趣意モ　公邊ヘ相聞有之事故御時節柄ニハ

有之候得共大御番頭格被　仰付御加增貳百石被下置之
八百石之高ニ御足高被下置之

同　　　人

鈴木五兵衛

大御番頭之儀ハ諸組之上ニ立武官第一之御役儀故　思召ヲ以大御番一組支配被　仰付候間當御役其儀ニテ淡輪新兵衛戶田河內申合御役儀之本意ヲ不失樣可相勤旨被　仰出候澁谷角右衛門元組支配可致候同心ヲモ御預被遊之

堀江平藏

此度之被　仰出ニ付政府ヘ罷出候節ハ鈴木五兵衛次ヘ着座可仕ト之御事ニ候
本文外之儀ハ諸事是迄之通相心得可申事

六月朔日

同　　　人

御用之透ニハ評定所ヘモ罷出御勘定奉行申合可相勤候大御番頭共申合セ頽敗ヲ振ヒ諸組之勵ニ相成候樣可致敎諭ト之御事候

六月朔日

同　　　人

此度被　仰出候品ニ付內存之趣達　御聽候處右之內　公邊向之儀ハ來年　御參府之上御取量振ニテ二ツトモ全方ニ相成候段且又御時節柄之御事ニハ候得共俸祿辭退之儀ハ大海之一粟ニモ有

之候事故此節之釣合ヲ以少祿之輩ヘ少々ツヽ御加增ニ被下置其方儀ハ御足米ヲ以如何樣ニテモ
取續精勤仕度トノ趣ハ能相聞候儀ニ思召候間存念之通指上候樣可申聞旨被　仰出之

六月三日

高木兵大夫

下條伊兵衞海野兵左衞門ヘ今度被　仰出之趣恐入迷惑仕候差控罷在度旨相達候酉年已來見積之
違ニテ量入爲出之不合儀ハ當御役之上座ニモ有之故重御咎ヲモ可被　仰付候得共年久敷相勤候
儀ニ付御用捨ヲ以差控被　仰付之

六月九日

森　玄蕃

近年人氣モ班々ニ有之候處信ヲ相守致精勤其上御廣敷向取締リモ格別ニ相勵候付御供番頭格被
仰付之

同　人

御時節柄ニハ候得共近年致精勤候付四百石高ニ御足米被下置候勤方之儀ハ是迄之通リ相勤可申
トノ御事候

六月十一日

大草四郎右衞門

先御役之節始末不合品共有之其上未熟成儀ヲ申上不埒成事ニ　思召候得共御用捨ヲ以テ御供番
頭格被　仰付之

黒田左兵衛

先役之節心得違候品モ有之政府ニ不似合成内意等申出不詰成事ニ　思召候屹度御糺被遊度品モ有之候得共御用捨ヲ以其儀無之寄合被　仰付候已來御役御免之者ヘハ御足米ハ不被下事候得共近年之振合ニテ御足不モ多有之事故猶御宥恕ヲ以御足米六拾石之内貳拾石ハ其儘被下置之

六月廿二日

粟生源五左衛門

養父之代ヨリ武藝心掛厚今以無油斷稽古モ致候趣達御聽一段之儀ニ　思召候仍之年々金拾両被下置之

鈴木五兵衛

御城代格被　仰付之

右同人

御城代大寄合勝手取締之儀經濟之本意ヲ以精々可申合候猶追々被　仰出儀モ可有之候條勝手取直之儀厚可申合トノ御事候

當分御側御用人之勤　御免淡輪新兵衛戸田河内申合勤幷大御番支配且同心御預之儀モ被成御免之

八月十六日

一御直書ヲ以御目付ヘ左之通御沙汰有リタリ

橋本六郎右衛門幷織部モ是迄隨分心付候ケ條モ候得共先其儘ニイタシ置候然處此度不得其意趣有之如此度申付候得共是迄其儘イタシ置候段ハ全ク此方不明不德故之儀ニ候得ハ此度之改革速ニ過ヲ改候趣意ニテ少モ不明之名顯候段ハ不厭義ニ候勿憚改トカ申如何分過ヲ改候趣意行届候樣可然事

按スルニ　件之御改革ハ非常ノ御英斷ニ出タルモノニテ御直書ヲ以テ、思召被仰出タル如キハ近世ハ稀有之事也左レハ堀江平藏モ千歳之知遇ト勵精大ニ爲ス處アラントセシガ元來病身之故ニヤ僅ニ七ケ月ニシテ本年八月病死ス後世　公カ御一世ヲ談セバ必ス此御改革ヲ嘆美シ又平藏ガ人トナリヲ贊談シ月雲花風ノ歎、每モ止マス頗ル有名之事也シ浮ケ置歩增之發布ハ平藏病死之後ト雖モ蓋シ存生中ノ籌策成ヘシ又八月廿三日ニ至リ平藏嫡子八千藏ヘ平藏知行當所務被下置十月七日ニ平藏格段致出精候品モ有之付八千藏ヘ爲跡目知行四百石無相違被下寄合ニ被　仰付タリ是最モ異數之事ト云

江戸大火

一三月四日江戸大火

朝四時芝泉岳寺門前ヨリ出火南風烈敷淺草本願寺迄延燒五日之朝暴風雨強ク鎭火ス万石以上邸宅六十二、万以下三百貳（イ・三）拾貳軒、町家十六万九十六戸裏町百十万軒寺院千三百二十一長サ三里余廣サ十町死人千二百人牛馬七十八疋焚死ス府下八ケ所ニ小屋ヲ作リ窮民ヲ恤救セラル

四月歸藩、取路於木曾

一三月十五日御歸國御暇被　仰出同廿七日江戸御發駕木曾路通リ四月十五日若山御着城　堀江平藏モ御供ニテ歸國ス

邦安社建立

五月、祭西條廢世子賴雄公靈、於日前宮社內、稱邦安社

紀伊國續風土記ニ曰　文化三年丙寅六月邦安社ヲ創建ス祭禮每年五月廿八日也文化十一年社頭高三十二石ヲ寄付セラル十三年祭日ヲ三日ニ定メラレ廿六日馳馬アリ廿七日廿八日兩日相撲アリ文政三年ヨリ廿七日又東樂アリ

寒帥談ニ曰　文化三丙寅五月、日前宮境内ヘ御神祠御造營アリ西ノ丸、邦安社御神躰ヲ渡御ナシマヰラセ競馬相撲町々ヨリ樂車練物新地ニテ松組竹組元市場ニテ信心講ト唱ヘイツレモ囃子躍リ賑ヲ例年御祭禮コレアリシト也

又曰　舜恭院樣思召ヲ以テ渥美源五郎弟甚五郎ヲ渥美晴之ノ名跡被　仰付云々

瑞德記曰　復忠臣渥美某家、以其胄子繼氏姓

鱗德記曰　文化三丙寅五月啓モ　大納言樣聖慮ヲ被爲廻、山城樣ノ御靈ヲ日前宮社內ヘ御鎭座被遊邦安社ト稱シ奉ル其後又毎歲五月、馬驅相撲渡リ物等之御祭禮ヲ被　仰付候シ也

渥美甚五郎ト申人ハ西條御家老ナリシカ其時ニ御手打ニナリシカハ家絕タリシカ近キ比ソノ後裔ヲモ被　召出甚五郎政要トイフ御小納戸被　仰付シ

一按スルニ　文化九年五月廿九日　舜恭公德本行者ヲ御城ヘ召十念御授リ之事アリ其翌晦日行者渥美甚五郎政要ヲ梶取之惣持寺ヘ招キ御手打ニナリシ甚五郎勝之ニ男子アリテ高德ノ僧トナリ澄善上人ト稱スルヨシ問答之事ヲ政要自ラ筆記シタル五月雨ノ記ト題スル一書アリ內ニ左ノ一節ヲ載セリ原文ノ儘ヲ爰ニ抄出ス

偖又上人被申候ハ　本地院樣ヲ邦安社ニイハヒコメ奉リ候由承知イタシ候夫ハ御代ハイツノ比カトノ問ニ答候ハ則　當御代ニテ六七年モ已前之事ニテ候上人被申候ハ神道ニテハ尤之儀候得共佛道ニテハ不得其意候右取計イタシ候仁ハ于今堅固ニテ居ル哉トノ事ナリ右仁ハ我等儲ニハ存不申候得共其頃堀江平藏執政致シ候トノ事承リ有之其仁右勸請ノ歸リヨリ大熱ニテ無程病死イタシ候右勸請之日ハ大雷雨大風ニテ有タル由申候處上人左モアリナン〳〵ト計リニテ歎息之樣子ニテ何ト歎物アリゲニ只兩眼ヲトヂ暫ク念佛トナヘ居申候夫ヨリ右咄シ一切不致云々

紀伊風土記新撰ヲ被命

一八月晦日仁井田撲一郎初ヘ紀伊續風土記新撰之事ヲ被命

右ハ紀伊續風土記新撰獻呈之儀　幕府之布令ニヨリテ此任命アリ撲一郎名ハ好古仁井田助左衛門ノ男少壯漢學ヲ能シ無足ニテ奧詰儒官ニ被　召出獨禮格十人扶持ヲ賜ル此時儒官山本源五郎授讀林謙之丞、岸常太郎、國學者本居大平、本草方小原源三郎等數人ヘモ被命、各纂修、助纂、校對、繕寫ヲ分擔、局ヲ和歌山城內西之丸ニ開キ編集着手各郡巡回實地ニ就キ考覈調査或ハ暫ク中

浮置歩増並倹約ノ令

廢ノ事等アリテ全ク三十三年ヲ經、天保十年ニ至テ大成　幕府ヘ獻セラル事ハ　顯龍公同年十一月之條ニ詳也

一九月廿八日御家中浮置歩増幷倹約之儀被　仰出

御家中一等之難澁ヲモ救且銀主ヘモ信ヲ不失樣ニ御勝手向之規矩相立候存附モ有之候ハヽ、其趣ヲ相認封物ニテ差出候樣當四月相通候付以來追々上書仕候輩モ有之事候一躰御勝手向幷御家中勝手向共、此節ノ趣ニテハ往々彌難澁相嵩、御經濟モ難被爲行、御家中ハ別テ難立行候付御勝手向幷御家中勝手向共往々ハ取直シ候樣之御主法品々被遂御鑿穿候事ニ候處通例之御主法ニテハ規矩可相立道無之付追々御評議之上當年ヨリ御勝手幷御家中勝手至充實候迄ノ間亦々浮置分増被　仰出、御家中借財濟方之儀ハ別帳之通取計候筈ニ候先達テ上米被　仰出候節ニ不勝手之輩借財浮置ニ相成候ヲ僥倖ニ存候向多分有之御年限中取締ラス追々別段ニ借財相初當時之姿ニオヨヒ候何レ右躰ニテハ往々取直シ候期モ無之儀ニ付件之悪弊ヲ急度相改此度之御主法被　仰出候就テハ借財有無ニ依分合差別モ有之候條夫々篤奉畏　御趣意ヲ如何樣ニモ暮方相立往々勝手向取直シ候儀厚心懸可申トノ　思召候間何レモ此旨急度相心得右ニ付テハ倹約之儀モ被　仰出候間此段モ篤ク相心得可申候、且又右被　仰出候御主法ニテ暮方難相立御役等差支候向モ有之候ハヽ、勝手取直候迄之内願之品ニ依格減ニテモ可被　仰出トノ御事候

組支配有之面々ハ夫々可被申聞之候

九月廿八日　浮置歩合割濟除米主法ノ解釋ハ財政ノ部ニ詳記ス參照スベシ

割濟幷除米定書

一知行百五拾石御切米六拾石以上浮置歩合三分五厘
　右之内　八厘五毛　歩上ヶ増　八厘五毛 古借是迄之通割濟
一古借無之筋ハ八厘五毛割濟タヶ御用捨之筈
一新借有之筋ハ三分五厘之外八厘五毛賄方役所ヨリ押置新借割濟之筈
一新借無之筋ハ勿論右ニ不及筈
一右以下小祿之面々夫々歩合右ニ準シ御用捨有之筈
一江戸常府常詰一ヶ年詰勢州上方詰共歩合御用捨之事
一知行御切米ニ準シ被下候金銀一同本祿歩合ニ準シ候事
一女中浮置三厘五毛之筈
一江戸御貸方渡物差入候筋ハ差別無之筈
一御貸〔借〕扶持之外諸上納幷御貸方瀧谷借用寺社方借用祠堂金御貸方五拾年賦諸丁人知行御切米差入
借幷相對借共割濟之筈
一借財有之割濟ニ相成候面々御貸〔借〕扶持當暮返納分割濟へ入候筈
一伊賀以下浮置是迄之通
一借財有之割濟ニ相成候面々浮置歩増割濟不引殘所務米之内
　五ヶ一　除米　非常爲手當賄方役所へ預置候筈

殘　暮宛米ヲ以丁人共ヨリ賄受候筈

附紙 賄人出來候迄賄方役所ヨリ取極候筈

丁人共ヘ暮宛無利息ニテ相渡シ賄セ候得共雑用トシテ賄料遣候筈

一新古割濟無之筋ハ除米ニ不及自分差配除米御主法之通手前ヘ相備候筈

一新古割濟有之筋ハ五ケ一除米致シ自分差配不相成筈

一新古割濟候上ハ除米之半分通年々除米致シ自分差配勝手次第之筈

但除米所務壹ケ年分詰候上ハ除米ニ不及筈

一古割濟有之新割濟無之節ハ除米之半分通除米致シ自分差配之筈

一割濟有無ニ不拘向後知行御切米御扶持方其外被下物差人立用不相成筈

一新古割濟無之御貸方幷諸上納有之筋

壹ケ年割濟米ニテ濟切候程之筋ハ初年納切無借ニ准シ除米ニ不及自分差配之筈二ケ年ニモ及

候筋ハ割濟之通

一新古割濟有之候得共濟殘テ纔ツヽ有之筋

右同斷

一新古割濟無之御貸方五拾年賦幷諸上納之内年賦計有之筋

年賦極之通相納無借ニ准シ除米ニ不及、自分差配ノ筈

一御家中人數相調目祿相立遣候ニ不及此度ノ暮宛半知之節之趣ニ相心得銘々目祿相立金米ノ好書

差出シ候筈
一馬持候儀モ半知之節ニ准シ可申事
一御役銀出候筋所務ノ内御役銀ヲ省殘米之五ヶ一、除置候筈
一御役銀歩上ヶ之節之御用捨半分通御用捨有之筈
一御目付御使番三百石之面々馬持候儀ニ付歩増八厘五毛之内三厘五毛御用捨五厘通増
浮置歩増貳分三厘之筈
但新古割濟有之筋ハ五厘之歩上ヶ御用捨極之浮置米計相納候筈
新古割濟之一方相濟候節ヨリ貳厘五毛相增
浮置歩增貳分五毛之筈
新古割濟相濟候上ハ五厘通相增
浮置歩增貳分三厘之筈
一御先手物頭三百石之面々馬持候儀ニ付歩增八厘五毛之内壹厘七毛御用捨六厘八毛增
浮置歩增貳分四厘八毛之筈
但新古割濟有之筋ハ六厘八毛增御用捨極リノ浮置米計相納候筈
新古割濟之方一方相濟候節ヨリ三厘四毛相增
浮置歩增二分壹厘四毛之筈
新古割濟相濟候上ハ六厘八毛相增

浮置歩增貳分四厘八毛之筈

無借之面々

御家中借財御調サセ被遊候處其方共義ハ諸借用無之先達テ半知分增等被　仰出候節モ町人借リ等無之趣ニ候就夫是迄迚モ浮置分增等被　仰出候儀ハ打續非常御出方等有之無餘儀被　仰出候事ニハ候得共他借等モ無之事ニ付テハ別テ可及難儀候處分增ヲモ差上取續相勤候段甚奇特成儀ニ　思召此段御褒被　仰出候間猶此上心掛勝手先充實ニ至リ候樣精々可相勵候就夫此度之御主法ハ借財有之向ハ暮宛之外五ヶ一賄方役所ニテ除米被　仰付候筈候得共其方共義ハ是迄宜取續候事ニ付除米之儀ハ不被　仰出候ニ付テハ借財有之向トハ物成等多有之儀ニ付暮方等相緩不申樣心掛都テ今般之御趣意通相心得手前手前ニテ除米ヲモ相貯彌無油斷節儉ヲ用ヒ可相勤旨被仰出候

但伊賀以上以下役無借之筋ヘハ夫々頭支配ヨリ可被申聞事

一御家中之儀先達テ分增被　仰出古借之分棄捐年賦等ニ相成候後又々借財相嵩必至ト差詰候向モ次第ニ多有之趣達　御聽御心痛被遊借財之模樣相調候樣トノ御趣意ニテ今般取調候處不輕借用高ニ被　聞召候右多借之向ハ半知歩增等被　仰出候節々借財モ相片付無借同樣之姿ニ相成候付テハ右半知分增等被　仰出候以前迄知行等不殘差入渇々ニ相凌候程之向ハ別テ心得モ可有之處以來猶又多分之借財ヲ受此上如何取量取續可申哉且非常ノ勤向モ有之事ニ候ヘハ此段彼是ニ煩尊慮候御事候依テ此度ハ浮置分增之外全ク所務高之内、五ヶ一、當分賄方役所ヘ除米被　仰付右

之殘米ヲ以暮方相立サセ候樣トノ御主法ニ候間右殘米ヲ當所務ト相心得如何体ニモ暮方相立猶其內ニモ餘米出來候程之鈞合ニ相心得艱難致シ取續可申候尤此度被　仰出候御趣意ハ昨年堀江平藏申上候品モ有之時風之悪弊御改正之　思召ニテ其段　公邊ヘモ御內々被　仰達候處御尤成御趣意ニ相立候御事ニ付追々御家中儉約等モ被　仰出格段取締被　仰出候ニ付テハ非常之手段無之候テ費弊ヲ矯候儀不相成候條其段厚可奉畏候イツトナク奢侈ニ馴來勝手取亂シ候處此度之御趣意ニ相叶候儀ハ夫々非常之了簡無之候テハ勝手取直之時節ニモ至申間敷候間此旨深相考向後借財不致割合之高ヲ以テ相凌候樣相心得可申候小祿ニテ厄介等多是迄迚モ無據不勝手ニ相成候輩前段之御主法相守候儀ハ深ク　御恕察被遊候付分テ御評議モ被爲在候得共イツレ一新之悪弊ヲ矯候御主法ニ付テハ右等ノ御差別モ難被遊甚　御苦勞被　思召候間右等之輩モ猶々篤勘辨仕何分御趣意之相立候樣心掛可申候

件之通ニ付テハ此上借財不相成筈ニ付非常入用其上拜借ヲモ可願出程之無據趣意相立候品有之向ハ夫々除米之內御下ケ有之筈

一御家中並在町衣服之品幷儉約之儀等享保年中別帳之通被　仰出有之候處近年相緩候箇條多有之ニ付此度別帳ヘ相添候箇條相改被　仰出候間右別帳之趣幷新規之箇條共向後嚴敷相守可申事

別帳ニ添候箇條

江戸衣服之義モ平日ハ勿論御客等之節ニテモ先方家來等ヘ應對モ無之向ハ　御目見以上タリ共絹紬半晒之類着候テモ不苦御客衆見通シ之所ニテモ御番方等應對無之向ハ勿論同樣タルヘ

ク候服紗半袴ノ節モ同様ニ候事

一縫はく有之巻物類持合候ハヽ下着ニハ不苦旨被　仰出有之候得共縫はく巻物類ハ持合候共堅不相成事

一女帯之儀ハ衣服ニ准シ麁相成ヲ相用ヒ結構成織モノひろうど或ハ金入之類ハ堅不相成事

一婚姻幷養子等致候節金銀之土産専ラ取遣致候儀不宜風俗ニ付堅不相成旨被　仰出有之事ニ候養子等之儀ハ人柄ヲ選候儀第一ニ候處右之通金銀之多少ヲ論候様相成候テハ失風儀候事ニ候間右等之儀相聞候ハヽ御糺ノ上御咎被　仰付儀モ可有之事

但衣服之儀ハ來年頭ヨリ相改衣服之外ハ此節ヨリ改可申候尤役人相改サセ候事

一年禮ニ罷越候儀御政事掛之御年寄御側御用人御用御取次幷頭支配一組切ニ罷越他組ノ頭ヘハ罷越候ニ不及御用部屋支配之輩ハ筆頭之御用人宅ヘ斗罷越暑寒見廻都テ相止可申事

一吉凶ニ付音物ハ親類タリ共堅ク無用之事

在町出入之者ヨリノ音物モ本文同様堅無用ノ事

一右之通嚴重ニ相止サセ候付テハ音物体ニ見受候ハヽ贈答方之姓名相糺サセ候事

一祝儀事寄會之儀親類タリ共暫ク無用ニ致シ親類斗ハ寄々罷越時刻ニモ及候ハヽ湯漬一菜ハ不苦事

一葬式佛事之儀此度被　仰出之趣ニ付テハ當時所務之釣合ヲ以半減ニ取計就テハ當主家內之外ハソヘ法事ヲモ可致程之近親斗法事之時刻ニ參詣致シ其余近親タリ共別段ニ參詣可致事

但寺ヘ施物等輕取計候ニ付テハ同所失墜等無之様ニ可被相心得事

一都テ女之髪飾ニ至候迄モ近年ハ別テ流行之姿ニ馴縮緬或ハ絹わけくゝり等相用ヒ候儀ニ候得共右等ハ屹度不相成候猶又金銀並べつかうたいまい櫛笄差候儀不相成筈享保年中御定之通ニ候諸士妻娘等ハ銀カンザシ一本ハ不苦・召仕女ハ銀四分一ナトニテ銀色ニ似寄ノ品モ不相成候しんちう、ナドノ製ハ不苦候

一武器ノ外きせるたはこ入等之金物ニ銀ナド用候向モ有之候ハヽ御糺可有之事

一男女奉行人給銀向後左之通相定候事

若黨 共揃ニ寄 金貳両ヨリ三両迄　小モノ 同 百目ヨリ百五十目迄

針女　七十目　乳母　百目ヨリ百二十目迄

中居　六十目　下女　五十目

右男女共召抱候節口入之者ノ外ヨリ相對ニテ召抱候儀不相成事

一平日之供連暫之内御役義ニ不拘格外之省畧御用捨之事

但禄高之面々モ右ニ應シ省畧可致事

此時在中衣食住儉約被　仰出　郡制之部ニ詳記ス

於江戸被　仰出

一此度之被　仰出ニ付儉約之儀享保年中被　仰出之通可相守旨於若山表別帳之通被　仰出候右ハ専　御國内之儀ニテ於御當地ハ甚不當ノ儀モ有之候ヘ共右享保年中被　仰出之帳面ヘ此度添候箇條ノ内ニハ於御當地之心得振モ有之猶又右ニ准シ奢侈ヲ相止締方第一ニ相心得可申儀ハ一等

之儀ニ付旁此段向々へ相觸帳面書付トモ夫々心得サセ可被申事

享保年中之被　仰出面ハ畧ス

一此度被　仰出之品ニ付江戸常府之面々是迄和歌山ニテ相渡候知行御切米之内歩増幷諸押、引殘、暮宛、賄方引受ニ相成候筋ハ追々和歌山ニテ金成、此表御金藏へ相廻リ候上同所ニテ相渡シ候筈ニ付月々金方好書御勝手方へ差出候樣

但御切米ノ分ハ好書差出候節直手形持參之事

一江戸常府ニテ御切米拂立渡リ之内歩増幷諸押引殘暮宛賄方引受ニ相成候面々ハ是迄之通、此表御金藏ニテ拂立直段ヲ以、金成ヲ預置、月々同所ヨリ相渡リ候筈ニ付好書、御勝手方へ差出候樣

一都テ祿扶持之儀ハ此度被　仰出之品モ有之候得共、元來月々渡之儀ニ付歩増幷諸押之外暮宛ハ是迄之通リ月々御藏ヨリ正米渡リ之筈

但向後御法通急度相守差入等ヲ以立用堅仕間敷事

一此表御金藏渡御切米金銀之内歩増幷諸押引殘暮宛賄方引受ニ相成候筋ハ御金藏へ預リ置月々同所ニテ相渡リ候筈ニ付好書御勝手へ差出候樣

一江戸常詰一ヶ年詰共知行御切米之内歩増幷諸押引殘暮宛賄方引受ニ相成候面々ハ若山渡リ之筈ニ付月々金米好書へ和歌山ニテ誰代判ヲ以受取申度トノ儀認加和歌山へ相廻シ可申事

但和歌山ニテ代判判鑑、頭支配ヨリ賄方へ相廻シ候筈

一此度被　仰出之品ニ付御家中之面々知行取ハ當寅十月ヨリ來卯九月迄知行手取高石五拾目積ヲ

以暮充月割被申出候樣御切米取之面々ハ當十一月ヨリ來十一月迄當暮御切米幷夏借手取高石五拾目積ヲ以暮宛ヲ申出候樣右ニ付御勝手ヘ判鑑差出候筈尤借財無之面々ハ江戸若山ニテ借財無之候ニ付當暮知行幷御切米共自分支配ニ仕度且是迄賄セ候町人ヘ受取セ申度或拂立直段ヲ以御金藏ニテ受取度トノ品相認候テ印形居被差出候筈猶委細ノ儀ハ御勝手方ニ承合候樣

判鑑之儀ハ頭役以上御用部屋ヘ差出、頭支配有之面々ハ誰々判鑑都合何枚差出候トノ儀、夫々ヨリ添手紙ヲ以御勘定奉行中ヘ相廻シ候筈

十二月四日琉球聘使來

同國王代替ニ付正使讀谷山王子副使小祿、當十一月二十三日參府登營、幕府ヘ拜謁、本日御館ヘ參上、御式寛政八年之節ニ大概同樣トノ事トアリ

文化四年丁卯　　公三十七歲

三月東覲

二月廿一日若山御發駕三月七日江戸御着府

一五月日缺江戸御家中衣服儉約之儀被　仰出

御家中儉約之儀享保年中被　仰出之通可相守旨去年九月於若山被　仰出江戸表之儀モ右ニ準シ取締方第一ニ相心得候樣衣服之儀ニ付テモ其節相達候通ニ候得共猶又左之趣被　仰出候

御目見以上以下奥表共都テ平日ハ絹紬之類夏ハ半サラシ麁相成嶋縮袴ハ棧留嶋糸入嶋夏ハ葛布之類ヨリ川越平等相用右餘之衣服ヲ限ト存候程ニ平日ハ相心得、其外、勝手次第麁品ヲ相用

魯西亞人亂暴

ヒ惣テ結構成品無用タルヘキ事

件之通ニ付　御目見以上綿服ニテモ勿論勝手次第タルヘキ事

一御晴ケ間敷御客幷御供御使或ハ私用ニテモ他所ヘ向、晴ケ間敷節ハ持合候時服、或ハ卷物類ニテモ面々心得ヲ以相用平常御客之節ハ決テ取繕ニ不及御番方ハ勿論ニ候事

御醫師幷隱居之面々且ハ拾歲以上十五歲以下之面々ハ制外ニ候然共一体浮花之風ヲ被差止候事ニ付持合ハ格別新調之品ハ外々ニ准シ斟酌可有之事ニ候

一家内及召仕男女之儀モ勿論質素之風ニ相成候樣勘辨可有之候尤家内之者持合ハ格別新調之節ハ隨分麁相成ヲ相用召仕之者看板等ニ至リ候テハ見分ニ無構成タケ有合ヲ可被用事

右之條々堅可被相守候尤平日之衣服急速ニ相改候儀ハ却テ難澁之筋モ可有之ニ付來辰十二月迄ハ持合ノ品勝手次第相用來々巳正月ヨリ屹度可被相改候若年之輩ナトハ他見ヲ恥之心モ可有之哉ニ候得共近來別テ浮花之風ニ馴來專外見ヲ而已飾武備等之心掛薄畢竟本末取失候事ニ候間此旨頭支配幷親兄ヨリ得ト致教諭永々質素之風儀不取失其余儉約之儀モ追々被　仰出之趣ヲ以厚心掛候樣可被致候

一六月魯西亞人東蝦夷地エトロフ嶋ヲ亂暴之旨　公儀ヨリ布令

一當四月廿三日箱館ヨリ三百里程北之方東奧蝦夷地エトロフ嶋之内ナイホト申所ヘ魯細亞船二艘來着上陸イタシ番人等搦捕番屋藏々燒拂同廿九日同嶋之内箱館奉行支配向之者罷在候會所シャナト申所ヘ右船二艘差寄上陸イタシ大筒等ヲ打懸候付テ勤番之モノ共相防五六人打殺深手爲負

候者モ有之處夜ニ入裏手ヘ相廻リ火ヲカケ燒拂候付テ防兼一同シヤナヲ引退候之由箱舘奉行ヨリ注進有之候且又去月十七日以來南部津輕之沖間ニモ怪シキ船相見同十九日箱舘近邊之沖ヘモ乘寄候處無程西之方エサシ崎ト申所之沖ヘ走通帆影モ不相見右之外別條無之事ニ候於世上彼是風聞可有之候間心得罷在向々ヘ無急度可被咄置候事

堀田正敦蝦夷地巡視ノ議

一嵩岳公言行錄ニ曰　此年四月南部侯津輕侯ヨリ注進アリケルハ去寅九月上旬西蝦夷唐太嶋沖合ニ異船二三艘見エシ處其後五六艘ニナリ又十餘艘ニ至ル然ルニ九月廿九日ノ夜異人上陸鐵砲ヲ放チ番人四人ヲ捕ヘテ本船ニカヘリ藏々ニ貯ル所之米ヲ奪ヒ其他ノ侵掠甚キ旨ナリ老中之ヲ言上スル處將軍ニモ以テノ外ニ驚カセラレ早々中奥ニテ評議アリ松平信明進出テ申サルヽハ此事固ニ一朝一夕之事ニアラス魯夷我國ヲ窺フ事年久シク、モシ彼ヲシテ蝦夷或ハ佐渡ニ據ラシメンカ實ニ我腹心ノ患タルベシ先松前之封地ヲ遷シ奥羽ノ大名ニ命シテ邊疆ヲ嚴備セシムベシ其事總督トシテ重臣一人ヲ遣ハサルベキニヤトナリ牧野忠精申サルヽハ東邊ノ大名仙臺ヲ以テ最トス其主政千代幼年ナレ共幸ニ堀田正敦ハ政千代ノ叔父ナレバ之ヲ以テ總督トセハ仙臺ノ臣モ必服從セン宜シク正敦ニ命ラルヘシト同列皆此議ヲ贊シ即チ正敦ニ命シテ蝦夷地ヲ巡視セシムルニ決ス信明又議シテ淺姫君ヲ以テ政千代ニ嫁セシメン事ヲ請フ將軍之ヲ嘉シ仙臺之家臣ヲメシテ此事ヲ命ス其後奉書ヲ以テ仙臺ノ奉行職大道寺靱負ヲメシ將軍親カラ蝦夷地之變ヲ告ケ速カニ戍兵ヲ發セシム是ニ由テ仙臺ノ士皆悅ンテ命ニ應セリトナリ

以上十五代史

此事蝦夷騷動ト稱シ當時ニ在テノ一紛擾ニテ後來嘉永癸丑亞國浦賀ヘ渡來之遠因トモ云ツヘキカ時ニ當リ邊海之警備措置ノ事多端世ニ筆記ノモノ少カラスト雖モ頗ル洪翰繁雜ナリ今一二ノ事項ヲ左ニ畧記ス

一今年三月十二日松前若狹守ヘ蝦夷地之儀ハ古來ヨリ進退致シ來候得共異國ヘ接シ候儀島々万端之手當難整樣子ニ付先達テ東蝦夷上ケ地被　仰出　公儀ヨリ御處置被　仰付候西蝦夷之儀モ非常之備等其方手限難行屆段申立外國之境不容易事ニ被思召候間此度松前西蝦夷一圓被召上候依之其方ヘハ新規九千石被下候場所之儀ハ追テ可相達旨被　仰付七月廿七日ニ至リ奥州梁川及ヒ常陸下野之内ニテ領知ヲ賜ル

一同六月四日御目付遠山金四郎御使番小菅猪右衛門村上大學ヲ蝦夷地ヘ被遣同五日津輕越中守ヲシテ國ニ往カシム六日若年寄堀田正敦蝦夷地巡視トシテ發遣大目付中川飛驒守從フ二十一日両人發途ス此月平山行藏上書自カラ不逞之徒及ヒ罪人ヲ率ヒテ魯夷ヲ撃ント請フ省セラレズ其他邊備ヲ論スル者多シ

一又南部津輕之両主速ニ國ニ就キ蝦夷地及ヒ邊海之守備ヲ嚴ニセシム

一七月四日奥羽ノ米壹万五千石ヲ蝦夷地ニ運漕ス

一十月十三日堀田正敦歸府ス是松平信明ノ議ニヨツテ召還サレシト云

一同月廿三日御鐵砲方井上左大夫ニ浦賀及ヒ總房海岸巡視ヲ命ス

一同廿四日御勘定吟味役河尻甚五郎村垣左大夫初テ松前奉行ニ任ス

一十二月五日松平政千代仙臺藩也松平金之助ニ蝦夷地ノ戍守ヲ命ス

仙台藩ニ蝦夷ノ戍ヲ命ズ

一同九日令アリ

オロシヤ船取計方之儀ニ付去寅年相達候旨モ有之候處其後蝦夷之嶋々ヘ來リ狼藉ニ及候上ハ向後何レノ浦方ニテモオロシヤ船ト見請候ハヽ嚴重ニ打拂近付候ニ於テハ召捕又ハ打捨時宜ニ應シ可申勿論之事ニ候万一漂着難船ニ紛レ無之様船具等モ損シ候程之儀ニ候ハヽ其所ニ留メ手當致シ置可被相伺候畢竟オロシヤ人不埒之次第ニ付取計方嚴敷致シ候譯ニ候條油斷ナク可被申付候

魯船警戒ヲ令ス

一十二月十一日小菅猪右衛門村上監物山岡傳十郎夏目長左衛門ヲ蝦夷地ニ赴カシム

一同廿七日松前奉行支配調役下役關谷茂八郎兒玉嘉内以下數人重追放又ハ江戸拂ニナル爲西亞來侵之時會所ヲ明退キタル段未練之至リ不屆之始末ナルヲ以テナリ

一翌文化五年辰正月十三日會津之兵千三百余人同十五日仙臺ノ兵四千八百余人共ニ蝦夷地ニ赴ク

二月五日又會津ノ兵貳百五十八人同シク蝦夷地ニ赴ク

一同年四月九日浦賀奉行岩本石見守御鐵砲方井上左大夫ト共ニ豆州下田浦賀海邊見分、相州三崎、城ケ嶋、觀音崎房州洲ノ崎、上總百首等ニ臺場ヲ築ク事六ケ所

一同年十月仙臺會津ノ兩軍各歸國ス

一同十二月十八日南部利敬ヲ貳拾万石高津輕寧親ヲ十万石ニ直シ東西蝦夷地ヲ分ツテ警備ヲ命セラル　（一本ハ卷之十六至文化四年故ニ十七卷ノ「魯西亞人蝦夷エトロフ嶋ヲ亂暴」ノ項迄十六卷トス）

文化五年戊辰　　公三十八歲

四月歸藩、取路於木曾、入京登比叡山

三月十五日御歸國御暇被　仰出同廿八日江戸御發駕木曾路通リ四月十五日若山御着城

閏六月、再下令、振起學政

觀學之儀先年ヨリ追々御教示被爲在重役嫡子共之儀ハ家督無程士卒ヲモ御預被遊候上才器次第御役人ニ御選擧可有之御企望ニ候得ハ部屋住之内別テ文武之學ヲ修シ實行相勵國家ニ推及シ候儀專務ニ候無怠慢致切磋往々蒙重任候節之心掛モ有之度トノ　御内慮之趣寛政十二申年分テ被　仰出候得共兎角怠慢之向モ有之哉ニテ文事難被行　御企望之場ニ不至候尤才智有之候テモ

學問無之候テハ心得違モ出來自己之異見ニ落入終ニハ其身モ得恥辱候樣ニモ可至儀ニ付向後彌厚心掛子弟共ヲモ誠精相勵セ可申候尤學問之本意ハ其肝要ヲ熟得可致事ニテ博覽ニノミ馳セ候テハ却テ實用ヲ取失ヒ虛文ニ流候事故各勤勉可易タメ條目簡易ニ被相定年寄共嫡子ヲ初メ夫々於學校勸學幷試法別紙之通御規則被爲立候間無懈怠樣相勵セ頭役已上之惣領拾五歲以上ニ至候ハヽ御規定之月次猶更欠席無之樣尤平士之子弟モ同樣爲相勵當主之面々モ若年ニテ御用モ無之向ハ部屋住之輩同樣ニ無懈怠出席可被相勵候漸々御試等之上其才ニ應御擧用有之　思召候　御目見以下タリトモ俊秀之者ハ相應ニ御擧用可有之事に候間存其旨可相勵事

別紙ハ略之

閏六月十八日

一頭役以上之惣領十五歲以上ニ至候得ハ御規定之日次ニ無欠席罷出候筈ニ候得共拾五歲以上ニテモ會讀難出來筋ハ先學校ヘ素讀ニ罷出習熟之上會讀ヘ出席爲仕度トノ品親々ヨリ學校掛リ御用人ヘ書付ヲ以申出候事

右之通書付ヲ以申出候筋會讀ハ不致候得共右席ヘ罷出候儀ハ勝手次第之事

八月四日

英船長崎ニ來ル

一八月十五日英吉利船長崎港內ニ入ル

十五代史ニ曰　長崎奉行松平圖書頭康英、英船之港內ニ入ヲ見テ紅毛船トナシ旗ヲ擧テ相招ク彼僞リテ之ニ應シ直チニ入テ高鉾ニ泊シ灣內ノ紅毛船ニ亂入シ壹人ヲ捕ヘ去ル康英故ラニ薪水食料ヲ與ヘ夜ニ乘シテ之ヲ殲ント欲ス佐賀之兵ヲ徵ス

松平康英屠腹

虎千代君御聟養子

戍兵寡少急ニ應スルヲ得ス夜ニ至リテ英舶帆ヲ揚ケテ去ル康英憤恨戍兵寡少攻擊之機ヲ失フヲ憾ヲ明日上書具狀國ヲ辱ムル
ノ罪ヲ謝シ屠腹シテ卒ス世其志ヲ悲ム後佐賀之家人座シテ自死スル者七人

一十一月十日松平肥前守當秋諳厄利亞船長崎渡來之時家來共油斷之形勢人數手當モ疎カナル事不調法ニ付逼塞被　仰付

文化六年己巳　　公三十九歲

三月東覲

二月廿二日若山御發駕三月九日江戶御着座

十二月幕府吏令東覲西歸以秋爲期

十二月三日當分御暇御參府共可爲秋中旨被　仰出

養幕府公子虎千代君爲嗣

十二月十一日　上使御老中ヲ以　公方樣御三男虎千代樣ヲ　錯姬樣へ御聟養子被　仰出即日爲御禮兩御丸へ御登　城同廿一日右之御儀ニ付御登　城御拜領物被遊

文化七年庚午　　公四十歲

五月朔日渡邊彌三郞於深川三十三間堂半堂大矢數ヲ通ス朔日明六時ヨリ射掛同日暮六時ヨリ翌二日明六時迄夜中篝焚大矢數半堂惣一

紀州久保田源藏指南

通矢壹万千七百四拾七本

惣矢壹万三千九十貳本　　渡邊彌三郞　十四歲

虎千代君御逝去

赤阪邸類燒賜貳万両

大沼優之助世話

一五月三日虎千代様御立歸ニテ御屋敷へ被爲入　八月廿八日ニモ同様被爲入

一八月廿一日虎千代様御養子被　仰出候ニ付

公方様思召以金壹万兩御拜領　御家老御呼出之上本文被　仰出

九月歸藩　九月十五日御國許へノ御暇被　仰出同廿二日江戸御發駕十月八日若山御着城

十月二日虎千代君卒

俊岳院様ト奉稱右ニ付紀州へ　上使御使番織田圖書被　仰付

一同月晦日　大殿様（觀自在公）御住居御下屋敷（若山）燒失

文化八年辛未　公四十一歳

二月赤阪邸火賜金貳万兩

二月十一日江戸市ヶ谷本村ヨリ出火赤阪御本殿及山屋敷邊類燒

鍇姫様豐姫様御初麹町御上屋敷御住居被遊

一同月十六日御火災ニ付　公方様ヨリ上使ヲ以金貳万両御拜領

一三月十二日赤阪御屋敷大御門御取建場所替之儀　公儀へ御達相成

是歳在藩

三月廿二日御火災ニ付當年御參府御用捨御滯國之儀被　仰立之處來々酉年御參府被　遊候様被

仰出

一同日　公邊御勤向年中御獻上物御省畧之儀年限ヲ以被　仰立候樣被　仰出六ヶ年御省畧御達相成

一四月廿八日江戸赤阪御本邸辰巳之方入込候町地貳千百坪爲火除地御本殿內ヘ圍込御願之通被

仰出

一寶鑑ニハ　三月廿二日トナストアリ四月廿三日トスルアリ今江戸御屋敷取調書ニ據ル該所ハ元町家ニテ鱗店ト稱ス邸中目隱シ阪ノ下ニシテ天保年間ニハ御鷹場トナレリ維新前ニハ川北惣右衛門伊藤爲十郎吉田直三郎等拜借地トシ各家屋自設住居シタリ

按スルニ　火除地ハ御三家ニ限リ許可セラルヽヨシニテ他ノ延燒ヲ豫防ノ爲メ御館近キ邸外之處ヲ空地トナセリ即チ今之華族學校之邊牛ハ元赤阪御本殿之火除地ニテ相之馬場ト稱シ場廣ノ空原也シ青山御殿之火除地ハ今ノ　皇太后宮表御門前往還ヨリ憲兵屯所邊青山市街之角迄櫻樹並木之內手等一面之空原ニテ之ヲ宮樣御門前ト稱ヘタル也

一四月廿八日監察職務ノ事御直書ヲ以テ同役仁右衛門ヘ御沙汰有之

仁右衛門ヘ

昨日申聞候趣左之通ニ候條可得其意候尤何レソヘ可申付旨申聞候得共直書ヲ以申聞入候事

用向萬端無滯可取計儀ハ勿論ニ候得共其方共役儀ハ別テ規矩ヲ正シ候事ニテ時々用辨ニ而已泥ミ作法崩候テハ如何ニ候譬ハ同役新古之內時宜之働能用向辨候共自然作法ニ振レ候樣之儀ハ相互ニ致督責可申儀ニ候條此段厚心得新役之者ハ猶更引立行屆候樣可致事

辛未四月廿八日

一五月廿一日魯西亞船又蝦夷地ニ來航ス

十五代史ニ曰　此月廿一日魯船一艘乘組六十餘人漂流ノ体ニテヽ「リイシリ」ノ內ヽトマリノ崎ニヽ八人上陸シ言語通セス南部之戍兵之ヲ擒ニシ松前ニ送レリ夷船ハ敢テ戰ハズシテ退去ス

九月十二日四ツ谷御門外御堀端大森八郎右衛門拜領屋敷九百坪ヲ御相對替相濟是御家老村松郷右衛門屋敷ニ御貸渡ノ爲ナリ

此御方澁谷御屋敷三万坪之内六百坪ヲ寄合落合鄉八ヘ同人拜領屋敷表貳番町七百坪ヲ大森八郎右衛門ヘ御相對替ナリ

朝鮮鷹御拜領

一九月廿五日朝鮮鷹御拜領

是本年五月廿二日於對州朝鮮使聘禮ヲ修タルヲ以テ舊ニ依リ御拜領也元來　公儀御代替ニハ同國信使江戶ヘ來聘ノ古例ノ處當御代思召有之十有余年間延引然ルニ右信使江戶ヘ不及相越於對州聘禮相整候樣追々被仰遣於彼國モ承引ニ付近年之內對州マテ可爲來聘旨去ル文化元年六月被仰出其後漸次準備之上當五月我正使小笠原大膳大夫忠固脇坂中務大輔安董對州ヘ出迎ヘ彼國正使ハ通政大夫金履喬副使ハ通訓大夫李勉來聘國書ヲ奉ス彼我奉酬ノ文書ハ載セテ十五代史ニアリ爾來是ヲ例トシ復タ江戶ニ來聘之事ナシ蓋シ澆季ノ世次第虛禮ニ流レ徒ラニ威福ヲ張リ爲ニ國帑ヲ暴費シ沿道諸侯之國費亦尠カラズ隨テ彼國亦幸トスル居多ナルヲ以テ爰ニ至リシナラン

文化九年壬申　　公四十二歲

是歲猶在藩

德本上人ヲ召シ戒ヲ受ク

五月再召德本、賜廬于那賀郡和佐山、廿九日請之正寢、受戒、行者ハ紀州日高之產、近代高德之念佛行者也、增上寺行戒上人德本ノ弟子著ス所之德本行者傳ニ曰ク

文化九年五月廿九日國君之請ニヨリテ登城シ玉フ御座之間ヲ道場ト定メ御正服ニ十念受サセ玉フニ御傳ヲ用ヒ給ハズ、カクテ舘中（ミタチノウチ）ノ行化モ果ヌレハ翌日ハ御先塋ニテ念佛會アリ種々之御布施ドモアリテ六月朔日ニソ御暇賜リ和佐山之庵室ニ歸ラル此後屢々召ニ應シテ登城シ玉ヒキ

コノ國君ヲ舜恭院殿ト稱シ奉ル中納言ヨリ大納言ニ累遷シ給ヒ御隠棲ノ後從一位ニ敍シ給フ師ノ法孫後年ニ至リテモ修業事カヽメ爲ニトテ無量光寺ヲ造營シ給ヒ恩施幾多ヲ寄給フ天保ノ子年江戸一行院ニモ本堂再建ヲ命シ給フ一行三昧院ノ扁額ハ即チ此君之御染筆ナリ

一又同書ニ曰 文化十四年六月紀伊殿ノ赤坂御舘ヘマヰラル豊姫君ノ御方轉心院殿ヲ初、内外之男女十日誨誓受ケ了レシ者三百九十八人也ト云云

按スルニ 本紀之事、漏美甚五郎政要カ行者ト問答シタル五月雨之記ニモ載タリ曰ク一昨廿八日「文化九年五月也」ニハ御藥種畑ヘ被爲召 大殿様奉初御附一等御十念御授リ被遊候昨廿九日ニハ御城ヘ被爲召中納言様奉初御家中御十念御授リ被遊行者首ニカケ少シノ間モ膚ヲ放サヾル大切ノ佛舍利 大殿様中納言様ニモ御拜御座候云云ト行者之事ハ別ニ傳アリ一行院ヘ御建立之本堂、于今、依然タリ又江戸御舘ヘ參殿之時一箇之小石ニ名號ヲ書シ加持セシモノ今ニ御膳所ニ保存ス御膳所之井水故障アル時ハ此石ヲ下タスニ忽チ透明清淨ニ至リ不可思議ノ功驗アル事毎々也

秘鑑御自著

一五月秘鑑一巻御自著被遊

右ハ 公儀ニ於テ 御三家方初諸侯ニ被爲對御取扱向諸御禮式御豫參御參詣之儀式等御經歷御記憶之旨ヲ御家中心得之爲ニト御自記被遊タルナリ委細ハ典禮之部ニ編ス

叙族式御制定

一八月叙族式御制定、永世之御規則御立被遊

叙族式之儀ハ

御當主様御隠居様御嫡子様御簾中様奉初御連女様御男子様方御實母様御部屋様等御順御附人御定銀木其外惣躰之御規定永世迄御立置被遊候御儀ニ有之 上々様方之御規則相立不申候テハ御政事向等萬端御取締之元難相立松平越中守殿（御老中御勤役中） 寛政四子十月四日左之御書付年寄共迄御渡

シ御規則之儀ハ　公儀御振合ニ御進可被成トノ事ニテ有之右御書付ノ通リニ付彌御規則後世迄憶ニ御立置可被遊　思召ニテ追々御穿鑿之上此叙族式之通リ之御規則ニ被　仰出候御儀ニテ有之御手前之　思召計ニテ御定被遊候御品ニテハ無之前件越中守殿御渡候御書付之趣モ有之旁永世之御規則ニ被　仰出候也

叙族式之儀ハ先達テヨリ追々御定被遊候得共越中守殿被　仰聞候品モ有之旁御取調被遊候トノ御趣意顯シ無之候ニ付叙族式序文ヘ認出シ候樣此節被　仰候也

越中守殿御渡シ候御書付

太眞殿御入用向御取カハシ之類等モ御取締カクヘツニ有之候哉何トカ左樣ニモ無之哉之樣ニモ承及候惣テ表向之御取カハシ類トモニ御規則ハ可有之儀ニ候尤右御規則之處　公儀ニ御進シ可被成儀ニテ御當職右ヨリ御隱居ト申御順ニテ御隱居之御實母等ハ重ク御取扱可有之トテモ上々向之御次ニ御順可有之儀ニテ萬端右樣之御規則ニ可有之處是迄左樣ニモ無之樣ニモ承傳候惣テ御儉約御取締之儀ハ右樣大立候處ヨリ御規則相立御政事向等萬端御當職之御任ニ有之候儀等申迄モ無之儀ニ候得共宜ク其御品相分リ幷取扱候モノ區々ニ不相成一致ニ御取締致シ候樣ニ不取計シテハ難相成事ニ候是等之趣能々相心得紀伊殿ヘモ被申上候樣ニト存候依之無急度覺書進シ候事

但越中守殿御渡シ候御本紙ハ上之御紋散御掛硯ニ御入置被遊有之候事

奉リ　　水野飛驒守

文化九壬申八月

安藤帶刀
渡邊主水正
村上伊豫守
伊達但馬守
村松郷右衛門
加納平次右衛門
戸田金左衛門

件之通格別之御趣意ニテ永世之御規則ニ被　仰出候御儀ニ付時之　御當主樣萬一　思召之品モ被爲在候共御手前之思召斗ニテ御定被遊候御品ニテハ無之候ニ付何分御規則ノ通リ御居置被遊候樣我々共ヨリ奉申上時之執政モ御規則通リヲ違背仕間敷者也

敍族式全文ハ典禮之部ニ揭載シ爰ニ畧ス

一八月魯西亞船蝦夷地センヘコタンニ着岸ス

十五代史ニ曰 去年吾捕フル所之八人ヲ還サレン事ヲ請フ我兵詐リテ其既ニ首刎シ事ヲ報ス夷船之ヲ信セス洋中攝津兵庫之船頭高田屋嘉兵衛ヲ捕ヘテ去ル

一翌文化十年五月廿六日魯船サキニ生捕リシ高田屋嘉兵衛ヲ送還シ先年唐太擇捉ヲ亂妨セシ者ハ魯王ノ知ル所ニ非ルヲ謝ス依テ六月魯船ニ諭シテ先年其侵掠ノ罪ヲ謝シ奪フ所ノ兵器ヲ還サハ我亦生捕リ置ク所ノ八人ヲ返サン事ヲ約ス

一七月江戸赤阪御本殿造營落成ス

八月十三日一ニ廿三日鍇姫樣豐姫樣御移徙

一八月渡邊珪、著南苑瑞德記、獻之

按スルニ 是ヨリ先キ同人香巖公之遺事瑞德記ヲ和文ニテ編述ノ處漢文ニ改撰スヘキノ内諭ヲ蒙リ三年ヲ歷本書ヲ撰修謹上之旨序文ニアリ

一同月廿日御直書ヲ以テ伊達但馬守ヘ左之通被 仰出

江戸表家中何事ニ不寄近頃不穩儀モ相聞種々難澁申立或救無之テハ難立行趣專申觸候者モ有之哉ニ候都テ右躰之儀ハ側近相勤候者ヘハ尚更手寄ヲ以テ可申込哉モ難計候然共年來右躰之節申出候趣意ハ何レモ國家之爲ヲ存且下之難儀之趣ヲ厚申立甚尤之趣意ニ相聞候ヘ共終ニハ一己之擧ヲ心掛ルヨリ發起イタシ候儀相顯レ何トモ不得共意儀トモニ候右躰之儀ハ是迄毎々有之以來可取用儀ニ無之或ハ朋黨之向モ有之其上近比追々勘考ニヲヨビ候趣意モ有之間決テ取用間敷候万一心得違内々此方ヘ申出候トモ不能存念候條此段兼テ申聞置候也

本文之趣ニ候ヘ共難澁之向實ハ相聞一己之趣意ヲ不申出尤ニ相聞向モ候ハヽ年寄共ヘ可申出候直ニ申出候分ハ存念之品有之故、以來不取揚候事

癸酉八月

九月東覲

九月十五日若山御發駕十月朔日江戸御着府直ニ新御殿ヘ御着座

御着即日御移徙御祝儀被爲整當朝於御勝手鯉庖丁被 仰付

一十月御移徙爲御祝儀　両御丸ヨリ上使ヲ以テ御拜領物被遊

一十一月御普請出來ニ付　上使ヲ以両御丸ヨリ御屏風等御拜領被遊

一同月魯西亞書ヲ致シ先年之罪ヲ謝シ八人之生捕ヲ返サン事ヲ乞フ依テ八人之生虜ヲ返ス魯人之ヲ擁シテ去ル

十五代史ニ曰　明年ニ至リ魯人ト界域ヲ定メ、ヱトロフヲ以テ我地トシ中間ニウルップ島ヲ置キシモシリ以北ヲ魯人ノ領ト定ム是ヨリ後魯船復來ラス北邊靜平也

一十一月六日　竹千代樣御誕生御七夜御祝儀ニ付御登城之處黄那粉飯若年ヨリ差上ル

一同月紀州御城内大奥局向燒失

是歳幕府命東觀西歸之期復舊

一閏十一月廿九日御暇御參府比合之儀被　仰立候處來戌年ヨリ如ニ前々ノ御暇御參府共可爲春中旨被仰出

文化十一年甲戌　公四十四歳

四月歸藩

一三月廿一日御歸國御暇被　仰出此時竹千代樣ニ初テ御對顏

一同月廿七日江戸御發駕四月十二日夕若山御着城

一六月廿二日召僧徳本於内廷、令公女受戒

一十一月於和歌雲蓋院
權現樣二百回御忌御取越御法會被　仰付

土工ヲ起シ廢田ヲ墾ス

明年二百回御忌御正當之處、本年ニ御取越御執行、御目見以上自拜相勤

是歳、浚和歌浦御手洗溝、及築新道

一頻年、土工ヲ起シ水利ヲ開テ廢田ヲ起サシム

勢州田丸領廡加江村郷中ニ長廣谷新池堤防壞敗村方難澁ニ付去申年ヨリ來ル寅年迄七ヶ年年々米四拾三石六斗八升一合ヲ御手入ト稱シ村方ヘ下賜ノ處遂ニ該堤防重置工事ヲ被命文化十酉年落成依テ荒地ヲ開墾高拾貳石九斗三合六勺九才ヲ得ルニ至リシヲ以テ御手入高之内拾石三斗五升三合ヲ減シ尚一ヶ年丈ケ米三拾三石三斗二升八合ヲ給シテ以後御手入ヲ止ム

一又同領田口村郷中ニ鍬先荒地芝成荒地多ク村方困窮ニヨリ同村山分注連指村近傍谷間ニ於テ大土工ヲ起シ大小兩箇ノ井關ヲ新築造新溝路ヲ開鑿之處文化十一戌年落成依テ山口ト稱スル處ヨリ大野中村沖ト云ニ至迄ニテ鍬先荒地ヲ開墾スル事三町五反芝成荒地ヲ開墾三町六反合七町一反ノ良田此高六拾九石六斗八升九合ヲ得ルニ至ル依テ去申年ヨリ寅年迄村方御手當トシテ毎年米六拾貳石四斗四升貳合下賜之分文化十一戌年切ニテ停メラレタリ　右兩所工事圖面ハ別ニアリ

一勢州多氣郡古江朝柄片野波多瀨丹生ノ五ヶ村ハ郡中ノ大村タル處水利ナク旱損多ク耕耘ノ勞一日之ヲ廢スレハ草忽チ生シ三日雨降サレハ塵埃ヲアク故ニ農民力耕ヲ勉ムルモ輸租不足、足ラザル者ハ村民ノ賦課セラル、處トナル是ヲ以テ年一年ニ窘困窮乏之名狀スヘカラス丹生村里正西村彦右衛門深ク之ヲ憂ヒ文化年間飯高郡粥見村字立梅（タチバイ）ニ於テ障川股川ノ水ヲ引テ堰ヲ作リ以テ各村ニ灌漑セン事ヲ立案各村長ノ賛同ヲ得テ大庄屋久保六郎右衛門三谷彌七ニ謀ル二人之ヲ官

ニ乞フ御勘定奉行金澤彌右衛門大ニ其擧ヲ賛シ直チニ允許ヲ得自カラ其事ニ當リ屬吏乙部才助ヲ擧テ擔任セシム才助焦心苦慮數里ノ間山腹ノ巉岩ヲ堀鑿或ハ隧道ヲ穿チ或ハ堤防ヲ築キ文政四年初テ起工同六年ニ至テ竣功稱シテ立梅堰ト云堰延長九里强爲ニ灌漑ヲ得テ良田トナル者約百六拾町歩年々米二千五百六十石ヲ得ルニ至リ民大ニ利ヲ得テ澤永遠ニ流ルトイフ

按に　公深く殖産興業を御熱心力を溝洫に盡せらるゝもの此類蓋し勝て數ふへからすと雖も今史料の存するものなく僅々二三を擧るに止まるは殊に遺憾とする處也立梅堰の如き今に尙其惠を德とし彼の五村の民風に建碑の企ありしか果さす然るに明治廿八年古江村の人山本鹿之丞等頻りに計劃既に松坂の人龜井有常に託し撰文の擧ありしと聞傳えたり

文化十二年乙亥　公四十五歲

一二月三日　大殿樣觀自在公御住居御殿向燒失

是歲、在藩養病

一三月五日　御參府可被遊之處御陰瘵之御症爾々不被遊其上御疝積ニテ暫ク御延引之儀　公儀へ御達被遊

右ニ付爾來月々御斷御達之處十月ニ至リ最早御達ニ不及旨差圖有之

一六月廿三日　公方樣ヨリ宿次奉書ヲ以御所勞　御尋七月廿九日ニモ同樣御尋有之、十一月十三日

御臺樣御簾中樣ヨリモ御尋有之

若山港ノ大火

一二月廿二日若山市中湊邊大火

御直書ヲ以テ御沙汰

一五月八日小田金吾於深川三十三間堂大矢數ヲ射通ス
八日暮六時ヨリ射掛九日暮時マデ夜中篝焚大矢數
通矢三千五百五本
惣矢九千二百八十二本
西川吉之丞指南

一七月廿六日　御姫樣方十六歲ノ御年六月十六日御目見御祝儀之品被　仰出

一十二月廿六日御目付心得方御家中風儀等之儀御沙汰有之
御目付共御前ヘ罷出候處御直書ヲ以テ左之通被　仰出
政事向之世話振追々及沙汰候通候此上上下共舊染之風儀改正專一候付テハ其方共勤方風儀肝要ニテ趣意得ト致銘肝細目ニ不泥國事之基本ニ厚ク心ヲ用ヒ可申候抑監察之職掌ハ和漢共重任タリ國家萬々歲長久ニ付テハ段々規則之箇條モ繁ク新古繁雜ニ相成來候處執法之職故悉ク是ヲ守ン事ハ難カルヘシ還テ大義ハ緩ミ細目ハ嚴ニ至リ諸府共是ニ束縛セラレ政事樞要ヲ缺ニイタル國初ノ大禮大法ハ萬々歲上下嚴重ニ可相守事勿論也國計ニ付テハ時處位ニ從ヒ繁雜ヲ省キ簡易ヲ本ニシ兎角ハ人治ニ益アラシメ風儀ヲ改候事ハ既　公邊ニテモ中興　德廟之御潤色ヲ御規則ニ御用ヒニテ知ルヘシ此方ニテモ國初之極ニテモ時處位ニ寄尾水申合　公儀之御樣子ニシタカヒ改正有之事ナレバ執法之官也トテ徒ニ細目之致來ニ泥ヘカラス有用ト無用之義ヲ致辨別煩ヲ省キ治政之潤色ヲ補佐可致候小規則ニ固滯シテハ大本ニオモフキ難ク存事候間一統申究メ前件之趣ヲ以テ改正振リ之箇條モ有之候ハヽ漸々ニ可伺出事

經濟之儀ハ追々申付候趣且世話致シ候振合モ定テ何レモ承知之事ト存候然ル處時節ヲ不辨樣之及仕儀候向モ相聞寅年之趣意モ除米ヲ初且衣服等ニ至ルマテ用捨有之ニ乘シ儉約之趣意悉ク廢風儀不宜近比ハ祝儀等ニ事寄其外共出會毎々ニシテ終ニハ酒宴音曲之遊興ニ長シ次第ニ出會專ニテ甚敷向ハ妻娘等藝者之風ニ仕立恥不申向モ相聞件之不愼ヨリ難澁相嵩節儉之心掛ヨリ只借財之工風世話ノミニ落入公私混雜之風儀不埒之至何トモ心外之儀ニ候是等之儀諸向ヘ響セ可然候得共近比ハ役人向ニテモ同樣之振廻ニ相聞甚不審ニ候此方之樣子ニ隨ヒ役人向ニテハ猶更心得モ可有之處無其儀不快之至ニ候政府ヲハシメ諸役人共風儀ハ自然諸向ヘモ推移可申儀ニ候處其心得モ無之哉ニ見エ且又是等之儀申出候ト相互ニ疑念ノミ專ニ成行諸向之龜鑑所ニテハ無之私怨ノ含此雜談ニ落入計ニテ前段之趣意ハ悉ク忘却之ヤウニ見エ候痛所申立乍恐人經濟之爲且ハ　公邊ヨリ向來可被　仰出哉之箇條モ見エ旁參府延引之譯合モ有之就テハ延氣鷹野等迄モ相止候時節役人向ニテ右ヲ不辨儀モ有之間敷處前件之次第詮スレ處此方之愼不行屆儀ニモ可有之哉何分厚ク勘考之上役人向風儀諸向ヘ之龜鑑トモ可成ニ至其上ニテ諸向風儀且節儉之儀モ可申付哉之事

又御直書ヲ以監察ヘ左之趣モ御沙汰アリタリ年月ヲ失スルヲ以テ爰ニ記錄ス

於東都　公朝之執政幷有司之向ト對藩中之役人ドモ疎遠ニ無之樣尾水両藩之樣ニモ候ヘハ見合程能ク出會可致旨ヲ命候處心得違毎々酒宴遊興ニ耽費有之右ヲ此方ヨリ申付候樣ニ外ヨリモ存

心得違之向有之事當時士民困窮之時ニ候故日夜心ヲ勞ヘキ有司タル者兎角酒宴遊興或ハ漁獵ニ荒國政經濟ヲ忘レ當時海内謳歌之時ニ至リ當藩之政ノミ國用不足四民困窮之段何ヨリモ可歎息儀ニ候處其儀ナク只々當時ヲ凌キ候斗リヲ心懸者多候事

其方共閑談之儀ハ外役ニテモ以前目付役相勤候向トハ出會候趣古來ヨリ聞及候併右体出會モ仲間ハ格別以前之同役當時他役之向ヘ閑談ハ酒宴遊興ケ間敷儀一切無之隨分和順イタシ神妙ニ出會有之可然候外々ヘモ相響程之酒宴等ハ何トカ閑談之意ニハ可致齟齬事ニ候

右之外ニモ存慮之趣モ候ハヽ可申出事

公　四　十　六　歳

文化十三年丙子

三月東覲

三月三日若山御發駕同十九日江戸御着座

當正月十一日御痛所次第御快全ニ付當春御參府可被遊旨御達シ之上本記之如シ

五月朔日　叙從二位任大納言

一殿樣此度御官位之儀御家ニテ被任叙從二位大納言候ハ清溪院樣大慧院樣ニテ被爲在候處御年齡モ被爲在候上之御儀ニ有之尾州樣ニテモ被爲任叙大納言候御方樣ハ御年齡被爲在候御事右之内瑞良院樣ト申上候御方樣ハ御年齡御若ク被爲在候得共御五十歳ニ被爲在候由然處　殿樣ニハ未御五十歳ニハ御間タモ被爲在候處右之通被　仰出候段殊之外御滿足被遊猶又御先例ニハ御座之間ニテ　大納言トノ御儀　公方樣御直ニ被　仰出從二位トノ儀ハ御老中被申上候由ニ候處此

度ハ御座ノ間ニテ御懇之　上意之上從二位大納言之旨
公方様御直ニ被　仰出候段猶以忝被思召候間此段今日之御供中へ得ト申聞候様トノ　御意之趣
御供中へ御酒頂戴之御序ニテ雅樂助殿被申聞候事
同月四日御登　城御官位之御禮被　仰上

式部卿様御聟養子

六月養清水齊順公、爲世子、妻以公女
三日　上使御老中牧野備前守 青山下野守ヲ以
式部卿様齊順公 將軍　家齊公　御七男御聟豐姫様へ御聟養子被　仰出
同月十一日御登　城御養君之御禮被　仰上
一七月廿七日　式部卿様御引移ニ付爲御用途金壹萬兩御拜領來年ヨリ十ケ年之間爲御手當米壹万俵ツヽ可被進旨被　仰出
一同日御手前ニテハ殿様ト奉稱候得共向後御官名ヲ可奉稱旨被　仰出
同廿八日　式部卿様御引移後ハ諸事前々御嫡子様方之御振合ニ被成候様トノ品被　仰出
一九月廿八日　御嫡子様御行列ニ向後御同朋被　召連候筈被　仰出

英船琉球ニ來ル

一十月英船琉球國ニ來リ交易ヲ成サントス許サレス
一十一月朔日御關札向後御稱號御官名認、殿文字相認筈被　仰出
御關札トハ御旅中御宿泊驛之入口ニ立ル木札ナリ表御右筆御書方認之
一同月十八日御獻上物御省畧年延被　仰出

仁孝天皇御受禪

改元

文化十四年丁丑　公四十七歲

一正月廿一日於御城奥舞臺、御能御見物

四月歸藩

三月十日御歸國御暇被　仰出同月廿一日江戸御發駕四月七日若山御着城

一同月　三卿樣方御互御兩敬御取扱ニ相成

一同月廿二日

仁孝天皇御受禪　天皇諱ニ惠仁 光格天皇第四之皇子

光格天皇ヲ尊テ　太上天皇ト號シ奉ル

一十二月十九日寒氣爲御尋　公方樣ヨリ宿次奉書ヲ以氷砂糖御拜領是　公方樣御朦中御鷹ノ鶴無之

代リ也

是歲仁井田撲一郎著儲德畧訓、獻世子、又命人君明暗剛說和解獻之

文化十五年戊寅　文政元　公四十八歲

三月東覲、路探武州金澤遺跡

三月四日若山御發駕廿二日江戸御着　一ニ廿日夕御着

一五月四日文政ト改元

一同月十三日英吉利船一艘浦賀灣ヘ渡來互市ヲ乞フ

浦賀奉行内藤外記正弘薪水食料ヲ與ヘテ去ラシメ其互市ヲ許サス

前年九月ニモ同船浦賀灣ニ來リシナリ

赤阪御本殿燒失

八月赤阪邸火、幕府賜金貳万兩

八月廿二日赤阪御本殿燒失廿五日右火災ニ付

二萬兩拜領

公方樣ヨリ上使ヲ以金二萬兩御拜領

一九月二日此度御火災ニ付御達之品モ被爲在候付此度御國許ヘ之御暇可被　仰出旨　被仰出

上納金差延

一同月廿九日御上納殘金四萬五千兩之分當年ヨリ五ヶ年間御差延被　仰出

文化十四年十月ニモ年延被　仰出ト寶鑑ニアリ

十月歸藩 以邸火也

九月廿二日御國許ヘ之御暇被　仰出十月二日江戶御發駕十八日若山御着城

文政二年己卯　公四十九歲

是歲在藩

二月、營別館於西濱村

西濱御殿御逗留

二月廿八日西濱御殿ヘ爲御逗留被爲成左之通被　仰出西濱御殿　御逗留中五節句八朔朔望廿八日御城ヘ被爲成御禮被爲　請候事

一西濱御殿御逗留中御城ヘ被爲成御用被遊御聽御日割左之通、六日、九日、十九日、廿六日、廿八日

右之外　二日、廿三日

講釋爲　御聽聞被爲成御用被爲聽ハ無之事

本文御日割之内　御參詣等被遊候節御用不被遊御聽御流ニ相成候事
一西濱御殿　御逗留中年寄衆一人ツヽ登城其外一統ハ日々登城無之左之日割ノ通一等登城之事
但被爲成日之外御用少之節ハ見計一等登城無之事
朔日　二日　五日　八日　九日　十日　十四日　十五日　十九日　廿日　廿三日　廿五日
廿八日　晦日　小ノ月廿九日
按スルニ　角岡仁左衛門家譜ニ文政二卯年九月廿日　舜恭院樣御隱殿西濱御普請之節願之上先祖仁左衛門於駿河拜領之石獻呈御庭內詩仙堂巽之方ヘ立石ニ被遊候處後右御殿御取拂ニ相成候節由緒モ有之石之儀ニ付御城御休息ヘ御取寄ニ相成角岡幸光獻石ト致彫刻御同所御庭內巽之方立石ニ相成云々トアリ
一六月廿六日松阪新川井村櫻屋嘉吉之孝行ヲ賞シ鳥目五貫文ヲ賜フ　事ハ孝子傳ニアリ
一九月廿六日御住居向御火災後急々御普請難出來ニ付來辰年御參府御用捨來々巳年御參府ト被仰出

文政三年庚辰　公五十歲

是歲在藩
本年ヨリ三季御獻上物初ル
一本年御五十之賀御祝　但表向御祝ハ無之
一六月十一日松阪下之庄村權太郎養女マサ之孝行ヲ賞シ鳥目五貫文ヲ賜フ　事ハ孝子傳ニアリ
一十月二日江戶御住居未御普請出來兼候ニ付來巳年御參府御用捨被　仰出

松前奉行ヲ廢ス

赤阪本殿上棟

家慶公内大臣

文政四年辛巳　公五十一歳

是歳在藩

六月十三日若山西丸ニテ相撲御覽

一十月末比ヨリ御癪疾十二月廿六日御床上御祝

一十一月廿日江戸御普請未タ御滿作無之御痛所モ爾々不被遊候ヘ共　公邊御慶事被爲在候段御内意被　仰出候ニ付來春押テ御參府可被遊旨被　仰出

本文御慶事ハ　公方樣御轉任右大將樣御官位御昇進之御沙汰アリシ也

一同月廿八日御袍御紋柄御願之通葵丁子唐草御用ヒ之儀相濟

一十二月七日松前奉行ヲ被廢其地ヲ舊領主松前志摩守ヘ御戻シ再ヒ領地ニ被下

十五代史ニ曰ク　寛政中魯夷ノ蠶食ヲ憂ヘ官蝦夷之地ヲ收メテ之ヲ開拓シ又其守衛ヲ嚴ニス文化中ニ至リテ彼人來リ侵ス兵ヲ發シテ戍守費ス所貲ラレス是ニ至テ悉ク之ヲ舊主ニ與フ水野忠成之建請スル所也是ヨリ守備大ニ弛ミ地亦荒蕪ニ委ス識者之ヲ惜ム

文政五年壬午　公五十二歳

正月若山年頭御禮式御保養中ニ付御畧式ニ被遊

一同月九日江戸赤坂御本殿上棟

一二月五日若山御發駕廿二日江戸御着座未タ御滿作ハ無之候得共直ニ御本殿ヘ御移徙

三月將軍任左大臣、世子家慶公任内大臣

四月辭病歸藩

三月十六日御暇之儀被　仰立之趣達　御聽近々御暇可被　仰出旨被　仰出

一同月廿五日御歸國御暇被　仰出廿七日江戸御發駕四月十六日若山　御着城

一同月十三日ニ大阪御止宿之儀御內談之上相濟

英船復來ル

一四月廿八日英人浦賀灣ニ渡來薪水ヲ與ヘ交易ヲ禁スルヿヲ諭示セラル

五月八日英船出帆ス

一五月九日江戸御本殿御普請出來御舞臺開御能有之

中將樣齊順公御簾中樣ニハ矢張麹町御上屋敷御住居翌文政六未年八月廿八日御移徙ナリ

一同月十五日　公方樣近年之內日光　御參詣之御內意被　仰出

毛詩補傳成ル

是歲仁井田撲一郎、所著毛詩補傳成而獻之

文政六年癸未　　公五十三歲

是歲辭病在藩

正月廿日御癬瘡御眼疾ニ付　御參府御日限不被　仰出旨御家中ヘ布達

一二月十五日御持病御爾々不被遊候ニ付御快氣次第御參府被遊候筈　公邊ヘ御達被遊

一同月廿七日　上使御側衆ヲ以テ御直衣御着用御冠モ御召繁文御用被遊候樣御品ハ追テ可被進旨被
仰進之

但御品ハ七月　宰相樣ニモ御同樣ニテ御直衣即日御拜領

一四月十八日宿次奉書ヲ以日光　御宮御參詣之節　御豫參被　仰進

川上百姓一揆

一是夏川上邊之百姓一揆ヲ起シ暴動ス

右鎭撫シテ諸有司初武術者等ヲ栗林八幡堤且川上邊橋本等派遣セラル

是歳四月ヨリ旱魃五月廿九日ニ至リ宮井下之農民水論ノ事ヨリ蜂起續テ北島川上所在蜂起六月七八日ニ至テ鎭靜ス事ハ郡制歷世郡治大概ノ部ニ詳ナリ

一十一月廿五日御眼疾御爾々不被遊候間年内御參府難被遊段　公儀へ御達被遊

一十二月廿六日江戸麴町御殿類燒ス

校刻貞觀政要成ル

是歳校刻貞觀政要成

文政七年甲申　　公五十四歳

四月廿五日是迄御道中爲御持之三間柄御鎗等

宰相様齊順公へ御讓被遊右代御道具夫々御出來

英人常陸ニ上陸

一五月英船東海ニ出沒廿八日英人十二人常陸大津濱ニ上陸水戸ノ兵之ヲ捕ヘ長崎通辭ヲ遣シ訊問其他意ナキヲ以テ放去シム

齊順公御相續

六月致職、齊順公襲職嗣立

六月六日　上使御老中ヲ以テ御願之通御隱居

宰相様へ御家督御相續被　仰出

同月廿二日御隱居ノ御禮御名代左京大夫様御登　城被　仰上

一六月十六日若山西丸御住居被　仰出候得共當分其儘西濱御殿ニ御逗留　同御殿　御當人等　是迄之通リ

一同日御隱居後ニ候處　思召ニテ御代之通嘉定御祝有之

一七月十一日　公邊幷他向ヘノ御名順左之通被　仰出

宰相樣　大納言樣　太眞樣

御內輪御名順モ追而　公邊初ト御同樣ニ相成

文政八年乙酉　公五十五歲

正月元日二日三日年頭御禮御目見以上一統被爲受御謡初ヲモ被　仰付思食ニ依テ也

文政十年丁亥　公五十七歲

是歲、移居於西濱別館

十二月十八日西濱御殿御普請出來ニ付向後御住居ニ被　仰出

文政十一年戊子　公五十八歲

二月廿一日向後前大納言樣ト奉稱

同月十五日　宰相樣（齊順公）御同官ニ御昇進ニ付テナリ

文政十二年己丑　公五十九歲

六月觀自在公薨

六月廿六日太眞樣御實父御逝去ニ付從

公方樣爲御悔　上使御奏者番内藤大和守被遣
是月二日　太眞樣御逝去也　上使ハ同月十三日江戸發途ス
一右之御儀ニ付六月八日　公方樣ヨリ宿次奉書ヲ以テ御悔被　仰進同月廿二日爲御尋宿次奉書ヲ以御拜領物有之
一七月六日　公方樣ヨリ御臓中御尋トシテ　上使御使番松平右近被遣右近六月十三日江戸發途
本日相勤

文政十三年庚寅　公六十歲
三月三日　大納言樣齊順公御登　城之處御老中水野出羽守御部屋ヘ罷出　前大納言樣追々御年モ被爲寄候ニ付御歸國之節御土產ニ被進候樣トノ御事ニテ　公方樣ヨリ格別之思召ヲ以御召之
網代御駕籠御拜領
一六月十八日御老年ニ付御長袴被爲召候廉御國内限リ御裕衣ヲモ被爲召候事
一九月十八日御六十之御賀御内々御祝有之

天保三年壬辰　公六十二歲
三月執政傳命、賞致職後與聞國政　特叙正二位
三月五日　上使御老中ヲ以御隱居後モ御政事向等萬端御世話被遊候段　公方樣御聽ニ達シ追々被爲及御老年ニモ候間格別之思召ヲ以被叙正二位旨被　仰出　四月十五日御名代左京大夫樣ヲ以　御位階之御禮被　仰上

正二位御
任叙

海藏寺本尊御拜禮

天保四年癸巳

正月十九日廿二日廿七日之三日御位階之爲御祝儀於若山西之丸　大御能被　仰付御目見以上其外　御寺方和歌六ヶ坊且寺院社家　幷御寺ニ無之僧正初地士及　六十人者　大庄屋町大年寄初其外芝入

一四月十日駿州小川村海藏寺ヨリ御取寄之本尊地藏尊、初於御座所御拜禮

海藏寺ハ駿州藤枝在燒津近傍小川村ニ在ル時宗遊行派也同寺舊記ニ紀州樣御用留ト題スル帳簿アリ曰ク　天保四巳年四月十日快晴五ッ時ヨリ西濱御殿ハ參上地藏尊ヲ御座之間ヘ御飾付　前大納言樣御拜禮御目見被　仰付三木五郎兵衛御取合

一十一日御庭拜見御座敷拜見　御目見被　仰付

一十八日十九日兩日之內四ッ時ヨリ七ッ時迄之內緣側詰御年寄初御供番頭以上奧中奧頭役同平士迄於安養寺地藏尊拜致シ候樣被　仰出

一海藏寺本堂地藏尊堂ニ額無之付御染筆願出五月御下ヶ被遊御表裝等モ被成遣御書　寶城山

一廿五日御暇五月五日小川ヘ歸着

右御取寄ニ付テハ宮崎藤五郎淺板仁左衛門ヲ迎シテ被遣兩人三月廿六日海藏寺着住僧登龍和尙同道紀州ヘ着候趣モ記載アリ

又同記錄ニ

安永二巳年地藏尊本堂再建費トシテ金二百兩御寄附有之文化六巳年三月三日　中納言樣岡部

御宿之節御目見被　仰付

此外年代不分明ナレ共　御參暇之節御立寄有シト見エ左之書簡モアリ

來ル廿四日　殿樣其院へ御入有之候間前々之通兼テ御心得可被下候　以上

三月廿日　　　　　　　　駒木根八大夫

海藏寺樣　奉書半切ニ認ム

作之通御由緒アルナ以テ當公明治廿六年十一月駿州志太温泉御入浴之際御參詣アリ信モ御供シ奉ルニ御由緒左之寶物等陳列シ御覽ニ供ヘタリ

龍祖ヨリ御讓被遊候御守リ本尊　地藏尊丈壹寸三分　壯嚴美麗堂形之厨子ニ安置

是ハ龍祖駿河御在城中元和年中當寺本尊海中ヨリ出現之地藏尊御信仰　毎々當寺へ被爲成後和歌山へ御入國該尊像ヲ紀州へ御移シ被遊度思召之處時之住僧其阿彌陀佛當地ニ有緣之佛體ユヱ辭シ奉リシヨリ遂ニ御兜ニ御納メ之御守リ本尊ヲ御讓リ被遊タルナリト云ノ

神祖御親筆　梅之畫　御墨畫　細幅也

龍祖御親筆　竹之畫　同　斷　同

淺黄地金襴金丸御紋袈裟　蓋シ舜恭公ヨリ拜領之モノナルヘシ

舜恭公御筆　寶城山　本堂額面之御本紙也　大字　横モノ

幕府御寄附之水引色々

又龍祖御手植之梅ト云古木本堂之前ニアリ兩枝ニワカレ見事ナル紅梅ニシテ昔ノ儘ト云シカシ

從一位御任叙

枝梢折レ朽タルヤ切斷シアリ

天保八年丁酉　　公六十七歳

四月二日　公儀御代替ニ付御名代加納大隅守被遣御禮被　仰上

四月廿五日右爲御祝儀　大御所樣ヨリ　上使老中ヲ以テ御拜領物被遊

一五月四日御平日ハ御齋飾之御衣体被爲召候旨極ル

一九月二日　將軍　宣下ニ付御名代伊達但馬守被遣

同日將軍　宣下ニ付時服御轉任ニ付同斷御兼任ニ付右大將樣ヨリ縮緬十卷　將軍　宣下ニ付

御臺樣ヨリ同斷御拜領

十月幕府使水野越前守脇坂中務大輔傳命、賞公致職後勤勞政務、特叙從一位

十月廿八日於江戶　上使水野越前守脇坂中務大輔（御老中也）ヲ以先達テ御隱居後モ被叙正二位此上御昇進之御沙汰ニ不被爲及御事ニ候得共御老年候マテモ御政務向厚御世話被遊候段被聞召御滿足思召候當時御由緒柄且當年稀成恐悅之御時節旁別段之譯ヲ以被叙從一位旨被　仰出

同日前大納言樣御事　一位樣ト可奉稱旨御家中へ布達

一同日　公儀御獻上物御目錄并御書付等向後紀伊一位ト御認サセ之儀御同朋へ內談之上相濟

一右御位階之御左右御使之者代御飛脚ヲ以十一月四日若山へ達ス

一十一月五日於若山惣登　城席達有之御祝儀申上ル（同日御相合ニテ御酒被下）

一同日於西濱御殿モ御家老席達御祝儀申上ル

一右之御儀ニ付　公儀へ御使水野太郎作御差下十二月朔日右御名代ヲ以　御禮被　仰上

一十二月朔日御位階之御禮被爲請

一十一月廿四日御拜領之御駕籠御寫之筋

大納言樣へ御讓被進之儀　公儀へ御伺相濟

天保十一年庚子　　　公七十歲

正月晦日　御臺樣薨去之奉書御披見ニ付　公儀へ爲御伺御機嫌御使岡野平大夫 大寄合 御差下二月朔日發足ス

御中陰中爲御伺御機嫌　公方樣右大將樣へ一種ツヽ正月廿八日二月七日之兩度ニ御獻上遊サル

一六月十八日御誕生日御七十之賀御內々御祝儀有之

天保十二年辛丑　　　公七十一歲

二月十一日　公方樣薨去之奉書御披見ニ付

公儀爲御伺御機嫌御使水野多門 菊之間詰 御差下

右之御儀ニ付　大納言樣へ爲御伺御機嫌村井玄蕃 小十人頭ナリ 御差下道中十二日振ニテ江戶着二月十八日御使相勤ル

一公儀御法事之節爲御代拜下條伊兵衛 菊之間詰 御差下二月十九日相勤

一二月九日御年寄ヨリ奉願候ニ付御精進解被遊

一三月廿日　上使御老中ヲ以
文恭院様御遺物御脇差一腰 代金三十枚 御拜領
一十一月廿一日　右大將様御婚禮被爲濟候ニ付
公儀へ之御使渡邊圭水 大御番頭 御差下十二月朔日出立ス

天保十三年壬寅　　公七十二歳

六月三日御法號先年　安樂心院宮様へ御賴
文恭院大光正受ト御染筆被進有之候處
大御所様御法號ト御同號ニ付猶又　日光准后様へ御賴御改替

天保十四年癸卯　　公七十三歳

一四月十七日　公方様日光御參詣等萬端相濟候爲御歡御使水野多門 大組 御差下　公方様御歸城ニ
付テ之御使ハ正木五郎右衛門 大御番頭 御差下
一日光御參詣之儀ハ昨十三寅年御内意被　仰進タリ
一　公方様御歸城後日光山へ　一位様ヨリ御名代村岡六藏 菊之間詰 被遣

弘化二年乙巳　　公七十五歳

十月十八日　公方様江戸赤坂御舘へ御立寄被遊候ニ付御拜領物被遊

弘化三年丙午　　公七十六歳

二月幕府、年賜金千兩、爲養老資

賜金一万両 米一万俵

上使公ノ威ニ壓サル

一二月十六日追々御老年ニモ被爲及候間爲御養老　公方樣思召ヲ以年々金千兩ツヽ可被進旨被
仰出
閏五月七日齊順公薨、納清水齊彊公爲嗣、　是月幕府特命賜金壹万兩、且年賜米壹万苞
同八日　一位樣へ　上使阿部伊勢守戸田山城守ヲ以テ　清水中納言樣御事　大納言樣御養子被
仰出御遺領御相續被　仰出右ニ付爲御名代左京大夫樣　上使へ御出會
一同月十日　中納言樣御事此度御養子御相續被　仰出候付テハ　一位樣ニハ不一形御配慮之趣相
聞猶以　公方樣思召ヲ以　一位樣へ此度ニ限リ金壹万兩被進御一生之內年々壹万俵ツヽ被進候
旨被　仰出
一同月廿六日公方樣ヨリ御奏者番伊東修理大夫被遣御悔之　上使相勤
右　上使當月九日御暇被　仰出同十三日江戸發途本日相勤
又御朦中御尋トシテ　上使御使番松平善大夫モ被遣閏五月廿二日江戸發途六月七日　上使相
勤ル
一前段伊東修理大夫　上使之節狼狽之一奇談アリ當時御城中間へ直シ實際ヲ見聞シタル吉田又
右衛門之筆記ヲ左ニ掲ク
顯龍院樣御逝去ニ付　公方樣ヨリ一位樣（治寶卿 舜恭院樣）へ之　上使伊東修理大夫（日向國飫肥城主 五万千八十石）殿被相
越候節御城付助松平三郎大夫中嶋傳之右衛門山口迄罷越修理大夫殿へ面會是迄　上使之節之
御振合等相咄シ候處大体聞キ流シニ致シ御城附ケフハ暑ヒ乍大儀爾テ哭ト申候テ惣体可驚程

之氣儘ニ候ヘ共大切之　上使之事故言フカ儘ニ致シ居候旨察スル處　一位樣ニハ御高年ニ付御出會モ難被遊ト侮リ候樣子ニテ中宿水野土佐守殿屋敷ヘ罷越候節モ主人在江戸ニ付名代ヲ以玄關迄出迎候處挨拶モ不致其儘座敷ヘ通リ又々暑ヒアヲケ〳〵ト御城附ヘ申聞山口御殿同樣之次第ニテ今日　一位樣ハ御名代カト申候ニ付御出會可被申旨答候處左候ハヽ御目ニ掛リ候迄刀ヲ持參致シ可申旨申候ニ付是迄之御振合申述候得共承知不致候ニ付暫ク中宿ニ休息爲致御城附両人共　御城ヘ罷越修理大夫殿山口御殿ヲ初中宿ニテ我カ儘之樣子御用人ヘ申出年寄衆ヘ申達候テイツレモ大當惑若御不都合有之候テハ恐入候ニ付前條之趣逐一　一位樣ヘ申上候處　御意ニハ西國之小大名ハコルモノニ付其邊ニ致シ置候樣己ハ隱居ニ付格別之支ニモ不相成己カ宜敷致ストノ事ニ付先ツ安心致シ御城附中宿ヘ罷越其後　上使登城有之御城内并御座敷向ハ立派ニ御飾リ附有之　上使御對面所ヘ罷出候ト覺シキ比御大聲ニテ是ヘ〳〵ト御意之御聲中之間迄響キ渡リ暫ク相立チ又御大聲ニテ

是迄營中ニテ逢フタ事モ有タカ知ランカ先ツ初テ

少シ間ヲ置キ　今度御用濟タラ國ヘ歸ラル丶カ是丈ケ中之間ヘ響キ渡ル　上使御饗應相濟　入御後御城附罷越申聞候ハ先刻　上使波之間迄刀ヲ持ノサ〳〵ト罷越候處　一位樣御對面所ヘ　出御ヲ相伺ヒ　上使不思波之間ヘ平伏ス御城附トモ一位樣ヲ奉伺候處繪ニアル住吉大明神之樣ニテ　上使大ニ恐レ其儘ヘタハリ頭ヲ得不上　一位樣是ヘ〳〵ト御意ニテ漸ク御對面所ヘ出　上意申述小聲ニテ篤ト難相分御饗應中ハ見苦敷程手ガ揮ヒ御料理ハ少シモ得頂戴不致　入御後柳之間ヘ罷越顏色土之如ク私共ヘ申聞候ハ今日ハ誠ニ不調法致シ何共

申上樣モ無之次第甚心配仕候　上意申述其跡ニテ御老中方之御傳言可申上之處失念仕役目モ難相立如何致シ候テ宜哉何卒宜御差圖被成下候樣以前ニ引替ヘ疊ヘ頭ヲ附恐入誠ニ氣味之能キ事之旨申候ニ付其儘ニモ難差置年寄衆ヘ申　一位樣ヘ申上候處老中ヨリ之傳言ハ有タ樣ニ思ヒ候ニ付心配致スナト　御意被遊候ニ付其趣御城附ヲ以テ修理大夫殿ヘ申聞カセ候處淚ヲ溢シ難有狩リ頭ヲ得不上相歡ヒ其後漸ク御湯漬少々頂戴イタシ面目ナク思ヒシカ山口御殿ヘモ立寄不申罷歸リ候事

一九月廿七日　公方樣ヨリ御天守雷火ニテ燒失ニ付彼是御心配御氣鬱ニ被爲在候御事達　御聽御好被遊候由ニ付思召ニテ御琵琶一箱女中封文ヲ以御拜領

御天守燒失

嘉永元年戊申　公七十八歲

八月十七日　天親院樣御遺物御見臺壹箱女中奉書ヲ以御拜領

嘉永二年己酉　公七十九歲

三月三日　女御御入內ニ付御祝儀御差上被遊候ニ付女御ヨリ　勅使堀三位殿ヲ以縮緬二卷御拜領御名代御年寄相勤出會ス

三月廿七日齊疆公薨、立慶福公爲嗣、甫四歲

齊疆公御逝去

大納言樣御逝去ニ付　公方樣ヨリ爲御悔御奏者番諏訪因幡守被遣四月廿二日　上使相勤右爲御禮公儀ヘ之御使橋本六郎左衞門被　仰付

一御滕中爲御尋　公方樣ヨリ上使御使番仁木二郎八郎被　仰付四月十三日江戶發途同廿七日

菊千代樣御相續

不老橋ヲ造ル

和歌御旅所替

上使相勤右爲御禮　公儀ヘノ御使薗田彥兵衛被　仰付

右兩度之　上使ヘ　一位樣御出會不被遊安藤飛驒守　御名代相勤ル

一閏四月十一日此度　菊千代樣御家督御相續被　仰出候ニ付　一位樣ヨリ　公儀ヘノ爲御禮御使

菅沼半兵衛ヘ被　仰付翌十二日若山發足ス

一八月九日　菊千代樣御宮參被爲濟候爲御祝儀從

公方樣上使本多越中守ヲ以鮮御肴壹折

右大將樣ヨリモ　上使酒井右京亮ヲ以鮮御肴一折御拜領

嘉永三年庚戌　　　　　　　　　公　八　十　歲

三月廿八日　菊千代樣大奥ヘ御登　城被遊候爲御祝儀

公方樣ヨリ　上使松平和泉守ヲ以一種千疋

右大將樣ヨリ　上使久世大和守ヲ以一種御拜領

御簾中樣ヨリモ御使御用人大熊善太郞ヲ以一種被進

右上使御使ヘ　左京大夫樣御出會被成候事

六月、設壽筵

六月十八日御誕生日ニ付御八十御賀御含ニテ御附屬且御用兼帶之面ヘ被下物等有之

是歲、公命改作和歌浦東照宮、祭游殿、沿道架石橋、名曰不老橋

十月廿三日和歌御旅所幷御道筋毎々被損有之付　思召ヲ以御旅所御場所替被　仰出御道筋等御

舜恭公御逝去

普請被　仰出候事

翌嘉永四亥年四月九日御旅所御普請出來同夕御地鎮執行御祝儀餅蒔御式有之

一同年御祭禮之節ヨリ右御場所へ渡御有之是迄御召御團初御船出嶋浦へ相廻リ候處御旅所替ニ付當年ヨリ右御船布引下へ相廻ル

一御旅所裏道へ石橋出來四月十五日御普請奉行渡リ初右石橋ヲ不老橋ト相唱

嘉永五年壬子　公八十二歳

十月四日、幕府使阿部伊勢守、傳命曰、公老而勤勞政務、且際齊彊公丕世、慶福公猶幼、特思其憂勞、嘉其精勵、因慰勞之、

十月四日左之御書付御老中阿部伊勢守ヨリ水野土佐守へ相渡候書付之趣

一位殿御事御家政向之儀多年厚御世話被在之殊ニ憲章院殿ニハ御相續間モ無之當紀伊殿家督被爲成候ニ付テハ御幼年之儀彼是別テ御世話被在之段御滿足被　思召候旨　御意ニ候此段紀伊殿一位殿へ可被申上候

嘉永六年癸丑　公八十三歳

正月廿日公病薨於西濱別宮（公薨實在去年十二月七日今歳始發喪）

是月廿六日葬於濱中長保寺、謚曰舜恭公

正月廿日御所勞被成御座候處御養生不被爲叶今曉寅下刻御逝去被遊

御内實前年十二月七日辰上刻御逝去也御壽算八十二

一同月廿六日五半時御供揃ニテ四ツ打一寸廻リ　御遺体西濱御殿御出棺八半時日方永正寺へ御着棺翌廿七日曉八時之御供揃ニテ七ツ打一寸五分廻リ永正寺御發棺四ツ時濱中長保寺へ御着棺於釋迦堂御法事有之相濟八ツ〈二寸前御石槨へ納メ奉リ萬端無御故障相濟

御法號　舜恭院殿一品前亞相大光正受源恭公

和歌御靈屋ハ　清溪院様ト御合殿

一同年五月廿日　公儀へ御達之上御日取正月八日ニ御改

御畫像　三

御廿一歳御裝束像

一條忠良公讃

御束帶像

嘉永四亥年御畫師堀端晴野依命拜寫

御老年御小直衣像

御在世中御小納戸頭鳥井源之丞依命御小直衣像拜寫ノ下タ畫アリシヲ讓恭夫人ノ特旨ニ晴野拜寫ノ方御顏容肖奉リシ由ニテ右ニヨリ嘉永六丑年六月御畫師野際蔡眞ニ被命シ處トアリ

一公有司ニ賜フ所之親書既ニ本記ニ編スル如ト雖モ監察ニ賜フ處猶存スルモノ多シ　御施政之秘ヲ窺フニ足ルアルヲ以テ左ニ輯錄ス

目付共へ

長門守義中山備中守成瀬隼人正へ出會ハ勿論其外毎々他出有之事ト存候何トカ如何敷沙汰モ決テ可有之條右等之儀ハ早々申出候樣今日之不時飛脚ニ東都へ可申遣事

四月廿四日

目付共へ

「右ハ御家老三浦長門守江戸在勤中之事ナルヘシ」

昨日申殘候故以書付申聞候海野兵左衛門儀去冬被風ヲ遣候事ニ候其比中野榮雲曉之茶有之右之節着用イタシ候由右之節之風聞且又近比由比楠左衛門儀二男之方へ參甚酩酊ニテ翌日右故登城モ不致程之儀ニ候右之風聞將又　御下屋敷御燒失之節曾根孫大夫儀酩酊ニテ如何敷風聞モ有之候右之三ヶ條其方共及聞候趣ハ如何樣ナル趣ニ候哉別段糺候ニハ不及聞及ヒ候趣ヲ今夕迄ニ可申出候事

右之外似寄候儀モ候ハヽ可申出候事

「按スルニ　御下屋敷ハ　観自在公御殿ニテ文化七午年十月晦日御燒失兵左衛門へ御被風遣候ハ文化八未年也然レハ本記ハ文化九年ノ御事ナルヘシ兵左衛門此時御勘定奉行由比楠左衛門曾根孫大夫ハ共ニ奥掛リ御用人御小姓頭兼帶也」

目付共へ

左之趣ハ心得迄ニ申聞候本書之通尾州之儀問合候儀モ兼々樣子見及候處ニテハ毎々直書之往返ハ有之候得共水府抔ト違用向之儀ハ先此方ヨリハ書通不致事ニ候其故ハ是非側用人野村佐大夫小姓頭取佐々喜三郎抔一覽イタシ夫ヨリ隼人正へ及相談其上ニテ返書案文等ヲ認出シ右ヲ以被

及答候様子ニ候右之通故用向ハ先難致往返事ニ候扨又幸昨日五日出飛脚ニ申來候由ニテ差出候由比楠左衛門ヨリ之上書御城附書面トモ内密見セ置候此一件抔モ同様ニテ腰物留緒ニテモ矢張自身之存念通ニモ難成歟何トモ餘リ不都合故　水戸殿トモ申合候儀モ有之候得共從來如此儀ニ尾州ニハ餘程趣意有之儀ニ候故能序ヲ以可申試ト先其邊ニ差置候事ニ候乍去右ハ去々年之儀今程ハ定テ相違之儀モ可有之哉ト先頃楠左衛門ヘ申付御城附迄申遣候處如此ニテ于今同様ト相見候何トゾ趣意モ有之義カハ不存候得共側向之儀迄モ一々隼人正指圖有之様子ハ去々年秋迄ハ尾張殿儀幼年ノ節先隼人正ノ世話振リト相違モ無之様子ニ候得ハ右一件モ任セ置候テ隼人正存念次第ニ相成リ當人ハ事多故致忘却其儘ニ成行有之儀ハ何分右一事ニテ萬事相察候時ハ當時是非名古屋藩中ニテ隼人正風聞モ可有之儀ト存候右ハ幸故申聞候ヘ共此類數ケ條有之候事ニテ家風之様ニモ相成有之候ヘハ強テ成瀬之醜聲モ無之候哉何分申合聞申出候様勢州ヘ尚可申遣事

十六日

尚以本書此書面楠左衛門ヨリ出候書付トモ心得ニモ可相成候條勢州ヘ可遣候追テハ楠左衛門上書幷本書此書面トモ返却可致事

楠左衛門ヨリ之上書

先達テ被　仰付候　尾州様御腰物御留之儀御城附ヘ承ニ遣申候處別紙之趣申越候ニ付奉入御覽候別紙之趣ニテハ今以御若年之節御用被遊候御振合御改不被遊候儀ト奉存候

御城附ヨリ之別紙

尾州樣御登城并御他出等之節去々午年比迄ハ御腰物へ御印籠ヒモ体之物ニテ御留メ被遊在之趣然處當時ニテハモハヤ御留ハ爲御解被遊候御儀ト思召候右ハ如何樣之御模樣ニ御座候哉イサイ可申達之旨貴札之趣具ニ承知仕候右ハ御他出之節ハ如何可有御座哉不奉伺候得共御登城之節ハ此節モ御大小共能相窺候處矢張御印籠ヒモ体之モノニテ小兒之腰之モノヲ留メ候樣ニ御着〆モ無御座解キ不申候ハテハ抜ケ不申樣御留イタシ御座候左樣御承知可被下候依之如斯御座候恐惶謹言

五月五日

三輪三右衛門

由比楠左衛門樣

目付共へ

尾州常服一件ニ付一昨日差出候書面之趣承知之事ニ候右之内瀧川豐後守儀川向専ラ取扱候哉ニ相見候就テハ尚申聞候ハ從來尾州ニテハ家老専事ヲ取其内近比迄ハ成瀬隼人正一人ニテ萬事引請隼人正勤役中モ同樣ニ候去々年此方御暇前迄之樣子ニテハ申ハ尾張殿存念通ニモ不相成於此段ハ得失モ有之樣子ニ候右去々年秋迄ノ樣子ヲ考合候テハ近比常服江戸表之通ニ相成候儀モ若々隼人正専申出候ト申樣ナル儀ニハ無之候哉尚風聞可相尋候若ハ隼人正去年來ハ犬山へ　在邑イタシ候儀ニハ無之哉先例ニハ尾張殿犬山へ被参同日ハ犬山城中ニテ饗應有之能抔モ有之先例ニ候若哉右等之儀有之タル儀ニハ無之候哉件之趣風聞申出候樣ニト存候事

五月十六日

「右文中去々午年トハ文化七庚午ナルベシ　公ニハ同年九月御歸國以後御在國故ニ去々秋迄云々ト被遊シ也尾陽公ハ即チ源順公 齊朝卿 御八歳ニテ御家督文化七年ニハ御十八歳　公ガ此御親書之比ハ御二十歳ナリ然ルニ小兒ノ御扱ヲナス畢竟政大夫ニ在テ權臣跋扈之弊ヲ御憂慮御同族一躰之義深ク御案シ被遊シナラン勢州ヘ可遣トハ松阪詰御目付之事ニテ名古屋ヘ程近キ故カ瀧川豐後守ハ江戸常府御家老也」

一左之通御目付ヨリ言上之處朱書「」之通御脊書ヲ以御下ケ被遊

「御脊書 書面之趣承知伺之通不用之文段相省堅紙相用都テ可爲書面之通事」

私共ヨリ申上候風聞之趣遠ク外ヨリ入　御聽候テ御尋或ハ御側御用人ヨリ相尋候上申出候儀毎々有之候ニ付御不都合之事モ有之候イツレニモ遲ク候テハ惡事モ募或ハ手廣ニ相成自然重キ御咎之場ニ至リ候輕キ内又ハ萠シ有之所ニテ取計候ヘハ　御仁政ニ相成候トノ　思召ニテ御取捨可被爲在御事候ヘハ取〆ラサル風聞ニテモ先浮々成所ニテ不取敢取沙汰之趣早々半切ヘ認申上候樣右浮々之申上ニテ否之御裁斷ハ無之猶御糺之上御取捨被爲在ニテ可有之候間不及斟酌申上候樣且又凡例之儀ハ省キ書法ヲモ時宜ニ寄致變化通例ナラザル風聞而已言上可仕トノ品ニ付去ル子年私共ヘ被　仰出之趣伊兵衞申聞候ニ付其後ハ右御趣意通取計仕候心得ニハ罷在候得共都テ風聞筋申上候儀ハ不容易品ニテ勿論人之善惡ハ賞罰ニ拘リ候儀別テ大切成事故其段心配仕乍恐右被　仰出ヲ奉背候品ニハ曾テ無御座候得共オノツカラ入念又ハタメラヒ候内手後レニ相成候儀モ粗有之付テハ因循致シ半切紙ニテ申上候品モ近比ハ何トカ澁ラキ自然古形之振リヘ

戻リ候氣味モ御座候尤右之通リニテハ厚被　仰含候御趣意ニモ弛レ猶去春仲間共之内御勝手掛
リ被仰付右心得振之品作右衛門申聞候内ニモ御役儀ニ縛レ規矩小サク候テハ大義不相立候間意
味ニ泥ミ不申候樣トノ趣モ有之ニ付旁以私共精々申見候處前段子年之度被　仰出候御趣意其外
追々被　仰出候御趣意等兎角相改カネ候義ハ畢竟古形ヲ守リ候故トハ申ナカラ舊弊ニ縛レ固滯
致シ候故之儀ニテ自然御趣意モ貫キカネ別テ恐入候儀ニ付以來ハ彌子年被　仰出候趣ヲ以風聞
スヰ浮々之儀ハ不取敢早速半切紙ニテ申上取〆リ候儀ハ例之振ニ堅紙ニシタヽメ書付差上候樣
可仕候乍去元來風聞ハ誠ニ巷之浮說ヲ本ニ致シ候儀ニ付タトヘ取〆リ候上ニモ猶虛實決定之場
ニハ難至實ニ難事ニテ若相違之所ヲ以テ御裁斷有之候ヘハ御政道ニモ障リ至テ大切成儀ニ付此
以後私共ヨリ書付差上候所ニテ惡事之御裁許有之節ハ其前右申上候後風聞ニ相違無之哉トノ御
尋又ハ御側御用人共ヨリ相尋候樣仕度候左候ヘハ再應入念申見事ヲ取計候ヘハ過モ可少哉ト奉
存候且又右言上振之儀古形ニ不泥姑息ヲ離レ一條申見候趣ハ取〆リ候風聞ニモ猶虛說モ有之浮
々ニ實事モ御座候ニ付其段ハ甚疑惑成モノニテ御座候得共銘々了簡推量ヲ以一統申見候上是非
ヲ定候儀ニ付前段之通リ浮々成品ハ半切紙取〆リ候儀ハ堅紙ト相極候テモ其者共之生質功拙ニ
寄決斷モ混雜可仕哉ニ付一向半切紙相止向後都テ堅紙計ニ致シ凡例之不埒不屆トノ文段除且不
用之文ハ省キ要文ノミ認善惡トモ書付サシ上其趣意ニヨッテ御取捨被遊若御裁許有之節ハ前段
之通御尋出候樣仕度候右ハ何卒心付候品モ有之候ハヽ可申上トノ儀兼テ奉畏候ニ付乍恐奉伺候
乍併濟來候儀ニ付是迄之通致候樣トノ御儀ニモ可有御座哉イツレ御下ケ紙ヲ以成共　思召之程

被仰出候ハヽ難有奉存候以上

五月十五日

目付共へ

昨日差出候書面之趣委曲承知尤之儀ニ候乍去諸向ニモ毎々同樣之儀有之其節ニ趣意申聞ル儀ニテ以前ニ一々趣意申聞儀モ難行屆又ハ事ニ依リ差支之儀モ難計候既近來公邊御振合ニ順ル儀ハ物數奇之樣ニ存向モ有之哉ニ候へ共右ハ寬政ノ度前後追々重御趣意モ有之三家一統申合之譯モ有之儀ニ候得共尾水ニテハ從來其意ハ能心得候哉ニ候得共於當藩ハ前々ヨリ御遠慮等之儀甚多右御遠慮之御趣意於當時ハ却而異体ニ見エ候類モ有之其上東都ヘハ程遠候ニ付テハ右等ノ意合相違ニテ家風之樣ニ心得候向モ數多有之却而　公邊へ順ル儀ヲ手弱キ樣ニ心得且ハ藩中ノ一避ニテ不承知之向多就テハ不得止事重趣意ヲ申聞儀モ品ニ依テハ有之儀ニ候乍去一々共通ニモ難相成事ニ候幸近比自筆ニテ秘鑑ト表題イタシ候書記有之候間先右之書記近日爲見候樣可致候事

八月三日

尙以本文之ニ通候得ハ向後又々此度躰之儀有之其方共ニテ難解儀ハ何ト之儀役意ニ不應樣ニ存ル趣先一ト通リ申出候樣ニト存候左候ハヽ其節ニ其品可申聞候扨又此程附紙イタシ候書面控モ無之直チニ下ケ候事故又ト差出候樣ニト存候若ト役所ニ差置度儀ニモ候ハヾ控出來次第又々可相下候事

右ハ近比秘鑑云々トノ御文ニヨレハ文化九年五月以後當座之御事ナルベク監察言上之事實難計ト雖モイツレ御政事上之建言ナルベク實ニ君臣水魚之如キサマ自然ニ溢レ感佩ニ不堪、寛政之度、重御趣意トハ蓋シ樂翁侯執政之時彌親藩一致御補佐ノ大本鞏固等ノ御趣意ニモアランカ於當藩ハ前々ヨリ御遠慮之義甚多クトハ　龍祖御英邁元和偃武ノ際天下竊カニ提携又有德公藩ヨリ大統御繼承故ニ万事ニ御遠慮御控ヘ目ト申ハ御當然之政畧、然ルヲ物變リ時移リ因襲習慣ヲ來シ且東都ニ懸隔自ツカラ外藩同樣ノ思ヒニ陥リ　幕府ヲ奉スル念慮薄キニモ至ランカト特ニ御匡正之術務メテ幕府ニ御準據トハ察シ奉リヌ御遠謀之深慮可奉恐入也」

目付共へ

都而風聞之儀ハ定法モ可有之候得共無餘儀次第モ候得ハ此節ヨリ書上候程之儀ハ先此方ヘ可差出候當時ハ去々寅年以來表方之側向進退迄モ此方ヘ伺有之事故申上候程之風聞ハ勿論其外共心得ニ可相成儀ハ浮々ノ儀迄モ前以此方ヘ可申出候斯申テハ何トカ如何敷申事ナレトモ無餘儀次第モ有之万一趣意可齟齬儀モ難量旁此段内密申聞置候事

二月廿五日

右ニ付御目付ヨリ奉答伺ヘ御張紙ニテ御差圖

一都テ風聞筋之儀　大納言樣ヘ申上候程之儀ハ勿論其外共　御心得ニ可相成儀ハ浮々之儀迄モ前以申上候樣　御書之趣奉畏候右ニ付都テ風聞筋之儀　御同所樣ヘ申上候程之儀ハ前以申上　思召相伺候上御同所樣ヘ申上候樣可仕哉（御張紙）「此通ニテ宜敷候事」右ニ付勢州表風聞筋之儀ハ言上書付取組候迄之内松坂詰仲間共ヨリ此表ヘ申越仲間共熟談之上申上候ツキ前以相伺候儀都合宜敷御座候ヘ共江戸表之儀ハ　御同所樣御在府之節ハ同所仲間共切ニテ風聞筋取組言上仕右品追テ

此表へ申越候振合ニ御座候ニ付同様前以相伺候樣仕候テハ彼是往返ニ手間取事ニ寄御不都合之品モ可有之哉ト奉存候ニ付年寄共初御役人向等之風聞筋其外　御心得ニモ可相成品ハ前以相伺候樣仕其外風聞筋之儀ハ是迄之振合ニ居置候樣可仕哉（御張紙）「此通ニテ宜敷候事」御趣意ニ背候テハ奉恐入候儀ニ付　思召猶奉伺候乍恐　御上ケ紙ニテ成共被　仰出被下置候ハヽ難有奉存候以上

二月廿八日

「右御文中去々寅年トアレハ御隱居後天保三辰年之時ナルヘシ表方云々何云々ト被遊シハ御當主大納言樣　顯龍公ヨリ御伺有之事也」

目付共へ

以書面申聞候左之役々此節如何之風聞ハ無之哉早々可申出候尤風聞ニテ及所置等ハ無之候得共公邊ニテハ專風聞御用モ有之哉ニ相聞候當時退隱之身分何事モ打捨置此度大ニ恐入申込ヲモ致タル程之儀以來專風聞不聞シテハ一日モ安心難成旁相尋候條此節之風聞先半切紙へ認兩三日中ニ内密可差出候事

二月三日

尚々近比ハ半切紙へ認差出シ候儀無之樣ニモ聞及候

右ハ何故ニ候哉表方へハ差出候哉以來ハ此方へモ可差出候事

年寄共　勘定奉行　用人

「本文ハ年號缺失ト雖モ蓋シ下文ト各時則天保五午年ノ事ナルヘシ御申込云々之件ハ何等ノ儀カ元ヨリ難分恐ク山中筑後守一條ニ付テ成ソカ」

目付共へ

昨日差出候書面委曲得其意候文化之比ヨリ追々當時之樣子是又得其意候退隱後至當時テモ彌テ風聞等閑度ニハ無之候へ共此度之御處置ニテ何トモ安心難成甚不得止事依テ以來浮々之品ハ半切紙取〆リ候品ハ堅紙へ認可差出候此方へ斗年寄共へモ申聞置候ト認表方へ出候筋ハ先差出ニ不及品ニ寄其方共ニテ此方へモ差出候方ト存筋之義ハ可差出事

一此度筑後守儀ハ風聞而已ニテ役儀差免隱居申付家督ハ悴へ授可申付トノ御沙汰ニ候トノ事ニテ此度之通ニ候風聞ニテ件之通嚴重ニ　御咎ト申ハ如何樣ナル儀ニ可有之哉同人勤役中其方共心附候儀無之哉

一此節右一件ニ付　公邊へ掛候取扱振不宜故トノ儀申候由右ハ何之箇條ト申儀ハ無之哉右等之外ニ乍浮々モ風聞ハ無之哉序ニ相尋候條可申出事

二月七日

「按スルニ筑後守トハ山中筑後守也同人事天保五年正月十二日　公邊ヨリ御内々御沙汰之品モ有之付御役　御免　隱居愼知行之内二千二百石嫡子熊之丞ニ被下置大組被　仰付筑後守ハ　舜恭公御用御取次ニテ權勢盛之處山高石見守ハ御表方御家老ニテ是亦權威アリ此時之風評ニ　一位樣追々御富年ニ付御政事向ニ御苦勞不奉掛樣　公邊ヨリ御内沙汰有之且筑後守一己之取扱モ有之哉ニテ隱居被命以來　一位樣ニハ御政事向ニ御携リ不被遊抔密々相開エ石見守ハ同年六月ニ年來精勤殊ニ別テ骨折候品モ有之付御足高之内御加增二千七百石被　仰付兩人之間兎角軋轢之姿ニテ間モナク同年九月筑後守ハ　公邊御趣意モ有之旨ニテ愼　御免同時ニ石見守ハ依願隱居又其十二月ニ筑後守ハ再勤加判之列同樣ニ被　仰付如此常ニ甲退ケハ乙進ムト云フ有樣ナリシ詳ナルハ　顯龍公天保十三年七月之記ヲ參觀スベシ　公ニモ痛ク御配慮之サマハ自ラ監察へ之御文上ニ顯レタル如シ」

故實有職御熱心ノコト
長澤伴雄内命ヲ以テ諸書新寫

故實有職御熱心之事（一本此ノ項五七一頁マデナシ今東京帝大本ニヨリテ之ヲ補フ）

舜恭公ニハ服章有職等惣テ故實ニ御熱心常ニ專門家ニ御下問御講究アラセラレシヤ長澤六郎惣領同苗衛門ハ和學ニ通シ其道ニ堪能ナルヲ以テ御内命アリテ江戸京師ヘ被遣又ハ御前ニ召サレ御親問等アリ今衛門自記ノ江戸御用日記乃至西濱御殿御用留トイフニヨリ其條項ヲ拔抄ス公御素養卓偉ノ一端ヲ窺フニ足ルベシ

但衣服章ニ關スル條ハ服制之部ニ割載ス

天保七年二月十二日

一六州五郎藏書并校正書謄本等夫々寫シ取之儀仁井田模一郎ヨリ　一位様ヘ願御許容都テ入費ハ御殿ヨリ御出シ可被遊トノ事幸ヒ衛門此度一年詰ニテ江戸ヘ罷越ニ付詰中出受取計候様ニト模一郎ヨリ衛門ヘ申聞ル

二月十七日右掛リ御用人夏目彈正御小納戸三毛三郎大夫ヘ被仰付右ニヨリ御發駕御供ニテ三月江戸着直ニ伴ヘ罷越申入タルニ同廿四日江戸赤坂御殿御燒失青山ヘ御引移ニテ万事停止トアリ

一四月廿五日徒ニ時日ヲ送リハツカ一年ノ日合ニテハ何程モ出來カタクニ付自費ノ人費ト心得手行ニ可成書取リ寄寫サセ可申ト仁井田ヘカケ合承知ニ付ソロ／＼筆工ヲ申付ル

右ニ付一代要記政事要略ヨリ相カヽル筈

衛後着々從事天保九年四月迄江戸ニ滯在寫シ了差上タルヨシ

天保九戌年閏四月十五日出殿後三年形燧袋幷八丘椿一冊獻上
同廿八日伊勢平藏貞丈草稿位色便覽一冊入御覽處未タ圖類モ少〻不足ニ付增補致シ畫工ニ申付
淸書之上書入ヲモ委敷可致樣被　仰付
　右畫工ハ伺之上當時名所圖繪御用ニテ若山ヘ參リタル菱川廣隆ヘ土佐畫ニテ認候樣申付ル
五月六日大內裏圖考證ヲ本書ニ當リ校正被　仰付考證御下ケ被下
同九日江戶菊池容齋認候普門品經畫上下二卷入　御覽右下卷之方未タ經文認無之ニ付爲認候樣
トノ御沙汰ニ付容齋ヘ申遣八月廿五日認越シ差上ル
九月四日飾馬十種大皆具考証注解被　仰付
十月廿九日菊池容齋ヘ大極殿朝拜之圖申付候樣御沙汰ニ付申遣ス
十二月廿六日年中行事畫之內關白加茂詣左近衞謝二卷出來差上ル
　右ハ江戶內藤溪次郎ヘ申遣シタルモノニ見ユ
天保十亥年二月五日大內裏考証細圖呈進ス
三月五日年中行事畫大臣大饗稻荷祭上納
同廿七日舞樂御興行拜見被　仰付四ツ時出殿舞樂は甘洲林歌二曲也終日御庭拜見被　仰付七ツ
時比相濟
右拜見記認メ四月十一日上ル
一四月十一日內宴之卷上ル

同十五日大内裏圖合九圖年中行事畫八卷着ニ付差上ル
一同廿一日御内々御用筋ニテ上京致候樣御内命訖度ナク被　仰出
一五月廿五日菊池容齋御誂之圖出來參候處大極殿朝貢之圖差越御誂ト相違ニ付其段六日限之便ヲ
以江戸ヘ申遣ス乍去折角丹誠致相認候ニ付御慰ニ一應入御覽候處御意ニ叶ヒ御留置相成而シテ
大極殿朝拜之圖モ爲認候樣トノ御沙汰ニ付尚江戸ヘ申遣ス
一同廿八日文枕二本相收ル
一京都ニテ拜見之仙洞御所御同遊之圖幷明細書等差上ル
一七月五日同御田植圖下畫菱川廣隆ニ指圖差上候處同七日畫絹ニ認サセ候樣御沙汰出ル
一同廿九日坂本尾喜右衛門ヨリ願ニテ此度新製墨和歌名所圖歌入五丁揃入御覽候處至極能出來尚
又追々出來次第見セ候樣トノ御沙汰喜一郎ヘ申付ル
後熊野瀑布形在田橘林形ノ丸大墨出來差上ル
一九月朔日年中行事畫ノ内二卷着十月十一日同二卷來ル
天保十一子年
正月朔日出殿故實御重組獻上於御書院御目見終テ奥ニ被爲召御懇之御意ニテ何角故實之御物語
被遊御小直衣被爲召御酒被下八ツ半時比退出
一同十七日弓袋之古製御詩ニ付申上ル
一十二月十日加茂祭曲水二卷來ル以上二十卷終ル

天保十三寅年

二月十六日西洞院御用ニ付此節京都ヘ可罷越旨被　仰付

春日御驗記調書

二月十六日右調書千草殿ヘ染筆依頼可致樣御沙汰ニ而二十五本御下ケ被遊千種殿染筆依頼之事鷹司家ヨリ借入整ヒ揃候上ト見合居候内千種殿病氣ニテ長文之詞書執筆六ヶ敷趣ニテ當時書博士調本少監物未壯年ナカラ大分能書ニテ加茂甲斐守敦直ト申儀以來加茂社人中ニテ能筆ユヱ御撰定書博士被　仰付候事候間筆道ニ於テハ幾度イヽシタル者奥書等ニ位署認候節書博士何位某ト認メ候間地下ナカラソノ家職ユヱ却テ面白方ト存候旨伺候處其通リ爲致候樣御沙汰之旨翌十四年二月ニ記アリ然ルニ見本一二枚爲認候處是迄大字ヲ書シ候ユヱ與細字詞書ハ甚不面白等ロ元書ニ臨書ニ致シ候方却テ古躰ヲ不失雅味モ深キヤウニ考ヘ其段伺之處其通リ可取計ト御指揮アリタリトノ事アリ

鷹司家所藏之春日權現驗記借入件

此度上京致シ鷹司家所藏春日權現驗記借用寫取去年中寫取之卷ヘ相揃ヒ全部爲致可申トノ思召之由承リ候ニ付右者去々年八月花山院家々來ノ手ヲ以テ鷹司家諸大夫牧治部大輔迄借用之儀内々頼入候處右御品ハ格別御大切之品故旣ニ先比水戸樣ヨリ無御據御願ニ相成御固辭ニ候得共無余儀御斷ニ相成元卷寫取之儀ハ甚六ヶ敷併表向御使者被差向之廉ニテ長澤罷出候テ拜見之儀ハ牧取扱方モ可有之由答ニ付此度ハ其手寄ニ携リ取人可申心得之旨先御請申上ル

二月廿五日若山出立廿七日京都着出水西洞院下寺法林寺へ旅宿ス
爾來春日權現記鷹司家ヨリ借入之手段百方手ヲ盡シタルニ先年水府又ハ水野越前守牧野侯等ヨリ借用申入候モ悉ク拒絶相成タルヨシ又同家諸大夫モ死歿更迭或ハ大倉妙齋ニタヨリ或ハ同家老女ニチナミ苦心不容易モ京家之風兎角黄白ニ傾キ鍔際迄ニ立至候モ尚遲々荏苒ニ打過中々六ケ敷然圧不怠手入ニ工夫ヲコラシ遂ニ翌十四年五月ニ至リ願望成就元本借出シ手元ヘ取寄セ五月朔日ヨリ畫工共旅宿ヘ引寄直寫ニ取掛リタル由壬九月ヨリ仕立ニ取懸リタル旨詳悉之記アリ畧ス實ニ一朝一夕之故ニ非サリシ如シ

石山緣起

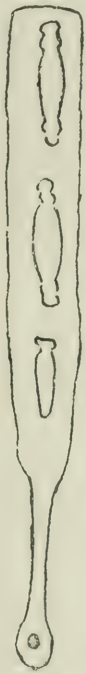
一若山ヨリ石山緣起御內々差上可申哉之者有之右ハ故實之助ニ成有用之モノニテ御道具ニモ不相成哉ト御尋之趣申來返事ニ石山緣起ハ五六百年前之古筆ニテ服色調度等珍敷事有之春日驗記ニサシ繼有用之畫卷ニテ能寫ニサヘ候ハヽ屹度御道具ニ御座候春日驗記前九年合戰記後三年石山緣記隹大納言之起右ヲ五部之畫卷ト唱ヘ故實有職之必要ニ仕候扨石山緣起全部六卷之處イツノ比ヨリカ紛失當時五卷ナラデハ無之樣子然ル處文化年中白川樂翁侯谷文晁ニ被命右缺本之處寫シ足シ石山寺ヘ御奉納有之ト申沙汰ニテ其寫シ足ノ缺本ハ古畫卷ヨリ抄錄シタル物ニテ實之缺本ニ而ハ無之ト申事ニ御座候
右差上度申タルハ京都土佐光孚トノ事ニテ其元本一覽眞僞鑑定可致旨衛門ヘ被命同人方ヘ申入候處全ク間違ニテ元本所持等無之トノ件アリ

年中行事畫殘卷謄寫

一五月六日出ヲ以テ內藤溪次郎手比ヲ以テ寫取ラセ御用ニ相成候年中行事畫二十卷之外ニ殘リ之分柳原家ニ持合セ有之心易借得ヘキニ付寫取ラセ可申哉伺之處寫取ラセ候樣御內意之旨上野勘解由ヨリ九日出ニ返事來ル仍テ其通リ取計シ

春日形扇

右御用否五月九日出ニ伺之處早〻出來サセ候樣御沙汰之旨仍テ出來廿九日ニ差上ル



地紙黄或縹に金銀之切箔藤の花或花或花鳥な書候
大形

平骨黒漆八骨十骨等

右傳來之譯書風流ノ雅文ト俗文之書取ソヘ上ル

畫樣ハ藤菱ナト、唱候哉トノ御尋ニ左之通御答申上ル

右ハ何トモ唱無之古來ヨリ認來畫樣ニテ春日御驗記元本卷物表紙之裏ニ有之藤ト大方同樣ニテ外ニ子細無御座候

揚名目

堺大町菓子商之商標ニ上野揚名目藤原廣保製ト認有之揚名トハ何等之節認候哉トノ御尋目ハ如

仰諸國之サクワンノ事コヽニ而ハ上野國ノ目ニ御座候揚名トハ名斗ニテ實ナキノ義ニテ官ニ在リナカラ其官ノ職ヲツトメサルヲ揚名ト唱ヘ申候上野目ナレハ上野國ニアリテ目ノ役儀ヲ可勤筈之處其國ニ在ラスシテ上野目ト唱ル故ニ揚名トイフ唱ヲ加ヘタルニテ此類ハ何役ニテモ皆揚名ニテ有之候揚名關白揚名介揚名椽揚名目揚名書生抔イフ名目古書ニ所見ニ御座候當時ニテ申サハ井伊掃部頭松平大和守ナト唱ヘ候モミナ揚名ニテ御座候

一何等之節ハ揚名ト相唱候ト申究リ無之尤位署ニハ認不申候

一揚名之出所は菅家遺誡（菅丞相の著述）ニ凡揚名之官職者取大間職事充其用如攝關將帥之職者以揚名之名爲比興之義ト有之ガ濫觴ニテ漢書ニ揚名於匈奴トアル文ヨリ出タル事ト心得候ハ誤ニテ別事ニ有之候

揚名關白ト申唱ハ　小右記五十八冊メ

揚名介ハ　大外記頼業私記　源氏物語夕顔夫々

揚名掾　其外古書類　政事要略六十七冊メ

揚名目（サクワン）　同書同冊又徒然草百十四段等

揚名書生ハ　吏部王ノ記

室町家厩屏風摸シ

土佐廣周畫屏風ニ製シソノ比ヨリ或ル縉紳家ニ傳來之處四十年以前京都大町人薩摩某之手ニ入

候處右薩摩零落沽却ニ出候ヲヒソカニウツシ置タルモノ畫十二枚有之誠ニ珍敷室町時代著述之馬屋之記馬具寸法記等ニ校考之處イサヽカ無疑モノニテ四百年以上之廐ノ樣子顯然タル故實畫ニ付寫取ラセ可申哉ト若山ヘ伺之處美ノ紙ヘ爲寫置候樣被　仰付

白馬節會供進之品　天保十四卯年正月廿五日付

白馬節會供進之品此度大政所樣ヨリ一位樣ヘ御覽ニ御入被成候其御地ニテ大政所樣ヨリ貴樣ヘモ拜見被仰付候由尤右供進之御膳具御盛品等之繪圖貴樣ヨリ大政所樣ヘ御覽ニ御入被成候由ニテ右之トヂ本御廻相成右ニテ能御分リ被遊候右之圖本直ニ此表ヘ御留置被遊候テモ宜敷哉ト若山ヨリ申來　右御答

白馬節會供進之御膳具御盛品之繪圖ハ私所持ニテ大政所樣ヘ御見合之爲差出候ニテ勿論御留置相成不苦候得共供進之御品ニハ内膳職御厨子所ナトヨリ調進仕候差別モ有之且又年々寄候テ代物御用拆モ御座候ニ付夫等之樣子尚夫々之向寄々吟味仕候上傍々書添置可申ト存ナカラ未タ手付兼候儀ニ候間一應御下ケ被下候ハヽ今一段委敷校合仕候テ差上可申トノ趣

御旗本織田信濃守御役中之日記諸留控圖面　月日缺

右賣物之由本屋持參ニ付若山ヘ伺之上御買上相成

日記別記共百九十九冊諸圖面書付類袋入代金廿五兩也

前賢故實

七月廿三日菊池容齋著述同書箱入二冊獻上致度旨ニテ江戸ヨリ差越付ニ右書狀添若山ヘ差上候

處御滿足被思召トノ御沙汰

春日權現驗記寫シ出來

五月朔日ニ漸クノ事ニテ鷹司家ヨリ借入整ヒ手元へ一冊ツヽ取寄畫工ニ直寫取カヽラセ閏九月

初ヨリ追々ニ淸書出來仕立方伺之上都テ元卷ニ依タル趣彌皆出來之上ハ日本國中ニテ三部之寶

ニ可有之云々仕立樣左之如シトアリ

一卷長絹三丈五尺織萠黃地藤立誦(本ノマヽ)竪地綾

此貳百九拾七匁五分　一尺ニ付銀八匁五分カヘ

一卷ニ付

絹地尺五寸巾長三丈表極上越前鳥ノ子本金

茶セン中切砂子蒔箔

卷小口本泥ヌリ表紙内袖本金砂子中切箔

軸紫藤巴青貝役(本ノマヽ)

右外題紐仕立共

〆百九十匁七分

東西市正唱へ方　天保十五辰四月八日御尋

東市正

右唱之節ハ市正ト斗唱候樣ニモ御聞被遊候矢張文字之通リ東市正ト唱候方ニ候哉當時京都ナト

ニテハ如何唱候哉認候節ハ文字之通東之字ヲ入認候哉

西市正

右ハ文字之通西市正ト唱候樣被　思召候

御答

東ノ字ヲ入レ東市正ト唱候カ本義ニテ市正ト斗唱候ハ略義ニ御座候當時京都ニ此官ハ闕官ニ候得共地下官人ノ中ニ稀ニハ兼官之者モ有之矢張東市正西市正ト唱ヘ申候認候節モ必東ノ字ヲ入レ申候唯市正ト斗唱候人モ隨分有之候得共夫レハ故實ヲシラヌ唱ニテ候當時ハ古ノ如ク東西ノ市無之正（カミ）モ無之畢竟有名無實ノ官ニテイハユル揚名候間唯市正ト斗唱候テモサシ支不申候當時ニテモ故實ノヨミクセニハ矢張リ東市正西市正ト分々テ唱來候今武家ニテ片桐市正（和州小泉の領主）殿ヲ唯市正ト斗江戸ニテ唱ヘ候ナラヒ候ハ文盲ナル唱方ニ御座候

弘化二巳年五月十五日京都御用濟ニテ出立廿一日若山へ着廿四日西濱御殿へ出頭左之通相納ル

春日權現驗記　〆六卷

第四　第十六　十七　十八　十九　二十

御下畫之分

表舖出來之卷　從第十一至第十五　合十五卷

假卷之分　從第十六至第二十　合五卷

〆 二十卷

目錄幷由來考　一冊

此外繪具遣ヒ余リ等色々アリ

山陵之事御尋

六月十八日　山陵之最初ヨリ後世迄御來歷之御樣子幷泉涌寺當時御廟所之御模樣且般舟院御位牌堂之御振合御尋有之夫々書付ヲ以御答申上候處御位牌堂之方三度御尋被爲在候事

舜恭公薨去拾遺

此書は長澤衛門伴雄か嘉永六年に於て　舜恭公薨去の事及ひ權臣等若干廢黜又は　公に奉仕せし上下有司の貶免等の事實を詳記したるもの也明治三十二年春長澤六郎は伴雄の男に就き其所藏を借り得て謄寫す　舜恭公及ひ　照德公嘉永五六年の世記と參照せは實際の情頗況る明了を得へし

去年はいかなる年にかありけん禍都日神の荒備さて有司人の夜見の國に退りける甚多かりその中に

一位の殿の薨玉ひしこそ萬よりも悲しくこの神の荒びこそ伊氣杼保呂し恨米しくありたりけれ霜月の廿余五日の日塞の御病とみに起らせ給ひて殿の中ゆすりみちてもてさわきたりしそこたひの御病おほかたならねは御けしきたまはりにかへり來なんそよかるへきと侍中人（上野勘彈由常政于時御側衆）より注進いひおこせたり其脚力おなしき晦日の日なん着たりき取ものも取あへすさかいふらんさまし

てやかて京を立出たるは十二月朔日の日の朝またきなほ伏見船はてゝ難波の八軒屋の河岸にとひ上りたるは黄昏のころになん二日夜をこめて大坂を出たちてその夜の初夜すくる比家にはかへりつきぬ三日の朝西濱の御殿にまうのほりて御消息うけ給りつ常政出ていひけらくこの日比痛つかせおはしけるか廿五日塞のおこらしてよりのちいたくおもらせ給ひてきのふけふは湯たにきこしめさす御醫師もたれも額をあつめてたゝ詠せるのみなりといふに胸まつつふるそののちの事ともなほうけ給はるにいとやすからぬ御ありさまともなりきかくて四日には日前社伊太祈曾社に詣て祈禱奉る

五日六日もなほおなしさまにておはしましけるを七日の巳の時はかりことに惱せ給ふこともおはせて燈なとのきゆるやうにてといひのゝしるも玉きゆるこゝちせられてかなしなといはんはなか〳〵なりおもと人たちの音なくにやはるかにきこゆるも身にしむやうにわかなくよりもにとそ御家老たちをはしめとしてつかさ人たちつき〳〵まゐのほる駈使直丁等の走さわめくほと殿の中すへてゆすりみちわたれりゆふつけてやとにかへり來れと何ことも手につかてなかめのみせられてなんそも〳〵おのれこの殿にめされて故實の御用つとむへく仰かしこまりけるより今年にいたりて十七年か間御愍頼かうふれる事いくそはくそやそのかたしけなきうれしさは筆にかゝんには命毛堪ましくやあらん大かたの事ならはこそあらめ無息の部屋住の身にして撰擧させ給ひて何くれとあつき御めくみにてかく人かましく世に立ましらひなき名をすら人にもしられたるなと一つとしてこの君の御蔭ならさるはなかりしそやこしかたの事ともとありけりかゝりけりとたとり出る

にたゝ先たつなみたにおほうれてよよとのみ音をなきてこの長き夜のさむさたにおほえすなんあるはなほうつつにやあらんさて

埴輪もてとゝめし人そうらめしき御ともつかへん黄泉津坂路を

野見宿禰の功をとて土師臣等か氏に掌れる美し大政の既う垂仁の御巻に見えたるもまた嚴有院様のかたしけなき御制令さへありていと〳〵忝き天下の法令なれとその令やかてなからましかはとおもふ給ふるもあはれの事なりやけふにとちむにやおほえしわれかのいのちもあやしくなからへて八日九日の日にもなりぬとみの事にてかへりきつれは京なる廳は何々の事もうちすてゝをしへ子槇雄ひとりるすしたるもこゝろもとなくはたふかくおもひこめたるゆゑよしさへあるを大故の御發表は正月の半も過ぬへくそのほと江戸のゆきゝもありなんとのことさるへき官ともに風の音のほのかにきこゆるにさらは御棺の出たゝせ給はんまてには三十日余も間あることなりいてやその間に京にとりちらしたる要の事公も私もそれみなよくしたゝめてんとてまたとみにおもひおこしかつは司にもきこえておなしき十一日に京に出たつ十三日はかりに京につきてよろつの事何くれとのこる隈なうとりしたゝめ廿七日に都を出てみそかの日夕日のくたちとゝもに家にかへり來ぬ春はあすとしもおほはねと分番の人々の門にはなほ松たてゝ春まちかほなるもつきなきこゝちして

こりつみしなけきをしはしかたよせて何しかたつる門の松そも

とうちうめかるゝはやまたおとろかれし

は予か友伊達千廣公のかしこまりにて

安藤飛驒守とのへ御あつけにて田邊へつかはされたり玉置縫殿もおなしさまにて水野殿へ御あつけ新宮につれゆきぬいみしき罪をかしにやありけん千廣はおのれ二十年余の交りにて書よむ事も歌よむかたにもかしこくてかたみにになくましらひていと〳〵たのもし人にてありけるをこの年比ははかに登用られて超越の昇進年々に世人の見聞をおとろかしてきさてはやう〳〵こゝろさしもたかひ行ものにやあらんむかしのおもかけはうせはてゝおむかし（本ノマヽ）はぬふるまひともかつ見えぬるも友とちの身にしてはいと〳〵あちきなくて折りにふれ事につきつゝ諫もし人なき時なとは面をおかしても諫めむかし貧しかりしころの形勢なと昔物語のやうにひき出て語るなといはゆる諷諫といふさまにもいひたりしか五六年以前まてはあふなく語合つゝうへなひよろこひたりしか弟年ころよりはいみしうおもむきたかひもてゆきてすこし腹たち顔にも見えはたさはかりの事しらてやはなといふ面もちつくりて見せけれははて〳〵は予か足音聲音を厭ふやうになんなりにけるこは權門のならひにて古より例すくなからぬ事なれは彼男はさはあらし漢和の學にも長たる有識にてあるをやとおもひもとめしもなほ淺ましかりしはやこたひの罪はいかなるをかしにかそはしらねと雅にも俗にもよく通して物語らるゝ人千廣はかりなるはおほくもえかたきことなるをかへす〳〵もあたらしく惜しくもありけるかなかくてもよういすへきは人の心の僣上と超過になんありける

山中筑後守は九月十日より病こやして同き廿五日に卒せられたり夏目彈正は十月廿三日に死ぬ十

八歳にて　顯龍院殿いまた中將にておはしけるほと御小姓に召れてよりやう〳〵官進み御用御取次に任されて九百石までに祿加へ給はりぬそののち　憲章院殿に奉仕してなほもとの如く勤たりしを　殿薨せられてまた
舜恭院殿の御取次を兼帶したり御三代の間御用御取次つとめしは例まれなる譽れ人なりけりもとは三百石なりけるを去年加增ありて千石になされぬ五十六歳にて身まかりしはいと〳〵あたらしき事なりさし次きて西山與七郎（御勘定奉行千石）も身まかりぬ

筑後守は山中山城守か家にて作右衛門友信が始て
御家に奉仕してより代々作右衛門を以て繼名させり若きころより御勘定奉行大御番頭なとを勤經て加制の列に任されて受領したりその比山高莊左衛門といふもおなしく肩を並へて登用せられ受領して石見守といひしかこの二人の中むつましからす有りしとそ天保の初の比にやありけん筑後守ゆくりなく隱居仰付られて閉居（コモリ）ありき石見守は
顯龍院殿の御覺えよろしくて門前に市をなし世に時めきてありけるをこれも不意に隱居仰付られて小雜賀村の別莊に引籠り愼しみて居れと嚴重に令せさせ給ひきさて筑後守は隱居したるをふたゝひ召出されて政府に伺候すへく仰られ五百俵秩俸を給はりぬこれめつらしき事といひあへるほともなく石見守は前官をも削られふたたひ罪なはれて安藤侯に召預けさせ給ひて田邊に退りて四年はかりへて死きかくてのちは萬機は筑後守か掌中にありてこの國の一人にて時めきたりその權勢はたとへんにも物もあらすこゝにありしかしかはあれと文義に暗き人にてその言行のやうをつ

ら〳〵考ふるに韓非子王陽明かふるまひに似たることおほくてあかぬ事もなんおほかりしさはいへと官廳に年ふる老人なりけれはたれ一人灰（本ノマヽ）さすものもあらすたゝ獨行といふへくなん見えたりしその家來に山口兵馬秋田和太郎とて二人の權門ありて萬筑州へ内聽してまた内密を傳宣するを役にしていみしう時めき用ひられ重役番頭さて彼か玄關を昇降せしもいとめつらしくありけり漢語に陪臣取國命とききは國家危きよし見えたる既にその境に及へる事とこゝろあるとちは眉を寄たりきかくて筑後守は九月十日比よりやみこやして同廿五日になん卒りぬ

年あらたまりて正月の廿日

一位の殿薨せられ給ふよしを告出したまひて物の音を停られぬるさらに日の光の雲かくれぬるこゝちなんせし是は表向の御掟とかや同しき廿八日に御棺長保寺に出たゝせたまふその夜は日濶の永正寺にやとらせ給ふ朝より空かきくらし雨そほふりて道もぬかりたり路傍に拜禮する人々充みちたりかねて掟させ給へる如く某役は某地これ役はかし處と屯して拜みまつる婦女はいふに及はす貴賤ともに老若の者とも路傍に勿（本ノマヽ）い傳そと禁められたりけれとしのひ〳〵に出來てこゝかしこの物の隈にかくれてわりなくも拜み奉る男女とも數もしらす衛護辻固の吏とももいたくこらしたりしさそ和歌道筋より手ひら堤紀三井寺口までの間雲霞のたなひきたらん樣見えしと後にきゝき御世におはしゝほとの御德化に慕ひ靡き奉りてかうはあるなりけりとおもひ奉れはさらによゝとのみ音をなかれてなん

をりしもあれ雨かきくらしふり出ぬ空にもしるやけふのなけきを

はる〳〵とあふくもかなしこの春の霞にのほるきみかゆくえを

となん詠つゝけられぬこたひの御供仕奉るへき願たりしかと御免なしさるにて西濱御殿に勤仕の面々たに番の外なる者は大かた願奉りしかと免されさりき予等こときは無息の向の御免なきはさる事になん

つひに君かへらぬたひの御供にもたゝれぬ法のあるとなりけり

いとあちきなしや

廿九日長保寺に納め奉る佛さまの御名は

舜恭院殿と稱したてまつる

同しき廿五日に三山御寄附金貸方懸り垣屋十郎兵衛（寺社奉行より兼）同頭取榎本半助（御徒頭格中奥詰寺社吟味役より兼）野澤次郎兵衛（御書院番格寺社吟味役兼）稻葉儀八郎（新御番格寺社吟味役兼）以上四人貸方かゝり不及其儀と仰渡さるまた宮崎半右衛門（七百石奥御祐筆組頭御勘定奉行兼）は御右筆組頭の勤不及其儀また御勘定奉行詰所へ出勤の事も指控可申と仰渡さる

渥美源五郎は（千石御側御用人格御用御取次）去年九月ころより甚く病みわつらひて今はの境にまて至りしをからくして死さりしかと全く治りかてにてなほ〳〵かよわくてありけれは舜恭院殿の薨し給ひけるしはす七日の日もたゝ泣にのみなきくらしたりしとそしかるに正月十三日伊達五郎（千廣か息子にて去年十二月父の跡目とて三百石賜りて寄合格の小普請仰付られてありけるか）改易仰付られたり五郎か養母（千廣妻）は源五郎か娘なれは近親の門にて指控申こみてあるほと　御發棺あらせられけれはその拜棺の事願ひてからくし

て杖に携りつゝ御殿にまうのほりしさそいとあはれなる事なりき四月廿八日左之通りに仰付られたり

信曰く原書渥美源五郎同小源吾榎本半助野澤次郎兵衛處刑の申渡を掲く既に　昭德公世譜嘉永六年四月廿八日之條に記する如し略す

山中筑後守は子數多あるか中に惣領作右衛門は先年家督して貳千五百石大寄合格御用人をつとむ二男篤之助は別家して召出され四百五拾石御勘定奉行をつとむ六男大輔は筑後守隱居の所帶を往々家督に仰付らるへくかねて仰出されたりけるか去年の冬家督八百俵相違なく被下置たり今日悉皆召上られたりき

中嶋吉兵衛 貳百五拾石御納戸頭格御勘定組頭 志賀九郎右衛門 御勘定組頭 二人ともに當時の權職なりしか中嶋は持格にて中奧詰 御足高も其儘被下 志賀は五友之間御廊下詰に轉役す

筑後守家來山口兵馬今日 六月十日 揚屋へ被遣家財は闕所家屋敷とも召上らる同忰山口兵次郎は熊野三山御寄附金貸付方手代にて大坂詰なりしか俄に召返されて御暇下されぬ同家肩入秋田和太郎は永く親へ御預け仰付らる秋田某は支配勘定にて御表人なり

久野丹波守殿加判之列に再勤中村九郎兵衛御勘定奉行再勤仰付らる辻十左衛門 奥御祐筆 は御留守居者頭格中奧詰仰付らる

今日おのれ伴雄も左のさまに仰渡さる

六郎養子
長澤衛門

御内々御用之節

西濱御殿へ罷出熊野三山御寄付金貸付方へ罷出候儀不及其儀候
御銀御扶持方上り候事

となん嚴しく仰渡さるそも〳〵
舜恭院殿かくれさせ給ひしかは　西濱御殿にまひのほるへき事は絶たれはかくあるは元來の理り
也また三山御寄附金貸付方も司農の方にて支配させ給ふといへは御人減らせらるゝもしかあるへ
き御事はた予か得さる職にて此春退職の內存さへそきこえまゐらせしほとの事なりきさて件の二
ッの御役免除につきて御銀御扶持方を召上られしこそこゝろえぬこの銀米は十五年以前顯龍院樣
御在世中に故實學問出精致候とて銀五枚年々被下との御事また
憲章院樣御代嘉永三年九月有職故實學問之儀出精致候とて三人扶持被下置しにて今度免除の御役
には關係らさる銀米なるをやたとへは有職學問の稽古料なといふへき筋の金米になんさるをこの
事は何とも仰出されす又御內々御用相勤候へとの事是迄表向にて仰渡されたる事も非さるを今日
かく顯然と仰出されたる彼是いと〳〵いふかしき事なとかしこかれとあかぬことにおもひわひつ
ゝあるほといとけしかる事こそ出來りけれ翌十六日父六郞を堀田內匠御用人より申渡す事あり今
たゝいまとて召狀來る名代に上田左兵衛を出しぬさて仰渡されしやうは

申　渡　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　長　澤　六　郞

其方養子衞門儀不輕奸計等之品々相携り彼是不埒之趣相聞候に付御糺之上屹度可被　仰付之處

此度は格別之被加　御宥免候條其方手前にて永く押込置可申候

右一通

長　澤　六　郎

其方養子衞門儀不輕奸計等之品に携り彼是不埒之品有之趣相聞候に付永押込可指置旨被　仰付候件之次第兼而之示方疎成故に其方儀も不心得に候依之指控被　仰付之

六月十六日

上田左兵衞かへりきて　命を傳ふいとかしこくかしこまるとはすれと腹おちゐすわりなき仰事にもあるかなとかこたるゝはやさるは奸計等之品に携りとある御語こそきこえぬさやうに道に背き義を失ふやうの件雄にあらす奸計に携りたる覺えもあらぬをいとも〳〵いふかしき事なれと其はこれなんめりとおもひ合する事のあるをことわきて奥にいふへしかくてこよひ堀田氏に召出されし刑に處せられし人々は

信曰く原書山中作右衞門市川惣兵衞父子朝倉三之丞野口將監落合司書橋本彥兵衞宮崎半右衞門父子西岡儀左衞門山中熊太郎の申渡書を載す皆昭德公同年の世譜に詳なり略す

以上十一人なりまた江戸にてもおなしさまなる刑に處せられたるは

原書村井左近丸山内記の申渡書を記す前同斷畧す

かくて翌る十七日またいみしき刑罰ありき

原書渥美源五郎父子再度之處刑を記す前同斷略す

大澤善大夫は御表にて御用御取次を勤たるをこたひ　御逝去遊されけるをり源五郎は病氣にて引こもり稲葉彌左衛門一人なりとてかたらひとて　御逝去御聞かゝり仰付られたりしかるにこの比出勤御さし留にて近親たりとも出入すましくとなん嚴命下りたりとそいかなる罪かをかしけんとこゝろくるし

舜恭院様御附屬面々御品付次第

上野勘解由
桑山彦右衛門

大御番頭格被　仰付之

堀田勘平

大組格ニ

稲葉彌左衛門

奥詰持格ニ

井口喜八郎
稲葉司書

御表勤御廣敷御用人ハ御免

持格之事

村上又右衛門

御供番頭格ニ

岡見左衛門

高岡内藏之助

御表勤御小姓頭取御免持格ニ

大畑善右衛門

御表勤御小納戸頭取御免持格ニ

立石喜大夫

新御番頭格

小波宇左衛門

御表ニ而相勤可申其足其儘持格

川上七郎

水上儀左衛門

日置玄蕃

佐々木氏右衛門

小田兵庫

右小十人頭格

駒木根八兵衛
由比與五右衛門
大村彌兵衛
森　角左衛門
三橋藤九郎
岡本直助
十倉本助
中川信濃
高木兵大夫
藪　主計
倉垣衛守
川口雅樂
早川甚右衛門
河島七兵衛
角田仁左衛門

右御徒頭格中奥詰

土肥次右衛門

右御徒頭格中奥詰貳十五石之高ニ

宮本孫之丞

鈴木吉右衛門

林淺右衛門

右格中奥詰

丹羽彌四郎

毛利志摩

岡田榮之助

多羅尾舍人

川上出雲

石井房助

永田隼人

寺村土岐右衛門

山田七郎右衛門

橋詰紋兵衛

淺井吉兵衛

三浦勘右衛門
寒川休助
鈴木丹下
土生佐兵衛
殿井三左衛門

右寄合格中奥詰

金谷相之助
佐々木米輔
高井善輔
青木五左衛門
湯川理兵衛
小川五郎大夫
雑賀佐之右衛門
月山武兵衛
遅美左源太
三宅久兵衛
千賀小平太

村上小四郎
藤木源右衛門

右　中奥御番格

湯川平右衛門
山本爲之助
久喜定四郎
山本九郎右衛門
松下長大夫
増山加藏
松田謙助
佐々木彌三郎
三雲定之助
田中德五郎
山本平七
鈴木仁左衛門
石桁兵之丞
川北長左衛門

小出藤之右衛門
中井庄十郎
菅野八郎
川村彌九郎
澁谷幸右衛門
由良銀之右衛門
千賀五郎兵衛
山崎七郎大夫
宮崎藤五郎
百武立輔
加藤清左衛門
鈴木才次郎
井口八大夫
島田七右衛門
渥美八藏
井田三右衛門

右大御番

角田久阿彌
井太平左衛門
眞田茂兵衛
倉田彦左衛門
仲半左衛門
佐々木雅十郎
近藤左門祐
南彌兵衛
朝比奈郡司
菅野祐次郎
戸井甚右衛門
成川彌惣
大森良右衛門
淺井金藏
十倉兵四郎
大澤五郎左衛門
南増次郎

小田龜之丞
村田八十輔
千原幸元
永井榮良
永井文德
羽山金兵衛
小川專左衛門
茂田甚兵衛
平井爲右衛門
森島與三兵衛
西山小兵衛
鎌田萬右衛門
畔田十兵衛

右　獨禮小普請

中井源右衛門
畠山善左衛門
太田與八郎

右　獨禮小普請末席

松尾金八
吉田彌九郎
内芝金藏
鹽路九左衛門
熊井孫三郎
小川太次兵衛
田中孫四郎
陳屋要人
橋本源兵衛
廣瀨八彌
西村良助
澄入角兵衛
久嶋龜楠
服部七郎右衛門
高井三十郎
宮本賢之丞
富永大助

右　小十人小普請

島　仁之右衛門
鈴木用助
金原宇右衛門
宮本幸八郎
角田信之助
山田孫助
山瀬榮藏
小田幸七郎
秋月常三郎
今井孫八
岡政右衛門
安井小兵衛
山本杉右衛門

寺田幸兵衛
小林仙兵衛
龜井平馬

松尾文右衛門
糸川藤右衛門
伊藤久右衛門
寺井三郎兵衛
佐々木武右衛門
神谷勘四郎
望月伴助
龜井甚右衛門
小堀仲右衛門

右　小十人小普請末席

大岸平内
吉田萬次郎
竹中喜右衛門
佐竹關三郎
坂部千三郎

右　以下小普請

山本孫右衛門

右　御廣敷添番格

宮本次郎兵衛

的場仁兵衛

成尾角五郎

右　以下小普請　關三郎仁兵衛ハ御足其儘

土井龜之助

妹背兵彌

右　以下小普請末席

通計貳百八十貳人

右之外坊主は表坊主へ割入陸尺は部屋へ御仲間へ歸役惣て御足御銀被下有之候面々悉皆上り候事

七月十二日

松本立助　御勘定組頭　中奥御番格被　仰付御足は其儘橋本六郎右衛門　御勘定奉行　大寄合

十河源右衛門　町奉行　大組被　仰付御足は其儘

原兵之右衛門　御留守居物頭格五友之間御廊下詰にて町與力兼勤　大御番格小普請

遠藤修平　御書院番格町與力　小十八小普請

みなことしまて世の權門にてありけるなり盛者必衰と說たる佛くさき譬諭もけにとこそおほゆれかくてアメリカ船のさわきにて世の中ゆすりみちてたゝ武備の設にせはしくて禍つるの沙汰

はしはしいこひたるさまなり

にし濱のはまの松か根ねをたえてなこりなきまてあるゝ波かな

渥美源五郎は去々（原書缺く）田丸の配所にて身まかりにけるそいかに口をしかりけんとおもひやるだに涙くましくなん

信曰く上野勘解由以下數十人は罪ありて左轉したるには非す　君薨し給へは御片付と稱して附屬之臣は轉職命せらるゝは先例皆然るなり何格々々とあるは前職等の持格にて無役となれる也一旦皆如此命せられ後再ひ應分の職に就任するあり

謹テ按スルニ公御治世三十四年六ヶ月也天資英明風采俊偉御初政以來夙ニ御美績多ク續テ堀江平藏ヲ御拔擢經濟ヲ釐革節儉ヲ當メ賞罰ヲ沙汰シ士風ヲ正シ履親書ヲ下シテ有司ヲ督シ凡藩治之利用厚生文學編著ノ事ニ至ル迄細大其親裁ニ出ツ八旬之御高齢尚倦怠アラセラレズ於是安永之二老大臣初蕭々獻替弄權之弊ナシ就中典故格式ニ明熟叙族式秘鑑ヲ御親著官制職名體裁辭令等百事例ヲ　幕府ニ執リ續々更正正大ニ面目ヲ改メ文物燦然之美ヲ致ス時論或ハ華奢文弱ニ流レ競テ　幕府之旗下風ヲ學ヒ所謂田舍風ヲ一變ストノ議ナキニ非スト雖モ該監察ヘ親諭之如ク不言不聞ノ間ニ深遠ノ神秘在ニ存スルモノカ嗚呼五十年之後　幕府之大厄ニ當リ闔藩能ク其節ヲ盡シテ他親藩ノ擧ニ效ハス以テ　烈祖之遺ニ奉答アラセラレシハ偏ニ　公之素養ニ胚胎スト云ハザルヲ得ザルナリ

一公又多能ニ被爲渉衣紋有職之事ニ長セサセラル特ニ雅樂ニ御堪能　伏見宮四辻公紹卿等ヨリ御相傳琵琶之如キハ最モ其秘蘊ヲ極メ玉ヒ天下殆ト及フ者ナク京師ヘ學堂御建立（扁額ハ公御染筆アリシト）又茶道ハ千宗左了々齋（不審庵）ヨリ秘訣御皆傳殊ニ一子相傳被爲受故ニ了々齋文政八年八月沒スル時其子吸江齊（後祥翁）僅ニ八歳傳法方ニ絶ントスルヲ以テ暫ク之ヲ御預リ吸江之成長ヲ待テ後皆傳ヲ賜フ（其間住山揚甫ニ後見ヲ命ラレタリ）サレハ其道ニ於テハ　公ヲ傳統ノ數ニ加ヘ奉ルト云フ又能書明畫之御聞エ高ク世間御染毫ヲ請願ノ徒多ク爲メニ扁額題字等ヲ賜フ其類不尠（御遺存ノ御書畫實庫ニ藏セラルヽモノ最多シ諸社寺ヘ扁額ヲ賜ヒシハ社

寺制ノ部ニ詳記ノ如シ又殖産工藝ノ事御熱心ニテ嘗テ京師ヨリ職工ヲ召シ日々七人ツヽ就職ノ由園中ニ於テ金襴純子繻珍等精功ノ織物ヲオラセ美術ヲ奬勵アラセラレ又文化年間一ニ文化十年ト云陶器師西村善五郎了全同保全吉兵衛茄子吉ト稱ス出村チ氏トス三人扶持チ賜リシ由之輩ヲ京師ヨリ召シ西濱ノ邸ニ於テ染付物乃至交趾摸シ永樂燒ヲ燒カシメラル世ニ之ヲ御庭燒ト云西村善五郎固ヨリ名工交趾燒ノ如キ其製殆ト眞ニ迫ル銘ヲ園名ニ取リ偕樂園製之印ヲ押ス善五郎就中和漢之古器摸造ニ巧也明之永樂年間ノ製ニ基キ赤釉ヲ塗リ金粉ヲ以テ古代之彩紋ヲ畫ク之ヲ永樂燒ト云フ即チ河濱支流之金印ト永樂之銀印トヲ賜フ因テ善五郎永樂ヲ以テ氏トス交趾燒藥ハ紫藍黃ニシテ光澤麗美透明也共ニ御止メ山ト稱シ販賣ヲ禁セラレ固ヨリ他ニ製スル能ハス故ヲ以テ偕樂園製ノ世評最モ高ク天下無類之奇品ト愛賞セラル享和九年ノ比若山鈴丸ノ十次郎瑞芝燒陶器ヲ製出文政十年十一月有田郡廣村八幡社境内ニ於テ井關村ノ利兵衛男山陶器製造ノ事等皆　公ノ御奬勵ニ係リ男山燒ノ如キハ年ヲ追テ盛況ヲ來シ頗ル世ニ知ラレタリ後嘉永年間有田郡男山ニ移サル亦交趾燒摸製出ト雖モ多ハ染付燒ニテ南紀男山之銘アリ

文雅ヲ受セラル

一公御政暇ニハ常ニ御詩作ヲ好マセラレ樂只館詩稿ト題セラルヽモノ四卷今寳庫ニ存セリ日新富有ト題セシモ有リシ由內御記文モアリテ御旅中及赤阪西苑ノ御作等多シ

將軍家御臺所文恭公御臺所廣大院殿兼テ御一覽御所望ノ由

顯龍公ヨリ公ヘ仰上給ヒケレハ御舊作ノ內十三首ヲ御撰出巴調舊稿ト題シ給ヒシヲ天保六年春

顯龍公御參府之節御持參ニテ不時御登營ノ際　御臺所ニ捧ケ給ヒシカハ御感覽斜ナラス御歎賞ア

リシトナリ今臣下ニ賜ヘリトイフ二三ノ御作ヲ掲ク

上　日

鷄鳴萬里厲陽春、金闕韶光昇早晨、上苑樹迎淑氣綠、御溝流映彩雲新、添年寶曆頒三朔、依舊銀盤試五辛、盛世正逢周典故、神州應唱于嗟麟、

中　秋

萬家此夜賞清秋、開宴倚欄石澗頭、階草露侵蒲席冷、桂花香入玉杯浮、水晶光映三千界、雲母影連十二樓、何只一時詩酒興、風前醉似月中遊、

九月十三夜

秋光看欲暮、亦賞今宵名、白露垂簾冷、素暉徹燭清、誰論三五月、已有九分明、依舊高樓興、誤爲雪夜情、

冬日郊行、遊明顯山寺

促駕城西望壯哉、千峯秀色好徘徊、村前笛止牧童憩、樹外歌多遊客來、苔徑過時落葉下、山門到處細泉回、澤知離垢上方地、先有天花滿寶臺、

右四章ハ寛政五丑年十一月二日、於江戸、監察九左衛門初四名ヘ賜フ處ト云蓋シ御壯年之御作ナルベシ

又野志良左衛門ニ賜ハリシ御作

七　夕

蕭颯梧桐一葉秋、銀河洗出玉階頭、鳳凰樓外輕雲霽、烏鵲橋邊纖月流、漢殿涼來螢火去、楚臺風起

暑炎收、可憐天上雙星會、孰與人間絃管遊

右ハ侍臣野志頁左衛門ニ賜フ

良左衛門ハ幼年ヨリ　公ニ近侍奉リシナリ

一享和元酉年七月　一橋公ヨリ三殿古瓦硯ト云フヲ御賜進アリシ時岡田忠左衛門七澤半四郎各一詩ヲ賦シ奉リケレハ御和韻ヲ賜フ

三殿古瓦硯

嘗聞麟德（原本不明）宸筵　古瓦誰知作硯傳。三殿名經唐代遠。千秋美與翁州連。兎毫先映瑞烟裏。梅露急香佳氣邊。殊賜　宗親聖世器。文房靜友戴堯天。

一又公の御句のよし近藤重藏之右文故事に　御俳句の内

御鷹野の時

天津日の霞も袖をさそひあり

なきものといふこと拔

なきもれも月の出さるゝ笠のひあ

遠馬拔

とほ乗やむおてさゝくる神のため

一西濱の別館に御退隱後は彌文雅を御玩ひ文政八年の冬園中へ一ツの文庫新築を命せられ親書の匾額を掲け給ふ何と題し給ひしや今不詳れ共山本惟孝か題する木額の刻文如左

文庫ヲ作ル

水戸公ノ寃ヲ辨ズ

御庭焼ノ後日譚

前年乙酉冬
老公之命新作文庫于偕樂園中 臣大村高行 臣川合喬房等奉之不日而成因 手題于扁俾 臣惟孝撰
其名且記其略而揭之後壁此擧也固崇文之餘波雖不足稱揚 老公之美意抑亦可知 退老之樂不
特在鴻雁麋鹿也

文政九年丙戌春正月　山本惟孝謹書

一十五代史ニ曰 紀伊治寶卿西濱公ト稱ス天保十五年水戸齊昭卿之罪ヲ得タル卿其寃ヲ辨セン事ヲ謀ル事因テ解ク事ヲ得タリ世之ヲ稱スト云云

按スルニ此事水戸之客臣日下部伊三次紀州へ微行哀願ニヨリテ也信會テ伊三次ニ面シ當時之情狀聞得シ事アリ伊三次後大獄ニ座シ獄中ニ死ス

一因ニ記ス 信維新後明治六年ヨリ公命ヲ奉シテ商事ニ神戸港ニ從事ス英人デヤスナルモノ偕樂園製ノ一花瓶ヲ携ヘ來リ此類即今製シ得ルニ於テハ數百千對購入之結約ヲナスベシト 舜恭公薨セラレシ後該器製造頓ニ廢絶以來二十有余年安政年間水野大夫江戸原町邸ニテ摸造之事アリト雖モ三樂園印アリ粗惡成功ニ至ラス間モナク廢絶ス英人デヤスガ齎シ來ルモノハ偶々坊間店頭ニ見當リシヲ珍トシ購ヒ得タルモノナリ左レハ時人何レノ製品カ將タ品ノ有無ヲモ知ルモノナシ予謂ヘラク 舜恭公之侍臣ニシテ此製法傳習ノ者蓋シ尚若山ニ存スルナラント直ニ若山へ赴キ百方搜索僅ニ小野素道寒川栞二人アリ貳人元公之近侍御小納戸ニシテ陶器掛リ拜命能ク傳習ヲ受クト依テ貳人ヲ神戸へ聘雇シ信カ宅地下山手通ニ工場ヲ營ミ燒竈ヲ造リ試ニ着手セシムルニ頗ル精品ヲ得タリ依テ同姓宗三郎ナル者ヲ二人ニ隨身セシム宗三熱心ニ困苦精勵粗其要領ヲ得於是小野寒川之二人ヲ解雇シ單獨從事セシムルニ薪之加減、火之程度。藥木地ノ適否ニヨリ時トシテ種々之變幻現出無量ナルニモ屈セス木地ハ之ヲ京都瀨戸薩摩三田明石淡路等之數ケ所ニ取リテ其適否ヲ察シ百端練磨研究ノ末終ニ微妙之秘蘊ヲ發覺シ百出不誤良結果ヲ得タリ於是外人ノ嗜好ヲ博シ數千個無窮之輸出品トナリ續々製造日亦足ラス其價值又賤シカラズシテ名聲大ニ揚ル然ルニ世之該業者摸造濫製ノモノ頻リニ起リテ神戸ニ（神戸ニハ一時九竈アルニイタル）西京ニ大阪ニ紀州ニ明石ニ續出

スト雖モ固ヨリ其秘法ヲ知ルニ非サレハ品格色澤唯類似ニ止マリ價値モ大ニ低下隨テ起レハ隨テ倒ルノ之カ爲メ吾製品之價値ニモ大妨害ヲ來セリ

紀州ニテ摸造セシハ富井左十郎ナル者太田村ニ於テス左十郎元海鼠藥ヲ製出大ニ時之喝采ヲ博ス神戸港交趾燒輸出之旺盛ヲ聞キ男山之陶器ヲ引續キ該陶工土屋政吉ヲ雇役交趾ヲ製出ス亦幾程ナク廢絶政吉後神戸ヘ來ル依テ宗三郎之ヲ雇役同人ハ捻リ物ヲ善クス明治十六年八月發刊赤塚宗轉口述石黒況齋編好求錄ニ紀州交趾燒之事ヲ載ス少シク誤ル所アリ

元來交趾ノ藥劑ハ流動体重量之元質ナレハ塗沫スレハ忽チ下部ニ脫流或ハ厚薄不同ヲ來スヲ以テ之ヲ筆尖ニスクヒ盛リ点々木地ニ置キ去ルノ外ナシ故ニ巨多之工費ヲ要ス該摸造品ニハ此事ナキヲ以テ爭テ低價ヲ競ヒ投賣々崩シ更ニ停止スル處ナク最劇甚之刺激ヲ蒙ルサレハ更ニ新機軸ヲ按シ藥質流脫ヲ防クノ新法ヲ發覺スルニ非ル以上ハ徒勞無効ト宗三大ニ苦心之處嘗テ行旅ノ際泉州貝塚ノ邊ニテ一茶店ニ憩ヒ葛湯ヲ一飲スルニ當リ豁然自悟即チ藥質ニ葛粉ヲ加入其中ヘ木地ノ全体ヲ挿沈セシメ試ムルニ全ク脫逸之患ヲ免レ迅速自在ヲ得テ從來ノ工費十分ノ八七ヲ省クニ至ル後食鹽少許ヲ入ルヽモ同結果ヲ認メタリト共ニ是收縮質之功アルニヨルト云如此シテ他ヲ凌駕シ暫ク輸出ヲ計リシト雖モ世間之益隆盛ニ製出海外之需用大ニ擴張遂ニ一產物創始ノ目的ヲ貫徹シ且ツ既ニ利スル處ハ却テ薄弱ナルニヨリ斷然他ニ讓テ自製ヲ停止セシ也抑モ今ニ至テ神戸之交趾燒ト稱シ年々巨多之輸出品トナリシハ偏ニ我カ　舜恭大君之恩賜ト云ハサルヲ得サレハ贅言ヲ厭ハス爰ニ畧述シ且大君尊慮ヲ煩ハシ給ヘル眞正交趾燒ノ傳法後世遺失セン事ヲ患ヘテ左ニ掲クルモノナリ

交趾燒藥法

紫　藥　日之岡石　壹貫目　硝石七百五十目（他品ヲ腐敗スルタメ）紫ゴス三十五匁
鉛　四百五十目　他品ヲ分解ノ爲又藥之强弱サシ引ヲナス

淺黃藥　日之岡石　壹貫目　硝石六百五十目　銅粉五十目或ハ眞鍮粉
鉛　四百目

黃　藥　日之岡石　硝石　鉛　黃ゴス　或ハマンガンヨリ引出シ黃之元ヲ作ル
又ハコンジョウ（宗三發明）

舜恭公御簾中

種姫君（タネ）　御幼名　種姫（フサ）　聰子（トシ）
貞恭院様

御養父　將軍家治公　浚明院公

御實父　田安中納言宗武卿　悠然院公

御養母　近衞前關白姬君田安中納言宗武卿御簾中　御女

御實母　香詮院　文化九申年十二月四日死

一明和二酉年七月十五日御誕生

一同月廿三日御七夜種姫ト御命名

一同三戌年九月五日　御簾中樣御養ヒ

一同五子年九月廿三日山王へ御宮參

一同八卯年十二月十三日御紐解

一安永三午年十二月十日御名之文字タ子ト御唱

一同四未年十一月朔日　公儀御養女種姬君樣ト稱ス

一同月七日御本丸へ御引移　大納言樣　御妹之御續ト被　仰出

一同五申年九月廿二日西丸へ初テ被爲入

一同六酉年十一月朔日御鐵漿初

一同九子年正月御水痘十九日御酒湯
一同年十一月一日聰子ト御實名被進
一天明二寅年二月七日　岩千代樣 舜恭公 へ御緣組
一同三卯年四月十五日　常陸介樣 舜恭公 ヨリ之御結納御進覽
一同七未年十一月九日十一日十三日ニ御道具被進
一同月廿七日御本殿御守殿ヘ御入輿直ニ御婚禮
一寬政三亥年六月廿七日御袖留
一同五丑年十二月廿五日ヨリ御疱瘡
一同六寅年正月八日御逝去
一同年二月五日　御遺躰江戶御發棺東海道美濃路通リ本坂越同廿七日紀州濱中長保寺ヘ御葬送
三月二日ヨリ八日迄和歌大相院ニテ御法事
一增上寺鑑蓮社ヘ御位牌御安置　明信院樣御合殿
一御法號日光御門跡御隱居安樂心院殿御附被進
御法號　貞恭院殿芳蘭慈室大姉　御靈前　雲蓋院
按ニ君夫人繪畫ニ御堪能ニシテ秀靈非凡ノ御遺筆寶庫ニ存スルモノ多シ

舜恭公子一覧表

御血統ヲ掲ク御養ヒ等除ク
括弧内ハ御養子

御子		御孫
諧姫	松平陸奥守齊宗室 信恭院	
喬(タカ)姫	早世 靈應院	
観達院	御嫡男 早世	
信(マサ)姫	早世 法縁院	
豊姫	齊順公「顕龍公」簾中 鶴樹院殿	菊姫 早世 瓊淳院
室生院君	流産	
銓(ノリ)姫	後篤(ナト)一橋備千代卿ヘ許嫁 早世 普現院	
乗元院君	流産	
富姫	早世 清泰院	
「虎千代君」	「御聟養子 俊岳院殿」 早世	
鋒(サキ)姫	後万須姫 早世 示幻院	
「齊順公」	「實清水式部卿」 顕龍公	

齊順公

御實父將軍家齊公（文恭公）ハ有德公之御曾孫ナレハ　齊順公ハ
南龍公之御血統第七世ニ當ラセラル、ナリ左ニ御略系ヲ示ス

南龍公—清溪公—有德公—
- 家重公（九代將軍 惇心公）—家治公（十代將軍 俊明公）—家齊公（十一代將軍 文恭公）—齊順公（舜恭公御養子 顯龍公）
- 宗武卿（田安右衛門督 悠然院殿）
- 宗尹卿（一橋刑部卿 覺了院殿）—治濟卿（一橋民部卿 最樹院殿）—家齊公（豊千代將軍 家治公御養君）

舜恭公子譜畧

鍇姫君 松平陸奥守齊宗室 信恭院

御實母 於さ衛 有本氏養女 實川上氏

後御内證之御方ト唱又御部屋様ト稱ス

一寛政七卯年七月廿一日於江戸御誕生八月三日御名鍇姫様ト被進

一同年十一月朔日一二廿二日御色直

一同月六日來年ヨリ御定銀米被進 四十貫目廿石

一同九巳年九月廿二日山王氷川へ御宮參

一同年十一月九日御髪置

一享和元酉年十一月朔日御紐解

一同二戌年十一月晦日御疱瘡翌年二月四日御酒湯

一文化元子年三月六日御定銀十五貫目御増被進 五十五貫目

一同月十五日　御姫様方御他出之節爲御持之御緋傘半披ニテ爲御指被成

一同月十七日　政所様ヨリ御袴御讓被進

一同三寅年正月廿七日初テ御登　城

　正月廿一日御内々ヨリ御登　城被遊候様被　仰出タルナリ

同年七月十四日御登　城之節御廣敷御玄關迄御緋傘爲御差被遊候様相成

一同四卯年十一月十九日御鐵漿初

一同五辰年正月廿八日御登　城

一同六巳年十二月十一日　虎千代樣将軍家齊公御男御儀御聟養子被　仰出同日御名順政所樣之上樣文字可相認旨被　仰出

一同七午年正月廿八日御登　城

一同年十月二日虎千代樣御逝去　俊岳院樣ト奉號

御結納以前故ヵ御忌服不被爲受

一文化九申年七月六日松平陸奥守殿ヘ御縁組有之可然旨　御内意被　仰出　御内談相整候段御達有之同年八月七日以　上使右御縁組被　仰出　殿樣ヨリ御願無之

一同月十二日右御縁組ニ付表向ハ仙臺之御舊例ノ御格式ニ候ヘ共一旦御格式モ御進ミ被遊候事故紀州一國御手前之御取扱ハ只今迄之通リ被遊候樣　御本丸向御登城等ハ仙臺之御格合ニテ御手前ノ處ヲ只今迄ノ通リ被遊候樣　公邊ヨリ差圖有之ニ付御順并樣文字モ是迄之通被遊候旨被仰出

一文化十一戌年正月廿二日御結納

一同年二月九日　御入輿當日　御婚姻

一同年同月十一日爲御三ツ目赤阪御本殿ヘ被爲入陸奥守殿ニモ入來有之

一文政二卯年閏四月廿二日御袖留

一同日陸奥守殿妾腹之女於芝(カツ)事御養ヒニ被遊

一同年五月廿四日陸奥守殿於國許卒去　廣徳院ト號ス

一同六月三日御髪被爲鋏御名　信恭院ト御改

一同十亥年八月十日亥中刻御逝去　追テ御日取八日禁ル

九月七日御發棺仙臺大年寺へ御葬送御道中十四日振ニテ同月廿日御着棺

同月九日御牌前芝東福寺へ御安置仙臺家ヨリ申來ル

一同年十二月廿三日　中納言様思召ヲ以御位牌若山大智寺へ御安置御場所ハ　明信院様御堂内

御同所様御位牌之右へ

御法號　信恭院殿實譽淨相眞壽大姉

喬姫君　早世 靈鷹院

御實母　於ちやヌ於かや　公儀御醫師森氏女

文政七申年九月廿七日御内證之御方ト被　仰出

一寛政十午年十月廿二日於若山御誕生

一同月廿八日御七夜御色直御箸揃

一同十一未年二月十一日

大殿様御座所御屋敷へ御逗留　殿様御在江戸御留守中御逗留

一同十二申年七月十七日御卒去

一同月十八日和歌大相院へ御送葬
御法號　靈應院寶鑑妙惠大童女　御廟御牌前　大相院雲蓋院

御嫡男

御嫡男　早世觀達院
御實母　於さゑ　有本氏養女實川上氏
一寛政十一未年六月十九日於江戸御誕生
一同月廿五日御卒去廿八日上野護國院へ奉葬
御法號　觀達院殿圓融性淨大童子　御廟谷中御牌前　護國院雲蓋院眞如院

信姫君

信マサ姫君　早世法縁院
御實母　於かや　森氏
一寛政十二申年三月廿四日於江戸御誕生　御弘無之
一同年四月朔日御名被進御内々御七夜御祝儀御整
一同年六月廿六日御箸揃御色直
一享和二戌年十二月十日頃ヨリ御疱瘡廿三日御卒去谷中護國院へ御葬送　御内々之御取扱ヒナリ
御法號　法縁院空智普照大童女　御廟谷中　護國院

豐姫君

豐姫君　顯龍公御簾中鶴樹院
一寛政十二申年十月七日御誕生都テ　顯龍公御簾中之部ニ詳記ス

空生院君 流産

御生母 於かや 森氏

一享和元酉年十二月廿七日於江戸御流産 八ケ月目ニテ

御法號 空生院如夢幻相 千駄ヶ谷寂光寺へ御埋葬 御墓印觀音

銓（ノリ）姫君 後鐐（オト）姫一橋備千代卿へ御許嫁 早世 普現院

御實母 於かや 森氏

一享和三亥年八月廿二日於江戸御誕生

一同月廿八日 思召有之表向御弘無之候得共御名之儀ハ銓姫様ト可申上旨

一同年十一月七日鐐（オト）姫様ト御改

一同月十三日表向御弘メ 公邊へ御達シ

一同月廿六日御色直御箸揃

一同四子年二月廿三日 一橋民部卿様御嫡備（ト）千代様へ御縁組

一同年三月六日御定銀米被進 三十貫目 貳拾石

一同年六月廿日 備千代様御逝去 端淳院様ト稱ス

一文化二巳年五月十七日御卒去

一同月廿六日谷中護國院へ御葬送

御法號 普現院了達諸法大童女

乗元院君 流産

御生母　於かや　森氏

一文化四卯年十二月十五日於江戸御流産 九ヶ月目ニテ

即日千駄ヶ谷寂光寺へ御埋葬

御法號　乗元院圓室淨榮大童女　御墓印阿彌陀佛

富姫君 早世 清泰院

御實母　於かや　森氏

一文化六巳年九月晦日於江戸御誕生

一同年十月十三日　思召有之表向御弘ハ無之候得共御名之儀ハ　富姫様ト可申上旨

一同七午年二月十一日御箸揃御色直

一同七年七月廿一日表向御弘メ　公邊へ御達御内々御定金三百両被進

一同八未年十一月十五日御髪置

一同十酉年四月十二日御卒去

一同月十九日谷中護國院へ御葬送

御法號　清泰院彩玉妙臺大童女

虎千代君 御聟養子 實將軍家齊公九男 早世 俊岳院

御實父　將軍家齊公 文恭公

御實母　曾根氏　於てふ
一文化三寅年二月十一日御誕生同廿八日御名御弘メ
一同五辰年三月朔日　御臺樣御養
一同六巳年十二月十一日　韶姫樣信恭院君へ御聟養子被　仰出
一同年五月三日　赤坂御本殿へ御立歸被爲入　八月廿八日ニモ御同樣
一同七午年十月二日御逝去同七日芝増上寺へ御葬送
御法號　俊岳院英晃常暉大童子

鋒（サキ）姫君　後万須君　早世　示幻院
御實母　於かや　森氏
一文化九申年四月十八日於若山御誕生御弘無之
一同月廿四日御名鋒姫樣ト被進御七夜御祝儀有之
一同年五月廿一日御宮參御祝儀ニ付岡之宮へ御代參被遣同日万須姫ト御改
一同十酉年十二月廿三日來年御歸國迄ハ西丸御住居ニ被　仰出同廿八日西丸へ御引移
一同十一戌年正月八日御卒去
同月十四日和歌大相院へ御葬送
御法號　示幻院如空電光大童女

式部卿公 齊順卿
顯龍公 實將軍家齊公七男

一文化十三子年六月三日　豐姫様へ御聟養子委細御本紀ニ詳也

南紀徳川史巻之十八

顯龍公

諱齊順（ナリユキ）　御幼名菊千代　後清水式部卿

舜恭公御養子

實將軍家齊公 文恭公 御七男

御實母　梶主水女　於登勢之方　妙操院殿

天保三辰年十月廿五日死去

同月廿七日櫻田御用屋敷出棺小石川傳通院へ葬

同年十一月廿五日向後　御手前ニテハ妙操院殿ト稱ス

同年十二月二日向後　御手前ニテハ様ト稱ス

同月廿九日和歌養珠寺へ御位牌御安置翌巳年十月御寶塔御建立

同四巳年十月廿二日江戸小石川傳通院へ御位牌御安置

御簾中　豐姫君 鶴樹院殿　舜恭公御女

御譜別ニ記ス

世子中御事歴

一享和元辛酉年九月九日御誕生

一同月十五日　御臺樣御養ニ被　仰出御名被進
一同三癸亥年九月十一日御髮置
一文化元甲子年九月十一日山王御宮參
一同二乙丑年十一月十五日御袴着
一同七庚午年十一月朔日淸水御屋形被進三万俵ツヽ御賄料被進同十五日淸水御屋形へ御移徙
一同十二乙亥年二月九日御元服從三位左近衛權中將ニ御任叙式部卿齊順ト御稱被遊
一同十三丙子年六月三日豐姬樣へ御聟養子被仰出
同月十一日御名代左京大夫樣ヲ以御禮被　仰上
一同年七月朔日御前髮取
即日御登城　公方樣內府樣へ御對顏御禮被　仰上此時　大納言樣御在府ニテ御登　城御祝儀被　仰上御拜領物アリ
一同月十一日當十一月中御引移當日御婚姻御整被遊候旨御老中松平伊豆守ヨリ書付以被　仰出
一文化十三丙子年七月廿二日初テ御鷹御遣
一同月廿五日御馬召初
一同年十月十五日御引移御當日ヨリ中將樣ト可奉稱旨被　仰出
一同年十一月三日來廿八日御引移可被遊御當日御結納被進御婚禮御整之旨
一同月十二日御引移以後年頭五節句八朔幷月次御登　城之儀御伺相濟

御供揃之儀ハ　大納言様御同様之旨

一同年十一月廿八日清水御屋形ヨリ御登　城夫ヨリ此御方へ御引移即日御結納被進御婚禮御整

御引移ニ付御小姓并御近習番左之通被召連

御小姓

河野作左衛門

水上左門

多賀大膳

梶　左近

齋藤右膳

御近習番

内藤岩藏

吉田庄兵衛

小野喜左衛門

鷲巣伊儀左衛門

右御附人以後更迭アリ弘化二巳年比ハ前田左膳鷲巣伊儀左衛門 以上頭取 小野喜左衛門在壁孫右衛門田澤久左衛門福王小平次梶鋏之丞河野鉄之助ナリシ

同年十二月朔日御登　城御引移御婚禮之御禮被　仰上上使ヲ以御拜領物有之

一同月十三日八代蜜柑初テ御拜領

一同月廿一日御旗御馬印御讓被進

一文化十四丁丑年正月二日御登　城

御禮已前御習禮御老中中上之

一文化十四丁丑年正月十七日紅葉山　御宮へ初テ御豫參　大納言様御同道也

一同月廿一日奥御舞臺御能御見物トシテ御登　城
　去十二日御見物被　仰出ニ付テナリ
一同年二月十一日　御槍劔術御稽古初
一同年三月十五日　大納言樣御在國中御豫參之儀御伺相濟
一同年六月仁井田撲一郎好古儲德畧訓ヲ上ル撲一郎ハ御學問御相手也
一同年八月十八日菊姫樣御誕生同十月四日御卒去
一同年十二月十一日仁井田撲一郎ニ人君明暗圖説之和解著述ヲ命セラル撲一郎時ニ御小姓頭取也
一同月十九日　上使ヲ以御槍重御拜領
　公方樣御朦中ニ付御鷹之鶴被進無之故也
一同十五戊寅年正月廿四日芝御豫參之節路次惡敷ニ付御出迎御用捨被　仰出
一同年四月十三日　大納言樣御在府ニテモ御所勞等ニテ御豫參御引之節ハ御豫參之儀御達相濟
一同年四月廿三日御鉄砲初
一文政元戊寅年八月十一日初テ雲雀御拜領
一同月廿二日赤阪御本殿燒失ニ付青山御殿へ御立退
　同廿五日右御火災ニ付　公方樣ヨリ御屏風御拜領
　同廿八日麹町御屋敷へ御引移御住居被遊
一同二己卯年十一月十五日宰相御任官左近衛權中將如故

同月廿三日御登　城御禮被　仰上
一同月廿一日　公方樣御拳之鳥御拜領
一文政三庚辰年十月十三日尾州樣外山御屋敷ヘ被爲入
一同月廿七日御能ニ付爲御見物御登　城之處　公方樣思召ニテ御見物所ヘ御小火鉢出ル
一同四辛巳年二月二日一橋一位樣ヨリ御馬被進
一同五壬午年二月十五日御登　城中雷鳴ニ付　公方樣ヨリ御尋トシテ御老中ヲ以テ　上意有之
一同年五月十日仁井田撲一郎美惡十事圖幷解義ヲ上ル
一同六癸未年二月廿七日以　上使御側　公方樣思召ニテ御召之御直衣御拜領御冠モ御召之繁文御用被遊候ニト被　仰出
一同年四月十八日御登　城之上來ル酉年日光山　御宮御參詣ノ節御豫參被　仰出
一同年八月廿八日赤阪御本殿御普請出來ニ付御移徙出御掛山王ヘ御參詣
御簾中樣ニモ同日御引移
一同七甲申年三月朔日ヨリ御痲疹十三日御酒湯
一同年四月廿五日　治寶卿御道中ヨリ御持之三間柄御鎗大身鳥毛熊杉形御鎗押御道具御直鎗御十文字鎗奥掛御使ヲ以テ御讓被進
一同年同月御代々樣御讓ノ御纏御旗御馬印御召御具足幷三荷ノ御挾箱等御讓被進
一同年六月朔日蝕ニ付御登　城御用捨之儀御城女中文ヲ以テ被仰進表向ハ御所勞ト被　仰立アリ

文政七年甲申　　公二十四歳

六月治寶公致職公襲職嗣立

御家督御相續

一六月六日　上使御老中ヲ以テ　大納言様御願之通御隱居　宰相様御家督御相續被　仰出

翌七日兩御丸へ御登城御退出ヨリ御廻勤

同月廿一日御家督ノ御禮被　仰上

一同月九日當年ハ御暇被　仰出間敷來ル戌年御暇可被　仰出旨被　仰出

一同月十三日御家督後初テ巣鶴御拜領

上呈八論

一是月仁井田摸一郎上呈八論ヲ上ル

英船乱暴

一七月五日英船薩州寶島へ上陸シ鉄砲ヲ放チ野牛ヲ奪テ去ル

一八月十五日御家督後初テ御鷹之雲雀御拜領

駱駝親覧

一閏八月十九日駱駝二頭御親覧アリ畢テ青山御殿へ牽カセ修理大夫様御覧

孝子

一十一月廿三日勢州松阪中之庄村岩五郎父母ニ孝行ニ付鳥目五貫文ヲ賜

事ハ孝子傳ニ詳ナリ　以下皆同シ

中納言

十二月任權中納言

一十二月朔日中納言ニ御任官

同七日御登城御禮被　仰上

一同月六日御家督後初テ御鷹之鶴御拜領

一同月七日來酉年日光御參詣御延引ニ付同年ハ御在國願年ニハ無之候ヘ共來春御暇被　仰出候樣被遊度段被　仰立候處御願之通來酉三月御暇被　仰出ニテ可有之旨被　仰出

日光御社參御延引ハ道中出水ニヨリ來々戌年ト當十月十五日被　仰出ナリ文政八年十一月朔日諸國凶作ニヨリ來戌年日光御社參尚又御延引被　仰出

一同月十五日御家督後初テ八代蜜柑御拜領

一文政七年十二月廿五日來春御歸國之節大坂御止宿之儀御內談相濟

棄捐

一同月廿六日御勝手向之儀近年度々御火災ニテ不時御出方相嵩其上去々年旱魃ニテ御收納薄彼是御繰合モ差支候ニ付御取替米之分御願之處右ハ難被及御沙汰候ヘドモ格別之思召ヲ以テ天明之度御拜借上納殘金棄捐被　仰出大坂御藏詰籾二万俵御拜領被　仰出

拜借殘金

御拜借金殘金ハ四万五千兩ナリ

一同月晦日安藤帶刀重御役ヲモ相勤之家柄ニ付八朔五節句御禮申上候樣公儀ヨリ被　仰出

翌年二月廿九日水野對馬守モ同樣之品被　仰出

文政八年乙酉　　公二十五歲

正月修理大夫賴興公薨年七十四謚葆光公

孝子

一二月十日伊都郡大藪村穢七悴清兵衛夫婦兩親ヘ孝行ニ付鳥目五貫文ヲ賜フ

一同月十四日奏樂御聽聞御登　城

文政攘夷令

一是月異國船打拂之事公儀ヨリ被　仰出

十五代史ニ曰ク　異國船渡來之節取計方從前々數度被　仰出有之ヲロシヤ船之儀ニ付テハ文化之度改テ相觸候次第モ候處イキリスノ船先年於長崎及狼藉近年ハ所々ヘ小船ニテ乘寄薪水食料ヲ乞去年ニ至リ候テハ猥リニ致上陸或ハ廻船之米穀、島方之野牛等奪取候段追々横行之振舞其上邪宗門勸入候致方モ相聞旁難被捨置事ニ候一體イキリスニ不限南蠻西洋之儀ハ御制禁邪教之國ニ候間以來何レ之浦方ニオイテモ異國船乘寄候ヲ見受候ハヽ其所ニ在合候人夫ヲ以不及有無一圖ニ打拂逃延候ハヽ追船等不及差出其分ニ差置若シ押テ上陸イタシ候ハヽ搦捕又ハ打留候テモ不苦候本船近寄居候ハヽ打潰候共是又時宜次第可被取計旨浦方末々之者迄申含追テ其段相屆候樣改テ被　仰出候間得其意浦々備手立之儀ハ土地相應實用專一ニ心懸ケ手重過不申樣又怠慢モ無之永續可致便宜ヲ考銘々存分ニ可被申付候尤唐朝鮮琉球抔ハ船形人物モ可相分候ヘ共阿蘭陀船ハ見ソケモ相成兼可申右等之船萬一見損打誤候トモ御察度ハ有之間敷候間無二念打拂ヲ心懸圖ヲ不失樣取計候處專要之事候條無油斷可被申付候

一異國船國々ヘ渡來或ハ於海上出會候節向々ヨリ之屆書多分荒增之儀ノミ申聞内實之事情ハ難相分儀モ有之候間以來浦方末々迄モ不相包有體可申出旨兼々申含置兎角事實無相違樣申聞候儀專要タルヘク候今般異船打拂之儀被仰出候モ事ヲ好候筋ニハ無之候ヘ共近來之樣子難被捨置次第ニ付被　仰出事候條精々入念可被申付候

一國々之廻船漁船海上ニオイテ異國之船ニ相親ミ候儀ハ前々ヨリ御法度之事ニ候今般浦々ニオイテ異國船乘寄次第可打拂旨改テ被　仰出候間船方漁民等彌嚴重ニ相守船之乘組等可成丈異船ニ出會サル樣心掛可申候若異國人ニ親ミ候儀ヲ隱置後ニ相顯ニオイテハ可被處嚴科有體訴出候ハヽ一旦同意之者ニテモ御褒美可被下候間不相包可申出者也

右之趣浦々ヘ建札イタシ置候樣向々ヘ可被相觸候又長崎奉行ヲシテ此旨ヲ蘭人ニ諭シ諸外國ニ通示セシム

一十五代史ニ曰ク　文政七年七月御書物奉行兼天文方高橋作左衛門上書シテ防海之策ヲ論ス大意謂ラク英船之屢東海ニ來ル者ハ固ヨリ彼國王之意ニ出ルニアラス皆捕鯨之爲メナリ時ニ上陸スル者モ亦皆此漁船ノミ然ルニ我之力爲ニ兵ヲ勞シテ財ヲ靡スルハ策ノ得タル者ニ非ス唯一意擊攘之旨ヲ中外ニ發布セハ彼必ス來リ近ク事ナシト是ニ於テ此令アリ是ヨリ外國船我近海ニ來リ近ツカサル者數年果シテ作左衛門カ言之如シ作左衛門事文政十一年十月九日禁出之物品ヲ蘭人ケンフエルニ與ヘシヲ以テ測量方出役下河邊林右衛門ト共ニ禁獄セラル後文政十三年三月廿六日ニ作左衛門去戌年參府之蘭人外科醫「シーボルト」ヘ日本地圖隱密ニ差遣シタルニ存命タレハ死罪ニ行ハルヘキノ處去年牢死ニヨリ子小太郎遠流ニ處セラル奥醫師土生玄碩處刑モ此時ナリ

四月始就藩

一三月十五日御家督後初テ御國許へ之御暇被　仰出

御初入

同月廿二日江戸御發駕御道中十八日振ニテ大阪御止宿四月九日御初入

一紀州へ之　上使御小姓組番頭松平信濃守五月廿一日江戸發途六月五日相勤

孝子

一四月十五日上那賀郡上田井村彌兵衛夫婦父母ニ孝行ニ付鳥目五貫文ヲ賜フ

一五月七日於御對面所御讓之御道具御覽

一同月六日九日十一日十三日於御城御代替ニ付御諸士御禮被爲請

御目見以上並同惣領其外寺社山伏地士町人在醫師迄御禮被爲請衣服ハ年頭之通リナリ

一江戸ニテハ去年十二月同樣御禮被爲請タリ

一十月廿一日平井村大谷山榮谷村コ、谷山へ爲御猪狩被爲成

一十一月十四日御三家樣方御庶流方平日御挾箱革覆取爲御持之儀被　仰立相濟

孝子

一十一月廿日日高郡小浦吉藏父母ニ孝行ニ付鳥目五貫文ヲ賜フ

巡撫封內

是冬ニ巡撫封內

文政九年丙戌　　　　　　　　　　公二十六歲

三月東覲

初て參府

一二月廿二日初テ御參府シテ若山御發駕

上海道美濃路通十七日振ニテ三月九日江戸御着之積之處佐渡川滿水ニテ一日大井川同斷ニテ三日御滯留三月十三日江戸御着座

一三月廿五日　上使被進候處御風氣ニテ左京大夫樣御名代ニテ御請御參府御禮モ御同斷ニ付御名代左京大夫樣ヲ以テ被　仰上

一四月朔日初テ御登　城御手ノシ被進

孝子

一六月十日松阪領藥王寺村喜平次同領波瀨村リヨ、シツ養父母存生之內孝行ニ付鳥目七貫文ヲ賞賜ス

一七月廿三日向後　御嫡子樣御元服被　仰立候節御官位ヲモ御同時ニ被　仰立候樣取調之儀被　仰出

尾張直七郎樣御元服御官位御一時ニ相濟候例アリ

一八月廿二日御暇御順年ノ通被　仰立道來々子年可被　仰出旨被　仰出

一十一月十三日從　內府樣上使ヲ以テ御拳之鷹御拜領

一十二月十一日　公方樣來春赤阪御屋敷ヘ御立寄　御內意被　仰出

文政十年丁亥　　　　　　　　　　公二十七歲

將軍家御昇進

一三月十八日　公方樣御昇進　內府樣御位階ニ付　御登　城　前大納言樣太眞樣ヨリモ御使御差下アリ

一公方様御在職既ニ滿四十年近代御例ナキヲ以テ去月十五日來春　公方様ヲ太政大臣ニ　內府様ヲ從一位ニ叙セラルヘキ　御內勅アリシヲ固ク御辭退被遊シモ　勅許ナキヲ以テ御領掌之旨御上奏本記之通リナリ

一四月五日御祝儀濟御能爲御見物御登　城

一同十三日御昇進御位階之御禮被爲受候ニ付兩御丸へ御登　城

一同廿二日以　上使御老中　公方様內府様ヨリ御拜領物被遊同日前大納言様太眞様へモ御拜領物有之

一四月廿五日小倉儀七深川三十三間堂ニ於テ半堂千射惣一ヲナス

一閏六月八日口熊野大鎌村庄屋惣兵衛同所串本浦大藏父母ニ孝行ニ付銀二枚ヲ賜フ

一七月十七日熊野本宮社役人之內神樂人矢倉助作父母ニ孝行ニ付銀貮枚ヲ賜フ

一九月九日於御本丸　若君様後將軍家定公へ初テ御對顏

御家老水野對馬守モ初テ　御目見被　仰付

一同月十八日公方様吹上御庭へ被爲　成夫ヨリ赤阪御屋敷へ御立寄

右御立寄之儀當二月十五日御比合三月下旬ヨリ四月上旬迄之內ト被　仰出四月五日ニ尙又五月上旬ト被　仰出五月二日ニ至リ當秋へ御延引八月四日ニ九月九日前後ト段々被　仰出本日無滯爲濟タリ

一十一月廿五日有田廣庄井關村利兵衛之請ニヨリ男山陶器製造場設立ヲ許ス近郷庚申山之石ヲ以テ

孝子

將軍赤坂へ御立寄

男山陶器

製造場設立

磁器ノ質トスト云フ

一十二月廿六日御使札幷御備物之儀來ル酉年迄是迄之通リ御省略之旨御達相濟

文政十一年戊子　公二十八歳

一正月十四日當春御暇可被　仰出之處　若君樣御元服御官位被爲在候ニ付右御祝儀相濟候後御暇可被　仰出旨御沙汰

二月十三日右之通候處其比合ハ追々暑氣之時分ニモ相成候ニ付涼ク相成御暇被　仰出ニテ可有之旨被　仰出

従二位大納言

二月叙從二位任權大納言

一二月十五日從二位大納言ニ御任叙

二月十八日御登　城御官位之御禮被　仰上

孝子

一六月晦日白子領一志郡星合村新吉母ニ孝行ニ付鳥目五貫文ヲ賜フ

九月歸藩

一八月廿一日御國許へ之御暇被　仰出

八月廿八日江戸御發駕九月十三日御着城之筈之處富士川阿部川滿水ニテ御見合相成十七日夕景若山御着城　十一月廿六日御歸國ニ付紀州へ　上使御書院番頭被進

一十二月廿五日田丸領下久具村善吉夫婦母へ孝行ニ付鳥目五貫文ヲ賜フ

文政十二年己丑　公二十九歳

八丁堀御屋敷類燒大火死者ヲ出ス

米五千俵拜借

覲自在公薨去

三月東覲

一二月廿二日御參府シテ若山御發駕

三月七日江戸御着座之處大井川出水ニテ金谷ニ一日御見合同八日ニ御着座被遊

一三月廿一日江戸八丁堀御屋敷御藏御長屋共不殘類燒是日大暴風之處神田佐久間町ヨリ出火東ハ築地靈巖島南ハ新橋ニ至リ西ハ城湟ヲ限リ南北壹里余東西廿余町大名四十七邸旗下御家人凡八百余町家拾壹万七千余戸延燒燒死千九百余人ニ至ル勢州廻米儲藏アル八丁堀御藏屋敷モ瞬時ニ四方火ニ包マレ橋々燒落チ居住之御家中逃去之道ナク半崎赤堀桐山某等四五名焚死シ桐山義齊之如キハ家内抱キ合地ニ伏シ居タルニ火忽チ娘之毛髪ニ付キタレハ義齊指ヲ喰切其血ヲソヽキツヽ共ニ悲慘ノ死ヲ遂ケシ抔古老之口碑ニ傳ヘシ處ナリ二十八日ヨリ所々御救小屋立罹災ノ窮民賑恤セラレタリ

一文政十二年四月朔日八丁堀御藏燒失ニ付御願之上米五千俵御拜借相濟御返納之儀ハ廻米着船次第御返納之筈

一五月朔日御登　城　大納言（家定公去年四月四日御元服正二位大納言ニ御任叙）御元服御官位後初テ御對顏御旗御拜見

一同月十七日紅葉山　御宮御豫參之節例之御場所御迎送之儀雨天ニ付御用捨之　上意青山下野守傳達申上ル

六月二日覲自在公薨

一六月二日太眞樣於紀州御逝去

築地邸拜領

年々二萬兩御取替

小倉儀七

前大納言樣へ爲御悔御年寄代リ御使熊倉次郎左衛門御朦中御尋シテ御用人代リ御使向笠藤左衛門御差下ナリ

一同月廿八日御願之通鐵砲洲築地堀田相模守中屋敷御拜領爲代地八丁堀御屋敷內七千貳百八十四坪御差上被　仰出

七月廿日右御拜領之御屋敷築地御屋敷ト唱候樣被命

一八丁堀御屋敷殘地千三十坪翌年二月三方御相對替ニ相成ル

一同月晦日當丑年ヨリ五ヶ年之間年々金貳萬兩ツヽ御取替尤當年之御取替ハ此節被遣候間來寅年春御返納可有之來寅年ヨリ四ヶ年之御取替金ハ春御渡ニ相成候間其年之暮ニ至御返納可被成旨被仰出

一八月朔日日蝕ニ付御登城御用捨御城大奥ヨリ被　仰出

一九月十六日來ル十八日　西丸　大納言樣御宮參ニ付御行列御覽之儀御內意被仰込有之處還御之節外櫻田御門番所上之間ニテ御覽被遊候樣水野出羽守ヨリ口上書取ニテ被申聞

一十月七日小倉儀七深川三十三間堂ニ於テ四十五間堂千射ヲナス

一十一月六日初テ築地御屋敷へ被爲入

一十二年朔日明後三日濱御庭被爲入御鷹御遣被遊候樣公方樣ヨリ被　仰出

三日御同所へ被爲入御鷹御遣御獲物之鳥濱御庭ヨリ直ニ奥向ニテ御附人ヲ以テ御獻上被遊

一同月十五日御手船御出來迄ハ公邊御船御拜借之儀相濟

孝子

八丁堀邸殘地三方相對替

挾箱等公儀同樣となる

南龍公御

文政十三年庚寅 天保ト改元　　公三十歲

一正月十七日一志郡肥留村伊平一志郡小川村ステ父母ニ孝行ニ付鳥目五貫文ツヽヲ賜フ

一二月八日伊都郡菖蒲谷村伊兵衛兼々行狀宜敷主家へ能ク仕ヘ主家ヲ取立ニ付銀三枚ヲ賞賜ス

一二月十二日濱町牧野山城守拜領中屋敷貳千坪此御方へ此御方八丁堀御屋敷千三十坪余山田奉行牧野長門守へ本所相生町牧野長門守拜領屋敷千貳百坪牧野山城守へ三方御相對替濟

右御相對替之御屋敷ヲ濱町御屋敷ト唱フ

一文政十三年二月廿三日御挾箱御簑箱御塗色　公儀御同樣眞溜ニ相成寸法御紋數迄モ諸事御同樣ニ成御挾箱ヘハ御化粧紐掛候事

三月十五日ヨリ爲御持ニ成御三家方被仰合去年御達相成候ナリ

一三月二日小倉儀七深川三十三間堂ニ於テ五十間堂千射ヲナス

三月歸藩

一三月十五日御歸國御暇被　仰出

同廿一日江戶御發駕閏三月七日若山御着城

一當月三日御登　城之處前大納言樣御歸國御土產ニモ被遊候樣トノ御事ニテ　公方樣思召ヲ以テ御召之御駕籠被進委細　舜恭公御記ニ編述之通リナリ

一閏三月十三日與熊野木本浦多八娘ヨシ父母ニ孝行ニ付鳥目五貫文ヲ賞賜ス

一同月廿四日　大納言樣前大納言樣思召之品被爲在和歌　南龍院樣御靈屋御造營被　仰付

右御造ハ御仕入方ヘ被　仰付同所頭取井上兵次郎一手ニ畏リタリ

一翌卯年正月御滿作御目見已上之分拜見被　仰付

一同月廿六日大智寺　台德院樣御靈屋御修復被　仰付

同年十二月落成同廿五日御假殿ヨリ正遷座

改元

一十二月十三日御拳之玄鶴壹羽御獻上被遊

一同月廿九日天保ト改元

天保三年辛卯　公三十一歲

三月東覲

一二月廿二日御參府シテ若山御發駕

御道中上海道美濃路通リ三月七日江戶御着座之處阿部川富士川出水ニ付御逗留同月十五日御

着府

一三月廿二日御登　城御參府御禮被　仰上

異船東蝦夷を侵す

一二月廿七日異船東蝦夷ヲ侵ス松前之兵擊テ之ヲ却ク

一三月朔日水野土佐守儀父對馬守同樣五節句八朔御禮申上候樣被　仰出

一六月三日奥熊野尾鷲組九木浦權兵衛忰常藏乙松兩親ニ孝行ニ付束銀貳枚ヲ賞賜ス

一同月十八日築地御屋敷ヘ被爲成夫ヨリ　公儀御船御拜借大川筋ヘ被爲成御留場ニテ漁獵被　仰付

右御肴御獻上

御召獵虎皮鞍覆拜領

一八月十九日御願之通　御召獵虎皮御鞍覆御拜領

一九月二日是迄御行列立御馬弐疋之處今壹疋相增此度御拜領之獵虎皮御鞍覆掛爲御牽被遊度段御達濟

　一之御馬獵虎　二之御馬虎　三之御馬豹

孝子

一九月十二日小倉儀七深川三十三間堂ニ於テ五拾間堂千射ヲナス十月十七日同百射ス

天保三年壬辰　公三十二歳

一正月十五日有田郡瀧川原村惣右衛門妻ヨツ舅ニ孝行ニ付鳥目五貫文ヲ賞賜ス

贈位

一三月十五日（十五代史二月トス）　上使御老中ヲ以テ　清溪院樣御事　有德院樣格別之御間柄ニ付從一位贈位之旨被　仰出（御老中ハ松平周防守殿ナリ）

四月歸藩

一三月十五日御歸國御暇被　仰出

　同十九日江戸御發駕木曾路通リ御越四月五日若山御着城

孝子

一六月四日名草郡禰宜村枝鄕栴檀木兵七娘フジ父ヘ孝行ニ付金三両ヲ賞賜ス

湊御殿造營地鎭執行

一十二月朔日若山湊村ヘ新御殿造營被　仰付本日着手十二日地鎭執行

　按スルニ（是歲十一月四日琉球使豊見城王子來朝登城アリ御三家方ヘ廻勤ハ先規之典禮ニ付當御館ヘモ必ス參上之事ト察スレ𪜈實鑑等缺記調査ノ便ナシ暫ク疑ヒヲ存ス）

一同月廿八日日高郡印南中村濱方善助母ヘ孝行ニ付金三両ヲ賞賜ス

海藏寺本尊開扉

一是歲駿州小川村海藏寺本尊及ヒ　龍祖ヨリ御讓リ御守本尊寶物等御取寄セ江戸御本殿大奥ヘ御傍

清溪公靈屋修復

西濱御殿大奥造營

リ付　御簾中樣御拜被遊

翌年四月若山ヘモ御取寄舜恭公御拜之事及ヒ同寺御由緒之委細ハ御同公御譜ニ詳ナリ

天保四年癸巳　　公　三　十　三　歲

一正月　清溪院樣御靈屋御修復被　仰出去年御贈位等ニ附テナリ

二月二日御靈屋御安鎭同三日御開眼御供養

一二月十日西濱御殿大奥御普請御仕入方ヘ被　仰付

井　上　兵　次　郎

此度西濱御殿大奥御普請御用御仕入方ニテ取計候筈ニ付其段金澤彌右衞門ヘ被　仰付候間田中良左衞門小田數馬ヘモ申合件之趣相心得可申トノ御事候

同　　　人

是迄モ追々御仕入方ニテ大造之御用相勤猶又此度右御用筋相勤候段全其方儀兼々厚心掛骨折候故ト一段之儀思召候每々一手ニテ御用相勤候段大儀ニハ候得共猶此上一統申合精々相勵可申トノ御事候

西濱御殿ハ前大納言樣舜恭公御住居御殿ナリ井上兵次郎ハ御仕入手代ヨリ追々御取立文化十二年獨禮御仕入佐八天之川三役所頭取拜命天保三年迄十八年之間ニ小十八人頭格貳百五拾石ニ累進實ニ異數之昇進トス是御仕入之事追々盛大ニ至ラセ御融通筋專ラ盡力既ニ和歌南龍公御靈屋御造營モ經濟ヲ本途ニ仰カズ御仕入方ニテ引受尚又此回之御普請モ擔任ス兵次

郎間モナク隱居トイヘドモ依然御仕入ニ勤務御合力米貳百俵ヲ賜リ權勢盛ンナリシカ天保十亥年七月六日病死繼テ御仕入頭取トナリシハ南出平左衛門ナリ是亦御仕入手代ヨリ遂ニ御勘定奉行迄ニ昇進ス元締手代等計利之輕輩ヨリ有司歴々之重役ニ至リシハ兵次郎トイヘドモ及ハザル處ナリ御仕入方之事ハ財制之部ニ詳ニス

三月東覲

一二月廿二日御參府シテ若山御發駕
　三月九日御着府之處大井川出水ニ付三月十日江戸御着座

一二月廿五日御登　城御豫參之節々御駕籠打上並此度被　仰立候莚包腰黒網代塗棒引戸之御駕籠已來御取交御用ヒ被遊候樣被　仰出

一三月廿七日此度被　仰立候黄塗板包腰黒網代塗棒引戸之御駕籠以來打上御駕籠ト取交御用被成度旨　公邊ヘ御達相濟

南紀忠孝略傳

　五月木村晴孝所著南紀忠孝畧傳成獻之

一五月木村長藏南紀忠孝畧傳ヲ著ス
　天和二年ヨリ寛政十二年迄在町孝子義僕等之傳ナリ

孝子

一七月一志郡川口村源次藤母存生之内孝行繼母ヘモ能ク仕候付東鳥目七貫文賜ヒ同月十七日同郡宮古村善藏養父母ヘ孝行ニ付鳥目五貫文ヲ賞賜ス

一十月十七日左之者共父母ニ孝行ニ付鳥目ヲ賞賜ス

御勝手難澁

權田原久野健之丞抱屋敷讓受

孝子

米價高値餓死多し

濱町邸類燒

築地燒く

米屋打毀

田丸領土羽村志賀吉鳥目七貫文南谷組島田村マツ鳥目七貫文海士郡西濱村楠右衛門鳥目五貫文

一十月廿七日御勝手御難澁ニ付去ル丑年ヨリ五ケ年貳萬兩年々御取替金尚又來午年ヨリ五ケ年之間年々春金壹萬兩ツヽ御取替金御願之通相濟

一十一月八日權田原久野健之丞抱屋敷ヲ此度御讓受其儘健之丞ヘ御預ケ置被遊候　公儀ヘ相達ス

一十二月十三日依御願水野對馬守月次御禮申上候樣被　仰出

同月廿四日嫡子土佐守儀モ父同樣月次御禮申上候樣御書付出ル

一十二月十六日湊御殿上棟御規式濟

翌年三月廿六日御家堅ノ式アリ

一同月廿八日星尾村一之宮神主石井左之介父ヘ孝行ニ付銀貳枚ヲ賞賜ス

天保五年甲午　　公三十四歲

一正月廿日伊都郡東谷村神野垣内與次郎母ニ孝行ニ付鳥目五貫文ヲ賞賜ス

一同月米價益々高直（百俵百四十五兩餘ニイタル）諸人困窮江戸市中餓莩多シ

去巳年陸奥出羽稀ナル違作ニテ江戸廻米無之ニ依テナリ救助方米穀賣買之法等　公儀觸アリ

一二月七日神田佐久間町ヨリ出火濱町御屋敷類燒ス

一同月十日吳服橋内松平伯耆守屋敷ヨリ出火築地御屋敷類燒ス

十一日十三日等屢失火ニヨリ御救小屋建設類燒之貧民ニ粥ヲ救與セラル六月九日千住宿窮民米屋ヲ打毀十一日貧民ニ救米ヲ賜フ事アリ

湊御殿ヘ御引移

四月歸藩

一三月十五日御歸國御暇被　仰出

同月十九日江戸御發駕四月五日御着城之處大井川出水ニテ島田驛ニ三日御滯留同十二日若山御着城

五月修湊村別殿成移居之

一五月十一日湊御殿ヘ御引移岡之宮ヘ御參詣夫ヨリ御引移被遊

右御引移之儀江戸御發駕前三月二日御家老ヨリ左之通役々ヘ達ス

湊御殿近々御普請御滿作ニ付御先例モ有之當春御歸國之上御都合次第御同所ヘ御引移御住居可被遊ト之御內意ニ候間御勘定奉行御廣敷御用人御目付ヘ被申合此節ヨリ左之趣ヲ以テ諸事取調置可被申事

御同所表向者御手狹之事ニ付年頭五節句其外御禮事御目見且御祝儀事等表向御式有之節並講釋御聽聞ニハ御城ヘ被爲成候事

一都テ御參詣御成ハ湊御殿ヨリ被爲成候事

一御城諸役所向引越奥中奥表向御番居サセ候事

一御城ヘモ御先例之趣ヲ以テ御番居サセ候事

右御用人ヘ

一湊御殿御普請御滿作有之候ハヽ御同所御住居可被遊旨御內意ニ付若出火非常出水之節出役人之

中間の博奕

獻上物省略

儀其外各ニテ取調可然儀ハ夫々此節ヨリ取調置可被申事

右御目付へ

一湊御殿御普請御滿作有之候ハヽ御同所御住居可被遊旨御内意ニ付御同所ニテ女中勤振等ハ老女中合其外御廣敷向諸事御不都合無之樣此節ヨリ取調置可被申事

右御廣敷御用人へ

一湊御殿御普請御滿作有之候ハヽ御同所御住居可被遊旨御内意被　仰出候ニ付御同所奥向万端之御都合幷御側向勤振等之儀奥頭取へ申合諸事取調思召奉伺候樣可被致事

我々共へ可談儀モ候ハヽ取調此節ヨリ可被談出事

右御小姓頭へ

一五月廿二日湊御殿御普請御用相勤候御家老鈴木監物初御小姓頭取奥之番御勘定奉行御廣敷御用人御用人奥掛御勘定吟味役御目付御普請奉行御作事奉行御廣敷御用達御勘定御勝手方御大工頭御作事見廻役御繪師等役々三十二人へ時服金銀ヲ賜ル鈴木監物へハ黄金壹枚時服三其他ハ時服又ハ金銀夫々差等アリタリ

一五月十六日御家老三井孫十郎中間共中間部屋ニテ博奕致候品ニ付已後入念候樣御申付可被成旨御老中ヨリ書付被渡

一八月廿二日　前大納言樣是迄御指之御腰物御讓被進

一九月十八日三季御獻上物之外御獻上物猶又來未年ヨリ子年迄六ヶ年之間御省畧被　仰立相濟

孝子

一十二月二日口熊野小川村善太郎母ニ孝行且百歳ニモ近候ニ付金三両貳人扶持ヲ賜フ

一同月十三日御拳ノ鶴壹羽ツヽ　公方樣内府樣御臺樣へ御獻上

天保六年乙未　公三十五歳

湯淺の鯨

正月鯨魚多ク湯淺栖原ノ海ニ聚ル

栖原ノ海鯨魚來ル可キトコロニアラズシテ來ル一奇トス野呂隆訓菊地溪琴等詩アリ紀伊國名所圖會ニ載ス

三月東覲

一二月廿二日御參府シテ若山御發駕三月七日江戸御着座

三月九日御參府ニ付　上使被進

同月十五日御參府御禮御登　城可被遊處御風氣ニ付御名代ヲ以御禮被　仰上

赤阪邸燒

是月赤坂邸火幕府賜金貳万両

三月廿四日赤阪御本殿燒失

晝八半時比御本殿御廣敷向三之側ヨリ出火御殿向不殘相之馬場表御長屋百間余燒失

一大納言樣御簾中樣一旦御茶屋へ御披夫ヨリ青山御殿へ御披遊ハサレ　上使御使等御同處ニテ御請

二万両拜借

一同月廿七日　上使ヲ以テ金貳万両拜領

一五月十九日御火災ニ付御願之上金貳万両御拜借相濟拾ヶ年賦御返納且去年ヨリ御取替金壹万両

モ御願ノ通其儘御据置相濟

孝子

一閏七月五日西名草郡名高浦與兵衛養女マン養父ニ孝行ニ付鳥目五貫文ヲ賞賜

一八月三日濱御庭御拜見

閏七月十八日御三家方同月下旬御越被遊候樣被　仰出候處天氣合ニテ御延引本日御越被遊

一同月廿一日御腫物氣幷御住居向御普請ニ付來年其儘御滯府之儀御願ノ通相濟

赤阪火除地

一十月六日御願ノ通赤阪御屋敷南ノ方青山宿織田信濃守（大目付ナリ）城秀次郎幷同所當春類燒ノ向且組屋敷ノ内ヲモ被　召上火除地ニ被　仰出

天保七年丙申　公　三　十　六　歲

是歲在江戸

孝子

一四月五日西名草郡黒江村長次郎母ニ孝行ニ付鳥目五貫文ヲ賞賜ス

將軍御隱居

一九月四日上使（御老中）ヲ以テ內府樣御年モ被爲重候ニ付御政務御讓　公方樣御隱居來酉四月御移替可被遊旨被　仰出依テ御登城被遊

右ニ付來酉年四月　內府樣御本丸ヘ御移　公方樣ハ西丸ヘ御移可被成其段京都ヘモ被　仰進將軍宣下ノ儀モ御願被　仰進候旨　公儀觸出ル

一十二月四日御府內近邊御擧場ノ內ニテ御拜借場ノ儀御願ノ通リ相濟

孝子

一同月十日松阪平生町佐奈屋庄之右衛門厄介十助母ニ孝行ニ付鳥目七貫文ヲ賞賜ス

天保八年丁酉　公　三　十　七　歲

孝子

一正月廿八日日高郡高串村熊之丞母へ孝行妻子モ母ニ能仕候ニ付金三兩ヲ賞賜ス

大鹽平八郎

一二月十九日大鹽平八郎（大坂町與力格之助父隱居）亂ヲ爲ス

十五代史ニ曰ク　大鹽平八郎ハモト大坂町奉行之與力ニシテ格之助之養父ナリ陽明學ヲ修メテ孤介ノ操アリ志氣慓悍經世ヲ以テ自任ス自信スル事尤厚クシテ性又執拗、人ニ屈スルヲ恥ヅ嘗テ青雲之志アリテ、得ル事能ハズ、意常ニ不平高井山城守ノ大坂町奉行ヲ去ル、平ハモ退テ出デズ、時ニ幕府ノ政術衰ヘ姦小政ヲ弄シテ、人民恨怨スルヲ見テ、機ニ乘シテ志ヲ達セン事ヲ思フモノ久シ、去年ノ凶饑ニ遭ヒ、窮民之上ヲ怨ム者多キヲ見テ、私財ヲ散シテ之ヲ救ヒ、以テ民心ヲ收メ、富家ノ財ヲ散シテ、以テ貧苦之民ヲ賑ハサント謀ル、因テ窃カニ兵器ヲ作リ、同志ヲ糾合シテ、事ヲ擧ント欲ス、事未タ成ルニ及ハズシテ、同謀平山助次郎、近藤九郎右衛門ガ告訴スルヲ聞キ、遂ニ十九日曉、俄ニ兵ヲ擧ク、火ヲ近隣ニ放ッテ、進ンテ淡路町ヨリ城下ニ至ラントス、城代土井大炊頭利位命シテ、城番町奉行等之兵ヲ發シ、出テ、之ヲ擊ツ、定番與力坂本弦之助突進シ、鐵砲ヲ放ッテ賊一人ヲ打殺ス、賊徒潰散、廿一日朝ニ至テ全ク鎭靜、平八郎父子ハ、市中ニ潜匿ス、三月廿六日兵ヲ發シテ之ヲ捕ントス、平八郎等火ヲ放ッテ自殺ス、其餘之賊黨皆捕ラル、誅ニ就クモノ二十三人、平八郎時ニ年四十五

將軍代替

是歲、家齊公致職、家慶公任征夷大將軍

四月二日　公儀御代替內府樣御本丸ニ御移リ　上樣ト奉稱

右ニ付御登　城翌日モ爲御祝儀御登　城

一同月廿五日大御所樣（前將軍家齊公）ヨリ上使（御老中）ヲ以テ御隱居ノ爲御祝儀御腰物御拜領

赤阪本殿上棟式

一七月六日赤阪御本殿上棟式

八月九日ヨリ御本殿表向御普請出來ニ付御玄關其外表向之處御開キ　上使初御客使者等御受被遊

正二位

八月敍正二位

一八月廿三日御登城於御座之間御對顏　上意ヲ以テ被敍正二位之旨被　仰出

将軍宣下

舜恭公從一位

孝子

御金藏の三千兩紛失

窮民の爲起工

同月廿八日御位階之御禮被　仰上

右之御左右若山ヘハ同月晦日相達翌朔日惣出仕御祝儀申上ル七日ニ御酒被下アリ

一九月二日將軍宣下ニ付御登城　上樣本日ヨリ　公方樣ト奉稱

一同月十五日左京大夫樣御鞍御用之儀大納言樣ヨリ被　仰立候ニ付御大禮等束帶御衣冠之節ハ御鞍御用被成候樣被　仰出

一十月廿八日上使御老中ヲ以テ　前大納言樣從一位御敘位被　仰出爲御禮御登　城被遊

一同月廿九日赤阪御屋敷辰巳之方町地弐百三十六坪余火除之爲御屋敷内へ圍込遊　仰出

一十一月十日上那賀郡馬宿村政次郎娘小傳父母ニ孝行ニ付鳥目五貫文ヲ賞賜ス

一十一月十六日御腫物氣且御住居向御普請ニ付御滯府之儀御願之通被　仰出

一同月十九日若山御城御金藏ニ於テ金三千兩余紛失ス

天保十年七月右紛失ノ品相知レ七分通出ル

一同月廿四日御使札拜ニ御贈物來ル未年迄ハ是迄ノ通御達シ相濟

一同月廿七日岩淵筋御拜借ノ御場へ被爲成御鷹野被遊

一十二月十六日御大禮ニ付御登　城ノ節退紅之者以來三人以上御召連ノ儀ハ御遠慮被遊候樣ニト御老中ヨリ書付被相渡

是歳饑、起浚紀伊川功、使窮民就役

紀伊國名所圖繪ニ云ク天保七年五穀熟ラズ翌年ニ至リ米價益々高直ニシテ賤民飢ニナヨブモノオホシ、加之疫癘流行シ道

路ニタフルヽモノ等モ少カラ子ハ官此ヲウレヒテ茅舍ヲ建テ病ヲ療セシメ或ハ莘衢ノ便ニヨリテ粥ヲ施スト雖モ窮民猶絕サレバ更ニ川ザラヘノ擧アリ抑海路ノ運送年々ニ繁ク川モ塵埃ニ埋レテ淵モ瀨ト變リ通船ノ便宜ヨロシカラズ故ニソノ窮民ヲシテ土砂ヲ掘セ地ヲ築カシメソノ用度ヲ與ヘテ餓ヲ救ハシム此擧五月中旬ヨリ始テ九月上旬ニ至リ人數ハ老弱男女凡テ日々數千人ニヲヨベリ築地ノ廣袤南北八町許東西一丁ニスギズトイヘドモ海潮ノ衝ケル所ナレハ水底ノ淺深サタマラズ役民多クハ氣微ニシテ脛弱ケレバ土砂ノ運ヒハカバカシカラ子ト多勢ナルヲ以テツイニソノ功就レリ實ニ救荒ノ大擧トイフベシ其後漸々宅ヲキツキ魚市ノ場トシウンソウモ以前ニ倍セリ南ハ大雁木ノ波塘ヨリ北ハ城山ノ波塘マデノアイダヲ築地ト稱スト云々

天保の大飢饉

幕府の救恤方法

一是歳諸國飢饉窮民道路ニ滿ツ

去年氣候不順ニシテ五穀稔ラズ四月ノ比ヨリ時疫大ニ流行諸國之流民府下ニ來リ集ル者最モ多ク餓鬼到ル處ニ倒ル官救恤ノ方法頻ニ布達尚命ジテ小屋ヲ神田佐久間町其他數ヶ所ニ建設以テ窮餓ヲスクフモノ先後貳万余人ニ及ブ市中難澁之者其奉行所ニ願出父母妻子一同ニ小屋ニ入ル者アリ商賣元手トシテ壹人ヘ錢四百文ヲ給シ賣徳之内錢五十文ツヽヲ日々積置キ之ヲ以テ活計ノ資トナサシム又壹人ニ飯米三合ヲ食セシム小屋中ニテ出產ノ子アル者五十餘人各產衣ヲ給フ是年十月朔日ヨリ廿九日ニ至ル行倒死人百五十八人棄子五十三人町中缺落人百十八人此時米價錢百文ニ貳合五勺ナリ世ニ是ヲ天保ノ飢饑ト稱シ天人ノ口ヲホスイマハシキ年號抔トイヒアヘリトナリ

天保九年戊戌　公三十八歳

一正月七日御登　城於御座之間　大御所様ヘ御對顏

西丸炎上

三月江戶西城火獻金及材若干

一三月十日卯刻西丸炎上ニ付御登　城

同月十六日右炎上ニ付御座所向并大奥向共御普請御手傳被　仰出御出金高凡金八万三千二百五十両ト云フ

右ニ付江戸御圍米之内御獻上御伺之上檜大材三百五十本四月廿六日御獻上御目錄濟閏四月七日猿江御材木藏ヘ木材納付相濟

尾州樣ヘモ御手傳被　仰出水戸樣ヘハ被　仰出無之松板一万枚御獻納アリ

十五代史ニ曰ク　万石以上以下、大名共ニ獻金高百六十万八千八百四十四両也其中ニ就テ万石以上ヨリ手傳トシテ賦課スル者百貳万三千九百三十四両（一万石ニ付千五百両、又ハ千三百両、八百両等各差アリ）上納ト稱シ獻スルモノ、万石以上四十五万千七百両、万石以下五百石以上、八万四百五十五両又五百俵ヨリ下百俵以上高割上納金五万貳千七百五十五両其餘木石金鐵之類、又ハ寺社農商之獻金アリ、特造ノ入用、金百四十万二千百六十九両ニシテ、餘ス所十六万六百七十五両ナリトテフ

麹町御屋敷火

一閏四月四日、麹町御屋敷内米置場物置一棟類燒

公儀巡見使

一五月四日　公儀御代替ニ付巡見使御使番山本七郎左衛門西丸御小姓組三宅三郎御書院番市岡内記御城下通行無滯相濟

十五代史ニ曰ク　諸國巡撿使ヲ發スルハ慶長中ニ初リ大抵三五年ニ一度之ヲ發ス常憲公已後一代一度トナル又別ニ勘定徒目付ヲ從ヘシテ諸國公料政治之減否ヲ視察スルヲ以テ例トス而シテ巡撿使ヲ發スルハ此擧ヲ以テ終リトス温恭公已後三代ハ内外多事復此擧ヲ行フヲ得ス

孝子

一六月五日西名草郡吉原組江南村傳次娘タネ父ニ孝行ニ付鳥目五貫文ヲ賞賜ス

原町拜領

一八月廿四日水野土佐守牛込原町屋敷之内上地之分御願之通御拜領被　仰出

孝子
年々二萬兩の取替仰出
孝子
紀伊續風土記

一十二月十五日伊都郡中組入江村傳兵衛嘉助母ニ孝行ニ付束鳥目七貫文ヲ賞賜ス

一同月十八日五ヶ年之間年々金貳萬兩ツヽ御取替被　仰出

天保十年己亥　　公三十九歳

一二月十日奥熊野北山組和田村兵藏娘トラ父母ニ孝行ニ付鳥目五貫文ヲ賞賜ス

一四月十五日太田信吉深川三十三間堂ニ於テ半堂大矢數惣一ヲナス

一九月十四日　聖護院宮御入峯ニ付若山御通行

一十一月五日有田郡吉見村常藏父母ニ孝行妻モ同樣ニ付鳥目五貫文ヲ賞賜ス

一同月廿五日　上使御老中ヲ以テ西丸御普請御出來ニ付公方樣御指之御刀御脇差御拜領

一同日紀伊續風土記新撰大成ニ付惣裁仁井田摸一郎へ銀貳拾枚ヲ賜ヒ各係員ヘモ賞賜差アリ

該新撰ハ　幕命ニヨリ文化三年八月晦日仁井田摸一郎へ新撰惣裁ヲ被命爾後三十三年ヲ經テ本年三月十五日ニ全ク完成惣裁ヨリ奉呈ス卷數惣計百九十貳卷其詳ナルハ序文之如シ翌天保十二年十一月廿六日　幕府ヘ獻呈セラル抑此事タル近世之大著述ニシテ夙ニ　舜恭公之特旨ニ出嘗公能ク御繼述遂ニ大成ニ至ル數十年ノ内ニハ種々ノ支障變遷モ免レ難ク時ニ興廢ナキニ非ス惣裁摸一郎ハ儒官侍講君側等常ニ劇職ニ勤務故ニ其子源一郎本居彌四郎加納兵部ノ如キ專ラ擔任盡力身國内ノ山川ヲ餘サス跋渉探究、古來人跡絶エタル奥熊野大臺ヶ原迄モ實踐無量之艱楚ニ堪フ眞ニ勉メタリト云ベシ

左ニ序文及纂修人名ヲ掲ク

進紀伊續風土記啓

臣好古言、伏惟周官有土訓誦訓掌道地圖地事地物方志以詔觀事、外史亦掌四方之志、王者所以觀土風察地俗、將以從其宜、而播化修敎也、後世地志風土記、其所自而來遠矣

履中天皇四年、始於諸國置國史記言事達　四方之志、與周官所掌、實一揆矣、然其志絕而不傳、

元明天皇和銅六年

制、五畿七道、諸國郡內、所生銀銅彩色草木禽獸魚虫等物、具錄色目及土地沃瘠山川原野名號所由、又古老相傳、舊聞異事、載于史籍言上、於是其詳可得而言也、後至延長三年、重令諸國勘進風土記、

追和銅之

制、益求其詳也、

先王之憂天下、可謂至矣、逮

皇綱弛紊、海內擾亂、

官府所藏邦國所傳、其籍蕩燼、粲然完整者、獨出雲一國矣耳、雖其他有存焉者、皆斷簡殘編、欲求其詳、其得耶、至如

本藩、則隻字不遺、有響像一二纔存于他籍焉耳、豈可不嘆惜也、哉慶元建藩以還、於今二百有餘年矣、治化浹洽、百廢俱興、然未有風土記之撰、可不謂

明時之闕典也哉、爰暨文化之初有

台命、俾　本藩進續風土記、於是開館置局、命臣等以撰修之事、乃窮覽山川、巡省郡邑、詢舊聞考故

事、求餘聲於空谷、尋遺影於無形、或採古老之口碑、或擢野錄之雜說、情形根實、莫不鑽鑿、多歷年所、始克成編、提綱以記闔國之事、國以統郡、每郡有論、郡以統莊、每莊有論、莊以統村、每村所有皆錄、以爲一部通體、產載物類多涉國中、別彙以繫于末、凡九拾八卷、是爲本編、國中所傳文書、略釆而收本編、其餘猶數百通、足以考古徵事、收以爲附錄、凡十五卷、神祠繆傳最多、雖釐正以載本編、而其所論辨取捨、亦可以備考證、別書以爲附錄凡二卷、高野山所撰、凡七十七卷、煩穢失體、刪裁以就條貫、而收本編、其全編七十七卷、亦不可廢、併屬附錄、附錄通計九十四卷、與本編合百九十二卷、通編文辭、用國語者、取易通也、雅俗相混、繁略不均者、多隨舊文而不敢改、恐失其實也、嗚呼風土記之撰、其廢也、久矣、幸際

明盛之時、繼千歲之芳躅、振

百王之墜典、

國家之美事、孰大於此矣、臣等惷愚淺陋、所覽弗博、所稽弗徧、不足以酬

盛意、稱

明旨、漏闕之責、罪當萬死、雖然披沙揀金棄華摭實、則於

國家、觀風察俗、播化修敎之道、或將有所取焉、無任荷懼戰汗屏營之至、臣好古

誠惶誠恐頓首謹言

天保十年三月十五日　臣　仁井田好古謹上

奉

命修紀伊續風土記職名

總裁　臣仁井田摸一郎源好古
纂修　臣仁井田源一郎源長羣
纂修　臣本居彌四郎平內遠
纂修　臣加納兵部菅原諸平
纂修　臣赤城總太郎源世謙
助纂　臣宮井孫九郎藤原胤綱
物産　臣小原八三郎源良直
繕寫　臣西郷健十郎源壽徵
繕寫　臣吉田半左衛門紀致恭
繕寫　臣多喜加大夫藤原利幸
繕寫　臣秋月三之右衛門橘良熙
繕寫　臣千賀藤太郎藤原昌一
繕寫　臣栗本只輔藤原陳方
校對　臣小泉傳藏平保興
校對　臣金原三藏藤原恭意
地圖　臣勝本瀧右衛門秦義隣

奉修紀伊續風土記今不在者

纂　修　　　　　　　臣　崖常太郎紀守典
纂　修　　　　　　　臣　本居三四右衛門平大平
助　纂　　　　　　　臣　廣瀨總右衛門源軌命
助　纂　　　　　　　臣　萩野宗五郎源朝敬

一十二月十六日西丸御普請皆御出來ニ付惣出仕有之御登　城御對顔畢テ御部屋ニテ御吸物御酒御菓子御頂戴夫ヨリ西丸ヘ御登　城御對顔畢テ右同樣御頂戴物有之相濟御同所御座敷向御拜見被　仰出御案内御同朋頭

尾水樣ニモ御同樣之事

壹万五千兩拜借

一同月廿一日金壹万五千兩御拜借御願之通相濟來子年ヨリ十ヶ年賦御返納之筈

天保十一年庚子　　　　　公　四　十　歲

四月歸藩

一三月廿八日　公儀御代替初テ御歸國御暇被　仰出

四月六日江戸御發駕同廿一日若山御着城

一四月十二日御留守中御家政向之儀水野土佐守儀萬端外御家老初ヘ無斟酌申談候樣御老中ヨリ申聞

赤阪邸成

八月赤阪邸造營成

御移徙式

一八月十五日赤阪御本殿御普請出來ニ付御移徙之式被爲整

御撫物御裝束御本殿へ御移徙御式アリ

按スルニ撫物ハ自ヲ撫テ禍ヲ祓棄ルノ具形代即チ身之代トナスモノ、意天兒(アマカツ)ニ同シ一名人形又身之災ヲ贖フ故ニ贖物トモイフト言海ニアリ

若山湊御殿ニ於テモ御祝事被遊

賞孝子

一十月十四日口熊野田並浦利七母へ孝行妻モ同様ニ付鳥目五貫文ヲ賞賜ス

一同月廿九日西丸御座所向大奥向御普請御用相勤候御家老初へ　公儀ヨリ時服御銀羽織拜領物有之

獻上物六ヶ年容赦

一同月廿三日三季之外御獻上物猶又來丑年ヨリ六ヶ年御用捨之儀御願之通相濟

一十一月三日先達テヨリ御所勞之處御快全御床揚御祝儀有之

一十二月十四日來春御參府此合御早メ之儀御願之通被　仰出

賞孝子

一同月廿日日高郡明神川村久右衛門母へ孝行妻モ同様ニ付鳥目五貫文ヲ賞賜ス

天保十二年辛丑　　公四十一歳

家齊公薨

正月、聞家齊公病、東覲、是月三十日、家齊公薨

一閏正月十一日御參府シテ若山御發駕

翌十二日牧方驛御宿へ　大御所様去ル八日御不例御大切ニ被爲及候御內報到達御聽ニ達ス

同月廿七日御着府之處愛知川出水一日御見合大井川出水ニテ四日御逗留晦日江戸御着府直ニ御本殿へ御着座即日青山御殿へ爲御逗留被爲入

一二月朔日御參府ニ付　上使御老中被進

一正月晦日　大御所様（前將軍家齊公御實父ナリ）薨御ニ付定式之御忌服被爲請

二月十六日御登　城御棺前ヘ御拜禮

同月廿日御葬式ニ付矢來御門外被爲成御棺拜

同日御葬送御供爲御名代水野土佐守被遣

公御輓詩アリ曰、不肖孤齊順、公茲當朝覲、以前月十一日、發于南紀、翌十二日、至河内之牧方、道上奄聞、顯考疾大漸、心驚神飛、倍道兼行、雨露悠遠、泥土黏滑、況愛知大堰兩川洋溢阻水、將如何、到江都之日、已有凶變之訃、哀慟摧裂、何可勝任、順也不肖、昊天不矜、罹此艱厄、不得侍養、哀慕曷止、謹奉輓詩曰、泣血呑聲涙似泉、蘭摧玉折是何年、愁深滄海千尋水、腸斷瑤階咫尺天、仙鶴遠歸蓬島月、夜烏亂啼柳梢煙、愧無涓滴酬高德、空奉哀章一幅箋

一三月十三日御精進被爲解候樣　公方樣ヨリ被　仰進同日ヨリ御精進解

一二月五日御内々御本殿ヘ歸御表向御移徙御達シハ追テ之筈

八月三日　公邊ヘ御達御拜領物被遊

賞孝子

一四月五日西名草岡町領壇道中筋万助娘キク母ヘ孝行娘モ同樣ニ付鳥目七貫文ヲ賞賜ス

天保の改革

一五月十五日　公方樣上意書ヲ以テ諸政御改革被　仰出　上意之趣

一御政事之儀御代々之思召ハ勿論之儀取分享保寛政之御趣意ニ不違樣思召候ニ付何レモ厚ク心得可相勤候

御老中方被仰渡候趣

一寬政之度御初政之砌向々心得方之儀ニ付厚キ上意有之候旨其節達置候ハ一統相辨居可申儀ニ候處年月押移リ場所〳〵ニ古ク相勤候モノモ殘少ニ成候ヨリ自然御趣意取失ヒ候歟前々御規定之心付薄ク當座之御用辨而已專務ト心得候樣ニ成行候ハ如何之儀ニ思召候自今以後御代々樣被仰出候儀ハ勿論分テハ享保寬政之御政事向ニ相復シ候樣ト之御儀ニ付縱令御沙汰之儀ニテモ御規定ニ觸候歟或ハ筋合之穩ナラサル儀ハ不差控申上候樣トノ御沙汰ニ付誠ニ難有恐悅ノ御事ニ候乍然是迄何レモ不行屆御安心不被遊候御儀ト深ク恐入候事ニ候右之御趣意各奉承知享保寬政之度觸達之御書付類熟慮イタシ向々厚ク相心得是迄仕來候事タリトモ筋合ニ違ヒ候儀ハ改革イタシ何事モ正路ニ御爲第一ニ取計被遊御安心候樣精々可被相勵候事

附享保寬政之度ヲ始惣テ度々被仰出候儀モ當座同樣ニ相心得候輩モ有之甚如何之事ニ候殊ニ御役人之儀ハ表向之手本ニモ相成候事故別テ厚ク相心得新役被　仰付候節モ聊不洩樣精々傳達可有之候事

按スルニ文恭公御初政ニハ白河侯（松平越中守定信後樂翁）輔佐之職ニ在リテ賢明英果、身ヲ以テ匡濟ノ任ニ當リ能ク弊政ヲ蕩滌以テ海內上下之耳目ヲ一新ス故ニ數年之間綱與目張寬政之治之偉烈赫々タリ然レ共小人婦女之怨恨ヲ速ク者ナキニ非ルヤ攜讒相容ラレテ一朝職ヲ解キ閑官ニ退ク爾來松平信明本多忠籌等盡一遵行、軌度ヲ誤ラス寬政文化之政、秩叙粲然タリ何ソ圖ラン水野出羽守忠成老中トナリ巧言令色才幹人ニ超ユ信明等卒シニ後制抑人ナク忠成獨リ制財之任ニ當リテ一世之大權ヲ弄ス文政以後殆ント別世之如シ是ヨリ後上下相率テ賄賂公行小人相踵テ起リ偏ニ通貨之改鑄ヲ勉メ以テ濟窮之上策トナシ紛々擾々殆ト惡劣ヲ極ム忠成却テ之ヲ以テ忠トシ地ヲ增シ賞ヲ受クル遙カニ他之諸老之上ニ出ッ而シテ奢侈放逸停止スル所ナク外觀實ニ太平之極度ヲ粉裝スト雖モ其實衰頹危亂之胚胎スル所ト謂ハサルヲ得ス愼德公之大統ヲ繼セラルヽヤ頓ニ紀綱ノ怠弛ヲ痛憂匡濟釐革之叡旨アリ老中水野忠邦（越前守）太田資始（備後守）等亦之ヲ獎順シ天保九年閏四月十日首メテ節儉之風享保天明ノ古ニ復スヘキノ令ヲ發セラレシ以來勤儉尚武之施政尠カラサリシカ遂ニ今日此命アッテ爾來着々斷行新令之頒布殆ト空日ナキニ至ル其措置實ニ從前ニ正反對而カモ劇變ナルヲ以テ遠近悚動即チ時勢之一大變動ヲ來ス時人之ヲ御主

意ト稱シ其名永ク滅セサリシ（何々ハ御主意ヨリ初リシ御主意前ハ斯アリシ抔トイフコト通言トナリタリ）御家ニ在リハ別ニ更正等ノ事迚ハアラサリシモ所謂公儀觸ナルモノハ其時々普ク布達セラレ上下遵順無論ナリ依テ新令之概畧ヲ左ニ畧叙シ當時之狀況ヲ示サントス此他百般細雜ノ事勝テ數ヘカタシ結局唯節儉ヲ嚴ニシ文武ヲ勵マシ風俗ヲ正スニ在リト云フ

天保新令目

水野越前守上首

自天保十二年六月至同十四年閏九月新令目

一御番方古番之者新番ニ對シ倨傲傳達等六ケ敷申成スノ弊ヲ正ス

一旗下之面々對客ト稱シ老中宅ヘ出入頻煩ノヿヲ沙汰ス

一御料山林取締之事

一諸侯參勤期之遲延及事ニ托シ滯府ヲ請願歸國ヲ不好弊ヲ諭ス

一諸侯獻上物等無益之費ヲ省クベキトノ事

一在々ニテ遊藝歌舞妓淨瑠璃芝居之類人集メヲ禁ス

神事祭禮之節作リ物虫送風祭抔ト名付芝居見世物等ヲナシ衣類道具ニ金銀ヲ徒費スルヲ禁ス

一醫師供連之風儀不宜病家ニテ酒代辨當代等受ルヲ禁ス

一万石已上已下辻番所之取締ヲ命ス

一御取箇之事村柄之盛衰余業之有無運送之便否ヲ勘辨百姓之痛ニ不成樣且百姓奢侈ノ事荒地起返シ其他民政之事ヲ令ス

一學問奬勵ノヿ且學問所改正

一江戸町中檜垣問屋仲買小賣株札組合之制ヲ全廢商法之自由ヲ許ス

一市中女髮結渡世ヲ嚴禁ス
一市中寄場渡世ヲ十五ケ所ニ限ル
神道講釋心學軍書講談昔咄之四業之外不相成茶汲女女商人等婦人不可差出咄之中ヘ鳴物取交ヲ禁制ス
一博奕取締之事
一武術不取締無之子弟懇切ニ教示之事
一利根川初川々浚疏之事
一富興行一切停止
一身體ヘ彫リ物嚴禁
一諸色掛リ之名主ヲ定メ物價値下ケノ事
一市中葬式之華侈ヲ禁ス
一桶屋桶役錢之上納ヲユルス
一両替屋之制限ヲ廢ス
一女ニテ三味線淨瑠璃等之師匠ヲ禁ス
一髮結床畫障子暖簾等之彩色ヲ禁ス
一端々料理茶屋酌取女茶汲女等深川永代寺門前町ヲ初隱賣女体之者不殘新吉原人別ニ加ヘ場所々取拂ヲ命ス

一野菜モノ時節外レ初物高價之物賣出ヲ禁ス
一諸職人手間賃人足賃之直下ケヲ令ス
一町中表通リノ分土藏塗屋作リヲ令ス
一俗ニテ山伏體ニ紛敷大造成梵天ヲ拵ヘ町々歩行家々門戸ニ立錢ヲ乞ヲ禁ス
一土弓場ノ矢拾ヒ女ヲ出ス事ヲ禁ス
一寺社境內ニ於テ寄場九ケ所ニ限リ其餘差止メ及ヒ香具見世土弓場之不取締ヲ沙汰ス
一子供手遊ヒ物銀壹匁錢百文以上高價品ヲ賣ルヲ禁ス
一忠孝奇特者之名ヲ上ラシム
　十二年九月ヨリ十三年十二月迄府下忠孝貞節之者ヲ賞賜スル百八十八人也
一鍵屋玉屋之竹花火ヲ禁ス
一高島四郎大夫秘傳之火術博ク教授ヲ指揮ス
一麴町善國寺谷ヘ學問教授所ヲ設ク
一馬喰之馬代金三拾兩ニ限ラシム
一鰥寡孤獨並八十歳已上之老人ヲ書上シム
一錦畫ニ歌舞伎役者之似顏遊女藝者之壹枚摺及ヒ猥褻好色ニ關スル繪草紙印刷ヲ禁ス
一出版印刷之制ヲ定ム
一大名大身之者大部之書ヲ藏板普ク後來ニ相傳ヘ可申旨諭ス

右ニヨリ加州之欽定四經長州ノ名臣奏議薩州之春秋左氏傳等諸藩各刊行之書アリ

一俳優市川海老藏ヲ追放居宅ヲ沒收ス奢侈ヲ罰スルナリ

一百姓町人金銀具ヲ用ユルヲ禁シ町人婦女等之金銀具ヲ沒收ス

一出家社人山伏修驗者之町住宅ヲ禁シ本寺本社同宗同派之寺社内ニ引取シム町中ニテ法談說敎念佛講題目講等同行寄合鐘大皷ヲ鳴ラシ多人數集會等ヲ禁ス

一江戸大阪ノ俳優諸國城下社寺ヘ旅稼ヲ禁ス

一江戸三芝居（木挽町 葺屋町）ヲ不殘淺草猿若町ヘ移轉セシメ他所住居ヲ禁ス

俳優座頭立者之給金壹ケ年五百兩ヲ限ル

此外人形淨瑠璃語リ茶屋等各制限之法ヲ定メ端々葭簀張之出茶屋ヲ悉ク取拂フ

一人情本之板木ヲ取リ上ケ賣買貸借ヲ停止ス

寺門五郎右衛門柳亭種彦爲永春水著述之小說板本取上ケ燒捨夫々咎メアリ

一石燈籠石手水鉢之類十兩已上之品ヲ禁シ植物三兩已上ヲ禁ス

一金銀貸借ノ利足ヲ二十五兩壹歩ニ引下ル

一京都ニ學問所ヲ建設

堂上方ノ風儀不宜ヲ沙汰ス

一無宿非人御府内立廻リ之者糺之上男女トモ舊里ヘ戻シ歸農本業ニ就シメ又ハ寄場取建荒地起等ヲナサシム

一能役者之倨傲奢侈ヲ沙汰ス
一九段坂上ニ天文屋敷ヲ建設ス
一質物利下ケノヿヲ令ス
一人宿之制ヲ嚴ニス又旅人宿渡世之者ヲ一所ニ集メ其規制ヲ設ク
一淺草ニ非人寄場ヲ立
一農商等家作之華麗奢侈ヲ禁ス
一在方ヨリ江戸ヘ入込者之取締リ方及ヒ府下人別改ノ法ヲ定ム
一馬喰町御用屋敷御貸付金主法ヲ改革ス
一市中看板ニ金銀ノ飾ヲ禁ス
一下總國印旛沼開浚之令
一大阪堺兵庫西之宮町人ニ獻金ヲ命ス
一町人ノ長脇差ヲ禁ス
一盲人支配之制法ヲ改正
一江戸大阪近郊十里四方ヲ御料所ニ成置ルヘキ旨令ス
一金銀分銅ヲ制造軍資ニ充ツ

大畧如此ニシテ是皆水野越前守老中之上首トシテ献替スル所又天保十一年十一月朔日松平大和守ヲ出羽國庄内ヘ酒井左衛門尉ヲ越後國長岡ヘ牧野備前守ヲ武州川越ヘ所替被命ノ事アリ其人民大ニ之ヲ悲ミ四方ニ奔走シテ移封ヲ止メント請フ田安一位卿及ヒ水戸齊昭公モ之ヲ佐ケテ上言スル所アリ將軍（愼德公）深慮親書ヲ越前守ニ賜フ于時天保十二年六月七日也文載セ

テ十五代史ニ在リ左ニ抄出ス

此度存スル旨アリテ、大和、左衛門、備前所替、又三方元之如ク所替可申付候、出羽國酒田湊、越後國新潟港ハ、不取締之趣モ聞ユルニ付テ、夫々替地遣シ領所ニ申付、海防之備其外取締可申付候、此外私領ニ属スル湊ニ、海防要害ノ場所アラハ、改革之趣意ヲ以テ皆領地ニ收、夫々替地遣スヘク間、早々取調可申聞候、又一通ニ曰ク、庄內領之義ハ、往古最上出羽領分之所、左衛門尉先祖抜群ノ武功ニ依テ、元和中北國藩鎮之爲ニ被下候ハ　神祖御深慮被爲在候儀ト存候、然ルニ僻遠ノ土地、人心偏固ニテ、數年居合ハズ三代之久ヲ經テ、漸ク領內一圓歸依シ追々豐饒ノ國柄ニナリ收納モ方今ハ三四十万石ニモアマル由、然ルニ、外ニテ十四万石相當之地遣ハシ候テハ、家來扶助ニモ差支可申哉、村民共ニ騷キ立候ハ、敢テ舊主ヲ慕フノミニモアラス、大和、兼々勝手向不如意之趣、庄內村民共聞傳ヘ所替之上ハ、イカナル苛政モアルベクヤト安堵不致ヨリ偏固ノ頑民不穩聞エ候、右之如ク、モトヨリ不歸依之斯主、其上用度乏クテハ迚モ仁政ヲ以テ治ルヿハナルマジク、遂ニハ捨置キガタク、又所替爲致候カ、咎ナド申付ル樣ニテハ詮モナキヿニ候間、庄內騷立之風說、又ハ左衛門嘆願等之意ニハ、更ニ不拘、幸未タ引渡以前之事ニ候間、存寄ヲ以テ、只今之內、早々下知セシメ、三方元之如ク、本城安堵致サセ、庄內領之酒田湊、長岡領之新潟湊ハ、海防備場改正之主意ニテ、領地ニイタシ、夫々相應之替地遣シ候ハヽ、一旦申出候儀ヲ改候トテモ、國体ニ拘リ候儀ハアルマジク、天意人望ニモ叶ヒ又一同モ難有可存哉、一旦下知セシメ候事トテ、强テ行フ時ハ、却テ人望ニ背キ、此上万一騷立時ハ、不得已最寄之大名ヘ防之人數申付ル樣之事ニ

至ルニ於テハ、世之動静ニモ關リ不穏、却テ國威ヲ損スマジキモノニモ無之間、幸此度政事向復正之場合ニテ、改メ候ハヽ、主意モ立ヘク間、申渡方等之儀、早々取調可申聞候

一海防之備改革之意ニ付テハ酒井新潟之兩湊ニカギラズ、私領之内ニ、海防要害ニナルベキ湊アラハ、一同此度替地ヲ遣ハシ、上地ニイタシ候方、主意モ貫クベクト存候間、是亦可取調候

一大和守元來領分收納高薄ク不如意之上續柄等ニテ別テ物入多ク餘義ナキ譯ニテ所替ニモ成候處今度大藏大輔歸家故、又元之如ク申付候ト申樣ニ世上ヘ響キ候テハ不宜又大和守モ面目ヲ失ヒ可申間、時節柄、不容易年ニハ候ヘトモ兵部大輔見合ヲ以テ加増遣シ候方可然ト存候間此所早々評議致シ確ト可申聞候

忠邦之ヲ承リ同十日請書ヲ上ル大意猶強テ所替ヲ行フニ在リ書長ケレハ畧ス明日又新論アリ此度存スル旨アリテ大和、左衞門、備前所替之事如元可申付之段書取相渡候處越前守存意之趣書取ヲ以テ申聞一應尤ニ相聞候間得ト勘考セシメ候得共、所替如元申付候儀ハ存意相決候間何レニモ早々申渡候樣可致候左衞門身分又ハ國政等ニ不宜次第等モ有之候ハヽ、相糺シ追テ明日ニ沙汰ニ及候樣ニ可致候

是ニ於テ七月十二日松平大和守酒井牧野共所替ノコ思召之旨アリテ止メラレ大和守ニハ特ニ貳万石之地ヲ増ス明ル十三日越前守胸痛ヲ以テ出仕セズ書ヲ土井大炊頭ニ致シテ職ヲ辭ス大炊頭之ヲ上ル又親諭シテ即日出仕セシム忠邦感泣登營ス事初メテ平カナルヲ得タリ、德川氏開府以來一旦大名之所替ヲ命スル中止スル者アルヲ聞カス此ニ至テ始テ此事アリ以テ其勢減之古之如

クナラザルヲ察スベシ此頃忠邦上書シテ建論スル所アリ今其手書ヲ得タルヲ以テ之ヲ左ニ擧ク
亦以其果決之意ヲ見ルベシ

一此度御改革ニ付諸役所向之儀舊弊變洗、御取締一際相見候樣無御座候テハ御趣意難相立命令不行ハ國家之御耻辱ニテ不容易儀ニ御座候間自先頃中諸役人へ度々申達候へ共小普請奉行川路三左衛門ハ格別勵精世話仕候ニ付不日奏功候樣可相成候其外ノ役々ハ兎角仕來リニ因循仕十分ニ委身改革之氣色モ更ニ無御座候ニ付尚又此上之心得方左ニ申上候

一町方之儀享保ハ暫差置先寛政度之通相成候得ハ人情輕薄之風俗ヲ初、萬事文華ヲ去淳朴ニ歸リ金銀融通モ互ニ以信義相便候間凶年火災等之困厄相重候トモ可也活計モ相立候故上ヨリ御世話モ薄ク有之武家之面々モ猥ニ商賈ニ被貪候儀モ無之候然ル處奢靡之類悉ク相禁シ質素之風俗築一ニ相成候へハ市中衰微イタシ諸國蝟集之大都會ニハ不都合之光景ニモ相成諸家人口ニモ係リ可申御城下ハイカニモ繁華ニ致置不申候テハ不相成儀ニ有之候間其手心ニ差略世話可仕見込之旨町奉行共申聞候右之心取ヨリ万端取締向等相調候故寛裕ニノミ相流下地年來蕩奢ニ馴居質素之風尚ハ不好小人共へ最初ヨリ繁華ヲ旨ト致シ可申ナド、唱へ姦猾之下情ニ合候樣之世話候テハ有名無實ニテ一日タリトモ御趣意不被行儀眼前ニ御座候享保寛政モ第一ハ驕奢ヲ被禁候儀何レ之箇條ニモ顯然仕候百年五十年以前ヨリ既ニ其弊ハ有之マシテ文政以來之風習澆漓之極ニ御座候間此度之機會ニテ挽回一洗仕候へハ都テ世上ニモ面目ヲ改メ候間又三四十年ハ可也持守可申哉ニ付タトヒ御城下衰態ヲ極メ今日之家職難相立商人共離散仕候トモ聊不頓着淳朴之號令行届

候ハヽ兩三年モ相立候ヘバ自然ト程能名分モ相立可申候尤如此繁華之地故中々究乏候程之儀ハ決テ無御座候ヘ共右程之見込ニ無之候テハ迚モ濟世之御趣意ハ不行屆儀ニ御座候

一御作事方、御普請方、御納戸、御賄所、御細工所何レモ御入用之場所ニ候處前件町奉行同樣ニテ奉行頭トモ只々下方氣受ヲノミ兼居御爲筋ハ次ニ相成因循苟且之擧動難免事ニ御座候既ニ風聞書等度々相下候ヘ共毎度取成躰之義ノミ申聞候間御取締之儀ハ未タ見居付不申候

右之通ニテ小普請方之外ハ何レモ不束千万之心得ニ御座候タトヘハ宿痾之胸腹ニ凝滯仕一圓快愈之兆無之姿ニ付一旦烏頭大黄之激劑相施不申候テハ迚モ功驗難得候間今一應嚴シク申諭シ若此上奉行頭トモ不進ノ者有之候ハヽ速ニ御人選ニテ御入替ニモ相成候樣仕度此處篤ト伺置キ右之威權ヲ含居リ相諭候ハヽ際立候樣可相成哉ト奉存候ニ付此段御內慮奉伺候事

此書之意一時其改革ヲ行得タル所以ニシテ又其禍ヲ速ク所以ナリト云々

水野忠邦被免

一越前守施政之方畧專ラ世弊ヲ矯メ節儉ヲ尚メ風俗ヲ正スニ在リテ英邁果決他之庸相俗吏之及ブ所ニ非スト雖モ時勢人情ヲ不顧苛刻ニ渉リ嚴峻ニ過キ急激ニ失スルト官吏之黜陟陶汰尤多キ等ニテ大ニ小人之讒口ヲ速キ世人之謗議ヲ來シ釁ヲ窺ヒ隙ニ乘セントスルノ黨、亦不少、該ノ江戸大阪御城最寄壹圓御領所ニナスヘキノ令出テ私領上ケ地飛地之事ニヨリ讒謗最紛起遂ニ天保十四年閏九月十三日ヲ以テ免官鴈間詰差控ヲ被命タリ此日府下之人民歡喜踊躍直チニ數百人越前守之邸外ニ集マリ瓦礫ヲ投ス夜ニ至テ益甚シ町奉行盜賊改等出馬之ヲ捕繫スト云同二十三日ニハ印幡沼之浚鑿ヲ止メ助工之諸侯ヲ免ス土井大炊頭代テ老中之上首トナリ阿部伊勢守會計掛リ

被命新令亦廢スルモノ多シ然ルニ翌十五年六月十四日越前守老中ニ再任シ上席ヲ占ム是蘭人之上告ト英佛之琉球ニ來リ迫ルヲ以テ諸老之ヲ制スルコ能ハス將軍越前守ヲ思ヒ再任之ヲ措置セシメントス越前守堅辭ス若年寄大岡主膳正ヲ遣ハシ內諭アリ依テ已ヲ得スシテ命ニ應ス再出ヨリ僅ニ九ケ月弘化二年二月廿二日又鳥居甲斐守（一本ニ忠邦ノ二字アリ）之事ニ座シテ罷ラル三月十日若年寄大岡主膳正大目付深谷遠江守越前守之邸ニ臨ミ命ヲ傳フ曰ク

其方儀先々御役中長崎表高嶋四郎大夫外掛リ合之者共吟味之儀鳥居甲斐守掛リ被　仰付置候處其方萬端及差圖不正之吟味詰ヲ以テ口上書取扱候哉ト御不審ニ候重キ御役相勤候身分ヲモ不顧不屆之至御不興ニ思召候依之事實委細ニ可申上トノ上意ニ候

四郎大夫ハ長崎奉行會所調役頭取也去年長崎會所職司上不正之罪アル旨ニテ召捕ラレシナリ

按ニ高嶋四郎大夫ハ本庄茂平次（長崎人）ノ毒舌ニ罹リ鳥居甲斐守ニ讒訴セラル甲斐守之ヲ信シ又己モ少シク啣ム處アリテ遂ニ不軌ヲ謀ルモノト誣構シ市橋下總守ヘ御預ケトナシ十年幽囚セラル後水野越前守黜レテ鳥居甲斐守ハ高嶋事件其他ノ嫌疑ニテ罪ヲ得相良遠江守ヘ預ケラレ續テ丸龜京極家ヘ永預トナリテ家繼絕本庄茂平次ハ弘化三年三月五日中追放トナリ其日護持院カ原ニ於テ熊倉傳十郎小松典膳ノ爲ニ討タル茂平次嘗テ傳十郎ノ父傳之丞叔父井上傳兵衛ヲ殺害シタルニヨル之ヲ護持院カ原之敵打ト稱シ近來之珍事ト言ナセルナリ高嶋鳥居初メ事近刊之舊幕府二卷ノ六七號ニ詳記セリ

而シテ同年九月二日勤役中不正之儀共達御聽依之急度モ可被　仰付處出格之思召ヲ以テ御加增一万石本高之內一万石居屋敷家作共被召上隱居下屋敷ニテ急度愼ミ可罷在子金五郎ヘ五万石被下厩之間詰差控被　仰付旨被命同年十一月出羽山形ヘ所替ニナリタリ

右改革之當時ハ信漸ク十一二歲稚心尙記シテ忘レサルモノアリ品川新宿板橋千住等岡場所僞盛女ト唱フル淫婦深川芳町新橋等之藝妓ハ一時ニ吉原ヘ放逐、所在之隱賣婦ハ日々珠數繫ノ逮捕ニ遭遇、轎夫馬丁無賴之惡漢ハ（ゲエン仕事師手廻リ中

間之類）不選ノ元資トスル賭博肉鱠ヲ嚴禁セラレ木挽町堺町葺屋町之三芝居ノ（此時迄他ニ芝居アルナシ）俳優及茶屋之類ハ淺草田圃之空野ヘ處替ヘ（時々出火延燒之患アルニヨル）男女入込洗湯之醜態ヲ改テ其ノ別ヲ正ス（府下一般男女浴室ヲ區別入口ニ男湯、女湯ノ看板ヲ揭クルコノトキニ初ル）俳優遊女似顏之錦畫ノミナラス春畫枕草紙、唐頭暴露ノ蠻風ハ跡ヲ絕チ女髮結之廢絕ニ婦女小鬟、僅カニ自結之不便ヲ悲ミ金櫛銀簪珊瑚鼈甲ノ頭飾、縮緬朱珍之衣帶、天鵞絨鼻緖之履ヲ着クル處女艷滝ハ白晝剝奪之難ニ罹ル此他風俗ヲ正シ節儉ヲ崇メ後世顰ヲ法トナセシ美事亦不少ト雖モ大半ハ俚耳ニ入ラス殆ト商鞅之苛政ニ苦シム如ク人心恟々朝夕ヲ安ンセス噫嗟怨聲道路ニ充塞就中十組問屋廢止、印幡沼浚鑿、私領上ケ地飛地之作ハ最モ怨府之財貨讒搆誣伏之奇貨トナリシモノニテ一時廻天動地之權勢モ僅ニ三年ナモ支ヘカタキ夢幻ノ奇談ト成果シハ頗ル痛惜ニ勝サル所ナリ

孝子

一八月奧熊野入鹿組矢之川組國藏母ヘ孝行姉ヘモ能仕ヘ候付鳥目七貫文ヲ賞賜ス

清水樣ゝ對顏

一九月十日清水樣ト御續柄モ有之候付御互御對顏之儀御內談之處一ケ年一度ツヽ御出會不苦旨御老中ヨリ差圖有之

右ニ付清水樣十一月六日ニ御入來御對顏有之

一同月十八日御祝儀事ニ付鮮鯛御獻上代金ニテ御上ケ不苦旨御老中ヨリ書付渡ス

一十月九日細川越中守養母蓮性院殿大奧ヘ御入來

同月六日ニ御續モ有之付御本殿ニテ御對顏之儀御申サセノ上也

一同月十三日來春御歸國之節大阪御止宿之儀御內談相濟

獻紀伊續風土記

是歲獻紀伊續風土記

一十一月廿六日紀伊續風土記御獻上

風土記ハ文化三年幕命ニヨリ仁井田模一郎初ヘ新撰命セラレ天保十年ニ至テ成ル全部百九十二卷ナリ同年五月廿五日ノ條ニ

孝子

孝子

御出仕御精勤

原町邸相對替

孝子

天保攘夷緩和令

記載ノ如シ

一同月廿九日有田郡垣倉村爲助養父母ニ孝行妻モ同樣ニ付鳥目五貫文ヲ賞賜ス

天保十三年壬寅　公四十二歳

一正月十五日日高郡下江川村善兵衛父ヘ孝行妻モ同樣ニ付鳥目五貫文ヲ賞賜ス

一二月十七日　公方樣來年日光御參詣可被遊旨被　仰出翌十八日右之節御豫參被遊候樣被　仰出

一三月十五日常々御出仕御出精當年ハ別テ御精勤之段　公方樣上意之旨御老中ヨリ申上ル

四月歸藩

一三月十五日御歸國御暇被　仰出

同月十九日江戸御發駕御道中川支ニテ一日御見合四月七日若山御着城

一四月七日四谷相之馬場角大久保悌之丞屋敷ト牛込原町御拜領地ト御相對替相濟

一六月廿三日白子領一志郡小川村彌兵衛養女カト養母ニ孝行ニ付鳥目五貫文ヲ賞賜ス

一同月廿五日　公儀ヘ御伺書御達書等之紙品位下之儀御內談相濟

一七月十日湊御殿表向御普請御用掛リ之山中筑後守初ヘ黄金時服白銀等被下置右ハ御書院等御普請落成有之年頭ノ外御祝儀事等湊御殿ニ成替ルニ依テ御普請御用勤之御家老初御用人御勘定奉行御用御取次御目付御勘定吟味役與御右筆組頭御勘定組頭御作事奉行御仕入方勤役諸局屬等廿七人ヘ賞賜アリタル也

一七月廿六日異國船渡來之節無二念打拂之令ヲ廢セラル

異國船渡來之節無二念打拂可申旨文政八年被　仰出候然ル處當時萬事御改正ニテ享保寛政之御政事ニ被復何事ニヨラス御仁政ヲ被施度トノ難有思召ニ候右ニ付テハ外國ノモノニテモ逢難風漂流等ニテ食物薪水ヲ乞候迄ニ渡來候ヲ其事情不相分ニ壹圖ニ打拂候テハ萬國ニ被對候御仕置トモ不被思召候依之文化三年異國船渡來之節取計方ノ儀ニ付被　仰出候趣ニ相復候樣被　仰出候間異國船ト見受候ハヽ得ト樣子相紀シ食料薪水等乏シク歸帆難成趣ニ候ハヽ望之品相應ニ與ヘ歸帆可致旨申諭尤上陸ハ爲致間敷候併此通被　仰出候ニ付テハ海岸防禦之手當ユルカセニイタシ置宜ナト心得違又ハ猥ニ異國人ニ親ミ候儀等ハ致間敷筋ニ付警衛向之儀ハ彌嚴重ニ致シ人數并武器手當等之儀ハ是迄ヨリハ一段手厚聊ニテモ心弛ミ無之樣相心得可申候若異國船ヨリ海岸之樣子ヲウカカヒ其場所人心之動靜ヲ試候タメ抔ニ鐵炮ヲ打掛候類可有之哉モ難計候ヘドモ夫等之事ニ動搖不致渡來之事實能々相分御憐恤之御主意貫キ候樣取計可申候サレ共彼方ヨリ亂妨ノ始末有之候歟望之品相與候テモ歸帆不致及異議候ハヽ速ニ打拂臨機之取計ハ勿論之事ニ候備向手當之儀ハ猶追テ相達候次第モ可有之哉ニ候

按ニ天保九年八月八王子千人同心組頭松本計機藏英國モリソン船漂民ヲ送リテ浦賀ニ入ルヲ蘭人風説書ヲ以テ告タル事ヲ憂ヘ上書シテ其接待之方ヲ論シ又三宅土佐守家來渡邊登（華山）ハ愼機論鴃舌問答等之書ヲ著シ町醫師高野長英ハ夢物語ヲ著ハシ共ニ私カニモリソン江戸ニ入ル事ヲ論ス是レ文政八年之令一意擊攘之義ハ或ハ大事ヲ生セン事ヲ慮リ大ニ外國之事情ヲ陳シ諷スル所アリシナリ此論大ニ人心ヲ動カシ爲ニ紛議ヲ生スルニ至レリ本記ノ發令ハ蓋シ遠因是等ニ胚胎セシモノナルベシ然ルニ登、長英ノ貳人ハ此事ニヨツテ他之譏スル所トナリ天保十年十二月十八日罪セラレ登ハ揚屋入後在所ニ於テ蟄居長英ハ永牢ニ處セラレタリ

一七月晦日御家老山高石見守父子御咎被　仰付

山高石見守

先達テ不輕企有之其節　公邊御様子モ有之御咎可被　仰付處隱居奉願候ニ付御宥恕ヲ以願之通隱居被　仰付候處又候此度甚不容易致企上ヲ掠人氣ヲ騷セ候段重々不屆之至ニ付左近抱屋敷へ引移蟄居可仕旨被　仰付

大寄合表御用部屋へ罷出
御用見習當番詰番チモ勤　山高左近

父石見守儀先達テ不輕企有之其砌　公邊御様子モ有之御咎可被　仰付候處隱居奉願候ニ付御宥恕ヲ以願之通隱居被仰付候處又候此度不容易致企上ヲ掠人氣ヲ騷セ候段重々不屆之至ニ付其方抱屋敷へ引移蟄居可仕旨被　仰付候依之其方儀逼塞被　仰付

右之連及ニヤ此前後ニ屢黜陟之者或ハ布達等之事アリ左ニ集錄ス

一同年七月廿七日

新御番頭格御小納戸頭取御場掛　五百石 年々金廿兩　川合縫殿

勤方不正之儀有之候ニ付屹度可被　仰付候得共此度ハ被加御宥免御役御免寄合被　仰付

縫殿養子金之助ハ山高左近弟ニテ石見守之四男ナリ

御小納戸頭取格御小納戸同役肝煎　御切米廿石 三十石高　星野志摩

御勘定吟味役御勝手御用勤一位様御用兼　御切米廿五石 六十石高　加藤甚之進

奥詰被　仰付御足高五石其儘被下置之持格之事

小笠原彌太郎跡勢州五ヶ所番被　仰付御供番格被　仰付御足高其儘被下候事

早々支度致シ彼地へ罷越候樣相達幾日出立致シ候ト之儀可申出事

右甚之進ハ家相方位ニ委敷湊御殿大納言樣方西濱御殿一位樣方奥へモ毎々罷出御内々御用相畏リ山高石見守ニハ格別懇意ニテ權勢强ク司農府内ニテハ肩ヲ並フル者ナシト云勢州五ヶ所ハ人跡モ容易ニ通ヒ難キ僻在ニテ流罪ニ等キ事支度次第出立トハ科待之酷ナルモノナリ

一同年八月六日

御切米四十石六十石高　年々金十兩　志摩惣領　新御番頭格奥勤御小姓頭取兼　星野近江

御小姓頭取被　仰付御足高御金其儘被下置之持格之事

近江ハ當君御寵愛深ク奥向ニテノ權勢並フ人ナシ故ニ無足ニシテ頭役ノ奥勤ニ至ル如此父子頭役御側勤セシハ正井荒井松井等之數人ノミナリシ

御切米七十石　三百石高　御用人　西郷賴母

御徒頭格中奥詰被　仰付御足高其儘被下置之

一同月十五日

先比以來種々風評之趣モ有之何トナク人氣モ不穩樣子ニ候此度思召被爲在候向々夫々御所置モ有之候付テハ以來諸有司並配下之向々共一統不致疑惑當時之姿不相替是迄之通彌實意ニ可致精勤トノ御事候

若心得違世評ニ泥ミ或ハ私情ヲ以致異論候儀等ハ決テ有之間敷事ニ候間此段能々相心得配下之向ヘモ篤ト可被申合置事

同月廿五日布達

一奥勤初御側向出會之儀ハ御規定之趣モ有之猶又去々年來追々被　仰出之品モ有之候處兎角猥成趣ニ相聞甚如何之事ニ付屹度御糺モ可被遊候得共先御用捨被遊候間向後若心得違御規定ニ相背候向モ有之候ハヽ御糺之上屹度可被　仰付候條御規定ノ趣堅相守可申事

御側向ハ他人出會不相成近親トイヘドモ願濟之上出會ス夫レモ御小姓ハ御小姓同心隨行ナリ御小納戸ハ朋友故舊途中目禮丈ケハ許サル當御代ニハ此規定殊ニ嚴カナリシ也

一同月同日被　仰渡

山中筑後守

近比多病ニ相成候ニ付内存願之趣モ有之候ヘ共久々御用向無滯出精相勤候儀ニ付是迄之通其儘相勤可申候分ケテ内存之品モ有之付同席共並之通出殿之儀ハ御用捨被遊候病氣快節ハ月番モ是迄之通リ相勤可申ト之御事候

一同年九月廿日

貳千七百石　大寄合
三千石高

山高左近

父石見儀不容易品々有之不埒之次第ニ候處其方儀心付方等閑ニ罷在候段不束之至ニ候依之知行之内貳百石御足高共被召上大組被　仰付

五百石　寄合　川合縫殿

山高石見不容易儀品々有之不埒之次第ニ候處近親ニテ取計振モ可有之處却テ致荷擔候儀等彼是不屆之至候依之御役並知行之内貳百石被召放小普請入被　仰付刑小普請之事

一同年同月晦日

御徒頭格中奥詰　西郷頼母

御趣意有之轉役被　仰付候處先御役中彼是不埒之次第相顯候品モ有之御役柄別テ不心得之至ニ付御役御免小普請入逼塞被　仰付寄合格之事

一同年十月四日

新御番頭格御小姓頭取　星野近江

志摩惣領

中奥詰被　仰付御足高御金其儘被下置之持格之事

御小納戸頭取格奥詰　星野志摩

御徒頭格中奥詰被　仰付御足高其儘被下置之

一同年十一月廿九日

御供番格勢州五ヶ所番　加藤甚之進

思召之品有之付大御番格逼塞被　仰付其儘勢州五ヶ所番相勤御足高上リ候事

新御番頭格中奥詰　星野近江

思召之品有之付御役御免小普請入逼塞被　仰付御足高御金上リ候事寄合格之事

按スルニ時之重職寵臣等如此俄然屢貶黜、就中不穩之辭令アルハ昇平之世ニハ頗ル奇異ニシテ人々大ニ怪訝スル所アリシモ固ヨリ事機密且忌諱ニ觸ル、ノ懼アレハ誰一人口外スルモノモ無カリシナリ左レドモ世間何トナク沙汰セシニハ山高石見守ハ御表（顯龍公）之出頭（御家老加判ノ列二千三百石三千百石ニ御足）山中筑後守ハ西濱樣（舜恭公）之出頭（御家老加判ノ列二千五百石二千七百石ニ御足）ニテ各權勢最盛ニシテ殆ト軋轢ヲ生セシモノ、如ク互ニ相浮沈セリ即チ左之如シ

一天保五年正月十二日被　仰渡

山中筑後守

公邊ヨリ御內々御沙汰之品モ有之付御役御免隱居知行之內二千二百石嫡子熊之丞ニ被下大組被　仰付殘三百石被召上筑後守儀愼可罷在旨

一同年六月廿九日

山高石見守

年來致精勤殊ニ近年別テ骨折候品モ有之付御足高之內御加增二千七百石被仰付

一同年九月廿九日

山中筑後守

公邊ヨリ御內々御沙汰之品有之當春被　仰出之趣モ有之候ヘ共猶又公邊御趣意モ有之付愼御免以來依願被　仰付候隱居同樣ニ心得可申御役中格別精勤ヲ以同姓熊之丞ヘ御加增貳千七百石被仰付三千石高ニ御足高被下置之旨

時之風說ニ本文ハ一位樣ヨリ密々　公邊ヘ御趣意御問合ニ相成候上猶又格別之御趣意ニテ御

免ニ相成候トノ事ト言ヒ傳ヘリ

一同月同日　山高石見守

願之品モ有之付隱居被　仰付家督無相違嫡子左近ヘ被下大寄合被　仰付近來別テ精勤之故ヲ以テ御足高其儘左近ヘ被下置旨

一同年十二月十二日　山中筑後守

年來精勤之趣モ有之ニ付御用部屋相詰加判之列同樣御用向可申談旨召出伺等之節モ罷出西濱御殿ヘモ折々可罷出旨

一天保十二年正月十四日　山中筑後守

兼々出精相勤去ル酉年格段骨折候品モ有之付厚御賞可被成下思召之處兼テ内存之品モ有之ニ付其節ハ御賞不被下候然トモ以來猶又格段出精相勤萬端別テ骨折候ニ付旁兼テ内存之趣意モ有之候ヘ共別段之思召ヲ以御合力五百俵被下置月番ヲ初諸事同列並之通相勤可申旨

件之有樣ニテ元來一位樣ニハ御用御取次ヲ以都テ御政事向ニ御下知有之中ニハ格別御寵愛之山中筑後守之料簡モ思召之樣ニ相成候歟之取沙汰專ラ有之既ニ天保五年ニモ一位樣追々御高年ニ

被爲在候ニ付御政事向ニ御苦勞不奉掛候樣　公邊ヨリ御內沙汰有之且筑後守一己之取扱モ有之哉ニテ愼隱居被　仰付以來一位樣ニハ御政事向ニ御携リ不被遊トノ風聞有之處筑後守ヨリ一位樣ヘ申上公邊向ヘ御手入相成候處表向之御事ニモ無之趣ニテ暫時ニ山中筑後守ハ愼御免再勤被　仰付御表樣御寵愛之山高石見守隱居ニ相成候ニ付大納言樣思召ニ不叶哉翌未年御參府相成暫ク御歸國無之同十三寅年御歸國折々石見守ヲ夜分湊御殿ヘ御召ニ相成ルトカ乘物ニテ御庭口ヨリ罷出ルトカ取々之風評アリテ

石見守御鷹野口ヨリ大奧ヘ駕籠ニテ罷出及深更退出之處供待場所無之ニヨリ御花畑奉行小林鄉八御花作小坂佐次郎ハ湊御殿內ニ住居候故同人方ニテ家來休息セシメタル由相聞エ鄉八佐次郎ヲ西濱御殿ヘ召サレ段々御糺有之両人ハ川合縫殿ヨリ御內々御用ニテ石見守出殿夜分ノ事ニ付家來ノモノ休息爲致候樣申聞ニ付御用ト心得差置候段御答仕リ大ニ心配之處格別之御咎モナク無事ニ相濟歡ヒタリ抔風聞セリ

今ニモ山中ハ愼ニ可相成樣沙汰セルニ七月ニ至リ却テ山高蟄居被命乍去世評ハ又々山高ハ御免ニ成山中之方蟄居可被　仰付ト專ラナリシカハ八月十五日之種々風評之趣有之人氣不穩云々之布達出シナリト聞エタリトゾ

一九月廿一日廿二日兩日去ル酉年正二位御昇位之御禮被爲請

孝子

一同月廿八日口熊野野中村虎吉父母ニ孝行ニ付鳥目七貫文ヲ賞賜ス

拜借金當

一十二月來年日光御參詣ニ付御拜借金當暮御上納御差延被　仰出

延著上納差

一同月廿九日五家之御家老之外諸大夫之御家老年頭御流頂戴席之儀相濟

右ハ如何樣ニ相濟タルヤ不了暫ク原書ノ儘ヲ存ス

是年十一月琉球人來朝十九日登城御館ヘ參上亦缺記知リカタシ

天保十四年癸卯　　公四十三歲

一正月舊臘廿六日　東照宮御誕生月日支干相當爲御祝儀宿次奉書ヲ以御樽肴御拜領

三月東覲

一二月廿六日御參府シテ若山御發駕

御道中阿部川出水ニテ一日御見合三月十二日江戶御着座三月十五日御參府之御禮被　仰上

一三月六日日光御豫參ニ付御登　城御懇之　上意ニテ御馬御拜領

日光御豫參

四月從將軍拜日光山廟

一同月十一日日光御豫參シテ御發駕十五日日光御着

公方樣ニハ四月十三日江戶御發駕十六日御着十七日御拜禮廿一日還御

四月十七日御豫參被遊

公方樣日光瀧尾御へ御見物ニ被爲成ニ付右後御見物依御願御越御見物被遊尾水樣ニモ御同樣也

公方樣還御之節御道中ヨリ爲御尋宿次奉書ヲ以干鯛御拜領

四月十九日日光御發途廿二日御歸府

勢州海岸

一七月五日勢州御領分海岸村々へ異國船渡來之節御固人數差出之儀御老中ヨリ以書付被相達

へ異國船渡來

七月四日志州鳥羽之領主ヨリモ加勢之儀依頼申來昨年異國船渡來之節取計方御改正ニ付テハ海防之儀彌嚴重ニ致シ向後防禦之人數相增シ人數何程相增候トノ儀並是迄之備之人數ヲ始メ兼テ用意申付置候鐵砲石火失等之員數迄銘々委敷書出可申旨同年八月九日ヲ以万石以上以下共海岸ニ領分知行有之面々へ布令相成其後モ臺場增築防禦之利器等異國戰鬪之制度ヲモ考へ分限ニ應シ制作非常之備手厚ク行屆候樣頻リニ被　仰出タル也

三万兩御取替金仰出

一十月八日新規三万兩御取替之儀被　仰立候處是迄之通貳万兩ツヽ來辰年ヨリ來申年迄五ヶ年之間御取替金被　仰出

一十一月十八日濱御庭へ御越御鷹御遣被遊

去ル十三日近々濱御庭へ御越被遊候樣ニト御老中ヲ以御沙汰ニ依テ也

拜借金上納差延

一同月廿五日當四月日光御參詣ニ付彼地へ御越ニ付御拜借金當暮御上納分御差延被　仰出

孝子

一十二月廿日日高郡津井村傳四郎母ニ孝行姉モ同樣ニ付鳥目七貫文ヲ賞賜ス

紀伊國名所歌集

是歲新撰紀伊國名所歌集成

天保十五年甲辰　弘化ト改元　公　四　十　四　歲

千葉ヶ谷地を添地

一三月十四日千駄ヶ谷三枝右近上地御殘七千四百坪ヲ御願之通添地ニ被　仰出

四月歸藩

一三月十五日御國許へ之御暇被　仰出

同十八日江戶御發駕由比川興津川出水ニテ蒲原驛ニテ御見合其外ニテモ出水有之田井之瀨川出

齊昭卿御隱居御慎

水ニテ一日御見合四月十日若山御着城

一五月六日水戸中納言樣齊昭卿御隱居御慎被　仰出

御召ニヨリ昨日御參府之處本日松平讃岐守樣松平大學頭樣松平播摩守樣ヲ被爲召左之通御老中

傳達

水戸中納言殿御家政向近年追々御氣隨之趣相聞御驕慢被爲募都テ御一己之御了簡ヲ以御制度ニ被爲觸候事共有之御三家方ハ國持初諸大名之可爲模範之處御遠慮モ不被在之御儀御不興之御事ニ被爲思召候依之御隱居被　仰出駒込屋敷ニ御住居急度御慎可有之候御家督之儀ハ無相違鶴千代麿殿ヘ被　仰出候此段可相達旨　上意有之候

一同年十一月十六日御慎御免被　仰出御政事御關係ハ御免無之

水戸齊昭卿ニハ昨天保十四年五月十八日ニ於テ左之如キ台命アリシカ僅ニ壹ケ年ニシテ此命アリ公御國政ニ御盡力之事ハ藤田東湖カ常陸帶ニ詳也

昨年來國政向格別被行屆文武共不絕研究被在之趣一段之事ニ思召候猶此上御在邑中御領分末々マテ公儀御德化ニ相靡被遊御安心候樣厚御世話可被成候依之御傳來御太刀被爲進之、永御秘藏可被成候且御領中巡見之節御用之樣御鞍鐙被進之並何角之御用途トシテ黄金百枚被爲進之候源義殿之遺志ヲ被繼益々被勵忠勤候樣思召候

長澤衛門記錄

長澤衛門ノ西濱御殿御用留トイフヲ一閲スルニ弘化二巳年二月廿九日ノ條ニ左ノ記アリ衛門ハ故實取調春日權現驗記書寫ノ御用ニテ此頃京都ニ滯在又水戸樣京都詰奥宮善四郎ハ衛門ト高倉家同

門之因アリシ也

水戸樣御家來菊池爲三郎梶與八郎ノ兩人今度御國表迷亂之儀ニ付　大納言樣へ歎願ノ品有之正月廿九日水戸出立間道ヲ越二月廿日若山へ參リ廿一日山中筑後守へ願書差出シ候處御取調ニ相成追テ仁井田摸一郎ヨリ達ニテ引取廿三日若山出立北野天滿宮へ立寄參詣序ヲ以來訪之由ニテ右兩人ヲ與宮喜四郎同道來訪此節家來躰ニテ西野彦助ト申モノ同行是ハ水戸樣郡奉行吉成又右衛門手付手代之由ト云々

又同六月廿一日ノ條ニ水戸樣御留守居鵜飼吉右衛門ヨリ衛門ヘノ書狀アリ曰ク

去月廿七日　少將樣（鶴千代樣ナリ）從三位中將御官位被　仰出候儀ニ付テモ別紙ノ通全　大納言樣厚御扱被成進被下置候趣藩中一同感涙ヲ流シ誠ニ難有奉存候云々

同藩共ヨリ申越候別紙寫

此度之御儀ニ付テハ　紀伊大納言樣御助成誠以難有次第ニ御座候正ニ御三家之御因トテ此事ニ可有之奉存候可秘〱

水戸家ヲ救フ

水藩ノ若山へ密行之事ハ其當時信水戸ノ客臣日下部伊三次ニ江戸我善坊ニテ面シ該密行哀願ノ情狀ヲ聞得シ事アリ蓋シ西野彦助ハ此伊三次ナリシカ哀願ノ主旨ハ聞洩シタレトモ全ク山中筑後守へ差出タル願書ヲ御採納翌二月二十二日御發駕江戸御着輿之上莫府へ御請願アリシモノナラン公ノ水戸家ニ盡サセ給ヒシ事察シ奉ルベシ

德川十五代史ニ水戸齊昭卿ノ罪ヲ得タル紀伊治寶卿其冤ヲ辨センコトヲ謀ル因テ解クコトヲ得タリ世之ヲ稱スト記セシハ當公ノ事ヲ誤記シタルナルベシ

江戸城炎上

五月、江戸城火、獻金及材若干

一五月十日御本丸炎上　公方樣西丸へ御立退

諸侯上納

同月十八日御領分立木之分檜尺以上之分有之候ハヽ取調候樣御勘定奉行戶川播磨守ヨリ書付出
同月廿二日御三家方始御普請御手傳ハ不被　仰出候得共万石以下之面々五百俵以上之分百俵ニ付金壹両三分之割合ヲ以テ上納被　仰出
六月十六日御本丸御普請ニ付此御方御仕出木之內檜平割等御差上之儀被　仰立之通被成御上候樣被　仰出翌巳年三月御献木御材木石奉行へ納方相濟
大納言樣一位樣ヨリ御道具御献上被遊
大納言樣ヨリ大御番頭一位樣ヨリ大組江戶ヘ御差下御使相勤

孝子

一六月六日名草郡舟渡村左七母ニ孝行ニ付鳥目五貫文ヲ賞賜ス

和蘭使節上書

一七月二日和蘭使節長崎湊ニ着上書交易ヲ請フ
蘭船乘組人數三百二十二人九州ノ大名兵ヲ發シテ警備ス八月蘭人上ル所之書ヲ公示セラル其大意ハ宇內ノ形勢大ニ前日ニ異ナルヲ以テ今猶外交ヲ拒マハ必敵ヲ設クルノ患アラン宜シク外國ヲ待ニ寬優ヲ以テシ永ク日本ノ爲ニ平和ヲ計ランヿヲ告ク且國王ヨリ獻品若干アリ
九月十一日長崎奉行ニ諭シ蘭人之上書ヲ受取返翰ハ是ヨリ回答スル旨ヲ以テ國ニ歸ラシム使節命ヲ聽テ發シ去ル

幕府回答

翌弘化二巳年六月御老中連署書ヲ和蘭政府ニ贈リ其請フ所ヲ拒絕ス此時長崎在番加比丹ニ諭告文左ノ如シ
私國往古ヨリ海外ニ通商スル諸國少ナカラサリシニ四海太平ニ治マリ法則ヤヽ備リ朝鮮琉球ノ外ハ信ヲ通スルヿナシ貴國ト支那ハ年久シク通商スルト雖モ信ヲ通スルニハアラス而シテ去秋

千駄ヶ谷
四ッ谷地
替

改元

漂流人善助

貴國王ヨリ書簡ヲサシコシ候ト雖モ厚意ニメデヽ夫カ爲ニ答レハ信ヲ通スルヿニシテ祖宗ノ嚴禁ヲ犯ス是我私ニアラス故ニ返簡ノ沙汰ニ及ヒガタシ然リト雖モ多年通商ノ好ヲ忘レス衷誠ノ致ス所悦喜之ニ過キス其懇志ノ程聊會釋ニ及ハサレハ禮節ヲ失ヒ且誠意ニ戻ル依之其重役ヘ書ヲ贈リテ其厚ヲ謝ス又品々贈越セシト雖モ返簡ニ及ハサル上ハ受納シガタシ然レ𪜈厚意ノ黙止ガタキ故其意ニ任セテ納メ止ム就テハ是ヨリモ會釋トシテ國産ノ品々贈リ遣スナリ然レハ後來必シモ書簡ヲサシコスヿナカレ若其事アリ𪜈封ヲ開カスシテ返シ遣スベシ正ニ禮ヲ失フニ似タレ𪜈何ソ一時ノ故ヲ以テ祖宗歴世ノ法ヲ變スベケンヤ爰ヲ以テ他日再ヒ言ヲ費スヿナカレ此度書簡相贈リ候テモ其返簡モ堅ク無用タルベシ此旨能心得本國ヘ申傳フベシ

一九月廿六日四ッ谷鮫ヶ橋北臺御使番戸田能登守屋敷七百坪余ト此御方千駄ヶ谷御添地七千四百坪ノ内三百坪同人ヘ小切坪御相對替相濟

一十二月廿二日弘化ト改元

一十二月廿七日於長崎奉行所漂流人紀州口熊野周參見浦百姓久五郎悴善助ヲ受取出張之者ヘ引渡サル

善助ハ十五歳之比ヨリ攝州兵庫中村屋伊兵衛方ヘ奉公シ同人所持之船千石積榮壽丸沖船頭トナリ天保十二丑年八月酒砂糖等諸品積入奥州南部ヘ廻船之途中十月十二日常州いぬほ沖ニテ難船乘組十三人ト共ニ漂流翌寅年二月外國船ニ助ケラレ七人ヲ別チ亞國かりほるにやヘ上陸セラレ夫ヨリ所々遍歴同年十一月出帆十四年二月清國廣東嶼門ヘ送ラレ又乍浦ニ至リ同年十二月三日

唐船ニテ出帆同月廿三日長崎ニ被送歸朝即日揚屋入被命吟味之上出牢本記之如ク紀州ヨリ受取出張員ヘ被引渡翌巳年正月廿三日無事若山ヘ歸着シタル也則周參見浦彌市ハ同船之者ニテ彌市ヨリ先タチ歸朝セリ事ハ明年四月ノ條ニ記ス

弘化二年乙巳　　公四十五歳

米船舘山浦賀に着

一二月十七日阿米利加船安房舘山ニ着我漂民ヲ送致シテ去ル

三月ニモ米船浦賀ヘ入港漂民ヲ送致ス向後長崎ノ外來航スベカラサル旨ヲ諭シ歸帆セシム

英船渡來

五月十五日英船琉球ニ來リ迫リ請フ處アリ

七月三日英船又長崎ニ來ル薪水ヲ與ヘテ去ラシム

三月東覲

一二月廿二日御參府シテ若山御發駕

御道中天瀧川出水ニテ二日御見合三月九日江戸御着座

一同月廿八日御本丸御造營出來ニ付　公方樣西丸ヘ御移徙御道具御獻上被遊

紀伊名所圖繪後編新撰

一三月廿日紀州名所圖繪後編新撰被　仰付

左之通夫々ヘ達シアリ

一御國名所圖繪後編新撰之儀御勘定奉行ニテ取扱候ニ付寺社舊記神寶等取調之品ニ寄其許ヘ申談候ハヽ行屆取調可被申談旨伊達藤二郎ヘ

御國名所圖繪後編新撰之儀加納兵部ヘ爲取扱候筈ニ付右撰述之品ニ寄難取極儀モ有之節ハ其許

へモ可申談旨爲相達候間申談候ハヽ可被及相談旨仁井田撲一郎へ

大御番格歌學　本居彌四郎

紀州名所圖繪後編新撰之儀加納兵部へ爲取扱候筈ニ付右撰述ノ品ニ寄難取極儀モ有之節ハ可申談旨兵部へ相達候間申談候ハヽ了簡之趣可申合事

御勘定公事方獨禮小普請持格　神野部

紀州名所圖繪後編新撰ニ付右撰述加納兵部へ爲取扱候筈ニ付當分右調筋御用同人へ申合兼相勤可申

伊竹養子和學　加納兵部

紀州名所圖繪後編新撰ニ付右選述可相勤

同人

紀州名所圖繪後編新撰ニ付撰述之品ニ寄難取極儀有之節ハ仁井田撲一郎本居彌四郎へ可申談

京都町醫師　菱川彦三郎

紀州名所圖繪後編新撰ニ付右御用筋相勤可申事

御勘定組頭

御國名所圖繪後編新撰被　仰出候ニ付右御用向諸拂元ニ成取扱可申

御勘定見習御勝手方　吉田庄大夫

御勝手方書役　愛宕直吉

御國名所圖繪後編新撰被　仰出候ニ付右御用向受拂元掛之儀御勘定組頭ニテ取扱候ニ付右御勘定合之儀行屆相勤可申

同年六月廿五日

紀州名所圖繪後編新撰之儀加納兵部ヘ爲取扱候ニ付手行之品ニ寄其許ヘモ可申談旨爲相達候間取調之儀等申出候ハヽ行屆可被申談旨山中篤之助御勘定吟味役ヘ口達

大御番　小出平九郎

當分紀州名所圖繪後編撰述方ヘ罷出認物等手傳可申

伊竹養子　加納兵部

紀州名所圖繪後編新撰取扱ニ付手行之品ニ寄取調之儀等山中篤之助ヘモ可申談

以下小普請　水崎槌之助

當分紀州名所圖繪後編撰述方ヘ罷出認物等手傳可申

按スルニ紀伊名所圖繪ハ先キニ若山書林帶屋伊兵衛ナル者（高市志友ト稱ス）私費ヲ以テ編集文化九年十卷ヲ發行後伊兵衛死亡中絕ス然ルニ尙遺漏少カラサルヲ以テ天保年間加納諸平之ヲ補遺シ同三編七卷ヲ撰述天保九年發行序ハ右大辨菅原總長之ヲ筆シ書ハ小野廣隆ナリ而シテ本年本記ノ命アリ是　舜恭公ノ內旨ニヨレルヨシ後編六卷嘉永四年四月完成發行序ハ紀伊國造紀尙長畫工ハ小野廣隆及ヒ京都法橋西村中和浪華上田公長トス是ニテ前後通計二十三卷和歌山初海部名草伊都那賀有田日高之六郡及高野山之事等、悉ク備ハル唯牟婁郡即チ両熊野之分ハ遂ニ嗣出ニ至ラザリシ廣隆後岩瀨魯七ト稱シ藩之畫官ニ召出サレタリ

一五月廿七日百三歲之者ヘ御賞被下

日高郡南塩屋浦彌助母イヤ

當年及百三歳候處健罷在此度　兩御殿へ被爲　召候ニ付格別之譯ヲ以年々銀三枚被下

大男生月

一六月十一日大男生月鯨太左衞門ヲ召シ御庭九十間馬場ニオイテ御覽御家中一覽ノ爲メ邸中ヲ巡回セシム頭塀障ノ上ニ出タリ

一六月十九日御老中阿部伊勢守ヨリ　御三家方於殿中諸大名へ御逢之儀四品以下へハ御逢御斷可然トノ儀申上ル

鶴樹夫人御逝去

八月十日鶴樹夫人薨

一八月十日御簾中樣御逝去

昨九日御所勞御大切ニ付　公方樣右大將樣ヨリ　上意御諚有之

御逝去ニ付　公方樣右大將樣ヨリ爲御悔　上使御老中被進

右ニ付一位樣爲御伺御機嫌御手許ヨリ御使御側大野藏人御差登

八月廿三日若山着西濱御殿へ罷出相勤

八月十一日　公方樣御香奠白銀三十枚右大將樣ヨリ同廿枚御簾中樣ヨリ同五枚御拜領

八月十四日　公方樣右大將樣ヨリ御喪中爲御尋御拜領物遊被

一九月四日來春御暇可被　仰出處　公方樣思召之御旨モ被爲在來年ハ御暇被　仰出間敷旨被　仰出

將軍御立寄

十月十八日將軍臨赤阪邸

一十月十八日　公方樣吹上御庭へ被爲成夫ヨリ赤阪御本殿へ御立寄被遊同夜五時過還御御拜領物有之

千駄ヶ谷御添地相對替

國政行屆に付御馬拜領

孝子

仁孝天皇崩御

孝明天皇踐祚

右御立寄御内意ハ當五月被　仰出タルナリ御立寄相濟候爲御祝儀十一月朔日於若山御目見已上惣登城謁有之

一十一月十九日千駄ヶ谷御添地之內ヲ以四谷仲町小普請山口大助御徒押小森新助拜領屋敷切坪御相對替相濟

十二月將軍使執政下野守青山忠良、賞美政、賜馬

一十二月廿三日　上使青山下野守ヲ以　御召之御鞍置御馬御拜領

上意書

紀伊大納言殿

兼々御出精ニテ國政向等萬端厚被行屆候故一位殿ニモ深ク安心被致候段被聞召御滿悅ニ被思召候依之御召之御鞍置御馬御使ヲ以被遣候

同月廿八日右御拜領之御馬ヲ御行列御先ヘ爲御率被遊度段被　仰立相濟

弘化三年丙午　公四十六歲

一正月十一日口熊野防已村代々帶刀人佐々木伊大夫母ヤサ姑ニ孝行ニ付鳥目五貫文ヲ賞賜ス

一二月六日

仁孝天皇崩御　實ハ正月廿六日ト云フ　同十三日

孝明天皇踐祚アラセラル

是春臥病　四月安藤飛驒守賜暇歸藩、老公召之也

一當春ヨリ御不例
當正月十日上野御豫參之節ヨリ少々御風邪氣之處一旦御快ク被爲入折節赤阪邊ニ夜分出火有之ヲ御二階ニテ御覽被遊御夜着御纏ヒ御用心乍ラ鎭火迄被爲入方御再感之御容體ニテ不被爲勝御內實三月五日御大切被爲及タル也

一二月廿一日　公方樣御初ヨリ御尋トシテ御拜領物有之三月廿九日四月四日ニモ同斷

一三月九日　公方樣ヨリ　上使御側岡部因幡守ヲ以テ御所勞御尋之　上意有之右大將樣ヨリモ右同人ヲ以御諚有之

一四月七日當四月和歌御祭禮可差延旨於若山被　仰出右御差延ニ付四月十七日若山御城初平服右御祭禮ハ九月三日ニ御執行有之

一四月廿日御所勞被成御座御機嫌伺謁モ有之儀ニ付御家中ニモ神妙ニ相愼可罷在候得共末々迄神妙ニ心得サセ候樣布達ス

一閏五月五日　公方樣ヨリ爲御尋　上使御側堀田紀伊守被進　右大將樣ヨリモ御諚有之右　上使ヘ左京大夫樣御出會

一同月六日御所勞次第ニ御疲勞御增不輕御容體
右ニ付　公方樣右大將樣ヨリ　爲御尋　上使被進御拜領物有之御簾中樣ヨリモ女中奉文ヲ以
被進物有之

一同月七日今卯上刻御差重リ被爲及御大切

右ニ付　公方樣右大將樣ヨリ　上使御簾中樣ヨリモ御使被進

漂流民彌市引渡

一四月廿五日於長崎長崎奉行井戸對馬守ゟ漂流人紀州口熊野周參見浦彌市ヲ受取之者ヘ被引渡

彌市ハ居在所ニテ船稼渡世之處同浦善助ト申モノ攝州兵庫中村屋猪兵衛船榮壽丸沖船頭ニテ酒砂糖等積入奥州南部ヘ可乘廻筈ニテ天保十二丑年八月廿四日周參見浦ヘ汐掛ノ節水主ニ被雇外他國人ト都合十三人乘組翌廿五日出帆十月十二日常州沖合ニテ難風ニ逢ヒ數月洋中ニ漂ヒ居翌天保十三寅年二月廿日比不見馴外國船ニ被助所々島々ヘ被送終ニ四月廿日比アメリカカルホルニヤノ内カボサンルカス又サンホセト申處ヘ被送翌卯年正月中旬比迄逗留同月下旬比同又マサトラント申處ヘ被送翌辰年三月中旬比マテ逗留同六月中旬比遂ニ清國澳門ヘ被送同八月中旬マテ逗留夫ヨリ所々ニ船繫リイタシ弘化二巳年二月十三日乍浦ヘ着船六月廿五日マテ逗留七月十三日唐船ニ護送サレ長崎ヘ無事入港シタルナリ夫ヨリ奉行所ニテ漂流之始末吟味ヲ受ケ於外國切支丹宗門ニ携リ不申見聞モ不致旨調印相濟タル處右彌市可引渡間受取之者可差出段於江戸御城附ヘ達ニヨリ紀州ヨリ御徒目付組頭江原澤右衛門御勘定公事方岩崎時十郎及ヒ附屬ノ者被遣同人ドモ本年三月廿九日若山出立四月廿三日長崎着本日彌市ヲ受取相濟五月八日一同長崎出立閏五月二日若山ヘ歸着シタルナリ彌市漂流中ノ記事及ヒ岩崎時十郎受取方始末書其他後日太郎兵衛善助彌市於江戸町奉行川路左衛門尉ヨリ尋ノ答書等委細筆記ノ者アリト雖モ長文ニ付略ス

一前記十三人外國人ニ助ケラレ後所々ヘ分レ分レニ成リ既ニ善助モサンホツセヨリ相分レ彌市ヨリ壹ケ年前ニ長崎ヘ護送セラレ歸朝ス此時若山ヨリ同樣受取之者出張ト雖モ筆記不存分リカタシ

一此頃御領民太郎兵衛トイフモノモ魯西亞領カミチヤツカヘ漂流長崎ヘ護送セラレ歸朝ト見エ後江戸ニテ川路左衛門尉尋之節太郎兵衛善助彌市ト三人出頭ノ答書アリ漂流之委細歸朝之年月等筆記不存分リカタシ

閏五月養清水中納言齊彊公爲世子八日公遂薨廿日柩發江戸六月十日歸葬於濱中長保寺諡曰顯龍公

薨去

一閏五月八日曉子下刻御逝去

清水中納言樣御養子被仰出

一同日以　上使清水中納言樣御事御養子被　仰出御遺領御相續

同月十日從　公方樣右大將樣　上使ヲ以御香奠被進御簾中樣ヨリモ御使ヲ以テ同斷被進

一同月廿日御遺體江戸御發棺東海道本阪越美濃路通御道中川支ニテ一日相延ヒ廿日振ニテ六月九

公の德澤

藩民の眞情

日紀州濱中村長保寺ヘ御着棺即日御葬送

御法號　顯龍院殿二品前亞相恭譲圓輝大居士

謹テ按スルニ公御治世滿貳十年也時　文恭大君之盛世ニ當リ天下拆擊鞁腹之太平ニ馴レ侯伯上ニ家格儀式ノ威嚴ヲ競ヒ士庶下ニ驕奢華侈ヲ誇ル　公ハ正シク大將軍之公子以テ三親藩ニ列セラレ幕府特殊ノ眷遇モ不少故ニ御威稜旭日之如ク一呼ノ御謦咳ハ殆ト他ヲ左右セラル丶者ノ如クアリシ左レハ自ラ諸範幕府ニ準シ華奢鄭重之風ヲ馴致シ湊御殿之搆造ハ一ニ大城ニ擬シ愛玩數千之珍禽佳鳥ハ鶴軒ニ乘ル之感ナキニ非ス左右之侍臣ハ百名以上之盛ニ及ヒ嬖臣恩賜之衣食什寶日ニ相續キ就中星野近江及ヒ三井臣（三井ハ正井鍋次郎松井鉒之進荒井鋼太郎トモニ御小姓頭取ナリ）之如キハ其最タルモノニテ威權亦之ニ伴フサレモ嬖臣强テ事ヲ取ルニ至ラス殊ニ後宮内寵ヲ遠ケラレシカハ執政府初メ行政之秩序ハ頗ル整然タリ公明敏聰達痛ク士ヲ愛セラレ數千之外臣一見能ク其面ヲ明別時トシテ見遇ヲ賜フ又御在府年ニハ苑中稲荷社秋葉社春秋之祭日ヲ期シ上下之別ナク群臣之子弟十五歳以下拜參ヲ許サレ鳳鳴閣廣芝ヘ親臨御放鷹乃至伏セ鶉扇揚ケ等アリテ子弟ニハ衛士勢子ヲ命セラレ眞先ニ馳付タル者ヘハ御手自扇子文具等ヲ賞賜シ給フ（今ノ旗取ノ如シ）畢テ數千個之蜜柑ヲ滿地ニ侍臣ト共ニ投與ヘ玉ヘハ羣集之小孩上ヲ下ヘト蹂躙轉倒狂スル如ク爭拾ヒ衣ヲ劈キ泥ニ塗レ泣クアリ笑アリ奇態万狀而シテ各兒滿嚢之獲物ニ恰モ鬼首ヲ得タルノ喜色アルヲ一興トシタマフ事常也之ヲ御投ケ物ト唱ヘ兒輩亦不可忘之快樂トナセリ惣シテ羣臣感戴之念鞏固ニシテ丙午之春御不豫ト聞シヨリ如何ナル微賤之徒モ無勤之子弟二三男モ期セスシテ四方之神社ヘ奔リ佛刹ニ禱リ特ニ目黒動ヘ日參春寒ニ裸體水垢離ヲ取リテ百回ノ祈願ヲナス者日ニ幾十百人ヲ知ラス然ルヲ終ニ薨セラレシカハ斷徒走卒ニ至ル迄實ニ考妣ニ喪スル如キ眞想ヲ呈セリ御德澤之民心ニ洽キ察シ奉ルベキ也

顯龍公 御簾中

豐姫君 舜恭公御內女 鶴樹院樣

御父 舜恭公 治寶卿

御實母 於佐衛 川上万之助女 榮恭院

天明元丑年三月四日生

文化十酉年閏十一月朔日御内證之御方ト江戸ニテ被 仰出

文政七申年九月廿七日御家督被 仰出ニ付御規定之通御部屋樣ト可稱旨被 仰出

嘉永二酉年十一月廿五日御卒去 十二月十日長保寺ヘ御葬送一位樣思召ニテ御忌日十一月廿三日ニナル

同年十二月廿八日一位樣思召之品被爲在向後樣文字ニ奉稱

御法號 榮恭院殿

寛政十二申年十月七日於若山御誕生同十三日御名被進

享和元酉年二月九日御色直御箸揃

同年六月十九日表立御名唱候樣被 仰出

同年九月十日御定金三百兩御内々被進

同二戌年十二月廿一日御髪置御内々岡之宮ヘ御參詣追テ御日取廿三日ニ成ル

同三亥年十一月十三日 公儀ヘ御弘メ

同四子年正月廿七日松平加賀守齊廣嫡裕次郎へ御縁組

文化二丑年二月廿八日江戸へ御下向トシテ御發輿三月十八日江戸御着

同年五月廿七日松平裕次郎於加州死去香隆院ト稱ス

同三寅年十一月七日御紐解御手習御物讀初

同五辰年十二月御水痘

同七午年三月廿五日御疱瘡四月七日御酒湯

同九申年十一月七日御鐵漿初御袴召初

同十三子年六月三日　式部卿様將軍家齊公御七男　御聟養子

同年十月朔日御定銀米貳百貫目貳百五拾石當年ヨリ被進

同年十一月廿八日　式部卿様御引移御結納被進御婚禮

同年十二月十一日御手前ニテハ御簾中様ト可奉稱旨　被仰出

同月十三日初テ八代蜜柑御拜領

同十四丑年七月七日御袖留御着帶

同年八月十八日曉御安產菊姫様御誕生

同年十月四日菊姫様御卒去

文政二卯年三月廿五日本御行列ニテ赤坂御屋敷へ被爲成

同七申年八月廿八日御名認方之儀　公儀ヨリハ御簾中ト調候旨此御方ヨリハ簾中又ハ御名ヲ認

候共御勝手次第ト　公儀ヨリ被　仰出
同十一子年三月十六日淺草觀音ヘ御參詣夫ヨリ向島邊ヘ被爲成
同十二丑年十二月十五日御小袱被爲召之儀前大納言樣彼是御世話被遊右御小袱從大納言樣被進
天保二卯年八月廿八日築地御屋敷ヘ被爲成
同十亥年五月二日目黑不動ヘ御參詣夫ヨリ祐天寺ヘ御立寄
同十一子年三月十八日築地御屋敷ヘ被爲成
同十四卯年閏九月廿一日ニモ被爲成
同年八月五日御本殿御普請追々御出來ニ付御撫物御裝束御本殿ヘ御移從式被爲整
同十二年二月五日御本殿ヘ歸御被遊
同年三月廿日　文恭院樣爲御遺物御小簞笥御拜領
弘化二巳年八月四日先頃中ヨリ御所勞之處兎角爾々不被遊次第御勝不被遊
同月五日　公方樣右大將樣御簾中樣ヨリ爲御尋女中奉文ヲ以テ御拜領物被遊
同月七日昨今別テ御不出來九日御差重御大切被爲及
右ニ付　公方樣右大將樣御簾中樣ヨリ御拜領物有之
同年八月十日曉子下刻御逝去 實ハ四日ナリ
同月十三日日光御門主樣ヘ眞如院ヲ以御法號御賴被遊
九月十四日曉七半時御供揃ニテ六時御遺躰 御火葬ニ無之 赤阪御殿御發棺東海道本坂越美濃路通御道

中十九日振ニテ十月二日紀州濱中長保寺ヘ御着棺同八日御葬送貞恭院樣ト御相廟

御法號　鶴樹院殿瑤光心明大姉

御靈屋　和歌雲蓋院　明信院樣御次ヘ御位牌御安置

九月晦日大奥ヘ御位牌御安置

十月廿八日上野眞如院ヘ御位牌御安置

顯龍公御子孫一覽表

（御血統ヲ揚ク「」內ハ御養子）

御子

菊姫　早世　瓊淳院　御本腹

相幻院　流產　同

心淨院　早世

庸姫　早世　瓊珠院

幻成院　流產

清影院　流產

明元院　流產

伊曾姫　早世　神光院

「齊疆公」　實淸水中納言　憲章公

菊千代君　慶福公　昭德公

齊疆公ハ南龍公第七世之御血統　菊千代公ハ第八世之御血統也其畧左之如シ

南龍公―清溪公―有德公
- 家重公 九代將軍 ― 家治公 十代將軍 ― 家齊公 十一代將軍
- 宗武卿 田安右衛門督
- 宗尹卿 一橋刑部卿 ― 治濟公 一橋民部卿 ― 家齊公 將軍家治公養君
- 御七男 齊順公 舜恭公御養子 顯龍公 ― 清水式部卿 ― 菊千代公 慶福公 憲章公御養子
- 御廿一男 齊彊公 憲章公 ― 清水中納言 顯龍公御養子

顯龍公公子譜略

菊姫君 早世 瓊淳院

御母　御簾中豊姫様

文化十四丑年八月十八日御誕生

即日　公方様ヨリ爲御歡上使御側巨勢日向守被進

同月廿八日御名被進御七夜御祝儀御整

同年十月四日御卒去

同月十八日谷中龍王院 護國院事 へ御葬送

御法號　瓊淳院光粲乘誓大童女

相幻院君 流産

御母　御簾中豊姫様
文政元寅年五月八日御流産千駄ヶ谷寂光寺ニ葬
御法號　相幻院淨諦一夢

心淨院君　早世
御實母　於留井　三毛氏
文政八酉年五月廿九日於江戸御誕生
同年六月二日御卒去谷中龍王院ヘ御葬送
御法號　心淨院智證妙諦大童女　御位牌上野眞如院

庸姫君　早世 鬘珠院
御實母　公儀小普請組神尾豊後守支配松前幸之進姉於八十
文政十一子年五月廿三日御誕生
同年六月朔日　前大納言様ヨリ御名被進御七夜御祝儀御延引
御名順　大政所様御次ト相成
同月二日 實朔日 御卒去同六日谷中護國院ヘ御葬送
御法號　鬘珠院蘭室妙薫大童女

幻成院君　流産
御實母　於コト

文政十二丑年七月十日流產千駄ヶ谷境妙寺へ葬
御法號　幻成院圓巖實空大童子

清影院君　流產
御實母　於八十
天保三辰年五月十二日流產千駄ヶ谷寂光寺ニ葬
御法號　清影院淨空圓實大童女

明元院君　流產
御實母　於ルキ
天保七申年二月十九日流產千駄ヶ谷境妙寺ニ葬
御法號　明元院香陽淨滿大童女

伊曾姫　早世 神光院
御實母　於ミキ　御家中松平六郎右衛門女
天保十四卯年八月廿八日於江戸御誕生
同年九月十一日御名被進思召有之表向御弘無之
御簾中樣御養被　仰出
同年十二月六日御內々御箸揃
同十五辰年十月二日申上刻御卒去

同月十三日谷中護國院ヘ御葬送

御法號　神光院智燈照曜大童女

天保十五辰年十二月廿三日上野住心院ヘ御位牌御安置同院ヘ御佛供料年々銀三枚被遣

中納言公　齊彊卿 憲章公　實將軍文恭公（家齊公）廿一男

弘化三午年閏五月八日顯龍公御養子委細御本記ニ詳也

菊千代公　御遺子慶福卿 昭德院殿　後公儀御相續將軍家茂公御事

弘化三午年閏五月廿四日御遺腹ニ御誕生

同四未年四月廿二日憲章公之御養子委細御本記ニ詳也

南紀徳川史巻之十九

清水家中御事歴

憲章公

諱齊彊（荀子民齊者彊　大學頭林衡撰）　御幼名恒之丞後清水宮内卿　顯龍公御養子

實將軍家齊公（文恭公）御廿一男

御實母　公儀御先手吉江左門女於袖之方　本性院殿

天保元寅年三月八日　死去淩雲院へ納ル

弘化三午年八月二日御位牌住心院へ御遷座

同四未年七月五日一位樣（舜恭公）思召之品有之向後樣ト稱ス

御簾中（充君　近衛内大臣左大將忠凞公姫君　觀如院殿）

御譜別ニ記ス

一文政三庚辰年四月廿八日御誕生

一同年七月十七日御色直同八月廿九日御箸初

一同五壬午年十一月廿八日御髪置

一同六癸未年正月七日御疱瘡

一同七甲申年十一月十五日御袴着

一同八乙酉年七月廿八日御臺樣御養

一同十丁亥年九月五日清水御館被進
一同年十月十五日御領地拾萬石被進濱町芝高田御屋敷其儘被進
一同年十一月廿三日清水御館へ御移徙
一天保四癸巳年十二月四日御元服御官位從三位左近衛權中將ニ御任叙宮内卿齊彊ト被稱
一同六乙未年六月廿八日近衛内大臣忠凞公姫君御縁組
一同年十一月廿七日御前髪執
一同七丙申年十一月十一日御痲疹
一同八丁酉年八月廿三日宰相御任官
一同十己亥年十一月廿七日御婚禮
一同十一庚子年十二月四日中納言ニ御任官

弘化三年丙午　公二十七歳

閏五月八日、入永顯龍公後、

一閏五月八日以上使大納言樣 齋順公 御養子被　仰出御遺領御相續被　仰出
同日今日ヨリ定式之御忌服御請被遊候樣御引移之節御簾中樣御一同御引移被遊候樣ニト公儀ヨリ御書付出ル
一同月十五日御朦中爲御尋　公方樣右大將樣ヨリ上使御側衆ヲ以御拜領物有之同廿二日同廿八日ニモ同樣御尋シテ　上使ヲ以テ御拜領物アリ

一六月三日御差圖之上御登　城於御座之間　公方樣へ御對顏御養子御相續之御禮且　顯龍院樣御逝去ニ付段々之御禮被仰上夫ヨリ西丸へ御登　城右大將樣へ御禮被仰上淸水御屋敷へ歸御被遊

一同月九日御忌解　公儀ヨリ被　仰出

一六月朔日先年一位樣ヨリ顯龍院樣へ御讓被遊候塗捧引戶惣網代御駕籠御用被遊度御內談サセ被遊候處向後平常御用御品ト御取交被成候儀不苦旨被　仰出

赤坂御本殿へ御引移

一同月十一日中納言樣御簾中樣御一同赤坂御本殿へ御引移鋧姬樣ニモ女中へ御籠ニテ御引移

本日淸水御屋形ヨリ平川口通奧向へ御登城於大奧　公方樣へ御對顏御盃事有之御刀御脇差其外品々御拜領右大將樣御初ヨリモ御拜領物等有之御退散ヨリ赤坂御本殿へ御引移被遊

一同月廿二日御引移爲御祝儀御年寄初當番詰合末々迄　中納言樣一位樣御相合ニテ御酒被下有之

一七月九日御相續之御禮被爲受

七月七八日和歌山近在大水紀ノ川出水壹丈七尺

芝邸拜領

七月、賜江戶芝浦淸水別邸、

一七月十三日御願之通芝海手淸水御下屋敷家作共其儘御拜領被　仰出

右御屋敷芝御屋敷ト唱候事

和歌山城雷火

是月、府城天主閣雷火、

一七月廿六日申之刻比和歌山御城御天守幷御櫓向等雷火ニテ燒失

此時第一番ニ馳着ケ拔羣ノ働シタルハ御召御具足奉行松島杢之助也同人之覺書ヲ左ニ掲ク

維時弘化三年丙午七月廿六日役所出勤八過比退出松平九郎左衛門宅へ立寄候處釜掛ケ有之宮地久右衛門並出入町人辻屋安大夫松屋金兵衛ナル者參リ咄居內天俄ニ掻曇リ雷鳴白雨降リ雷嚴シ席中只顏ヲ見合居候處就中肝ニ答候強鳴有之席內久右衛門ハ東向我ハ北向町人兩人ハ西向ニ着座自分ハ椽ヲ跡ニ致シ居外三人ハ申ス樣只今ノ雷ハ御天守之圖ニ落タト見エ火柱立候ト申先岡山カ鹽道邊ナルヘシト色々咄居內雨モ穩止ミ九郎左衛門家來申樣「七時比ナリ」御天守ヨリ細キ煙立候ト申ス座中一統見上ケ候處御天守ノ艮角ヨリ細キ煙立登ル是只事ニ非ラスト直樣御天守へ走リ「辻屋安大夫ハ長坂へ注進松屋金兵衛ハ朝倉へ注進サス」當番之同心へモ爲知イカニモ仕方モアラント駈付ル御城五段ノ所ニテ心付押番所ノ御小人目付ヲ呼姓名ヲ申シ當番ノ御徒目付へ右之趣早速可申我ハ御本丸御天守當番ノ同心へ知ラセ常番へ申合何卒消防方モヤアラン且ハ兼々畏リ居ル御大切之御道具持出シ度ト存込御臺所前御門內御本丸同心番所へ右ノ段申聞候處當番同心森周藏ト申者仰天シ其儘山上へ駈上ル其內當番之御徒目付石井吉郎兵衛走リ參リ御山へ同道ニテ走リ上ル內朝倉三之丞モ參リ御天守同心番所ニ有之鍵ニテ御天守ヲ明サセ居內長坂學彌走參リ三之丞差圖ニテ早鐘撞カセ其內我ハ一之御重へ駈登ル學彌三之丞續テ參リ一ノ御重へ登リ候處如何成大變ニヤ艮角板張ノ所ヨリ巾一間程ノ猛火燃上ル御長持二棹其際ニアリ煙ハ強ク所詮消防方ハ無シ如何ト案シ先祖累代御厚恩ヲ戴キ今太平ノ御代ナレハ爰ニテ聊成共働キ君恩ヲ報シ奉ラハヤト煙之中へ飛込長持引摺リ段ヨリ突落ス二ノ御重ニ學彌三之丞兩人聲ヲ掛ケ持出ス今一ツ御長持ヲモマンマト突落ス是又兩人持出ス一息繼キ一ノ御重ヲ見廻シ候處長キ箱アリ半分火ニ成リアル是一ツ殘ス事心外ト又々飛込引摺出シ下へ投落ス則兩人持出ス折柄段口へ參リ上ヲ見廻シ最早外ニ持出ス物モ無シト少々心弛ミ候哉三段斗リ踏外シコロビ落チ足ヲクジク二ノ御重へ下リ候處段之際ニ三尺四方位之箱二ツ有リ手ヲ掛ケ見候得共中々重ク其儘ニ差置其內御役人向駈付御道具持出ス追々火勢盛ニ成リ二ノ御重モ火トナル自分御預御藏心元ナク下リ來リ候處仲間藤本五兵衛初手代陸尺其外御用達之町人共走リ付罷在夫ヨリ御藏御道具持出ス自分ハ足痛歩ム事不相成依テ五兵衛ニ任セ指揮ノミ致シ居ル其內頭取中由比楠左衛門稻葉彌左衛門參リ筑後守殿ニモ御大切ノ御道具故厚ク御世話被成御別條無ク持出シ候哉ト被問最早不殘持出候旨相答少シ安心致候得共口乾キ物言事不成水ハ遠シ彼是之內伊達藤二郎參リ何カ水入レ候物ニテ息繼ニ一口呑候樣申候ニ付呑ミ夫ニテ咽喉潤ヒ御役人向且外々へモ答出來爰ニテ漸ク取寄セ有之火事羽織ヲ着ス其所へ野口將監來リ火勢強ク此御藏へ火移リ候ハヽ二ノ丸御氣遣之段筑後守殿御世話故取切可申何等料簡無之哉ト申ニ付先見合呉候樣答置九兵衛ニ其趣ヲ談候處風筋モ能ク今暫ク見合度トノ答引續宇佐美多右衛門參リ將監同樣ニ申ニ付此方モ同樣ニ答多右衛門申スニハ氣遣ヒ無キカト押シ候故火勢ノ儀受合ハ得不申何分今暫ク見合呉候樣申切ル彼是之內東風ニテ先御藏ハ氣遣無ク相成其內痛所強張リ股迄ハレ一寸モ歩事不叶無餘儀其段頭取中島勘兵衛へ斷置陸尺ノ肩ニ掛リ

八時比引取曉方一位樣ヨリ御藥頂戴仕候事

一同廿七日前顯之通ニ付一統詰切自分モ駕籠ニテ出勤ス前夕持出候御道具類詰所ヘ入交候故夫々取調候處無御別條御藏ヘ納置最早鎭火故引取可申哉ト頭取中迄申出候處御大切ノ御道具藏殊更火元近所故今暫ク晝夜〆切不申樣相心得可申被答候事尤日々火事羽織着

一同廿八日昨日ノ通今日モ一統詰切ル自分ハ痛所故日々駕籠ニテ出勤夜分ハ五兵衛ニ賴置キ引取御燒失跡ヘ水運ヒ候有樣昨今同樣ナリ

一同廿九日昨日ノ通晝夜詰切候處一位樣思召ヲ以テ一統ヘ御酒御鮓被下置候事

一同晦日昨日ノ通晝夜詰切候處八時比最早引取可申旨表御用部屋ヨリ通達有之候事

右ニ付今日ヨリ八日ノ內斗リ打廻リ候樣達有之今日ヨリ平服ノ事

一八月朔日晝ノ內打廻リ候處別條ナシ

一同二日御燒失御場所爲御見分御年寄衆御登山被成候ニ付御藏張候樣昨日御用人中ヨリ被達候ニ付出勤ノ事九半比相濟引取

一同七日筑後守殿御燒失御場所御見分被成候ニ付二日ノ通一統出勤候處表御用部屋ヘ罷出候樣申來候ニ付罷出候處柘植傳次郎方左之通リ申渡シ御菓子頂戴仕候事

此度御天守御火災ノ節相詰以來モ骨折相勤候ニ付詰合之御目見以上ヘ御菓子被下之御目見以下ヘハ支度被下之

大饅頭十羊羹六紅的四

右杢之助五兵衛頂戴

押拔キ五ツ、竹輪崩麩千瓢御酒

右手代御具足師陸尺頂戴

一弘化四年丁未八月廿日左ノ通主水殿於御詰所被　仰渡

白縮緬三端ツヽ　長坂　學彌

朝倉三之丞

白銀三枚　八丈縞二端　松島杢之助

去年御天守御火災ノ節早速罷越御天守ニ御納有之御大切ノ御道具持出候ニ付格別之思召ヲ以テ御內々被下之

八月廿日

三所物（柳ニ燕色繪）　長坂學彌
同　（茗荷色繪）　朝倉三之丞
同　（黑木櫻色繪）　松島杢之助

一位樣ヨリ同御文言ニテ被下之

右渥美源五郎申渡之

右之通認置候我元來文盲ニテ文事ニ疎ク文ニ綴ル事不能依テ只覺ノ儘俗文ニ記シ置モノ也子孫文武ヲ學ビ忠勤ヲ勵シ人ニ後レヲ不取樣相心得武名ヲ不穢事肝要也

松島杢之助記之　四十三歲

按スルニ天下ニ有名ナル加藤清正所持題目之旗大身、十文字（俗ニ片鎌ト云フ）ノ二槍モ御天守一ノ重ニ御秘藏也シガ蓋シ杢之助ノ働ニヨリテ永ク世ニ傳フル所トナリシナラン此ノ三品ハ金幣御馬標ト共ニ維新後上野博物館ヘ納メ給ヒ今同館ニ陳列セリ

一又此天災ノ事ヲ時ノ表御用部屋勤吉田又右衛門筆記ノ者アリ左ノ如シ

一弘化三丙午年七月廿六日午后西方ヨリ黑雲起リ暫時ニテ闇夜ノ如ク相成雷鳴甚敷目方二十匁斗リノ雹交リ強雨篠ヲ衝カ如ク稍有テ雨止ミ早鐘撞御天守御火災ニ付御書物方頭取栢植傳次郎由比楠左衛門初御用人一統登城ノ上御目付ヘ申合諸御門々嚴重ニ取締申付サセ諸役所勤且奥中奥其外御城内ニ御藏等御預リ場所有之向之外ハ猥リニ出入ヲ免サス嚴敷取調サセ候事

一表御用部屋勤ノ面々ハ湊御殿御役所ヨリ退出ノ途中早鐘ニ付直樣登城致シ候處御天守ヘハ平常御書物方勤之外ハ罷越候儀不相成候ヘ共御火災御場所人少ニ付御書物方頭取ノ差圖ニ依リ一統登山御天守近邊ノ御藏々御道具向取出ノ手傳致シ候事

一火勢追々盛ニ相成小天守ヘモ火移リ二ノ丸氣遣ノ旨申越候ニ付二ノ丸ヘ罷越御帳類ヲ初メ御道具向一之橋角御櫓ヘ持運ヒ候事諸役所御帳類等モ右御櫓續之御塀際ヘ積置夫々ヨリ番人附置有之候事尤万一之節ハ御堀ヘ投込候御趣意之趣

一二ノ丸ヘハ火ノ粉夥敷落來候程心配之處夜ニ入東風ニ相成候ニ付心弛ミ候故一統大ニ勞レ加ルニ表御用部屋ノ面々ハ廿七日書辨當後曉七ツ時比迄働キ候ニ付空腹ニ相成夜明比ニハ一歩モ步行難相成皆々倒レ候ニ付俄ニ焚出爲致候テ漸ク人心附候事但夫々宅ヨリ辨當差越候筋モ有之候ヘ共御門々堅メ嚴敷容易ニ出入難相成候ニ付本行ノ通也

一消防夫人少ニ付町奉行計ラヒニテ市中造酒屋ニテ働居候者不殘呼出シ御堀ノ水ヲ爲運候此者等ハ格段目立相働候ニ付水ノ

從二位大納言

朝廷初て外交を沙汰す

手ハ十分有之候ヘ共何分高キ御天守ノ事故消防難致候事翌日モ運ヒ居候ニ付御堀ノ水ハ三尺餘モ減候事

一大御番頭初頭々ハ組下御人數引纒メ夫々持場或ハ御門嚴重ニ相堅メ御城內ヘハ御役人ヨリ差圖無之向一圓出入不爲致格段嚴重ニ有之候事

一翌月廿七日夜明候ハヽ御玄關前初所々ニ道具落有之諸役所且御藏預ノ輩取集夫々片付候事但燒失ノ外ハ紛失品無之候事

一御天守ハ御屋根幷壁不殘落候テモ木品丈夫ニ付其儘燃居朝方迄火ノ天守ニテ實ニ絕言語候次第ニ候事

一火災之節東風ニ相成候節ハ雜賀町ヨリ東長町田邊町邊迄火之粉雨ノ如ク飛來リ餘程狼狽致シ候由

一御火災ノ夜ハ丸之內外市中ハ何レモ見物人夥敷近在ヨリモ追々馳來リ餘程混雜致シ町方ヨリ制止方骨折レ候由

一御燒失御藏ノ內玉御藏ハ鉛沸候テ御藏丈ケノ一枚鉛出來兩三日ハ側ヘモ不近寄其後一尺角程ニ切取日數一ケ月餘モ切取居候事

一御燒失御場所ハ諸役人向幷御天守番之頭同常番御徒目付等日々詰切差圖致シ表御用部屋ヨリハ認物勤茂田一次郎吉田又右衛門御燒失御場所ヘ罷越行屆相勤候樣達ヲ受晝夜罷越御用相勤候事

一其後折々筑後守殿初年寄衆御見分有之一位樣ヨリモ御附ノ衆折々見分ニ罷越日々ノ樣子委敷申上候趣

八月敍從二位任大納言

一八月十一日御登　城於御座之間御對顏　上意ヲ以テ被爲任從二位大納言旨被　仰出

同月十五日御官位之御禮被仰上御對顏相濟候上戶田山城守御昇進被仰出候御趣意御直ニ申上ル

一同月十二日當年御國元ヘ御暇難被仰出旨被　仰出

去年顯龍院樣御暇之儀被　仰出御同樣ノ御趣意ニ有之候旨也

一同月廿九日　朝廷初テ外國之事ヲ　幕府ヘ御沙汰被　仰出

武家兩傳奏京都所司代ヘ行向左ノ通被　仰出

近年異國船所々ニ相見候趣風說內々被聞召候乍併文道能備武備全整候時節殊ニ海岸防禦堅固

ノ旨被聞召候間御安慮候得共近比其風聞屢彼是被為掛　叡慮候尙此上武門ノ面々洋蠻之事不侮小寇不畏大敵籌策ヲ立神州之瑕瑾無之樣御指揮候テ深可奉安　宸襟候此段宜有御沙汰事

右ニ付十月三日京都所司代酒井修理大夫忠義ニ命セラレ外國船琉球浦賀ニ來リ互市ヲ乞ノ事情ヲ　朝廷へ御奏聞アリ是外國之事ヲ　朝廷へ御奏聞ノ初ナリ近年外國船ノ出沒漸ク頻繁ニ至リ

四月以來の外船

本年四月以來ノ景況左ノ如シトス

一四月五日英船琉球ニ來リ佛船モ亦至ル共ニ迫リ請フ所アリ

一五月十一日佛船琉球ニ於テ互市ヲ乞フ米國人七人東蝦夷エトロフ島ニ漂着

一閏五月廿二日三奉行大小目付林大學頭等ニ命シテ外國船防禦處分ノ策ヲ議セシム此時歐米ノ交易益盛ニシテ東西航路益々開通スルヲ以テ外國ノ事情ヲ知ル者多ク皆鎖國防禦ノ容易ナラサルヲ覺ユ是ニ於テ始メテ此議ヲ下ス然レ共諸有司中皆舊法ヲ守リテ攘斥スヘキコヲ唱フル者多シ

一同月廿七日米國軍艦浦賀灣ニ來リ互市ヲ乞フ松平大和守　松平下總守各兵ヲ發シテ海岸ヲ警備ス

一同月廿九日松平修理大夫齊彬（薩州）ニ命シテ歸國セシム琉球國ニ於テ佛英二國互市ノ事ヲ處理セシム暗ニ其私ノ交易ヲ許シテ內地ニ迫ルノ急ヲ舒ントス

一六月五日浦賀奉行米人ニ諭シテ國禁ヲ示シ互市ノ乞ヲ拒ミ引還ラシム七日米人發シテ去ル

一是日佛國船長崎ニ來リ書ヲ長崎奉行ニ致シ爾後佛人ノ漂到スル者ヲ保護アランコヲ乞フ九日

發シ去ル

一同月廿一日蘭西船舩付小銃鉄砲軍艦ノ小樣ヲ齎シ來ル

一同月廿八日丁抹國船浦賀灣ニ入リ明日去ル

一八月廿三日英船三隻琉球ニ來リ上陸又海中ヲ測量シテ去ル

一九月十一日此度之御祝儀御含ニテ奥御能被　仰付

獻上物六ヶ年用捨

一十一月廿日御獻上物猶又來未年ヨリ來ル子年迄六ヶ年御用捨被　仰出

一十二月四日四谷御門外小普請石原定五郎上ヶ地之内ト千駄谷御添地ノ内ト御引替御願之通相濟

天守再建

一同月十日御天守御再建御内意

一位樣御沙汰ニヨリ左ノ趣御家老ヨリ奥掛御用人御勘定奉行御目付へ達ス御天守御再建之儀公邊へ被仰達有之右御達相濟候ハヽ御普請御取掛ラセ之筈ニ付先無乾度右ノ趣心得サセ可然向へ心得サセ之儀宜被取斗事

弘化四年丁未　公二十八歳

千駄谷添地相對替

一二月十八日麴町三丁目北横町小普請永井勘九郎拜領屋敷ト千駄谷御添地之內ト御相對替御願之通相濟

外船松前に入る

一三月廿日外國船松前ニ入リ平舘村ニ上陸ス

是歲亦外國ニ關スル條左ノ如シ

三月廿八日外國船尾張ノ漂民九人ヲ南部領ニ留メテ去ル

六月廿七日蘭人長崎ニ於テ上告西洋諸國結合貿易ヲ日本ニ開カンヿヲ謀ル旨ヲ言ス

四月、立顯龍公遺腹子、爲世子、是爲慶福、

菊千代公御養子

一四月廿二日　上使ヲ以テ御願之通菊千代様御養子ニ被　仰出

天守再建願濟

一八月十三日御天守幷御櫓四ヶ所其外御多門向等有形之通御再建之儀　公儀ヘ被仰立有之處御願之通相濟

天守再建ノ儀ハ幕府之制ニ於テ容易ニ允許セラレサルモノノ由ノ處舜恭公特ニ御請願ノ件有之且當時格別之御間柄ナルニヨリ遂ニ御許可ニ至ル是異數ノ事ト其比ノ取沙汰ナリシ

將軍御立寄

一同月十八日　公方様六半時御供揃ニテ濱御庭ヘ被爲成夫ヨリ九時過芝御屋敷ヘ御立寄七ツ半過還御被遊

大納言様御簾中様ニモ御同所ヘ被爲入御對顔御懇之上意アリ

一去ル七月十五日近々　公方様御成之節芝御屋敷御通リ拔可被遊旨御内意被仰出タルナリ

天守火災の節の賞

一同月廿日御天守御火災ノ節之御賞被　仰出

去年御天守御火災之節早速罷越消防等之儀行届致差圖候段一段之儀思召候此段可申聞旨被　仰出

久野丹波守
山中筑後守
渡邊主水
伊達但馬守

去年御天守御火災之節早速登城之段一段之儀思召候此旨可申聞旨ノ御沙汰候

菊之間詰
大寄合
御供番頭以上
一位様御側

去年御天守御火災之節格別出精相働候向モ有之趣ニ付右等之筋ハ夫々別段御譽モ被遊度思召ニ被為在候得共其節ハ混雑ニテ委敷相分兼候ニ付無據一統ニ御譽之儀被　仰出候事

御供番頭以上

去年御天守御火災之節罷越消防等之儀骨折候段一段之儀思召候此旨可申聞旨之御沙汰候

御城代

去年御天守御火災之節罷越消防等之儀彼是ヶ屆致差圖別テ骨折候段一段之儀思召候此旨可申聞旨之御沙汰候

御勘定奉行
御用人
御目付

去年御天守御火災之節早速詰場所ヘ罷越又ハ御場所ニテ相働候段一段之儀思召候此旨可申聞旨之御沙汰候

奥中奥并表頭役初
御目見以上

右御目見以上ヘハ一役壹人ツツ頭支配有之向ハ頭支配ヘ御用人申渡シ御目見以下末々譽置之儀頭支配ニテ前段之振ニ申渡候樣ニ御用人ヨリ達ス

一御勘定奉行配下之面々幷御作事方火消等之儀ハ御勘定奉行ヨリ町方之者ヘハ町奉行ヨリ御目付配下ノ向ヘハ御目付ヨリ譽置ノ儀達ス

但役々之内格別相働之向モ有之候得共混雑ニテ御役人向爾ト見留モ難行屆委敷相分兼候ニ付無據別段譽置候儀ハ不及取計段申聞候事

一熊野三山社家惣代玉置縫殿和歌村法福寺ハ人足召連能出奇特ノ旨譽置之儀寺社奉行ヨリ達ス

海防の儀
文武奬勵
御天守再建御用掛

一水野土佐守安藤飛騨守久野丹波守三浦正之助菊ノ間詰早速人數差出所々へ相詰且消防等相働候ニ付右之家來一統譽置遣候樣御沙汰ノ事其主人々へ被　仰出

八月、幕府、有海防及振勵文武之命、

一同月廿二日御三家等へ御領内海岸之守衛ヲ嚴重ニシ御家來文武之業相勵候樣　公儀ヨリ被　仰出

一九月十日御天守御再建御用掛リ被　仰付

御用掛リ之面々左之如シ

御家老	山中筑後守
御城代	廣田杢之右衛門
大御番頭格 御勘定奉行	西山與七郎
御供番頭格御用人 奥掛御書物方頭取	栢植傳次郎
新御番頭格 奥御右筆組頭	宮崎半右衛門
御天守番頭	角谷六郎兵衛
御目付	野口將監
御勘定吟味役	山中篤之助
御勘定吟味役格御仕入 佐八天ノ川三役所頭取	南出平左衛門
大御番當分 御作事奉行助	中原武左衛門
御書院番格御仕入 佐八天ノ川三役所頭取	森半左衛門
御城代	平井助左衛門
大御番頭格 御勘定奉行	土生廣右衛門
御勘定奉行	中村九郎兵衛
御供番頭格御用人 奥掛御書物方頭取	由比楠左衛門
小十人頭格同上	市川惣兵衛
御目付	朝倉三之丞
御勘定吟味役	土岐孫次郎
御勘定吟味役格 御勘定組頭	下村三郎右衛門
御作事奉行	渥美甚十郎
御供番格 御勘定組頭	中島吉兵衛
御勘定御勝手方新御番持格 當分御作事吟味役助兼勤	上野山九郎左衛門

新御番格
御普請奉行　竹田半ノ右衛門

御天守常番　木川平左衛門

御大工頭　中村吉五郎

御徒目付組頭　小門三左衛門

御表
御免穴太　津村八左衛門

表御用部屋認物勤　茂田一次郎

御勘定奉行支配小普請
當分御普請方御用筋取　矢野八助

一位様大御番頭格御側御用
取次御廣敷御用人ノ勤ヲモ勤　渥美源五郎

一位様同斷御廣敷御用人折々
御仕入方罷出御用筋取扱　稲葉司書

大御番當分
御普請奉行助　岡本勘右衛門

御天守常番　太田十兵衛

小十人格
御作事見廻役　則岡源内

御徒目付組頭　榎本太郎兵衛

支配勘定御作事
見習役助　梅本藤四郎

表御用部屋認物勤　吉田又右衛門

御張付方　羽澤彌左衛門

一位様御小姓組番頭格御側見習
御書物方頭取擬御用筋申談勤　稲葉彌左衛門

御納戸頭格中奥詰御書物
方頭取御用筋見習　宇佐美三郎兵衛

按スルニ御再建着手御請被御上棟御滿作等之年月帳簿缺失不可知ト雖モ其比ノ里謡ニ　天照らす國な守りの棟あけは酉の霜月朔日（嘉永）と云ヒハヤシタレハ御上棟ハ嘉永二酉年十一月朔日ナルベシ御普請其他ノ模樣筆記ノモノアレハ左ニ併記ス

一御天守御普請御場所へ假小屋出來御天守臺ヨリ扇之芝へ直ニ足場ヲ掛ケ同所ヨリ材木等運送致シ候事

一御天守臺石垣御築立御出來之上松生院へ御地鎭御濤祈被　仰付御用掛リ之向出席御假屋ニテ有執行有之候事

一御天守御上棟之節モ松生院等へ御祈禱被　仰付爲御祝儀御用掛リノ向初へ御酒被下有之候事

一御天守臺近邊所々へ大釜ヲ居エ眞土并石灰焚詰右ニテ御屋根并壁ヲ塗リ餘程念ノ入タル御普請之由ニ候事

一御天守ノ鯱ハ錺物師粉河蜂屋光三郎へ仕立被　仰付見事ニ出來候處御天守へ上ケ候ハヽ少々チイサク不釣合有之候ニ付右鯱ハ小天守へ御用相成御天守へハ更ニ銅ニテ大之筋打セ御用相成候事

右之通ニ付小天守ノ鯱ハ御天守ヨリハ餘程結構ニ有之候由

一御天守御滿作之節ハ御天守御屋根之上へ二三間高ク御假立出來旗等相建御段へハ種々ノ品御飾リ附ケニ相成御書物方頭取

初御用掛リ御役人向等出席松生院等御祈禱被　仰付大造成ル御式有之候事
一右御式相濟候上一ノ橋御門外所々ニテ夥敷餅投有之御用掛リ御役人向ハ一ノ橋角御櫓ヘ罷越其外御用掛リ之向ハ場所ヘ出席餅投相濟御用掛リハ勿論當番詰合之向ヘモ御酒肴赤飯等被下有之候事
一御天守ハ前々ヨリ若山住ノ御家中ハ一切拜見不相成江戶常府ノ向若山ヘ罷越中候節思召ヲ以テ拜見被　仰付其他ハ决テ拜見不相成候ヘ共此度御再建ニ相成候ニ付　一位樣思召ヲ以テ若山御家中一統ヘ拜見被　仰付候樣被　仰出候ニ付重役頭役平士日割ヲ以テ御目見以上一統ヘ拜見被　仰付候事
但拜見掛リ役人出張混雜不致樣人數見斗ヒ程能喰切ユル〳〵拜見被　仰付候事
一嘉永三年七月十日ニ至リ御天守御再建御普請御用掛リ山中筑後守初メ一同ヘ金銀時服等御賞賜アリ筑後守ヘハ黃金貳枚時服二(代リ金壹兩)其餘ハ白銀拾枚ヨリ同壹枚時服二夫々差等アリ外ニ儒者山本彥十郞ハ棟札認タルヲ以テ時服壹代金貳分被下タリ

御即位式

九月、使久野丹波守上京師、代賀　天皇即位、
一九月廿三日　天皇御即位
御即位ニ付京都ヘノ御使久野丹波守被　仰付
一十月二日御老中阿部伊勢守ヨリ書付ヲ以テ來年ハ御暇御順年之儀ニモ候間旁御暇被　仰出ニテ可有之旨被　仰出

深川越中嶋御讓

一同月八日深川越中島新田之內榊原式部大輔抱屋敷抱地共御讓リ受相成
右屋敷等水野土佐守ヘ御預ケニ相成候事
一同月十一日　上使御書院番頭關播摩守ヲ以御擧之鳥御拜領
一同月廿二日御守殿ヘ被爲入候節峯壽院樣御對顏被遊度トノ儀政府取扱ニテ　公儀ヘ被仰込候處御對面被成候樣ニト差圖有之

孝子

一十一月十五日奥熊野長尾村百姓瑠平母幷繼母存生ノ内孝行ニ付御褒美鳥目七貫文被下

一同月廿三日御相續被　仰出候節一位樣ニハ御在國ノ御事ニ付安藤飛驒守暫ク在府致シ萬端水野土佐守申談御家政向ヲ始御取締嚴重ニ行屆候樣可取計旨御沙汰モ有之候得共來年御暇被　仰出候ハヽ飛驒守ハ御在國中被召連不苦旨　公儀ヨリ被　仰出

一十二月六日近々濱御庭ヘ御越被遊候樣　公儀ヨリ被　仰出同十八日被爲入

弘化五年戊申 嘉永ト改元　　公二十九歲

一正月廿八日　上使御書院番頭室賀美作守ヲ以御鷹ノ鶴御拜領

一二月九日田安一位殿（御實父御實方御叔父ナリ）御出合之儀ハ何レニモ御見合可被遊併再應被　仰立之趣モ有之候間奥向御登城之節一位殿ニモ被登城候ハヽ於奥御對面可有御座候間此段可申上旨御老中阿部伊勢守ヨリ書付安藤飛驒守ヘ相渡ス

丹鶴叢書

一是月水野土佐守編集之丹鶴叢書ヲ公儀ヘ獻上ス

四月始就藩

一三月十三日御相續初テ御國許ヘ之御暇被　仰出

同月十九日江戸御發駕東海道美濃路通リ御道中十七日振ニテ四月六日若山御着城

御初入

今回ノ御發駕ハ御初入ニ付　將軍家御覽可被遊旨ニテ御道筋四ツ谷御門ヨリ麴町通リ三丁目谷夫ヨリ田安御門入半藏御門出堀端通リ虎之御門夫ヨリ芝通リ御通行ナリ

改元

一同月十五日嘉永ト改元

外船出沒

一是月外國船對馬幷ニ南部津輕松前沿海ニ出沒スルモノ多シ
此後度々出沒爰ニ併記ス
四月二日外國船松前ニ來リ小船ヲ放テ海岸ヲ測量ス
四月十五日外國船北海ニ通航商船ノ大豆ヲ奪フ
五月七日米國人十五人松前ニ漂着後之ヲ長崎ニ送ル
六月二日米國人一人西蝦夷リイシリ島ニ漂着亦後ニ長崎ニ送ル
七月廿九日佛船琉球ニ來リ上陸請フ所アリ

一四月廿二日小川藤之助深川三十三間堂ニ於テ半堂日矢數ヲナシ五月四日吉田元吉同千射ヲナス

仁井田好古殁す

六月仁井田好古殁年七十九

紀ノ川洪水

八月風雨紀伊川大溢
八月十二日若山洪水近在人家流失橋々陷落八十年以來ノ大水ト云同十七日比勢州御領地モ出水ノヨシ

紀州へ上使

一九月十八日御入國ニ付　公方樣ヨリ上使御書院番頭加藤伊豫守被進　上意御受被遊
右　上使八月十八日用意被　仰付九月朔日御暇四日江戶發途本日若山到着也

九月獵於北山

一同月廿二日山東永山邊ヘ被爲入

若山大御能

一同月廿六日十月三日同六日於若山西丸大御能被　仰付御相續御官位後初テ御入國且菊千代樣御養

七十歳以上御目見

君ニ被　仰出候爲御祝儀大御能被仰付タルナリ
一十月十八日御船ニテ加太邊へ被爲入
十月召見諸士七十歳以上者於湊別館
一同月十九日思召ヲ以テ御目見以上年齡七十歳已上御目見以下八十歳以上之者湊御殿御庭拜見御目見被　仰付
御懇之御意有之御料理御菓子被下置人員左ノ如シ

富田甚左衛門（七十六）　上野勘解由（七十）　桑山彦右衛門（七十）
堀田勘平（七十二）　向山藤左衛門（七十六）　佐野彦大夫（七十六）
稻葉司書（七十）　羽端良左衛門（七十四）　井口源次右衛門（七十）
長澤隼人助（八十）　榊原忠次郎（七十一）　小森玄蕃（七十）
寺村九郎右衛門（七十四）　小倉惣兵衛（七十）　柴山又右衛門（七十三）
衣笠長左衛門（七十三）　小野杉右衛門（七十二）　田中忠左衛門（八十）
井田惠左衛門（八十二）　三橋藤九郎（七十）　水野九左衛門（七十七）
丹羽五右衛門（七十五）　坂井鎌之助（八十一）　興津十右衛門（八十）
榎本九左衛門（八十六）　高橋雄輔（七十五）　龜井精庵（七十二）
弘田幸慌（七十四）　近藤良三（七十）　木梨玄程（七十三）
三好松元（八十）　大須賀善兵衛（七十）　本間五大夫（七十二）

吉田久左衛門（七十二）
山田郷助（七十八）
佐武源八（七十八）
木村嘉大夫（七十九）
落合惣右衛門（七十）
土生九左衛門（八十）
阿曽沼庄左衛門（七十一）
三上三郎右衛門（七十一）
落合勘左衛門（八十四）
野呂周助（七十二）
參澤彦十郎（七十七）
山本山三郎（七十五）
川村甚右衛門（八十四）
小瀧伊右衛門（七十八）
川井藤右衛門（七十八）
松山佐平次（七十五）
阪本仲八（七十四）

藤田六右衛門（七十一）
坂部長五右衛門（七十二）
寒川八郎（七十五）
吉田三郎右衛門（八十一）
高橋三郎左衛門（七十）
佐野孫兵衛（七十二）
竹田半助（八十二）
須山嘉平次（七十）
千本彌五兵衛（七十三）
太田三右衛門（七十七）
奥田駒之進（七十八）
鈴木澤右衛門（七十二）
嶋儀八郎（七十一）
野々山七左衛門（七十七）
乾爲十郎（七十七）
池田甚左衛門（七十五）
外山八郎兵衛（八十六）

湯川才助（八十六）
猪谷藤次郎（七十七）
松尾三四郎（七十六）
村井三左衛門（七十）
關口萬右衛門（七十）
下和佐宇兵衛（七十四）
功力淺右衛門（七十四）
新喜右衛門（八十）
森田萬之丞（八十五）
伏山隆右衛門（八十一）
三宅佐大夫（七十九）
下村八左衛門（七十八）
皆川佐兵衛（七十二）
岡部兵右衛門（七十一）
隅田十右衛門（七十八）
宮本彌五郎（七十一）
松村幸右衛門（八十一）

石桁孫左衛門（七十二）
愛次丈左衛門（八十一）
上野兵左衛門（八十七）
下村三平（七十三）
川上喜左衛門（八十四）
近藤平右衛門（七十一）
鈴木三郎大夫（八十一）
眞田儀兵衛（七十）
南彌兵衛（七十二）
笠本辨右衛門（八十六）
西岡楠右衛門（七十二）
嶋本傳右衛門（八十一）
宮本半八（七十三）
森澤藤八郎（八十）
佐武杉右衛門（八十）
土岐三啓（七十八）
山口楠之右衛門（七十五）

小川五左衛門（七十四）
漉兵三郎（七十一）
寺崎八藏（七十五）
松尾吉右衛門（七十）
葛西三郎左衛門（七十五）
竹田直右衛門（八十六）
小川津右衛門（七十）
内田官藏（八十四）
猪谷李右衛門（七十九）
根來丈大夫（九十一）
野口小七郎（八十二）
松本兵次郎（七十一）
森五兵衛（七十五）
喜多幸右衛門（七十四）
岩井宗雪（七十一）
野際蔡徵（七十二）
板原雲澤（七十一）

浦上六右衛門（七十八）
栗本武右衛門（七十二）
小栗仁兵衛（七十二）
淺井八平太（七十一）
金田源五郎（七十三）
黑山幸右衛門（七十四）
鳥羽三大夫（七十四）
古佐田周助（七十）
寺井丈助（七十二）
本崎太郎左衛門（七十一）
佐津川七右衛門（七十一）
三橋楠左衛門（七十一）
渡邊久左衛門（七十一）
高田玄德（七十二）
金丸玄意（七十八）
高瀨又助（七十一）
岡本駒之亟（七十二）

羽山金兵衛(七十四)
西村吉藏(八十四)
小林甚五右衛門(八十四)
興津源兵衛(七十二)
井口孫左衛門(七十七)
川口兵助(八十一)
福嶋俊藏(七十七)
栗本八郎(七十九)
伊藤左平次(七十)

森本忠左衛門(八十三)
野原五郎左衛門(七十六)
中村德左衛門(七十五)
白井楠一(七十)
吉川定八(七十)
上原角左衛門(七十)
岡井芳右衛門(七十)
二階堂三兵衛(七十四)
安井圓宅(八十一)

稻垣喜大夫(七十三)
榊原猶右衛門(七十五)
川村吉右衛門(八十四)
森本六右衛門(九十)
那須市左衛門(七十六)
岩崎十右衛門(七十七)
森嶋與三兵衛(七十二)
岡本正助(七十二)
淺井仙右衛門(七十四)

總計百六十二人

一是月亦獵於北山

御鹿狩

一同月廿七日爲御鹿狩平井村大谷山善明寺村大久保山へ被爲入
一十一月九日安藤飛驒守下屋敷瓜畠へ被爲入
一同月十三日加茂谷邊へ被爲入同所福勝寺御膳所へ被爲入
一同月十五日御拜領ノ御樽肴御披露御式濟ヨリ秋月邊へ被爲入紀八穗主宅へ御立寄駈馬御覽被遊
一十一月十八日御船ニテ和歌浦被爲入大相院庭御覽被遊同所渥美源五郎別莊へ御立寄

軍學講釋

一同月廿三日講釋濟於御小書院橋爪萬右衛門流儀軍學講釋御聽聞被遊

駒立御覧

御所労

公臥病

外船通航絶えず

不輕御容體

將軍御鹿狩

一同月廿七日湊御殿御舞臺披御能被　仰付十二月五日ニモ同斷

一十二月三日於御小書院名取兵左衛門流儀駒立御覧被遊

嘉永二年己酉　　　公　三　十　歳

一正月七日口熊野周參見組小川村百姓庄七及百歳候ニ付其身一生壹人扶持被下

一同月廿九日御所労ニ付御參府御延引被遊候旨　公儀へ御達被遊

　舊臘ヨリ少々時候ニ御障リ御所労被爲入タリ

一右ニ付即日　公方様ヨリ西丸奥御醫師大膳亮素庵紀州へ被遣御様子相伺候様ニ被　仰付

一二月廿五日　公方様右大將様ヨリ爲御尋宿次奉書被進

此春、公臥病

一正月ヨリ二月ニ至リ外國船北海ヲ通航スル者絶エズ

　三月廿六日米國人長崎ニ來リ去年松前ニ漂着セシ同國人ヲ受取歸帆ス

一三月三日於江戸　勅使三條大納言殿坊城前大納言殿ヲ以年頭之御太刀目録御頂戴且又御入　内ニ付御祝儀御差上被遊候ニ付女御ヨリ堀三位殿ヲ以大納言様一位様へ縮緬三巻ツヽ被進御名代御年寄出會ス

一三月十七日御所労不輕御容体ニ被爲至

　去十三日　公方様ヨリ爲御尋氷砂糖壹壺鯛壹折（代リ金千疋）　女中奉文ヲ以御拜領

一同月十八日　公方様下總國小金原ニ於テ御鹿狩被遊

昨年二月　公儀ヨリ小金原御鹿狩御成ノ節ハ右御場所ヘ御越御見物被爲在候樣被　仰出有之タル處御所勞ニテ御參府無之尾州樣一橋樣ニハ御見物御越被遊タリ小金原御鹿狩ノ儀ハ享保十一年丙午三月廿七日　有德公被遊已來七十年間廢絶ノ處　文恭公御代享保度ノ古典御調ニテ寛政七年乙卯三月五日御擧行衞後此度御執行都而御先例ニ被爲憑シト云フ

三月朔日遂薨、是月二十七日發喪、四月十四日葬於濱中長保寺、諡曰憲章公

一三月廿七日御養生不被爲叶曉子下刻御逝去

御內實ハ三月朔日午之刻比御逝去ノ由御日取追而十日ニ相成ル

一四月五日　公方樣ヨリ　上使ヲ以テ御香奠白銀百枚右大將樣ヨリ同御香奠被進

一同月十三日五ツ時御供揃ニテ御遺骸御出棺同日日方永正寺ヘ被爲入翌十四日曉八時御供揃ニテ永正寺御出棺長保寺ヘ御着棺御葬送御石槨ヘ御納メ奉ル

一長保寺御廟ハ　顯龍院樣ト御合廟雲蓋院御靈屋ハ菩提心院樣御合殿也

一四月十八日ヨリ同廿四日迄於靈蓋院御中陰御法事於長保寺モ御法事有之

一閏四月七日尾州樣ヨリ御代香成瀨豐前相勤翌日水戸樣ヨリノ御代香芦川市兵衛相勤ル

一御忌日廿七日之處七月朔日　公邊ヘ御達ノ上十日ノ御日取ニ相成

一高野山ヘモ御寶塔御建立七月廿四日御開眼翌廿五日御供養御法事於大德院執行被　仰付

御法號

憲章院殿二品前亞相至德道光大居士

憲章公御簾中

充（タカ）君　豊子　観如院様　初ミツト御唱ノ處天保七申年四月タカト御改

御父　近衛内大臣左大將忠熈公

御母　郁君　嘉永三戌年三月廿九日御逝去

一文政五午年十二月廿一日御誕生

一同七申年十一月十三日御髪置

一天保五午年九月廿六日御鐵漿初

一同六未年六月廿八日御縁組

一天保九戌年十一月五日京都ヨリ御本丸御廣敷へ御下向即日清水御舘へ御逗留

一同十亥年十一月十八日御結納

一同月廿七日御婚姻

一天保十二丑年十一月廿八日御袖留

一弘化三午年閏五月八日清水中納言様紀州御家御相續被仰出候ニ付御引移ノ旨被　仰出

一同年七月十一日中納言様赤阪御本殿へ御引移濟ノ御左右申上候上清水御屋形御出輿赤坂御本殿大奥へ御引移被遊

一同四未年八月十八日　公方様芝御屋敷御通抜ニ付御同所へ被爲入御對顔

一同年九月廿三日　御即位ニ付京都へノ御使富田甚左衛門被　仰付

一同年十月十二日千駄ヶ谷東西貳ヶ所之御抱屋敷大納言樣ヨリ御讓受被遊
一嘉永二酉年三月廿七日　大納言樣御逝去
　四月四日　公方樣ヨリ爲御悔　上使姉小路　右大將樣ヨリ上使兼被遊
一四月六日　公方樣右大將樣ヨリ御朦中爲御尋　上使女中衆ヲ以御干菓子壹箱宛御拜領
一同年四月二日菊千代樣御事格別之御續柄ニ付追テ亮君樣御同道ニテ大奥御登城之儀被　仰出
一同年同月廿七日御院號日光御門主樣へ御頼被遊本日觀如院樣ト御改
一同年八月九日菊千代樣御宮參之爲御祝儀　公方樣ヨリ上使本多越中守ヲ以鮮鯛一折御拜領　右大將樣ヨリモ上使酒井右京亮ヲ以鮮鯛一折御拜領
一嘉永三戌年三月廿七日菊千代樣秋姫樣御同道ニテ大奥御登城　公方樣右大將樣へ御對顏御懇之上意其上御饗應御拜領物被遊
翌廿八日右爲御祝儀　公方樣ヨリ　上使松平和泉守ヲ以二種千疋　右大將樣ヨリ上使久世大和守ヲ以二種千疋御拜領　御簾中樣ヨリモ御使御用人大熊善二郎ヲ以一種御拜領被遊　右上使御使へ左京大夫樣御出會被成
一同四亥年三月七日眞如院御墓前へ御參詣護國院へ御立寄
一同年六月十日御年齢ノ儀　憲章院樣之御下タ之御年齢ニ先年京都ヨリ申參有之處全ハ　憲章院樣御同年當年御三十二歳ニ被爲成候旨老女申出
一同六巳年二月廿四日未中刻御逝去　追テ十月ノ御日取リニナル

三月十一日江戸御發棺美濃路通本坂越同月廿九日紀州長保寺へ御着棺翌晦日御葬送御位牌ハ雲蓋院鶴樹院樣御次へ御安置

御法號　觀如院殿智光圓照大姉

憲章公公子一覽表

御血統ヲ掲ク
一印ハ御養子

御子　（御孫ナシ）

延（ノブ）姫　早世　麗如院

龍千代君　初龍丸早世　貫成院

鈎（カタ）姫　早世　珂月院

鋭（ナル）姫　早世　琮玉院

「菊千代公」　實顯龍公御遺子慶福公　昭德廟

秋（トキ）姫　早世　蕙岑院

辰次郎君　早世　今孝院

清涼院君　死產

憲章公公子譜略

延(ノブ)姫君　早世 麗如院

御母　西丸御書院番南條權之丞女シヅ

一天保十二丑年十月六日御誕生　御簾中樣御養御嫡女ニ被成

一同十三寅年二月二日御色直箸揃

一同年六月八日清水ニテ御卒去御日取　追テ五月ニナル

同月十二日上野凌雲院ヘ御葬送御靈牌同院ヘ御安置

御法號　麗如院夢覺露幻大童女

龍千代君　初龍丸 賫成院　早世

御母　南條氏シヅ

一天保十三寅年九月廿一日御誕生

一同年十二月六日御色直同九日御簾中樣御養

一同月十八日御嫡子ニ被　仰出

一同十四卯年六月七日清水ニテ御卒去　追テ御日取五月七日ニナル

同月十二日御出棺上野凌雲院ヘ御葬送御靈牌同院ヘ御安置

御法號　賫成院覺幻發軫大童子

鈞姫君　　鐃姫君　　菊千代様

鈞カタ姫君　早世 珂月院

御母　前同斷

一天保十四卯年二月十六日御誕生

一同十五辰年八月廿日清水ニテ御卒去

上野凌雲院ヘ御葬送御靈牌同院ヘ御安置

御法號　珂月院淨潭玉影大童女

鐃ナル姫君　早世 琮玉院

御母　前同斷

一弘化三午年五月五日清水ニテ御誕生

一同四未年五月三日御名御弘御簾中様御養

一同月五日夜亥之中刻御卒去　追テ思召ニテ四月十七日ノ御日取ニナル

同月十三日朝御出棺谷中護國院ヘ御葬送

御法號　琮玉院貞鎮德馨大童女

菊千代様　顯龍公御遺腹 慶福公

一弘化四未年四月廿二日御養子被　仰出委細御本紀ニ詳也

秋姫君（トキ）

御母　南條氏シヅ　早世 蕙岑院

一弘化四未年七月廿三日御誕生

御系譜ニハ十二月七日ト補入御達ニ成ル

一同年八月廿八日御内々御七夜御祝儀被爲整御名被進表向御弘メハ不被　仰出旨

一同五申年二月朔日表向御弘ハ不被　仰出候得共御簾中様御養被　仰出

一嘉永二酉年四月十一日菊千代様觀如院様大奥へ御登　城ノ節御同道被　仰出

一同年五月廿一日表向御弘觀如院様御養ヒニ被遊候段　公邊へ御達出ル

一同年八月十一日山王氷川へ御宮參相濟御庭鳳鳴閣へ御立寄

一同年十一月十五日御髪置ノ御祝儀於大奥御整

一同三戌年三月廿七日菊千代様觀如院様御同道大奥へ御登　城

一同五子年閏二月十六日亥之中刻御卒去　追テ思召ニ寄四月十七日ノ御日取ニ成ル

同月廿三日谷中護國院へ御葬送

御法號　蕙岑院浄慧妙薫大童女

辰次郎君（シン）　早世 令孝院

御母　御本丸小普請組齋藤平九郎女テツ

一弘化四未年十一月六日御誕生

一同年十一月廿一日御内々御七夜御祝儀御整被遊表向御弘ハ不被　仰出御名被進
一同五申年二月朔日未タ表向御弘ハ不被仰出候得共御簾中樣御養被遊
一同年九月廿三日　公邊ヘ御弘
一同年十月二日夜亥ノ中刻御卒去　追テ思召ニ寄御日取九月十日ニ成ル
同月八日谷中護國院ヘ御葬送
御法號　令孝院知恩無生大童子

清涼院君　御遺子　死産
御母　齊藤氏テツ
一嘉永二酉年五月廿五日於紀州御死産同月晦日和歌大相院ヘ御納
御法號　清涼院約如明空善童子

昭和五年十二月廿二日印刷
昭和五年十二月廿八日發行

南紀德川史 自第十一巻 至第十九巻

編輯者 堀内信
和歌山市宇須町三百七十八番地
發行者 山崎順平
和歌山市新堀四丁目三番地
印刷者 福本芳太郎
和歌山市新堀四丁目三番地
印刷所 福本印刷所

No. 396

第二回配本

和歌山市宇須町三百七十八番地
發行所 南紀德川史刊行會
振替口座大阪四五八五二番